蛍沢遺跡

－青森市新団地造成計画に基づく戸山団地
予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査報告書－

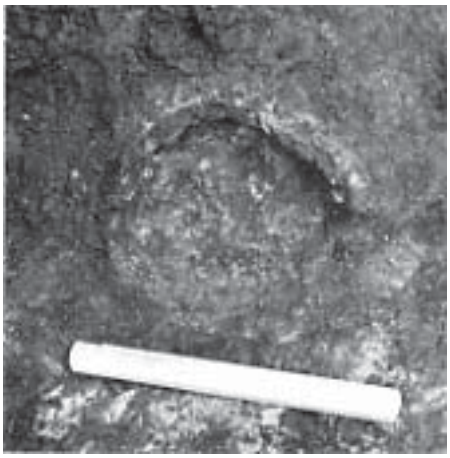
1979

青森市蛍沢遺跡発掘調査団

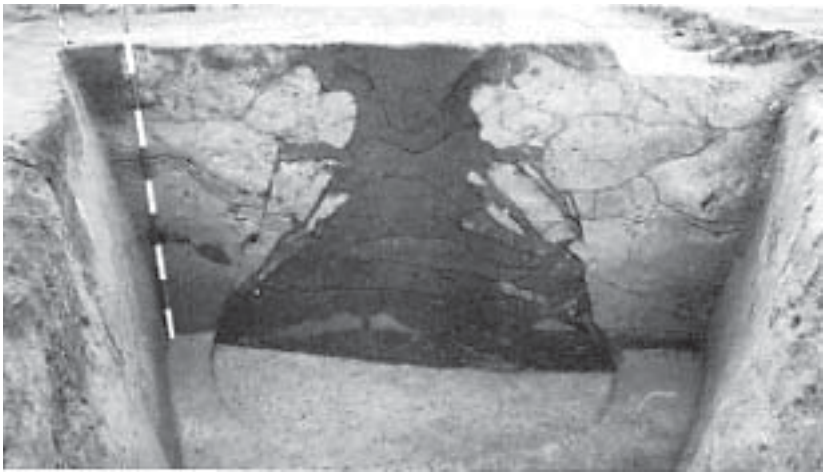
北東斜面の住居跡

第 18 号住居跡

第 22 号ピット



第 104 号ピット出土漆器



第 105 号ピット

遺跡遠景（北西より）

遺跡全景（東より）

遺跡西側発掘状況

遺跡北東側発掘状況

発掘スナップ
（南側）

発掘スナップ
（北東斜面）

同　上

発掘調査スタッフ
（記念撮影）

航空写真・全景（発掘前）

航空写真・全景（発掘後）

序

文化財行政の当面する重要課題として、埋蔵文化財の保護対策があります。

近年の産業経済の発展に伴う諸開発事業によって、消滅する遺跡の数は増加の一途をたどっており、この傾向は青森市においても例外でなく、開発行為はとどまるところ知らないのが現状であります。

当教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については事前の発掘調査をもって記録保存につとめております。

この報告書は青森市新団地造成計画に基づく戸山団地造成予定地内の螢沢遺跡の発掘調査の記録であります。

本調査は、昭和50年度の建設予定地内の試掘調査に基づいて、昭和51年度に実施したものであります。

発掘調査の結果は、報告書にみられるように縄文時代の早期から中期・後期・晩期、弥生時代の土器や歴史時代の土師器・須恵器の時代までの遺物・遺構が検出され、多くの成果をあげることができました。

本書に収録された資料が永く保存され、市民各位の文化財保護の育成に活用されますとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

調査及び報告書作成にあたり、関係各位の御協力及びご援助に対して厚く謝意を表わす次第であります。

昭和53年3月

青森市教育委員会

教育長　杉　田　貞　作

序　文

はじめて本遺跡の発掘調査計画書を見せられたとき、これは困った、と思った。調査対象面積が10,000平方米。広いこの土地を僅々6箇月間でやろうというのであるから、そのためには、どう考えても調査員の手が足りない。無理だ。

それだけではない。この遺跡を含む地域一帯は、もと、旧陸軍の演習地として使われていたところである。当然、地下の遺構や遺物包含層のほとんどは、もうとっくに、いくたびか撹拌を経てあますところがあるまい。となると、どっちみち、本調査にあまり期待はかけがたい、と思われた。

しかし、調査前のこのような予測は、まったく誤っていた。6箇月の期間を経過し、調査を終結してみると、とにかく、予定された対象の土地を剰すところなく完掘して、精査。さらに、隣接地2,000余平方米も追加発掘することができたのだから、予想外であった。それに、はじめから絶望視してかかった遺跡の表土下からは、縄文時代から歴史時代に跨がる90に近い住居址と、これに付随する大小多数の穴の遺構を、それも比較的完好な状態で検出。かてて加えて、甕棺墓の発見もあり、遺構、そして遺物もともに多彩なものがあった。

とくに、今回の調査で、土師器時代の竪穴住居址62と、その他一群の地上の遺構に陽の目を当てることができたのは、注目すべき収穫だったと思っている。これによって、ある程度のまとまった聚落空間の構成を想完するのが可能になったと考えるからである。

とまれ、本報告書は、蛍沢遺跡12,000余平方米の発掘で獲たところを、各調査員が手わけ分担して整理研究に当たり、その成果を収録したもので、本遺跡の解明は、これでほぼつくされたものと思われる。が、如何せん、何分にも時間に追われて、早急の間に執筆を了えなければならないようた事情もあったので、ひょっとすると、なお追補が必要になるようなことがあるかもしれない。この点をあらかじめおことわりしておきたい。

青森市蛍沢遺跡発掘調査団団長　小　野　忠　明

所　感

今を去る十数年に、弘前市教育委員会が行った岩木山麓の緊急発掘調査は、当時として画期的なことでもあり、また調査面積も、予想をはるかに越えた感があった。県内に研究者は少なく、中央諸大学の応援を得ねば対処不可能という、非常な冒険を試みた思い出がある。爾来今日に至るまで、一歩ずつ前進を続けて来た県内研究者の増加と、関係機関の文化財保護体制が、まだ充分整わぬ段階のなかで開発の波が大挙押し寄せ、現在その保護対策に四苦八苦の状況となっている。

このような苦しい事態を背後に、青森市教育委員会は開発側の県住宅供給公社と交渉し、広大な、しかも予想を上回る蛍沢遺跡の発掘調査をなし遂げた文化保護に対する熱意は、近来にない快挙といえよう。このたび同遺跡の発掘調査報告書が上梓されることとなった。喜びに堪えぬ次第である。

昨年の桜の季節から、雪の降りはじめる時期に至るまで、若者の文化財保護に対する情熱と追究して止まぬ研究意欲を投入し、ついに完成させたこの大著を開くと、なかからエネルギーのほとばしりを感じさせるが、これは、小野団長以下の調査員が一致団結して発掘に当り、またそれを側面から援護した市教育委員会当局の苦労の結晶でもある。

埋蔵文化財の危機が叫ばれている折柄、調査員および青森市当局の努力を、各地において他山の石とされるよう切望するとともに、この報告書が、本県の歴史を解明する上で、大いに役立たせていただきたいと念願するものである。

副団長現弘前大学教育学部教授　村　越　　潔

所　感

青森市周辺には、有名無名の遺跡が多数存在しているが、今回発掘調査した蛍沢遺跡は、これまでに殆ど荒されもせず、その規模及び埋蔵遺物の点からも、有数な遺跡と言えよう。

彼岸の入りも間近かな3月13日、青森市民会館での発掘調査打合せ会を終えて、私は春まだ浅い本遺跡を、急に訪ねたくなり出かけた。

郊外では、ネコヤナギの芽も大分ふくらんだというのに、昨年発掘を終った広大な遺跡のある丘は、まだ1メートル以上の積雪に埋れて、その雪の上に点々と印されてゆく、自分の足跡を振り返ると、このまま深い雪の中に、吸い込まれてしまいそうな幻覚に襲われゾッとした。

それは、この丘の地下深く、数千年もの長い歳月を静かに過ごしてきた、縄文時代から歴史時代えと瞠目すべき、数多先人の生活の跡が、団地造成や開発の名のもとに、僅か6か月の期間で発掘して消滅させてしまったことに対する、”うしろめたさ“のためだろうか。

ともあれ、住宅公団からの期限付きの発掘とはいえ、発掘担当者一同は、日曜日も祝祭日も返上し、雨の日も風の日も、一日も休むことなく、文字通り献身的に調査をされ、立派に責任を果たしたことに対しては、ただただ頭の下がる思いがして、言う言葉もない。

恐らく、本報告書が上梓される頃には、竪穴住居址はじめ幾多の遺構は、ブルドーザに破壊され、太古を偲ぶ丘も、その跡を留めぬようになっているかも知れない。

また、今回の発掘調査は、期間が限定され、しかも報告書をまとめる日数も限られたので、調査員自らが究明したくとも、成し得なかった数々の問題点もあろうかと思う。

発掘記録は末永く後世に残すべく、調査員各位の分担執筆により、出来るだけ正確を期すように努めた。

どうか、広く青森市民、特に郷土に関心ある方々や、次代を担う青年達に愛読され、郷土における古代人の生活記録の中から、現在の青森市を見詰め、そして未来に向かっての一大指針となることを、切望するものである。

仮寓にて縄文人を偲びつつ記す

副団長青森市文化財審議会委員　　大　高　　興

例　　言

1. 本書は、青森県住宅供給公社が青森新団地造成計画に基づき、青森市戸山団地予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査に伴なう報告書である。

1. 発掘調査費は原因者負担としたが青森市教育委員会の職員の派遣費や器材の借上料の一部費用は青森市で負担した。

1. 昭和50年9月から実施した試掘調査により、計画をまとめ、翌昭和51年5月から本調査に入り降雪の始まった11月まで7ヶ月間延べ人員7,000人を要した。

1. 執筆者は各調査員（佐藤巧、塩谷隆正、藤田亮一、三宅徹也、高橋潤、葛西励）があたり、文末にその氏名を記した。編集・校正は塩谷が責任をもって行った。

1. 遺構・遺物の写真は、早期の土、石器以外全て藤田亮一が撮り、航空写真は国際航業株式会社に依頼し、版権は青森市蛍沢遺跡発掘調査団にある。

1. 実測の作成は、早期の三宅以外は、全て藤田の指導のもとに、青森大学生、高坂一夫、豊島広美が主として行なった。

1. 縮尺は遺構の平面図、断面図は$^{1}/_{50}$、遺物は$^{1}/_{3}$、$^{1}/_{4}$カマドの断面図は$^{1}/_{25}$に原則として統一したが、任意のものもあるので、スケールを付してある。

1. 炭化材の放線性炭素測定結果と材質同定結果を付記した。

1. 炭化米の測定結果も佐藤敏也氏より特別寄稿を得たので、掲載した。

青森東部

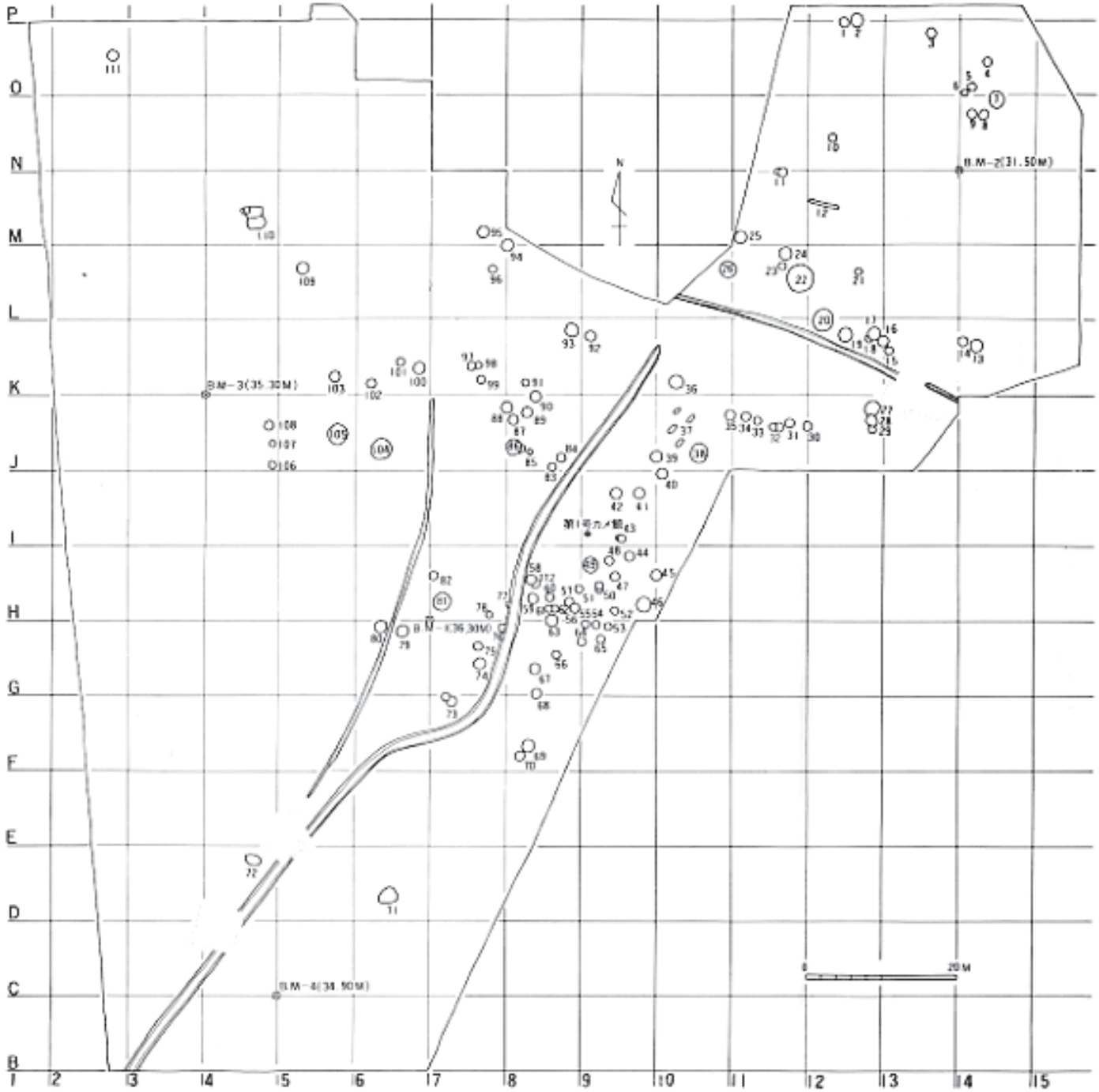
目　　次

序
序　文
所　感
例　言
第1章　発掘調査概要…… 9
第2章　遺跡の概要…… 14
第3章　遺跡層序…… 23
第4章　早期編…… 33
　第1節　出土土器の分類…… 33
　第2節　螢沢AⅡ式の成立と編年的位置…… 58
　第3節　石器・石製品…… 61
　第4節　検出遺構（土坑）…… 68
　第5節　寺の沢式以降の貝殻文系土器の編年…… 74
第5章　中期編…… 98
　第1節　円筒土器文化住居跡…… 98
　第2節　土坑…… 106
　第3節　遺構外出土遺物…… 109
第6章　後期編…… 141
　第1節　後期初頭…… 141
　第2節　後期縄文式土器文化末葉…… 225
第7章　晩期編…… 267
第8章　縄文時代中、後、晩期石器・石製品…… 280
第9章　弥生式土器文化…… 330
第10章　歴史時代…… 346
　第1節　住居跡と遺物…… 346
　第2節　掘立柱建物跡…… 570
　第3節　遺構外出土遺物…… 577
第11章　青森市螢沢遺跡の炭化材…… 583
第12章　学習院大学放射性炭素年代測定の概要…… 590
第13章　青森市螢沢第55号住居址出土の炭化米…… 594

第１図　蛍沢遺跡位置図

第2図　全　測　図

第3図　遺構配置図



第４図　ピット遺構配置図

第1章　発掘調査

――　A. 調査概要　――

1. 名　称　　青森新団地造成計画に基づく青森市戸山団地造成予定地内蛍沢遺跡緊急発掘調査

2. 目　的　　戸山団地造成工事に伴い煙滅するおそれのある蛍沢遺跡を造成工事着工前に調査を実施し、その記録保存をはかり、地域社会の学術・文化の活用に資する。

3. 発掘調査面積　　青森市大字駒込字蛍沢347－1　348、353、345、355、356、357、358、359、360、361番地で10,000㎡である。

4. 遺跡の種類

早期 ------ 土器（貝殻条痕文系）包含層
中期 ------ 土器（円筒上層C～D式）住居址2期
◇縄文時代　後期 ------ 土器（十腰内Ⅰ式）包含層
晩期 ------ 土器（大洞C_2～A式）
◇弥生時代　中期～後期（田舎館式～天王山式）
◇歴史時代　古代後期 ------ 土師器・須恵器（表杉入式、桜井第Ⅱ型式）住居址（確認22基、完掘2基）

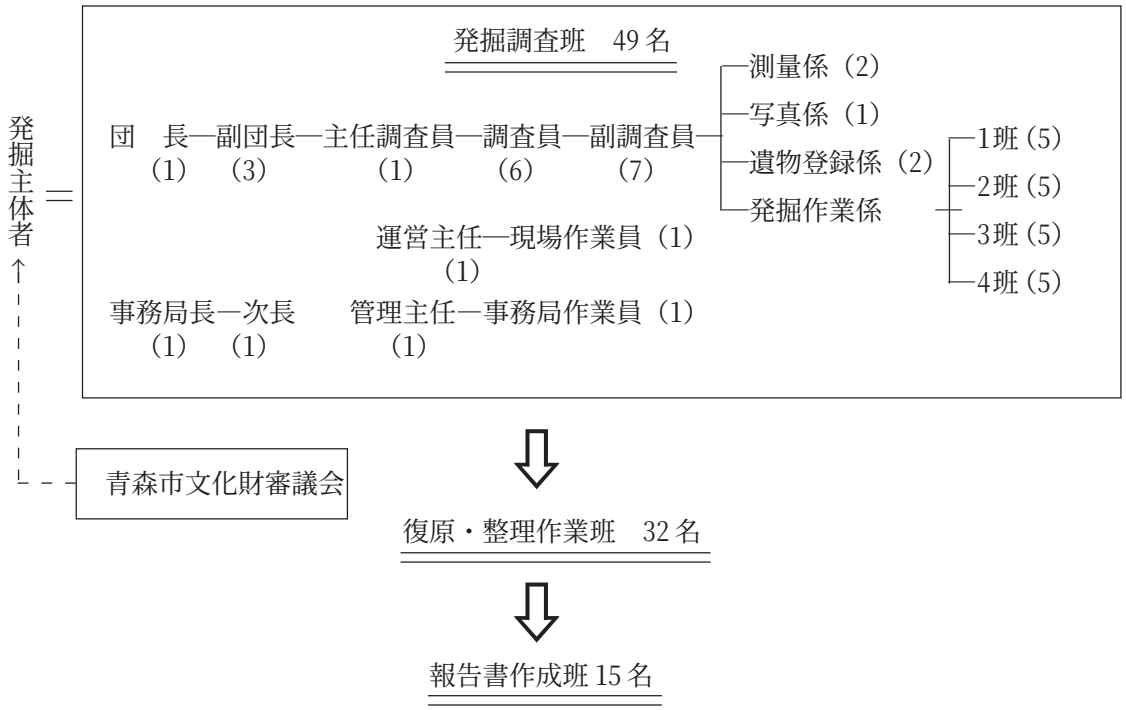
5. 遺跡の状況　　遺跡の発掘予定区10,000㎡の全域が、歴史時代の住居址に伴う生活面であり、縄文時代の遺物の包含層及び弥生時代の遺物包含層やピットが、後世の歴史時代の遺構構築の際、壊わされないで残存している部分が確認された。また遺物の包含層も重なっている部分もありかなり複雑な様相を呈している。従って、各々の土器型式の文化を持った、原始・古代の人々がある一定期間、各々の行動をした場所ということが出来る。

6. 業務期間　　昭和51年4月～昭和52年3月

イ. 発掘準備作業 ------ 昭和51年4月中旬～4月下旬
ロ. 発掘調査作業 ------ 昭和51年5月1日～同年9月30日
ハ. 復原整理作業 ------ 昭和51年10月～昭和52年2月
ニ. 報告書作成作業 ------ 昭和52年3月

○註記　3、4、5、は昭和50年度螢沢遺跡試掘調査結果によるものである。

―― B. 調査団機構図 ――



○工事主体者　青森県住宅供給公社　理事長　北　村　正　哉

○発掘主体者　青森市教育委員会　教育長　杉　田　貞　作

調査団員名

団　長	青森市文化財審議会委員	小　野　忠　明
副　団　長	弘前大学教育学部助教授	村　越　　潔
〃	青森市文化財審議会委員	大　高　　興
〃	〃	井　上　　久
主　任	青森市教育委員会社会教育課主査	塩　谷　隆　正
専任調査員	青森県考古学会々員	藤　田　亮　一
調　査　員	青森山田高等学校教諭	葛　西　　励
〃	青森県立郷土館学芸員	三　宅　徹　也
〃	国学院大学博士課程	木　村　鉄次郎
〃	青森山田高等学校教諭	高　橋　　潤
〃	〃	竹　花　　勉
副調査員	青森大学　学生	横　山　豊　彦
〃	〃　〃	水　木　準　一
〃	〃　〃	豊　島　広　美
〃	〃　〃	坂　本　俊　行
〃	〃　〃	高　坂　一　夫

副調査員	青森大学　学生	松橋　茂
〃	国学院大学　〃	小笠原　善範
〃	青森大学	竹野利幸
事務局長	社会教育課長	和田勇之助
次長	社会教育課々長補佐	蒔苗年雄
管理主任	社会教育課管理係長	板谷典昭
運営主任	社会教育課文化係長	寺沢松三郎

―― C. 業務日程 ―原則として日曜・祭日休み

イ. 準備期間 （昭和51年4月下旬～同年4月末日）

◇内　容　①委託契約　②調査団組織会　③調査員打合せ　④仮設事務所設置　⑤電気・電話工事　⑥器材・器具運搬　⑦地区杭設置

ロ. 発掘作業 （5月1日～9月30日）

◇内　容　①遺跡の現状写真撮影(航空写真)　②遺跡全体の地形測量　③伐採及び草刈・根切　④杭打ち　⑤粗掘り　⑥遺物・遺構検出　⑦遺物・遺構写真撮影　⑧遺物・遺構出土状況平面・断面図　⑨地区測量と発掘の実測　⑩発掘区全体の写真撮影（航空写真）

◇構成人員　①団長・副団長　3名　②専任調査員　2名　随時調査員　5名　③副調査員　7名　人夫（戸山・駒込地区）26名　⑤事務員　5名　計　49名

ハ. 復原整理作業（10月～52年2月）

◇内　容　①水洗い　②註記　③分類・整理　④復原　⑤実測　⑥拓影　⑦写真撮影　⑧図面整理・トレース・貼付け　⑨実物鑑定打合せ　⑩用語統一　⑪遺物・遺構の実測図、拓影、写真観察打合せ

◇構成人員　①団長・副団長　3名　②指導員　2名　随時調査員　5名　③副調査員　7名　④人夫　12名　⑤事務局　2名　計　31名

ニ. 報告書作成作業（52年3月末日）

◇内　容　①編集会議　②各実測図・拓影・写真等整理修正　③作成会議　④原稿執筆　⑤割付　⑥考察　⑦作成会議最終打合せ　⑧浄書

蛍沢遺跡の考古学上の主眼点

1）縄文早期包含層の確認とその前後関係の把握（包含層を確認時点で遺物の一点主義をとる。）
2）縄文中期円筒上層Ｃ～Ｄ式期の遺構の確認
3）縄文後期初頭の十腰内Ⅰ式の細別
4）縄文晩期遺構の追求
5）弥生式土器の型式分類とその位置づけ
6）集落型態の追求（住居址の同時性と連続性、桜井第Ⅱ型式の細別の追求）

発掘調査基準

1. 磁北に合わせてグリットを組み、10m × 10mを１単位とする。
2. 原点は昨年度設定したものを使用し､南北アルファベットA、B、C……東西算用数字1、2、3……2m区画の小細区を設ける。（例Ａ－a_1－１＝略記a_1－1）
3. 測量方法は原則として遣り方を用いるが、各調査員相談のうえ、適当な測量方法を取ることが出来る。
4. 実則（セクション図含む）の縮尺は原則として住居址の場合は$1/20$を用い、細部は$1/2$、$1/4$、$1/10$を用い、広範囲にわたる場合は整理しやすい縮尺を調査員相談のうえ決定する。
5. 遺物は、地点、層位、グリット名、ポイント、レベル等を明確に注記し、写真撮影後取り上げる。（所定の遺物カード、遺物台帳を使用する。）
6. 遺構は大形の場合は四分法、小形の場合は二分法を用い、その判断は各調査員が相談のうえ決定する。
7. 住居址の写真撮影の順序（白黒、カラー同時併用）……貯蔵穴、墓壙等もこれに準ずる。
   ①遺構確認　②セクションの撮影　③住居址生活面の状態及び床面遺物出土状態
   ④住居址内部の施設　⑤掘り方
8. 自然堆積面の層序はローマ数字（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ……）を用い、住居址等の遺構の覆土はアラビア数字（1、2、3……）を用い、間層についてはアルファベットの小文字（a、b、c……）を用いる。
9. 分層については、土層の判別の頃を参照（標準サンプルとして１区画、一基を残しておく）
10. 原則として、調査員、副調査員は遺構調査の場合は遺構カードに記入すること。
11. 図面は番号を付し、図版台帳に記入する。遺物はグリットごとに遺物台帳を分冊し、整理箱に収納する。
12. 週間ミーテングを土曜日に調査員、副調査員が現場にて実施する。

包含層発掘の順序

1）10m ごとに基準杭を打ち、20m ごとに畔を残す。

2）土層は堆積順序の新しい層から剥いていくのは勿論であるが、層の拡がりが不明瞭の場合、次層との関係が判別できないような場合は、テストトレンチを設けて対処していく。

3）遺物包含層の遺物の取り上げは、同一層の平面的な拡がりを確認し、写真撮影をした後とする。

4）層理面に平面として並んだ遺物と層中の不規則な形で含まれた遺物は区別する。

5）二次的堆積や人為的、自然的原因により層位が逆転する場合があるので充分留意する必要がある。

6）一括土器等の局部出土状態は、平面実測（微細図）及び写真撮影を行う。

遺構精査の場合

① イ、竪穴等の場合……落ち込みを確認した上で、そのプランを明確にする。
　ロ．その他の場合……石組・土器組等の場合も平面で確認する。

② 遺構の重復……埋め土により遺構の新旧関係を確認する。

住居址及遺構内出土遺物の取り扱い方

① 堆積土の各層出土遺物は明確に区分する。

② 床面一括土器、その他の遺物は遺構内における位置を実測する。

③ 周溝内出土遺物は堆積土出土のものと区別する。

④ 遺構掘り方出土遺物は生活面出土のものと区別する。

住居址の注記事項

① 重複関係……住居の重複と他の遺構との切り合い関係

② 増　改　築……方向と間取り等

③ 平　面　形……主軸、規模

④ 竪穴層位……四分法発掘に準じて平面的拡がり、層の細別

⑤ 壁の状況……施設の有無、柱列等

⑥ 床　　面……貼床、貼床下の状況、柱穴と床面の前後関係

⑦ 柱　　穴……埋土、掘り方柱痕、竪穴の内と外、床面との関係

⑧ 周　　溝……竪穴内周溝、竪穴外周溝とその状況

⑨ 炉・カマド……（燃焼部、煙道部、煙出し部）……構築方法、使用材質等

⑩ 貯　蔵　穴……（文化遺物、自然遺物等）～堆積層等

⑪ 年代決定

（塩谷隆正）

第２章　遺跡の概要

１．地形・地質概要

本遺跡は、青森平野南部の標高約30ｍの丘陵地に位置する。西部が、遺跡が位置している丘陵地と同様な、標高60ｍ～30ｍの平坦な台地であり、南部・東部は、標高400ｍ～600ｍのやや急峻な山地から成っている。水系は、青森平野を横切って流れる駒込川・荒川が西方に、野内川が東方にあり、いずれも青森湾にそそいでいる。

周辺の地質は、地質図からわかるように、西部・南部には、第４系の火山噴出物が広く分布し、東部には、第三系がわずかに分布している。また、北部は、砂礫を主体とする沖積層である。

東部に分布する第三系は、七戸町を流れる和田川を標式地とする和田川層で、泥岩・硬質頁岩等の堆積岩と流紋岩・玄武岩・安山岩・質凝灰岩で構成されており、西部・南部の第四系は石英安山岩質の溶結凝灰岩とそれをおおう浮石質火山灰である。溶結凝灰岩は、遺跡南部の路崖、駒込川ぞいの随所の露頭で観察することができる。また、青森平野で行なわれたボーリング資料によると、この溶結凝灰岩は、平野の地下深所まで流れ込んでおり、青森湾の海岸近くでは、地下約500ｍまでで４層確認されている。しかも、それは北から南に、東から西に向って緩かに傾斜していることが知られている。浮石質火山灰は、溶結凝灰岩をおおい、丘陵地に広く分布している。この火山灰は、周辺の露頭では、溶結凝灰岩に不整合に重なっているが、遺跡内の最大約３ｍまでの深掘の層序では、溶結凝灰岩のとの間に数枚の粘土層がみられる。

2．遺跡の層序

遺跡内の層序は、色相・含有物・硬度を視点に、上位から、黒色土層・黄褐色浮石質火山灰層・褐色粘土層・赤褐色粘土層の４層に区分することができる。これは、Ｌ－12、Ｊ－6、Ｆ－7グリットにあるピットの２～３ｍの深掘で観察できる層序をもとに区分したものである。

次に各層についてその特徴を述べるが、最上位の黒色土層については省く。

第　Ⅰ　層

本層は、黄褐色を呈し、浮石粒を多量に含む火山灰層である。浮石粒は、１～２㎜の径のものが大半をしめるが、中には、径５㎝に達するものも含まれており、その形は、亜円礫状である。他の混入物としては、径２～４㎜の安山岩質な火山礫が少々含まれている。また、本層は全体的に砂質な部分が多い。

本層の層厚は、Ｌ－12では40㎝、Ｊ－６では50㎝、Ｎ－２では20㎝、Ｆ－７では25㎝であり、南東部～東部では薄く、北東部～北部の傾斜地、頂上付近では厚くなる傾向がある。また、Ｊ

－6における本層では、浮石粒に淘汰作用がみられる。

本層の重鉱物組成は、L－12、J－6の資料では、頁色鉱物が、角閃石、紫蘇輝石が大半でありその量比もほぼ1：1である。

第　II　層

本層は、火山灰質な褐色粘土層である。全体に0.5～1㎜程度の石英粒と、細粒の安山岩質な円礫を含むものであり、炭化物の破片も少々であるがレンズ状に含まれてくる。また、本層は、L－12、J－6、F－7で、最上部2～3㎝程度、チョコレート色を呈する薄粘土層が見られ、上位の黄褐色浮石質火山灰とは、不整合関係にあると思われる。

層厚は、L－12で60㎝、J－6では50㎝、N－2では確認できる範囲で20㎝、F－7では53㎝となっている。L－12における本層は、上部30㎝付近に不整合的な面が見られ、下部は上部より硬質になっている。しかし、石英粒・含有礫の割合は、概観しただけでは大差がみられない。

重鉱物組成は、磁鉄鉱が大半をしめ、有色鉱物としては、角閃石・輝石類が少々含まれている程度である。角閃石・輝石は、自形を保っているものが少なく、ほとんどが破片状であり、しかも、磁鉄鉱もふくめ、幾分丸みをおびている。

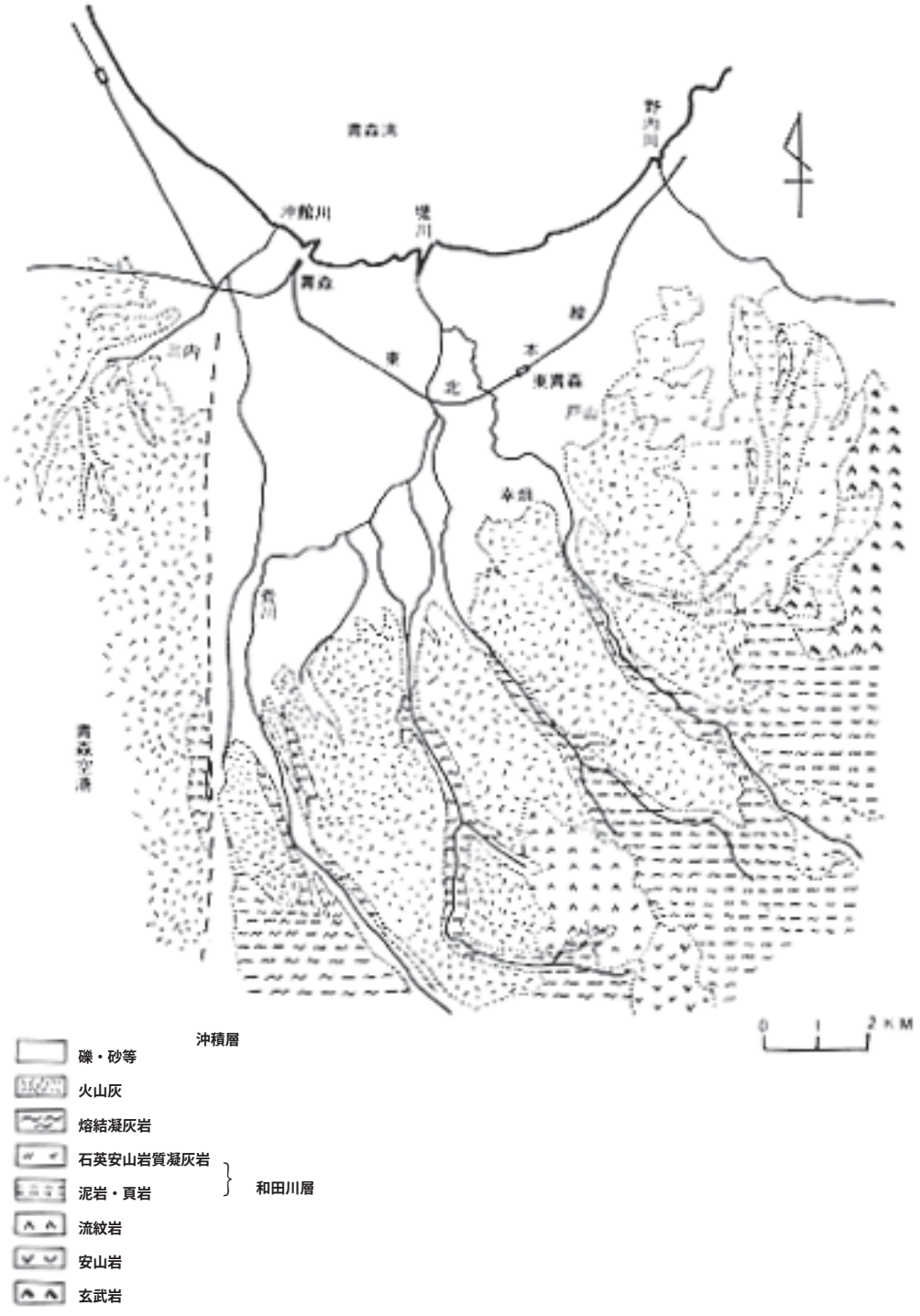
第　III　層

本層は、赤褐色粘土層であり上位の褐色粘土層と同様に、0.5～1㎜の石英粒の混入がない。層厚は、観察できる範囲において、L－12で130㎝、J－6では100㎝、F－7で120㎝といずれも厚く、遺跡内にある約10mの深さをもつ井戸で確認できるところでは、4～5mの層厚をもつと思われる。L－12における本層は、上部20～30㎝は、暗赤褐色を呈し、全体に安山岩質な亜円礫を多く含む。J－6における本層は、L－12と同様に上部20㎝は暗赤褐色を呈し、その下部50㎝は赤褐色に変わるが、最下部30㎝は再び暗赤褐色を呈する。また、本層とⅡ層との境界面は、波状をなし、砂・礫が多く見られる。

重鉱物組成は、l－12の暗赤褐色部と、その下部の赤褐色部、J－6の上部暗褐色帯の3資料について調べた結果、大半が磁鉄鉱であり、しかもその量は非常に多い。有色鉱物は、破片状のものが少々確認できる程度である。

次に周辺の地質と遺跡内の層序から簡単に周辺の地史を考えてみる。

田代平を供給源とする溶結凝灰岩が、多量に噴出し、遺跡の位置する広範囲にわたる丘陵地を形成した。しかし、その地形は、凹凸のはげしいものであったと思われる。凸部は、侵食を受け、凹部には堆積が行われた。遺跡内で観察できるⅡ層・Ⅲ層は、この凹部に二次的に堆積した層と思われる。このことは、Ⅱ層・Ⅲ層に含まれる鉱物が破片状のものが多いこと、また、遺跡周辺の露頭では、溶結凝灰岩に直接、黄褐色浮石質火山灰が重なることから考えられる。このような作用が行われて、現在とほぼ同じ地形が形成されていった。その後、この地形をおおうように、黄褐色浮石質火山灰（第Ⅰ層）の堆積が行われたと思われる。

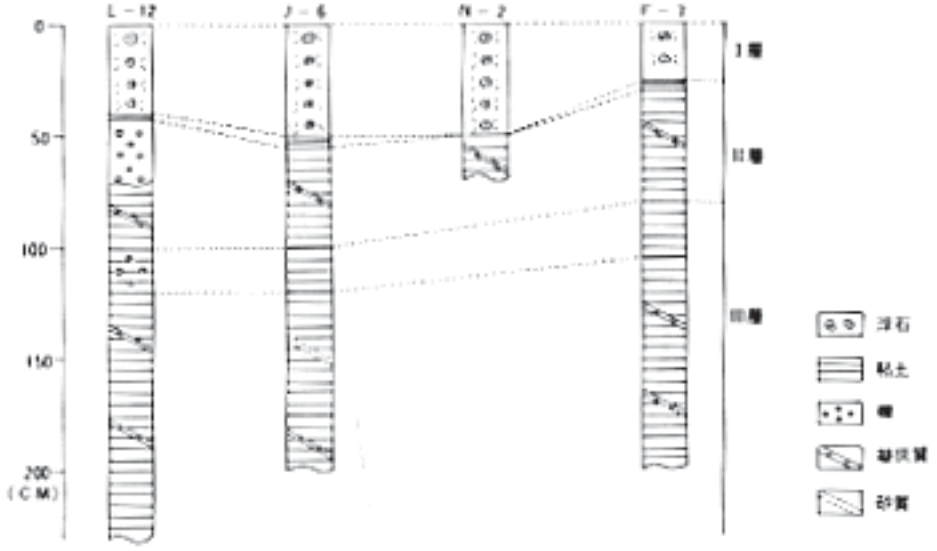

青森湾
野内川
沖館川
堤川
青森
東
北
本
東青森
戸山
幸畑
青森空港
0
1
2 KM
沖積層
礫・砂等
火山灰
熔結凝灰岩
石英安山岩質凝灰岩
泥岩・頁岩
和田川層
流紋岩
安山岩
玄武岩

第5図　地　質　図

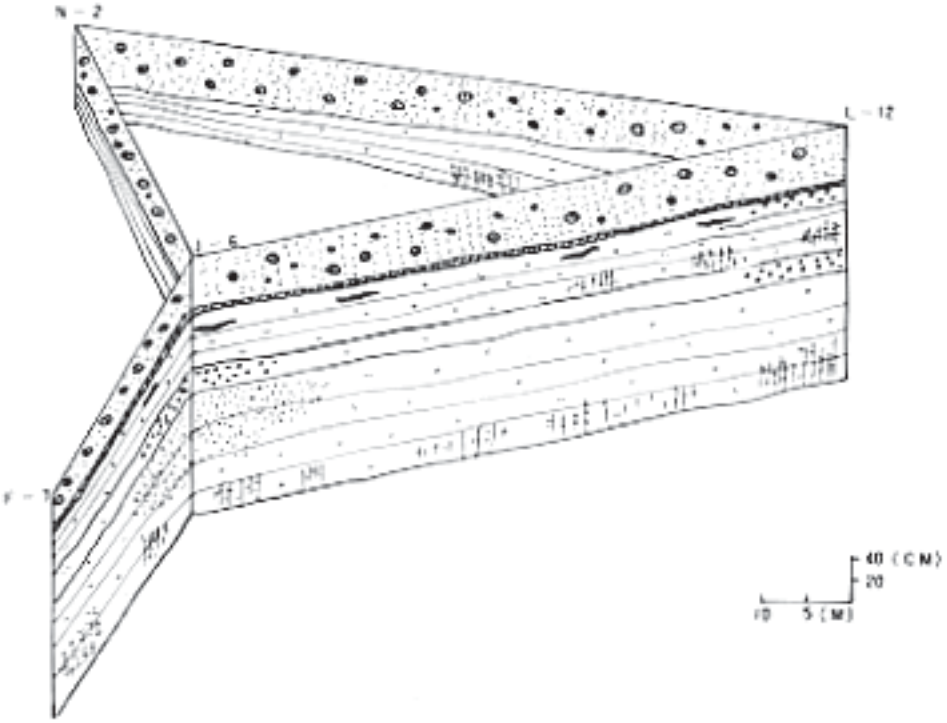
この丘陵地における人の生活は、層序から考えるとⅠ層・Ⅱ層の境界にあるチョコレート色の薄粘土層からは遺物が発掘されていないことから、黄褐色浮石質火山灰の堆積後、始まったと思われる。

最後に、本報告を行なうにあたり、野外・室内ともに多大の御指導・御援肋いただいた青森高校・川村明栄先生に厚くお礼申し上げます。

（佐　藤　　巧）



第6図　遺跡内柱状図

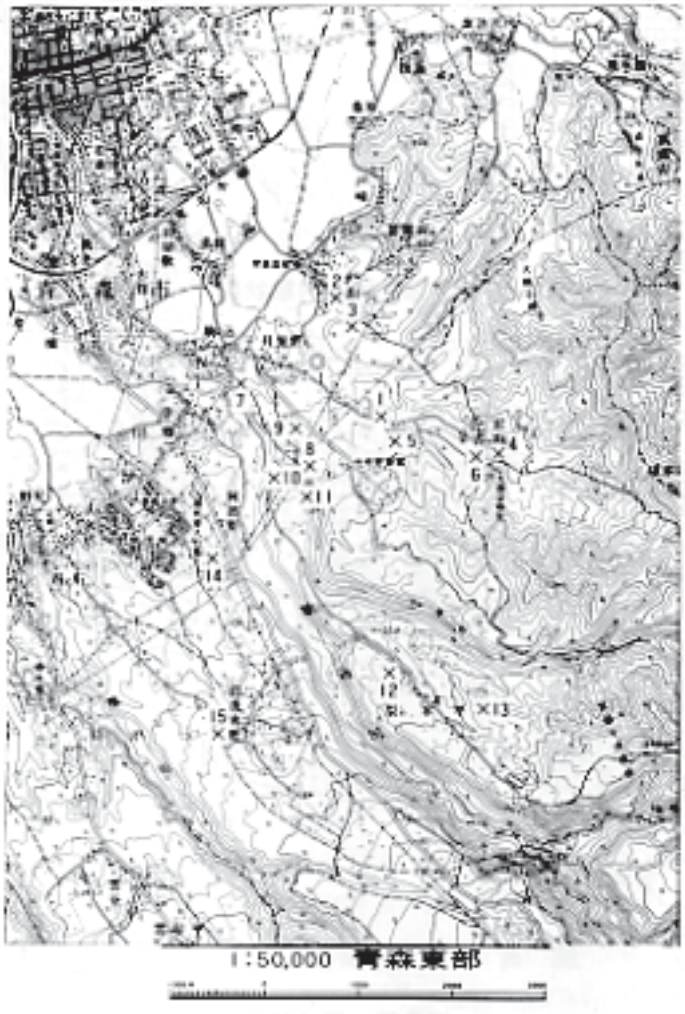


第7図　模式断面図

3. 位　置

青森市の駒込部落から東南の沢山部落に向って1,200m、戸山部落から南西の月見野霊園へ向って1,100mの小高い台地の上に位置する。現海岸線からは4,500m、東側の沖積平野を流れる沢山川まで250m、南側の沢地の阿部農園附近には湧泉があり、標高36mを最高とする浜館・小柳方面に向う沖積平野に発達する洪積世台地最先端の舌状台地の基部にあたり、年間を通じて最も多い南西寄りの風は“おろし”となってくるであろうが、そんなに強くはなく、むしろ偏東風（やませ）はまともに海岸平野部から受ける。が、現市街地を一望の下に見渡せる日照条件では最高の自然環境にある。

4. 周辺の遺跡（第８図）



第8図

1. 月見野遺跡(青森市遺跡登録番号50)、全国遺跡地図青森県650になっている。ここは駒込字蛍沢であるが県の調査員になった方々が隣の月見野台地と誤認して名付け、そのまま遺跡名として有名になってしまったので現在でもその名で通っている。戦前軍用地の頃より出土があり、戦後開拓者が入ってから非常に多くの優品が出、盗掘も盛んであった。そんなことから青森市教育委員会では昭和44年5月の連休を利用して高等学校の合同発掘調査をして、縄文時代後期初頭の十腰内Ⅰ式の土石器を発掘したが、残念ながら遺構は、盗掘・開拓等による撹乱が激しく発見できなかった。しかし四ッ石遺跡と共に青森市では縄文後期初頭の好資料を得ることができた。

2. 戸山遺跡(青森市番号56)青森県番号647で戸山字戸山になっており、小字は赤坂が正しい。文献資料は「昭和27年度調査概報－津軽半島に残存する縄文遺跡」小野忠明、一高調査、「青森市の歴史」井上久著、「先史時代の青森市」「青森市の原始時代研究録Ⅰ」北林八洲晴著があり、縄文時代前期・中期の遺跡である。

3. 戸山赤坂遺跡(青森市番号86、87)、これは47年に戸山団地計画に伴い発見され、歴史時代の土師器・須恵器伴出時代の遺跡である。

4. 沢山Ⅱ遺跡(青森市52)、文献は「撚糸文2号、沢山Ⅱ号遺跡調査報告」藤田亮一・山田高校研究紀要、に住居址一基の桜井第Ⅱ型式期(平安時代)の報告があり、この辺一帯はまだ相当数の住居址が存在するであろう。

5. 沢山Ⅰ号遺跡(青森市51)、文献「青森市泥山Ⅰ号遺跡調査速報」考古学ジャーナル32号、葛西励著、縄文晩期の大洞A′期の土器・石器・土偶等を紹介し、縄文末期の好資料と共に問題点を指摘された。

6. 沢山Ⅲ号遺跡(青森市53)昭和49年東北新幹線分布調査の際、塩谷が発見した土師・須恵時代の遺跡で、現在ブドウ畑になっている。螢沢・沢山Ⅱ号と同時期と考えられる。

7. 駒込館址、地元民はシロコ(城)と呼んでいたと「青森市の原始時代研究録Ⅰ」北林に出ている。中世の館址として青森市の21の館址に含めたいと思っている。ただ環状線道路により一部削減されているのは残念なことである。県計画課も充分に留意する必要があろう。

8. 玉清水Ⅲ遺跡(青森市48)、青森県649となっている。文献は「そとがはま」3号1958、「青森東部の遺跡調査概報」北林八洲晴著、では玉清水2としてある。青森市教育委員会では昭和44年、45年と地主の高橋氏が豚舎建設の為、整地のためブルドーザーをかけたところ、土石器が多量に出土したので、周知の遺跡でもあることなので緊急に調査したものである。その結果、縄文前期の円筒下層D式期の住居址3基、C式土器、石器、復原した土器150個体程出土し、円筒土器文化編年に貢献したこと大である。また土師時代の住居址も一基検出し、墨書土師器出土の意義は大きい。

9. 玉清水Ⅱ遺跡(青森市47)前記、北林氏の「青森市の……」によれば、玉清水Kとなってお

り、現郷土館風韻堂コレクションに月見野出土の甕棺はここより出土したとしている。葛西励氏「三角岩版考」「うとう」に前記月見野遺跡出土のものと共に考察を加えている。縄文後期初頭の重要遺跡である。市教育委員会が40年に調査した箇所の北西100㎡の地点である。

10. 玉清水Ⅲ遺跡(青森市48)青森県648となっており、文献は、青森高校社研部「郷土室」木村房雄らが発表している。青森市教育委員会「玉清水遺跡調査概報」も小野忠明・井上久が報告している。縄文晩期初頭大洞B、BC式期の良好な資料を紹介している。

11. 玉清水Ⅳ遺跡(青森市49)現杉林であるが盗掘の激しい遺跡である。ということは木の根のところから完形品等がよく出るところである。相当荒されてはいるが大洞式の初期から半ばまで層位的に出土し、編年考察には欠くことの出きない遺跡である。

12. 梨ノ木平遺跡(青森市55)部落入口の畑地で、縄文晩期の小規模な遺跡である。

13. 梨ノ木平開拓地遺跡(青森市54)仏岳裾野で表土をはいだ際に円筒上層式の土器が多量に発見され、標高400㎡附近の縄文中期の遺跡として注目された。岩木山ろくでは400㎡の標高でも遺跡があるが青森市では最高である。11、12、13、15は塩谷が実査したものである。

14. 阿部野遺跡(青森市80)昭和49年に市営住宅建設の為造成工事の際、地元住民の通報により、青森市教育委員会が一部を緊急発掘調査をし、土師・須恵器の平安時代の住居址6基を検出し、古代集落の自給体制の中にあって専業化・協業化の傾向を示したことを解明し、「るつぼ」の発見に伴い鉄製品の加工中心の小集落形態は、学会に問題を提供した。市教育委員会塩谷が中心となって報告書の完成を目ざしている。

15. 田茂木野遺跡(青森市57)現在は観光リンゴ園内に包含されてしまったが、発見当時は地元の川村氏のリンゴ畑と松林の中で保存状態の良好な大洞A式包含層で青森市では金浜遺跡とニヶ所だけである。

5. 村誌・町誌・郷土史等に表われた文献資料の検討

「津軽一統誌」によると天文年中(1532～1554)にすでに、駒込、野尻、横内、原辺地、鳥呼(うとう)、安潟、油川等の村名がみえている。またこれには脱漏があるので（深沢地方や細越、安田等)、かなりな村の発達していたであろうと思われる。しかし、これは後世に書き写したものであるので、信憑性がうすい。

「青森市の歴史」青森市教育委員会刊「青森平野雑考」肴倉弥八によれば、昭和32年には大柳辺村の大矢家は墓碑から500年以上、金浜村のヨシ原家が、後に吉田家となり400～500年といわれている。また野木の桜田家、戸山の浪岡家、玉態家、古館の北畠家、細越家の木村家、横内の高坂家などいずれも慶長（1596～1615）から寛永（1624～1628）年間に移住してきたらしい。このように青森平野の旧家を尋ねてみると、天正・慶長の頃落ちのび、世をしのび、姿を武士から農民に替え農耕に励んだ人が多い。としてある。

また「浜館町誌」昭和40年鈴木政四郎によると

ひょうひょう新田部落

貞享元年（1684）3月の古地図によれば（出典が明らかでない）、ひょうひょう新田と書かれ、現在の沢山部落に行く途中、蛍沢開拓地にあった。その昔は、戸山の東南にあって戸山の枝村として発生した部落で、当時は家が8軒あった。この部落の名の由来については不詳であるが、ひょうひょうとは俗に、日本各地にあるひょうし木村とかひょうしとか、ちょうしとか云う、歌に関係ある人々が集って開発した部落なのか、それとも、寛政11～12年頃、菅井真澄という国学者の紀行文に「兵人越又いう、ひゃうひゃう越えという名も聞へ」とある所から見て、昔の落人かここを越えた坂の附近に出来た部落なので、かような名が生まれたのかも知れない。現にその昔、戸山の玉熊家や浪岡家では天正年間浪岡落城の折りここを通って沢山の奥に逃げたことがあるからこの名の起りもまんざらではない。ともあれ、いつ頃なくなった部落なのかはわかっていないが、この部落も寛政11～12年頃には村跡ばかりが残っていたことは確かで、それ以前の天明の大凶作に滅んだのではないかと考えられる。

貝久保部落

その昔、蔵沢と砥山の中間にあった部落で貞享以前になくなった部落らしく貞享元年の古図にも貝の久保畑や貝ノ久保下々田と出ているだけであるが、後の元治元年に書かれた日東流封内山川図には貝久保とあり、明治4年秋抄暈には貝窪とちゃんと部落となっている。しかし、後年話を開いて書いたためこのように誤って記入したものではなかろうか。その昔、この辺に貝塚があったのではないかと思われるが、今はそれすら残っていない。その貝がこの辺の窪地から出るのでこの名が生まれたものであろう。としている。

また、蛍沢の地名については、昔、沢山の沢一帯にかけて、ほたるが沢山飛んでいた所から蛍沢の名が生まれたといっている。

この鈴木氏のいうひょうひょう新田・具久保部落は、現在の蛍沢遺跡に非常に近い。これらは案外遺跡の中に含まれているかもしれない。280年～300年以前の部落があったとすれば、現在の発掘調査法をもってすれば発見出来ぬ筈がない。掘建柱で火災にあったとしても柱穴や炭化物や陶磁器等の破片は残存する。試掘調査においては見え出せなかった。が、いずれにしても、これらを綜合して判断すとすると、500年以前は青森平野は無人の地ということになる。縄文時代・弥生時代・奈良・平安時代の遺跡が青森市内に100ヶ所以上も発見されている現在、文献上の資料がないからと云って、歴史がなかったのではない。優れた人工遺物・遺構が考古学的方法によって発見され、証明されればそれは立派な歴史となりうる。エミシ・エビスと云われる異民族が大和民族に駆逐され、大和民族が青森平野を開拓したという証拠は何一つ残っていない。

異民族の歴史的遺物は東北々部のこの青森に於いてもどんなものが存在するであろうか。私

達考古学にたずさわるものは、専門の民俗・人類学者からも寡聞にしてきいていない。また津田左右吉博士は古事記・日本書紀を利用するにあたってはまず厳密な史料批判を行うべきことを主張し、考古学的、人類学的な材料を記紀の解釈に安易に用うべきでないことを述べたのは、そんなに古いことではない[註(1)]。

（塩谷隆正）

註(1)　津田左右吉の記紀批判に関する著作には「日本古典の研究（上巻　昭和23年、下巻、昭和25年、改版は上下巻とも昭和47年、岩波書店)「日本上代史の研究」（昭和22年、改版は昭和47年、岩波書店）

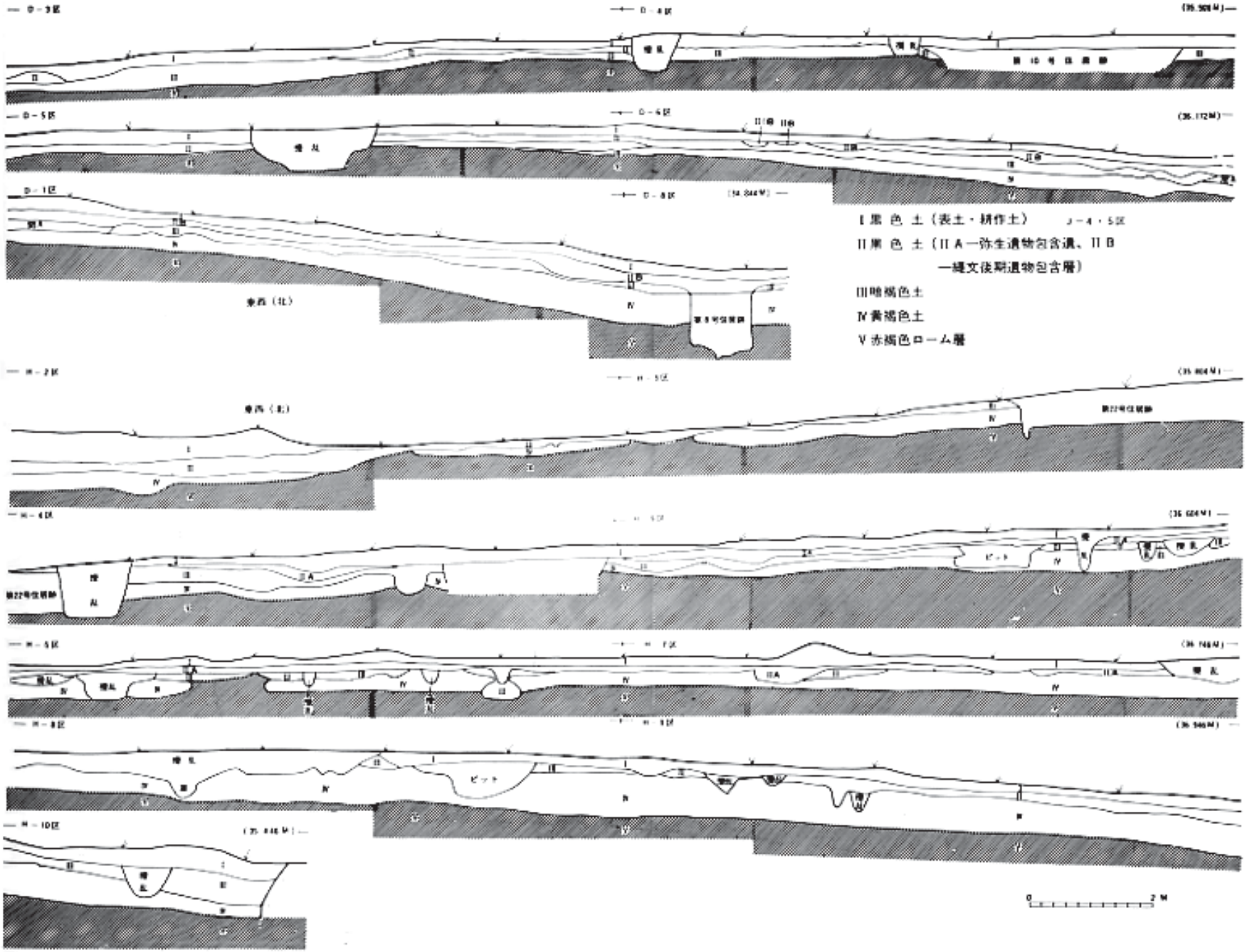
第3章　遺跡層序（第9～12図）

遺跡の殆どは畑地になっており、耕作により至る所ローム層までの攪乱が見られた。セクション面は原則として、南北が東壁、東西が北壁とした。

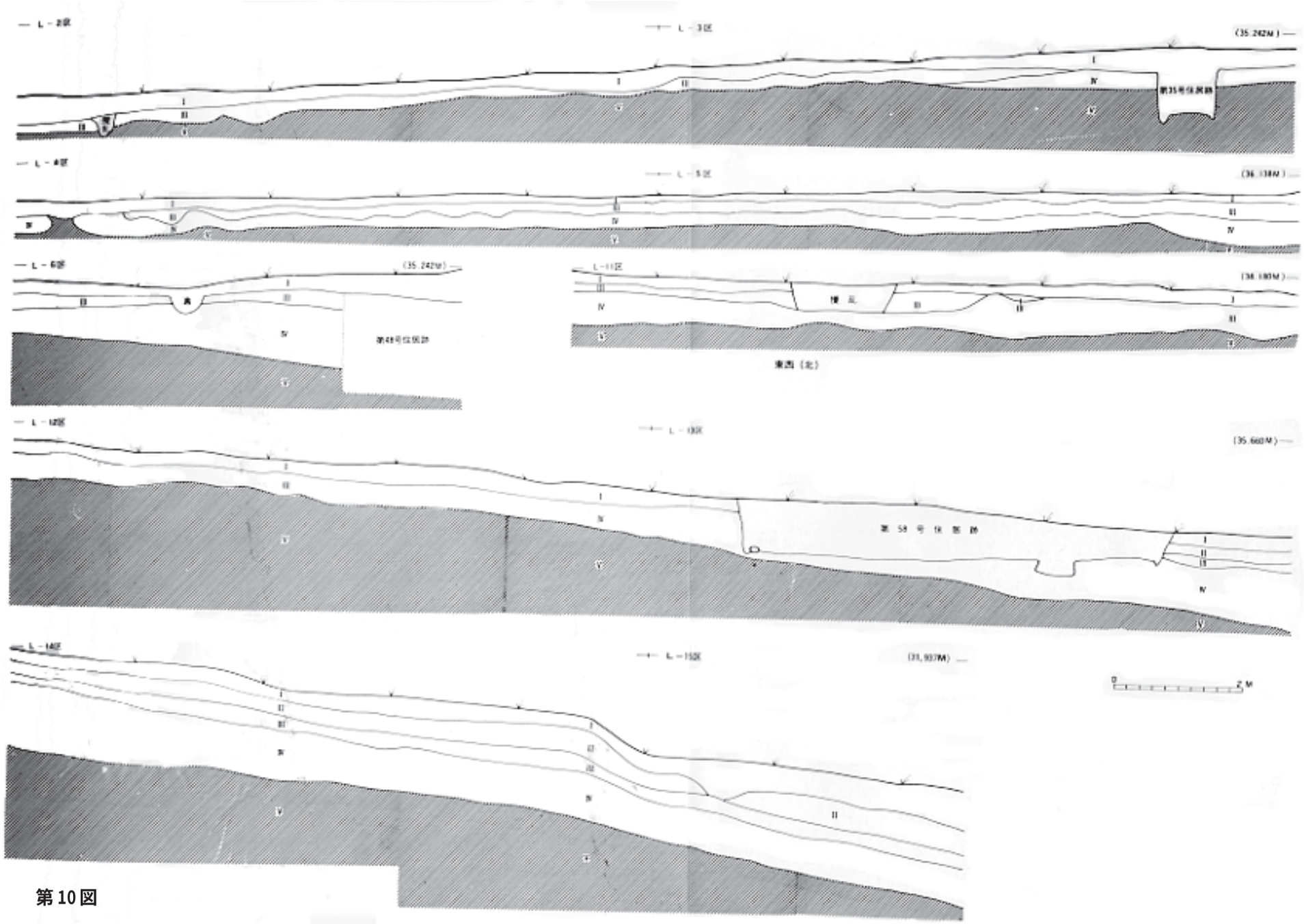
東西セクションはD－3～8区、H－2～10区（第9図）、L－2～6区・L－11～15区（第10図）の4本（230m）を、南北セクションはB－0～5区（第11図）、J－0～11区（第12図）の2本（200m）をそれぞれ実測した。

層位は大別して第Ⅰ～Ⅴ層まで区分したが、遺物包含層の関係でさらに細分することができた。第Ⅰ層（黒色土）現表土で耕作のため、各時期の遺物が表面採集できた。平坦部では約20cmと薄いが、北東部の傾斜地では約1m前後と非常に厚くなる。第Ⅱ層（黒色土）は遺物包含層の関係でA・Bに区別できた。第ⅡA層は弥生時代の遺物包含層で、特に遺物の集中したJ－4・5区に見られる層である。第ⅡB層は縄文時代の後期の遺物包含層でほぼ遺跡全体に見られる。なお、歴史時代の住居跡はこの上面より掘り込んで構築している。第Ⅲ層（暗褐色土）は縄文時代早期の遺物包含層であるが、遺物の集中は特にF・G－7・8区、K・L－8・9区に見られた。第Ⅳ層は（黄褐色土・火山灰）、第Ⅴ層は（赤褐色ローム）で、遺構の掘り込み面はこれらの層まで達する。

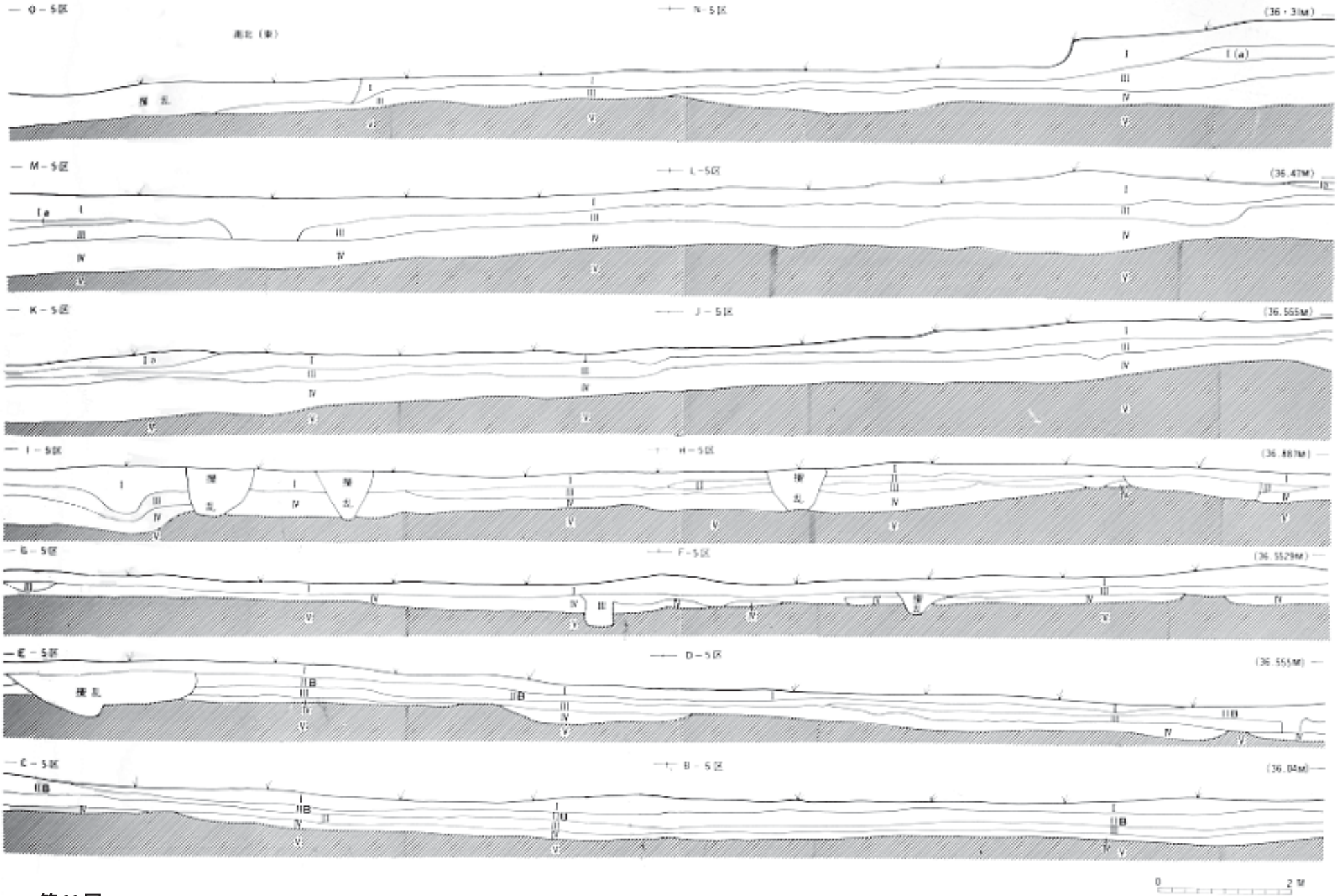
（藤田亮一）


Ⅰ黒 色 土（表土・耕作土）　J－4・5区
Ⅱ黒 色 土（ⅡA―弥生遺物包含層、ⅡB
―縄文後期遺物包含層）
Ⅲ暗褐色土
Ⅳ黄褐色土
Ⅴ赤褐色ローム層
0
2 M

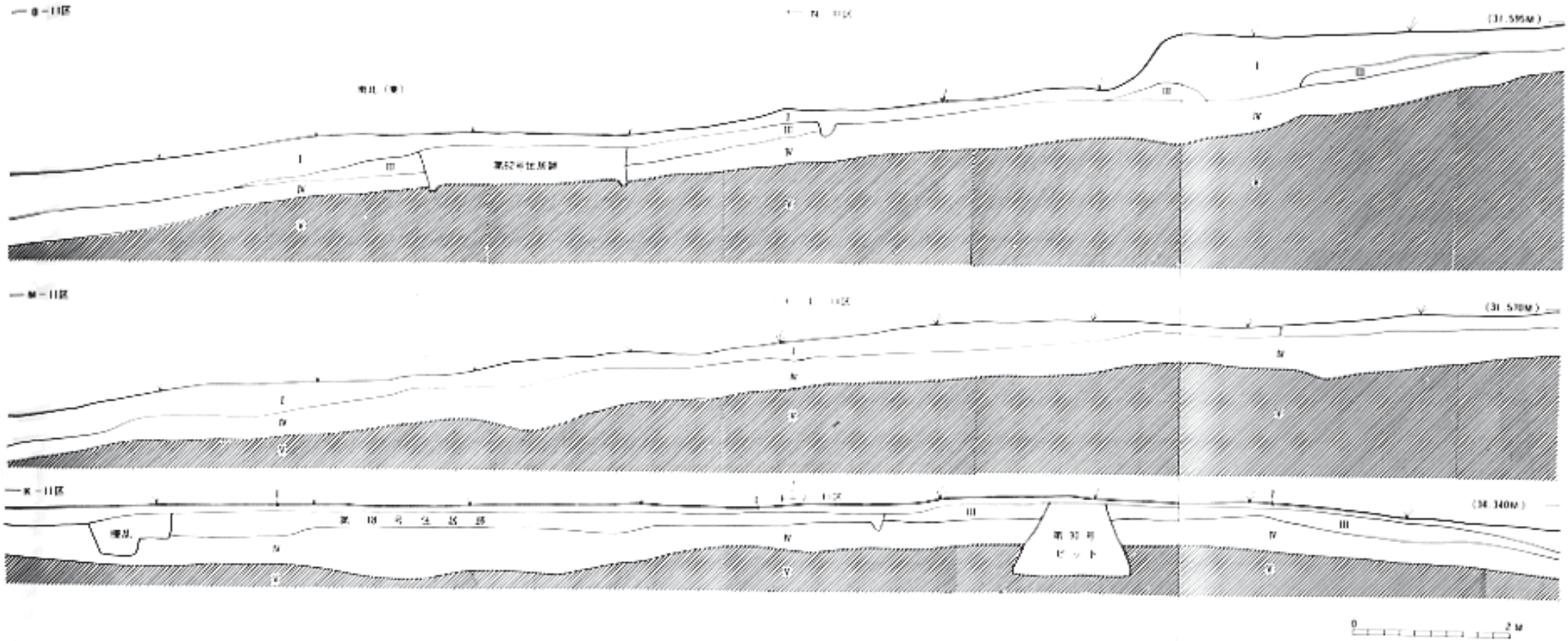
第9図



第10図


O－5区
N－5区
(36・3M)
I
I(a)
III
IV
V
M－5区
L－5区
(36.47M)
Ia
I
III
IV
V
K－5区
J－5区
(36.555M)
I a
I
III
IV
V
I－5区
H－5区
(36.887M)
I
III
IV
V
G－5区
F－5区
(36.552M)
III
IV
V
E－5区
D－5区
(36.555M)
IIB
III
IV
V
C－5区
B－5区
(36.04M)
IIB
III
IV
V
0
2 M

第 11 図



第12図

第4章　早　　期　　編

第1節　　出土土器の分類

土器の散布状況と層位

本遺跡から早期縄文土器の出土することか明らかになったのは昭和49年であり、本遺跡周辺採集の資料と併せて藤田亮一氏によって資料紹介がなされた（藤田1975）。この際の資料によって藤田氏が述べた如く、吹切沢式の範疇に含め得るものと、類似するものの若干違いを有するものが存在していることが明らかとなっていたが、今回の調査の結果、本遺跡の早期縄文土器は多彩であり、以下に報告する如く7分類された。主体をなす第Ⅱ類土器の散布状況は、調査区のほぼ全域にわたって出土しているが、主として標高35m～36mの等高線に沿って馬蹄形の散布を示していた。特に東南斜面から北斜面にかけて濃密であるが、中でも（L・K－7・8）と（F・G－8）がまとまって出土しており、中心地点が2ヶ所に分かれている。

他の各類について比較的多く出土したグリッドを挙げるならば、第Ⅰ類土器では16片出土した（L－8）、11片出土した（F－8）、9片出土した（K－8）、7片出土した（K－7）、5片出土した（L－7、J－5）等がある。1グリッド100㎡中に最高でも16片であり、非常に散漫であるが、更に1片であっても出土したグリッドをも含めるならば、第Ⅱ類土器同様の馬蹄形の散布状況を示している。第Ⅲ類土器は5片で、全て同一個体であり（G・F－7）、（E・F－8）、（N－5）で各1片出土した。第Ⅳ類土器では、各8片出土した（K・L－8）、と5片出土した（K－5）、第Ⅴ類土器では8片中5片出土した（K－9）、第Ⅵ類土器では12片出土した（L－9）、9片出土した（I－10）、各5片出土した（K－8・9）の各グリッドが、少ない資料の中でも比較的多く出土したグリッドとして挙げられよう。これらの諸グリッドは、第Ⅱ類土器の中心的散布区域と合致しており、台地利用に対する類以性が指摘し得よう。

早期縄文土器の出土層位は第Ⅰ層ないし第Ⅲ層である。本台地は幾度となく生活の舞台として利用され、更に土層の堆積も薄いため、各類の土器を層位的に把えることは困難であった。しかしながら、第Ⅲ層中に包含されていたのは第Ⅰ類土器と第Ⅱ類土器であり、他類の土器はほとんど含まれておらず、第Ⅰ層の耕作土層剥ぎの段階で出土していることから、これをおおまかな層位差として認めることは出来よう。

第Ⅰ類（第13図、第14図、第30図1～3、第31図2、4、11、12、第32図1）

ほぼ寺の沢式[注1]に比定し得るものである。破片数97片。復原し得たものはない。砲弾形の尖底

土器であるが、乳頭状突起はない。

胎土中に植物性繊維を含むものが、約半数を占める。他に酸化第二鉄粒子、白色凝灰岩粒子等を含む。砂の含有は、比較的少ない。焼成は良好で、緻密で堅いものが多い。

口唇部形状は、丸みを有するもの、平坦なもの、外側に傾斜したものがある。しかし内側に傾斜したものはない。口唇上端に貝殻腹縁文を施文したものが多い。希れに竹管刺突文を加えたものもある（第13図11）。多くは平縁であるが、突起を有するものが2例ある（第13図12、16）。12については欠損しているため不明であるが、16は右側が急傾斜の「逆へ字状」の突起である。

口頸部文様帯を構成しているものは9例で、貝殻腹縁文を横位に施文し、胴部は縦位の貝殻腹縁文としたもの（第13図－1．2．10．21）、貝殻腹縁刺突文を横位に施文し、胴部にほぼ縦位の貝殻腹縁文を有するもの（第13図7）、刺突文と貝殻腹縁文とを有するもの（第13図12．13．14．15．18）等がある。他は口頸部文様帯を構成せず、斜位ないし、縦位の貝殻腹縁文のみを施文したものであるが、同図3．5．6．8の口頸部は貝殻腹縁文が横位ないし、それに近い施文となっており、これより下位は斜位または縦位の施文で、第13図1に近い構成であろうと推定される。

胴部は斜位または縦位に貝殻腹縁を長く施文するのが通例であるが、これとやや趣きを異にするものがあり、若干の問題点を有しているため次の2種に分けておく。

a．貝殻腹縁を横位・斜位等の組み合せによって文様構成をなすもの、（第13図19．22．第30図3．第31図4――後3点は同一個体）第31図4は、非常に細かな条痕文を地文とし、貝殻腹縁によって長方形の文様を描き、下部は斜位の貝殻腹縁文である。内面にも斜位の貝殻腹縁文が処々に施文されている。

b．斜位・縦位または横位に貝殻腹縁文を長く施文したもの（a以外の土器）

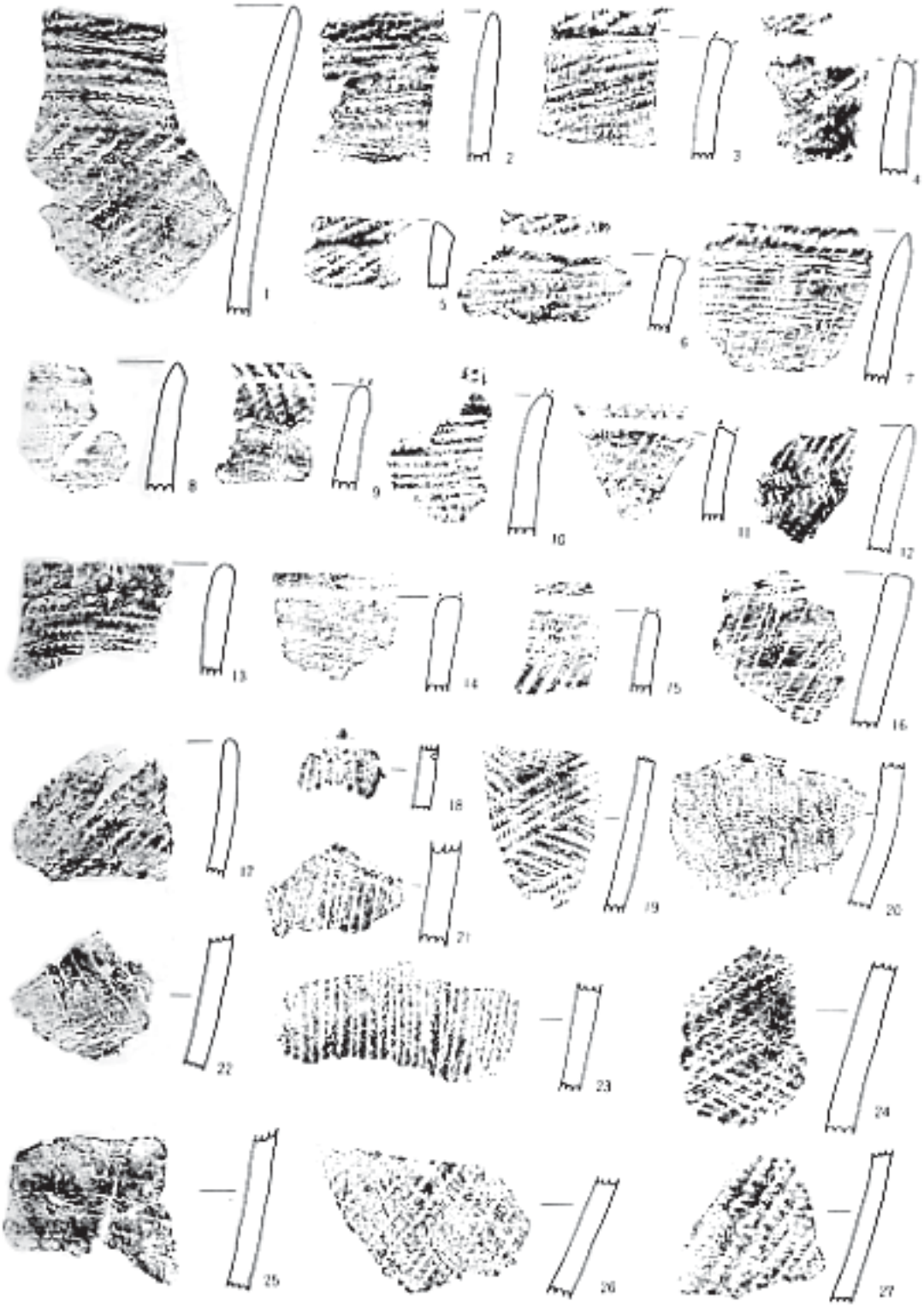
本類土器については、寺の沢式に相当するものと最初に述べたところではあるが、本類のaの如きものも同式に含めることについては問題があるかもしれない。ただし寺の沢式報文の文様模式図中にやや類似のものがあり、また西股遺跡報文第　図　等も類似資料として把えることができよう。(注2)

地文として条痕文を施こしたものはかなりあるが、器内面にまで施こしたものは少ない。第31図4の条痕は、第Ⅳ～Ⅵ類のそれと同様である。

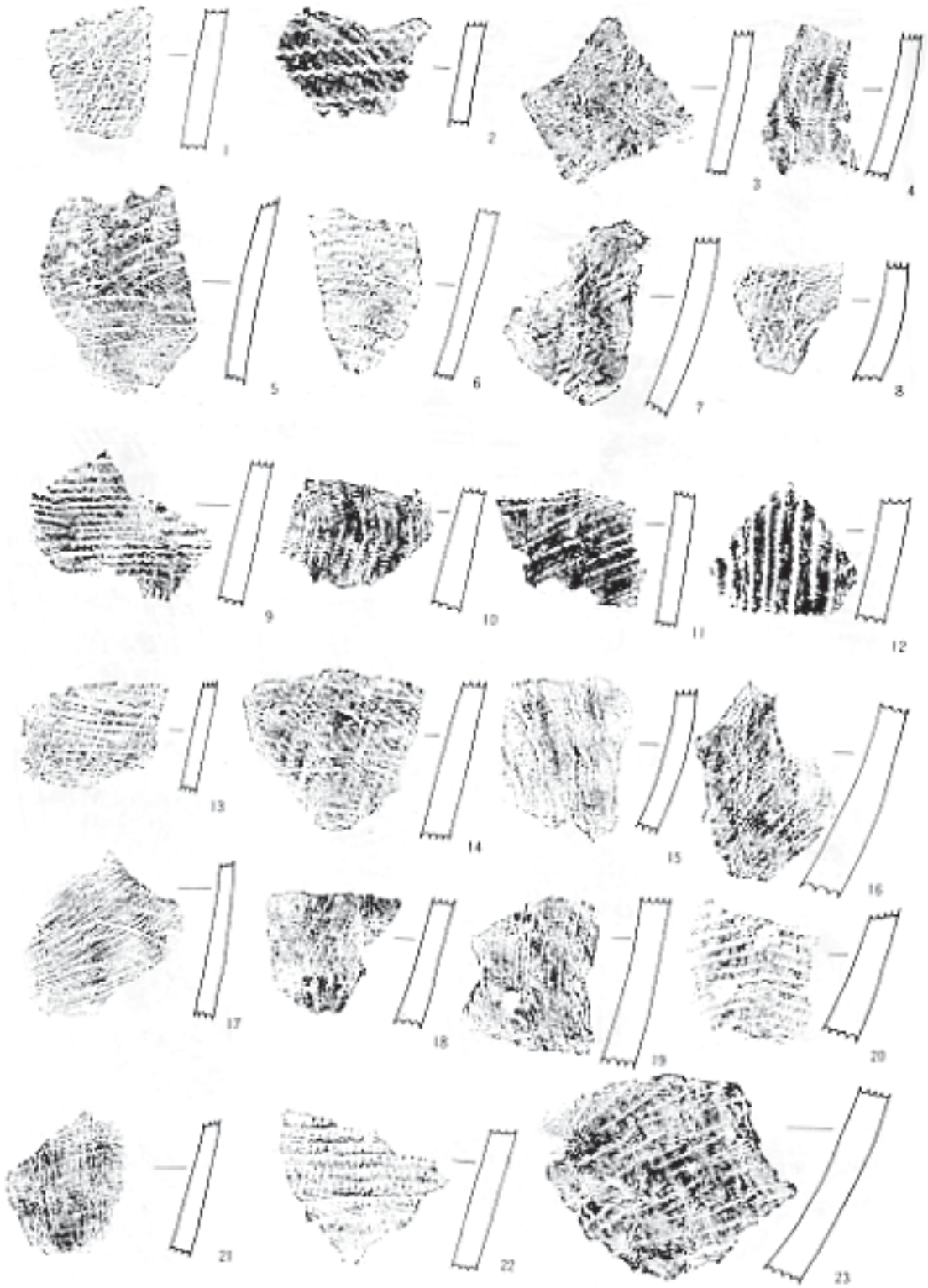
第Ⅱ類土器（第13図～26図、第30図5～18、第31図1～3、6～10、第32図2～11）

本遺跡の早期縄文土器の主体をなすものであり、従来ほとんど知られていなかったため、ここで蛍沢ＡⅡ式と称する土器である。出土数は平箱で10箱を超えている。

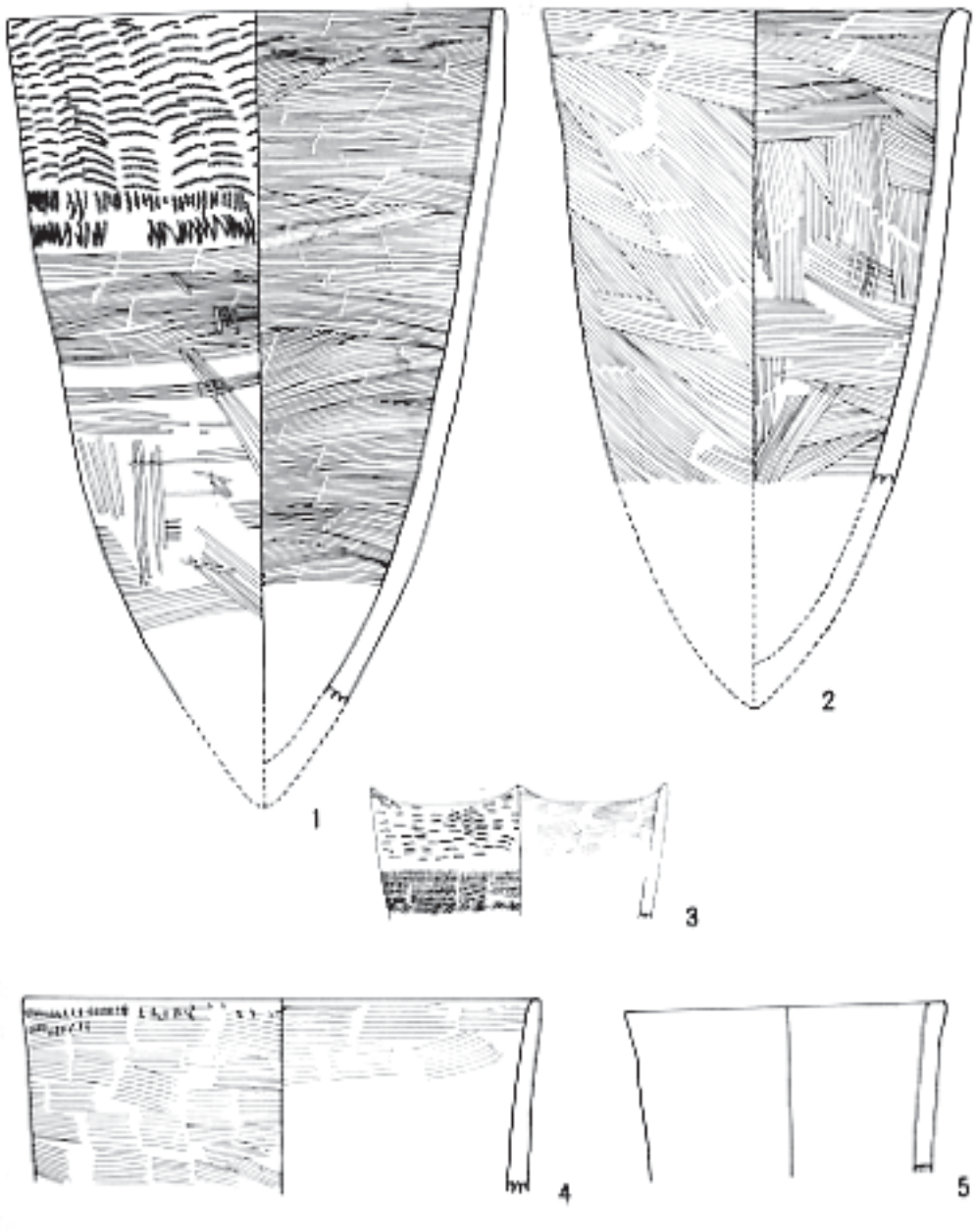
器形は乳頭状突起を有する砲弾形の尖底土器であるが、希れに底部の途中で断ち切ったような平底のものもある（第32図7）。口頸部がやや段状をなすものは若干あるが、明確に屈曲す



第 13 図　土器拓影



第 14 図　土器拓影

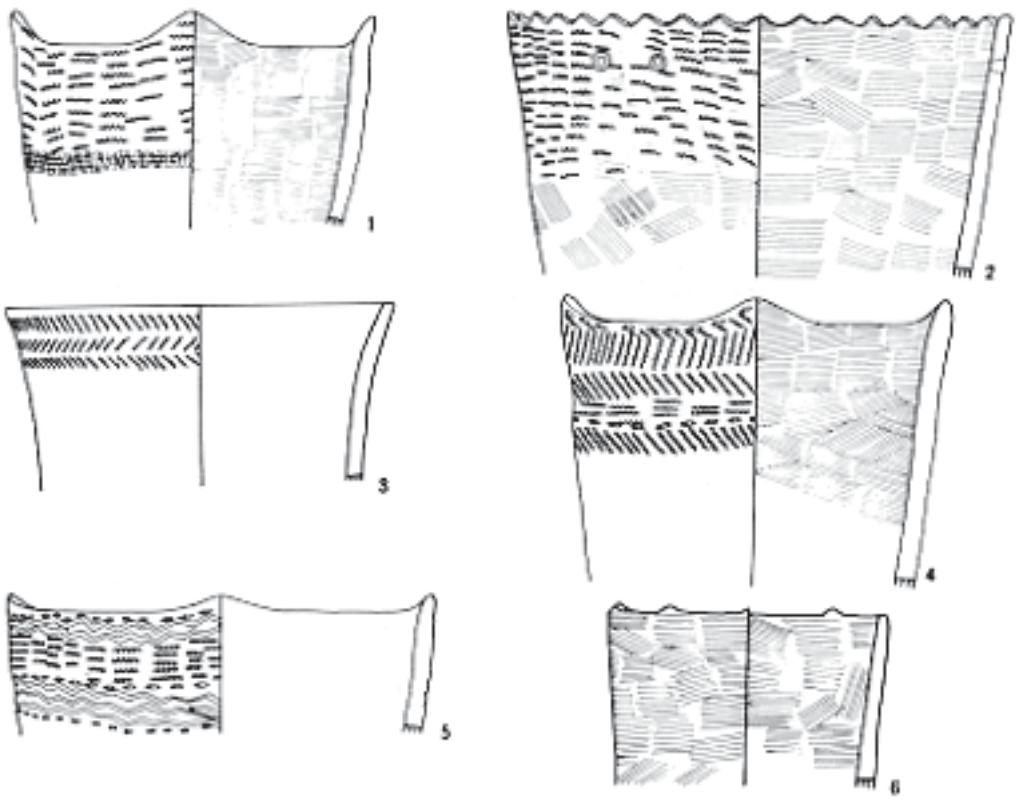


第 15 図　土器実測図

るものはない。

胎土の含有物は、酸化第二鉄、白色凝灰岩末を含むが、植物性繊維を含有するものはない。砂の含有が目立ち、器面の荒れているものが多い。焼成は良好であり、堅い。器厚は、0.5㎝～1.2㎝と様々であるが、平均0.9㎝である。

口唇部形状は、丸味を有するもの、平坦なもの、内側に傾斜するものなど一定しないが、外



第16図　土器実測図

側に傾斜したものはない。口唇上端には何ら手を加えないものがやや多いようであるが、手を加えるものにあっては、竹管ないしは指頭で強く押して口唇をきざみ込み、小さく波立たせたものが多く、本類の大きな特徴の一つとなっている。他に貝殻腹縁文を施文したものや、条痕文を施文したものも少数存在し、希れな例として口唇内側に竹管刺突を加えることがある。平縁のものが多いようである。波状を呈するものにあっては、4ないし5波状である。

口頸部文様帯を構成するものとしないものとでは、前者が多く、その幅は9㎝～1㎝で、5㎝のものが多く一般に狭い。文様は、貝殻腹縁刺突文、貝殻腹縁連続波状文、押し引き文、平行沈線文、連続山形沈線文、刺突文等により構成され、施文具ないしは文様の種類と、その組み合せによって6細分される。口唇部上端の施文は、この細分とは何ら関係なく行なわれている。

a（第15図1．第16図2．3．第17図ただし18は除く、第18図）

切断した貝殻ないしは貝殻のコーナーを用い、刺突文的に横位施文された短かい貝殻腹縁文を有するものである。希れには、第17図10．11のように長い貝殻腹縁のものや、第18図2の如く縦位の貝殻腹縁文を加えたものもある。第15図1は、口頸部文様帯の下部に貝殻腹縁連続波

状文を、第16図1は、同連続波状文を施文する要領で押し引き文を、同図3は押し引き文を、それぞれ施文した例である。

b （第16図3．第19図、第20図－ただし14を除く）

短かい貝殻腹縁によって羽状文を構成するものである。

文様帯下に縞状の条痕文を施こしたもの（第20図1．5）や、波状の条痕文を施こしたもの（第20図15）、連続波状文的手法による押し引き文を1、2段施文したもの（第19図8．20）などがある。口唇上端に貝殻腹縁文を加えたもの（第20図3．8）、口唇内面に竹管刺突を有するもの（第19図16）、同じく内面に羽状の貝殻腹縁文を加えたもの（第20図12．13は同一個体）などがある。

c （第16図5．第21図、第22図）

山形沈線文を有するものであり、口縁に対し平行に数段施文されるのが通例である。これには単独で施文されるものもあるが、他の文様との組み合せによりかなりの変化がある。最も多いのは山形沈線文のみのもの（第21図－15．18を除く）であるが、他に横位の貝殻腹縁刺突文との組み合せのもの（第21図－15．第22図1～6．8～11）、羽状の貝殻腹縁刺突文を有するもの（第22図7．13）、刺突文を有するもの（第22図14～18）、平行沈線文を有するもの（第21図－18）、平行沈線文と刺突文を有するもの（第21図12）などがある。第22図12、14の刺突文は、口縁に対し垂直に施文されたものである。

d （第16図4．第20図14．第23図1～5．14～17．19）

cに含めた以外の刺突文を有するもので、横位の貝殻腹縁刺突文を有するもの（第23図1）斜位の貝殻腹縁刺突文を有するもの（第23図2）羽状に構成された貝殻腹縁文を有するもの（第16図4．第20図14）、横位の貝殻腹縁刺突文と平行沈線文を有するもの（第23図3．5）、刺突文のみのもの（第23図14～17．19）などがある。特に第23図9は、横位の刺突列と斜位の刺突列とで文様を構成するもののようであり、更に、器内面にも刺突列を加えている。

e （第23図6～11）

沈線文により文様を構成するものである。6は口縁に垂直に沈線と斜位の沈線とにより文様を構成するものであり、7は垂直な沈線と横位の沈線により文様を構成している。9および10の沈線文は、刺突しながら引きずったものである。

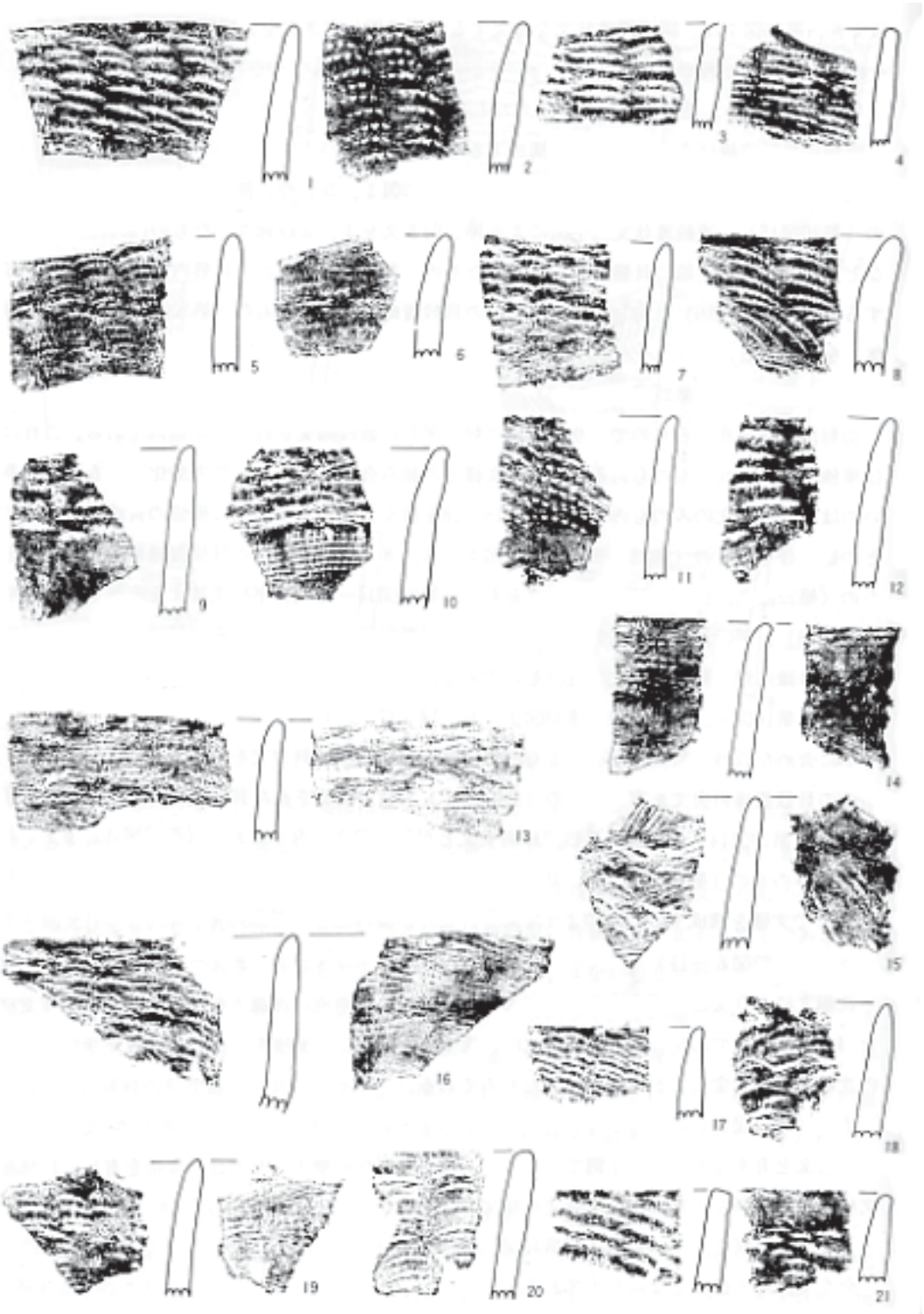
f （第31図10）

隆帯文を有するもので、1例でしかない。波状頂部から垂下した太目の隆帯を有し、口頸部文様帯には、斜位の貝殻腹縁刺突文が施文されている。

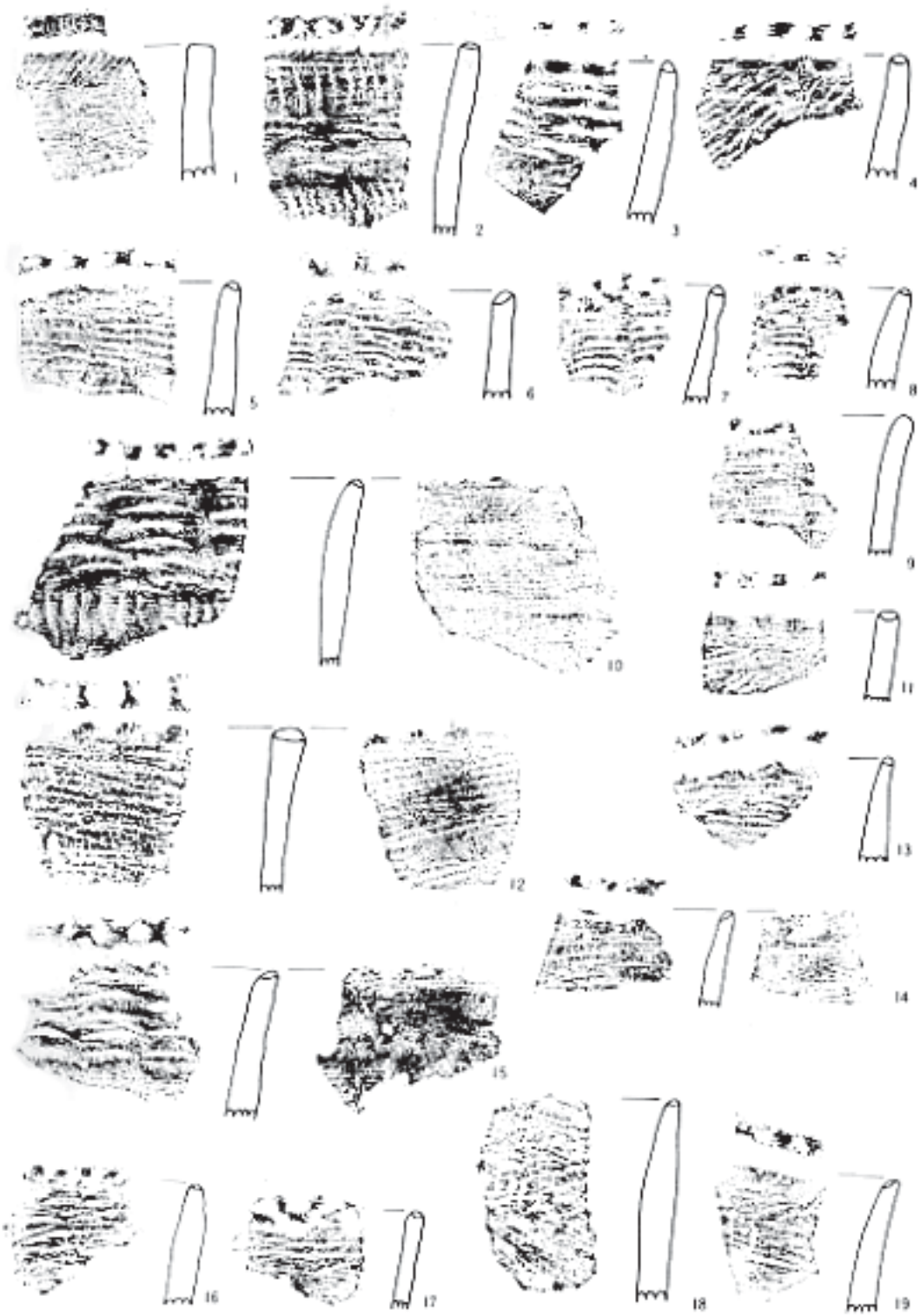
g （第15図2．5．第24図、第25図、第26図）

全く文様帯を構成しないものである。

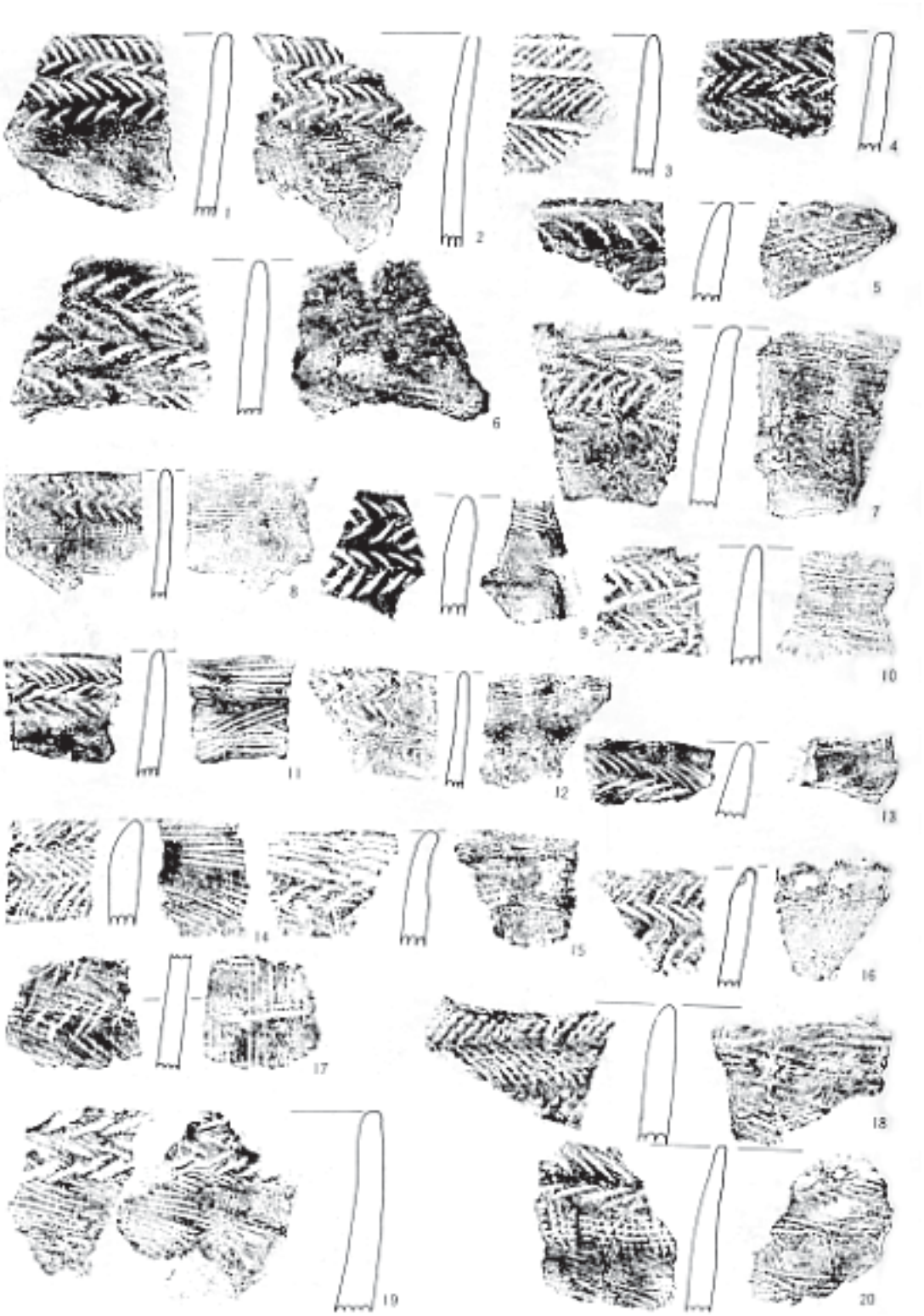
これには全く無文のもの、器表面のみ条痕文を有するもの、表裏両面に条痕文を有するもの、



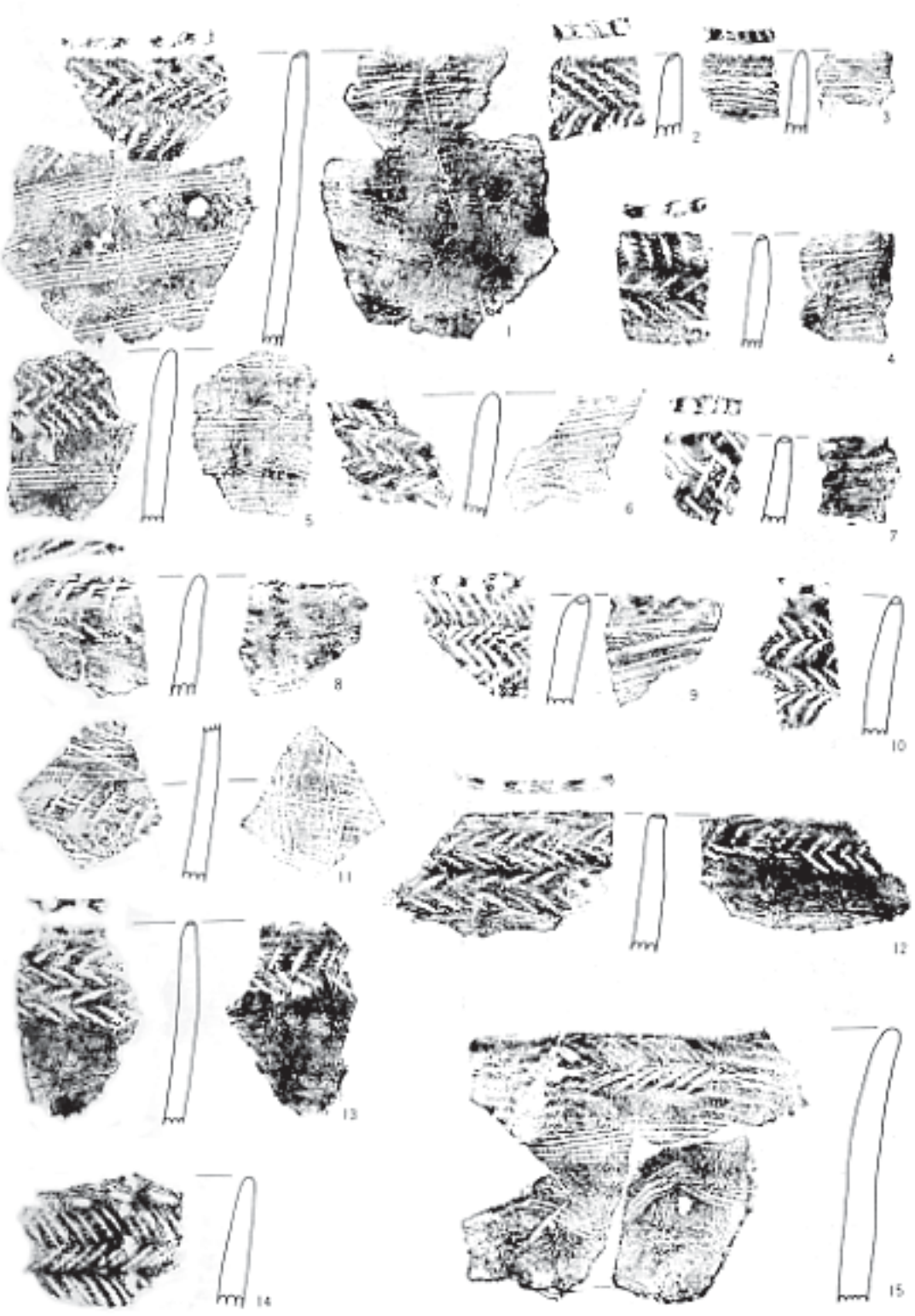
第 17 図　土器拓影



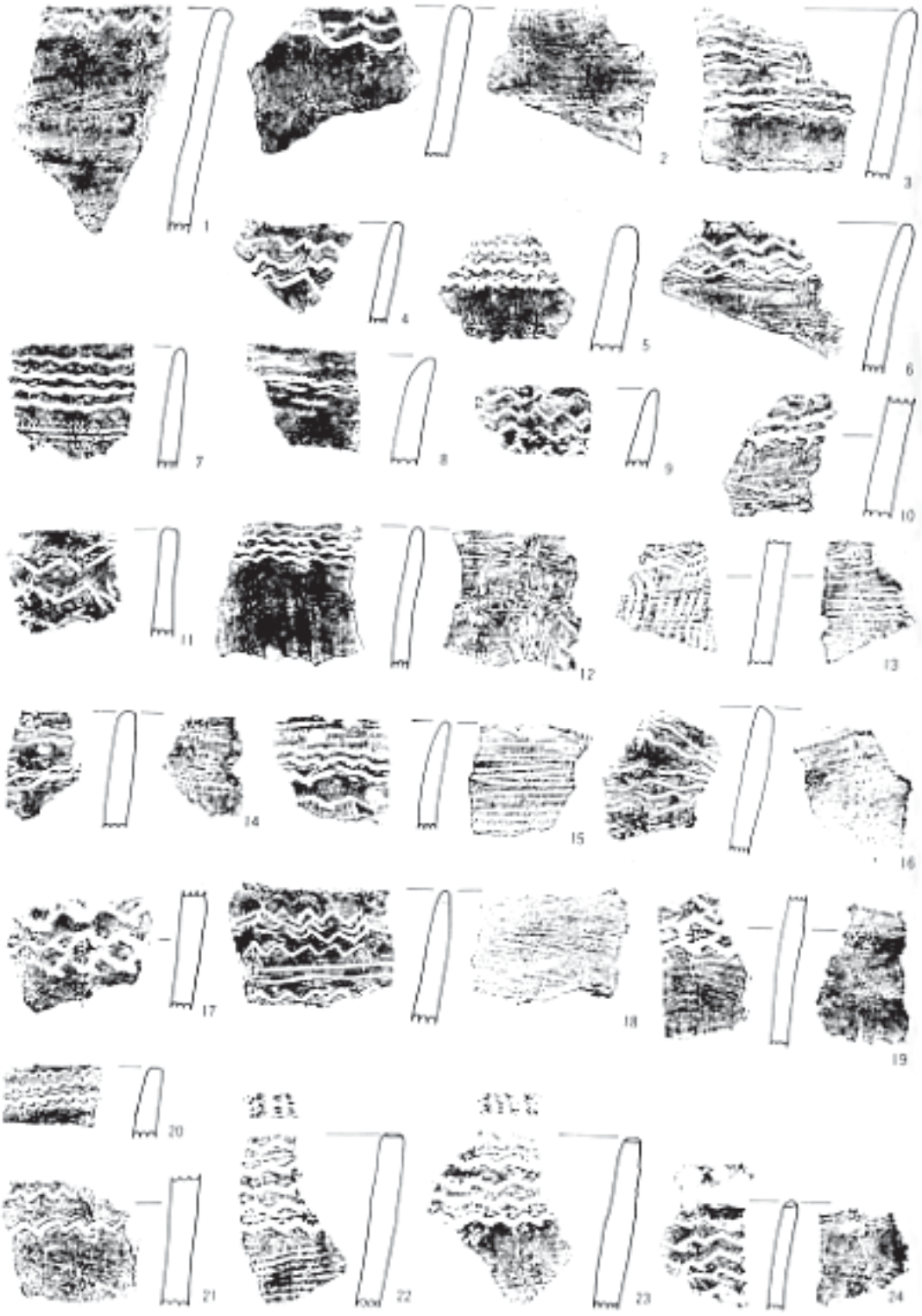
第 18 図　土器拓影



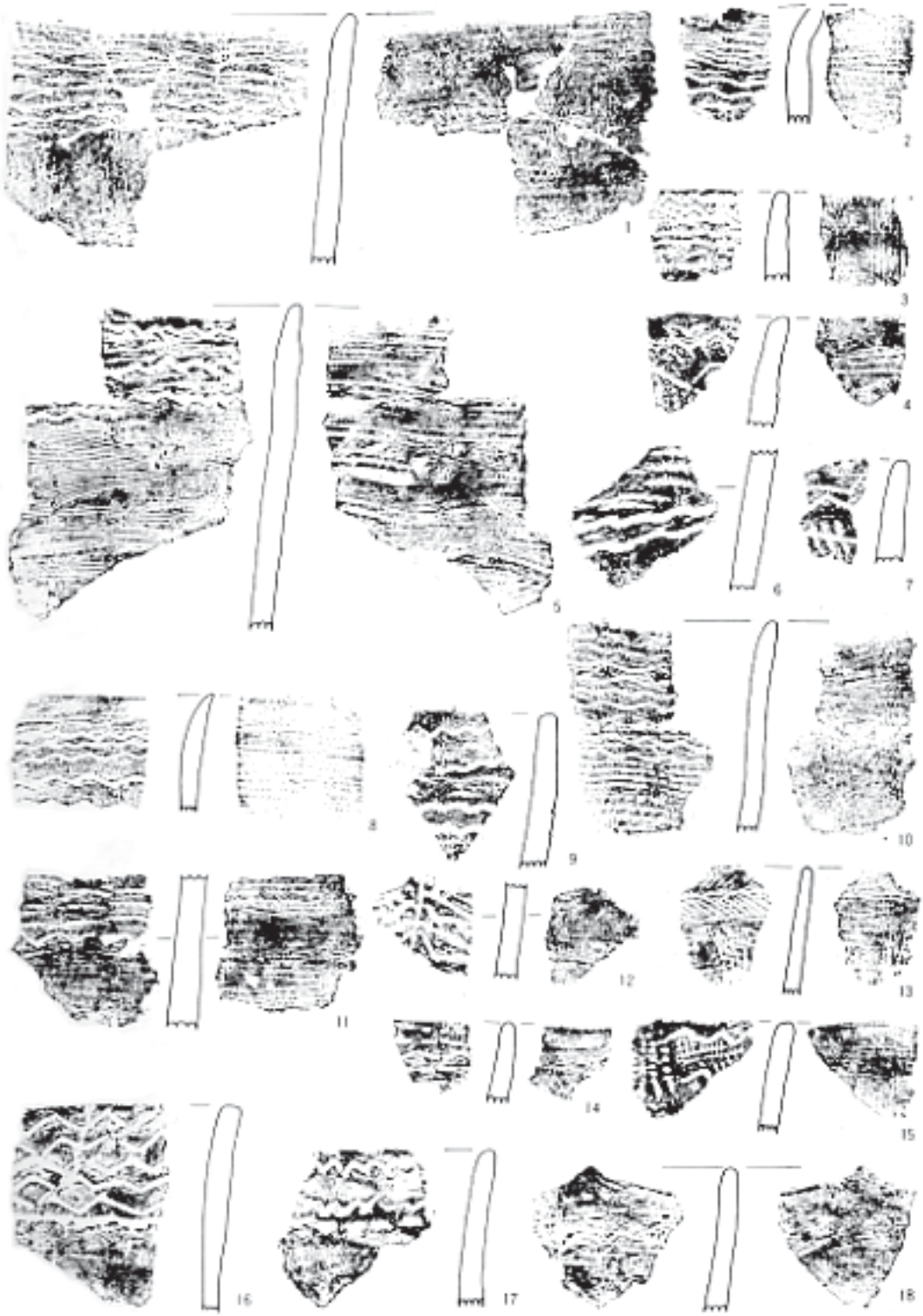
第 19 図　土器拓影



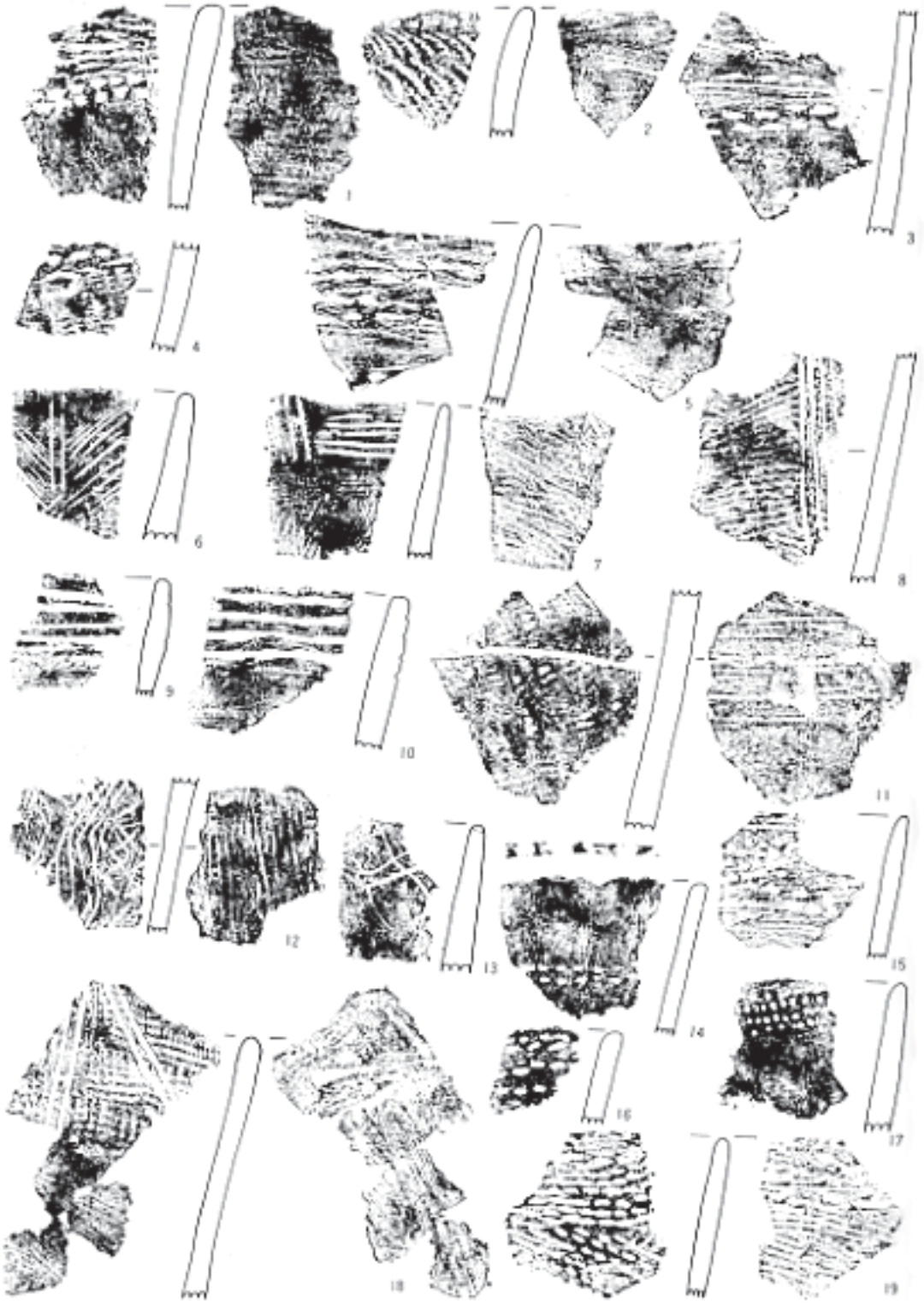
第 20 図　土器拓影



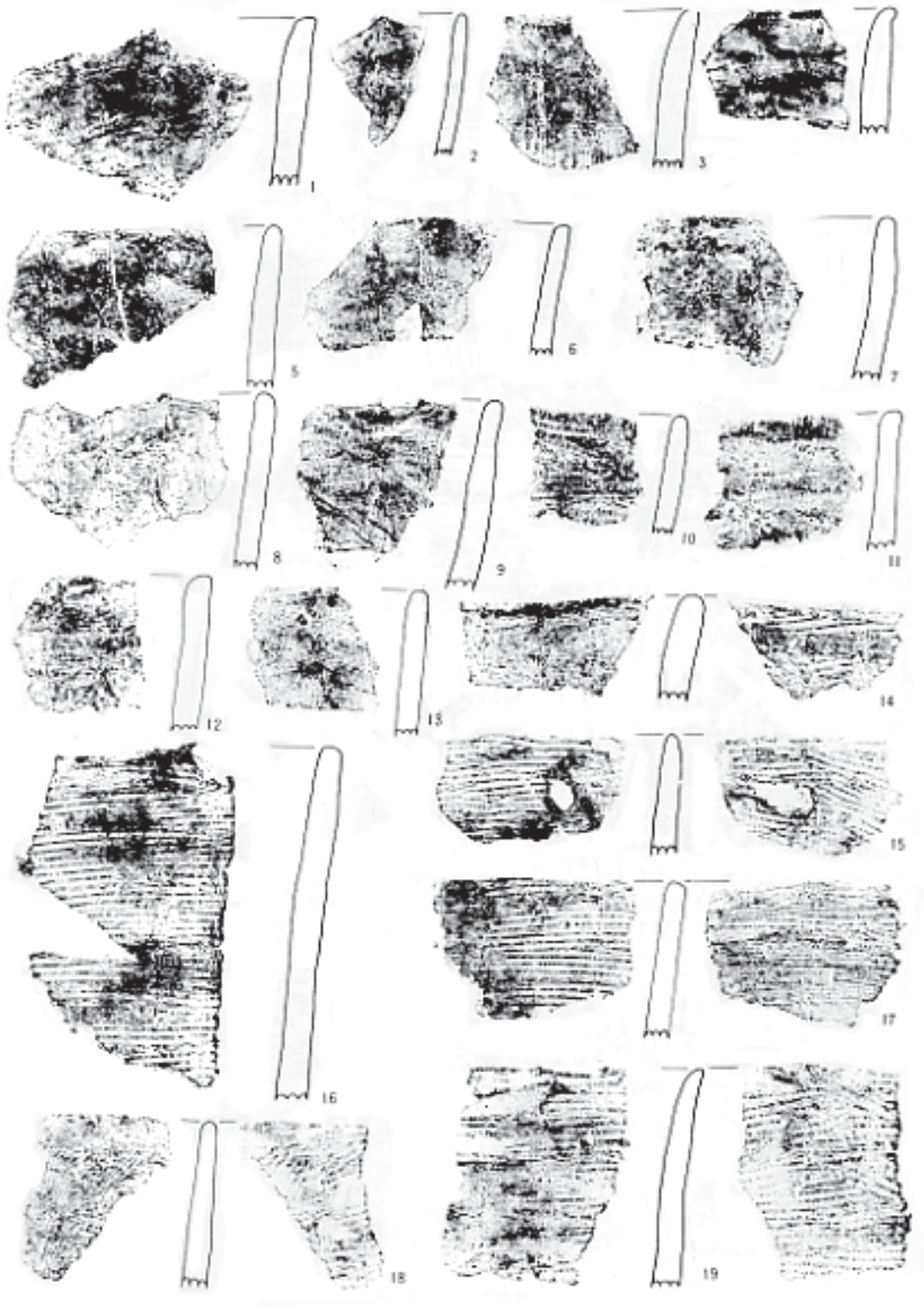
第 21 図　土器拓影



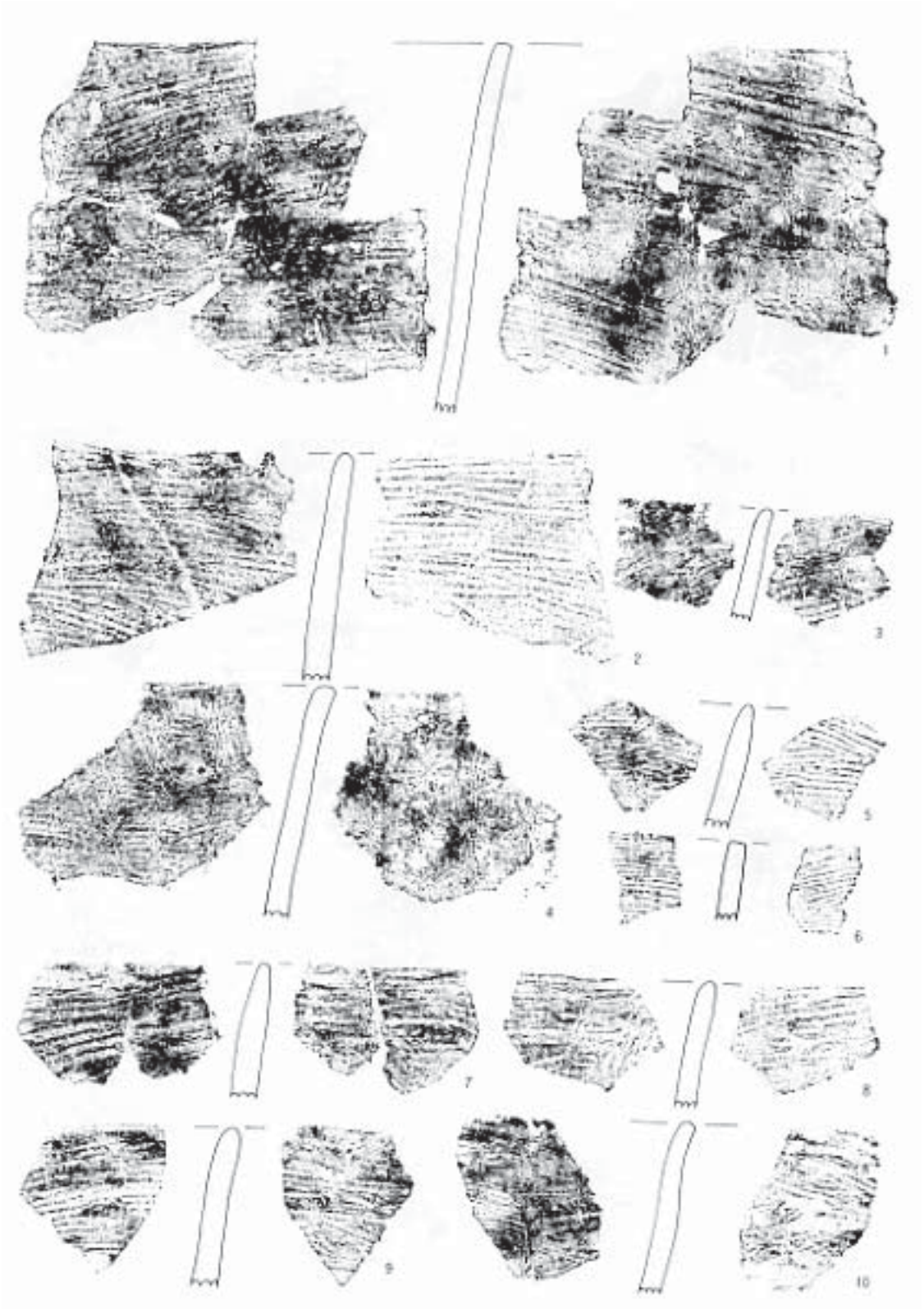
第 22 図　土器拓影



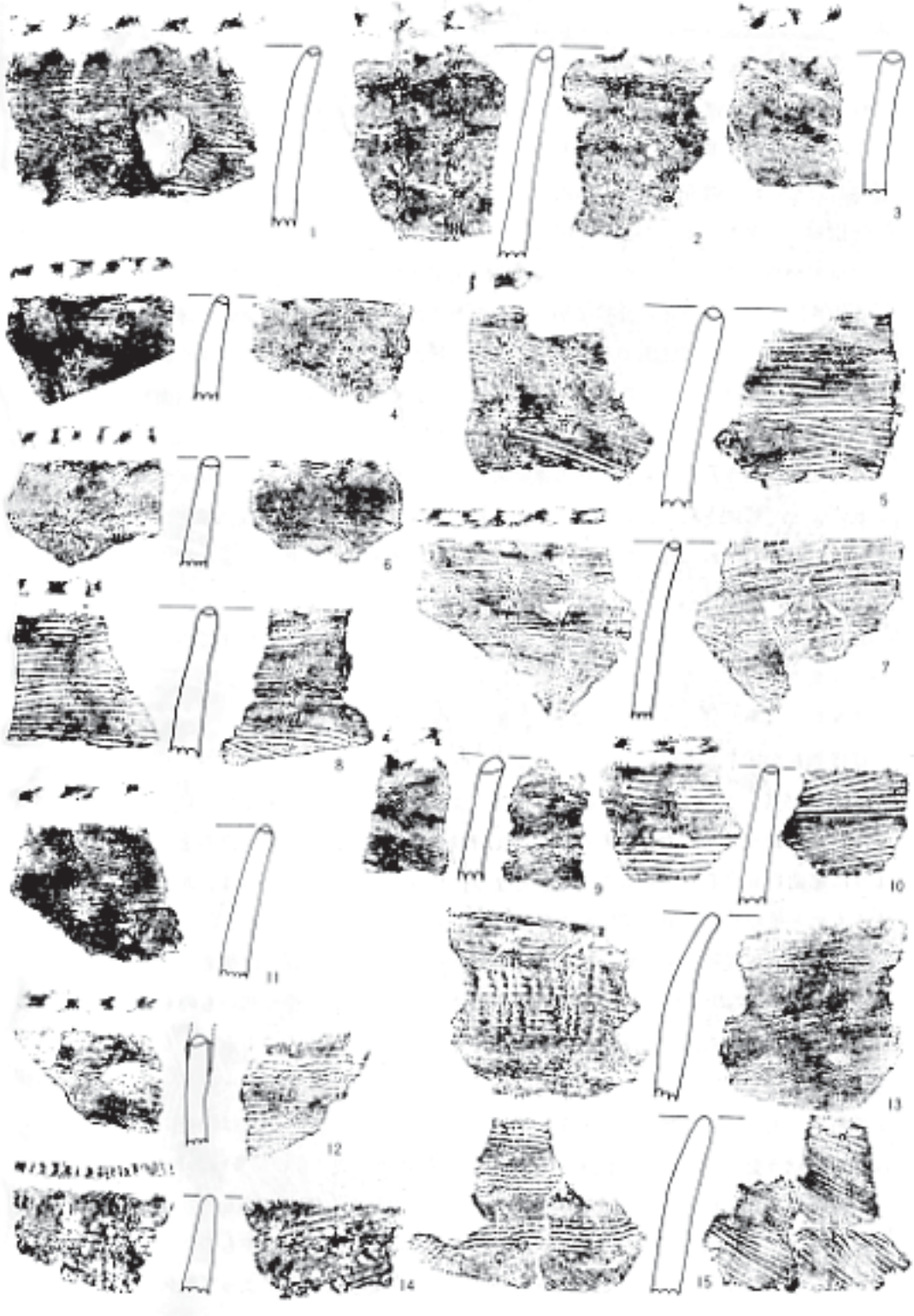
第 23 図　土器拓影



第 24 図　土器拓影



第 25 図　土器拓影



第 26 図　土器拓影

極く一部に貝殻腹縁連続波状文を有するもの（第26図13．14）、同様の手法による縞状の押し引き文を有するもの等がある。

以上の如く口縁部文様は6種に分けられる。これらの文様帯の下位の胴部文様帯は、単に条痕文のみのものが多いが、その最上部に、貝殻腹縁達続波状文や押し引き文を1段ないし2段施文したものが少数存在する。器内面は、圧倒的に条痕文を有するものが多い。

第Ⅲ類　（第27図1～4．第30図19．22）

ほぼ明神裏Ⅲ式に比定し得るものである。1個体分6片。

小破片のみであり、その全容は知り得ないが、波状口縁を有し、また口縁部はキャリパー状を呈し、頸部において屈曲する。底部形状は不明。胎土中に白色凝灰岩未や酸化第二鉄粒子を含む。砂の混入は少ない。器厚は1㎝。焼成は良好であり、緻密で堅い。内面整形は非常によく、光沢を有す。

文様は、連結された「く」字状の連続刺突文と沈線文とが対をなし、幾何学的な構成をなす。これによって区画された部分には、短かな貝殻腹縁文を施文している。頸部の連続された刺突文は、口縁部のそれに比べ明確でない。口唇端には、ヘラ状工具によるキザミが施こされている。

青森県内では、明神裏Ⅲ式に相当する資料の出土例は少なく、これまでのところ青森市大堤から採集された資料のみである(注3)（石岡1973）。

第Ⅳ類（第27図5～18．第28図1．第30図20．21．第32図13）

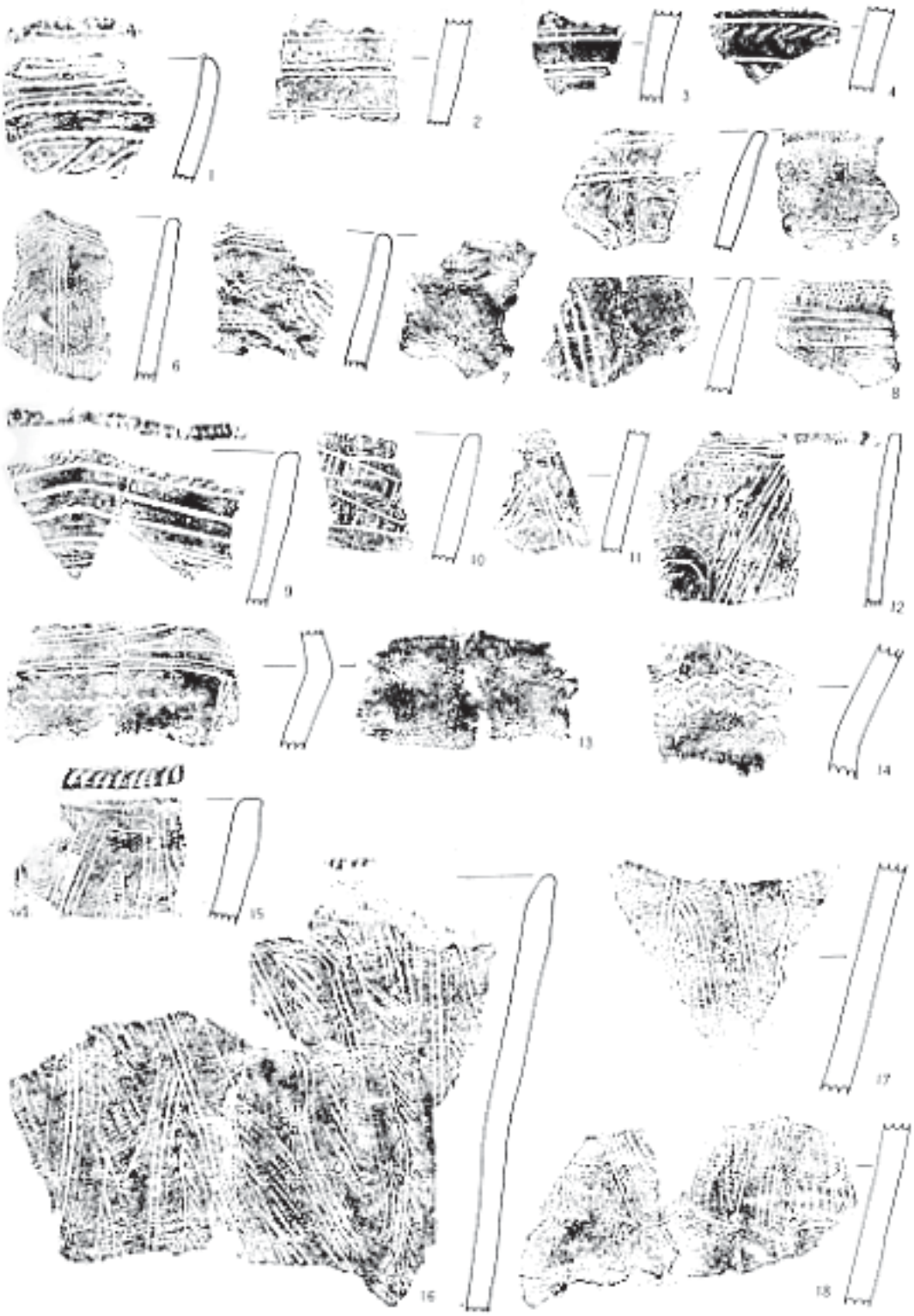
ほぼ物見台式に比定し得るものである。

破片数35片、12個体分である（15～18）は、同一個体で15片あるが、口縁部から底部付近まである比較的大きな土器である。この土器は、緩やかに外反しつつ立ち上がるが、13．14のように屈曲を有するものもある。底部形状は、18および第28図1からは、丸底に近い尖底を呈するものと推際され、第32図13が本類の底部であろう。

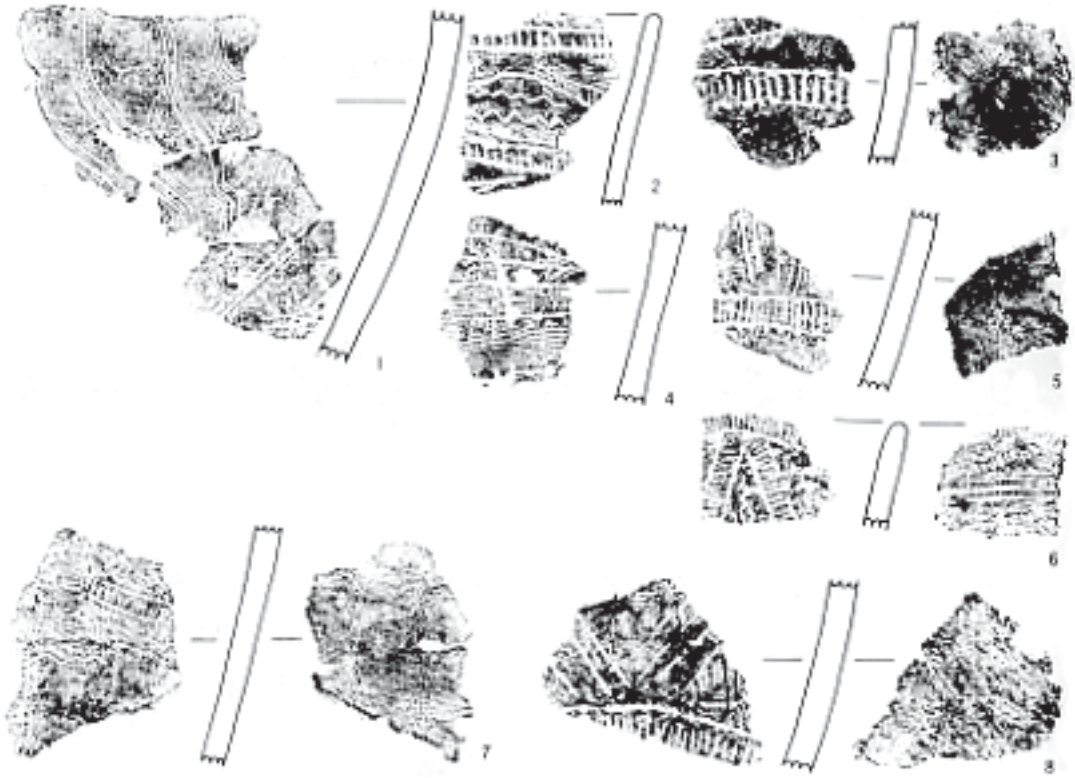
胎土中に白色凝灰岩未や酸化第二鉄粒子を含む。特に（15～18）は後者の大形粒子を多量に含有する。砂粒の含有が比較的多い。焼成は良好であるが、やや脆いものもある。器面整形は良好である。器表面に条痕文が施文されたものは、8・11のみであるが、6と11は同一個体であるため部分的であるらしい。裏面に施こされたものは、5・(6・11)・7・13・第30図1である。条痕は全て幅が1㎜未満の非常に細かなもので、その施文は浅い。8はヘラ状工具による横位の整形痕を有す。器厚は0.7～1.1㎝で、0.8㎝位のものが多い。

口唇部形状は、平坦なものが多く、この上端に貝殻腹縁を施文したもの（9）と、ヘラ状工具によるキザミを加えたもの（15～18）とがある。口縁は波状をなすものが多い。

本類土器の文様帯幅は広く、胴部下半にまで及ぶ。文様は沈線によって幾何学的な文様構成をなした後沈線に沿って、ないしはその上に貝殻腹縁文を施文し、更に沈線の曲りの部分また



第 27 図　土器拓影



第 28 図　土器拓影

は交点上等に刺突を施こすことを大きな特徴とする。しかし、9、(15 ～ 18)、第 28 図 1 の如く沈線文のみで、貝殻腹縁による縁取りを有しないものもある。沈線・貝殻文による区画内を、貝殻腹縁文で充したもの（10．15 ～ 18）と、押し引き文を施文したもの（12）とがある。後者の押し引き文は、貝殻腹縁連続波状文を施文する際と同様な手法によったものである。9は、特に下段の貝殻腹縁文のあり方が第Ⅲ類に類以するが、第Ⅲ類に特徴的な刺突文を欠くので一応本類に含めた。

第Ⅴ類土器　（第 28 図 2 ～ 8）

従来、第Ⅳ類土器つまり物見台式の範疇で考えられていたものであるが、同一視し得ないので一応分離した。8 点、6 個体である。

全て小破片であり、器形、大きさ等その全容は知り得ない。胎土に小礫、白色凝灰岩末、酸化第二鉄粒子、粗い砂粒を含む。焼成が良好で緻密で堅いものもあるが、一般に脆い感がある。器厚は 0.7㎝～ 0.8㎝の問であり、第Ⅳ類よりもやや薄い。器内面に条痕を施こしたものと、そうでないものとがある。条痕には、粗いものと細かなものとがある。

口唇形状は、2例とも平坦であり、その上端には何ら施文はない。また2例とも小波状をなす。6 の口唇内面には、貝殻腹縁文が施文されている。

文様は、沈線、刺突、貝殻腹縁、山形沈線等により構成されている。幾何学的な文様構成をなすが、第Ⅳ類と異なり、直線的な構成をなす。第Ⅳ類と分離した最大の特徴は、貝殻腹縁文による沈線の縁取りがないこと、および沈線を施文後その上に刺突文列を配していることの二点である。沈線・刺突文間には、これと直交する貝殻腹縁文が施文される。4の沈線・刺突文間には、条痕が施こされている。

本類土器の類例は、ムシリ遺跡に1片あり[注4]（江坂1954e）、物見台式土器を多量に出土した千歳遺跡（13）（杉山1976）の資料中からは見出すことが出来ない。

第Ⅵ類　（第29図、第30図23．24）

ムシリⅠ式に比定し得るものである。（江坂1954e）破片数39片、17個体。全て小破片であり、全容を知り得るものはない。

胎土に細砂を含み、白色凝灰岩末や、酸化第二鉄粒子を微量に含む。焼成は良く、徴密である。器厚は0.4～0.7㎝、平均0.5㎝で一般に薄い。全てのものが裏面に条痕を有し、約半数が器表面にも条痕を有す。この条痕には、粗いものと細かなものとがある。

口縁は、平縁のものと波状を呈するものとがあるが、いずれが多いか不明である。口唇部は、丸みを有するものと平坦なものとがある。口唇上端に施文されたものはない。

文様は、沈線文のみのものと刺突文を加えるものと2種類ある。一般に直線的な幾何学文構成、特に三角形を構成することが多い。

a　沈線文のみのもの　（3．4）、13、（16～20）、23～27

13、（16～20）は沈線文により三角形を構成する。胴部文様帯との境には、横位の沈線文を数本巡らす。25、27は沈線により格子目状の文様を描出している。特に25は、右下りの短かい沈線文が特徴的である。

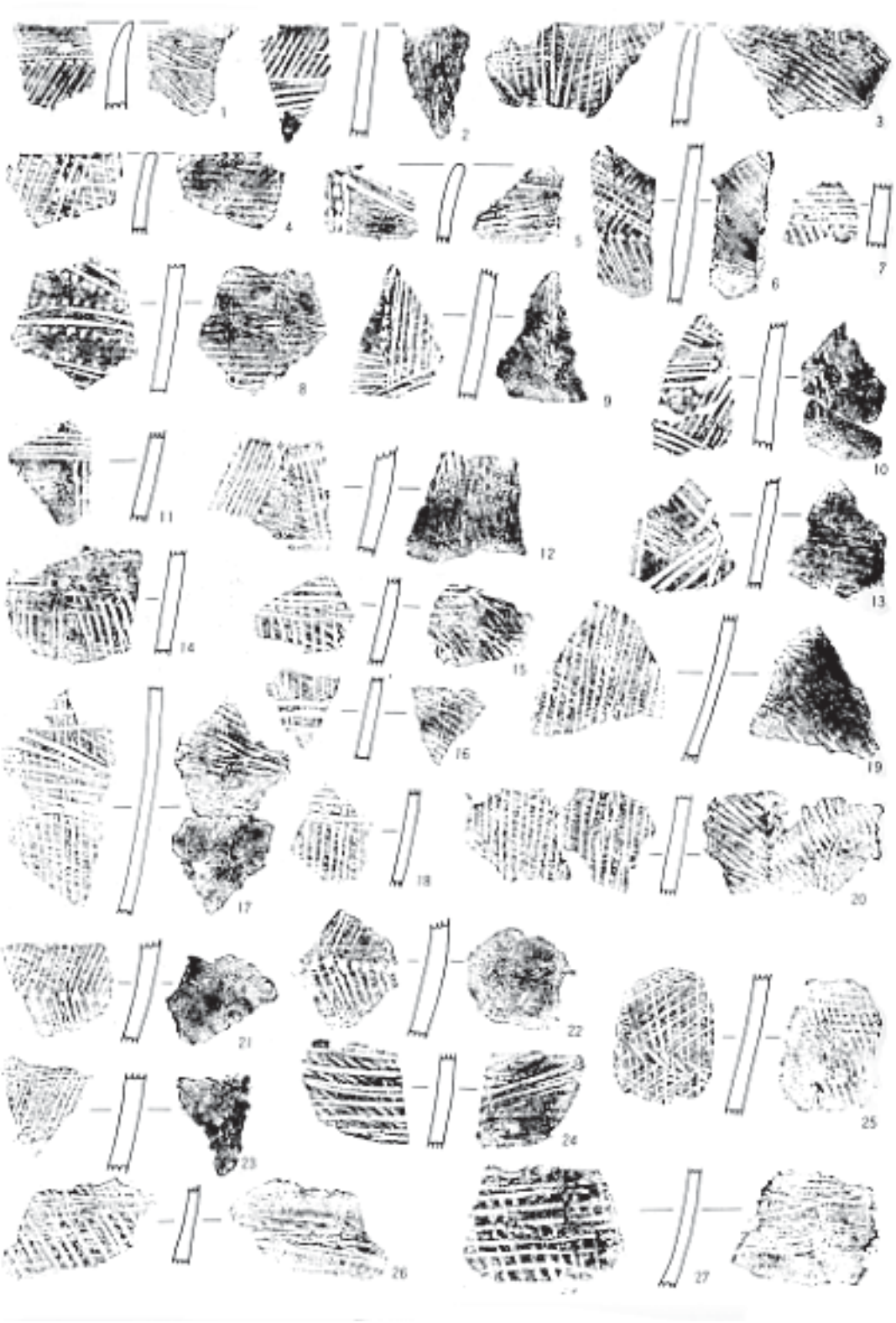
b　沈線文と刺突文とにより文様を構成したもの

（1．6）、（21．22）の4片は、同一個体の可能性を有するが、沈線で羽状文を描出し、方向の変化する接点に刺突文を配列したものである。5．（7．11．14）、8．（9．10．12）は、数本の沈線により主に三角形を構成し、その内側ないし外側の沈線に沿って刺突文列を配したものである。

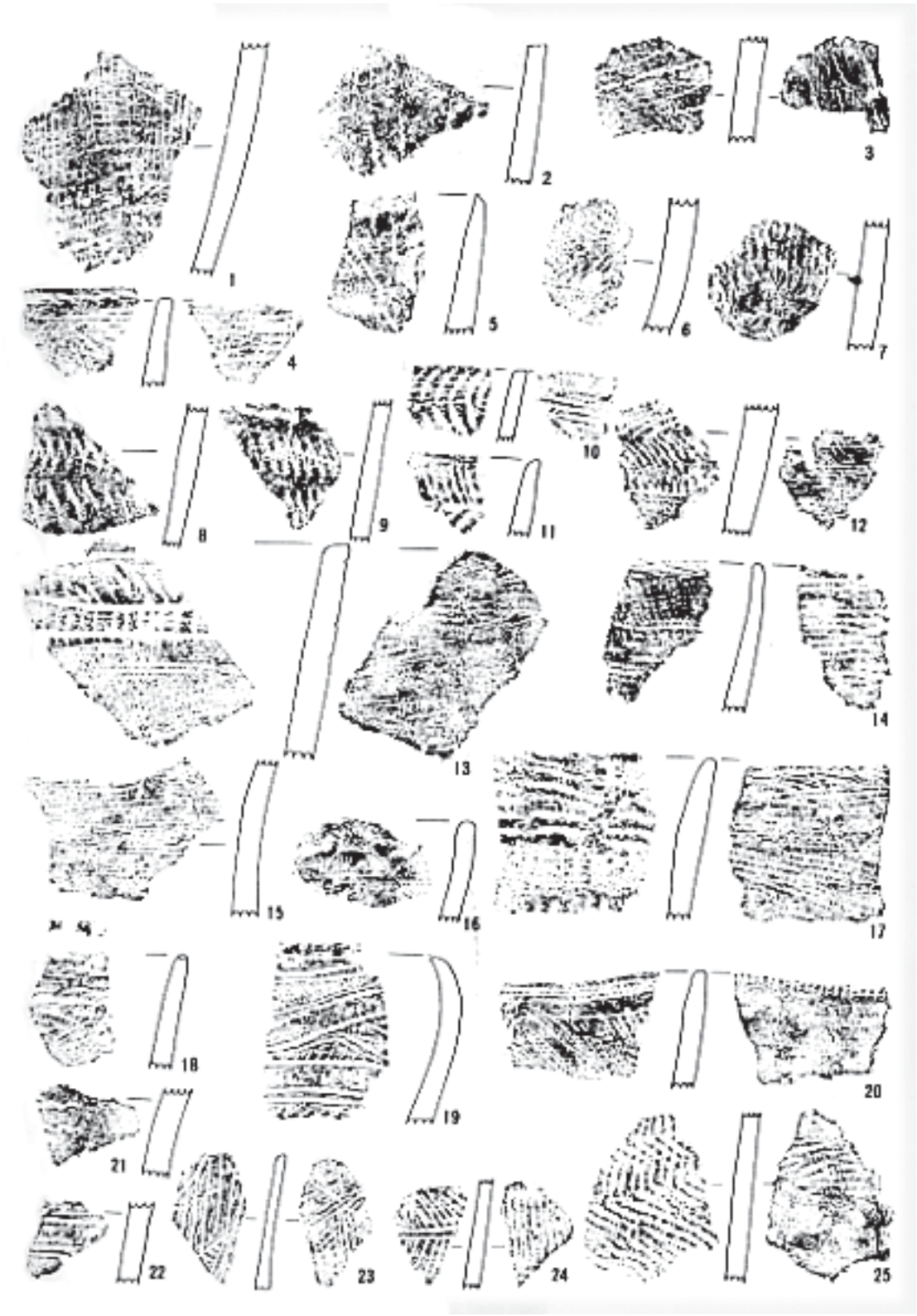
本遺跡出土のムシリⅠ式土器と、ムシリ遺跡、早稲田貝塚（佐藤他1958）出土のそれを比較すると、隆帯文や絡条体圧痕文を欠いていることが注目される。

第Ⅶ類　（第30図25）

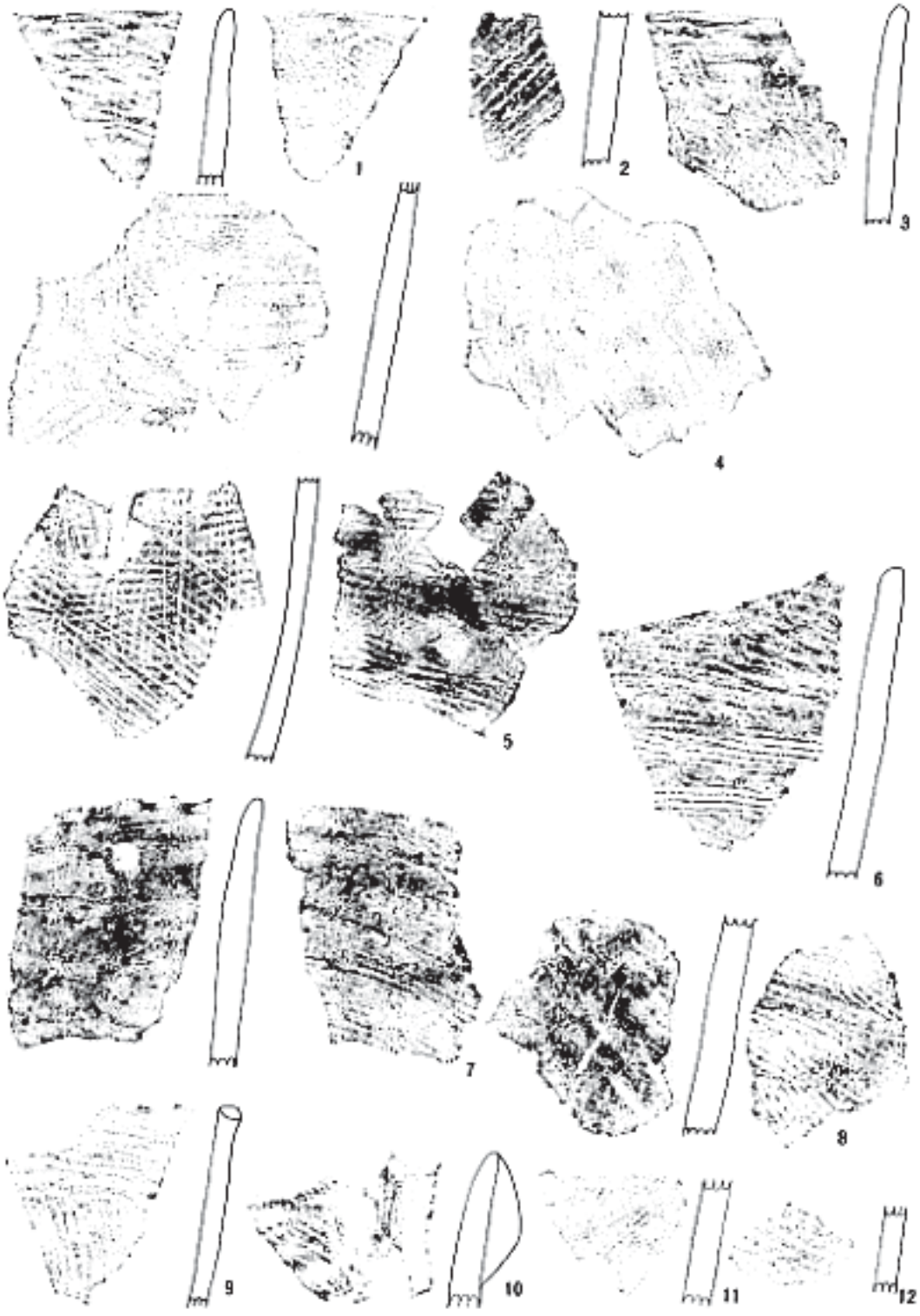
わずか1片の出土をみただけである。色調は赤褐色を呈し、植物性繊維は含有しない。焼成は緻密で堅い。器厚は0.8㎝である。表裏両面とも縄文の施文がある。表面は縄文原体RLを斜位回転施文して条を縦走させる手法と、同一原体の末端を強く押しながら横位回転させる手法を併用し、羽状縄文風に公正している。裏面は細かな条痕文とLLRの縄文を施文している。



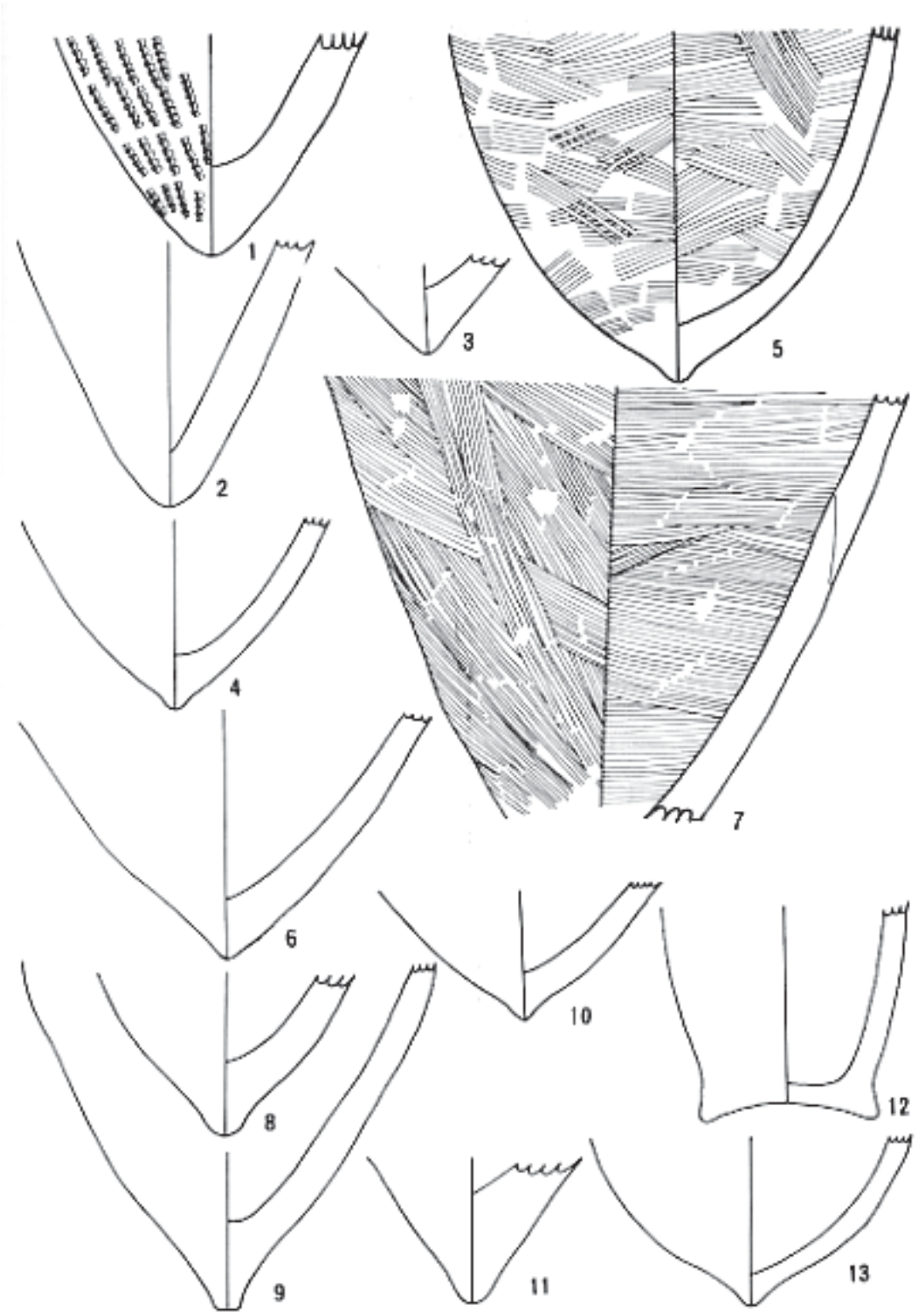
第 29 図　土器拓影



第 30 図　土器拓影



第 31 図　土器拓影



第 32 図　土器実測図

第2節　螢沢ＡⅡ式の成立と編年的位置

本遺跡より出土した早期縄文土器は、第Ⅰ類が寺の沢式（名久井1974）に、第Ⅲ類が明神裏Ⅲ式（林1962，1965，白石市1976）[注5]に、第Ⅳ類が物見台式（江坂1950）に、第Ⅵ類がムシリⅠ類（江坂1954）に第Ⅶ類は早稲田4類にそれぞれ相当しよう。第Ⅴ類は物見台式に最も類似するが、若干の逢いを指摘しうる。これについては後述する。

第Ⅱ類は口頸部文様帯に短かい貝殻腹縁刺突を施文している面において、既知の諸型式の中では吹切沢式（江坂1954）に最も類似しよう。しかし、吹切沢式とは種々異なっており、明確に一線を画することが出来る。

第Ⅱ類の特徴は

1　短かい貝殻腹縁刺突を口縁と平行ないしは斜位に数段施文する。特に後者の場合、圧倒的に羽状をなす。

2　山形沈線文が多用される。これには山形沈線文のみのもの、横位の貝殻腹縁刺突文ないしは刺突文と併用したものがある。

3　無文・条痕文のみで、口頸部に文様帯を構成しないものの比率が高い。

4　口唇部形状は丸みを有するもの、平担なもの、内側に傾斜したものなどがある。しかし、外側に傾斜したものはない。

5　口唇部上端を竹管ないしは指頭によって強く刻み込み、口辺を小刻みに波立たせたものが約半数を占める。希に口縁部内面に貝殻腹縁刺突文、竹管刺突文等を施文したものがある。

6　貝殻腹縁連続波状文や押し引き文の施文されたものは非常に少なく、また施文されたものにあってもその部位は胴部上半に限られる。

7　胴部および器内面は、圧倒的に条痕文が施文される。

8　器形は屈曲のない砲弾形尖底土器であり、底部は乳頭状を呈するものが多い。希に平底のものもある。

以上の8点に要約されよう。

この第Ⅱ類土器と吹切沢式土器とを比較すると

第1点　吹切沢遺跡、早稲田貝塚第Ⅰ類（佐藤他1958）、下田代納屋Ｂ遺跡（三宅他1976）等に貝殻腹縁刺突文を羽状に構成するものが1～2点存在する。しかし、縦位に数段施文されるのが一般的である。

第2点　山形沈線文は吹切沢遺跡には存在しないようであり、他の2遺跡においても極く少数でしかない。

第3点　下田代納屋Ｂ遺跡では、口縁部を有する72個体中、文様帯を溝成しないものが19個体

存在したが、全く無文ないし条痕のみのものは2個体しかない。早稲田Ⅰ類では、口縁部9例中、文様帯を構成するものが2例のみである。しかし、無文・条痕文のものは存在しないようである。吹切沢遺跡については不明であるが、やはり少ないらしい。

第4点　口唇部形状については、平坦なもの、丸みを有するものは各遺跡に共通する。しかし、下田代納屋B遺跡では、他に外側に傾斜するものがかなり存在したものの、逆に内側に傾斜した例はない。

第5点　口唇部上端の施文は、下田代納屋B遺跡の場合貝殻腹縁刺突文が一般的であり、他に竹管刺突・絡条体圧痕文が少数ある。早稲田Ⅰ類では9例中6例が何らかの施文を行なっている。しかし、口縁を刻み込むほど強く施文されたものはない。また、指頭によるものも存在しない。

第6・7点　貝殻腹縁連続波状文は吹切沢式に主要なものであり、諸特徴のうち最も重要で胴部全面に施文されるのが通例である。押し引き文はあまり多くない。ただし早稲田Ⅰ類では、体部無文としたものが多く、下田代納屋B遺跡と異なる。

以上のように螢沢Ⅱ類は明確に異なるが、更に螢沢Ⅱ類では絡条体圧痕文を欠き、隆帯文はわずか1例でしかない。絡条体圧痕文は吹切沢式においても少ないのであるが、これを欠くことは注目される。また、隆帯文は下田代納屋B遺跡では20%のものが有している。

以上のことから、先に掲げた諸特徴を有するものを螢沢AⅡ式と呼ぶこととしたい[注6]。

次に、螢沢AⅡ式の編年的位置、つまり吹切沢式との前後関係を明らかにしなければならないが、そのためには従来より常に問題とされてきた物見台式との関係を除外して考えることはできない。更に、名久井文明氏が述べた吹切沢式を物見台式は別系統であるとする見解（名久井1974）、また、石岡憲雄氏が述べた下田代納屋Bと日戸、寺の沢例を地域差であるとする見解とも大きく関係することである（石岡1974）。しかし、これらについては後述し、白浜式→寺の沢式→吹切沢式とする名久井氏の見解を妥当と考えているので、先ず、この編年序列における位置付けを考えることとする。

これまで幾度か述べてきたように、口頸部文様の類似から吹切沢式に類似するものであり、また、胴部および器内面に条痕文が施文されるものが圧倒的であることからも、器内面に条痕文をあまり施文しない寺の沢例以前に位置付けられるものではない。螢沢Ⅱ式の位置を考える上で最も重要なことは、胴部装飾である。寺の沢例における胴部施文は、主に斜方向の貝殻腹縁文を全面に施文するものが多く、これに極く少数の貝殻腹縁連続波状文が存在する。吹切沢式では、貝殻腹縁連続波状文を全面に施文するものが多く、少数の押し引き文が存在する。胴部を条痕文ないしは無文化する螢沢Ⅱ式が、寺の沢式と吹切沢式の間に介在する余地はないのである。そしてまた、押し引き文の施文方法を観察すると、貝殻の背面を寝かせぎみにして連続波状文を施文する要領で行なったものと、条痕文を施文するように引きずる際に、一旦、押してから引きずり、これを細かに連動させるものとがある。いずれが多いかは不明であるが、

下田代納屋B遺跡の貝殻腹縁連続波状文には、その施文幅が非常に狭いものがかなり見受けられる。つまり、寺の沢式における斜位の貝殻腹縁文から、その施文操作を簡略化した貝殻腹縁連続波状文が生じ、更にこの手法の中から貝殻の腹縁の有するギザギザを表現しない押し引き文が生したと考えるのである。これは、小林達雄氏が述べた「手ぬきの方向性」（小林1966）の貝殻文版として理解されよう。

螢沢AⅡ式は貝殻腹縁連続波状文と押し引き文との両者を有するもののいずれも少量であり、かといって寺の沢式における斜位の貝殻腹縁文を施文したものもない。そのため、螢沢AⅡ式が寺の沢式に後続して、両文様を生む母胎となったとは考え難く、この面からも吹切沢式に後続するものとしての位置が与えられる。このことはまた、螢沢AⅡ式と同様、胴部に貝殻腹縁連続波状文を施文せず、口頸部文様帯に同連続波状文や押し引き文を有する住吉町下層A式や物見台式などにも当てはまろう。そして、住吉町下層A式における貝殻背面圧痕文もまた、手ぬきの方向性のなかで位置付けられるものと考えるのである。

第3節　石器・石製品

本節で取り扱った石器・石製品は、早期の土坑より土器とともに出土した石器、早期に特徴的な石器と見做得るもの、および従来知られている石製品中にはなく、その出土・分布状況から早期の石製品ではないかと推察されるものである。

1、トランシェ様石器（第33図，第34図1～5）

トランシェ様石器は、芹沢長介氏により「刃部の剥離は石器自体が石核からはがされる前に、すでにでき上っていたもののようである。(略) ヨーロッパの中石器時代のカンピニー文化の特徴とされているために、カンピニー斧あるいは扁平ともいわれる。日本では東北地方あるいは北海道の早期縄文文化のある時期に、これとよく似た石器が伴なうらしいが、詳細は不明である」と紹介されたことから注目されるにいたった（芹沢1957)。しかし出土例がきわめて少ないことからその後論考されることがなかったが、富樫泰時氏は本資料の集成を行ない詳細な観察に基づいて論考を行なっている（富樫1976)。

本遺跡より出土したトランシェ様石器は、計16点である。各石器の所属時期を断定することは不可能であるが､早期縄文土器の主体をなす蛍沢AⅡ式に伴なったものと考えて大過ないであろう。ただし土器の分布状況を若干なりとも考慮するならば、第33図6および第34図1は寺の沢式に伴なった可能性を有している。

刃部巾は1.5㎝～4.8㎝で平均3㎝、長さは4.8㎝～9.2㎝で平均6.4㎝である。完形品における刃部巾と長さとの比率は1：1.4～1：3.6であり、平均は1：2.4である。また主要剥離面と刃部とのなす角度は44°～75°で、平均は54°である。重量は9g～51gで平均25gである。

形態には富樫氏分類によるA類－両側辺がほぼ直線をなすもの－第33図2～8、B類－両側辺がくびれて撥形をなすもの－第33図10・11. 第34図1・2、C類－両側辺がややふくらみを有するもの第34図3～5の各類がある。この他第33図1・9のように一側辺が直線をなし、他側辺がふくらみを有するものがあり、これをD類としておく。

刃部は直線的なものが多い。しかし少数ながら第33図9、第34図1・2のように湾曲するものがある。また刃部は片刃であり、この石器の最も厚い部分は刃部である第1次剥離面の最も奥の部分にあるのが一般的である。

表裏両面とも両側辺からの調製剥離がなされるが、特に表面のそれは中央部にまで達し、刃部をなす第1次剥離面以外の既設の剥離面はほとんど残されていない。これに対し裏面は、主要剥離面がかなり広く残されているものが多い。

使用痕は、第33図6の刃部が「トロトロ」に磨滅して丸くなっている他、全てのものに刃こぼれが認められる。また第33図10は表面の右側辺から裏面へ、ちょうど彫器の刃部を作出すると同様の剥離がなされている。

第 33 図　石器実測図

第 34 図　石器実測図

スクレーパー（第34図6・8）

大形のフレークの縁辺に若干のリタッチを加えて刃部を作出したきわめて単純なものである。（6）は第87号土坑、（8）は第112号土坑より出土したものである。

石斧（第34図9・10）

2点とも材質は碧玉、いわゆる錦石である。（9）は両側辺に1ヶ所づつ、（10）は2ヶ所づつの切り込みが設けられており、従来の石斧にない特徴ある作りである。これは柄に固定するため縄をかける溝と考えられ、この2ヶの石斧はともに手斧として用いられたものであろう。（9）は片刃となっているが、破損後再加工した結果である。（10）は第87号土坑から（9）は試掘調査時に出土したものである。重量は（9）が50.5g、（10）が71.8gである。

磨石（第35図）

自然礫の側辺に磨痕を有するものであるが、これには三角柱状のもの（A類）とやや扁平なもの（B類）とがある。A類には図の(1)～(4).(7).(8)の6点が含まれるが、4以外は二側辺以上に磨痕を有し、更に(1)・(3)・(8)は三側辺に磨痕を有し、そのうちの一ないし二側辺には使用角度を異にした面が存在している。なお（3）は（9）の石皿の上に乗った状態で出土した。

B類の使用面は、一側辺のみであるが、特に（10）は磨滅痕に接して小さな剥離が見られる。このような使用痕は円筒土器に伴う半円状扁平打製石器の刃部と反対側に往往にして認められるものであるが、従来磨滅痕のみ注目され、この小さな剥離痕には注意が払われていない。これは単に擦るだけではなく、小きざみに敲打することによって生じたものと考えられる。

礫石錘（第36図）

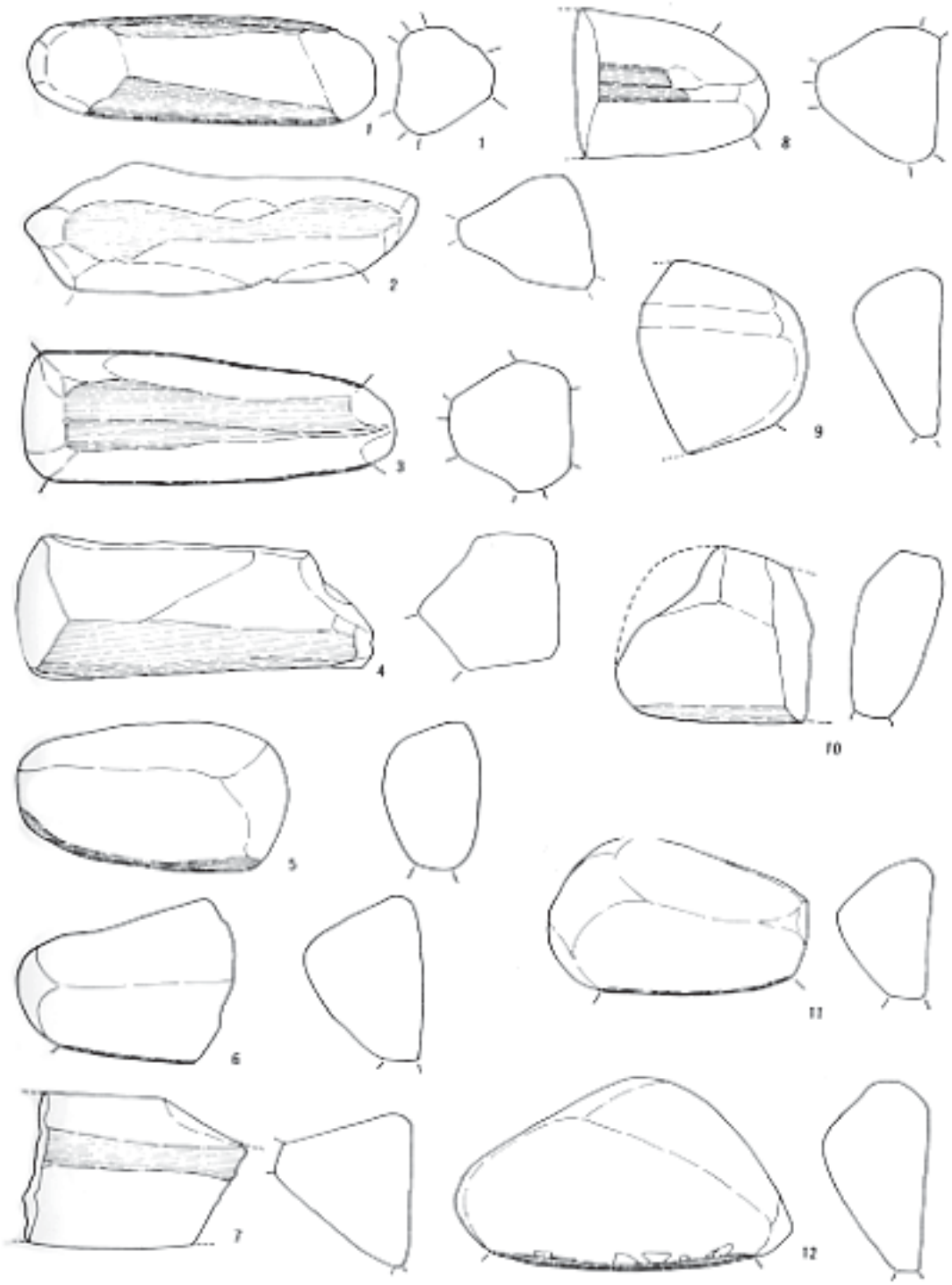
自然礫の長軸の両端を打ち欠いたもので、土坑内より早期縄文土器に伴出したものは6点である。（1～4）は第77土坑、（5・6）は第78土坑内より出土したものである。（1）は片面にのみ縦横の擦痕を有する。

石皿（第36図9）

磨石（3）と組みで出土したものである。扁平な自然礫の周囲を打ち欠き、手ごろな大きさに仕上げたもので、片面だけが利用されている。

有孔石製品（第37図）

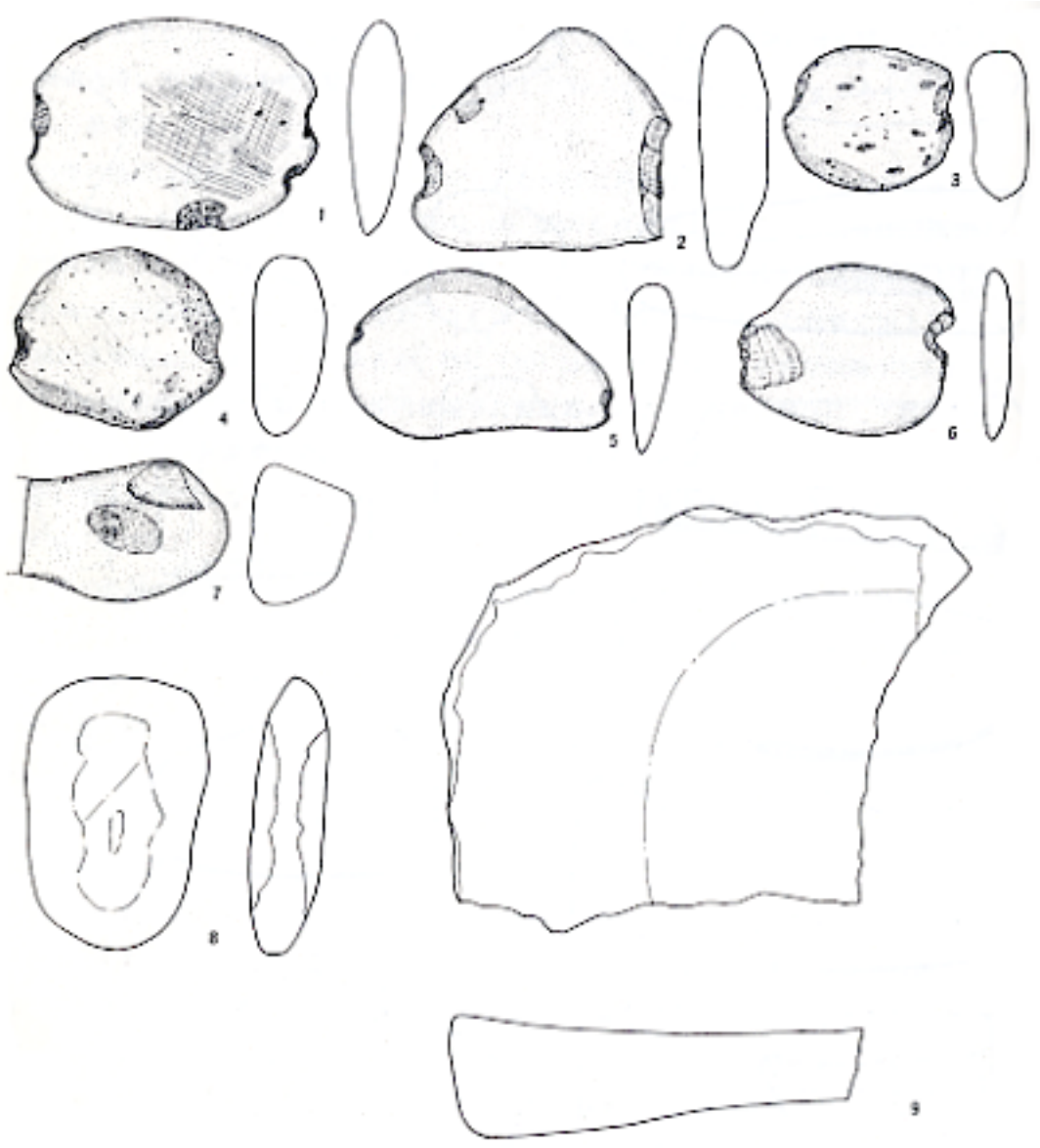
石質は全て凝灰岩であり、扁平な自然礫、または扁平に加工した卵形ないしは長楕円形の石の中央からやや上方に両面から孔を穿っているものである。この種の石製品を早期の遺物として取り扱ったのは、本石製品の多くが早期縄文土器の分布密集地帯から出土したことと、(1)に山形沈線文を彫刻していることの2点からである。つまり「山形」の文様モチーフを用いる型式は、早期の吹切沢式から物見台式に到る間、円筒上層A式および田舎館式前後の各型式であるが、本遺跡からは円筒上層A式はほとんど検出されておらず、また田舎館式以降に編年される弥生式土器はその分布を異にする。このことから（1）を早期の遺物と認定したのであり、(1)との類似性から2以下をも早期の遺物と推定した。（2）は礫石錘の如く長軸上の両端



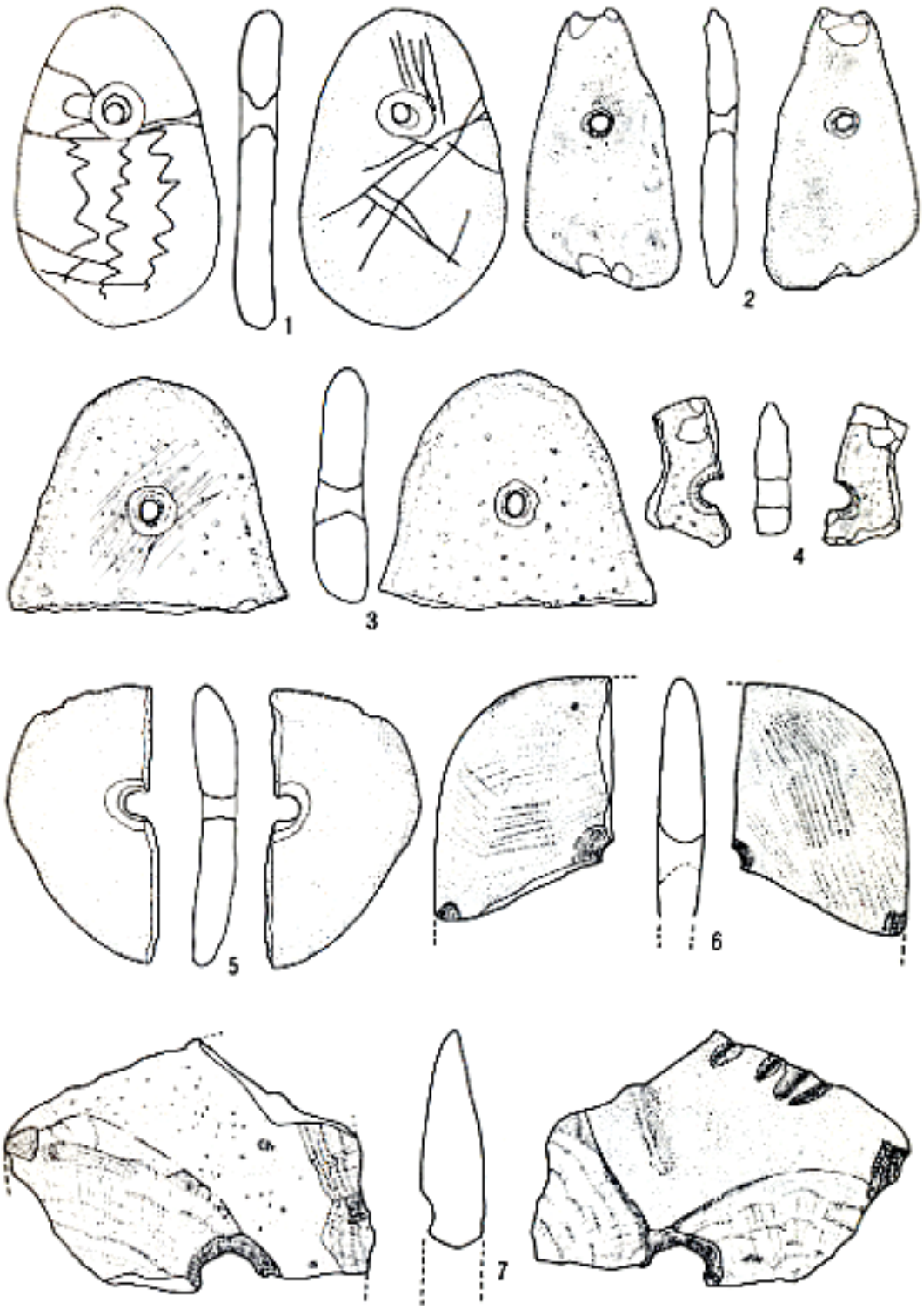
第 35 図　石器実測図

に打ち欠きを有する。(3) は欠損品であり、表面の孔の付近に擦痕を有する。(5) (6) も欠損品であるが、縁辺部および表裏両面は整形によっており、特に (6) はそのための擦痕が明瞭である。

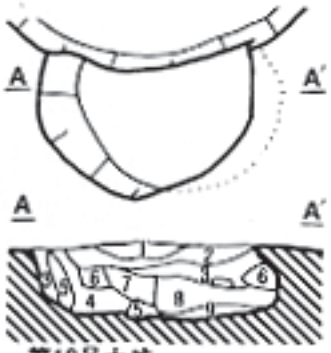
本石製品の用途は、やや大きいが、護符的なものと推定されよう。



第 36 図　石器実測図



第 37 図　石器実測図

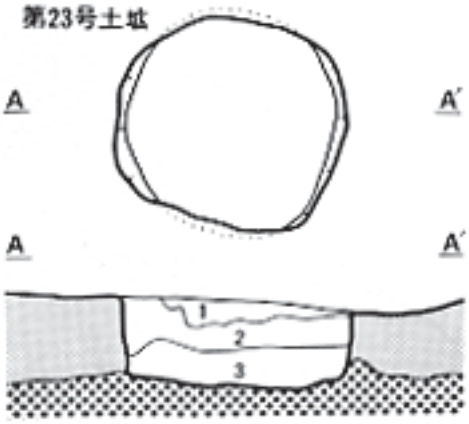


第18号土坑

第18号土坑（K－２）
径85cm、深さ30cmのほぼ円形を呈する土坑であるが、第17土坑により南西側が切られている。
土坑内より乳房状の尖底部が出土している（第32図13）が、これは物見台式の尖底部と推察される。

第１層　黒色土　微量のローム粒子を含む。
第２層　黄褐色土　少量のローム粒子と炭化物を含む。
第３層　黒色土　少量のローム粒子を含む。
第４層　暗褐色土　少量のローム粒子と軽石を含む。
第５層　明褐色土　多量のローム粒子を含む。
第６層　明褐色土　ローム粒子を含む。
第７層　黒色土　少量のローム粒子と軽石を含む。
第８層　暗褐色土　多量の粘土粒子と炭化物を含む。
第９層　明褐色土　少量のローム粒子を含む。

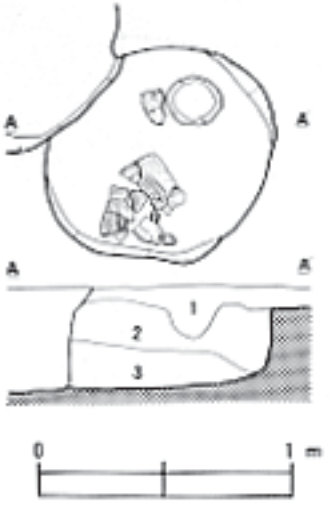
第23号土坑



第23号土坑（L－11）
径90cm、深さ30cmのやや隅丸方形を呈する小土坑である。土坑内より遺物は出土しなかったが、堆積している土層から早期の土坑と推定される。

第１層　暗褐色土
第２層　褐色土　砂粒・軽石を含む
第３層　黒褐色土　ローム粒子を含む

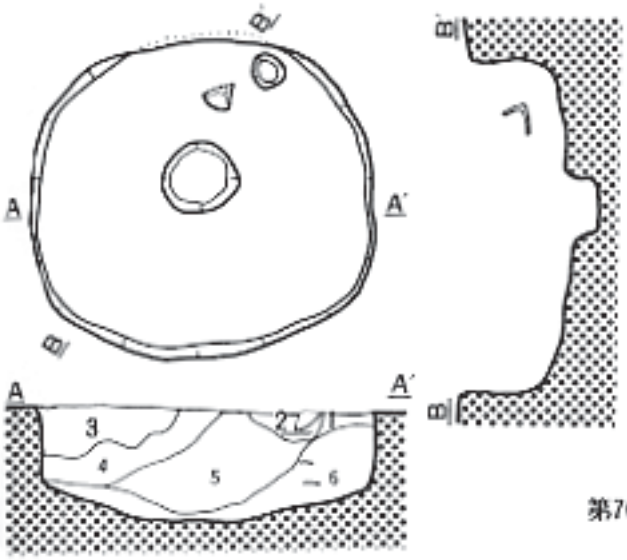
第62号土坑



第62号土坑（H－８）
深さ35cm、径1.1ｍのほぼ円形をなす小土坑である。第２層下部から、口径23cm、推定高37.5cmの、表裏とも条痕文のみの雀沢ＡⅡ式土器（第15図２）が出土した。

第１層　暗褐色土　細砂を含む。堅くしまっている。
第２層　明褐色土　細砂・炭化物を含み、暗褐色土がブロック状に混入している。
第３層　暗褐色土　細砂・炭化物を含み、明褐色土がブロック状に混入している。

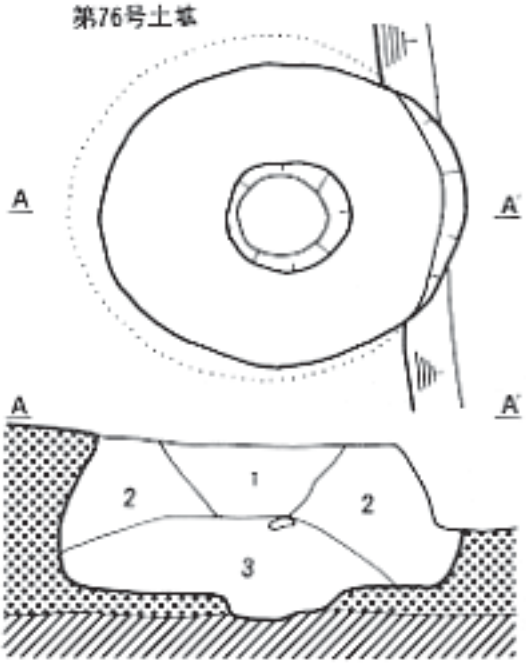
第 38 図　土坑実測図



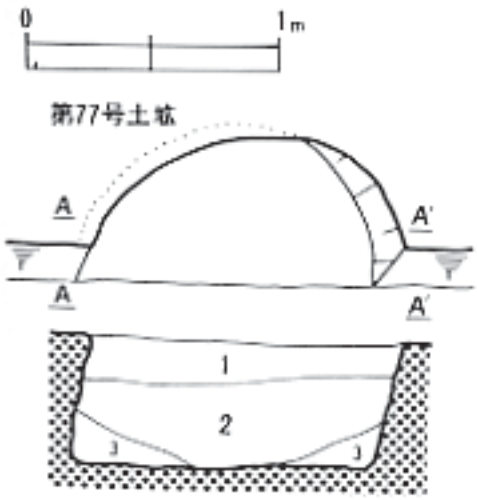
第75号土坑

第75号土坑（G－7）
深さ30cm、径1ｍ30cmのほぼ円形をなす土坑である。底部に径30cm、深さ15cmの小ピットを有する。蛍沢AⅡ式土器の尖底部2点（第32図5・6）出土した。
第1層　茶褐色土　微量の火山灰を含む。
第2層　茶褐色　第1層に比べ軟かい
第3層　黄褐色土　微量の火山灰を含む。
第4層　褐色土　少量の火山灰、炭化物を含む。
第5層　暗褐色土　多量の火山灰、炭化物を含む。
第6層　褐色土　少量の火山灰を含む。

第76号土坑



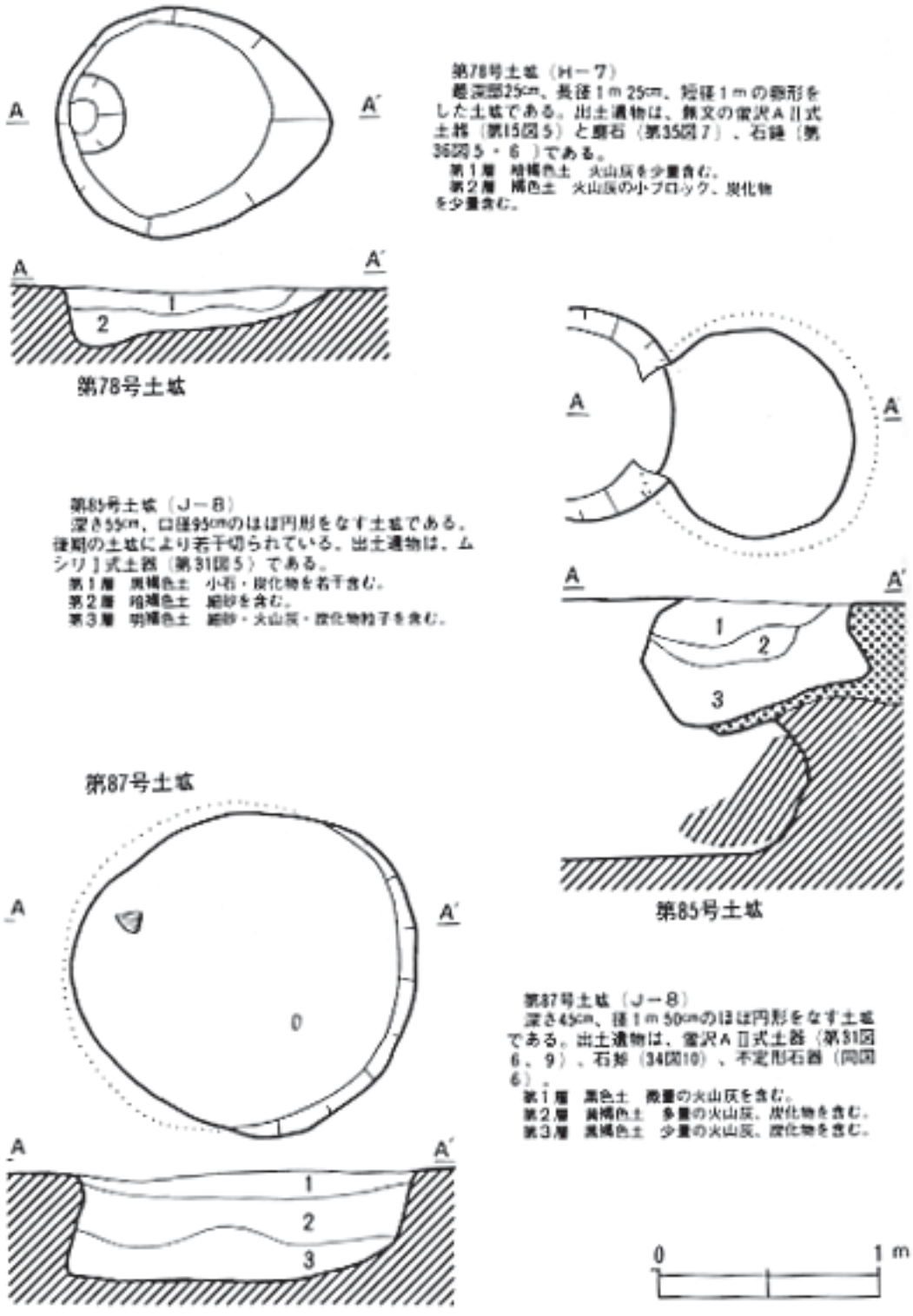
第76号土坑（G－7）
底径1ｍ50cm、深さ60cmのいわゆるフラスコ状ピットである。底部に第75号と同様小ピットを有する。出土遺物は、寺の沢式土器（第31図2）と、蛍沢AⅡ式土器（第31図3）である。
第1層　黄褐色土　火山灰粒子をかなり含む。
第2層　暗褐色土　細かな火山灰粒子を多量に含む。
第3層　暗褐色土　多量の火山灰粒子、炭化物を多量に含む。



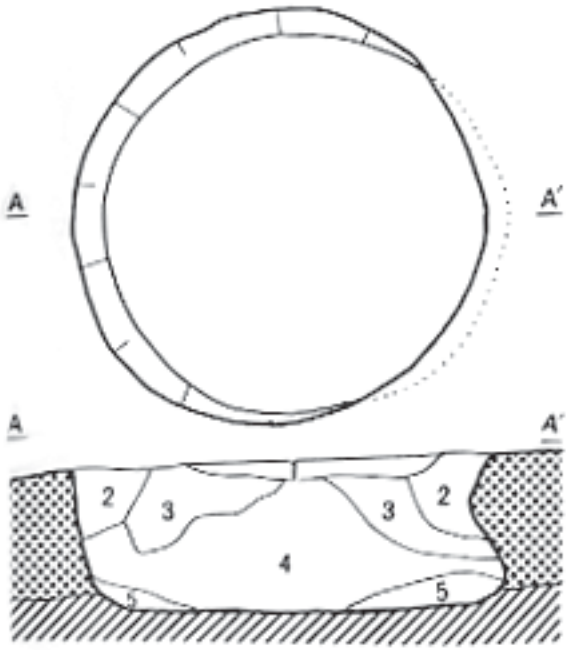
第77号土坑

第77号土坑（H－8）
深さ50cm、径は約1ｍ20cmのほぼ円形をなす。と考えられる。壁ゴウにより半分以上破壊されている。出土遺物は、寺の沢式類似の第Ⅰ類bとした土器（第31図4）および石鋒（第36図1～4）である。他に自然礫を多数含んでいた。
土層は、堆積状況は異なるものの、その特徴はほとんど同一である。

第39図　土坑実測図

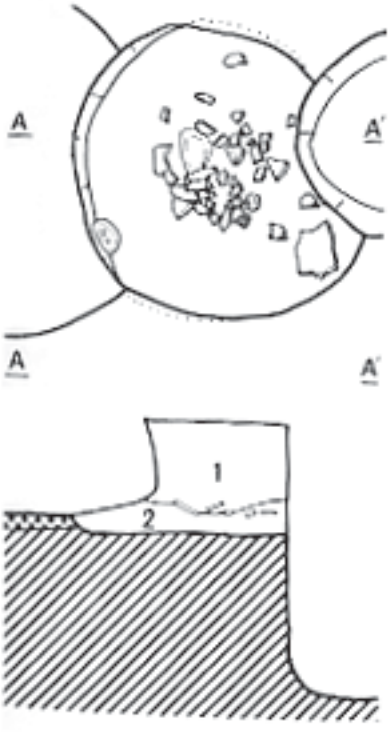

A
A'
1
2
第78号土坑
第78号土坑（H－7）
最深部25cm、長径1ｍ25cm、短径1ｍの楕形をした土坑である。出土遺物は、縄文の雷沢A Ⅱ式土器（第15図5）と剥石（第35図7）、石錘（第36図5・6）である。
第1層　暗褐色土　火山灰を少量含む。
第2層　褐色土　火山灰の小ブロック、炭化物を少量含む。
第85号土坑
第85号土坑（J－8）
深さ55cm、口径95cmのほぼ円形をなす土坑である。後期の土坑により若干切られている。出土遺物は、ムシリⅠ式土器（第31図5）である。
第1層　黒褐色土　小石・炭化物を若干含む。
第2層　暗褐色土　細砂を含む。
第3層　明褐色土　細砂・火山灰・炭化物粒子を含む。
第87号土坑
0
1
2
3
第87号土坑（J－8）
深さ45cm、径1ｍ50cmのほぼ円形をなす土坑である。出土遺物は、雷沢A Ⅱ式土器（第31図6、9）、石鏃（34図10）、不定形石器（同図6）。
第1層　黒色土　微量の火山灰を含む。
第2層　黄褐色土　多量の火山灰、炭化物を含む。
第3層　黒褐色土　少量の火山灰、炭化物を含む。
0
1 m

第 40 図　土坑実測図

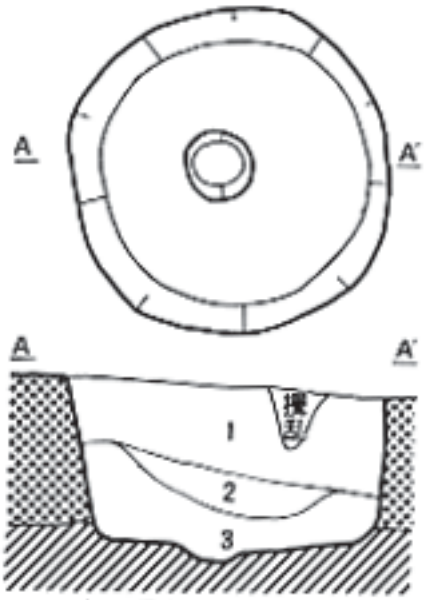


第92ピット実測図

第98ピット実測図



第 41 図　土坑実測図



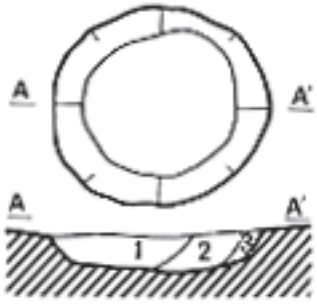
第99号土坑

第99号土坑（K－7）

深さ60cm、直径1m25cmの円形をなす土坑で、底面に径25cm、深さ5cmの小ピットを有す。蛍沢A Ⅱ式土器（第31図7、8）が出土している。

第1層　暗褐色土
第2層　明褐色土　｝若干炭化物を含む。
第3層　黒褐色土

第107号土坑



第107号土坑（J－4）

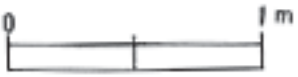
深さ10cm、直径85cmの円形を呈する土坑である。出土遺物は、クルミの炭化物が2層より出土したのみである。

第1層　黄褐色土　ローム粒子を含む。
第2層　茶褐色土　大きめのローム粒子を含む。
第3層　黄橙色土　ロームと第2層の混合土層。

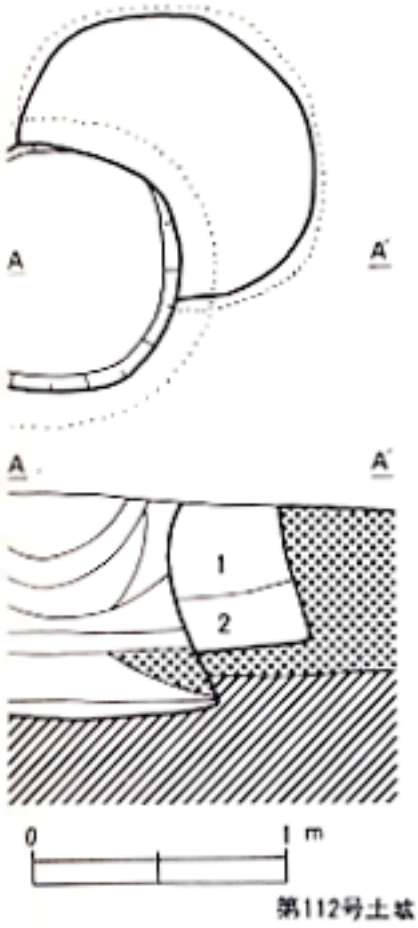
第108号土坑（J－4）

深さ20cm、直径1m15cmのほぼ円形をなす土坑である。壁際に2ケ所の小ピットを有す。土坑内からは、蛍沢A Ⅱ式土器の底部（第32図7）が出土したが、尖底ではなく、平底である。その他、自然礫が数点、第2層よりクルミの炭化物4点出土。

第1層　黄茶褐色土　ローム粒子を含む、堅い。
第2層　茶褐色土　第1層よりも黒味を帯びる大きめのローム粒子を含む。
第3層　黄橙色土　ロームと第2層の混合土層



第42図　土坑実測図



第112号土坑

第112号土坑

第32号土坑により約四分の一が切られている。

口径が1m10cm、底径が1m20cmで若干袋状を呈する。深さは55cmである。

出土遺物は、寺の沢式土器（第31図11、12）、および蛍沢AII式土器(同図10)、不定形石器(第34図8）である。

第1層　明灰褐色土　細砂礫、炭化物を含む。

第2層　暗灰褐色土　第1層より堅く、やや暗らい。

第43図　土坑実測図

第５節　寺の沢式以降の貝殻文系土器の編年

螢沢AⅡ式は吹切沢式に後続するものであるが、その吹切沢式の代表的な例として下田代納屋B遺跡を中心とし、更に早稲田Ⅰ類を加えて扱った。しかし、石岡憲雄氏は下田代納屋B遺跡の一部の資料をして寺の沢式に併行すると考え、これを早稲田Ⅰ類に先行するとの見解を示しているため（石岡1974）、物見台式にふれる前にこの問題に対する立場を明らかにしておく。

石岡氏は、白浜式→日戸・寺の沢式→早稲田Ⅰ類とした時、寺の沢式と早稲田Ⅰ類とは直接的脈結を欠いており、一系統として認められないと述べ、下田代納屋B遺跡を寺の沢式に併行させ、前者を青森県上北、下北地方の、後者寺の沢式を青森県三戸・岩手県下の地方型式との見解を述べた。しかし、寺の沢式の分布に関しては、本遺跡で出土している他、函館市石崎町からもかなり類似するものが出土しており(注7)（小笠原1974・1975）、地方型式とする考えは無理がある。更に、石岡氏が寺の沢式に併行させた下田代納屋B遺跡出土の土器については、私は吹切沢式そのものと把えている。というのも、吹切沢遺跡における吹切沢式土器や、これにほぼ相当する早稲田貝塚におけるⅠ類土器の出土量そのものが少なく、吹切沢式の全容を提示しているとは考えられない。それ故、林謙作氏のように誤解を生じることもあったのである(注8)（芹沢・林1965）。ただし、下田代納屋B遺跡の吹切沢式土器と、早稲田Ⅰ類とは全く同一とは言えず、若干の違いを指摘し得る。それは螢沢AⅡ式との対比において述べたように、早稲田Ⅰ類では体部を無文とするものが約$^{1}/_{3}$を占めている事実である。螢沢AⅡ式の存在から、同じ吹切沢式の中では把えられるものの、早稲田Ⅰ類は下田代納屋Bよりも若干新しいものと考えることが可能である。かといって下田代納屋Bを寺の沢式の時期まで溯らせることは不可能である。なぜならば石岡氏が記述したような密集した縦位の貝殻腹縁文ではなく、貝殻腹縁連続波状文を施文しているからであり、また地文の条痕は白浜等に比べるべきでなく、白浜式以来、若干の堆移はあったものの一貫して用いられ続けたものと考えられるからである。そして下田代納屋B遺跡のような吹切沢式土器の胴部全面に施文されていた貝殻復縁連続波状文の施文手法の変化が、胴部の条痕化・無文化に拍車をかけたのであろうと推察されるのである。

以上のことから、物見台式を除いた編年は、寺の沢式→吹切沢式（下田代納屋B→早稲田Ⅰ類）→螢沢AⅡ式となる。

この編年序列と物見台式がいかなる関係にあるかという点について、江坂氏は当初、物見台式を吹切沢式に先行させたが（江坂1950）、後にこれを逆転した（江坂1956b）。しかし、近年になって、何ら説明のないまま再び逆転させている（江坂1975）。この間にあって、林謙作氏は物見台式は吹切沢式に先行するという見解を幾度かにわたり発表している（林1962, 1964, 1965a、1965b、1966）。また、石岡憲雄氏は物見台式が白浜式から吹切沢式に至る間に物見台式が入るとは、系統的に考えられないとし、田戸上層式の系統が吹切沢式の頃に伝えられ、これに触発融合した結果が住吉町下層式Aの大部分・物見台式へと変容するとの見解を述べた

（石岡 1974）。一方、名久井文明氏は、「大寺遺跡の層位例から林氏の説が有利、つまり物見台式は吹切沢式に先行するが、白浜式→吹切沢式と続く吹切沢式系統中に入り込む余地はなく、そのため、全く別な性格を有するものであり、吹切沢式系統の土器が連綿と用いられていた時、不意に圏外から新たな波及があり、それが物見台式土器で、その時期は吹切沢式に近い頃である（筆者要約）」との見解を述べた（名久井1974）。仮に物見台式の出自が東北北部にないものとしても、かなり広い分布を示す物見台式が、当該地域の土器と無関係ではあり得ない。従来知られている諸型式中に、必ず物見台式との関連を見い出せるはずであり、またその中で物見台式土器の位置が明らかとなるはずである。

確かに物見台式と吹切沢式とが層位的に把握された遺跡は、現在のところ大寺遺跡しか存在しないが、これを絶対視したがために名久井氏は系統論を展開せざるを得なくなったわけである。仮に別系統の土器型式、つまり物見台式が当地域を席巻して一時期を画し、その後再びその地域の伝統に復した土器の製作、つまり吹切沢式土器の製作が行なわれたとするならば、少なくとも物見台式土器の時期に土着と目される吹切沢式にいたる系統の土器の製作が行なわれ、両者が混在するとともに、両者の隔合した土器の製作が行なわれていなくてはならない。しかし、そうではあっても物見台式期以後の土器製作は、物見台式の諸特徴を全て失なったものが生じることはあり得ないのであって、物見台式土器の製作方法を基盤とした新たな展開がなされることになろう。しかしながら現在のところ、物見台式は物見台式のみまたはムシリⅠ式を混じえて出土することはあっても、寺の沢式以降で吹切沢式以前の土器を混じえることはなく、また吹切沢式土器からは物見台式土器の諸特徴を見いだすことはできない。したがって吹切沢式に至る系統に、別系統と目する物見台式を挿入し、なおかつその後の土器製作に全く何の混乱も生じ得なかったということは理論上あり得ないことなのである。(注9)

さて、林氏は、「東北地方早期縄文文化の展望」発表以後、一貫して物見台式は吹切沢式に先行するとした。氏の論考を要約すると「アサガオ形深鉢の減少もしくは消滅、沈線文の衰退と貝殻文（ことに貝殻縁）の盛行、器形、文様を通じて見られる単純化と文様の口頸部への集約化の傾向は物見台と吹切沢式間にも認められ、関東地方の田戸上層式と子母口式の間にも認められる」（林　1962）と述べ、更に「貝殻腹縁連続波状文は大寺Ⅱ式にのみ見られ、南関東の子母口式の分布圏内では完全に見られないため、この施文法は南漸したもの」、「平行沈線文間に連続山形文を配合した意匠は、大寺Ⅱの重要なモチーフであり、吹切沢式・住吉町式では文様にくずれが見られ量的に減少することから、このモチーフは北漸したもの」（林1964）、
「南部（東北南部？－筆者注）に発生の中心があると考えられる絡条体圧痕文は、東北地方北端にまで達している。吹切沢式の一部は、この時期（大寺Ⅱ式－筆者注）に併行する」（林1965）と述べ、物見台式は吹切沢式に先行することを強調している。林氏の重要な基調となっているのは、吹切沢式・大寺Ⅱ式に絡条体圧痕文が存在する以上、その編年的位置は子母口式より先

行することはあり得ないとする考えであろう。そのため、田戸上層式に類似する明神裏Ⅲ式、物見台式は当然、吹切沢式に先行することになり、この関係から器形・文様等に対する説明がなされたものと考えられる。しかし、吹切沢式に先行することの明らかな寺の沢式および千歳遺跡(13)第1群第1類（杉山他1976)、ノダップⅠ式（森田他1974）等の寺の沢式近似資料中に、少量かつ文様帯を構成しないまでも、絡条体圧痕文が存在していることが明らかとなってきており、吹切沢式における絡条体圧痕文の出自を子母口式に求める必要はない。また、平行沈線文間に山形沈線文を配する意匠は、吹切沢式には希であり、住吉町下層A式、千歳遺跡（13）第1群第3類や本遺跡の物見台式では重要な文様モチーフとなっており、また、明神裏遺跡資料（白石市1976）中にも散見する。以上のように、林氏が北漸するとした文様は、現在その根拠を失っている。

更に林氏は、住吉町式下層式と物見台式、吹切沢式との関係について、住吉町下層式の一部はあきらかに明神裏Ⅲ式であり、大部分は吹切沢式そのものであるとし（林1965)、この住吉町下層式の細分案を「東北・北海道の貝殻文土器群」と題して発表した（林1966)。

これによれば林氏は、住吉町出土の土器の文様モチーフから重要なものとして

① 沈線による連続波状文
② 貝殻腹縁あるいは沈線による菱形の意匠
③ 異方向の貝殻腹縁を組み合わせた羽状文
④ 結節状連続移動腹縁圧痕文（当報告文中における貝殻腹縁連続波状文）
⑤ 無節連移動腹縁圧痕文

の5種を摘出した。これを梁川町出土の土器と比較し、梁川町からは②が全くみられず、①・③・⑤もまた典型では現れないか、もしくは顕著な存在でないとした。これをもとに、②および波状口縁の頂部から垂直に垂下する刺痕例を主要な文様要素とする土器群と、②・③・④を主な構成要素とする土器群とに分け、前者を住吉町式、後者を梁川町A式と仮称した。これを年代差を有するものと考え、住吉町式を物見台式に、梁川町A式を吹切沢式の更に細分されるものに対比されるとの見解を示した。しかし梁川町遺跡において②が全く存在せず、①・③・⑤も顕著でないならば、そして住吉町遺跡よりも純粋に構成されるか年代差を有する、とする林氏の論旨からするならば、梁川町下層A式の主要な文様要素は④のみでなくてはならないし、②は当然除外されるべきものである。更に、③を構成要素に含めるならば、同時に①・⑤をも含めなければならず、全く矛盾した説明である。仮に④のみを主要な文様構成要素としたものが梁川町A式であるとするならば、それは梁川町報文中の住吉町下層B式の多くが、特に第39図～第42図が相当し、これは明らかに吹切沢式の一部である。しかしながら、林氏が住吉町下層B式を対称としたのでないことは、摘出した文様モチーフの種類およびその組み合せによる「住吉町式」「梁川町A式」の設定から明らかであるからこそ、その論理的矛盾により、住吉町下層A式を対象として細分しようとする試みは破綻した。しかし、無視し得ない部分がある。

それは、吹切沢式の細分化されたものの一部に相当するであろうとした梁川町A式に③を含めたことである。③は先に述べたように、吹切沢遺跡・早稲田貝塚Ⅰ類、下田代納屋B遺跡などに極く少量存在し、螢沢遺跡では主体を占めるものの一つであり、これは当然吹切沢式との関連で把えられるべきものであったのである。しかし、口唇内面の貝殻腹縁文ないしは同連続波文を螢沢AⅡ式ではほとんど有しない点において異なる。この施文は住吉町下層A式、物見台式の特徴の一つとされるものである。ここで螢沢AⅡ式と住吉町式の類似点として山形沈線文刺突文の多用を、更には両者とも貝殻腹縁連続波状文、押し引き文を用いるが、それは口頸部文様帯の一部に用いられるのであり、胴部にはほとんど施文されない等を指摘し得る。次に、両者の違いとして、口唇部形状、内面施文の違いとともに、螢沢AⅡ式では口頸部に於ける文様構成が貝殻腹縁刺突を主とした横位ないし斜位の単純な構成であるのに対し、住吉町下層A式では長めの貝殻腹縁文で幾何学的な文様構成をなし、更に刺突文・山形沈線文とともに、沈線文の多用が目立つ。この住吉町下層A式と螢沢AⅡ式とが異なる点は、逆に口唇内面の装飾とともに住吉町下層A式と物見台との類似点として把えられる。つまり、住吉町下層A式は螢沢AⅡ式と物見台式の両者と類似点を有しているのであり、これら諸型式は年代差を持って存在したのである。また最近、物見台式の器形の中に従来知られていなかったキャリパー状のものの存在が明らかとなった（三浦1973、杉山他1976）。この器形の祖形は、住吉町遺跡報文中の第36図a、17、第41図a、15等にみられる如く、頸部で若干くびれを有するものがそうであろうと考えられ、また常世式では物見台式にかなり近いものがある(注10)（芳賀1975）。林氏の編年観からするならば、この種の器形が全く突然に生まれ、その後再び砲弾形の尖底土器に変容していくことになり、不自然であろう。螢沢AⅡ式中にはこの種の器形は見い出せなかったが、それ以後の住吉町下層A式や常世式の段階に醸成され、物見台式期に完成したと考えるのが妥当であろう。

更に、螢沢AⅡ式において胴部が条痕・無文化されたことによって口頸部文様帯の拡大が可能となり、これが住吉町式の文様構成と相俟って、物見台式が醸成される基盤の1つになったと考えられよう。

以上のことから、寺の沢式→吹切沢式→螢沢AⅡ式→住吉町下層A式→物見台式と編年される。

仮に林氏や、系統が別とはいえ名久井氏が述べたように、物見台式が吹切沢式に先行すると考えた場合、吹切沢式と螢沢AⅡ式の関係が明確な以上は、寺の沢式→物見台式→住音町下層A式→吹切沢式→螢沢AⅡ式との順列となろう。この場合、寺の沢式と吹切沢式、住吉町下層A式と螢沢AⅡ式それぞれ強い関連性を有する型式が、別型式によりその脈を断ち切られることとなり、このような順列は否定せざるを得ない。

更にこの問題には、ムシリⅠ式の存在が関係する。ムシリⅠ式土器は、早稲田貝塚や梁川町遺跡・ムシリ遺跡・赤御堂貝塚（江坂1957a）の層位例から、吹切沢式や住吉町下層A式に後続し、早稲田Ⅳ類等の縄文尖底土器群に先行することは明らかである。その一方で、ムシリ遺跡では最下層において、赤御堂貝塚では住居跡床面上においてムシリⅠ式と物見台式土器が共伴し、また、本遺跡にあっても積極的な証明ではないものの、ある程度類似した状況を示しており、物

見台式とムシリⅠ式とは極めて近い関係にあったことがうかがわれる。この点、江坂氏の両形式はほぼ併行関係にあるとする考え（江坂1963）は妥当であったといえよう。しかし、林氏はこれを認めながらも、前述したような層位関係には何ら注意を払っておらず、物見台式は吹切沢式に先行するとの自説を変えるには至らなかったのである（林1964)。また最近調査された日ヶ久保貝塚（鈴木他1974）では、両者とも1・2点という少ない点数でしかないが、物見台式の上層からムシリⅠ式が出土しており､両者が年代差を有して存在した可能性を物語っている。

一見、物見台式とムシリⅠ式とは何ら脈絡がないように思われるが、幾つかの類似点を指摘し得る。それは、物見台式における貝殻腹縁文が、沈線文の縁取りおよび区画された文様内を充填することに用いられるが、住々にしてこれを欠くものがある。このことから、物見台式の貝殻腹縁文は副次的なものであり、文様施文の際にデッサン的に用いられた沈線文が主要な位置をしめつつある段階、つまり脱貝殻文への胎動期と考えられ、特に本遺跡における第Ⅴ類土器が更に進展した段階と考えられるのである。物見台式とムシリⅠ式が併行関係ではなく、時間差を持って存在したとするならば、この間に第Ⅴ類土器を介在させることによって一つの流れとして理解するに十分であろうし、この第Ⅴ類土器に相当する資料は前述した如く、ムシリ遺跡から1点出土しているものの、物見台式を多量に出土した千歳遺跡(13)資料中には存在せず、型式として成立する可能性を有している。[注11]この3者は、沈線文と刺突文とを重要なモチーフとして共有し、これによって幾何学的な文様構成をなし、また非常に目の細かな条痕を有することでも共通する。更に第Ⅴ類土器の底部は不明であるが、物見台式の底部形状は丸底風の乳房状尖底土器で、希に平底があり、この点においても平底が多く、丸底を若干混じえるムシリⅠ式と共通している。

以上のことから、物見台式→（螢沢ＡⅤ類）→ムシリⅠ式という編年序列が得られ、寺の沢式からムシリⅠ式に至る過程がほとんど途切れることなく理解し得たことになる。

小　　結

本遺跡は縄文時代早期から歴史時代にいたるまで、各時代の人々の生活が営なまれてきたが、縄文時代早期にあっては土坑は検出されたものの残念ながら住居跡を検出し得なかった。しかし早期縄文式土器の散布はほぼ標高35mの等高線に沿って馬蹄形をなし、更に2ヶ所ほどの密集地域が2ヶ所ほど存在していることから、単に早期の人々が土坑――墓であるか否かは不明であるが――を設けるためにのみ本台地を利用したのではなく、未調査区域のどこかに住居を営なんでいたものと推定されるのである。

本遺跡の早期縄文式土器の主体をなすものは、従来全く知られていなかったものであるため今回ここに蛍沢AⅡ式として設定することとなった。この蛍沢AⅡ式を従来の編年序列中のどこに位置ずけるかということは、更に少量ながらも寺の沢式、物見台式、ムシリⅠ式等の諸型式が出土していることからも、これまで常に問題とされてきた吹切沢式と物見台式の編年序列に直接係わることであった。そのため本章では早期縄文土器の編年、特に寺の沢式以降から縄文尖底以前に重点を置いて考察することとなったのである。本論は関東地方・東北地方南部の状況をほとんど採り上げずに進めたため、充分なものとはいえないが、その結果は寺の沢式→吹切沢式→蛍沢AⅡ式－（住吉町下層A式）－物見台式という序列であることが、いずれの観点からしても妥当であること、更に物見台式に伴行する別系統の土器ではないかと考えられていたムシリⅠ式土器は、物見台式に後続する型式として把握されるべきこと、この両者の間に蛍沢AⅤ類が介在する可能性があると考えられるに至ったのである。

本報告をほとんど書き終えた投階で「函館空港第4地点・中野遺跡」（函館市教育委貞会1977）が刊行された。同報告によると放射性炭素の年代測定値は、いずれも中野A地点が同B地点に先行する値が得られたという、中野A地点の土器は蛍沢遺跡におけるⅣ類（物見台式）を主体としてⅤ類をも混じえ、同B地点では蛍沢AⅡ式類以の住吉町下層A式（住吉町下層A式そのものではないようである）を主体とし、Ⅵ類（ムシリⅠ式）が上層より出土している。これにより蛍沢AⅡ式と住吉町下層A式の関係について、また物見台式とムシリⅠ式を繋ぐと考えられるⅤ類の存否について新たな展開が生じると考えられるものの、前述した編年序列そのものまで改編する必要はないと考えるため、初期原稿のまま提出することとした。

注1　名久井氏は調査し得た範囲が小規模で資料も充分でなく、また下松苗場式の内容が未発表なため新型式の提唱を差し控えると述べているが、下松苗場式の名が登場して20年以上を経過してなおその内容が不明な以上、白浜式ないしは小船渡平式に後続し吹切沢式に先行する型式として、今後の研究の進展からも下松苗場式を編年上から消し寺の沢式を採用すべきであろう。

注2　寺の沢遺跡出土遺物にみる胴部文様中には、ほんの1例しか見い出せないが、これと関係すると考えられる西股遺跡や千歳遺跡(13)等に類似資料があり、寺の沢式にこ

の種のものが含まれるのか、または別型式に含まれるものか今後問題となろう。

注3　紹介資料の（2）である。石岡氏は、芦野Ⅰ群に先行するものとして縄文前期初頭に位置付けているが、明らかに明神裏Ⅲ式であり、最近石岡氏も同意見であることを三宅に語った。

注4　日本考古学年報2（1954）図版Ⅴ下段中央の破片である。

注5　図版作成は資料整理途中で行なったため、その後ピックアップされた資料については別図版（第30図）を作成したが、この中に吹切沢式として把え得るものが2点存在している（6．7）。この資料は2点とも底部付近の破片であり、貝殻腹縁連続波状文が施文されており、胴部以下を条痕又は無文化する第Ⅱ類土器とは明らかに異なる

注6　本遺跡の調査の結果他の時期にあっても新たな型式設定が必要となったため、分類番号の上に早期縄文土器の英訳から頭文字のAを付した。

注7　小笠原氏は、ノダップⅠ式との類以を認めながらも、その位置付けについては大寺3類に対比し得るものとの見解を述べている。ノダップⅠ式が蛇王洞Ⅱ式以後、白浜式以前とする位置付け（森田他1974）が妥当か否かは未だ問題があろうと思われるが、石崎町出土資料は、寺の沢式と考えて大過ない。

注8　蛇王洞第Ⅲ層の土器は、石岡氏も指摘しているように（石岡1974）吹切沢式ではないしたがって、蛇王洞においては、物見台式と吹切沢式の前後関係について層位上何ら明らかになったわけではない。

注9　縄文時代の各時期において他系統に属する土器が入り込みその地域を席巻することはよくあることである。例えば円筒土器と大木式土器との関係があげられる。円筒土器下層D式期以後に吹浦遺跡に特徴的な胴部に段を有する器形や、隆帯文等が取り入れられ、また大木6式に類以したものも製作されたことがあるが、一部影響を受けたのみで円筒土器上層式として新たな開展をみた。しかし上層d式以後、榎林式にいたる間はまさに円筒土器の製作から大木式土器の製作への転換期であり、いわゆる上層e式と呼称されている型式こそ両者隔合の型式で、この型式には円筒土器、大木式土器そのものといえる土器が共伴しているのである。この後は地方色を有する大木8b式である榎林式が成立し、円筒土器の製作技法とその文化圏は消滅し、大木式土器文化圏に吸収されるのである。また後期末から晩期の安行式土器の展開は、これと類似した様相を示しているものといえよう。

注10　常世式はほぼ吹切沢併行と考えられているが、ここに述べたようにその器形は物見台式に近似するものがあり、またその資料中（芳賀1975）には、第3図37．第4図58・59等蛍沢AⅡ式に類似する文様を施文したものがある。蛍沢AⅡ式、住吉町下層式と常世式との関係は未だ明らかではないが、単に器形だけを把えて論ずるならば、より後出的である。

注1　資料が僅少であるため型式設定はしないが、その内容が明確になるまでは暫定的に蛍沢ＡＶ類土器と呼称しておく。

（三宅徹也）

引用・参考文献

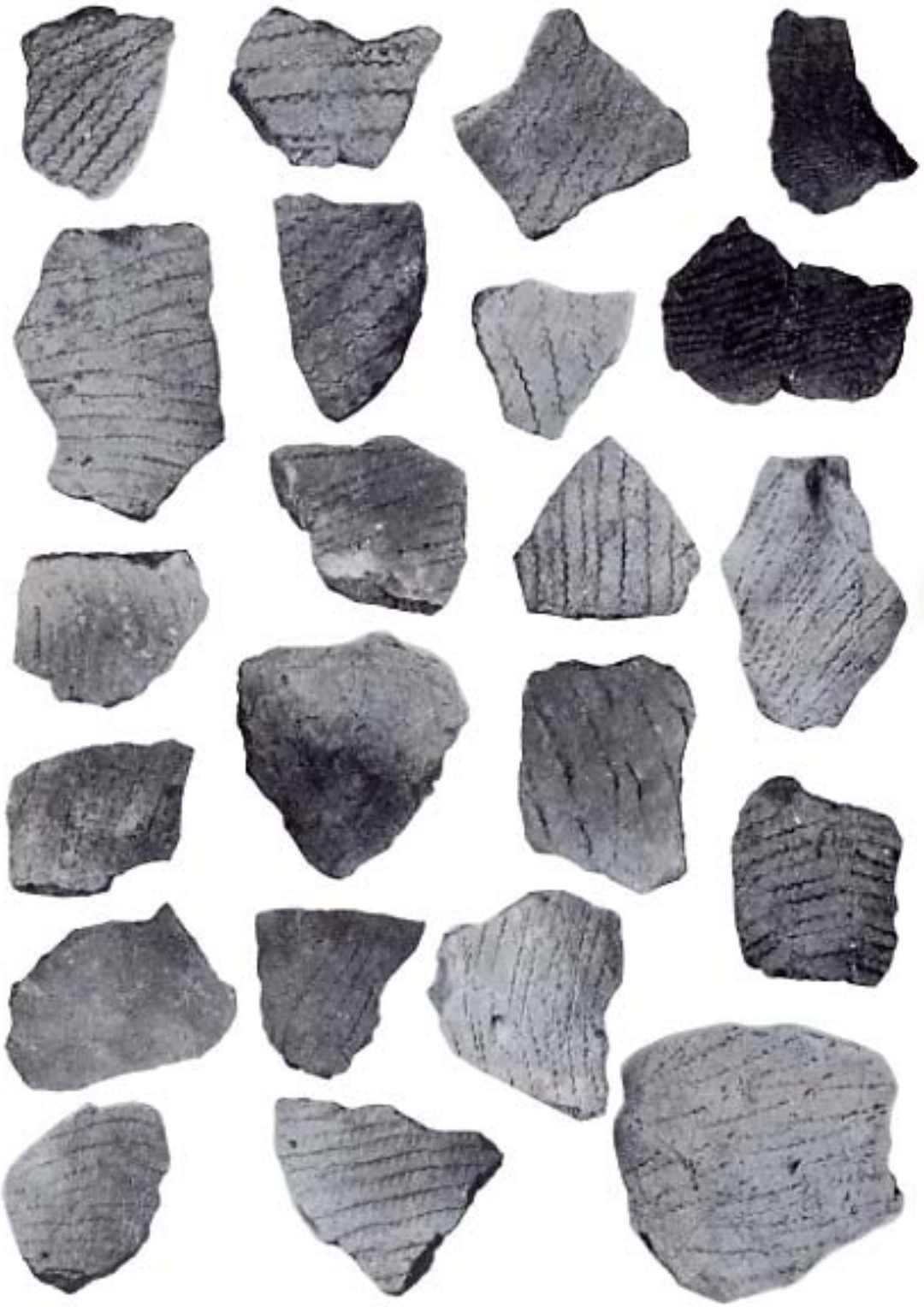
石岡　憲雄　1973「青森市大堤発見の土器」遮光器７号
1974「東北地方早期縄文時代土器型式編年に関して」遮光器８号
江坂　輝弥　1950「青森県下北郡東通村尻屋物見台遺跡調査報告」考古学雑誌 36 － 4
1952「日本始原文化の起原問題」古代学１－２
1954a「日本の石器時代文化」奥羽史談４－３
1954b「日本の石器時代文化」奥羽史談４－４
1954c「日本の石器時代文化」奥羽史談５－１
1954d「青森県下北郡吹切沢遺跡」日本考古学年報２
1954e「青森県下北郡ムシリ遺跡」日本考古学年報２
1955a「青森県下北郡吹切沢遺跡」日本考古学年報３
1955b「青森県下北郡ムシリ遺跡」日本考古学年報３
1956a「田戸住吉町系文化」若木考古
1956b「各地域の縄文式土器－東北－」日本考古学講座　河出書房
1957a「三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査略報」奥南史苑２
1957b「ムシリⅠ式土器について」先史時代５
1959　「縄文文化の発見」世界考古学大系１
1963　「1962 年度の歴史学界－回顧と展望」史学雑誌 72 － 5
1964　「縄文式土器・各論－早期の土器」日本原始美術１
1972　「縄文土器と貝塚」古代史発掘２
1975　「縄文式土器」日本の美術２
大場利夫他　1955　「函舘市梁川町遺跡」
小笠原忠久　1974　「函館市石崎町出土の早期縄文土器」桧山考古学研究会会誌３
1975　「函館市石崎町出土の早期縄文土器」桧山考古学研究会会誌４
北林入洲晴　1973　「むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報」青森県教育委員会
興野　義一　1970　「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」古代文化 22 － 11
草間　俊一　1956　「岩手県日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸部研究報告 10
1958　「岩手県玉山村日戸遺跡調査報告」岩手大学学芸部研究報告 14
1965　「鵜木・住吉・南高台遺跡」水沢の原始古代遺跡
工藤竹久他　1976　「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」八戸市教育委員会
三宅徹也他　1976　「下田代納屋Ｂ遺跡発掘調査報告書」

児玉作左衛門・大場利夫　1953　「函館市住吉町遺跡の発掘について」北海道大学北方文化研究報告 8
小林　達雄　1966　「多摩ニュータウンNo. 52遺跡の発掘調査」多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ
佐藤達夫他　1958　「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌 43 － 2
佐藤　達夫　1961　「青森県上北郡出土の早稲縄文土器追加」考古学雑誌 46 － 4
白石　　市　1976　白石市史別巻－考古資料篇
杉山　武他　1976　「千歳遺跡（13）発掘調査報告書」青森県教育委員会
鈴木　克彦　1974　「日ヶ久保貝塚発掘調査報告書」百石町教育委貞会
芹沢　長介　1957　「先史時代－Ⅰ無土器文化」考古学 1 － 11
芹沢長介・林　謙作　1965　「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代 7
高橋　正勝　1967　「北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝塚文土器について」石器時代 8
富樫　春時　1976　「トランシェ様石器について」東北考古学の諸問題
名久井文明　1974　「北日本縄文式早期編年に関する一試考」考古学雑誌 60 － 3
芳賀　英一　1975　「常世遺跡の早期縄文式土器に就いて」遮光器 9
林　　謙作　1962　「東北地方早期縄文文化の展望」考古学研究 9 － 2
　　1964　「事実誤認と見解の相違」考古学研究 11 － 2
　　1965　「縄文文化の発展と地域性－東北－」日本の考古学Ⅱ
　　1966　「東北・北海道の貝殻文土器群」北海道青年人類料学研究会会誌 ⓒ6
藤田　亮一　1975　「青森市内出土の早期縄文式土器片」うとう 81
三浦　圭介　1973　「むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布試掘調査報告書」青森県教育委員会
森田知忠他　1974　「西股」北海道第四紀研究会

○土器拓影図の縮尺は、全て 1/3 である。
○土器実測図の縮尺は、第 32 図が 1/3、他は 1/4 である。
○石器実測図の縮尺は、第 33、34、37 図が 1/2、第 35、36 図が 1/3 である。
○写真図版の縮尺は 3 および 3 ´ が 1/4、その他は 1/2 である。

図版 1

第 I 類土器（1/3）

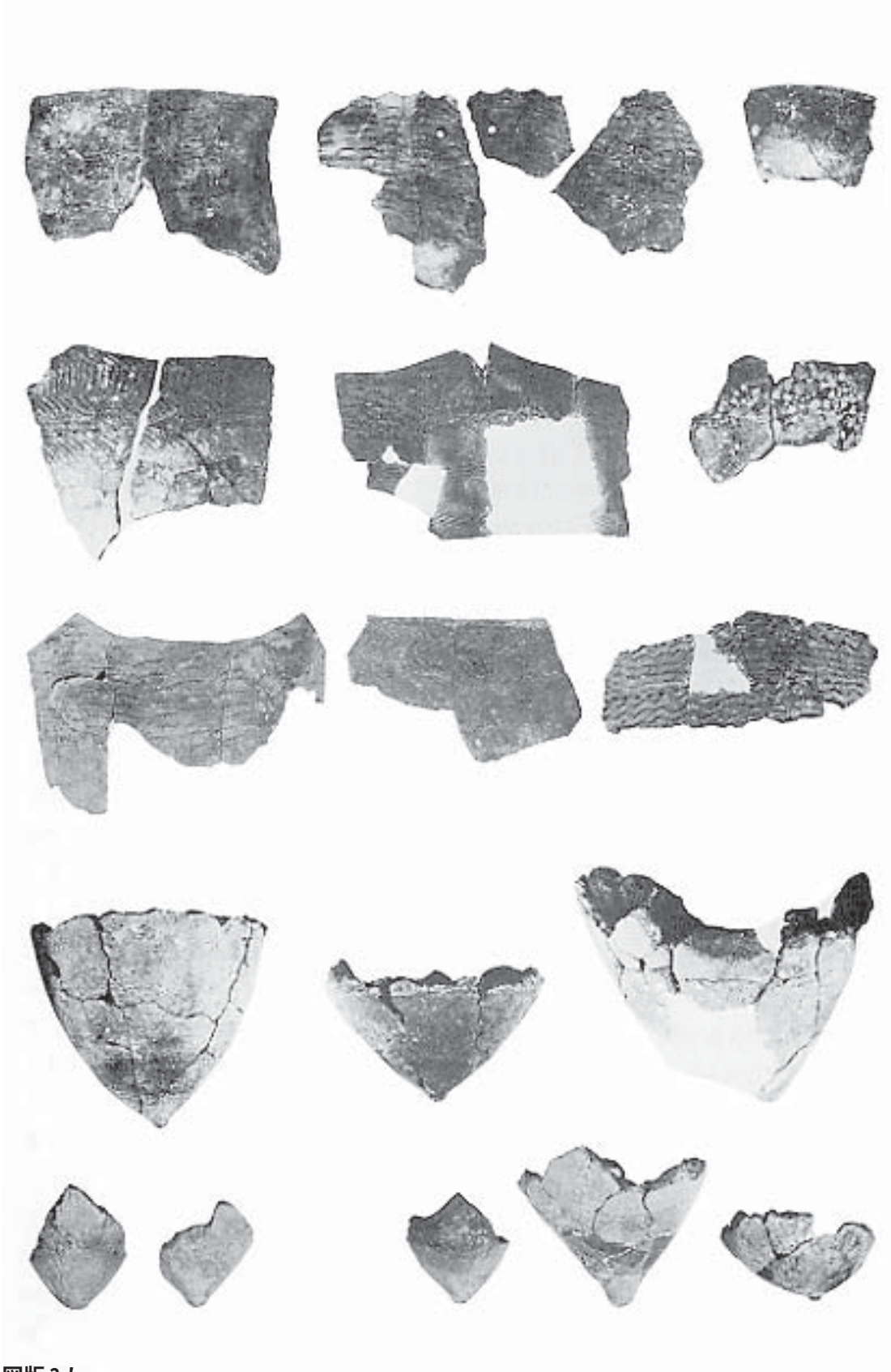


図版 2

第 I 類土器（1/3）

図版 3

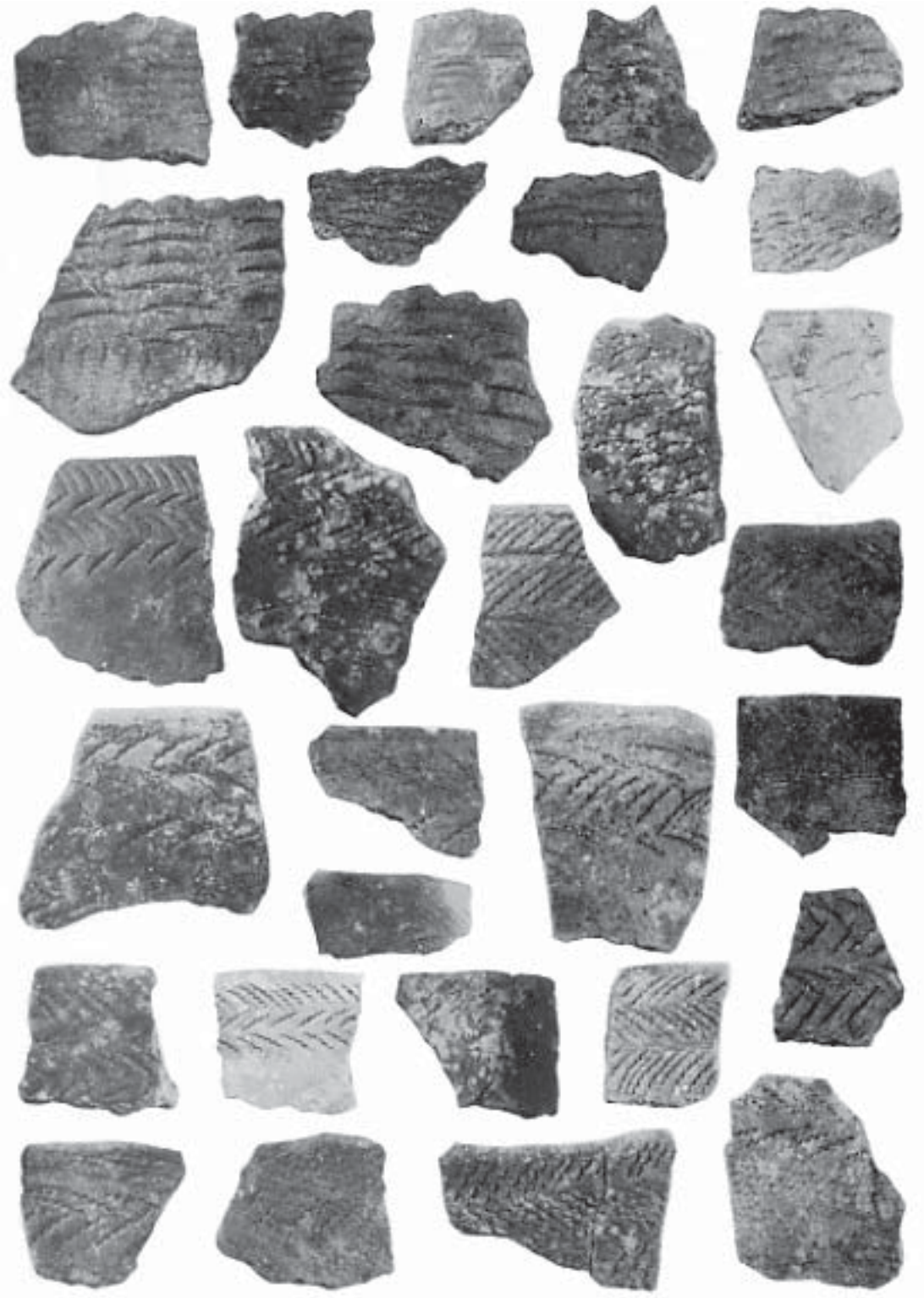
第 II 類土器（1/5）



図版３′

図版 4

第 II 類土器（1/3）



図版 5

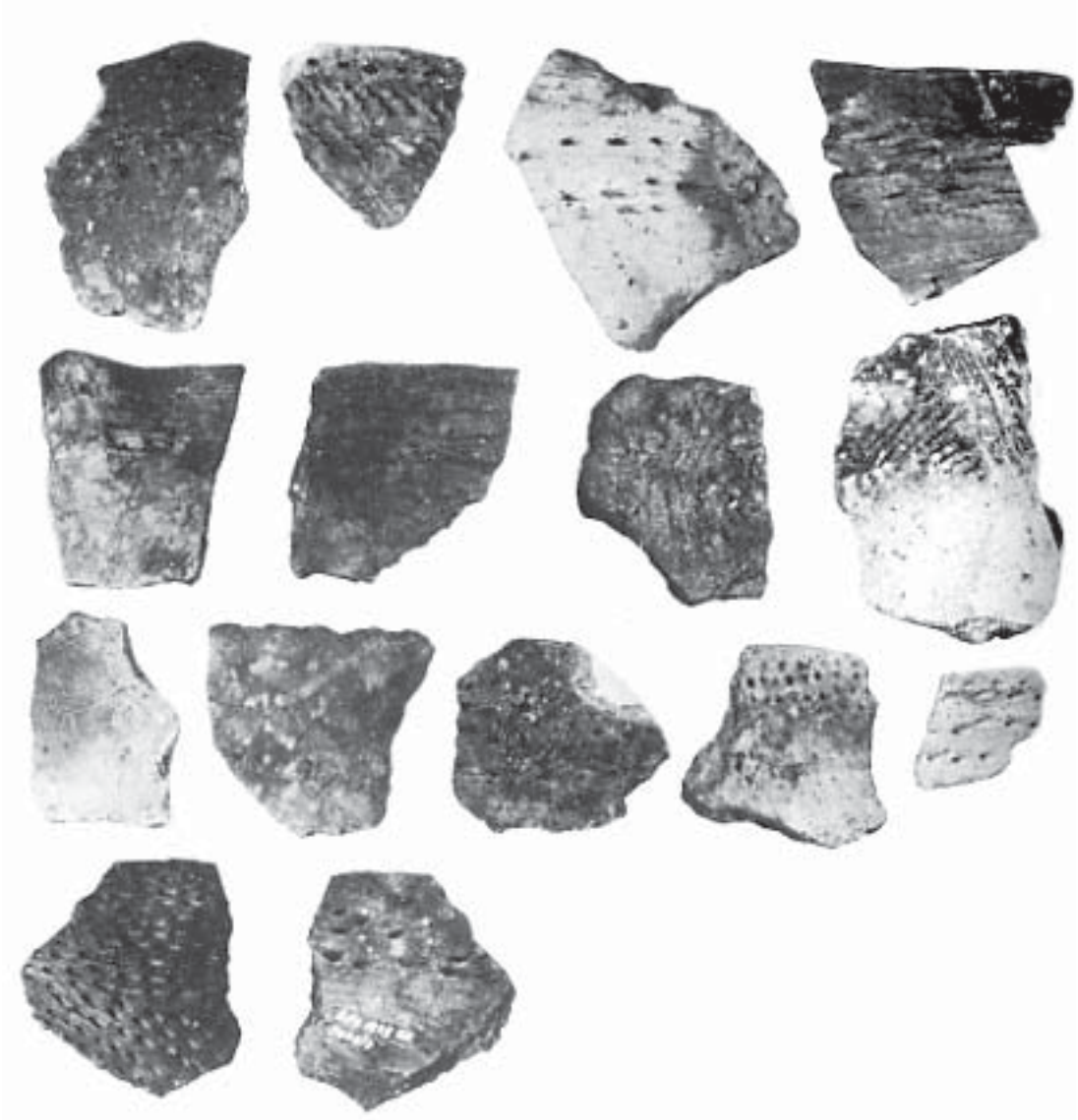
第 II 類土器（1/3）

図版 6

第 II 類土器（1/3）

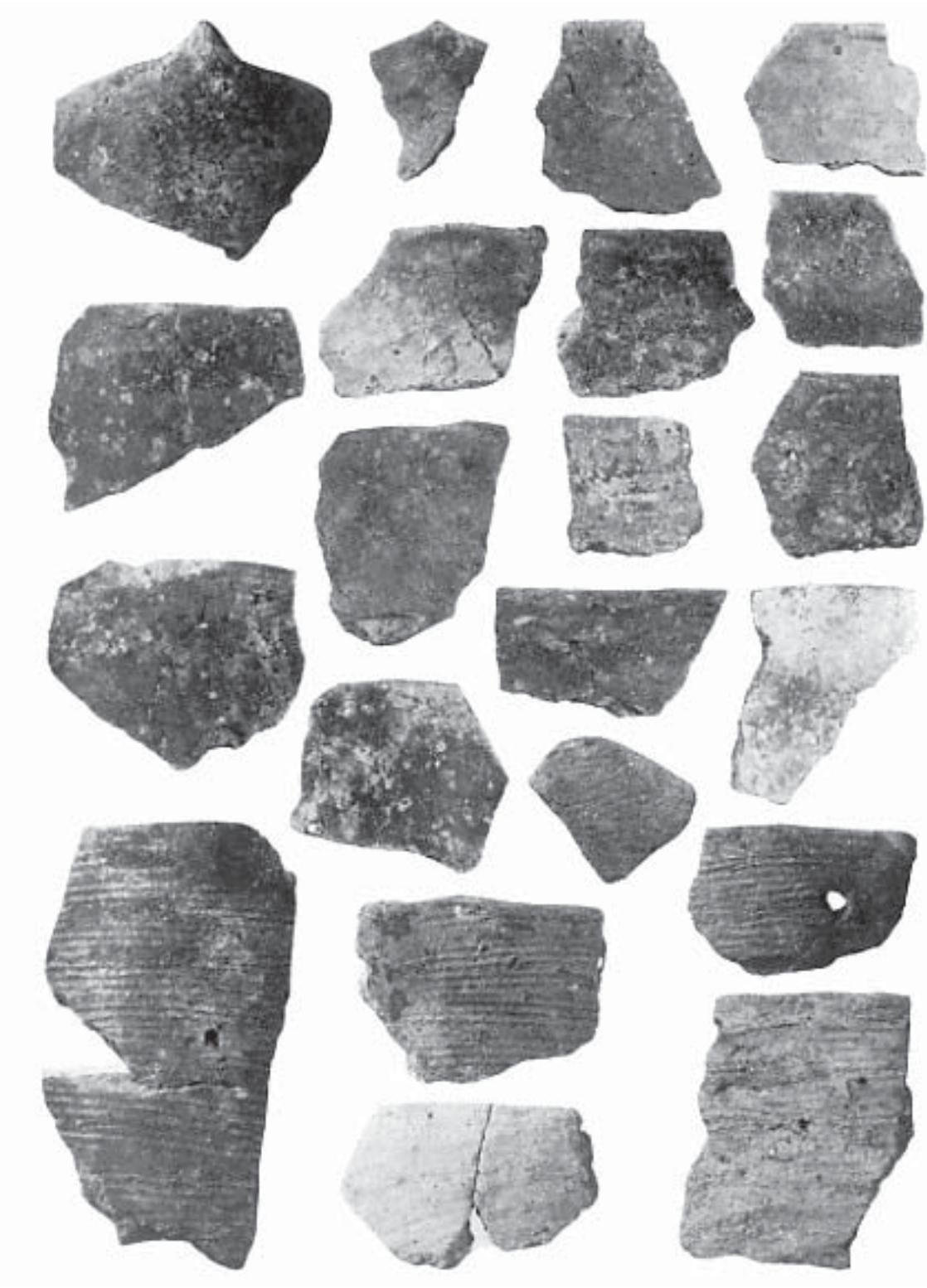
図版 7

第 II 類土器（1/3）



図版 8

第 II 類土器（1/3）



図版 9

第 II 類土器（1/3）

図版 10

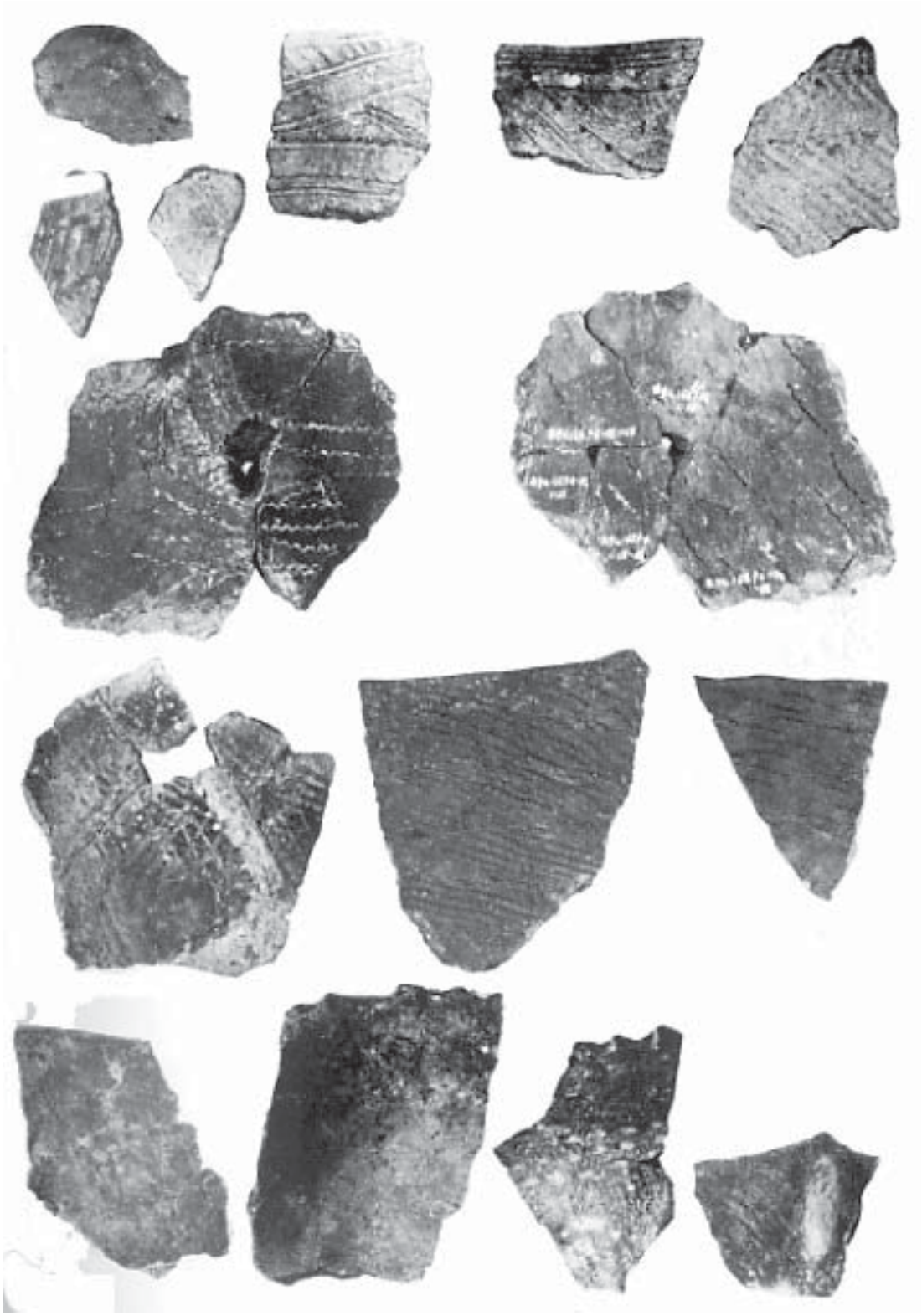
第 II 類土器（1/3）

図版 11

第III・IV類土器（1/3）

図版 12

第IV・V・VI類土器（1/3）



図版 13

早期土坑内出土土器片（1/3）

図版 14

早期土器伴出石器石製品（1/3）

K・L－8・9区（早期遺物散布状態）

第62号ピット（土器出土状態）

第75号ピット（土器出土状態）

第98号ピット（遺物出土状態）

図版15

縄文時代早期遺構

第5章　中　期　編

第1節　円筒土器文化住居跡

第1号住居跡（第45図・46図）

0－14、0－15区にかけて発見され、遺跡の最北端に位置する住居跡である。住居跡は南西が高く北東が低い緩傾斜する斜面に構築されており、北壁で未調査の歴史時代の住居跡と思われる遺構と重複している。このため完掘形が若干いびつである。長軸は420㎝、短軸は390㎝を測り、ほぼ円形プランを呈し面積は13㎡と小型である。確認面は基本層位第**Ⅳ**層で遺物の散布は認められなかった。掘り込み面は第**Ⅳ**層を掘り込み構築された住居跡のため壁は非常に堅緻で、住居跡製作時についたと思われる痕跡が幅2～3㎝、深さ1㎝ほどの溝状となって壁面の数ヶ所に見られた。床面は非常に堅く、床面上に炭化材が認められ、水平で北壁部分は貼床である。炉跡は長径47㎝、短径32㎝の隋円形を呈し、住居跡の中央部に設置されており、炉の製作方法が独特である。炉の縁に粘土を山形状に貼り付けて盛り上がっている。本稿では炉堤と仮称し、以下この名称を用いる。焼土の堆積は10㎝認められた。住居跡内には4ヶの主柱穴と思われるピットが規則正しい配列で認められ、壁際および主柱穴に接近し支柱穴が8ヶ検出された。住居跡西壁際で床面を長径135㎝、短径112㎝、深さ65㎝に掘り込んだピットが認められたが、このピットも炉跡同様堤を有し、炉址側に長径30㎝、短径20㎝の川原石がピットの堤に置かれた状態で検出された。住居跡床面上から出土した土器は第46図2に示した土器で、口縁部が大きく四ヶの波状口縁となり、頸部で極端にくびれる器形である。文様帯は口縁部が左傾する縄文が施文され、胴部は下半部まで結束のない羽状縄文が施されている。覆土中からは第46図1、3、4の土器が出土し、石器は石鏃（5・6）が2点、人手形の打製石器1点（8）、石冠状の中央部に溝状の加工痕を有する磨製石製品が2点（7・9）それぞれ出土している。

第2号住居跡（第47図・48図）

N－14区で検出され、北側斜面に構築されている。本住居跡の真北に60号住居跡が隣接し、南壁は59号住居跡と切り合い住居跡の約1/2より確認できなかった。残存している壁から推測される住居跡の計測値は長軸220㎝、短紬200㎝と思われ、ほぼ円形のプランを示すようである。推定面積は6.3㎡である。59号住居跡と切り合っているのは基本層位第Ⅳ層上面で確認しており、確認面には土師器片が散布していた。壁は第**Ⅳ**層がそれにあたるため非常に堅緻である。北西壁に長径50㎝、短径40㎝の方形のピットが作り出されており、ピット西壁には2ヶの柱穴と思われるピットが認められた。壁高は最高部で20㎝を測り、最低部の北壁では15㎝と僅少である。床面は非常に堅く締まりがあり水平である。炉跡は切り合いの際に破壊されたものか、あるいは炉を設置しなかったものか検出されなかった。また出入口については不明であるが北壁に作り出された方形のピットが柱穴と思われる2ヶの小ピットの配列から出入口のようにも考えられるが、判然としない。住居跡内で確認されたピットは4ヶですべて支柱穴と考えられ

た。堆積土は1～7層まで分けられた。住居跡床面上から出土した遺物はなく、全て覆土中から出土したものである。第48図1～4に示した土器片及び土偶（5・6）が出土した。三角形の顔に鼻を高くし、眉を隆起させた目、口は刺突によって縄文人の表情をリアルに表現したものである。また、(6）は板状の体部で、左右の腕・頭部・乳房を欠損しており体部の表裏は沈線文により幾可学的文様を描出している。

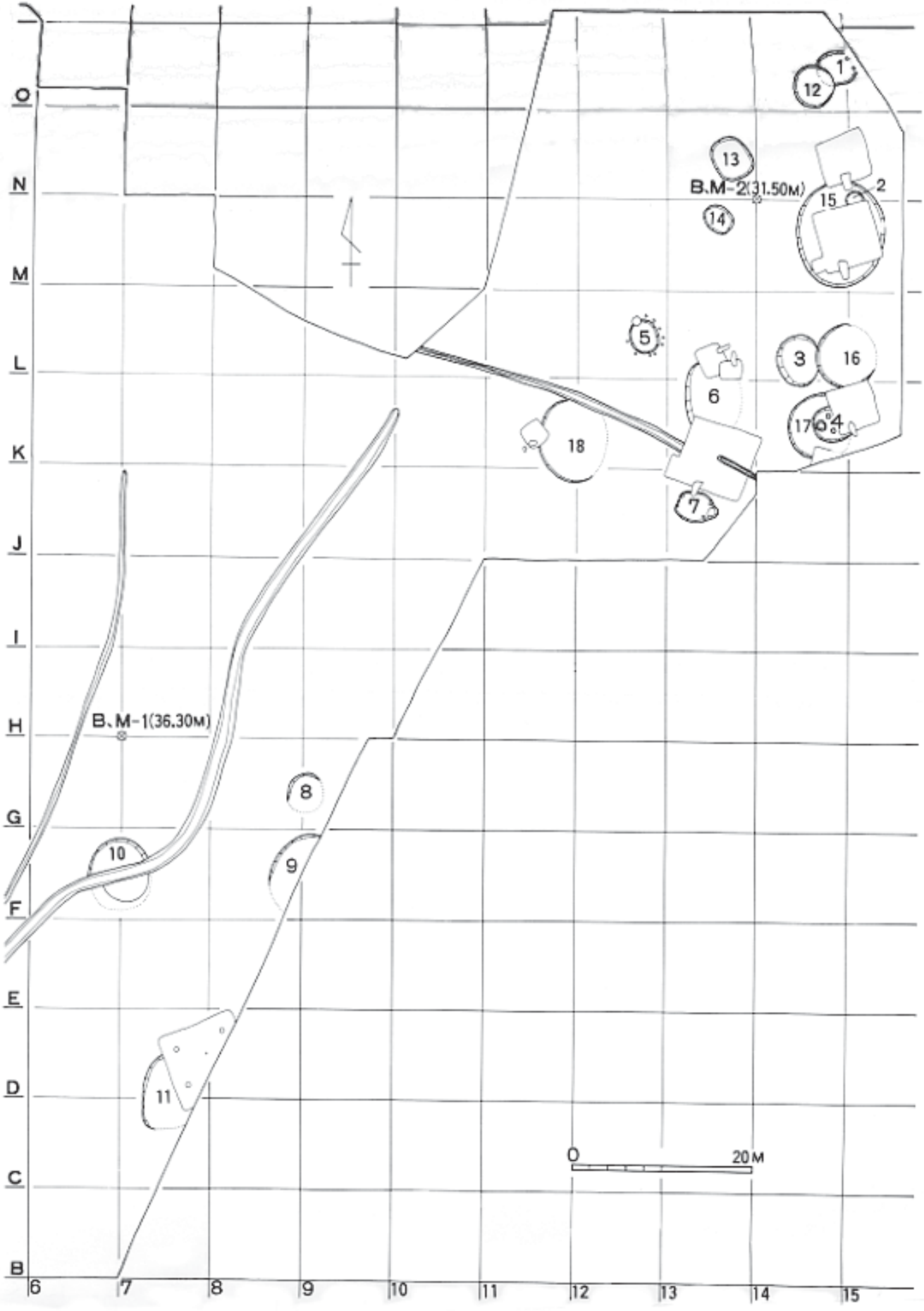
第3号住居跡（第49図．50図．51図）

L－14区で検出され、長軸方向が南北を示し、遺跡の北側に位置する。本住居跡に5号住居跡はほぼ並列状態で隣接する。住居跡の東壁で16号住居跡と切り合っている。計測値は長軸360㎝、短軸は東壁が明確に把握しがたいがおよそ450㎝を測り、楕円形を呈する。面積は13㎡と思われる。基本層位第**IV**層を掘り込み構築されているので確認は容易にでき、確認面での遺物の散布も認められた。北・南・東壁はそれぞれ第**III**層・第**IV**層が壁となるが、比較的脆い壁である。西壁が壁の最高部を測り70㎝である。最低部は東壁であるが、16号住居跡と切り合っているため壁高は不明であるが、地形が西高東低のため東壁はほぼ30～40㎝と推定される。覆土は1～12層に分けられるが4層で焼土をブロック状に含んでいるのが特色で、4層・5層に土器が流れ込んでいる（第50図2～7)。床面は中央部に長径40㎝、短径35㎝の炉跡が検出された。出入口については不明であるが、南壁の張り出し部分と考えるのが妥当と思われる。主柱穴と思われる長径50㎝、短径30㎝、深さ60㎝の円形ピットが1ヶ確認されただけで、ほかに柱穴と思われるピットは発見されなかった。住居跡内から出土した遺物（第50図1）は東壁側から流入したと思われる状態で底部が東壁を向き、約45度の傾斜をもち発見された。他の遺物もほとんどは口縁部が西側に向き東壁側斜面から流入したものと推測される。

出土土器で最も床面に近いものは1でその上層に2～6の土器が流れ込み最上層に7の土器が認められた。また石鏃が5点（第51図8～12）石斧1点（13)、礫器1点（14)、溝状に磨滅痕を有する石器1点（15)、磨石1点（16）が出土した。

4号住居跡（第52図・53図）

本住居跡はK－14・15に所在し、遺跡の東斜面に位置する。地形は西高東低の緩傾斜する斜面に構築されている。本住居跡は西壁が17号住居跡と重複し、更に東壁は55号住居跡と切り合っている。現存するプランから長軸450㎝、短軸390㎝の不正楕円形を呈し、面積は13㎡と推定できる。17号住居跡の底面精査の際確認されたものである。壁は基本層位第**IV**層がそれにあたるため非常に堅く締っている。壁高は最高部で40㎝、最低部で35㎝を測る。堆積土は1層から13層まで分けられた。床面は非常に堅緻である。炉跡は55号住居跡との切り合いの際に破壊されたらしく検出されなかった。住居跡内で検出された柱穴と思われるピットは6ヶで、そのうち中央部ピット2ヶが主柱穴と思われ他は支柱穴と考えられる。西壁際で直径120㎝、深さ100㎝のピットが検出された。住居跡覆土から口縁部に山形把手を有し、頂部にボタン状の粘土隆が付加された土器（第53図1）及び胴部に細い粘土紐で文様を描出した2、3の土器が出土した。



第 44 図　中期・後期住居跡配置図

石器は磨製石斧１点（4）と石篦状石器が２点（5・6）出土した。

5号住居跡（第54図・55図）

本住居跡はＬ－12に所在し、ほぼ長軸が東西を示す。緩傾斜面に構築されており、5号住居跡が近接する。住居跡は南壁際で長径100㎝、短径55㎝の皿形ピット、北壁際で口径100㎝、底径120㎝、深さ50㎝のフラスコ状ピットとの切り合いが認められた。平面プランは楕円形を呈し、長軸400㎝、短軸320㎝を測り面積は11㎡と比較的小型である。確認面は基本層第**IV**層の黄褐色粘土ロームが住居跡の付近一体に覆われ住居跡として確認することは困難であった。地形が南から北側に緩傾斜している関係上西壁は50㎝と高く、東壁は20㎝と低い。壁は基本層第**III**層を掘り込んでいるため非常に堅緻である。覆土は1～6層に分けることができるが、基本層第**IV**層の土層が南壁側から故意に埋めたと思われる状態で南側に厚く北側に薄く堆積しており非常に粘着性が強く締って堅い。床面は炉周辺が一番堅く、他の部分も壁同様堅い。壁際に周溝と思われる溝が巡らされていた。炉跡は住居跡のほぼ中央部に設置され床面を10㎝掘り込み作られたもので炉堤をもつ。焼土は5㎝ほどの堆積が認められた。出入口については不明であるが、地形から考え北側の面にあったものと思われるが推測の域を出るものではない。主柱穴と思われる柱穴は住居跡内に認められず、住居跡の周縁に支柱穴と思われるものが9ヶ、住居跡内に1ヶの計10ヶ発見された。住居跡覆土中から縄文地に沈線文を主体に文様を表出した土器片（1～3）と胴部下半の縄文地のみの土器片（4・5・6）が出土し、石鏃（7）が１点出土した。

6号住居跡（第56図・57図）

Ｋ－13区で発見され、北側斜面に構築されている。住居跡の南北壁は53号、56号、57号住居跡によって切られ確実なプランは把握することができず、西壁が良好な状態で残存しているにとどまる。推定長径は900㎝、短径は800㎝を測り、ほぼ円形に近い楕円を呈するものと思われ、推定面積は27㎡と思われる。基本層第**IV**層で掘り込みが確認され、土師器片が散布していた。残存している西壁の最高部は地形が傾斜しているため70㎝ある。壁は基本層第**IV**層があたるため非常に堅く締っている。堆積土は1～8層に分けられる。床面は堅く締っており、西壁に沿い約1ｍほど周溝が見られた。住居跡に伴った炉跡は検出されなかったが、西壁近くに馬蹄形状に焼土が見られ、その付近に四角形の焼石が1ヶ検出されたところから馬蹄形状の焼土が炉であったものと考えられた。出入口については切り合いがはげしく不明である。主柱穴と思われるピットが北壁際に1ヶ検出され、支柱穴と思われるピットは2ヶ確認された。覆土中からゆるい波状口縁をもち口縁に一条の粘土の隆帯を一条巡らし、地文に右傾する縄文を施文し、3本一組の沈線文を3条胴部に巡らした土器が1点（1）出土した。また石篦状石器1点（2）と磨り石1点（3）が出土した。

7号住居跡（第58図・59図）

Ｊ－13区で検出され、長紬を東西方向に示し、東側斜面に構築されている。計測値は長軸が

470㎝、短軸が350㎝で楕円形のプランである。面積はおよそ16.45㎡である。基本層第**Ⅳ**層で確認しており土器片も多量に散布していた。壁は基本層第**Ⅳ**層で構築されており堅い。壁高は最高部で西壁の80㎝で、最低部は東壁の30㎝である。堆積土は1～8層に分けられた。床面は非常に堅く、炉跡は床面を掘り込み住居跡のほぼ中央部に設置され、長径70㎝、短径65㎝を測る。本炉跡も炉堤を有する。焼土は5㎝堆積していた。住居跡内の柱穴と思われるピットは11ヶ検出されピット1、2、5、10は主柱穴と思われる。主柱穴1、2は西壁を半円状に掘り込み柱を立てやすくしているのが特徴的である。支柱穴と思われるピットも規則正しい配列をしている。東壁際には長径100㎝、短径100㎝、深さ30㎝の皿形ピットが見られ柱穴同様壁を半円にえぐり作られている。また炉跡同様堤を有するのが特色である。出土遺物は全て覆土から出土したものである。口縁部に横位に粘土紐で文様を施したもの（第59図1）と縦位に施文したもの（2）が出土し、波状口縁の頂部を中心にボタン状の隆帯を付加し2条の隆起帯で文様を区画する土器（3）も見られた。石器は、溝状の磨消痕を有する石器1点（4）、石皿片1点（5）、凹石（6）、石鏃1点（7）、有孔石製品1点（8）がそれぞれ出土した。

住居跡小括

蛍沢遺跡から検出された縄文時代中期に所属する住居跡は7基であった。住居跡はフラスコ状ピット同様、台地の北側斜面を中心に所在しその配列はほぼ南北を示す。7基の住居跡のうち2基は他遺構と切り合いその全貌は明らかでないが、住居跡の構造等について簡単にその特徴を述べることにしたい。

住居跡は2m大のものが普遍的な大きさで、平面形は円形あるいは小判形を呈する。西高東低の傾斜面に構築されているため西壁が高い。また蛍沢遺跡は春先が西から吹く風が強く自然現象を克服する一つの手段として斜面を利用したのかも知れない。基本層位第Ⅲ層を掘り込み構築された住居跡のため、壁面及び床面は非常に堅緻である。壁は床面に対し、垂直に立ち上り1号住居跡で認められた住居跡構築時に付いたと思われる機具の条痕が見られるものもある。床面はほぼ水平に作られているが、水平を保つため貼り床を持つ住居跡もある。

住居跡で明らかに炉跡を有するものは、1号、5号、7号住居跡で、炉は住居跡のほぼ中央部に位置する。蛍沢遺跡の住居跡の一つの大きな特色として炉跡の構築方法が挙げられる。炉は床面を若干掘り下げ、炉の周縁に粘土を山形状に盛り上げ堤を作り出している点である。炉石は使用しておらず所謂地焼炉の一種である。この堤を炉堤と仮称した。県内で炉堤をもつ住居跡の発見例は筆者が知る範囲では青森市三内沢部遺跡（註1）が挙げられるのみである。沢部遺跡では炉跡に埋設土器が伴っており、この点では若干の差異が認められるが形態的にはほとんど同じである。炉跡を確認できなかった2号、3号、4号、6号住居1跡も炉堤を有する炉が設置されていたものと推測される。また炉堤の手法は住居跡内のピット・柱穴にも見られ1号住居跡では「U」字形ピットに、7号住居跡では4ヶの主柱穴に見られた。柱穴は住居跡内

に配置されたものと、住居跡外に配置されたものとがあり、住居跡内に配置されたものは床面を掘り込み規則正しい配列が見られた。ただ例外的に7号住居跡では西壁を半円形に掘り込んで設置されている。また住居跡外に柱穴が配置されたものは5号住居跡一例のみで、住居跡周縁にきれいな配列が認められた。埋土は前述した如く西が高く東に低い地形のため西側斜面から土砂が流入したようで、西が厚く東が薄い凹レンズ状の堆積状態を示し、遺物も3号住居跡に見られるような出土状況を示すため自然堆積と考えられた。例外的に5号住居跡のみ基本層位第Ⅴ層のピンク色の粘土が充満しており、意識的に埋め戻したものと考えられた。

以上蛍沢遺跡から検出された縄文時代中期に属する住居跡の特色を列記してきたが、最後に本住居跡がいつ構築されたかの時期設定が問題である。3号住居跡で見るならば、床面に最も近い覆土から出土した土器は第50図1の円筒上層d式である。しかし出土状況から流入したものと考えられ、数量的に多く出土している円筒上層e式（註2）・f式（註3）に相当する土器の時期に本住居跡が構築されたものと考えられる。

（高橋　潤）

註1．青森県教育委員会が主体となり、三内沢部遺跡を発掘調査時、筆者が見学したものである。
註2．村越　潔「円筒土器文化」雄山閣1975
註3．江坂輝弥「石神遺跡」1970

第2節　土　坑

フラスコ状ピット（第60図～第62図）

中期縄文文化に所属すると思われるフラスコ状ピットは台地の北側斜面を中心に6基検出された。

第4号ピット

0－12－14グリッドにわたり基本層位第Ⅴ層で確認され、平面プランはほぼ円形である。口径は95×88㎝で底径は110×90㎝あり、確認面より底面までの深さは60㎝であった。壁面及び底面は堅緻で底面は水平である。覆土は1層黒褐色土、2層黒色土、3層黒色土、4層黄褐色土、5層黒褐色土、6層黒色土、7層暗褐色土、8層黄色土、9層黄褐色土、10層黒褐色土、11層黄褐色土、12層黒色土と分けられ、覆土中より第62図1の土器が出土した。

第6号ピット

0－14－1グリッドに所在し、口径95×84㎝のほぼ円形の平面プランを呈する。基本層位第Ⅲ層の確認面から底面までの深さは54㎝を測り、底面は110×95㎝である。壁面、底面は堅緻で、底面から磨り石1点が出土した。覆土第5層で西隅壁際から磨り石1点、ポイント3点、スクレパー1点の石製品が積み重ねられた如く一箇所にまとめられて出土した。

覆土は1層黒色土、2層暗褐色土、3層暗褐色土、4層黒褐色土、5層暗褐色土、6層褐暗色土、7層黒褐色土、8層黒褐色土、9層黒褐色土の9層に分けられた。底面からの出土遺物は検出されなかった。

第20号ピット

L－12－2グリッドに所在し、口径は235×220㎝のほぼ円形の平面プランを呈する。基本層位第Ⅳ層で確認し、確認面より底面までの深さが200㎝を測り底面は296×270㎝ある。覆土は1層から26層に分けられ（第60図）覆土中より第62図2の土器底部が1点出土した。大型フラスコ状ピットのため壁の崩壊が著しく、セクション図のローム層を復元していくときれいなフラスコ状を呈する。壁は基本層第Ⅲ層を掘り込み構築しているため堅緻で、底面は水平に作られているが、軟弱である。

第22号ピット

L－11－15グリッドに所在し、基本層位第Ⅳ層で確認された。口径243×224㎝を測りほぼ円形のプランを呈する。確認面から底面までの深さが219㎝で、底面はほぼ水平に作られ軟弱である。覆土は1層から21層（第60図）まで分けられ、覆土からは第62図3～6に示した土器片が出土したが他の人工遺物は検出できなかった。

第24号ピット

L－11－14グリッドで検出し、基本層位第Ⅳ層で確認した。口径は117×73㎝を測り、平面プランは不正楕円形を呈する。確認面から底面までの深さは77㎝を計測し、壁及び底面は堅緻で、底面は170×150㎝のほぼ円形プランを呈する。覆土は1層黄黒褐色土、2層黒色土、3層黒褐色土、4層黄黒褐色土、5層黒褐色土、6層黄黒褐色土、7層赤褐色粘土、8層黒褐色土と分

けられ覆土から第62図7の口縁部破片が1点出土した。

第63号ピット

G－8－24グリッドに所在し、基本層位第Ⅲ層上面で確認した。口径は85×80㎝と円形プランを呈し、開口部西側に周溝状の凹部が巡っている。確認面から底面までの深さが140㎝あり、底面は水平に作られ152×150㎝を測る。壁は第Ⅲ層を掘り込み構築しているため堅緻である。覆土は1層黒褐色土、2層暗褐色土、3層暗褐色土、4層明褐色土、5層暗褐色土、6層暗褐色土、7層暗褐色土、8層暗褐色土、9層明褐色土、10層黒褐色土、11層黄褐色土、12層黒褐色土、13層暗褐色土、14層暗褐色土、15層黒褐色土、16層黄褐色土、17層茶褐色土と分けられた。覆土中からは左傾する縄文地に綾絡文を縦に施文した破片（第62図8）が出土したのみで、他の遺物は出土しなかった。

小括（フラスコ状ピット）

蛍沢より検出された縄文中期に所属するフラスコ状ピットは6基である。そのピットの深さが確認面から底面まで1m内のものと2m以上のものとに大別できる。深さが1m内のものはその壁の残存状況が良好で、原形を保ったまま検出できたが、2mを越えるものは開口部から肩部にかけて剥落が著しく開口部が閉じる形となっている。ピットの大小にかかわらずフラスコ状を呈するピットは空掘りの状態で放置しておくとその壁が剥落し原形をとどめることができず、一度に埋めもどすかあるいは一度に埋まる状態でなければ完全な形では残存しないことが調査期間中にフラスコ状ピットを空掘りの状態にすることから判明した。

この状況から判断すると4号、6号、24号、63号ピットは作られてから短時間で埋め戻されたかあるいは一度に埋まったことになる。また20号、22号ピットは底面に基本層位第Ⅲ層の黄褐色土が堆積しており、また開口部も崩れているところからこれら2基のフラスコピットはある程度空掘りの状態であったことが推測できる。

6号ピットの覆土中からポイント3点、スクレパー1点、底面より磨り石1点が意図的に置かれた状態で出土し、ポイント、スクレパーはその形態、大きさから円筒上層式に伴出することはほぼ間違いないと思われる。これに類似する例としては上北郡六ヶ所村原原種農場（註1）の甕棺埋設フラスコ状ピットに付随する皿形ピットから異形石器が出土したものがある。原原種農場の場合は特殊な施設のため性格的には容易に把握できるものと考えられるが、本例も数百基のうちの一基ということで特殊な性格を持ちうるものであろう。フラスコ状ピットは青森県下全域に見られ、その伴出時期も縄文時代全般に見られるものである。県下でフラスコ状ピットが群在し、その性格が明確とされる遺跡の数も少なくその中で南郡平賀町小金森遺跡（註2）がその代表的な例として挙げることができる。小金森遺跡ではその検出状況、覆土の状況から土坑墓説が、また五戸町泉山遺跡（註3）ではその検出状況を分析した結果から廃棄から再生を祈った呪術的祭祀説が提唱されている。この他貯蔵穴説も唱えられているが、フラスコ状ピットの形態及び大

きさを考え製作時についやす労働力などからその機能は単純な意味での利用はされなかったようで、県下でフラスコ状ピットを伴出する遺跡でもその機能がそれぞれ異っているようである。

（高橋　潤）

第３節　遺構外出土遺物

試掘調査時３号住居跡を確認しており、その付近から第67図75の土器などが出土し、円筒土器文化層が遺跡の台地上北側斜面を中心に集中しているものと推察された。北側斜面から出土した円筒土器は、遺構内外の出土 量を合せ平箱に換算し２箱分と出土量が少なく前期縄文式土器に関しては数える程度で、出土土器の大半は中期縄文式土器である。

出土遺物を二項目に分け、前期編・中期編とし更に中期編ではその文様構成、施文方法などにより８群に分類した。以下これより項目にしたがい出土土器の概要について述べることとする。

Ⅰ．前　期　編（第63図１～３）

(1) は口縁部に７条の単節Ｒ－Ｌの平行押圧文が横行し、口唇部にも同原体を使用し縦方向に縄文が施文されている。口縁部破片のため器形の全貌を把握することはできないが、口縁部が極端に外反するようである。土器の厚さは薄く、比較的焼成は良好で赤味を帯び堅緻である。口縁部に１同様単節Ｒ－Ｌの平行押圧文が数条巡らされるものと思われ、頸部部微隆帯上には篦状工具により刻目文が施されている。胴部には多軸撚糸文が充港している(2)。(3) は２と同様の口縁部文様帯を有するが単節Ｌ－Ｒの平行押圧文が見られ、胴部文様には結束羽状縄文が施文されており焼成は２・３共に良好である。

Ⅱ．中　期　編（第63図４～第67図75）

第１群土器（第63図４）

この群の出土は１点のみで、焼成は比較的脆く、色調は赤褐色をおびている。波状口縁で口唇部に沿い一条の隆帯を巡らし、波状部の頂部から把手状に大きな隆帯が垂直に貼りつけられ口縁部文様帯を区画している。貼り付けられた隆帯にはあらい縄文が施文されている。縦位隆帯から分岐し単節Ｒ－Ｌの平行押圧文が５条横行し口縁部文様帯を構成している。

第２群土器（第63図５～９）

口縁部に扇状把手を有するもの（5・7・8）と平縁のもの（6・9）があるらしい。口縁部文様は、３本組の撚糸圧痕文と馬蹄形押圧文とを組み合わせ徴隆帯間（7・8）に施文するものや隆帯に沿い施文されるもの（5）もある。平縁のものは口唇部に隆帯が蛇行し三角文様が施されたもの（9)、と一条の隆帯が口唇部に施されたもの（6）もある。文様帯は馬蹄形圧痕文のみを口縁部に縦方向に施文したものと3本組の撚糸文と馬蹄形圧痕文の組み合せの文様が施文されているものがある。文様帯と体部の境には13を見るかぎりでは２条の平行隆帯文を巡らし文様帯を区画するらしく、体部は荒い結束の羽状縄文が施文される。胎土は全般的に粗悪で7、8、9

などは器表面に砂粒が露出している。焼成が脆いため、7、8 の隆帯文が剥落している。

第 3 群土器（第 63 図 10 ～ 15）

平縁のもの（11、12）と扇状把手を有するもの（10、14）があり、平縁のものは口唇部に隆帯が蛇行し三角形文が施文され、胴部文様帯が口縁に平行に展開するようで渦巻状の隆帯が施されている。隆帯にはＬ－Ｒの原体が施文されており、胴部文様の隆帯に沿い爪形文が施されている。11 また 12 のように第 2 群土器のように 3 本組撚糸圧痕文と爪形文を組み合わせたようなものもある。12 の土器の 3 本組撚糸文を施文するところは第 2 群土器に酷似しているが 2 群土器は撚糸の馬蹄形圧痕文が施文されるのに対し、12 は竹ひご状のものを用いて爪形文が施文されている違いがある。扇状把手を有す土器は把手を中心に隆帯文が展開すると思われ隆帯には平縁のものと同様縄文を施文するようである。胴部文様帯は（15）に見るかぎり一条の隆帯が巡らされ、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画するようで胴部にはＲ－Ｌの縄文原体が施文されている。

第 4 群土器（第 64 図 16 ～ 29、第 65 図 40 ～ 43）

本群土器は 2 群、3 群土器の扇状把手が退化縮少した突起状の把手が見られ、突起はその頂部で双頭になるもの（第 64 図 16 ～ 17、20 ～ 22、第 65 図 43）と山形状の突起になるもの（第 65 図 40 ～ 42）とがある。突起が双頭になるものはその頂部を中心に文様が展開し、頂部には橋状把手が施されるもの（第 64 図 16）やボタン状の隆帯文が施されるもの第 64 図 22 がある。文様帯が口縁部付近に集中するものと胴部にまでその文様帯が下るものがあり、口縁部付近に集中するものは口縁に沿い 1 条～ 2 条の隆帯が施文されるのみである。胴部にまでその文様帯が下るものは双頭の突起を中心に左右に円弧状の微隆帯により文様を描出し、地文にＬ－Ｒ、Ｒ－Ｌなどの斜行縄文が施文される。

山形状の突起を口縁部に有するものは、その頂部に 2 条の微隆帯の「はちまき」を持つもの（40、42）と全く持たないもの（41）がある。40 は山形状の突起に更に口縁に小突起をもち山形状突起を中心に円孤状の微隆帯の文様が胴部まで展開するようである。地文には斜行縄文Ｒ－Ｌが施文されている。また 41 は突起の直下にボタン状の突起が施文され口縁に沿い一条の隆帯が巡らされている。地文にＲ－Ｌの縄文原体が施文され、更に綾絡文が横行している。42 は口縁部に微隆帯により三角形文が作り出され、突起直下につまみ出しの橋状突起が見られる。地文には結束のない羽状縄文が用いられている。

平縁のものと思われる第 64 図（19・23）は地文にＲ－Ｌの縄文原体無節の縄文原体が用いられている。19 は口唇部に蛇行する隆帯が付され山形状文が施文されており、23 は器面内部の成形時に集められた粘土を口縁に貼り付けたと思われる口縁形態で即見すると 2 重口縁を思わせる。本群土器は一般に文様が簡素で、第 64 図 17・21 などの土器は蛙などの顔を連想させる特色があると思われる。

第 5 群土器（第 64 図 24 ～ 29、31・35）

亀頭状の突起を口縁部に具有するもので、文様帯はその大半が口縁部に集中する。突起に二条の平行微隆帯が巡り、その直下に三角形・長楕円形の隆帯が施文されているもの（24、25、27）や平行微隆帯が施されず三角形の微隆帯が施文されたもの（26・31）もある。また18のように縄文原体を押圧し文様施文しているものもある。26は亀頭状の突起に三角形微隆帯が施され、その頂部から伸びる一条の微隆帯が突起内面にまで達している。31の土器は亀頭状突起内面に単節Ｒ－Ｌの縄文原体を押圧し、三角形文を施文し胴部には沈線によって文様を描出している。28の土器は3条の平行微隆帯間にボタン状の突帯が貼り付けられている。29・35の土器は2条の平行微隆帯から分岐する隆帯によって文様が構成されているが、文様帯が胴部にまで及ぶものかどうか不明である。本群土器の地文には極めて細い単節Ｒ－ＬやＬ－Ｒの縄文原体が使用されている。

第6群土器（第65図44～52）

本群土器は山形あるいは円形の突起を持ち、突起部にボタン状の突帯が施されるのが特色である。山形の突起を1条～2条の平行隆帯で区画し、区画された空間にボタン状の突帯を施し、平行隆帯に縄文を施すものと無文のものがある。47の土器は突起の頂部から橋状把手が付けられ把手には3条の平行微隆帯文が施文されている。本群土器は平行微隆帯による区画があるか否かにかかわらずボタン状の突帯の真後しろに刺突文が施されるのが一つの特色として挙げることができよう。地文には単節Ｒ－Ｌ、Ｌ－Ｒの縄文原体が用いられ、比較的薄手で胎土には石・細砂など含み、焼成良好なため堅緻である。

第7群土器（第66図53～67図75）

口縁形態は平縁のものと波状を呈するものとがあり、波状口縁のものはＡ・Ｂ・Ｃの3種類にその形態から分けることができる。

Ａ類（53、71、74）亀頭状の突起を4ヶ所に配し、突起を中心に平行沈線文・弧線状文が横走するもので突起直下に一条の沈線が垂下あるいは鎖状の突帯が垂下することにより文様帯を区画するものである。74の土器のように突起上部が凹でいるものもある。地文には単節Ｒ－Ｌ、Ｌ－Ｒの縄文原体が使用されている。

Ｂ類（62、65、66、68、70）亀頭状の突起がその頂部で2分あるいは3分され双頭となっているものである。

62は突起に2条の平行隆帯が巡らされ器内面で結合する。地文にＲ－Ｌの縄文原体が施文され胴部には沈線により文様を描出している。68も同様の文様構成であるが、突起から垂直に3条の沈線が施され、それから分岐する3本一組の沈線文が左右に2段施文されているが、破片のため判然としないが胴部下半部にまでその文様帯が施文されているものと思われる。65・66の土器は突起が3分されているもので、突起に平行に3条隆帯が巡らされるもの（65）とＸ形に隆帯が付されるものがある（66）。それぞれの内面には三角形のモチーフの隆帯が施され、66などは三角形の空間に点列が施文されている。地文にはＲ－Ｌの縄文原体が用いられ、胴部には

沈線文が横走するらしい。

C類（72）亀頭状の突起が台形を呈するものであるがA類の範疇に属すものかも知れない。72は1条の隆帯が巡りその直下に三角形の隆帯が施されている。地文にL－Rの縄文原体が施文され、口縁に沿い沈線文が横走している。

平縁のもの（57・63）は口縁に一条の蛇行する隆帯が施され、その下部に平行沈線文が横走斜行するもので地文には単節のR－L、L－Rの縄文原体が施されている。54～56、58～61、64～67の土器は全て平行沈線により胴部文様が施文されているが、波状口縁となるものか否かは判然としない。しかし本群土器は胴部文様が横方向に展開する特色があるらしい。69の土器は胴部下半の破片であるが、一条の円孤文で文様帯を区画しているのが特色である。

第8群土器（第64図32～39）

いわゆる縄文地のみの土器で、破片を見るかぎりでは平縁である。34、37の土器は口縁が2重口縁状になっており第4群土器第64図23に似ている。36、38、39の土器は口縁部と胴部との縄文原体を使いわけており口縁部に荒い縄文が施文されている。胴部文様は単節R－L、L－Rの縄文原体が使用されている。

小　　括

出土土器を分類するため便宜上前期編・中期編と大きな項目に大別した。縄文前期に分類した1～3の土器はその形態及文様構成から円筒下層d_2式に相当するものと考えられるが、1については口縁部の文様帯及び口線形態に下層d_2式とは若干の相違が認められ、口縁部が外反し更に口縁部文様帯が広いなどの点で円筒上層a式に近似している点も看取でき、下層と上層の中間的要素を含みうる土器と思われる。

中期編第1群土器は僅少の出土で不明確であるが、円筒上層a式と考えられる。第2群土器は大型の扇状把手を有し口縁部文様帯が微隆帯を貼り付け隆帯間に馬蹄形状の押圧文を横位あるいは縦位に施文し、文様帯を胴部上半で隆帯によって区画する円筒上層b式のプロセスが窺え同型式と思われる。第3群土器は2群土器とプロセスがほとんど同じで隆帯間に鍵形状の刺突文が施文される点で相違が認められるもので、円筒上層c式に相当するものと考える。第4群土器は平口縁のものは耳状の小突起が施され、波状口縁のものは頂部直下にボタン状の突帯が付される特色をもち、胴部文様帯は細隆帯、綾絡文を施文し文様が横方向に展開している。これらの特徴から円筒上層D式に相当するものと考えられた。また第3号住居跡出土（1）の土器は本群に分類される。5群土器、6群土器は波状口縁の頂部に亀頭状の把手を有し、縄文原体・微隆帯及びボタン状の突帯で文様構成され文様帯は口縁部というよりは把手部に集中し、ボタン状の突起を付加する。6群土器は突帯の裏面に直径3㎜から6㎜の刺突が施される特徴がある。第3号住居跡出土土器の（2）～（7）までの土器は本群に分類される。5群土器と6群土器の群別はボタン状の突帯を有するか有しないかで単純操作による群別で、縄文原体押圧や

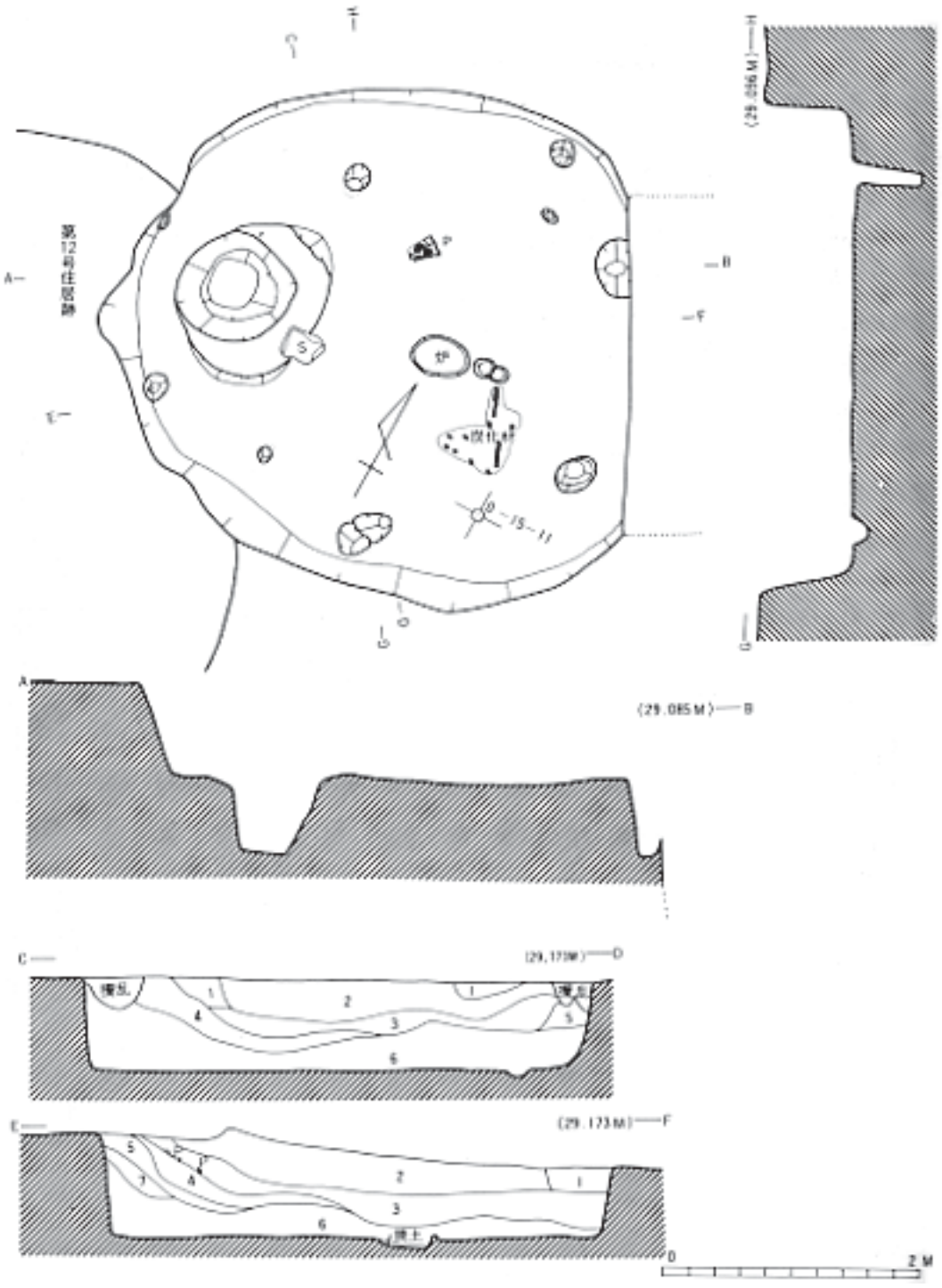
微隆帯で文様を描出したりボタン状の突帯を付加することは土器装飾を目的とするファッションとして把えた方が妥当と思われ時期的には同時期と考えて良いであろう。7群土器は把手を以ってA・B・Cに類別したが、同一時期の土器群として把えて良い。所謂縄文地に沈線・撚糸圧痕文を施し平行弧線あるいは胸骨状に文様を施文し、4ヶの把手を基準に1条～3条の沈線文・撚糸圧痕文及び微隆帯文をおろし文様帯を区画する特色を有する。第1号住居跡・第6号住居跡出土土器は本群に分類される。5群土器～7群土器までの土器群は比較的大型のものは少なく、小型のものがその割合を占めているようである。器形も口縁部が大きく外反し底部から直線的にひらく器形で、文様帯は胴部上半に位置する。最も簡略化された土器は口縁部にその文様帯が集中する。当該土器群は他遺跡で近年出土例が増加し、その時期設定にもさまざまな編年的位置づけが行なわれている。江坂輝弥氏は「石神遺跡」（註1）で円筒上層f式を、また村越潔氏は「円筒土器文化」（註2）で江坂氏の円筒上層e・f式を再吟味され円筒上層E式を提唱された。しかし研究者によっては上層e・f式の型式設定には排他的な見解をする研究者もおり流動的型式であるのが現状のようである。最近では北海道上磯郡知内町森越遺跡（註3）で同類型の土器群が出土した報告例があり、森越式と型式設定している。かかる型式に5群土器～7群土器が併行関係にあると思われるが、前述したようにこれらの土器群は流動的な型式なため、今後の研究課題となるであろうし更に細かい分析研究が必要となるであろう。

（高橋　潤）

註1. 江坂輝弥「石神遺跡」1970

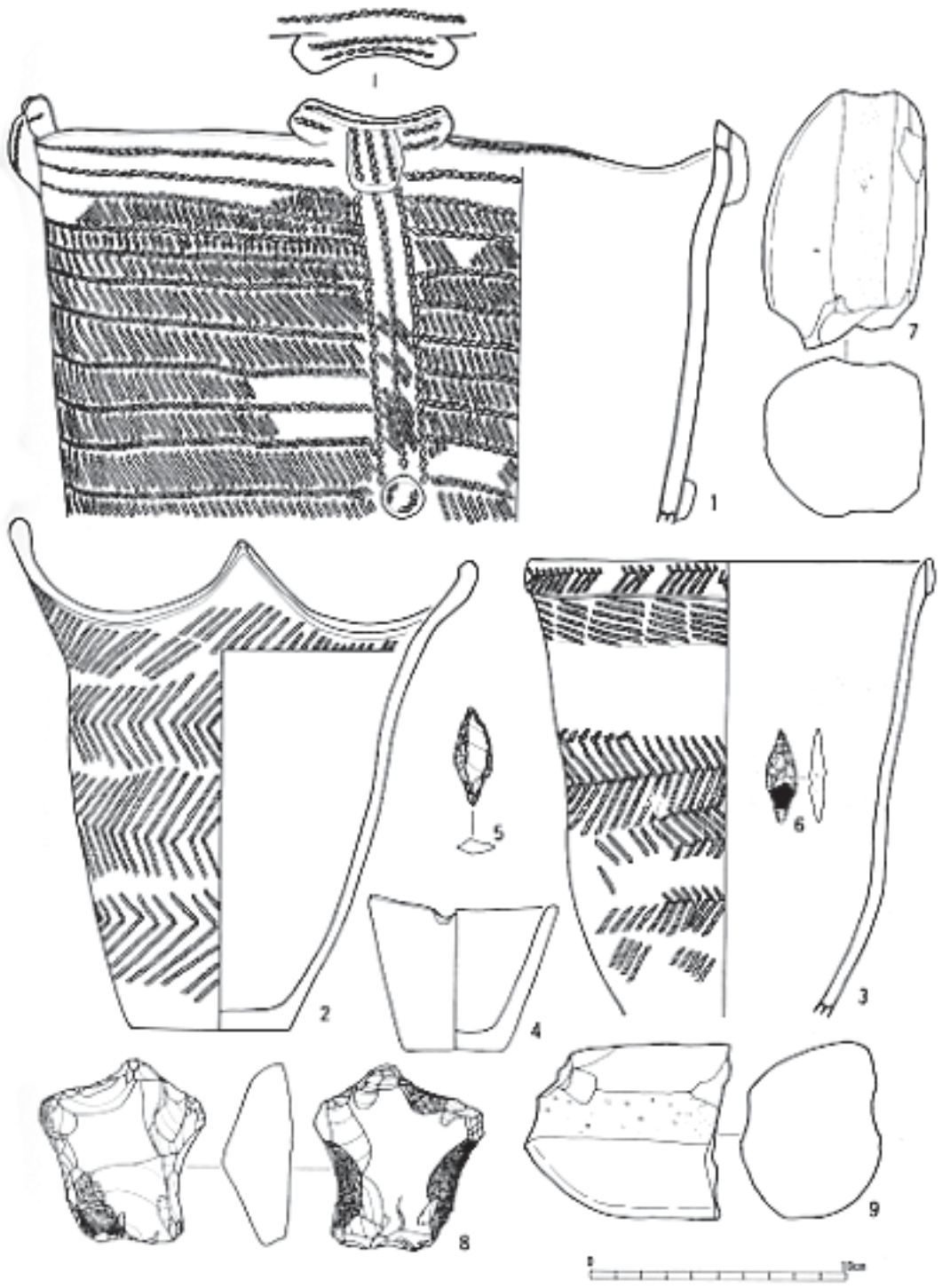
註2. 村越　潔「円筒土器文化」雄山閣　1975

註3.　　「森越」知内町教育委員会　1975

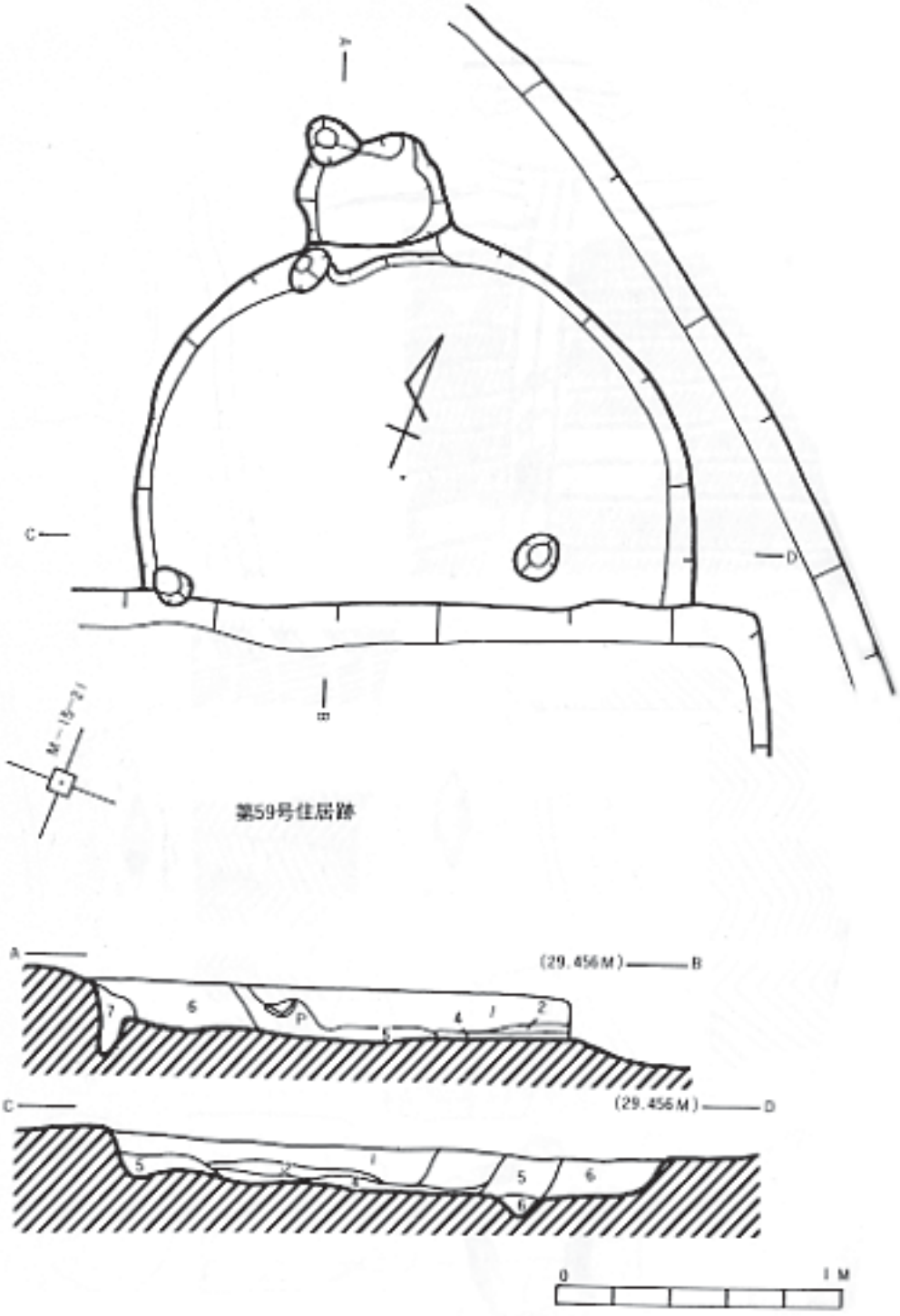


1. 暗褐色土　ローム粒若干混入
2. 暗褐色土　ローム粒子・カーボン混入
3. 暗褐色土　ローム粒子・焼土粒子・カーボン混入
4. 暗褐色土　ローム・ブロック・カーボン混入
5. 暗褐色土　3と同じ
6. 暗褐色土　多量のローム・ブロック・カーボン混入
7. 暗褐色土　5と同じ

第45図　縄文時代中期1号住居跡実測図

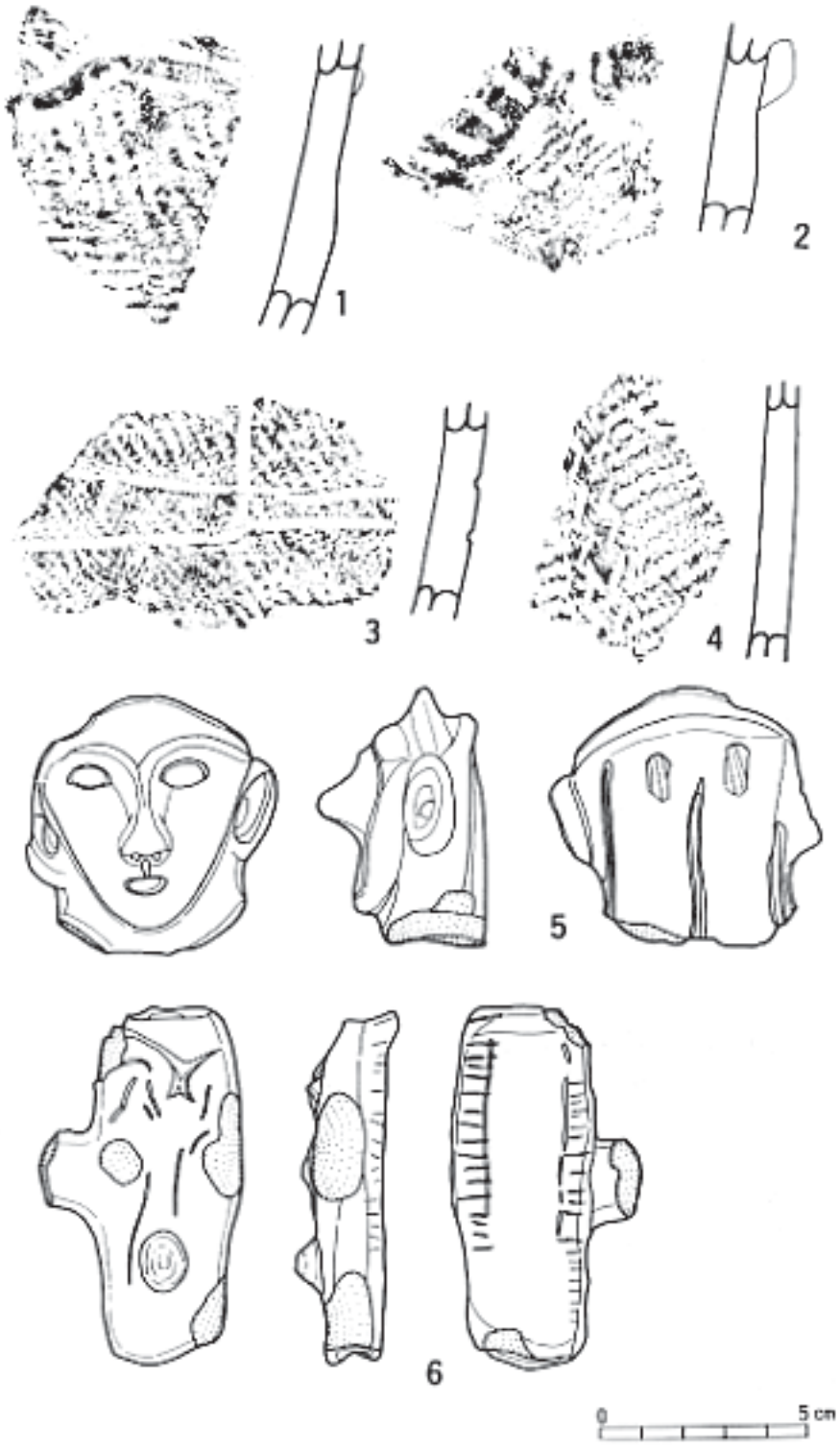


第 46 図　1 号住居跡出土遺物

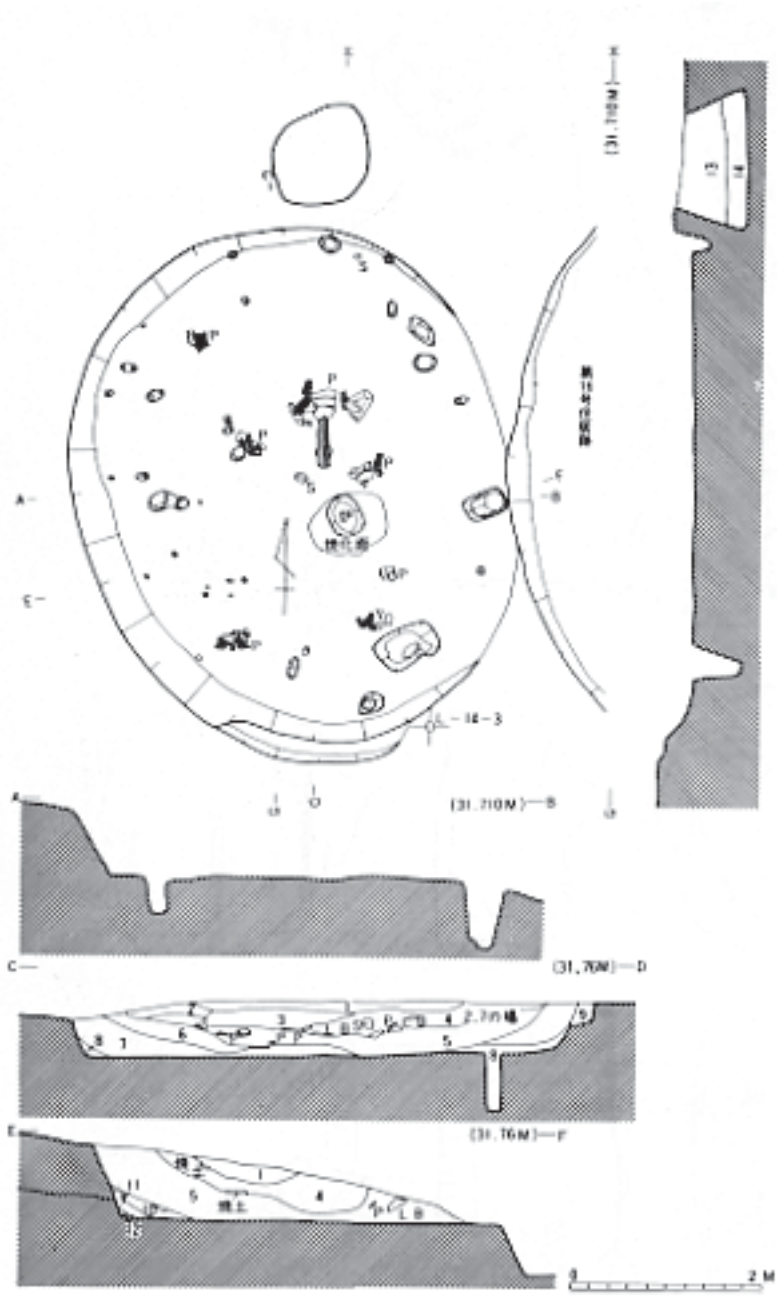


1. 暗褐色土　カーボン・焼土・ローム粒子混入
2. 褐色土　多量の焼土混入
3. 暗褐色土　ローム粒子・カーボン混入
4. 黒褐色土　多量のカーボン混入
5. 暗褐色土　ローム粒子混入
6. 暗褐色土　ローム粒子・小石混入
7. 暗褐色土　ローム粒子若干混入

第 47 図　2 号住居跡実測図

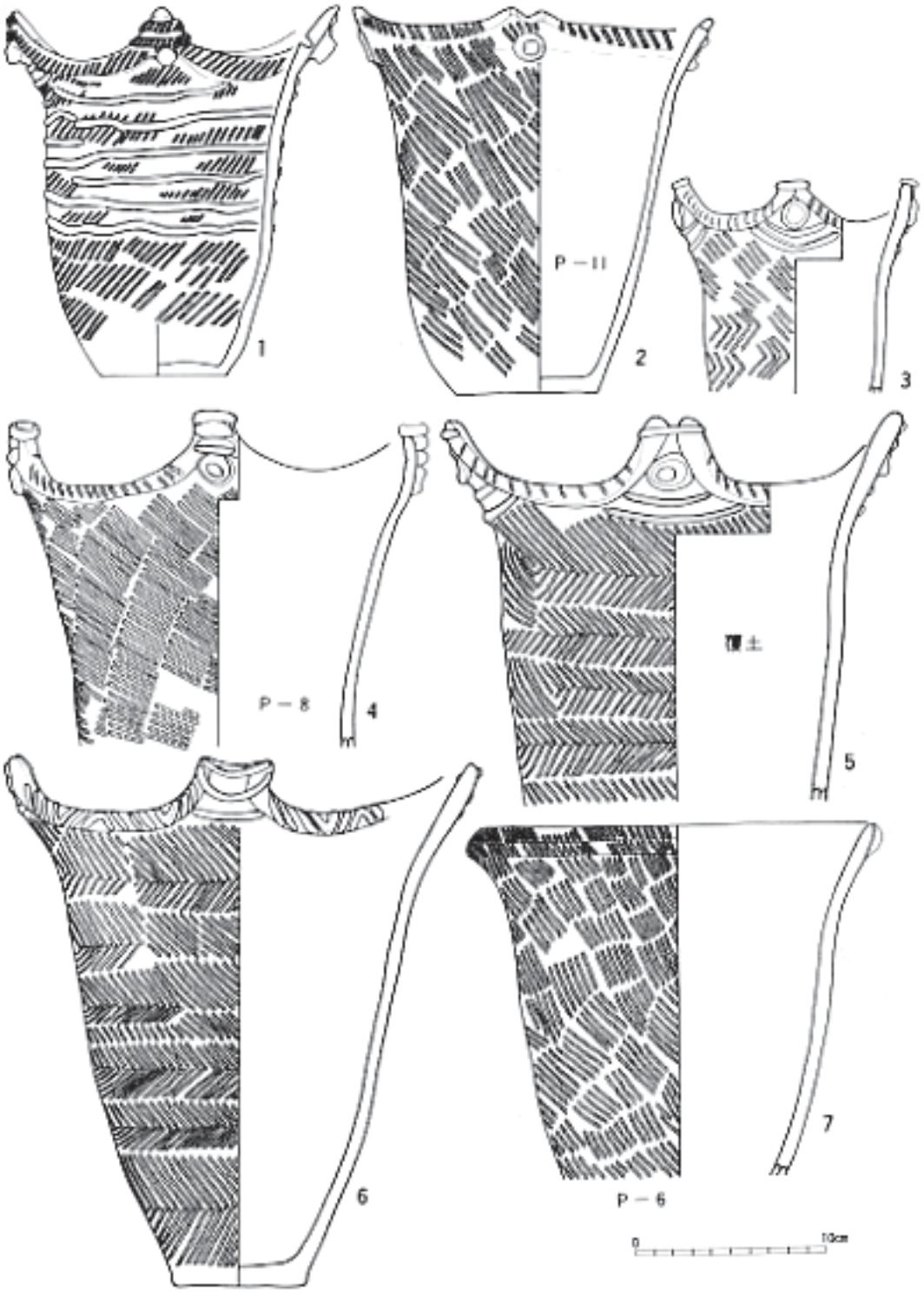


第 48 図　2 号住居跡出土遺物

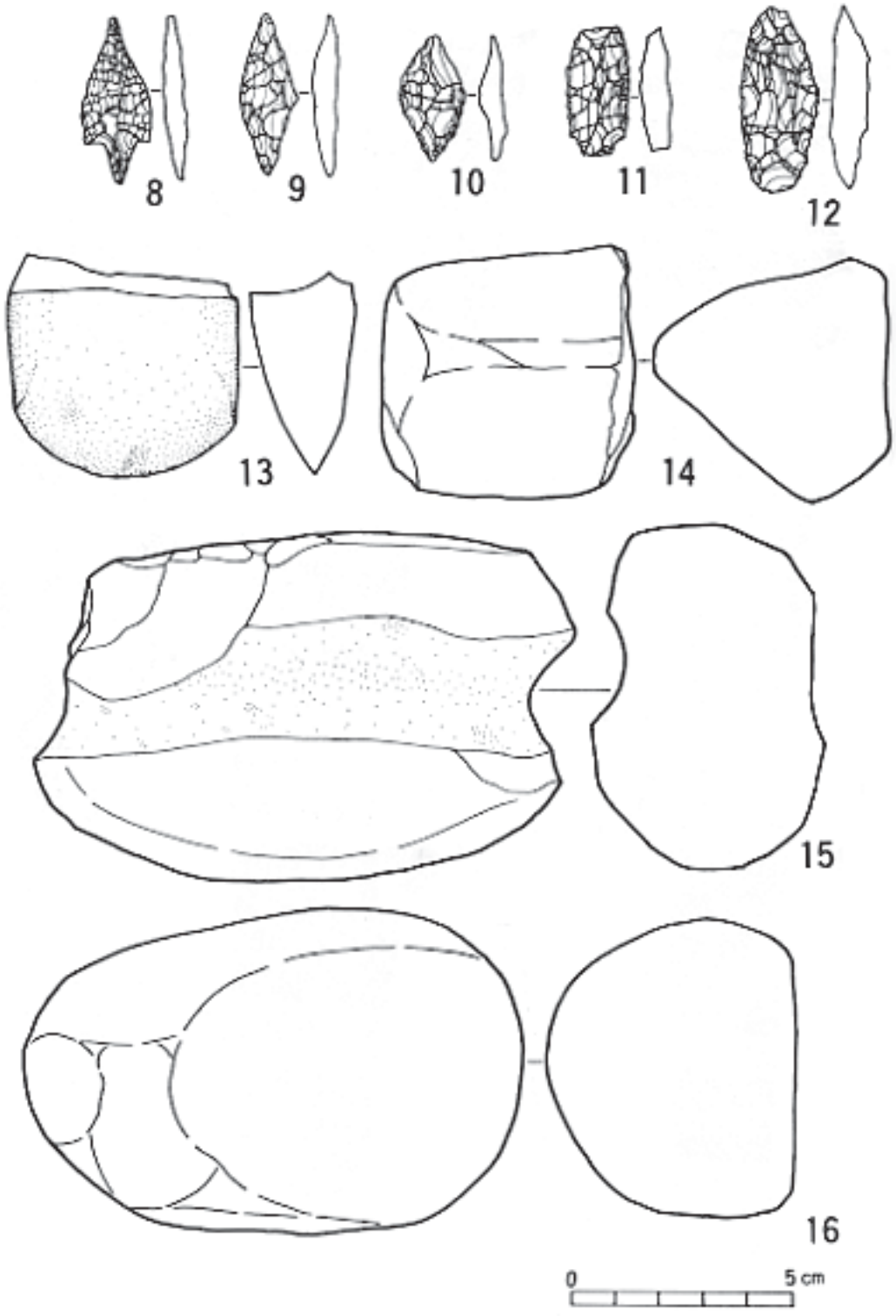


1. 茶褐色土　火山灰とカーボン若干混入
2. 黄褐色土　1と同じ
3. 黒褐色土　火山灰・炭化物混入
4. 暗褐色土　多量の焼土ブロック混入
5. 黒褐色土　少量の火山灰・炭化物混入
6. 黄褐色土　多量の火山灰混入
7. 黒褐色土　3と同じ
8. 黒色土　火山灰・炭化物若干混入
9. 茶褐色土　火山灰若干混入
10. 黒褐色土
11. 黄色土
12. 黒褐色土
13. 褐色土　少量の炭化物と火山灰混入
14. 黒褐色土　少量の炭化物と多量の火山灰混入

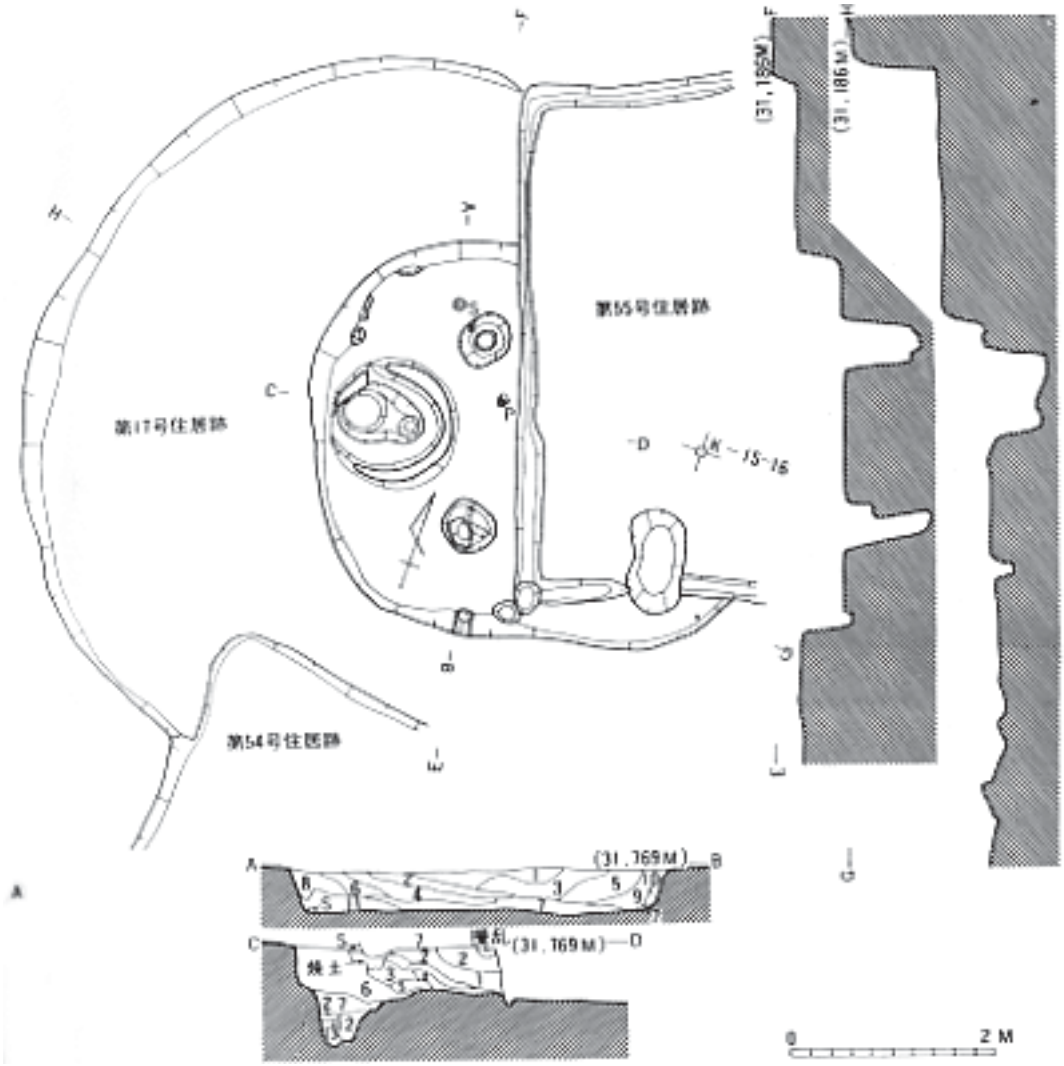
第49図　3号住居跡実測図



第 50 図　第 3 号住居跡出土遺物

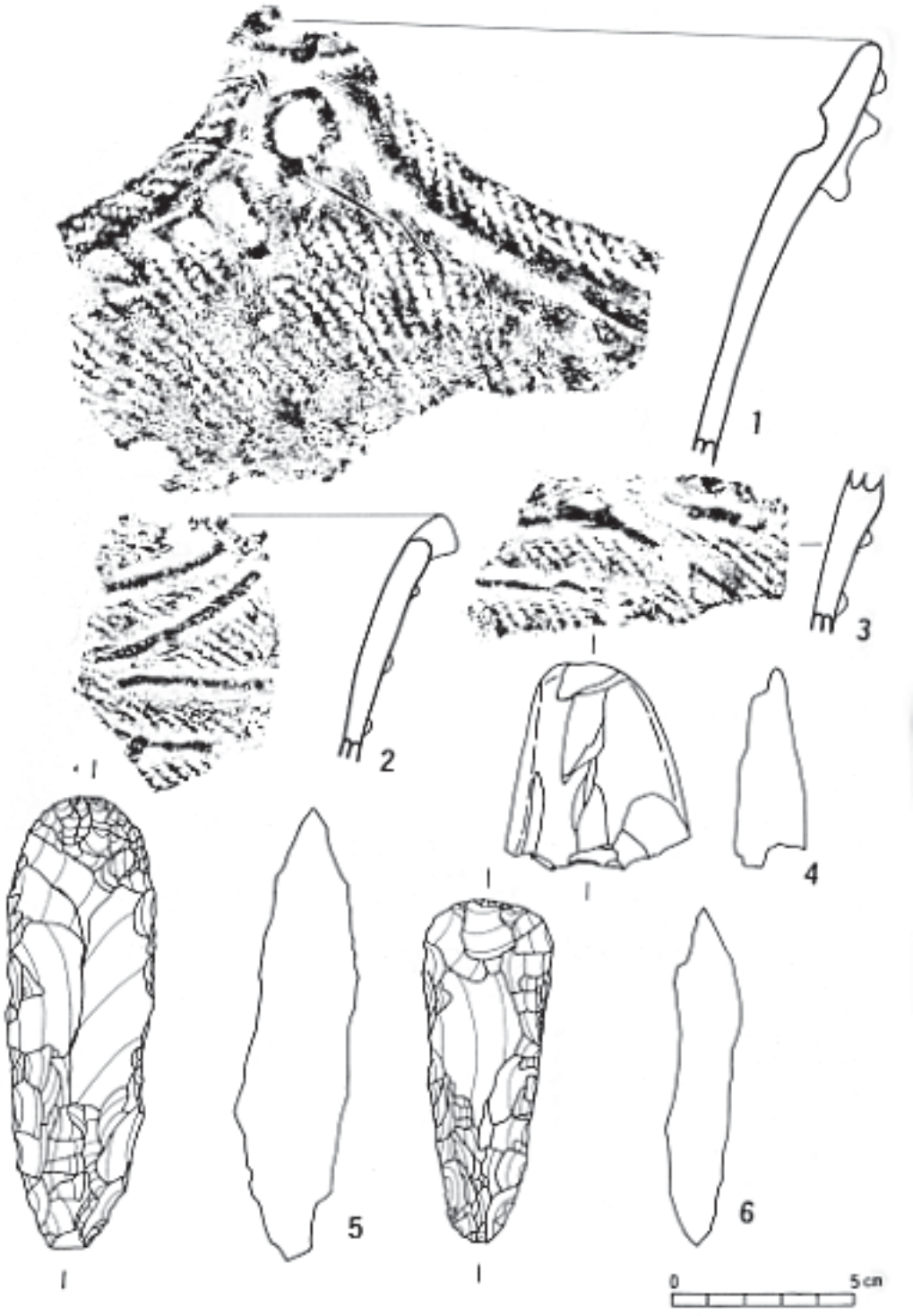


第 51 図　3 号住居跡出土遺物

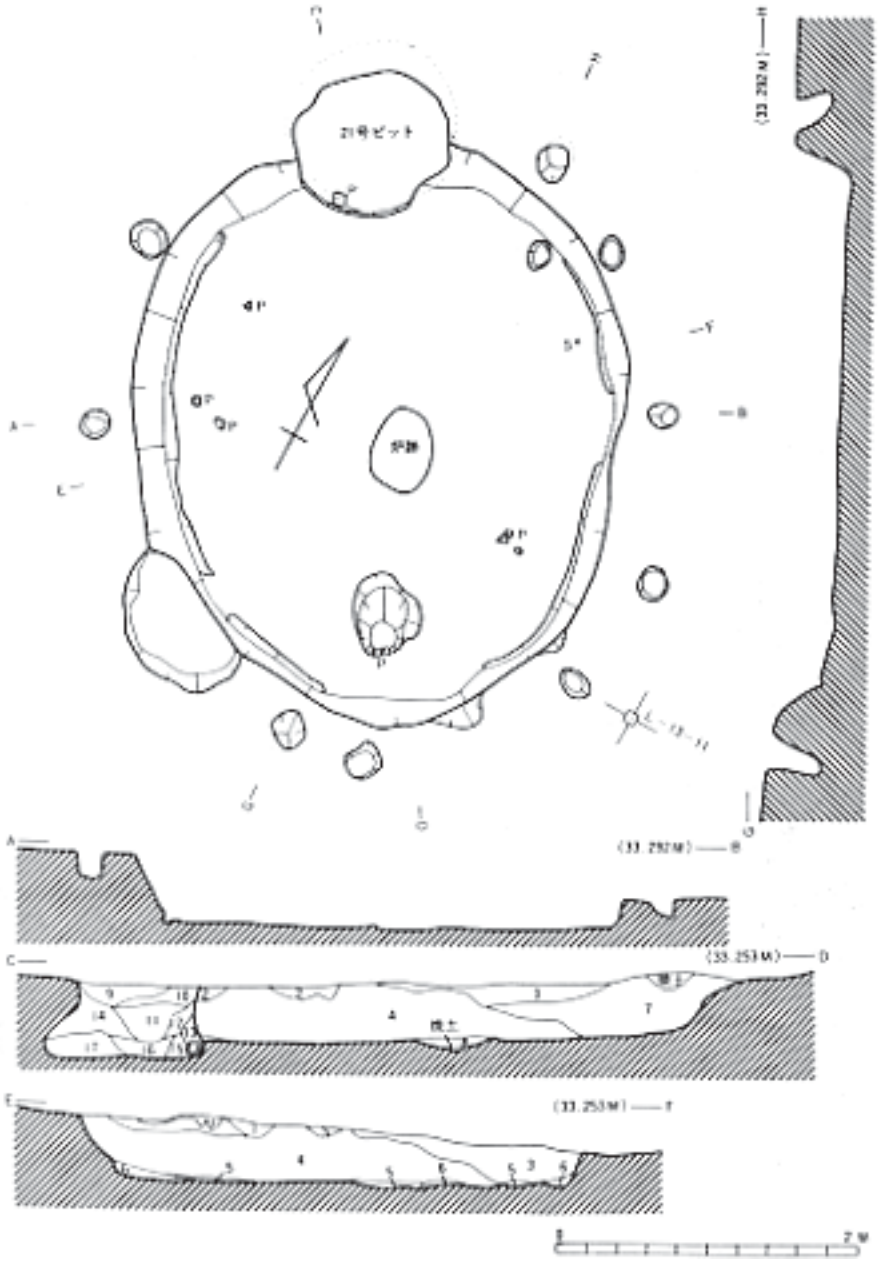


1. 黒色土　ローム粒子・軽石・カーボン混入
2. 黄白色粘土　粘土である
3. 暗褐色土　ローム粒子・焼土・軽石混入
4. 黒色土　ローム粒子・軽石混入
5. 暗褐色土　ローム粒子・軽石・カーボン混入
6. 暗褐色土　多量のローム粒子混入
7. 黒色土　　ローム粒子若干混入
8. 暗褐色土　粘土ブロック・ローム粒子混入
9. 暗褐色土　粘土ブロック・軽石混入
10. 黄褐色土　ローム・ブロック・軽石混入
11. 黒色土　多量のローム粒子混入
12. 黒色土　ローム粒子・軽石混入
13. 暗褐色土　ローム粒子混入

第 52 図　4 号住居跡実測図

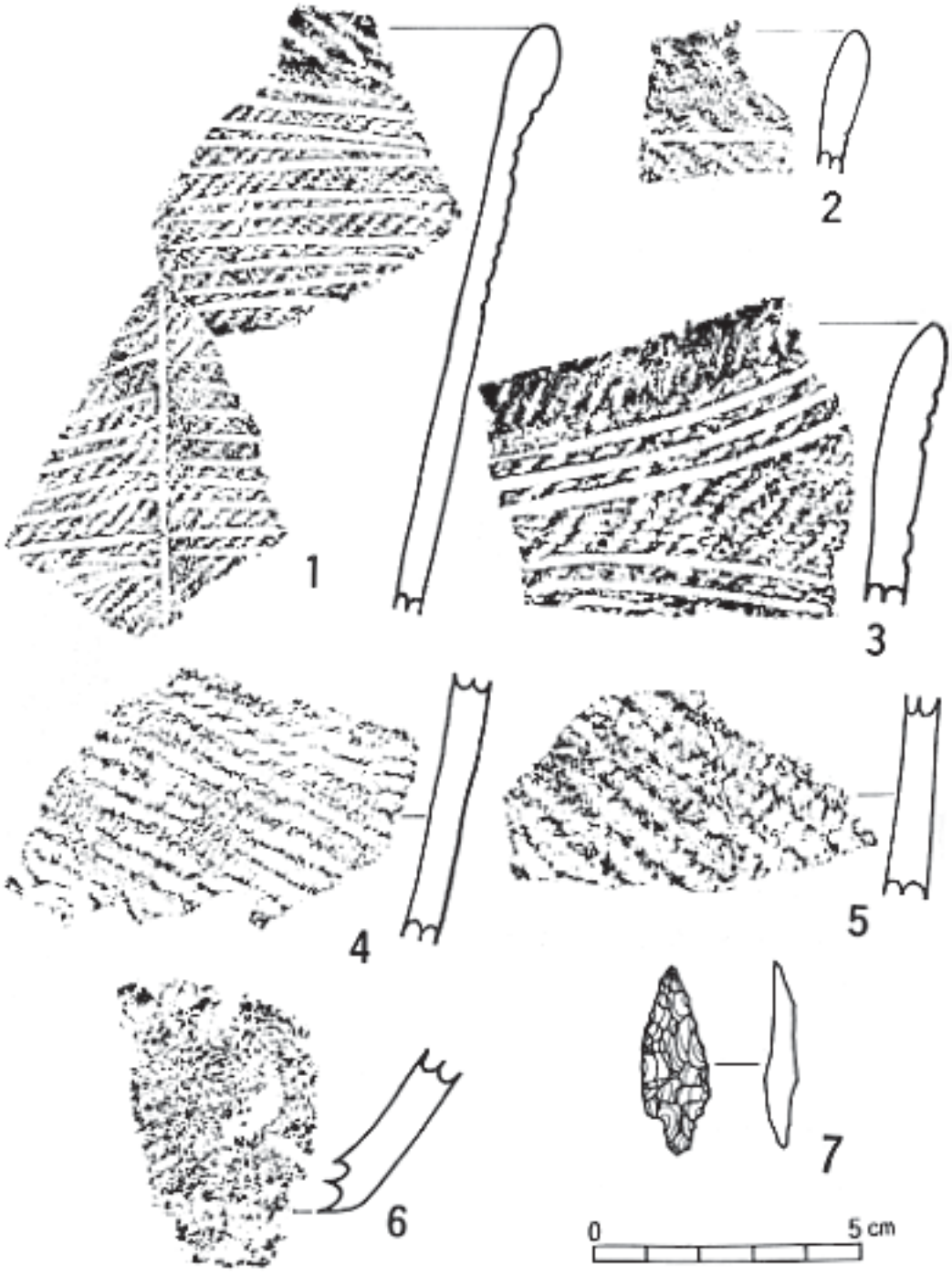


第 53 図　4 号住居跡出土遺物

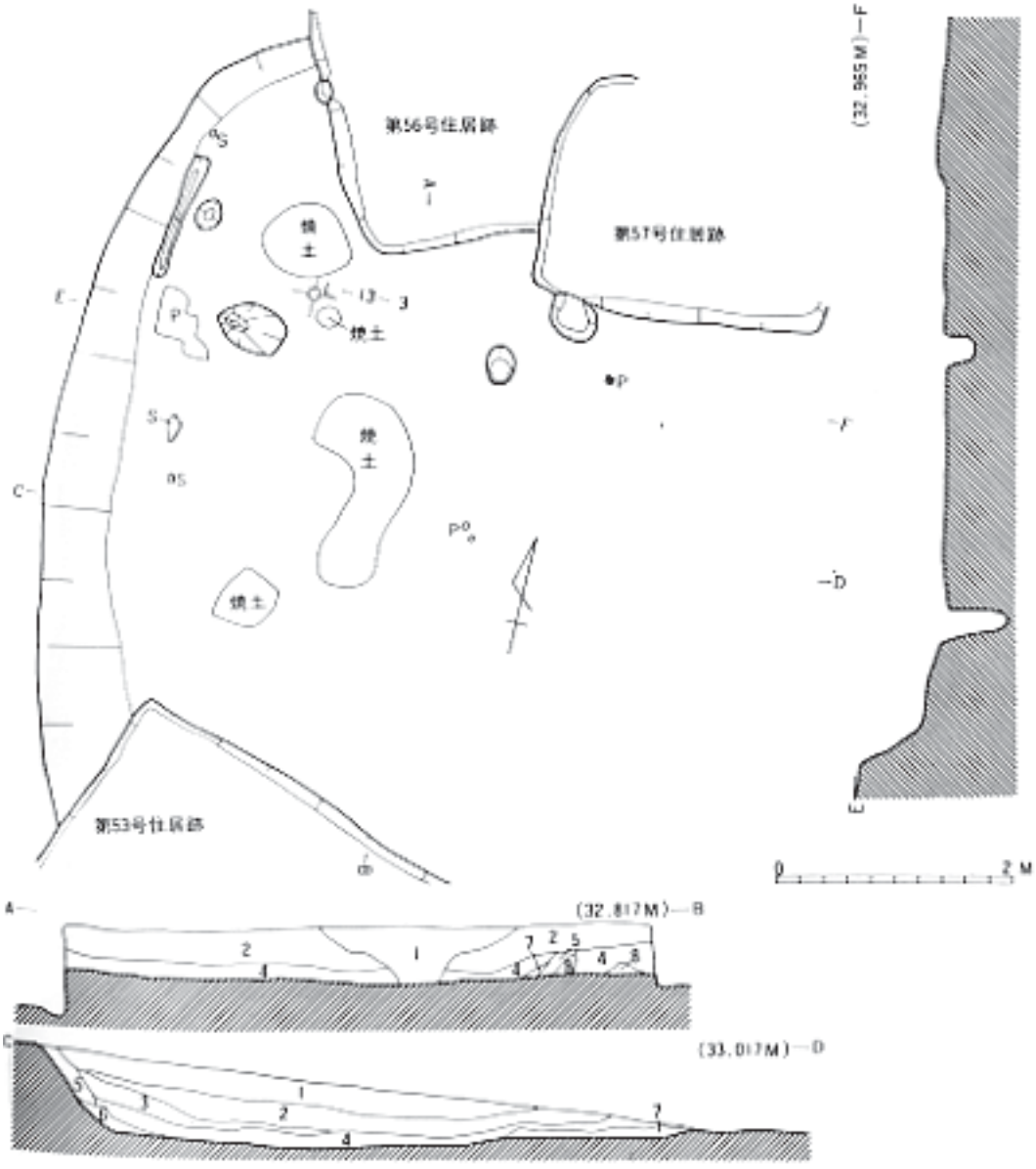


1. 黒色土　小礫・ローム混入
2. 黄褐色土　多量の黄色砂混入
3. 明褐色土　小礫・砂混入
4. 赤褐色粘土　微量の砂とカーボン混入
5. 灰褐色土　ローム・砂・カーボン混入
6. 暗褐色土　砂・小礫・カーボン混入
7. 黒褐色土　砂・礫混入
8. 灰褐色土　多量のカーボン混入
9. 暗褐色土　微量のローム・カーボン混入
10. 黒褐色土　火山灰ブロック混入
11. 黄褐色土　多量の火山灰ブロック混入
12. 明黄褐色土　火山灰ブロック混入
13. 黒色土　ローム・ブロック混入
14. 黒色土　多量のカーボン混入
15. 褐色土　ローム・ブロック混入
16. 黒色土　ローム・ブロック・カーボン混入
17. 黒褐色土　ローム・ブロック・砂・カーボン混入

第 54 図　5 号住居跡実測図

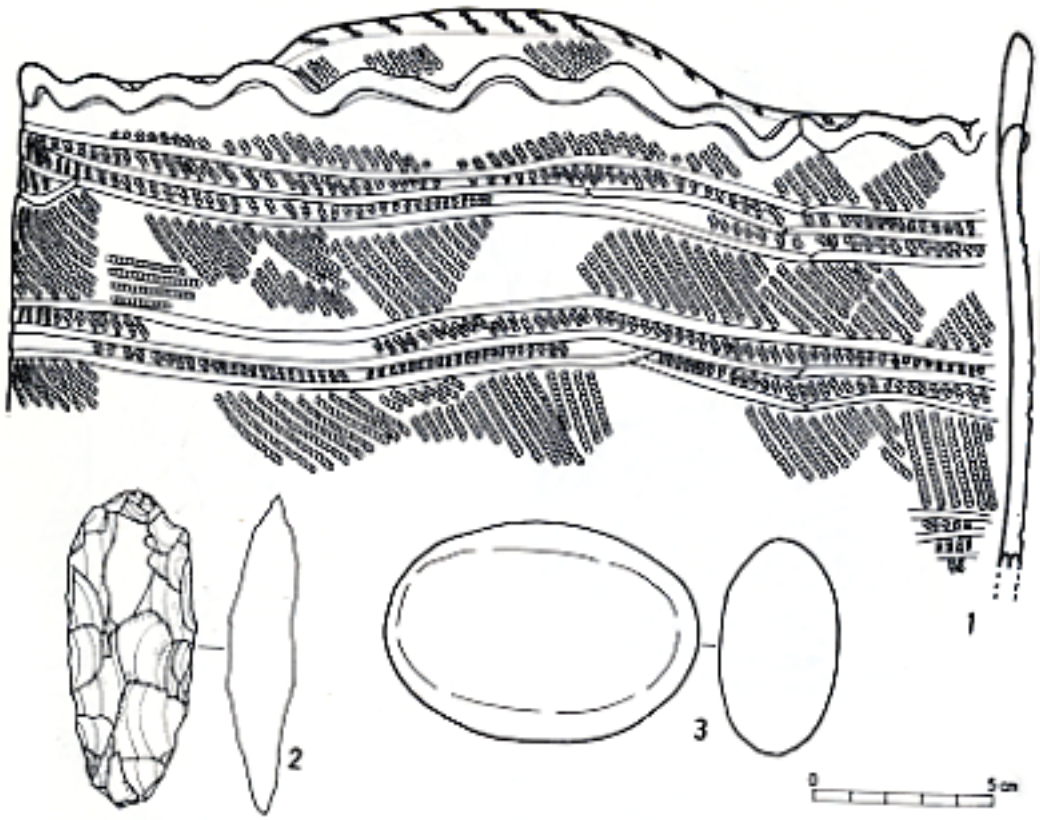


第 55 図　5 号住居跡出土遺物

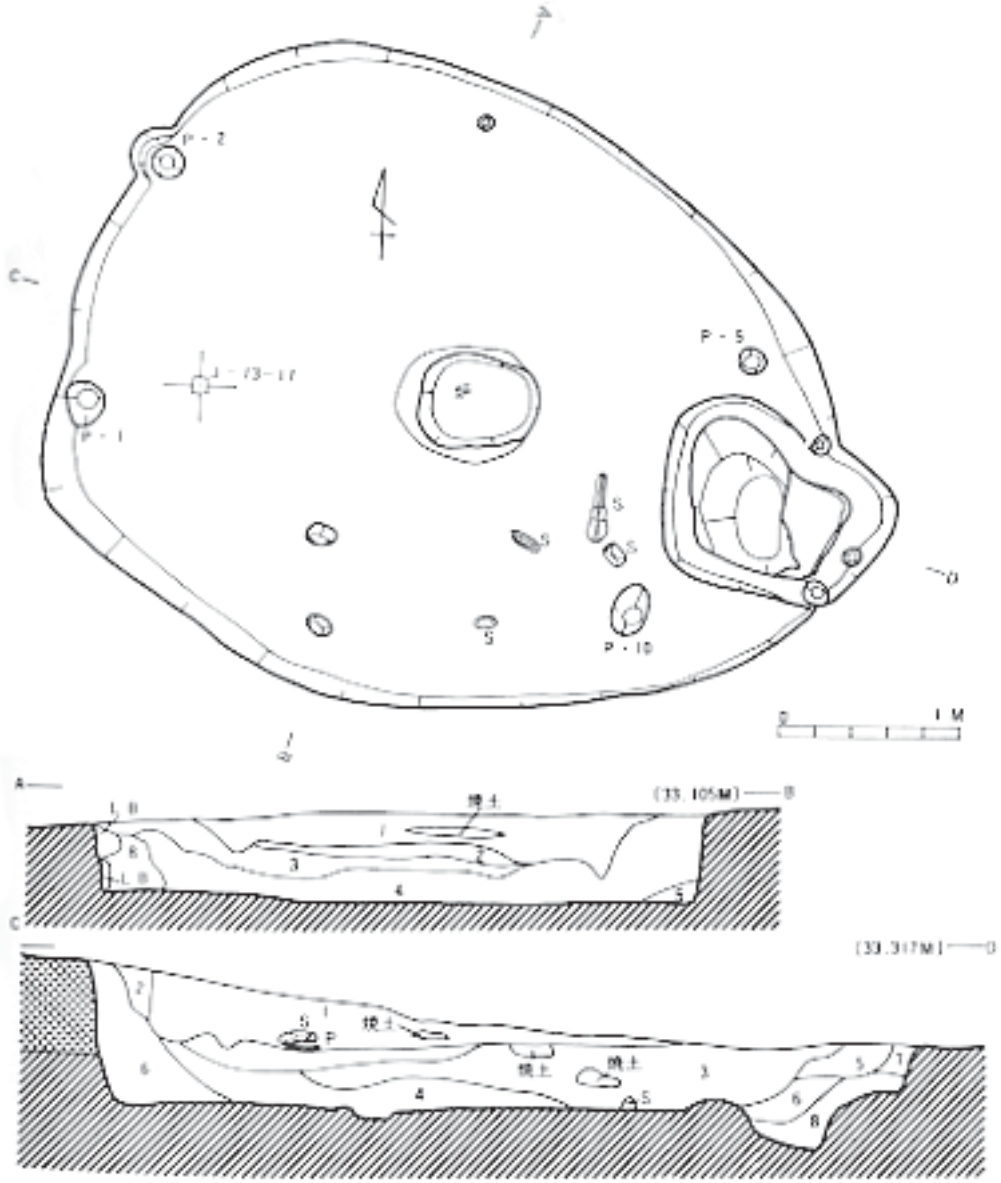


1. 黒褐色土　　火山灰が多量混入
2. 黒褐色土　　火山灰が少量混入
3. 暗褐色土　　焼土が混入
4. 黒色土　　火山灰が多量混入
5. 褐色土　　火山灰混入
6. 黄褐色土　　火山灰が多量混入
7. 褐色土　　6と同じ
8. 明褐色土　　粘土である

第56図　6号住居跡実測図

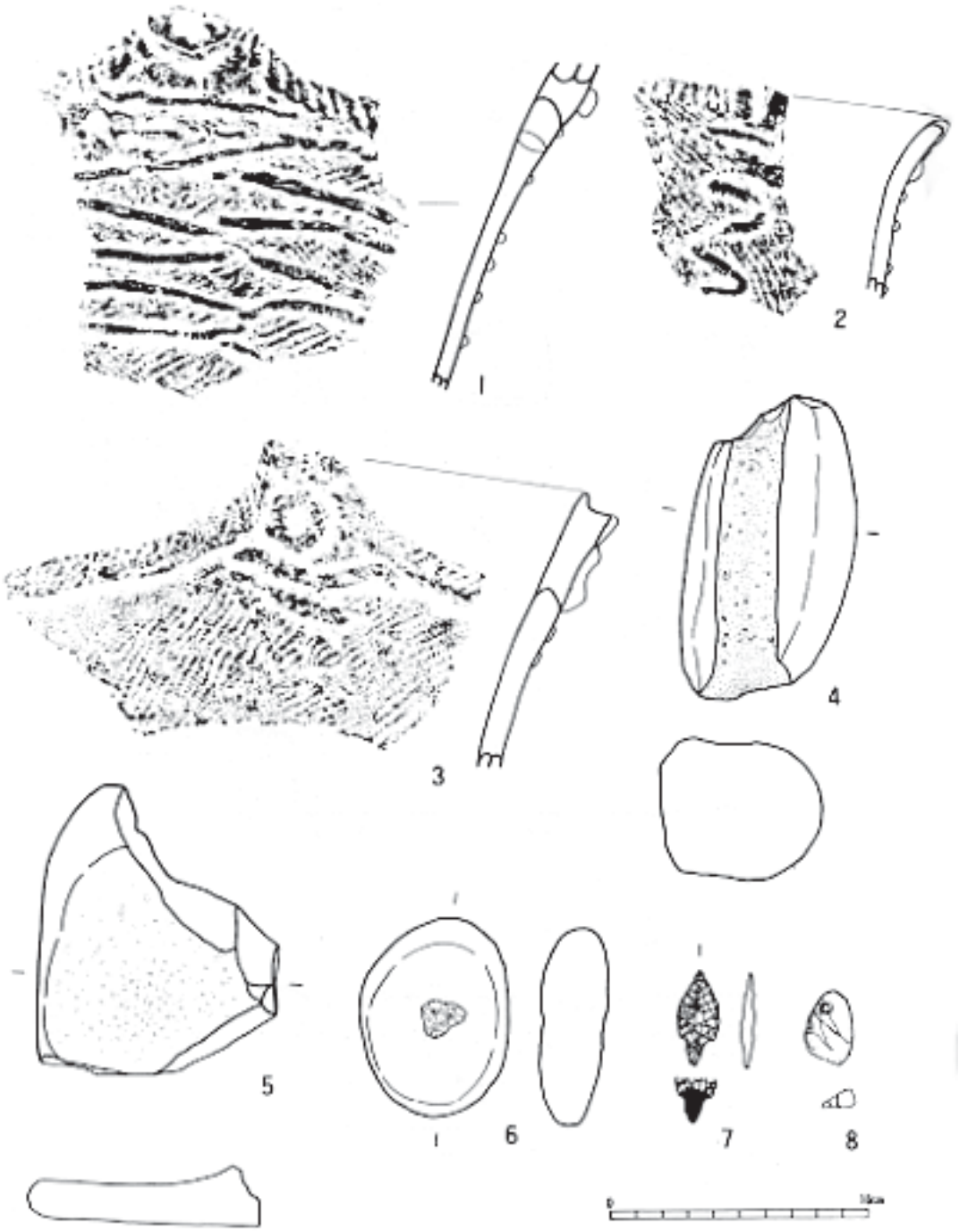


第 57 図　6 号住居跡出土遺物

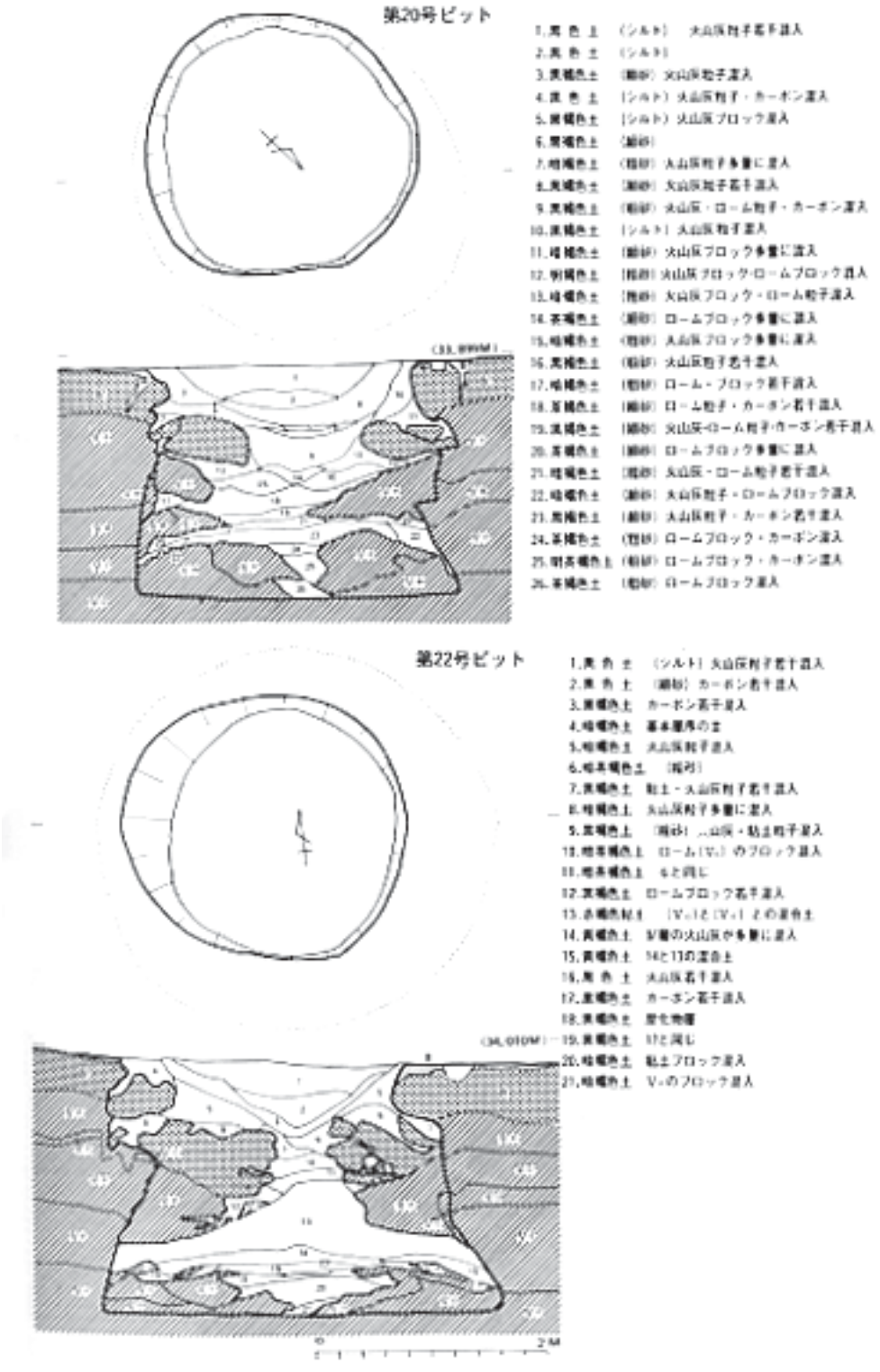


1. 暗褐色土　ローム・ブロック・カーボン混入
2. 明褐色土　粘土である
3. 暗褐色土　焼土ブロック・ローム粒子混入
4. 暗褐色土　ローム粒子若干混入
5. 褐色土　ローム粒子・カーボン若干混入
6. 暗褐色土　多量のローム・ブロック混入
7. 暗褐色土　微量のローム粒子混入
8. 暗褐色土　ローム・ブロック・ローム粒子若干混入

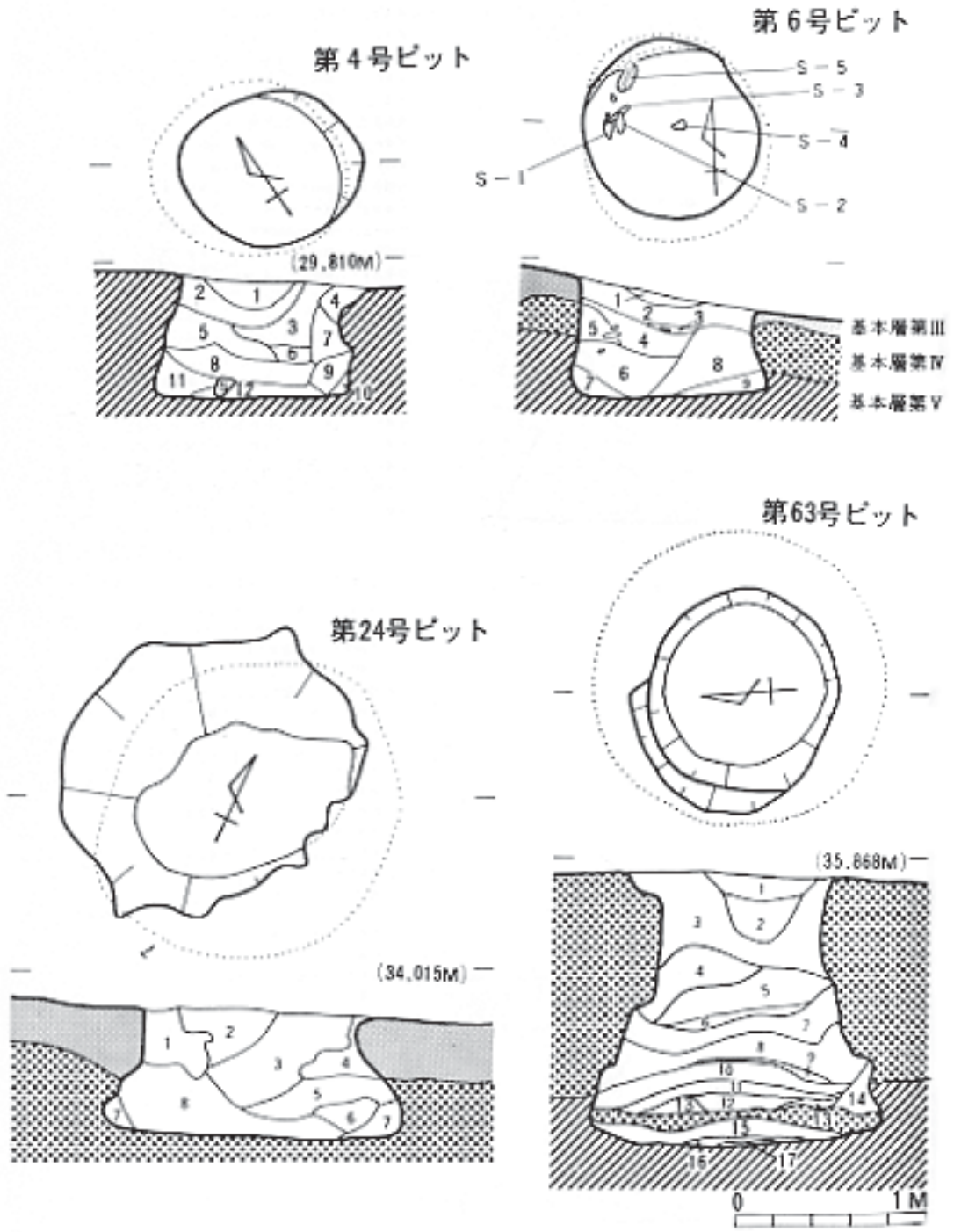
第 58 図　7 号住居跡実測図



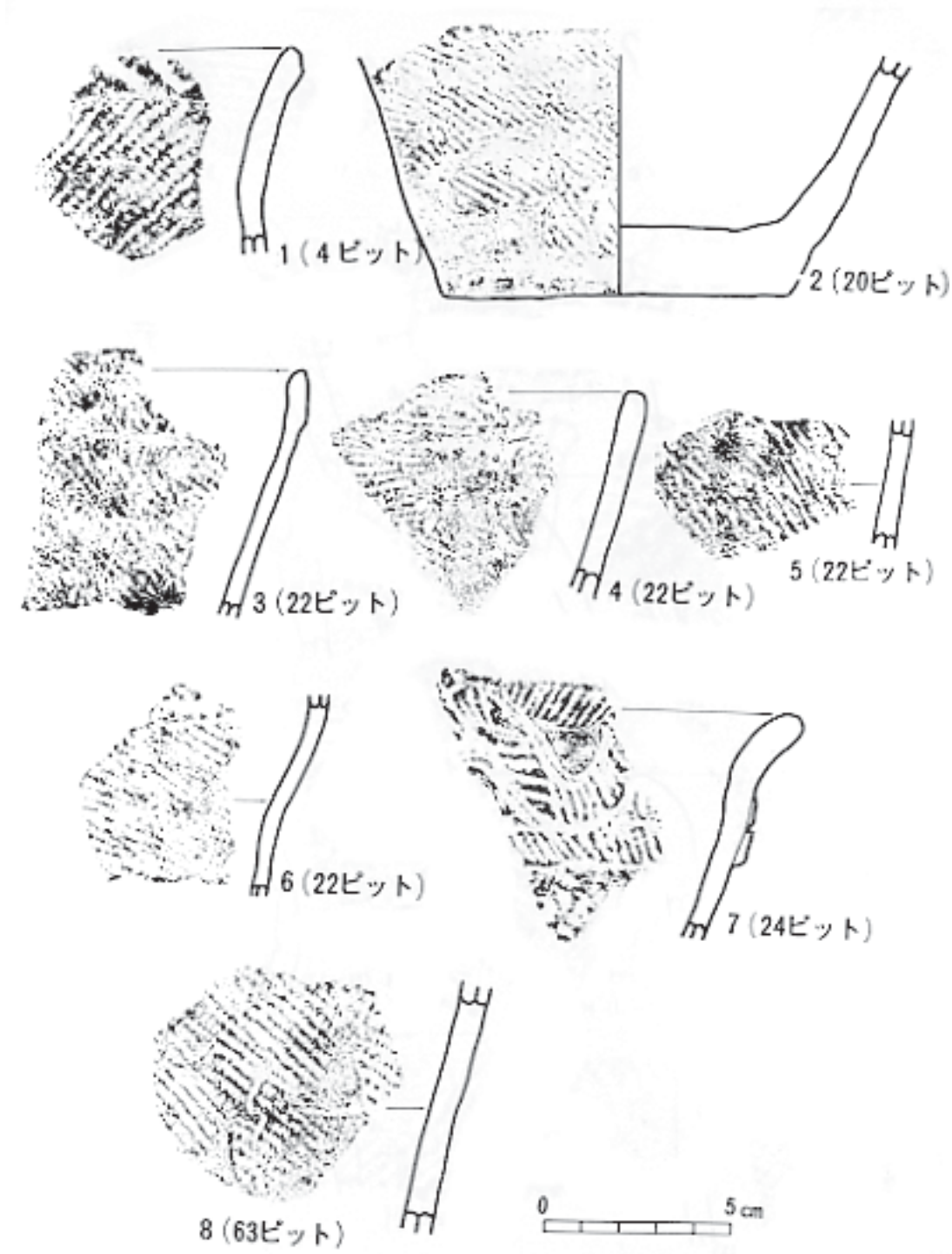
第 59 図　7 号住居跡出土遺物



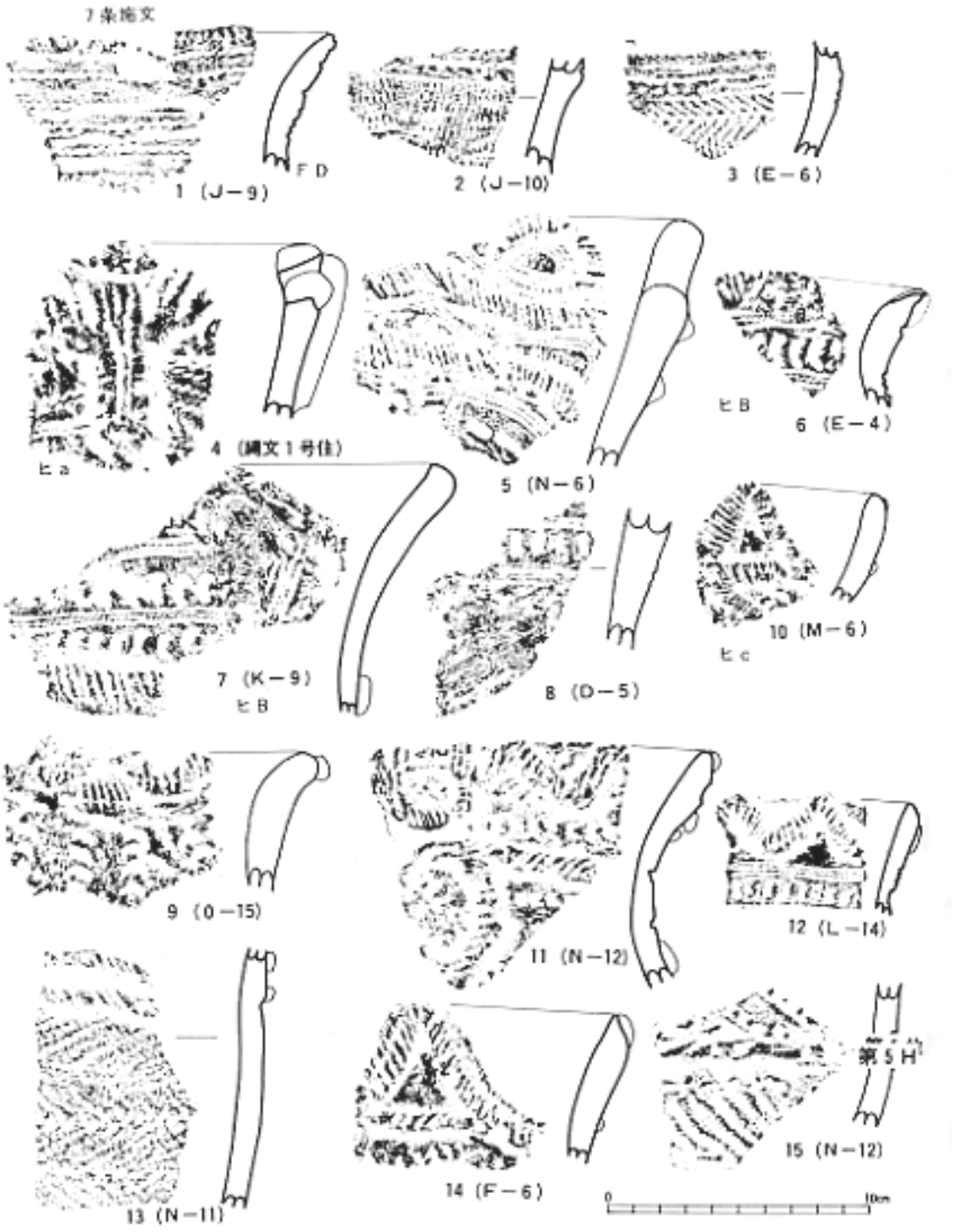
第 60 図　フラスコ状ピット実測図



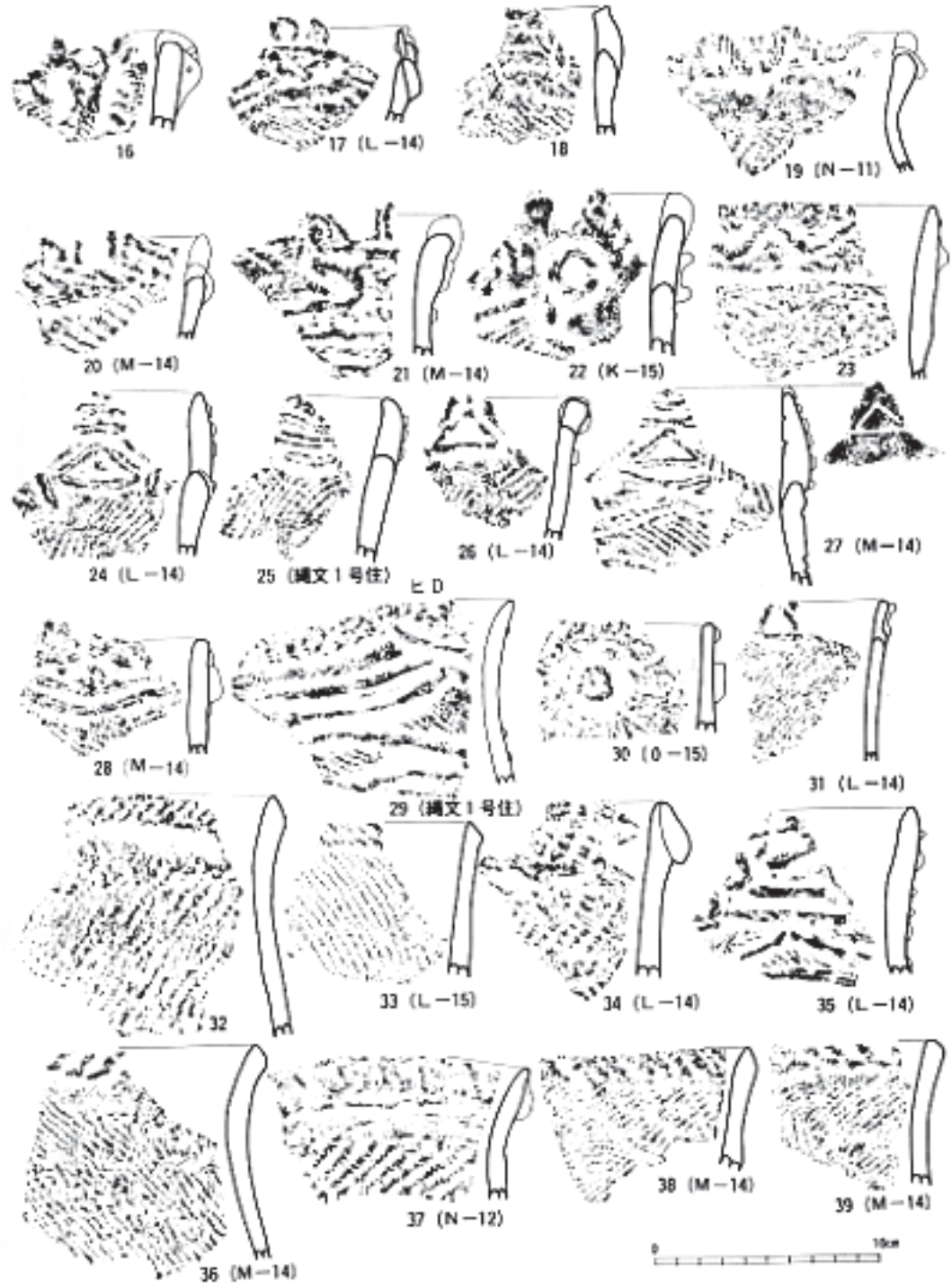
第61図　フラスコ状ピット実測図



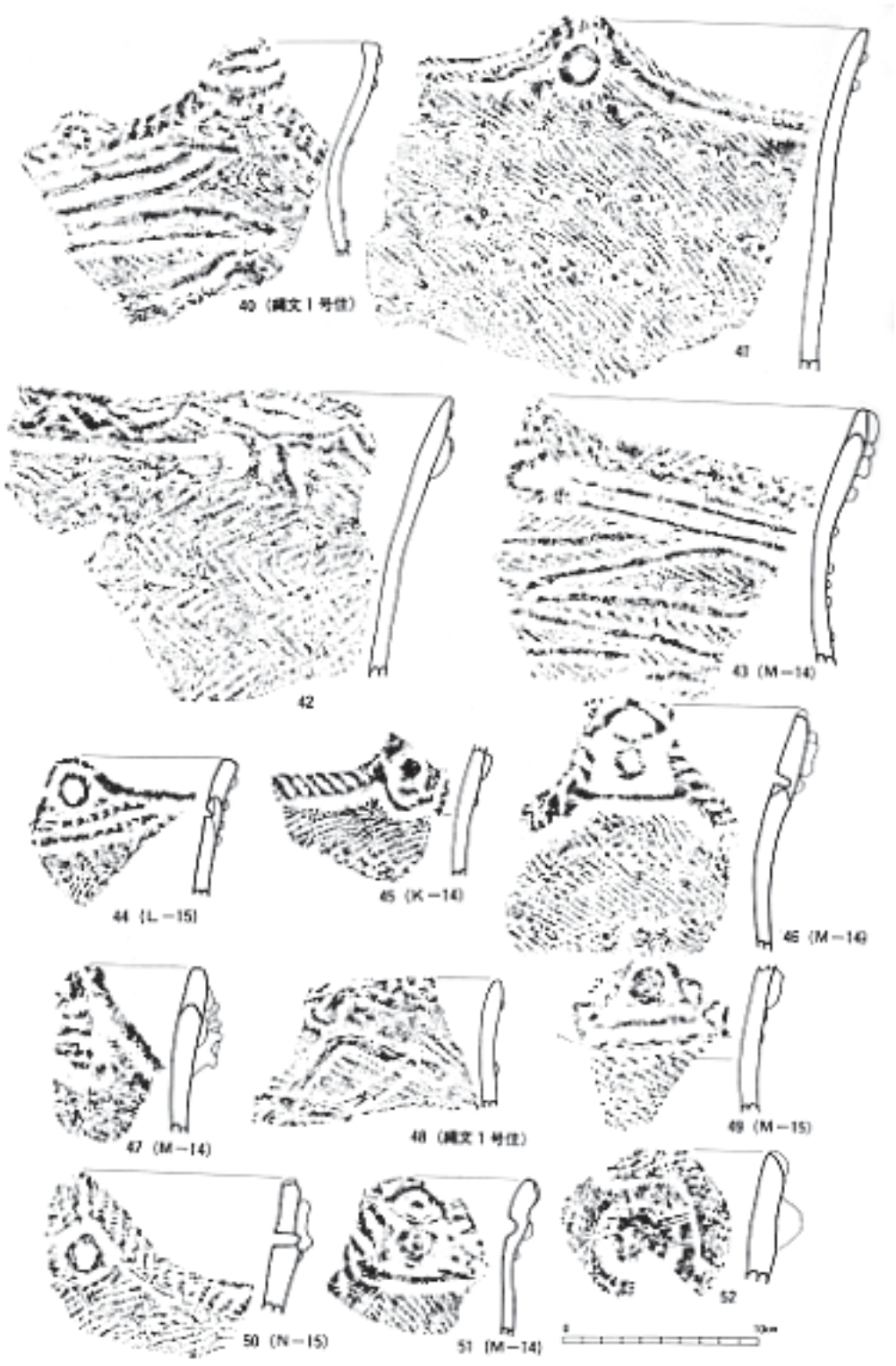
第62図　フラスコ状ピット出土遺物



第63図　遺構外出土遺物

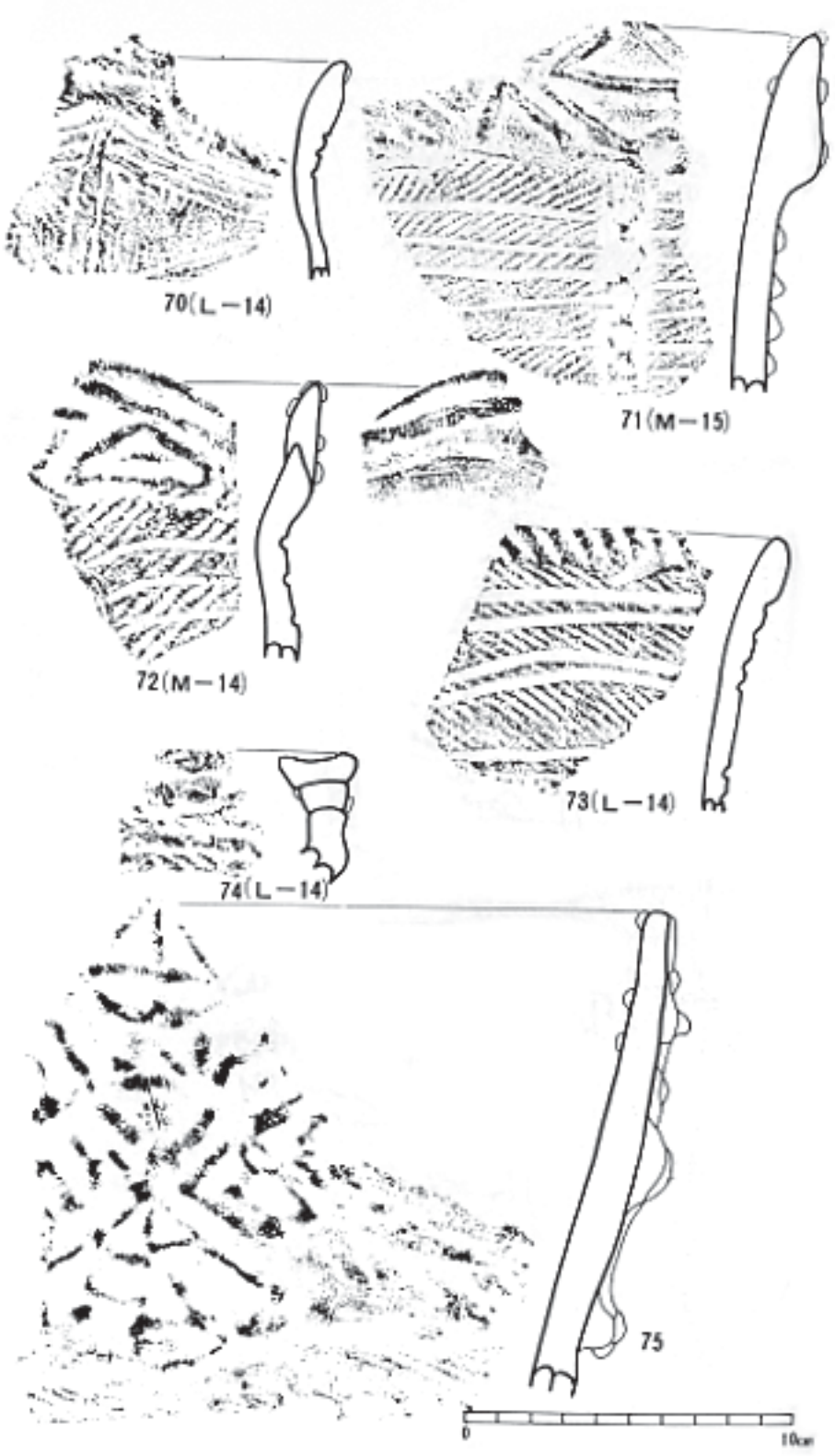


第 64 図　遺構外出土遺物



第65図　遺構外出土遺物

第66図　遺構外出土遺物



第 67 図　遺構外出土遺物

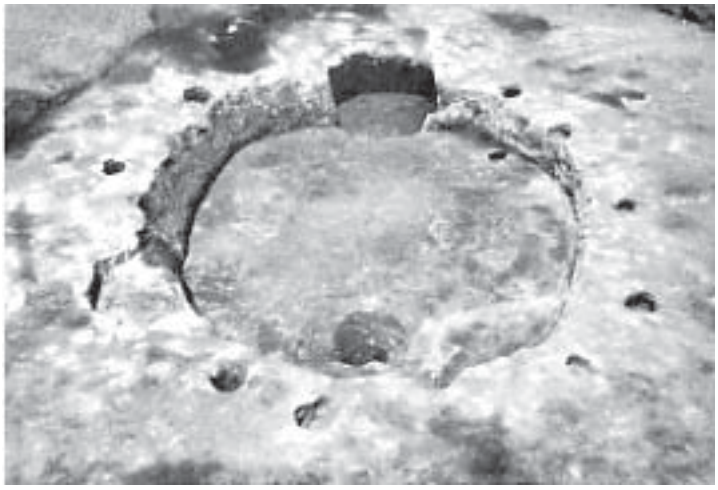
第 1 号住居跡

第 3 号住居跡

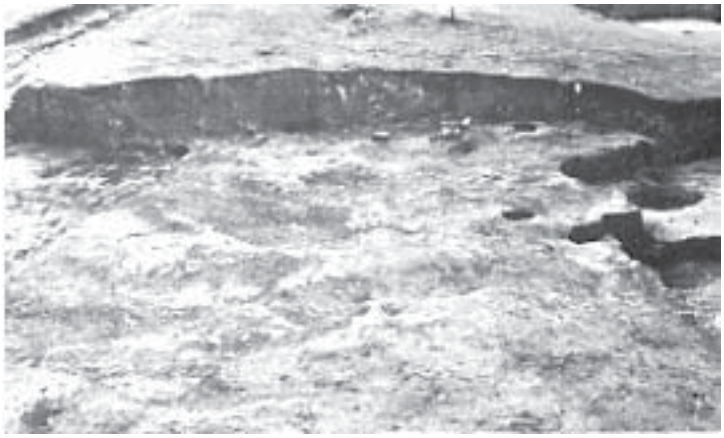
第 4 号住居跡

図版 17

縄文時代中期住居跡



第 5 号住居跡



第 6 号住居跡

第 7 号住居跡

図版 18

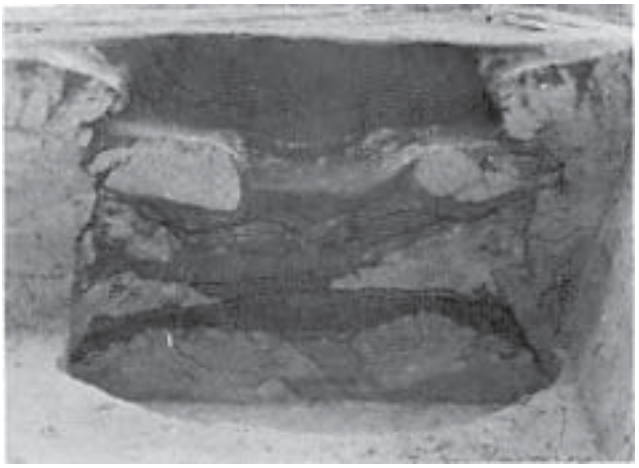
縄文時代中期住居跡

図版 19

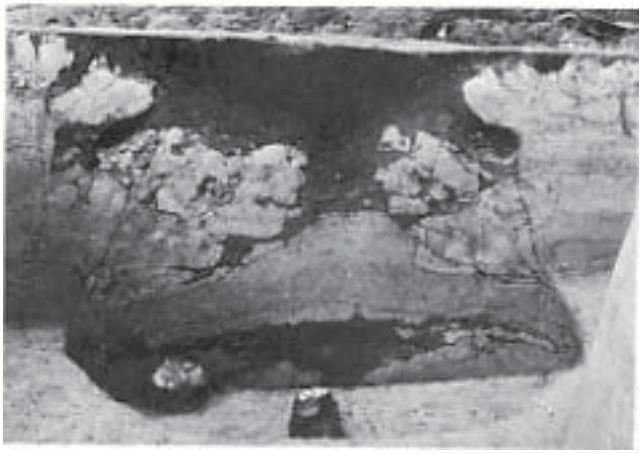
縄文時代中期住居跡出土土器

第 2 号ピット（縄文晩期）

第 21 号ピット（土器出土状態）縄文後期



第 20 号ピット（縄文中期）



第 22 号ピット（縄文中期）

図版 20

ピット遺構

第6章　後　期　編

第1節　後期初頭

遺物は発掘区域全域に散布しているが、遺構としては住居跡4軒、甕棺と思われる土器埋設遺構が1基、その他この時期の土器片が出土したフラスコ状のピットが大小合せて78個が検出されている。

（1）住居跡

6ラインから東側、Gラインから南側の範囲で4軒検出された。確認面が基本層第Ⅴ層でローム層が露出しているため、全体のプランが不明確である。住居跡番号は第8号～第11号までである。

第8号住居跡（第68図）はG－8・9の南東斜面で検出され、推定長径約4mの長円形の住居跡と思われる。中心からやや南側に第90図2の土器を埋設した炉が設置されてあり、小型のものである。確認面からの壁はなだらかに傾斜しており、西側から北側のみにかけて認められた。床面は西側から北側にかけてはローム層を平坦に調整しているが南側から東側にかけては基本層第**III**層暗褐色土を床面としたらしく軟弱でやや南東に傾斜している。柱穴と思われる小ピットは北西の壁沿に3個検出されただけである。床面上の遺物は炉から北西の範囲で認められ、第69図に示すように斜行縄文を施文する深鉢形土器2個体と、無文の三角形岩版1個、全体の約4分の1の石皿の破片である。

第9号住居跡（第70図）はF－8・9の南東斜面で検出され、南東側が未買収の農道になっているため調査した部分は全体の約3分1である。長径9m以上の住居跡と思われるが壁は北西側のみに認められ、壁高は最高部で16cmほどあり内側に傾斜している。北西側はローム層を床面にしているが傾斜する部分には基本層第**IV**層の上に厚さ約10cmほどに黄褐色土を貼って貼床にしている。柱穴と思われるピットは北側で4個、西側で1個、南側で1個検出されている。床面上の遺物は北側の貼床面上に豊富であり、第71図に示すように大型の壺2個体と、石器として篦状石器が2個、小型無文三角形岩版、小型磨製石斧、くぼみ石が各1個づつ出土している。

第10号住居跡（第72図）はF－6・9の比較的平坦面で検出され、塹壕跡によってほぼ南北に切断されている。北側半分はローム層を切って構築しているが、南側半分は粘土を焼いた貼床になっている。全体のプランは長円形と思われるが貼床の部分はかなり削り取られているため変形している。現状は長径7.7m、短径6.2mある。床面のほぼ中央が不整形に特に焼けており、その中央を塹壕が通っているため炉かどうかは不明である。床面は南北とも堅くしまっており、柱穴と思われるピットは北側の壁に沿ってと壁からやや間隔をおいた部分に集中して検出され、南側の貼床の部分では小ピットが1個認められただけである。遺物は第73図と第74図に示してあるが、土器は破片のみで、しかも床面直上からはほとんど出土せず、大半が覆土から出土したものである。第74図に示す石器類は床面から出土したものである。石鏃様の小型石器1

個、磨製石斧１個、くぼみ石が５個である。

第11号住居跡（第75図）はC・D－７の南東傾斜面で検出され、北東側が第８号住居跡（歴史時代）によって切られている。長径8m以上の長円形か隅丸方形プランと思われる。ローム層を切って構築したしたもので壁は北側から西側に認められ、最高部で40cmあり内側になだらかに傾斜している。床面はほぼ南北に撹乱されているため凹凸が認められる。ピットは南北のコーナーに３個認められ、２個は柱穴と思われるが、南端の１個からは第76図１の深鉢土器が出土していることから貯蔵穴と思われる。第76図に示す他の土器片は北側の床面上から出土したものである。

（2）土器埋設遺構（第77図）

Ⅰ－9－1の第**III**層上面で確認され、ピットの中に蓋をした壺形土器が安置されていたものである。ピットは上面が長径約80cmの不整円形で第**IV**層の上面まで皿形状に掘りくぼめ、更に第**IV**層を径25cm深さ20cm前後に円筒形に掘ったもので、確認面からピット底面までの深さは約40cmであるが、掘り込み面は更に上方と思われる。土器はピット底面から約3cmほど浮いて南側にやや傾いていた。土器（第92図－11）は口径が12cm高さ33cm底径10cm胴部最大径22cmで胴上半から口縁にかけてひび割れしていたが原形を保っており、頸部に４個の橋状把手を有し、胴部最張部と頸部に突帯を巡らし、把手から垂下した突帯と連結している。蓋は深鉢形土器の底部で遺物は認められなかった。

（3）ピット遺構

第５図にピット遺構を配置したが、総計111個をかぞえ、早期から晩期まであり、包蔵する土器によって分類した結果、後期初頭に所属すると思われるものは大小合せて78個で最も多い。これらのピット群は平面形が円形でフラスコ状を呈するものが大半で、長円形ピット、長方形ピット、不整形ピットなどがある。性格を裏付る積極的な資料に乏しいためそれぞれの特徴のみについて次に述べたい。凡例は次のとおりである。①検出区、②口径（長径×短径)、③底径(長径×短径)、④深さ、⑤堆積土層位、⑥出土遺物、⑦備考

第１号ピット（第78図）

①０－12－23　②91×80　③126×123　④64　⑤１黒褐色土　２黒褐色土　３黒褐色土　４黒褐色土　５黒褐色土　６黒褐色土　７黒褐色土

第３号ピット（第78図）

①０－13－24　②128×125　③141×124　④100　⑤１暗褐色土　２暗褐色土　３黒褐色土　４暗褐色土　５暗褐色土　６暗褐色土　７暗褐色土　８黒褐色土　９暗褐色土　10黒褐色土　11暗褐色土　12暗褐色土　13黒褐色土　14暗褐色土　15黒褐色土　⑥第144図－16

第８号ピット（第78図）

①N－14－17　②97×92　③100×96　④50　⑤１黒褐色土　２黒色土　３褐色土　４黒褐色土　５暗褐色土　６黄褐色土　７暗褐色土　８黄褐色土　９暗褐色土　10暗褐色土　11黄褐色

土　12黒褐色土　13黄褐色土　14黒褐色土　15黄褐色土　16黒褐色土　17黒褐色土　18黄色土

第9号ピット（第78図）

①N－14－16　②100×95　③70×68　④64　⑤1黒色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4黒褐色土　5黄褐色土　6茶褐色土　7黒色土　8黄褐色土　9黒色土　10黒色土　11黒褐色土　12黒褐色土

第11号ピット（第78図）

①M－11－24　②90×86　③128×127　④79　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9暗褐色土　10赤褐色粘土　11明褐色土

第12号ピット（第78図）

①M－12－12　②345－45　③400×14　④104　⑤1黒褐色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8黒褐色土　9明褐色土　10明褐色土　11暗褐色土　12暗褐色土　13茶褐色土　14黒色土　15暗褐色土　16黒色土　17黒褐色土　18黒褐色土　19明茶褐色土

第13号ピット　（第79図）

①K－13－11　②96－85　③160×125　④92　⑤1黒褐色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8黒褐色土　9明褐色土　10黒褐色土　⑥第107図165・166　第144図－5　第145図－20・21・23

第14号ピット（第79図）

①K－14－16　②122×119　③120×115　④48　⑤第13号ピットと同じ

第15号ピット（第79図）

①K－13－11　②96×85　③160×125　④92　⑤1黒褐色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8黒褐色土　9明褐色土　10黒褐色土　⑥第107図－165・166　第144図－5　第145図－20・21・23

第16号ピット（第79図）

①K－13－21　②143×120　③125×112　④76　⑤1黒褐色　2黒色土　3黄褐色土　4褐色土　5黒褐色土　6黒褐色土　7暗褐色土　8褐色土　9黄褐色土　10褐色土

第17号ピット（第79図）

①K－12－25　②164×161　③156×153　④35　⑤第16号ピットと同じ

第19号ピット（第79図）

①K－12－23　②183×178　③157×152　④118　⑤1黒褐色　2黒褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9暗褐色土　10暗褐色土　11褐色土　12褐色土　13暗褐色土　14暗褐色土　⑦底面に4条の溝有り

第21号ピット（第79図）

①L－12－19　②107×85　③119×110　④48　⑤8灰褐色土　9暗褐色土　10黒褐色土　11黄褐色土　12黄褐色土　13黒色土　14黒色土　15褐色土　16黒褐色土　17黒色土　⑥第95図－31　⑦第5号住居跡北西壁に重複

第28号ピット（第79図）

①J－12－20　②183×162　③147×137　④110　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3暗橙色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6赤褐色土　7茶褐色土

第29号ピット　（第79図）

①J－12－15　②90－86　③96×96　④59　⑤第28号ピットと同じ

第31号ピット（第80図）

①J－11－19　②73×70　③125×140　④76　⑤1黒色土　2黒褐色土　3黒褐色土　4茶褐色土　5暗褐色土　6黒色土　7暗黒褐色土　8黒色土

第33号ピット（第80図）

①J－11－17　②85×75　③130×130　④50　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7褐色土　8黒褐色土　9暗褐色土　10暗褐色土

第34号ピット（第80図）

①J－11－16　②107×106　③131×120　④45　⑤1黒褐色土　2黒色土　3黒褐色土　4暗褐色土　5黄褐色土　6黄褐色土　7暗褐色土　8黄褐色土　9暗褐色土　10黄褐色土

第36号ピット（第80図）

①K－10－2　②185×182　③143×137　④71　⑤1暗褐色土　2黒褐色土　3褐色土　4黄褐色土　5黒褐色土　6赤褐色土　7赤褐色土　8黄褐色土　9暗褐色土　10黒褐色土　11黄褐色土　12暗褐色土　13暗褐色土　14黒褐色土　⑦底面中央にピット有り

第37号Aピット（第80図）

①J－10－11　②158×56　③140×50　④44　⑤1褐色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4黄褐色土　5暗褐色土

第37号Bピット（第80図）

①J－10－7　②140×52　③126×44　④14　⑤1黒色土

第37号Cピット（第80図）

①J－10－18　②131×66　③119×58　④22　⑤1黒褐色土　2黒褐色土

第37号Dピット（第80図）

①J－10－17　②102×55　③85×46　④10　⑤1黒色土

第38号ピット（第80図）

①J－10－8　②270×234　③235×195　④38　⑤1黒褐色土　2褐色土　⑥第144図－15　⑦底面にピット有り

第40号ピット（第80図）

①Ⅰ－10－12　②152×142　③130×120　④70　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7明褐色土　8黄褐色土　10暗褐色土　11暗褐色土

第41号ピット（81図）

①Ⅰ－9－19　②171×162　③144×142　④53　⑤1黒色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4明褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7茶褐色土　8黄褐色土　9茶褐色土　10明茶褐色土

第42号ピット（第81図）

①Ⅰ－9－18　②145－135　③170×147　④100　⑤1黒色土　2黒褐色土　3黄白色粘土　4暗褐色土　5黒褐色土　6茶褐色土　7黒褐色土　8茶褐色土　9黒褐色土　10暗褐色土　11黄褐色土　12暗褐色土　13黄褐色土　14黄褐色土（埋土である）　15茶褐色土　16暗褐色土　17暗褐色土　18黒褐色土　19茶褐色土　20黄褐色土　21褐色土　22黄褐色土　23茶褐色土

第43号ピット（第81図）

①Ⅰ－9－3　②80×80　③105×103　④60　⑤1暗褐色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4明褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7明褐色土　8黄褐色土　9明褐色土　10暗褐色土　11黒褐色土

第45号ピット（第81図）

①Ⅱ－10－11　②123×110　③156×149　④152　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6茶褐色土　7明褐色土　8暗褐色土　9黒褐色土　10黒褐色土　11黒褐色土　12黒褐色土　13黒色土　14黒褐色土　15黒褐色土　16明茶褐色土

第46号ピット（第81図）

①Ⅱ－9－10　②190×170　③215×210　④189　⑤1暗褐色土　2黒褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8黒褐色土　9暗褐色土　10明褐色土　11暗褐色土　12茶褐色土　13黒褐色土　14黒褐色土　15黒褐色土　16黒褐色土　⑥第105図－125　第107図－168　⑦底面中央にピット有り

第47号ピット（第81図）

①Ⅱ－9－13　②92×92　③136×135　④68　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6明褐色土　7暗褐色土　8黒褐色土　⑥第98図－12　第144図－11

第48号ピット（第81図）

①Ⅱ－9－17　②283×240　③156×149　④152　⑤1灰褐色土　2暗褐色土　3明褐色土

第49号ピット（第82図）

①Ⅱ－9－16　②160×140　③215×210　④189　⑤1黒色土　2黒褐色土　3褐色土　4黒褐色土　5褐色土　6褐色土　7褐色土　8黄白色土　9黒褐色土　10黒褐色土　11黄褐色土　12黒褐色土　13黒褐色土

第50号Aピット（第82図）

①Ｈ－９－12　②123×103　③136×135　④68　⑤1黒褐色土　2黄褐色土　3明褐色土　4暗褐色土　5明褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8暗褐色土　9暗褐色土　10白色粘土　11灰褐色土　12明褐色土　13暗褐色土　14明褐色土　15暗褐色土　16黒褐色土　17暗褐色土　18暗褐色土　19黒褐色土　20黒褐色土　21黒褐色土　22暗褐色土　23白色粘土　24白色粘土　25暗褐色土　26暗褐色土

第50号Bピット（第82図）

①Ｈ－９－7　②110×105　③90×88　④80　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6黒色土　7黒褐色土　8暗褐色土　9明褐色土　10黒褐色土

第51号ピット（第82図）

①Ｈ－８－15　②115×108　③112×104　④90　⑤1黒色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4明褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土

第52号ピット（第82図）

①Ｈ－９－3　②100×90　③135×130　④75　⑤1黒褐色土　2明褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7明褐色土　8暗褐色土　⑥第107図－177

第53号ピット（第82図）

①Ｇ－９－22　②124×119　③120×112　④54　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7明褐色土　8暗褐色土　9黒褐色土

第54号ピット（第82図）

①Ｇ－９－21　②115×110　③91×86　④40　⑤1黒色土　2暗褐色土

第55号ピット（第82図）

①Ｇ－９－21　②100×90　③105×100　④71　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土

第56号ピット（第82図）

①Ｈ－８－5　②105×90　③135×130　④75　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9暗褐色土　10明褐色土

第57号ピット（第82図）

①Ｈ－８－10　②91×79　③120×116　④100　⑤第56ピット参照

第58号ピット（第83図）

①Ｈ－８－12　②100×95　③137×120　④89　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4明褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7明褐色土　8黄色土

第60号ピット（第83図）

①Ｈ－８－8　②117－90　③130×120　④106　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7黒褐色土　8茶褐色土　9黄色土

第 61 号ピット（第 83 図）

①Ｈ－８－３　②110 × 104　③100 × 97　④52　⑤１暗褐色土　２明褐色土　３暗褐色土　４黒褐色土　５明褐色土　６暗褐色土　７暗褐色土

第 64 号ピット（第 83 図）

①Ｇ－９－16　②97 × 83　③137 × 120　④107　⑤１暗褐色土　２明褐色土　３暗褐色土　４黒褐色土　５明褐色土　６暗褐色土　７暗褐色土

第 65 号ピット（第 83 図）

①Ｇ－９－17　②90 × 89　③113 × 107　④68　⑤１黒色土　２茶褐色土　３黒褐色土　４暗褐色土　５暗褐色土　６黒褐色土　７暗褐色土

第 66 号ピット（第 83 図）

①Ｇ－８－14　②92 × 82　③102 × 96　④90　⑤１黒褐色土　２褐色土　３暗褐色土　４黒褐色土　５明褐色土　６黒褐色土　７暗褐色土　８黄白色土　９黒色土　10暗褐色土　11暗褐色土　12褐色土　⑥第 105 図－ 131

第 67 号ピット（第 83 図）

①Ｇ－８－７　②116 × 106　③150 × 140　④124　⑤１黒色土　２暗褐色土　３暗褐色土　４黒色土　５茶褐色土　６黒褐色土　７黒褐色土　８黄褐色土　９暗褐色土　10暗褐色土　11黒褐色土　12 茶褐色土

第 68 号ピット（第 83 図）

①Ｇ－８－２　②131 × 115　③145 × 133　④90　⑤１黒褐色土　２暗褐色土　３暗褐色土　４暗褐色土　５明褐色土　６黒褐色土　７黒褐色土　８黒褐色土　９明褐色土　10黒褐色土　11明褐色土　12 黒褐色土

第 69 号ピット（第 84 図）

①Ｆ－８－７　②160 × 145　③190 × 160　④104　⑤１黒色土　２暗褐色土　３黒褐色土　４黒褐色土　５黒色土　６暗褐色土　７黒褐色土　８暗褐色土　９黒褐色土　10明褐色土　11黒褐色土　12 黒褐色土　13 黄褐色土　14 暗褐色土　⑥第 106 図－ 156　第 109 図－ 196

第 70 号ピット（第 84 図）

①Ｆ－８－１　②115 × 105　③135 × 125　④70　⑤１黒褐色土　２暗褐色土　３褐色土　４明褐色土　５黒褐色土　６暗褐色土　７黒褐色土

第 71 号ピット（第 84 図）

①Ｄ－６－８　②252 × 182　③235 × 160　④37　⑤１黒褐色土　２灰褐色土　３黒褐色土　４灰褐色土　５茶褐色土

第 72 号ピット（第 84 図）

①Ｄ－４－24　②230 × 145　③205 × 128　④27　⑤１黒褐色土　２灰褐色土　３黒褐色土　４黄色ローム　５灰褐色土　６暗褐色土　７暗灰褐色土　８暗褐色土　９黒褐色土　10 灰褐色

土　11 黄灰色ローム

第 73 号ピット（第 84 図）

①Ｆ－７－22　②125 × 95　③150 × 130　④160　⑤１黒色土　２黒褐色土　３暗褐色土　４暗褐色土　5暗褐色土　6茶褐色土　7茶褐色土　8茶褐色土　9茶褐色土　10黒褐色土　11暗褐色土　12 黄褐色火山灰　13 黄褐色土　14 黒褐色土　15 暗褐色土　16 暗褐色土　16 暗褐色土　17 暗褐色土　18 黒褐色土　19 暗褐色土　20 黒褐色土　⑥第 99 図－ 26　第 105 図－ 129

第 74 号ピット（第 85 図）

①Ｇ－７－14　②117 × 85　③160 × 153　④152　⑤A1 黒褐色土　２茶褐色土　３黒褐色土　４黒褐色土　5黒褐色土　6暗褐色土　7黄褐色土　8黄褐色土　9暗褐色土　10黒褐色土　11黄褐色土　12暗褐色土　B1黒褐色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5茶褐色土　6黄褐色土　7茶褐色土　8黒褐色土　9茶褐色土　10暗褐色土　11暗褐色土　11暗褐色土　12茶褐色土　⑥第 94 図－ 21　第 96 図－ 38・39　第 104 図－ 109　第 113 図－１　第 144 図－ 8・12・17　⑦底面中央にピット有り

第 79 号ピット（第 85 図）

①Ｆ－６－24　②125 × 110　③180 × 174　④215　⑤１黒褐色土　２暗褐色土　３暗褐色土　４黒褐色土　5暗褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8明褐色土　9暗褐色土　10黒色土　11明褐色土　12明褐色土　13暗褐色土　14暗褐色土　15黒褐色土　16黒褐色土　17黒褐色土　18黒褐色土　19暗褐色土　20黒色土　21暗褐色土　22黒褐色土　23黒色土　24黒褐色土　25黒褐色土　26暗褐色土　27暗褐色土　28黒褐色土　29暗褐色土　30暗褐色土　31暗褐色土　32明褐色土　33 黒褐色土　34 明茶褐色土　35 暗褐色土　36 暗褐色土　⑦底面中央にピット有り、ピットを中心に十字に細い溝がある。

第 80 号ピット（第 85 図）

①Ｆ－６－22　②160 × 150　③185 × 182　④186　⑤１黒色土　２黒色土　３黒褐色土　４黒褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7暗茶褐色土　8黒褐色土　9暗褐色土　⑥第 145 図－ 26　⑦第 79 号ピットと同様に底面にピット溝が有る

第 81 号ピット（第 85 図）

①Ｈ－７－６　②95 × 85　③240 × 230　④193　⑤１黒褐色土　２暗褐色土　３明褐色土　４暗褐色土　5暗褐色土　6茶褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9暗褐色土　10赤褐色焼土　11暗褐色土　12 茶褐色土　13 黒色土　14 黒褐色土　15 茶褐色土　16 暗褐色土　17 暗褐色土　18 明褐色土　19 明褐色土　20 暗褐色土　21 茶褐色土　22 暗褐色土　23 暗褐色土　24 褐褐色土　25 黒色土　⑥第 95 図－ 24・30　第 101 図－ 62　第 106 図－ 142・144・147・148・150・151・153 ～ 155・157 ～ 159　162・163　第 107 図－ 180　第 146 図－ 27 － 43

第 82 号ピット（第 86 図）

①Ｈ－７－11　②145 × 125　③80 × 68　④115　⑤１暗褐色土　２暗橙色土　３暗橙色土

4暗灰色土　5暗橙色土　6黒橙色土　7暗橙色土　8黒橙色土　9暗橙色土

第83号ピット（第86図）

①J－8－3　②85×80　③145×125　④103　⑤1黒褐色土　2黒褐色土（埋土）　3黒褐色土　4黄白色粘土　5黒褐色土

第86号ピット（第86図）

①J－8－6　②103×96　③195×185　④118　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7暗褐色土　8黒褐色土　9暗褐色土　10茶褐色土　11暗褐色土　12黒褐色土　13黒褐色土　14黒色土　15黒褐色土

第88号ピット（第86図）

①J－7－25　②142×115　③170×160　④93　⑤1黒色土　2明褐色土　3明褐色土　4黒褐色土　5明褐色土　6明黒褐色土　7明黒褐色土　8暗茶褐色土　9暗茶褐色土　10褐色土　11茶褐色土　12明褐色土　13暗褐色土　14暗褐色土　15黒褐色土　16黒褐色土　17黒褐色土　17暗褐色土　18暗褐色土　19黒褐色土　20黒褐色土　21暗褐色土　22暗褐色土　23黒褐色土　24暗茶褐色土　27黒褐色土　26暗褐色土　27黒褐色土　28黒褐色土

第89号ピット（第86図）

①J－8－17　②128×113　③148×137　④70　⑤1黒褐色土　2暗褐色土　3明褐色土　4黒褐色土　5黒褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9黒褐色土　10明褐色土　11明褐色土　12明褐色土　13明褐色土

第90号ピット（第86図）

①J－8－22　②164×153　③130×117　④90　⑤1暗褐色土　2茶褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5明褐色土　6暗褐色土　7黄褐色土　8暗褐色土　9黒色土　10黒褐色土　11明褐色土　12暗褐色土

第91号ピット（第86図）

①K－8－2　②112×106　③105×97　④52　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4暗褐色土　5黄褐色土　6明褐色土　7黒色土

第93号ピット（第86図）

①K－8－25　②105×100　③178×173　④95　⑤1暗褐色土　2黒褐色土　3黒褐色土　4黒褐色土　5明褐色土　6暗褐色土　7暗褐色土　8暗褐色土　9黒褐色土　10暗褐色土　11明褐色土　12暗褐色土

第94号ピット（第87図）

①L－7－25　②167×143　③188×185　④73　⑤1黒色土　2暗褐色土　3黒褐色土　4灰褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7黒褐色土　8明褐色土　9黒褐色土

第95号ピット（第87図）

①M－7－4　②150×140　③165×150　④87　⑤1黒色土　2暗褐色土　3黒褐色土

4 黄灰色土　5 黒褐色土　6 黒色土　7 黒色土　8 明褐色土　9 暗褐色土　10 黒色土

第 96 号ピット（第 87 図）

①Ｌ－7－20　②72 × 65　③125 × 117　④60　⑤1 黒色土　2 暗褐色土　3 黒褐色土　4 明褐色土　5 黒褐色土

第 97 号ピット（第 87 図）

①Ｋ－7－8　②145 × 135　③152 × 140　④50　⑤1 黒色土　2 暗褐色土

第 100 号ピット（第 87 図）

①Ｋ－6－10　②113 × 105　③155 × 150　④94　⑤1 黒褐色土　2 暗茶褐色土　3 黒褐色土　4 暗茶褐色土　5 黒褐色土　6 暗褐色土　7 黒色土

第 101 号ピット（第 87 図）

①Ｋ－6－13　②78 × 72　③105 × 104　④95　⑤1 黒褐色土　2 明褐色土　3 明褐色土　4 黒褐色土　5 暗褐色土　6 黄褐色土　7 黒色土

第 102 号ピット（第 87 図）

①Ｋ－6－2　②130 × 105　③136 × 128　④95　⑤1 黒褐色土　2 暗褐色土　3 暗褐色土　4 黒色土　5 明褐色土　6 暗褐色土　7 暗灰褐色土　8 明褐色土　9 灰褐色土　10 黒褐色土

第 103 号ピット（第 87 図）

①Ｋ－5－9　②75 × 65　③145 × 140　④95　⑤1 黒褐色土　2 黒褐色土　3 暗褐色土　4 暗褐色土　5 明褐色土　6 明褐色土　7 暗褐色土　8 明褐色土　9 暗褐色土　10 暗褐色土　11 明褐色土

第 104 号ピット（第 88 図）

①Ｊ－6－7　②160 × 140　③275 × 250　④209　⑤1 黒色土　2 黒褐色土　3 暗褐色土　4 暗褐色土　5 暗褐色土　6 暗褐色土　7 暗褐色土　8 暗褐色土　9 暗褐色土　10 明褐色土　11 暗褐色土　12 暗褐色土　13 暗褐色土　14 暗褐色土　15 暗褐色土　16 明褐色土　17 暗褐色土　18 褐色土　19 黒褐色土　20 茶褐色土　21 黒褐色土　22 明褐色土　23 褐色土　24 黒色土　25 黒色土　26 暗褐色土　27 黒褐色土　28 黄褐色土　29 黒褐色土　30 黒褐色土　⑥第 95 図－ 29　第 96 図－ 34　第 101 図－ 55　第 104 図－ 107・119　第 111 図－ 257

第 105 号ピット（第 88 図）

①Ｊ－5－14　②107 × 95　③250 × 235　④195　⑤1 黒色土　2 黒褐色土　3 黒褐色土　4 暗褐色土　5 明褐色土　6 黒褐色土　7 黒褐色土　8 黒褐色土　9 暗褐色土　10 暗褐色土　11 暗褐色土　12 黒褐色土　13 黒褐色土　14 褐色土　15 暗褐色土　16 暗褐色土　17 明褐色土　18 暗褐色土　19 暗褐色土　20 黒褐色土　21 黒褐色土　22 黒褐色土　23 暗褐色土　24 黄褐色土　25 黒褐色土　26 暗褐色土　27 暗褐色土　⑥第 144 図－ 14

第 106 号ピット（第 87 図）

①Ｊ－4－5　②100 × 95　③113 × 100　④70　⑤1 暗褐色土　2 黒褐色土　3 黒褐色土

第109号ピット　（第88図）

①L－4－9　②430×205　③390×150　④70　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5黒褐色土　6暗褐色土　7黒褐色土　8黒褐色土　9暗褐色土

第110号ピット（第89図）

①M－4－9　②430×205　③390×150　④70　⑤1黒色土　2暗褐色土　3暗褐色土　4黒褐色土　5暗褐色土　6黒褐色土　7黒色土　8黒色土　9暗褐色土　10暗黄白色土　⑥第144図－6・7・10・13

（4）出土土器

後期初頭の土器は本発掘調査で出土した遺物の中では最も多く、平箱に換算して60箱を上回る量である。しかし完形及び復元されたものはその割には少なく40個に満たない。破片については大半が未だ整理分類の段階で、図版に示したものは代表的なもので今回は大まかな分類にとどめ、後日細分し、別稿で研究報告するつもりである。

第1群の土器（第91図4～7、第98図、第99図）

第91図4～7図に示すように、斜行縄文を地文に沈線文を施文するものである。鉢形（深鉢を含む）以外にはその器形が認められないようである。口縁は第98図1～4、第99図19・28のように平縁のように思われるものもあるが、ほとんど山形ないしは波状の口縁をもつものと思われる。全体の文様構成を知るものは少ないが、第91図4は頸部と胴部に横位の沈線が走り、上段の下線が波状を呈し、下段は方形文を連らねたものである。第91図5は無節の縄文を地文に上下に大柄の入組風波形文を構成しており、等間隔に四個配置していて、上段の波状部の上方の口縁が山形を呈するものと思われる。第91図6は小波状口縁を有し、頸部の一部の一条沈線文を境いに上下に波状線文を施したものである。第91図7は全体としてかなり不足しているが、山形口縁に沿って2条平行沈線文が巡り、山形口縁頂部の下に逆「S」の字風蛇行文が見られる特徴がある。この逆「S」の字風蛇行文は胴下半部にも施文されるらしい。地文は無節縄文である。蛇行文は土器によって「の」字になったりあるいは渦巻文になったり、入組風になったり、波状文になったりするらしい。この蛇行文の上部文様構成は2条の山形文を呈するのが普遍的で、第98図、第99図に示す土器片の大方がそのようである。また第99図21・29のように山形沈線を伴わず山形口縁頂部直下に渦巻文を施文するものもある。いずれにしても第1群の土器の文様は山形文ないしは山形口縁頂部直下に逆「S」の字文、「の」の字文、渦巻文、入組文、波状文を施文するのが特徴として把握することができよう。また第98図6のように口縁頂部正面に突起をもつものもある。

第2群の土器（第90図1・2、第91図3、第92図9・10、第100図、第101図）

第1群と第3群の土器の中間的文様を構成するもので、具体的には第1群の土器に磨消縄文手法が加わったものである。第100図45、46、47、48、49、第101図52、53、55、57、59、60、63第92図10、は口縁に沿った2条の山形状の平行沈線の間を磨消しており、その下部に第1群

に見られた蛇行的文様が磨消手法を伴って大柄に描かれるようである。また第101図59、61、62は第1群第99図21、29のように山形沈線を伴わないものの変形であろう。第91図3、第100図47、第101図54は口縁が平縁のようで、口縁に沿って縄文帯を残している。第100図50はキャリパー形を呈し、口縁部は無文である。また第91図3や第92図9は第1群にも見られたボタン状の貼り付け突起を有するもので、9の文様モチーフは第1群にかなり近似しているし、山形口縁の頂部正面に突帯を貼り付けた技法は第3群に顕著になって来る。胴部の文様は第91図3のように2段の磨消された波状文や、第92図10のようにその意匠が第1群に類似したものがあり、更に第100図51、第101図58のように複雑なものもある。第90図1の文様はこの群の典型的なものであって、4ヶ所に配置した渦巻文を中心に文様が展開されるようである。またこの文様モチーフは、第3群に至って定型化していくようである。第90図2は第1群のように山形文や蛇行文が見られ、全体の文様構成は不明であるが一種の磨消縄文技法が認められる。縄文は荒く、無節のようである。あるいは第1群の土器に含めてもよいものかも知れない。

第3群の土器（第71図1・2・4、第92図11、第93図、第94図、第95図、第97図、第102図、第103～105図）

この群の土器は最も量が多く、前者2群に比較して内容も豊富である。主要包含層はE－7～8、F－7～8区で認められている。磨消縄文は第2群の土器より発展段階を示しており、文様モチーフにも一つのパターンが見られ、加えて無文地に沈線文が活発になってきているし、撚糸文や引っかき条痕文も伴出するようである。器形に深鉢・鉢・壺・浅鉢など見られる。

A深鉢形土器

典型的なものは第93図13～15、第94図17、22である。口縁は山形を呈するものと平縁のものがあり、口縁部は肥厚している。文様帯は区画されるものが多く、磨消縄文による渦巻文を基本としている。区画は沈線によるものが最も多く、少量ではあるが第94図22のように突帯によるものもある。山形口縁を有するものは第94図17、第103図68～69、71、73～76、81のように口縁頂部正面に竹管文を施文するものが多い。また頂部が第103図82～86のように亀頭状になるものもあるようである。第94図16、第102図64、65（64の一部）、66は縦位の区画文が見られず、第2群に近いものであろう。

次に深鉢の中には上記の磨消縄文の他に撚糸文を施文したものや、引っかき条痕文を施文するものも伴出している。撚糸文のものは第97図40、第111図234～243のように網目状のものと、第97図41、第111図244～251のように縦位または斜位のものがある。引っかき条痕文のものは第111図252～258に示すもので、櫛歯状の工具で引っかいたもので、その上に更に沈線文の加わったものもある。

B鉢形土器（第94図18、第95図25、27～30）

鉢形土器のうち特異なものは第95図25と27で、両者とも4個の山形を有する口縁であるが、そのうち対象の一対の山形口縁部に孔を有している。この有孔の土器は次の浅鉢形土器にも見

られ、小型の土器に多いようである。鉢形土器には口縁が平縁のものと、前述のように山形を呈するものがあり、文様は磨消縄文のもの（第94図18、第95図27、29）と突帯に縄文を施文したもの（第95図25)、縄文のみのもの（第95図28)、無文のもの（第95図30）がある。

C壺形土器、（第71図1～2、第92図11、第93図12、第94図19～21、第95図26、31・33、第105図122～141）

壺形土器には大小見られる。大型の土器は第71図1・2、第92図11、第93図12のように、頸部に橋状把手が4個見られるものが普遍的である。第105図に大型壺の破片を示したが、これらのうち126と136を除けばすべて橋状把手を有する壺であろう。これらの壺は把手の基部と胴部最張部に突帯を巡らし、更に把手の下端から縦位に突帯が垂下している。これら縦横の突帯によって文様帯は4等分に区画され、それぞれ区画された部分には独立した文様が見られる。基本的な文様モチーフは第71図1に示すもので、渦巻文を基本としている。また磨消縄文手法の伴ったものもある。突帯は素文のものと縄文の施文するものが見られる。第94図19・20に示すものは頸部内面を巡って棚状の張り出しが認められ、蓋受装置と思われる。

小型の壺は特異なもので、第95図31、33に示すように、頸部に近い胴の上部を焼成前に切断したものである。同図26に示すものも上部を欠失しているが、33と同様に最張部に有孔突起を有しているので同型の形態と思われる。31はヘラ状工具で切断したもので、33は串状の工具を連続刺突させ切り離したものである。31には有孔突起が認められないが、33は一対2箇所に認られ、切断した部分と本体を紐で固定したものと思われる。両者の切断部分を細かく観察すると、切断角度は45度で、切断された上部に一対の凸部を有し、本体には逆に凹部が一対あり、丁度噛み合うようになっている。また上部を乗せた後に切断した部分に、31はベンガラで、33は黄色粘土で目張している。31は無文であるが26、33には沈線文が施文されている。

D浅鉢形土器（第95図23、24、32）

典型的なものは第95図23である。皿型に近いもので、口縁部に一対の山形突起を有している。文様は深鉢に見られた渦巻文が変形したものである。第95図24、32は小型のもので、24は底部に葉痕を残しているが、胴部は無文である。32は23のように口縁部に一対の山形突起を有し、その部分に鉢形にも見られた縦位の穿孔が認められる。胴部に沈線文が施文されている。

第4群の土器（第108図185～194）

十腰内Ⅰ式土器に含まれるものを一括した。すべて深鉢ないしは鉢形土器の破片で、185～190までが口縁部片、他は胴部の破片である。口縁部片は188を除けば口縁に沿って平行沈線文と円形文が施文されるものと思われ、188は渦巻文が見られる。胴部片は191が格子文、192～194が3本1組の沈線による渦巻風入組文である。

第5群の土器（第106図142～164、第107図165～184）

突帯文の見られる土器を一括し、文様から3類に分類した。第1類は刻目施文の突帯文を有する土器である。復元可能なものはないが、深鉢を呈するものである。第106図142～164と

第107図168、175、180、181、184に示すもので、口縁の特徴から2種類見られるが、あるいは1個に集約されるものかも知れない。その1種は口縁が大きく山形状になり、その頂部に球状の突起が配置されるもので（144、145）、もう1種は口縁部が波状を呈するもの（142、143）である。81号ピットより両者が出土しているので、球状突起の間に波状部が配置されるものかも知れない。復元できたものがないので全体の文様構成は明確でないが、口縁に沿って1～2条の突帯が巡り、胴部上半は球状突起の真下に渦巻文を配置し、それを中心に文様が展開されていくものと思われる。文様帯の下部は2条の平行突帯で区切られるようで、平行突帯の間は舌弧状の突帯で区画されるらしい。胴部下半には荒い斜行縄文が施文され、2段の右撚りと左撚りの2種が見られる。また球状突起の基部には表面に太い溝の見られるものと見られないものがあり、口縁の波状部には2条の突帯がたすき状に施文されるようである。突帯は化粧塗の後に細い粘土紐を貼り付けたもので、貼り付け後にヘラあるいは指頭で接着部を撫でてあるため、突帯の断面は三角形を呈している。刻目はヘラ状に削った工具の先端を連続刺突させたものである。また無文部は丁寧に磨いており、焼成はすこぶる良好で堅緻である。

第2類の土器は突帯上に縄文が施文されるもの（第107図165、166、170、172、173）である。165、166、170は鉢の口縁部片であり、172、173は大型壺の頸部の部分のようである。深鉢については各々別個体であるため明確でないが、共通しているのは口縁と頸部に沿って2条の突帯が施文されるようである。波状口縁をもつ165、166は頂部から頸部にかけての空間にも施文されている。170の口縁は平縁のようである。大型壺の172、173には頸部に3条の突帯が巡っている。

第3類の土器は突帯に文様が認められない素文のもの（第107図167、169、171、174、176、177、178、179、182、183）である。167、174、176、177、183が深鉢のようで、171、178、179、182が壺のようである。深鉢のうち174、177が同一個体で、地文に縄文が見られ、他は無文地に突帯を貼り付けたものである。突帯は普通3条一組である。壺と思われるものはそのモチーフが第3群の壺の区画突帯に似ている。しかし突帯は沈線で縁どりされていないもので、また他の沈線文様が加わらないものである。

第6群の土器（第69図1～2、第76図1、第96図34～37、第109図195～210、第110図211～233）

深鉢と浅鉢（第110図231～233）が見られ、文様のほとんどが縄文によってのみ構成されるもので、中には若干装飾的文様のみられるものも少量含んでいる。深鉢形土器は199のように山形口縁のものも含まれているが、大半は平縁である。平縁のうち第110図211～233、225は折り返えし口縁のものである。施文されている縄文は単節が圧倒的に多く、中には第96図36のように無節のものも含まれている第96図34、第109図208、209に見られる縦位の綾絡文風の縄文は、施文時における縄文原体の先端の回転によって施文されたものであろうし、それが装飾的効果をしめしている。また第109図210は縄文原体を渦巻風に押捺したもので、第110図224、

226～230は口縁に沿って縄文原体を押捺したものである。

浅鉢の231～233はすべて同一個体の破片である。口唇部は斜位に調整されており、把厚している。皿形に近いもので、全般に縄文が施文されたものと思われる。

土器底部について（第112図261～285、第113図11）

第1群の土器から第6群の土器までの底部を一括するもので、それぞれの所属については今後検討するつもりで、それぞれの特徴のみについて述べたい。第1類はいわゆる網代底である。261～267までがそれで、その編み方によって3～4種に細分できると思われる。第2類は木葉痕のみられるものである。268～276がそれで、274は広葉樹の葉痕と思われるが、他は禾本科植物の葉痕と思われる。葉が縦位に押されているものと、十字に2枚重ねのものも見られる。第3類はヘラ調整のものである。277～285がそれで、ヘラを回しながら調整したものである。283、284のように揚底もあり、特に283には斜位の穿孔が2箇所に認められる。第4類は脚付のもので、第113図11に示すごとく脚のすそが広がるものである。土器の器形はおそらく「ワイングラス」状を呈するものであろう。この土器にも穿孔が認められる。

（5）土製品

A蓋形土製品（第113図1～10）

平面形が円形で、直径は10㎝から13㎝あり、中心につまみの突起を有するもので、側面形態の観察から3種類に分類される。即ち、（イ）円盤状に近いが多少内面が湾曲するもの、（ロ）傘状を呈するもの、（ハ）台形のものの3種である。完形のものはないが、10個体15点出土している。有文と無文があり、有文には沈線文に要所に縄文を施文するもの（4・8・9）と、沈線文のみのもの（1・5～7・10）がある。縄文を施文するもので、4は（イ）の形態で、つまみの突起は剥脱しているが、渦巻状を呈する縄文帯の突起を中心に4箇所配置させたものらしい。また側面に沿って1条の沈線が巡っている。厚さは10㎜から13㎜あり、縄文は2段右撚りである。8も4と同じ形態で、文様構成もほぼ同様と思われるが、表と同じ文様が裏面にも施文されている特異なものである。厚さは10㎜ぐらいである。9は（ハ）の形態であるが側面の一部が剥脱している。文様構成は4・8と同じものと思われるが、薄手につくられており厚さは5㎜～7㎜である。沈線文様を施文する1はつまみの突起を有し、丁度半分出土している。形態は（ロ）であり肉厚で11㎜～20㎜で、突起の高さは15㎜である。突起を中心とした同心円文または渦巻文を施文しているが、途中を区切っているため一種の角張った蛇行文を構成している。朱塗りの痕跡が認められる。直径が125㎜、高さは50㎜ある。5の形態も1と同様（ロ）であるが、つまみの突起は欠失しているが橋状突起と思われる。突起を中心に長円を描き、周囲には曲線をあしらい、その一部は渦巻を呈する部分もある。直径は100㎜あり、厚さは5㎜～13㎜である。6・7・10は（ハ）の形態である。側面に沿って1条の沈線を巡らし、6には渦巻文が見られる。無文の2・3の形態は（イ）である。

B土偶（第114図12～16）

4個体5点出土している。すべて胴部片で、頭部は出土していない。いわゆる板状土偶で、腕・脚を省略した三角形のものである。12は背を若干丸めた形態をとっており、両肩に斜位の穿孔が認められる。肩幅が105㎜あり、厚さは7㎜である。頭部と胸部から下半が欠失しており、表裏に繊細な沈線による格子文が施文されている。13と14は胴一個体と思われるが接合はできない。胴部全体の4分の1位の部分で、最厚部は20㎜ほどである。表裏に2条一組の平行沈線文が施文され、モチーフは12と似かよっている。15は小型土偶の胴下半の部分で、中心部にヘソと思われる微高部を有し、その部分を中心に沈線文が施文されている。裏面の文様は磨滅しているため不明瞭である。16は肩部の破片と思われ、12と同様に斜位の穿孔が認められる。文様については不明である。

C、耳栓（第114図17）

直径25㎜、高さ20㎜で、中心に穿孔を有した滑車形耳栓である。

D、土器片利用の三角形土製品（第114図18）

表面に沈線文を施文する厚さ10㎜位の土器片を故意に三角形に打ち欠いたもので、一辺が45㎜ほどであるが、一部欠失している。土器片は第3群の土器と思われる。

E、環状土製品（第114図19）

直径の上端が40㎜、下端が60㎜の円形で、高さは20㎜位あり、全体の約5分の1ほど出土している。全面が無文と思われ、断面は凸レンズ状を呈している。

F、円盤状土製品（第115図20～46）

別名メンコと称されるもので、その製作に2種類見られる。その一種は土器片を円形に打ち欠いたもの（20～45）で、他は最初から粘土を円盤状につくり焼いたもの（46）である。土器片利用のものには有文と無文が見られ、不整円形のものもあるが、直径の最小が40㎜位、最大が50㎜位である。28・29のように文様が渦巻を呈する部分を選んでいるものもあるが、他は特別土器片を選択したとは思われない。46は一部が欠失しているが、直径が40㎜前後で表裏に文様が施文されている。文様は「すだれ」状の編物の押捺したものである。

（6）漆器（1ページ参照）

第104号ピットの底面上、中央部、西南方向から1点出土している。このピットは口径が95㎝、深さ193㎝、底径が240㎝ほどの規模で、いわゆる三角形フラスコ状ピットである。底面直上の埋土は暗褐色土層で、多くの水分を含んでいた。この埋土から出土したもので、直立の状態で保存されていた。器形は水盤状を呈しており、3分の1ほど崩壊していたが出土時にはほぼ原形を保っていた。口径が約13㎝、胴部最大径17㎝、底径が10㎝ほどで、出土時の色調は橙味がかった赤褐色を呈しており、薄い漆箔が表裏に認められ、内部は腐食したらしく空洞であった。おそらく藍胎漆器であったと思われる。

（7）まとめ

A、遺構について

住居跡を4軒検出したがいずれも保存状態はあまり良好でなく、その特徴は明確でない。炉は第8号住居跡で土器埋設炉を検出しただけで、他の住居跡については不明である。縄文中期末から後期初頭にかけての炉は大曲Ⅰ号遺跡（註1）、五戸町中ノ沢西張遺跡（註2）、平賀町井沢遺跡（註3）、青森市孫内遺跡（註4）などで住居跡に伴って発見されているが、いずれも石組炉である。蛍沢遺跡の炉の土器は第2群に含めたものであるが、少なくとも五戸町中ノ沢西張遺跡の住居跡より出土した土器よりは先行するものと思われる。しかし先に述べた大曲、井沢、孫内など住居跡より出土した土器に比較すれば、それらにすぐ続かないとしても後続するものである。地床炉から石組炉に変遷したことは進歩を物語っているが、中には蛍沢のように土器を埋設したものも含まれていたであろう。

土器埋設遺構は1箇所だけ発見したが、高さ33㎝の壺に蓋が伴って出土したものである。内部から微量の炭化物を検出しただけで、納入した遺物は全く検出されなかった。蓋をして土器を埋設した例は六ヶ所村表館（註5）と平賀町堀合Ⅰ号遺跡（註6）であり、共に縄文後期初頭の改葬甕棺であり、内部から、人骨が検出されている。蛍沢遺跡の埋設土器は形態において前者2遺跡の土器と酷似しており、高さにおいてほぼ2分の1で、全体の大きさは約4分の1である。土器の容積においては大きな違いが認められるが、前者2遺跡の人骨は共に成人骨であり、蛍沢遺跡の例は小児用の棺ではなかったかと推測される。

次にフラスコ状ピットを含めた土坑群であるが、後期初頭の土器片が出土したピットは大小合せて78個検出している。墓坑と想定される長円形ピット・長方形ピットも含まれるが、大半が大型のフラスコ状ピットで、その性格把握の具体的資料に乏しい。近年県内でもこの種のピットが各地で出土しているが、底面中央に小ピットの施設があるものとして、平賀町小金森遺跡（註7）、大畑町水木沢遺跡（註8）があげられ、更に小ピットと溝の施設があるものに前述の水木沢遺跡の例がある。これまでこの種のピットの性格について、墓坑・貯蔵穴・祭祀・動物飼育・罠など様々な性格想定がなされてきている。今後の研究成果が待たれるところである。

B、土器

土器については資料が膨大で、まだ完全に整理尽されていない。資料として扱ったものは基本的なものである。便宜上6群に分類したがすべて編年順ではない。編年的には第1群から第4群までで第5群及び第6群は前述4群のいずれかに所属するものと思われる。

第1群の土器は縄文地に沈線文を施文する一群である。大曲遺跡の山田野B式土器（註9）に近似した文様構成であるが、時期的には若干下るもので、モチーフ的には黄金山式（註10）に近いものである。また北海道の知内町涌元遺跡（註11）、同松前町原口遺跡（註12）などから出土した土器の一部にもモチーフが似かよっている。おそらく山田野B式に後続する土器群であろう。

第2群の土器は第1群と第3群の中間に所属するものと考えた一群で、磨消縄文技法の認め

られるものである。山田野C_1式（註13）にも共通した面もあるが、縄文部の面積が広いものである。あるいは第Ⅰ群土器とセットになるものかも知れない。

第3群の土器は十腰内第Ⅰ群（註14）に近い土器群で、従来十腰内第Ⅰ群の範疇に入れて分類されてきたものである。しかし厳密に言って十腰内第Ⅰ群の中には含まれない要素を多分に有しており、近年資料も増加しているので分離して考える方が妥当と思われる。ことに深鉢にみられる大柄の磨消文の文様などは十腰内第Ⅰ群の土器には見られないものである。蛍沢第3群の土器と平行関係にある土器は、平賀町小金森遺跡（註15）、大曲Ⅲ号遺跡（註16）、五戸町中ノ沢西張遺跡（註17）などから出土した土器があげられ、これらは十腰内第Ⅰ群土器の直接の母胎になるもので、いわば前十腰内Ⅰ式と称すべき土器群である。蛍沢第3群土器の切断した特異な壺は蛍沢以外にも近隣の月見野遺跡（註18）、五戸町中ノ沢西張遺跡（註19）、泉山遺跡（註20）、六ヶ所村原々種農場遺跡（註21）など数箇所の遺跡で出土しているが、切断部を目張りしているのが観察されたのは蛍沢が最初である。また深鉢に見られた引かき条痕文に沈線文が加わった土器は出土例が少なく、わずかに大曲Ⅰ号遺跡の山田野B式に伴っているが、むしろ同C_1式に伴出したのではないかと疑問をもっている。蛍沢においては第3群の土器の包含層から網代文と縦位の撚糸文を施文した土器らと一緒に出土している。

第4群の土器は量は少ないが十腰内第Ⅰ群の土器の範疇に入る土器である。

第5群の突帯文をもつ土器であるが、第1類の土器はこれまで発見例がなかったものである。他の群の土器との関連性は薄いが、球状突起をもつ点では第3群に分類した深鉢（第103図82～86）に共通性が認められる。あるいは第3群の土器に組入れられる土器かも知れない。また突帯に刺突文を施す点では北陸地方の三十稲場式にも共通性が認められる。本県独自で発生したものか、あるいは三十稲場式と関連性があるかは今後資料の増加を待って検討したい。第2類と第3類の突帯文は青森市山野峠遺跡（註22）で出土例があり、山野峠遺跡での伴出土器から第3群の土器に組入れることができる。

第6群の概略縄文のみを施文する土器は、十腰内第Ⅰ群の土器には見られないもので、少なくともそれ以前の土器に伴出するものである。中期末にも多く見られるもので、おそらく第1群から第3群までの土器に伴出したもので、粗製土器的要素をもつものであろう。

以上の結果から蛍沢遺跡の後期初頭の土器は、東北北部における山田野B式から十腰内第Ⅰ群までの空間を埋める資料である。まだ多く問題点を含んでいるが今後の研究課題として残して置きたい。

C、その他の遺物について

土製品、石製品については、ほぼ十腰内第Ⅰ群の土器に伴出していることはこれまでの経験から明らかである。土偶については板状の三角形の土偶で、頭部は出土していないが、前方に突出したものであろう。この形態は十腰内第Ⅰ群土器の前半まで見られ、後半になって腕・脚の表現が具体的になり、立体化してくれるようである。またこの時期には鐸形土製品が登場して

来るわけであるが、発掘調査においては全く出土せず、あるいはまだ登場しないのではないかと考えられたが、調査後一中学生によって採集されたのを実見しており、数は少ないが、伴出していることが判別した。石製品の中では三角形の岩版が伴出しており、その時期も第3群の土器に伴うことが明らかであり、有文のものは見られないが、大小出土している。この石製品は十腰内第Ⅰ群の時期に顕著になり、特に青森平野周辺の遺跡で多く出土している（註23）。次に十腰内第Ⅰ群の時期には内反石刀が伴出しているが、蛍沢遺跡からは破片すら出土していない。今後この石製品の登場時期について興味がもたれるところである。籃胎漆器と思われるものが1点出土したことは大きな成果である。これまで晩期の低湿地遺跡ではかなり知られているが、後期初頭の時期に出土したことは本例が最初である。文様は見られないが精巧なものであり、亀が岡文化成立の究明に貴重な資料を提供することになろう。　　（葛　西　励）

註 1、田村誠一 「大曲Ⅰ号遺跡」 岩木山所収　1968

註 2、青森県教育委員会「五戸町中ノ沢西張遺跡・古街道長根遺跡」1975

註 3、葛西励他「井沢遺跡」平賀町教育委員会　1976

註 4、青森市教育委員会

註 5、小片保他 「青森県表館発見の縄文文化後期初頭の甕棺と人骨」 考古学ジャーナル 63号 1971

註 6、葛西励 「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」 平賀町教育委員会 1974

註 7、註6に同じ

註 8、青森県教育委員会 「水木沢遺跡発掘調査報告書」 1976

註 9、註1に同じ

註10、渡辺兼庸 「黄金山遺跡」 岩木山所収　1968

註11、高橋正勝「知内町涌元遺跡出土の土器と北海道南西部の縄文時代後期前半について」北海道の文化　31　1974

註12、松前町教育委員会 「松前町原口遺跡発掘調査報告書」1976

註13、註1に同じ

註14、今井富士雄他 「十腰内遺跡」岩木山所収　1968

註15、註6に同じ

註16、田村誠一「大曲Ⅲ号遺跡」 岩木山所収　1968

註17、註2に同じ

註18、葛西励 「青森市周辺の後期縄文式土器」 うとう　80号

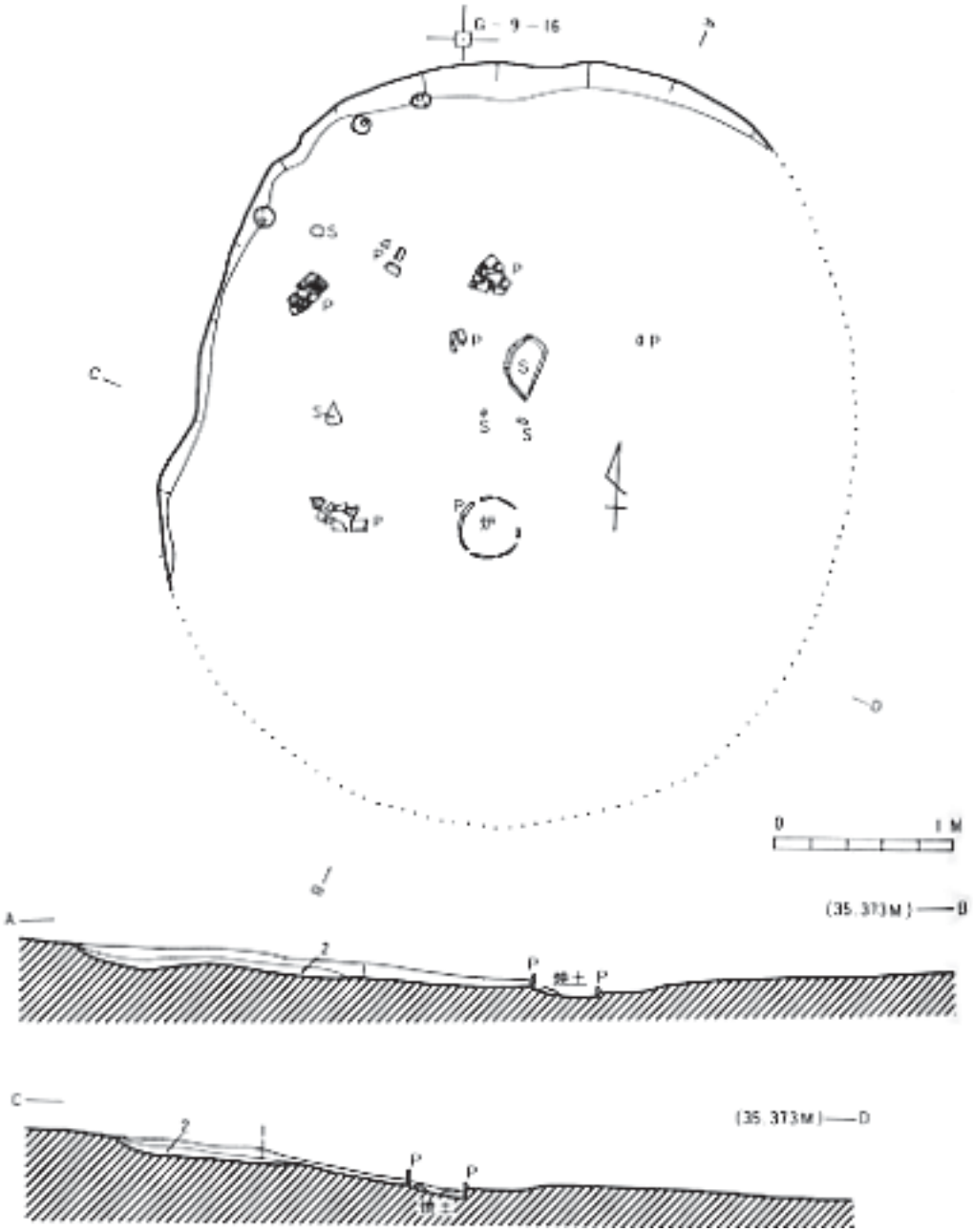
註19、註2に同じ

註20、青森県教育委員会 「泉山遺跡発掘調査報告書」1975

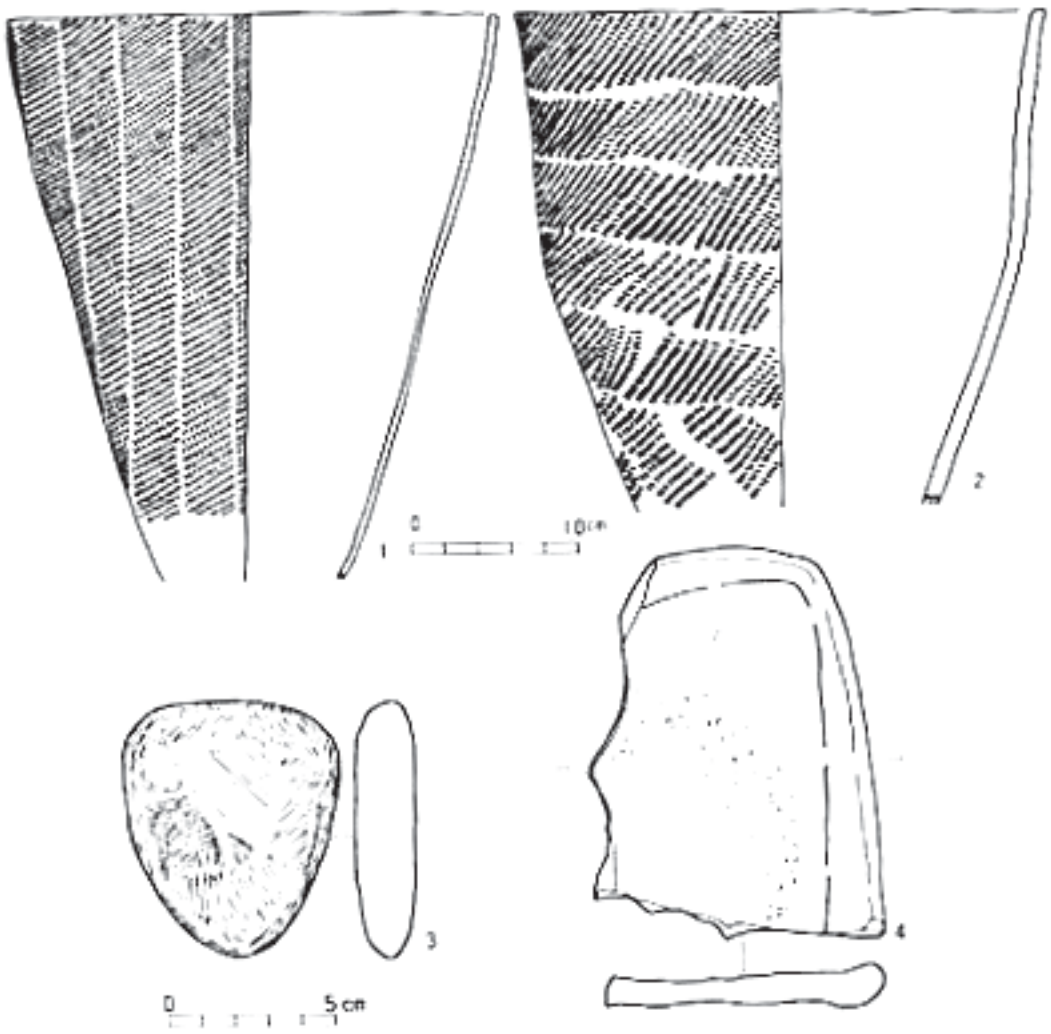
註21、青森県教育委員会 「むつ小川原開発予定地域埋蔵文化財試掘調査概報」1972

註22、葛西励 「青森市山野峠石器時代墳墓遺跡について」 北海道考古学　第11輯 1975

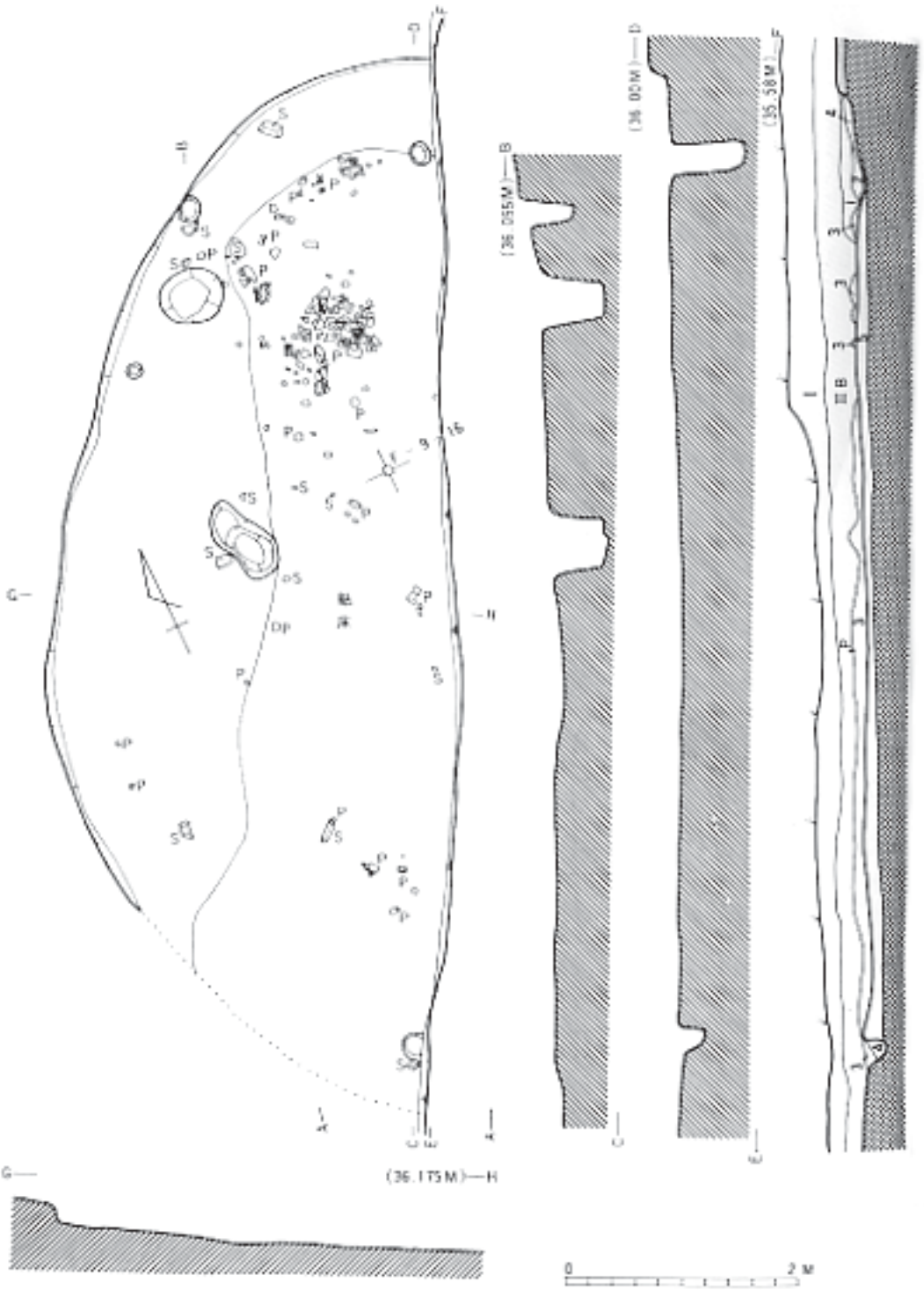
註23、葛西励 「三角形岩版考」 うとう 74号



第 68 図　縄文時代後期 8 号住居跡実測図

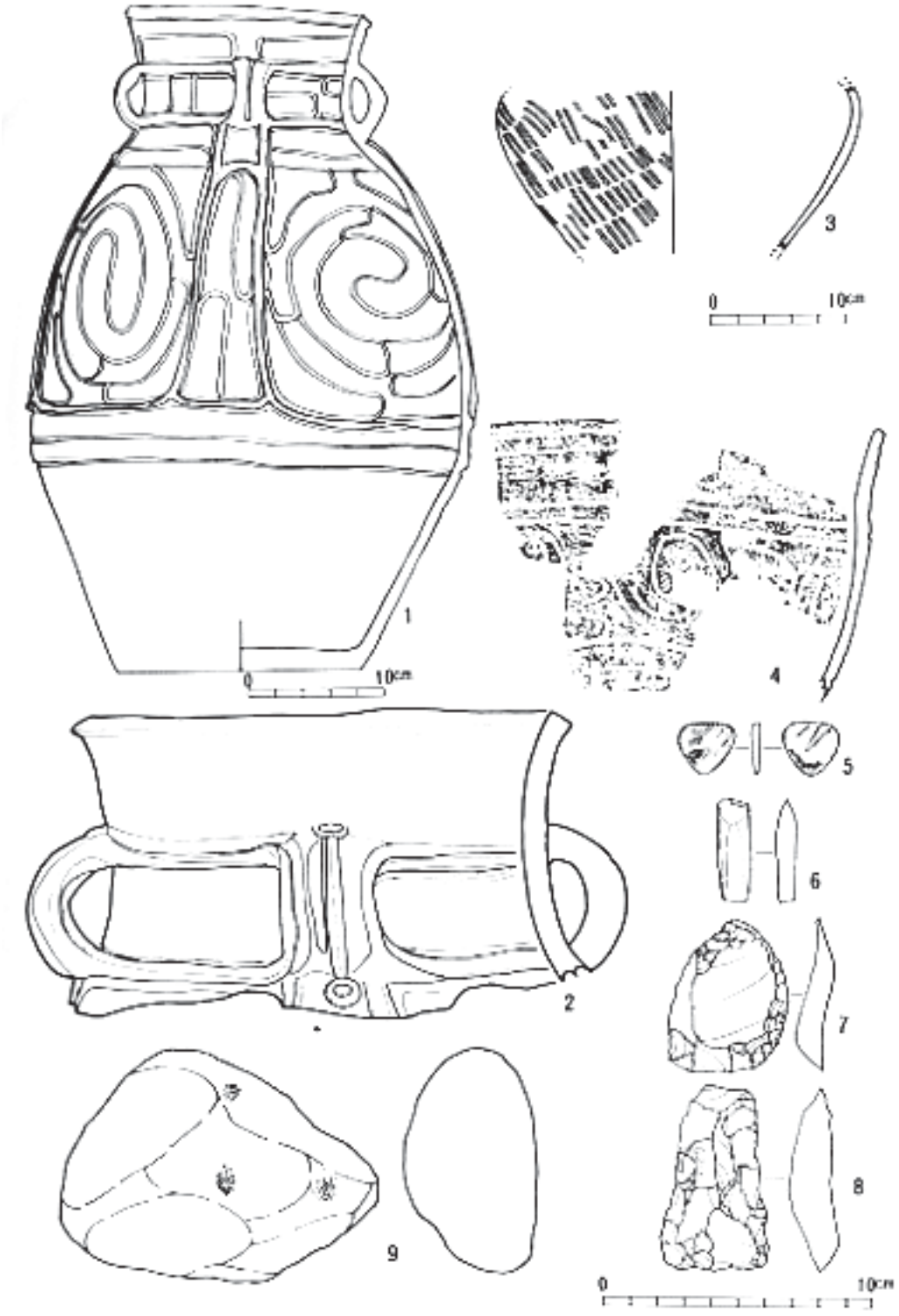


第 69 図　8 号住居跡出土遺物

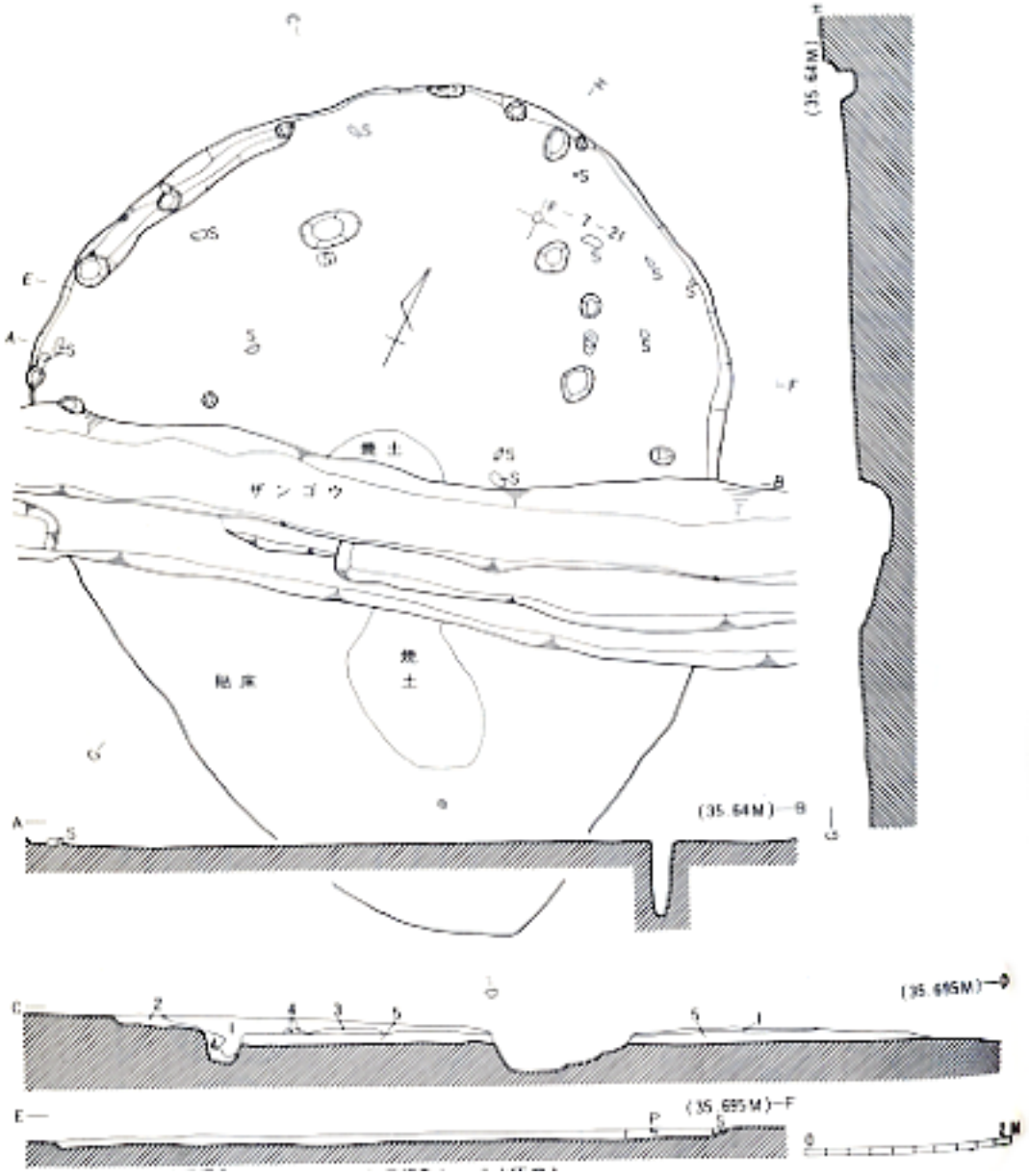


1. 黒褐色土　軽石若干混入
2. 黒褐色土　微量のローム粒子混入
3. 暗褐色土　ローム・ブロック混入
4. 黄褐色土　軽石混入
5. 黄褐色土　貼床である

第 70 図　9 号住居跡実測図

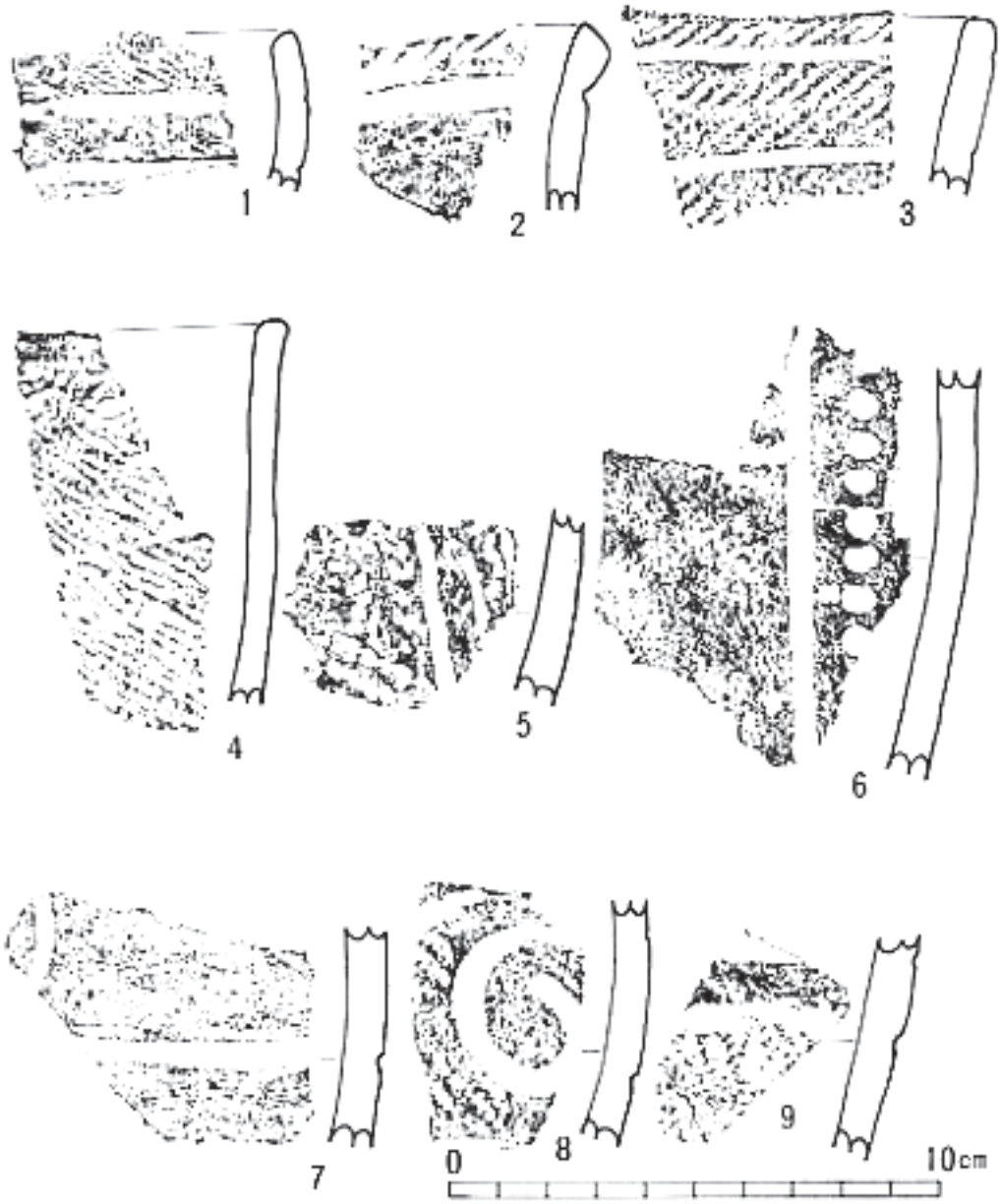


第 71 図　9 号住居跡出土遺物

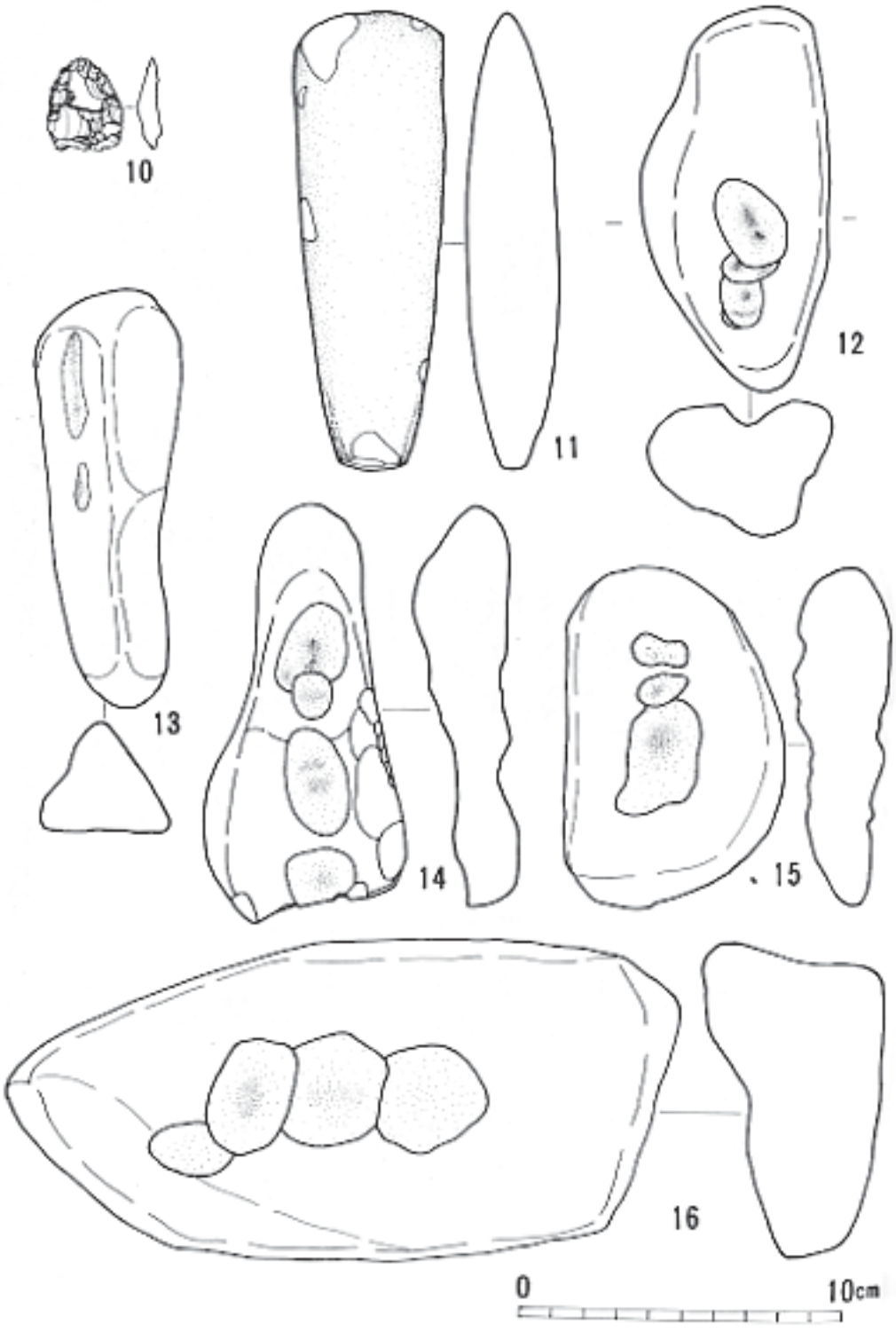


1. 褐色土　火山灰混入
2. 暗褐色土　火山灰若干混入
3. 褐色土　火山灰・炭化物混入
4. 茶褐色土　火山灰混入
5. 明褐色土　貼床

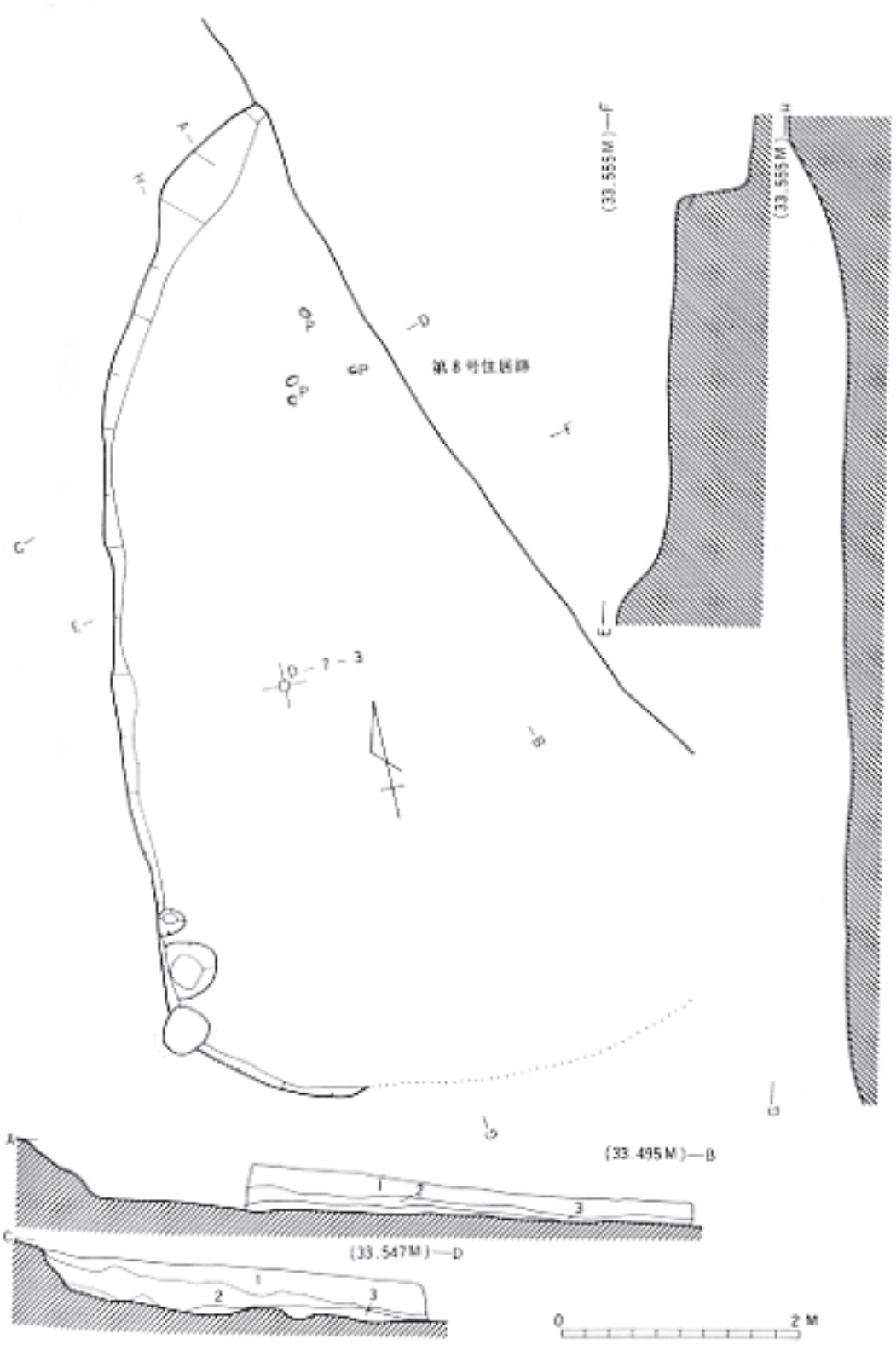
第 72 図　10 号住居跡実測図



第 73 図　10 号住居跡出土遺物

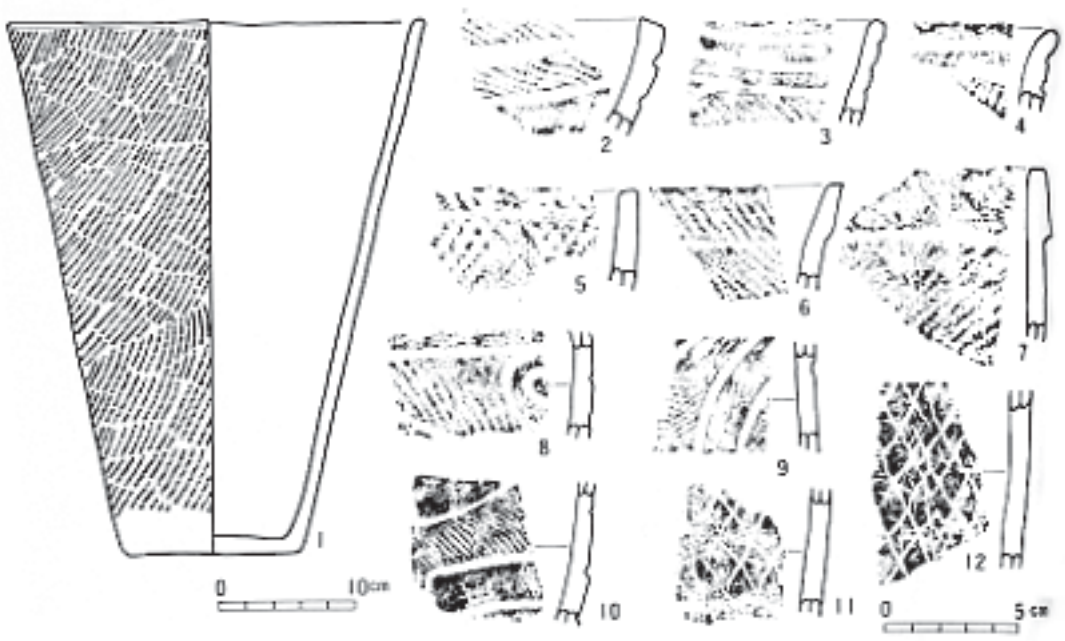


第 74 図　11 号住居跡出土遺物

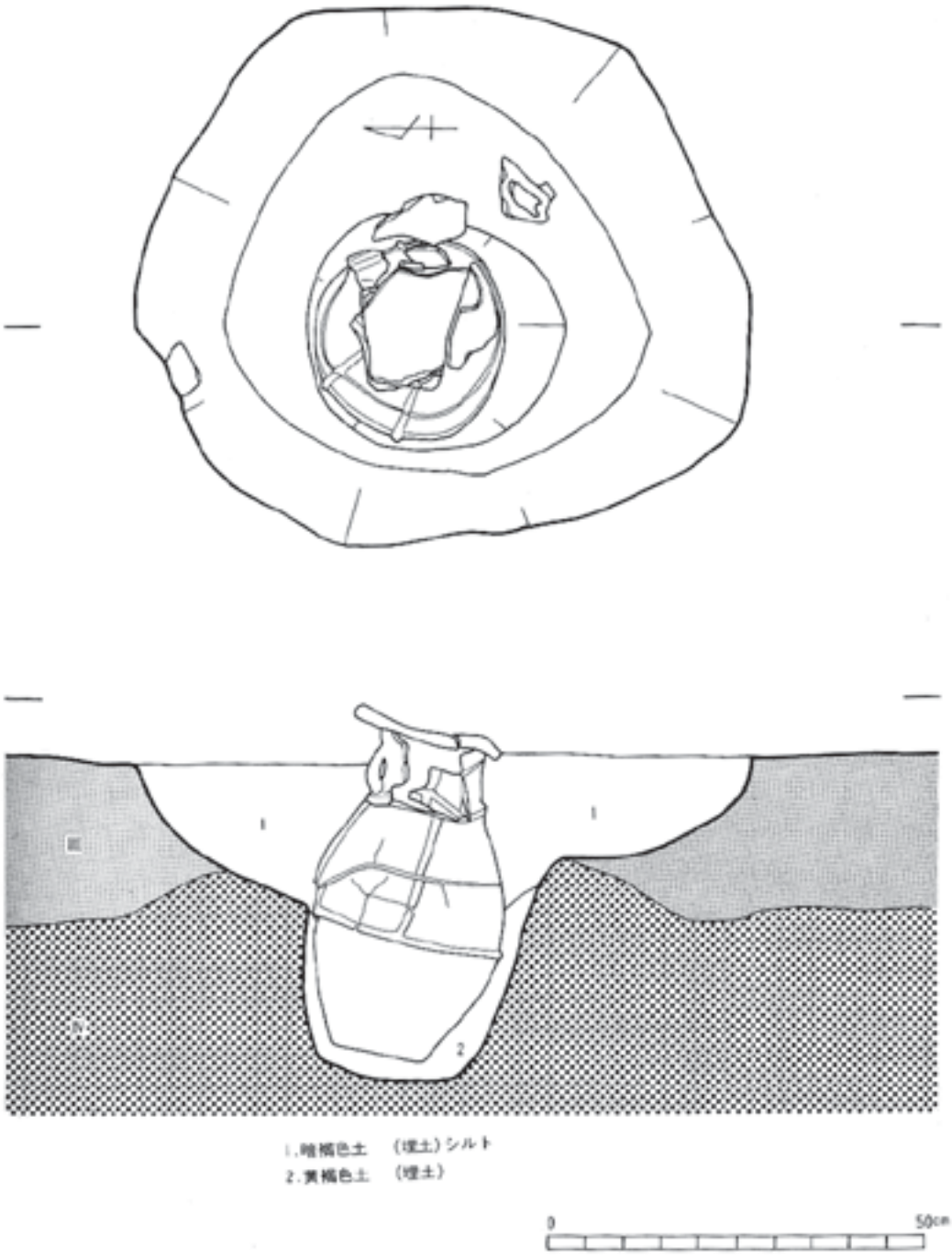


1. 黒色土　　微量の火山灰粒子混入
2. 黒褐色土　　少量の火山灰と微量の炭化物混入
3. 暗褐色土　　少量の火山灰混入

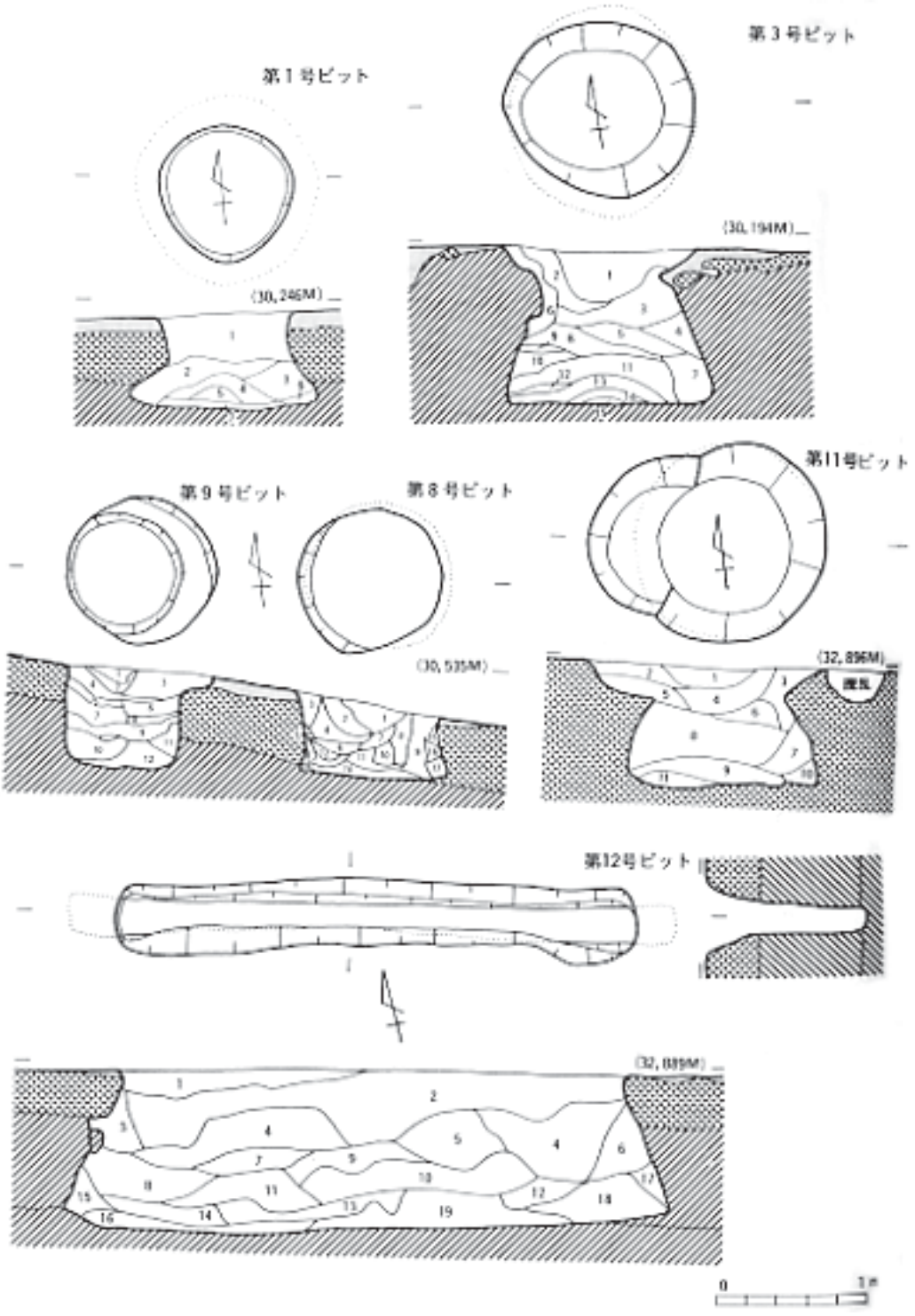
第 75 図　11 号住居跡実測図



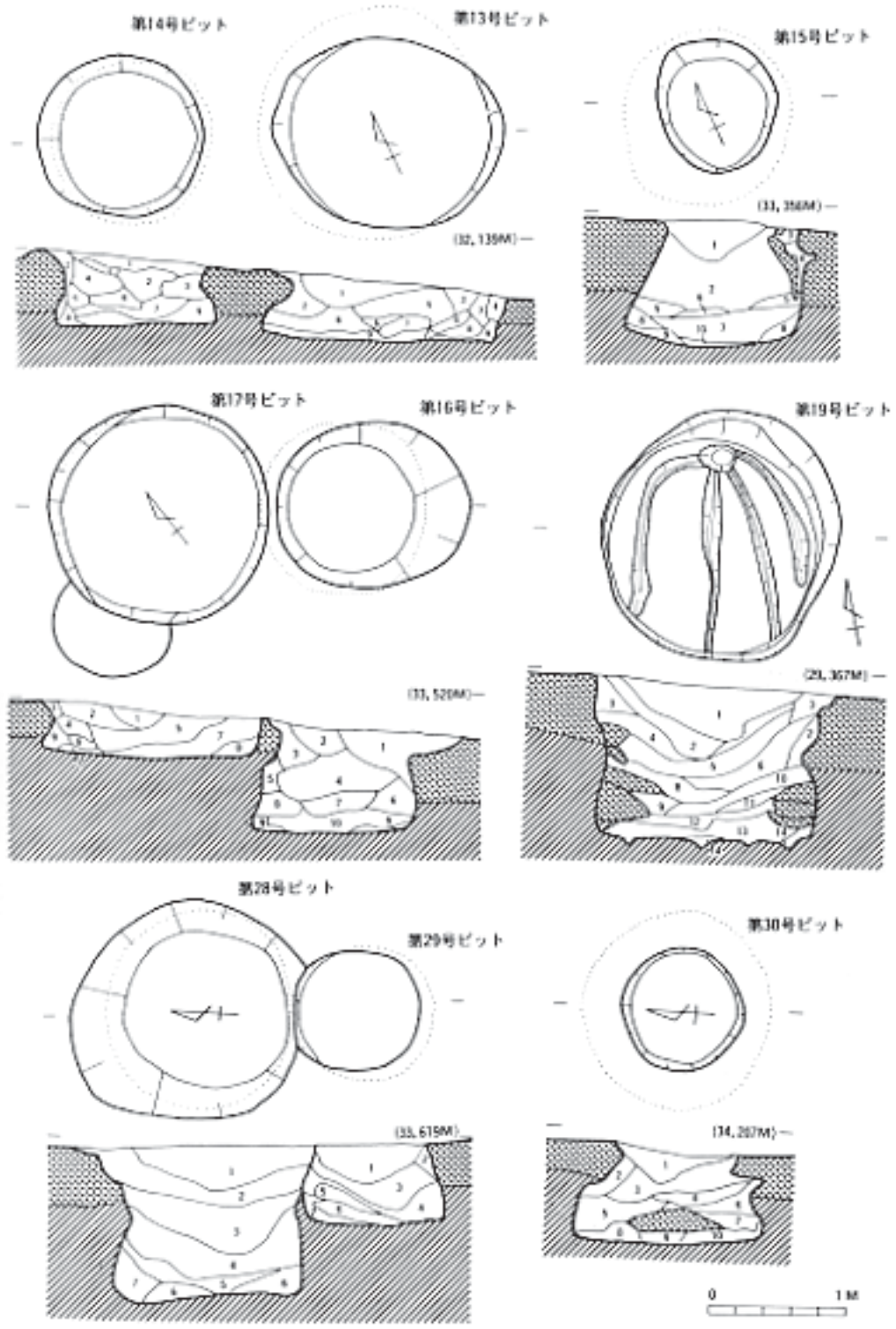
第 76 図　11 号住居跡出土遺物



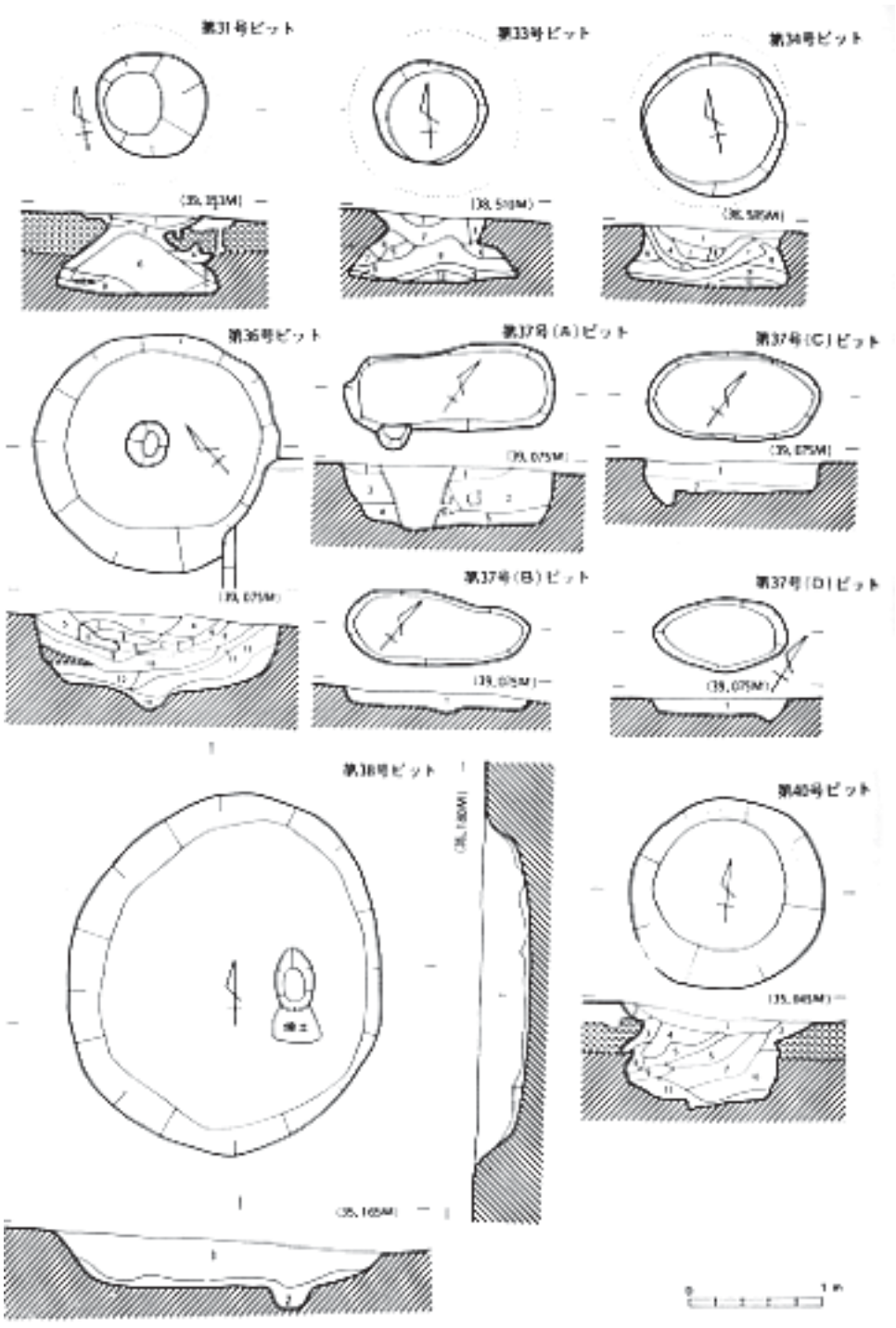
第 77 図　土器埋設遺構図


第1号ピット
第3号ピット
第8号ピット
第9号ピット
第11号ピット
第12号ピット
(30,246M)
(30,194M)
(30,535M)
(32,896M)
(32,889M)
0
1m

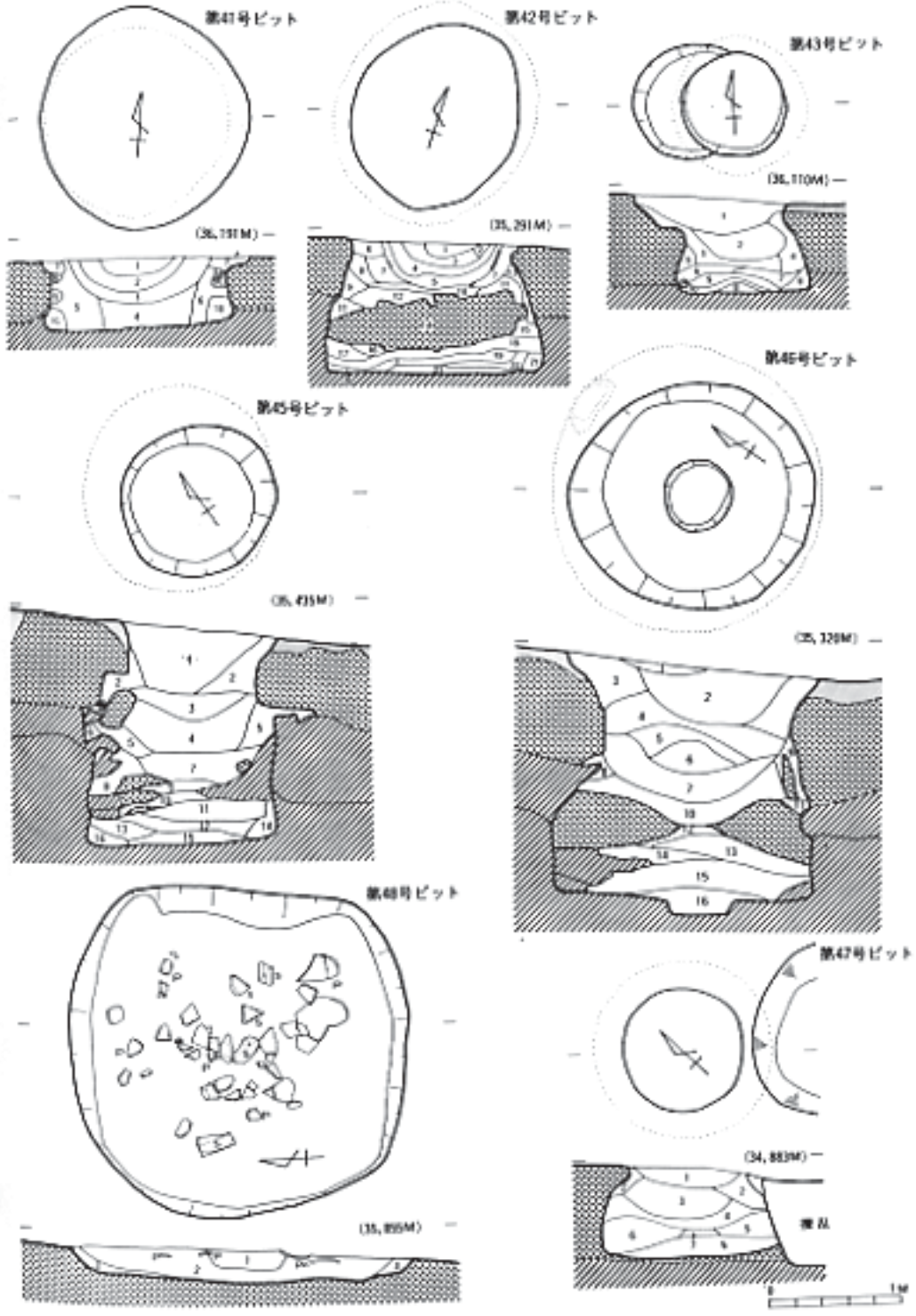
第78図　ピット実測図


第14号ピット
第13号ピット
第15号ピット
第17号ピット
第16号ピット
第19号ピット
第28号ピット
第29号ピット
第30号ピット
0
1M

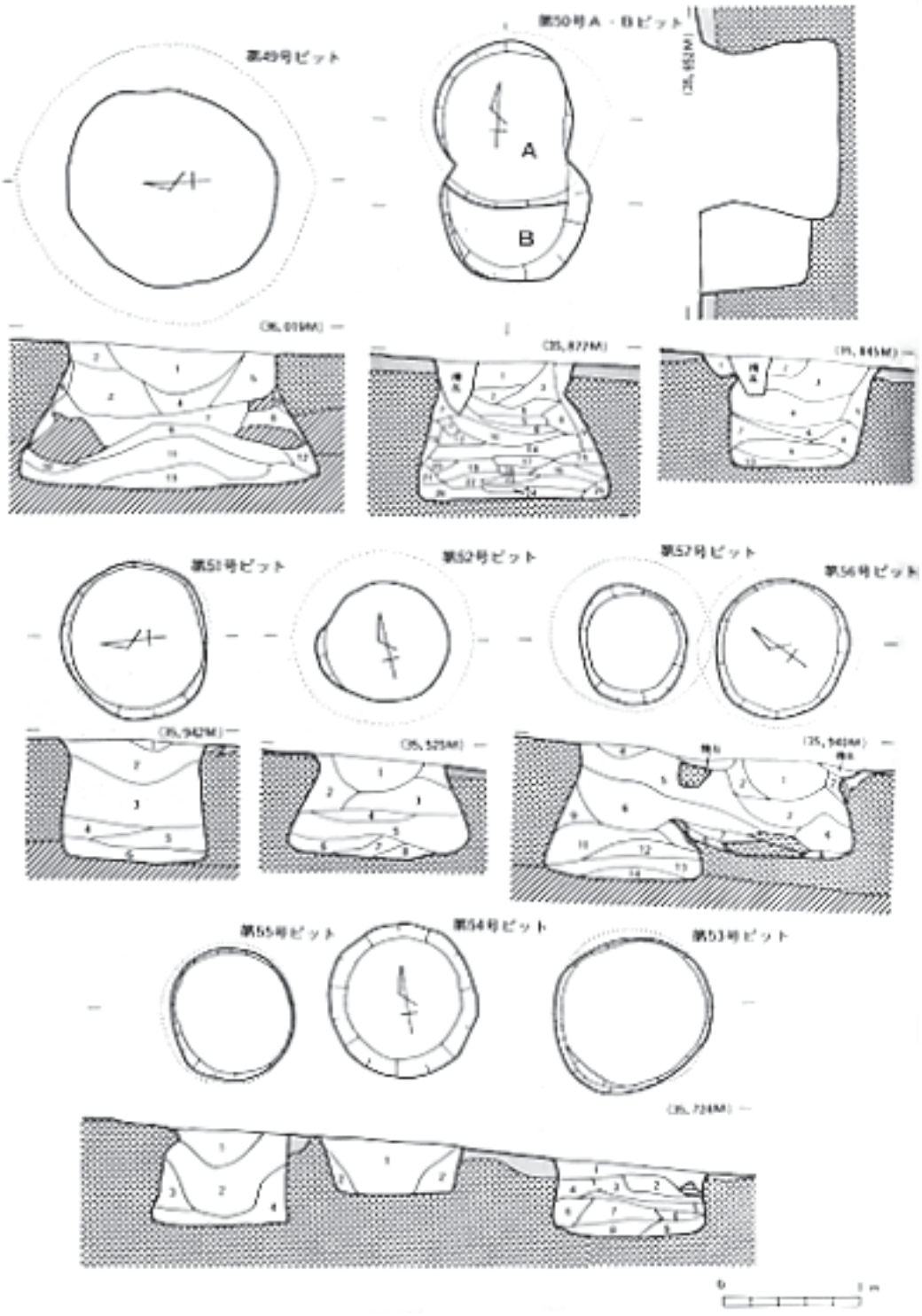
第 79 図　ピット実測図


第31号ピット
第33号ピット
第34号ピット
第36号ピット
第37号(A)ピット
第37号(C)ピット
第37号(B)ピット
第37号(D)ピット
第38号ピット
第40号ピット

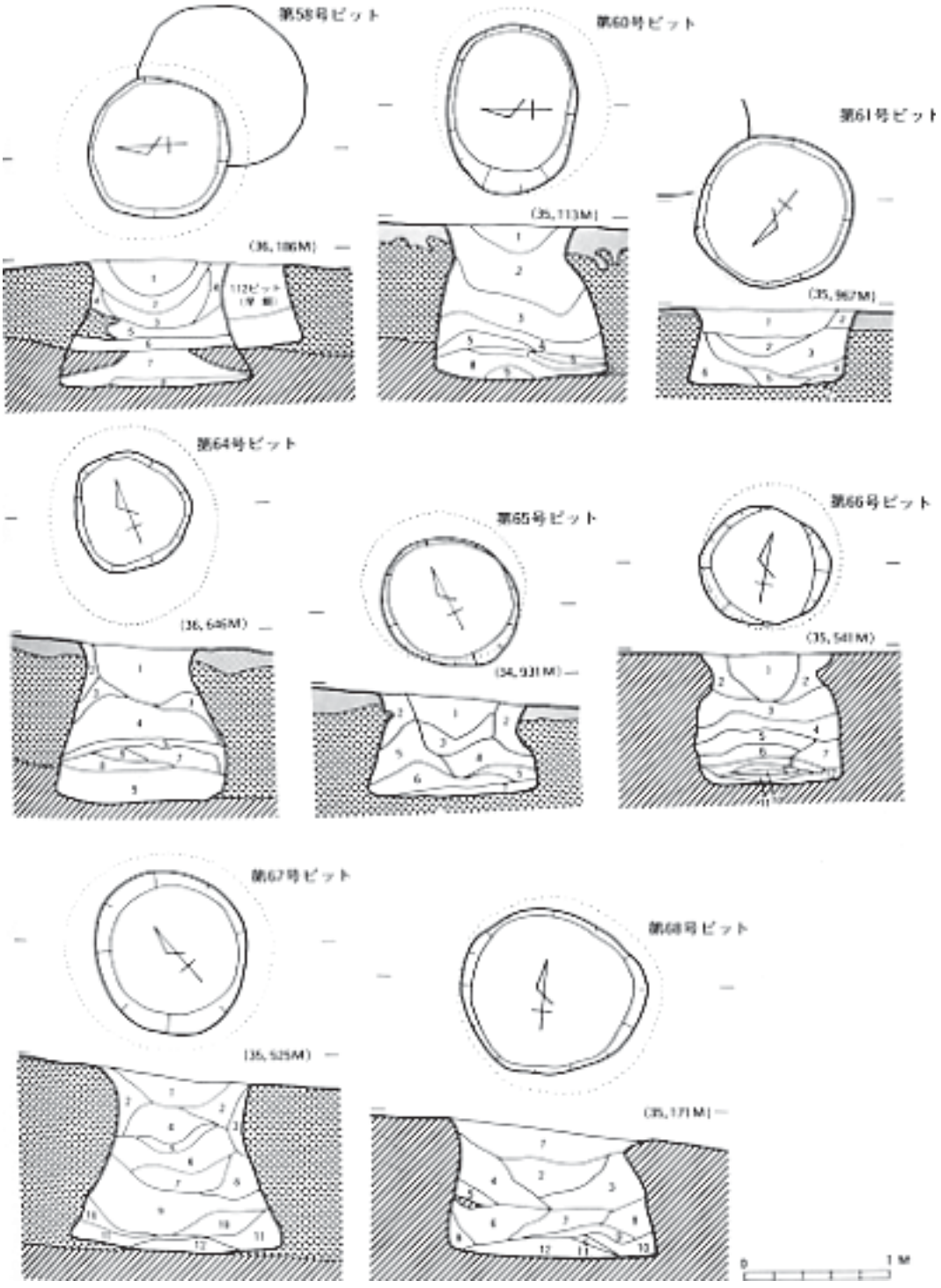
第 80 図　ピット実測図



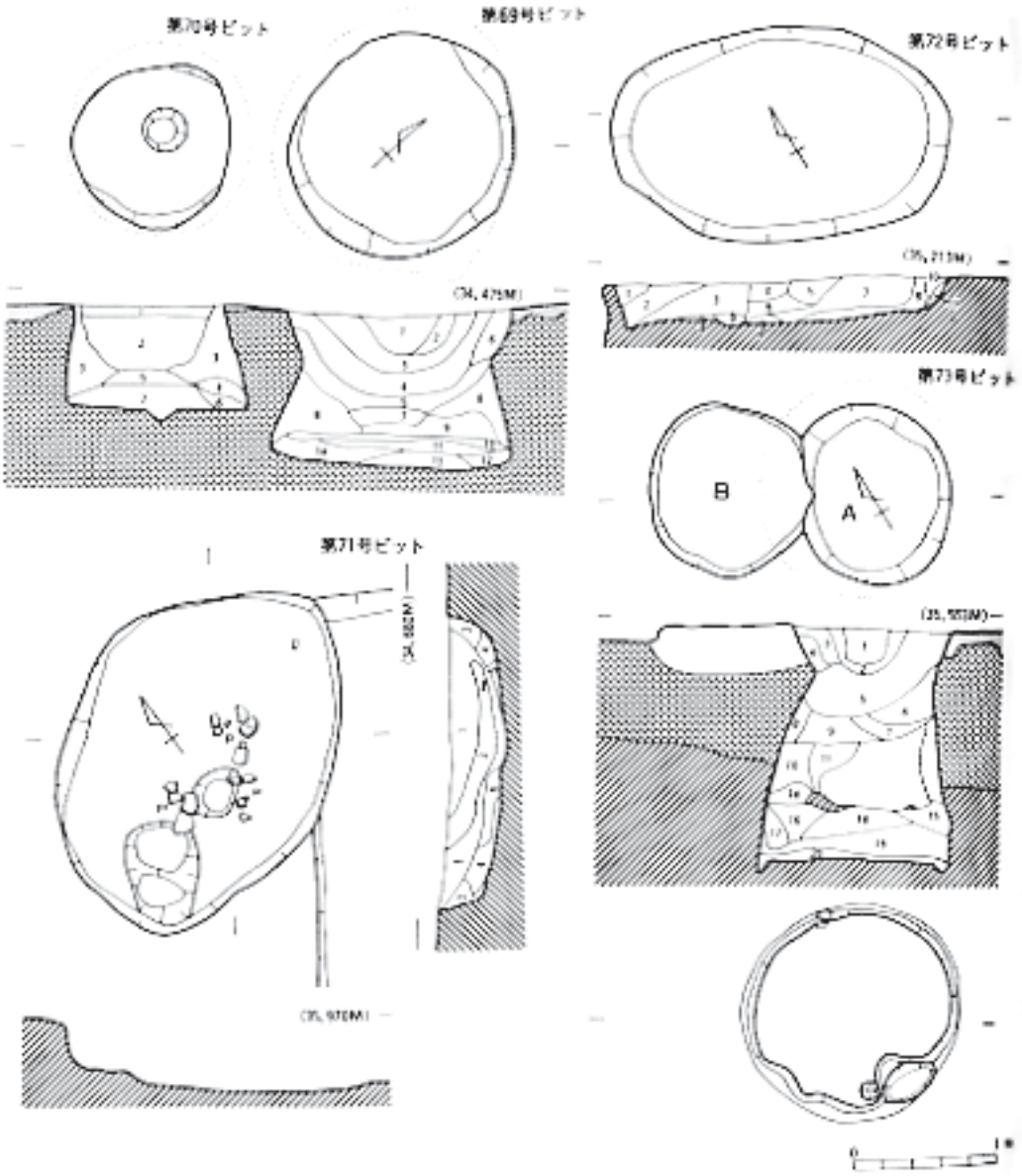
第 81 図　ピット実測図


第49号ピット
第50号A・Bピット
A
B
第51号ピット
第52号ピット
第57号ピット
第56号ピット
第55号ピット
第54号ピット
第53号ピット

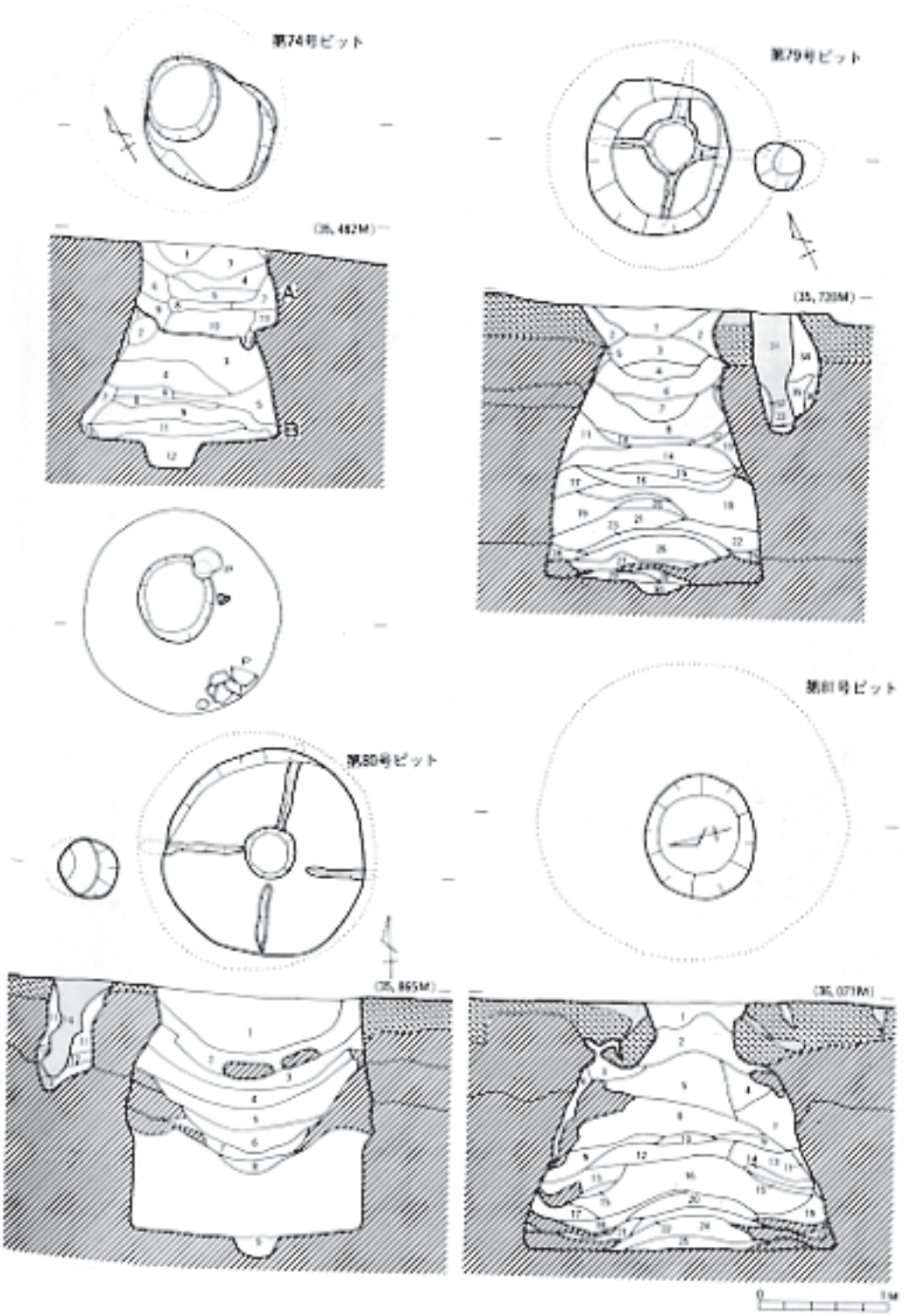
第 82 図　ピット実測図


第58号ピット
(36,186M)
112ピット
(平面)
第60号ピット
(35,113M)
第61号ピット
(35,967M)
第64号ピット
(36,646M)
第65号ピット
(36,331M)
第66号ピット
(35,561M)
第67号ピット
(35,525M)
第68号ピット
(35,171M)
0
1M

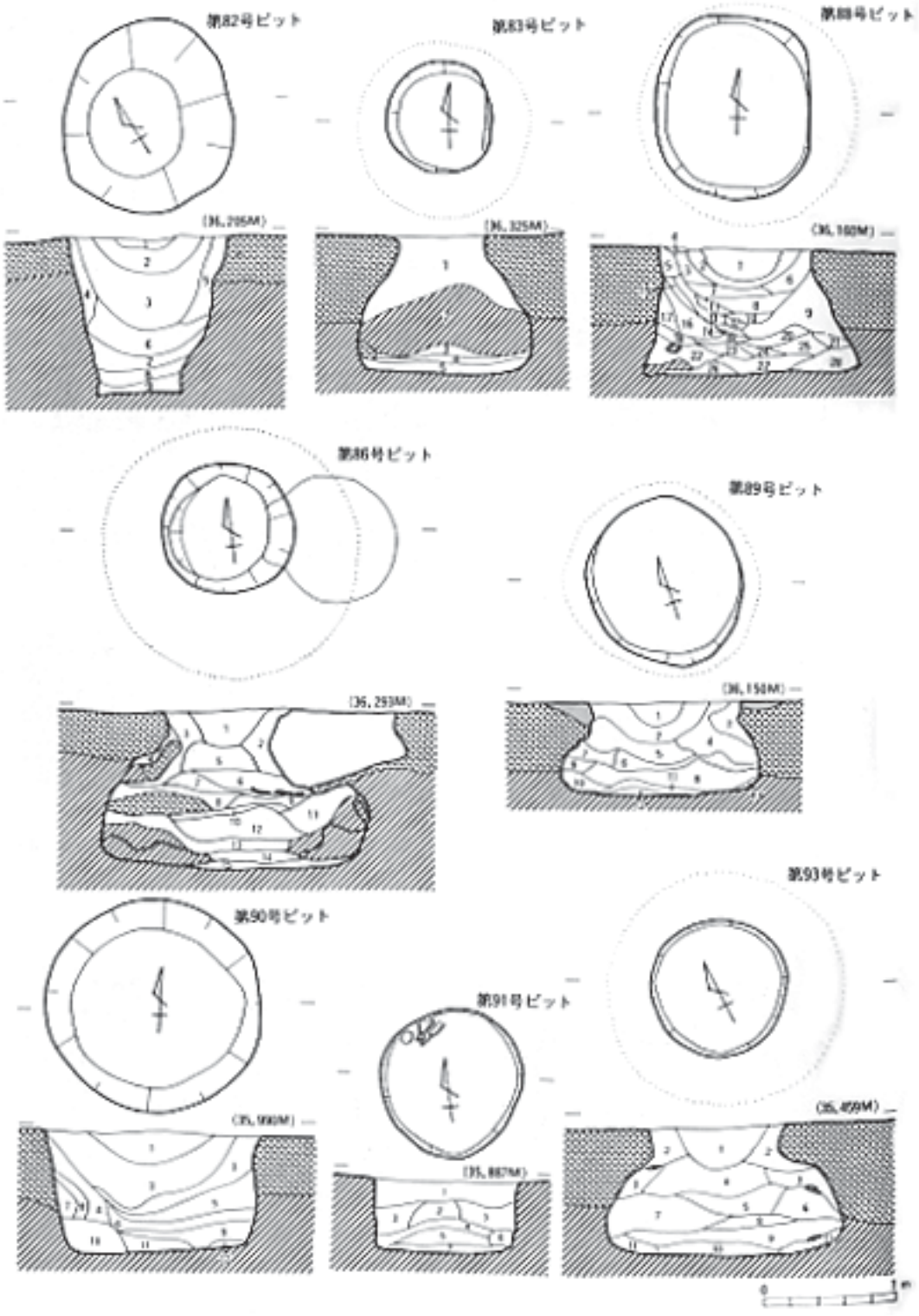
第 83 図　ピット実測図



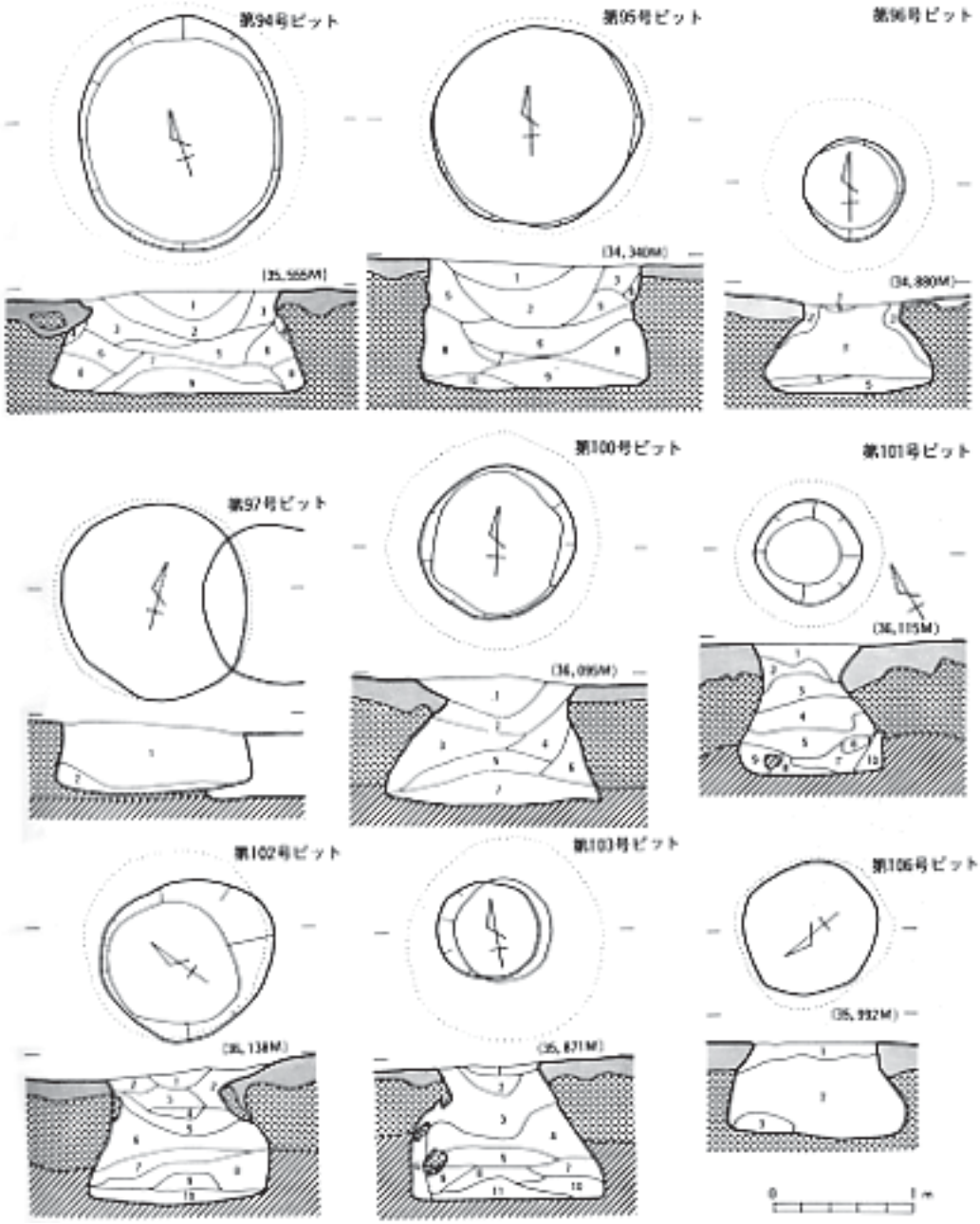
第 84 図　ピット実測図



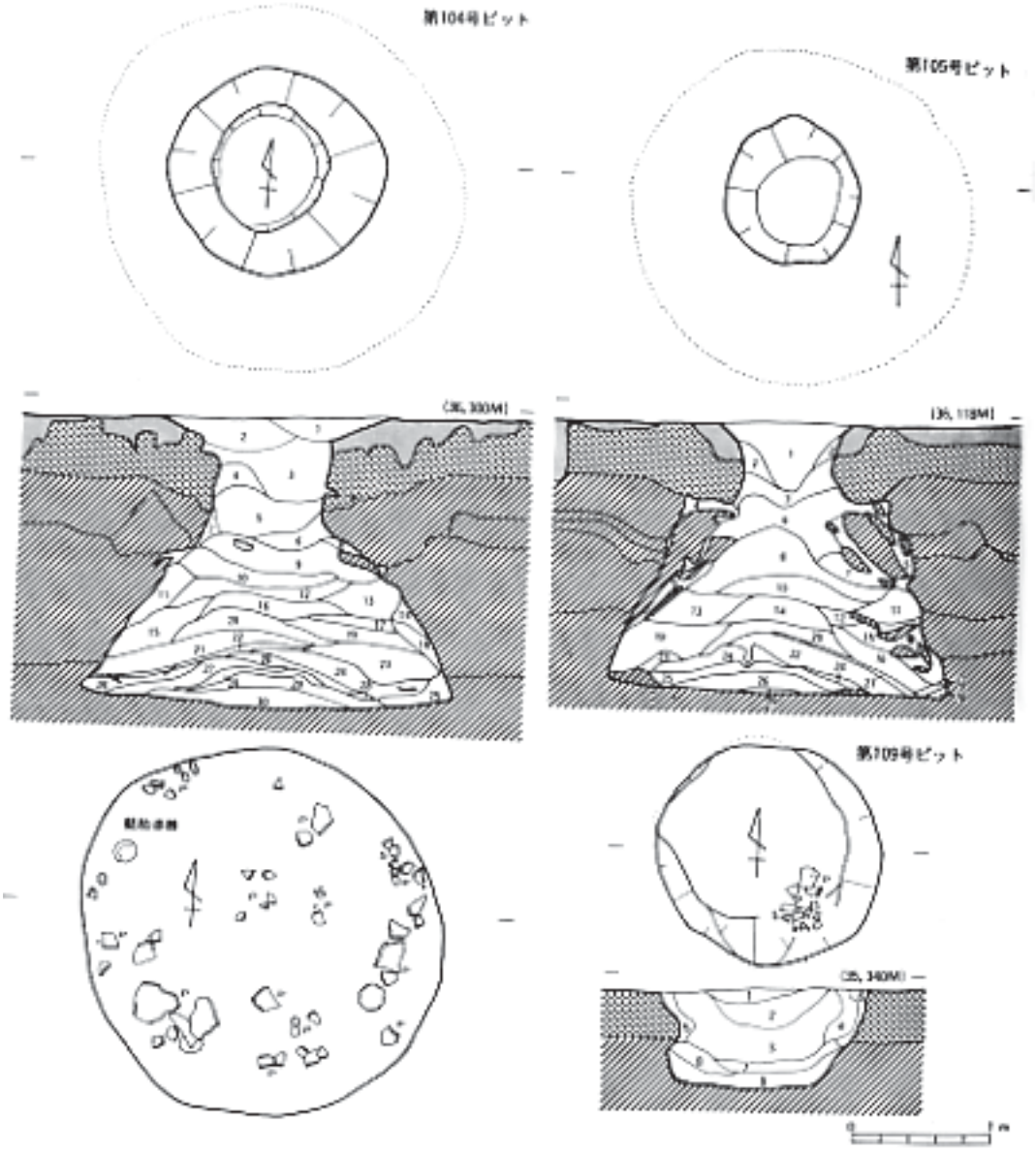
第 85 図　ピット実測図


第82号ピット
第83号ピット
第88号ピット
第86号ピット
第89号ピット
第90号ピット
第91号ピット
第93号ピット

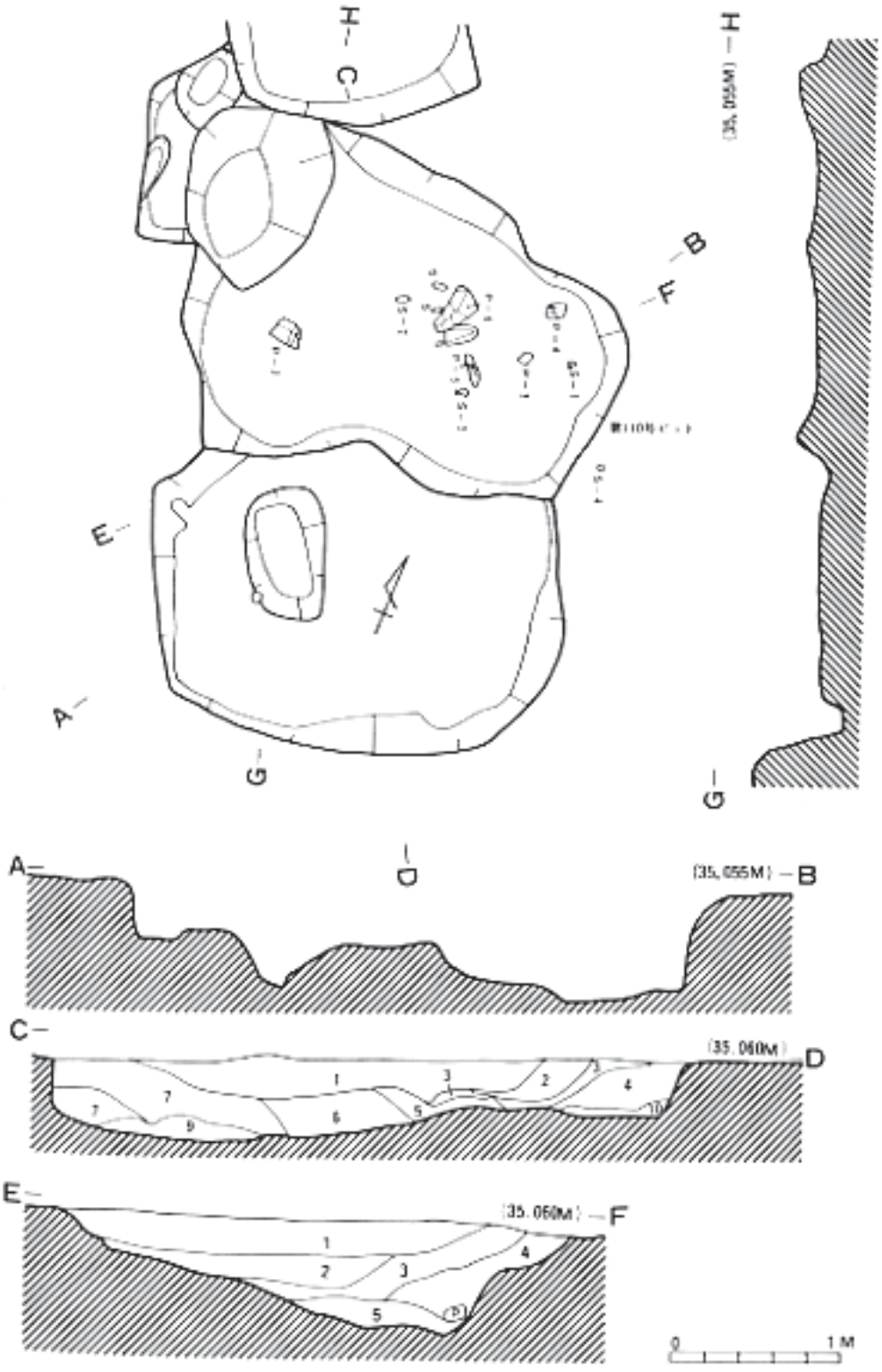
第 86 図　ピット実測図


第94号ピット
第95号ピット
第96号ピット
第97号ピット
第100号ピット
第101号ピット
第102号ピット
第103号ピット
第106号ピット

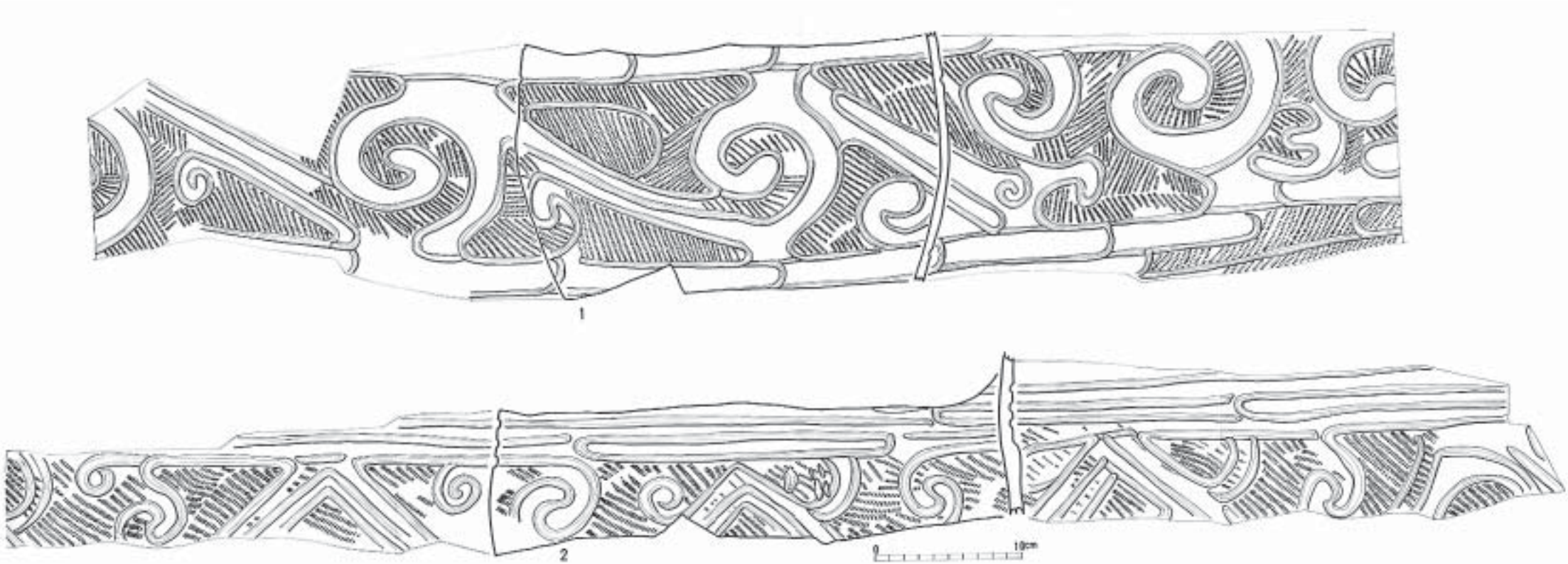
第 87 図　ピット実測図



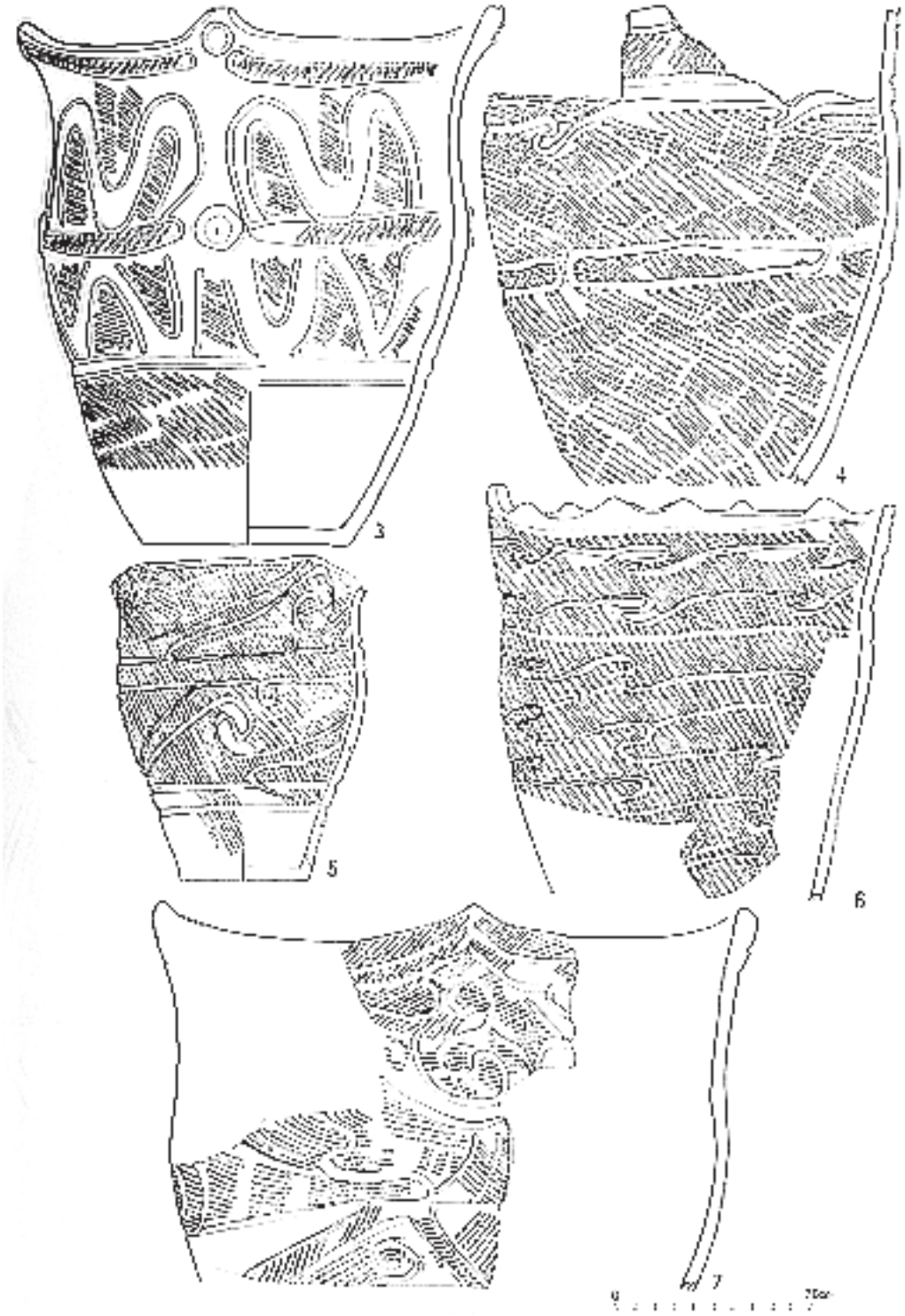
第 88 図　ピット実測図


H
C
H
(35.055M)
B
F
E
A
G
G
A
D
(35.055M)
B
C
(35.060M)
D
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
E
(35.060M)
F
1
2
3
4
5
P
0
1M

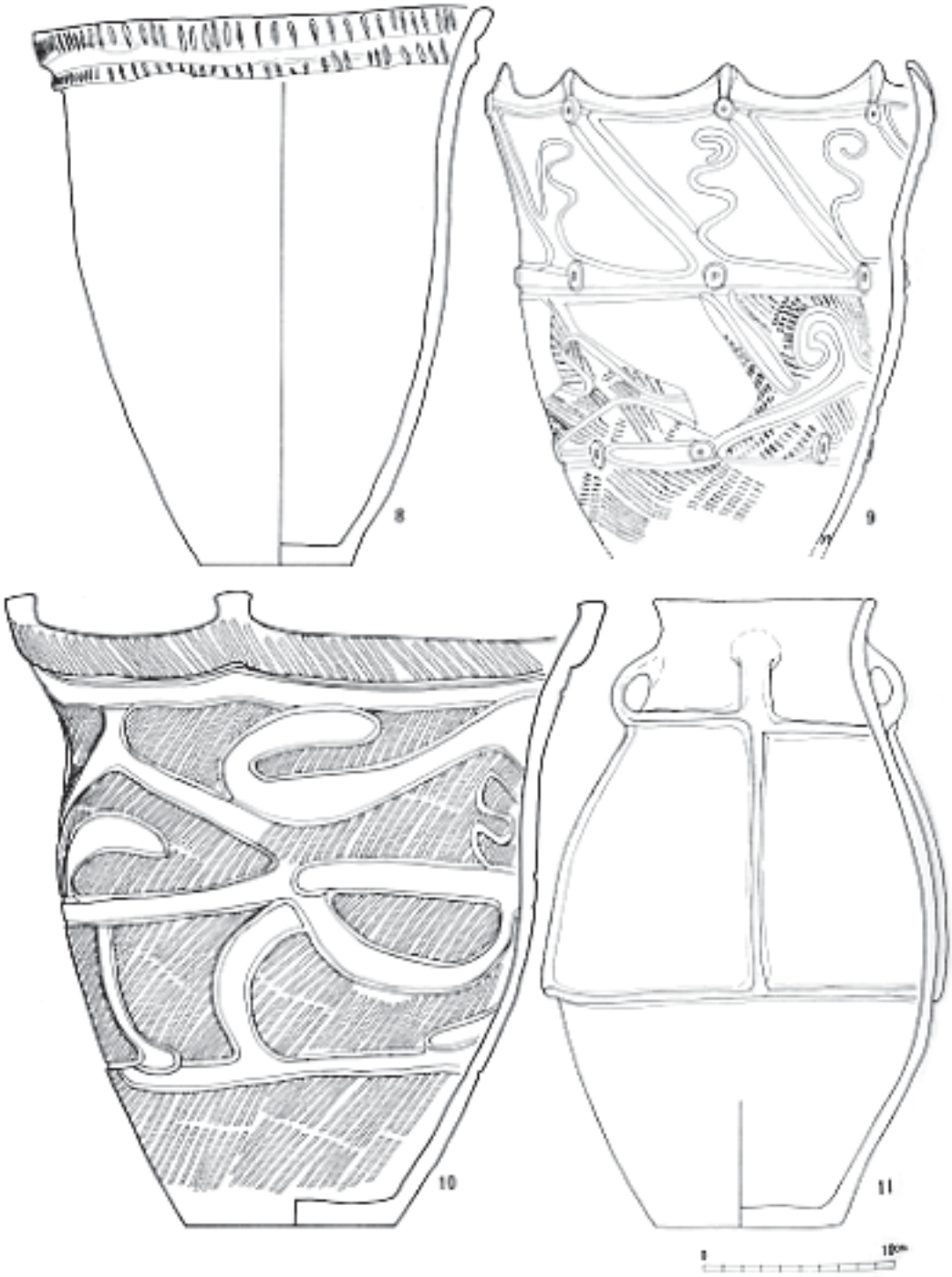
第 89 図　ピット実測図



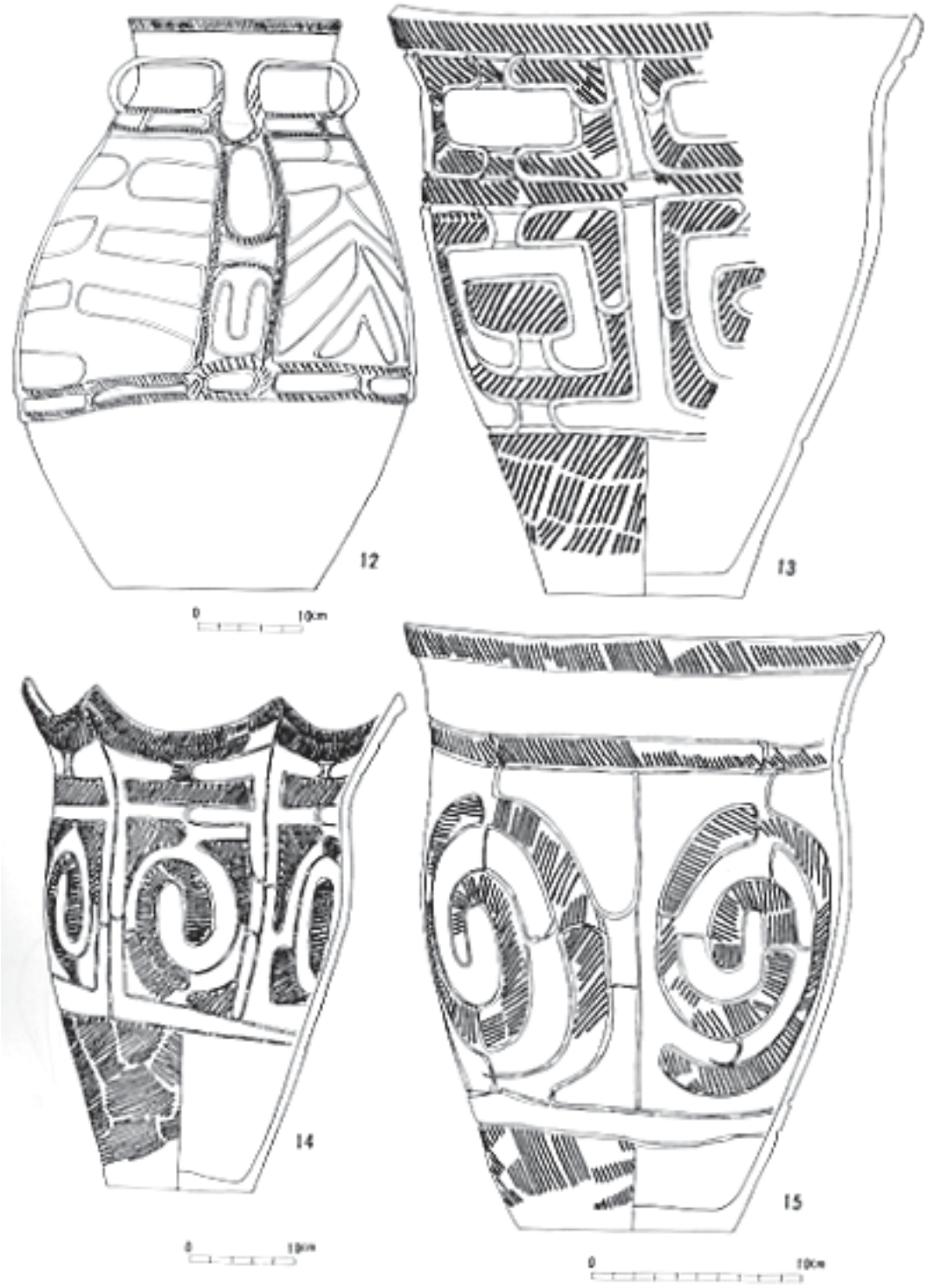
第90図　出土土



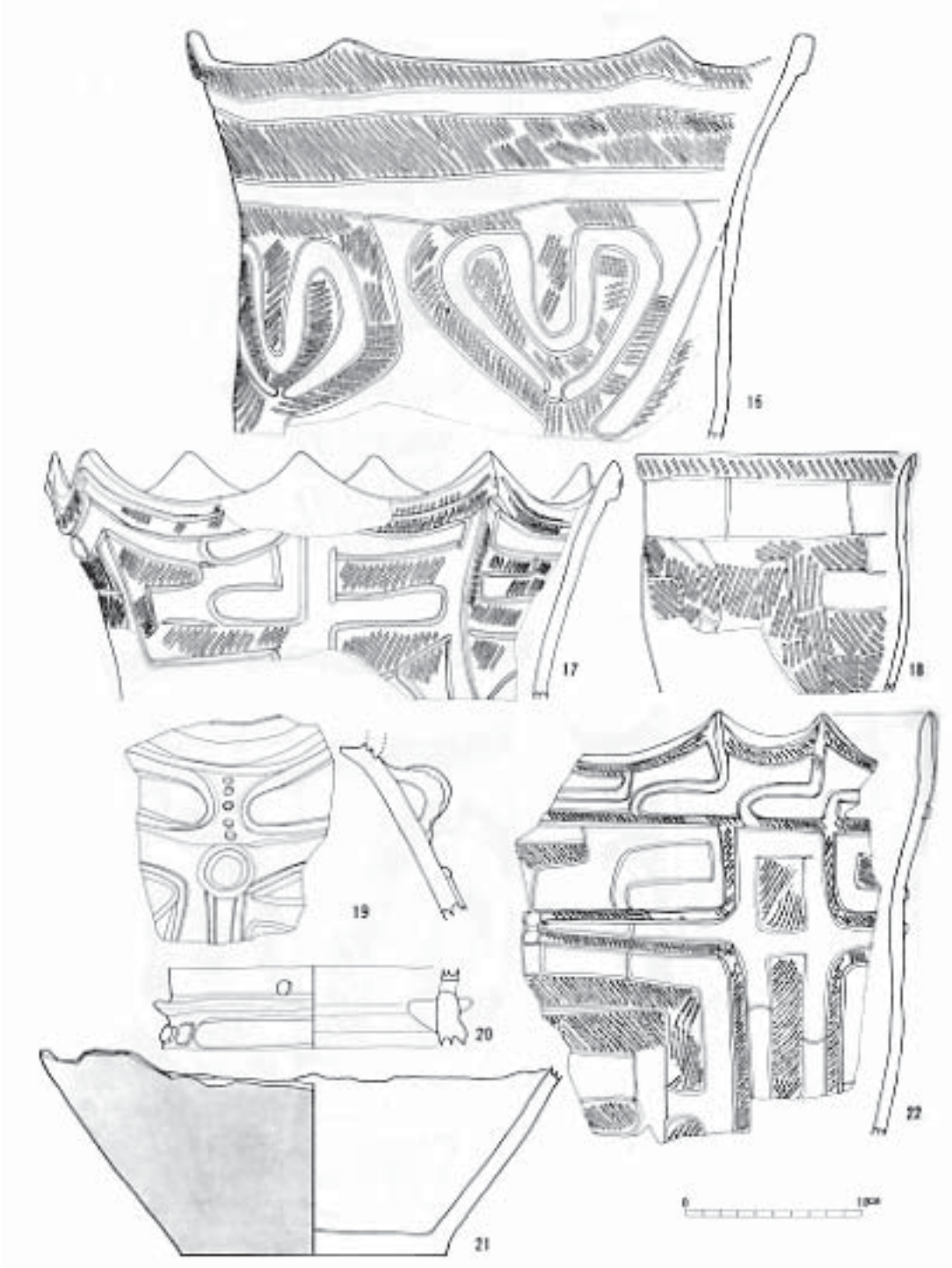
第 91 図　出土土器実測図



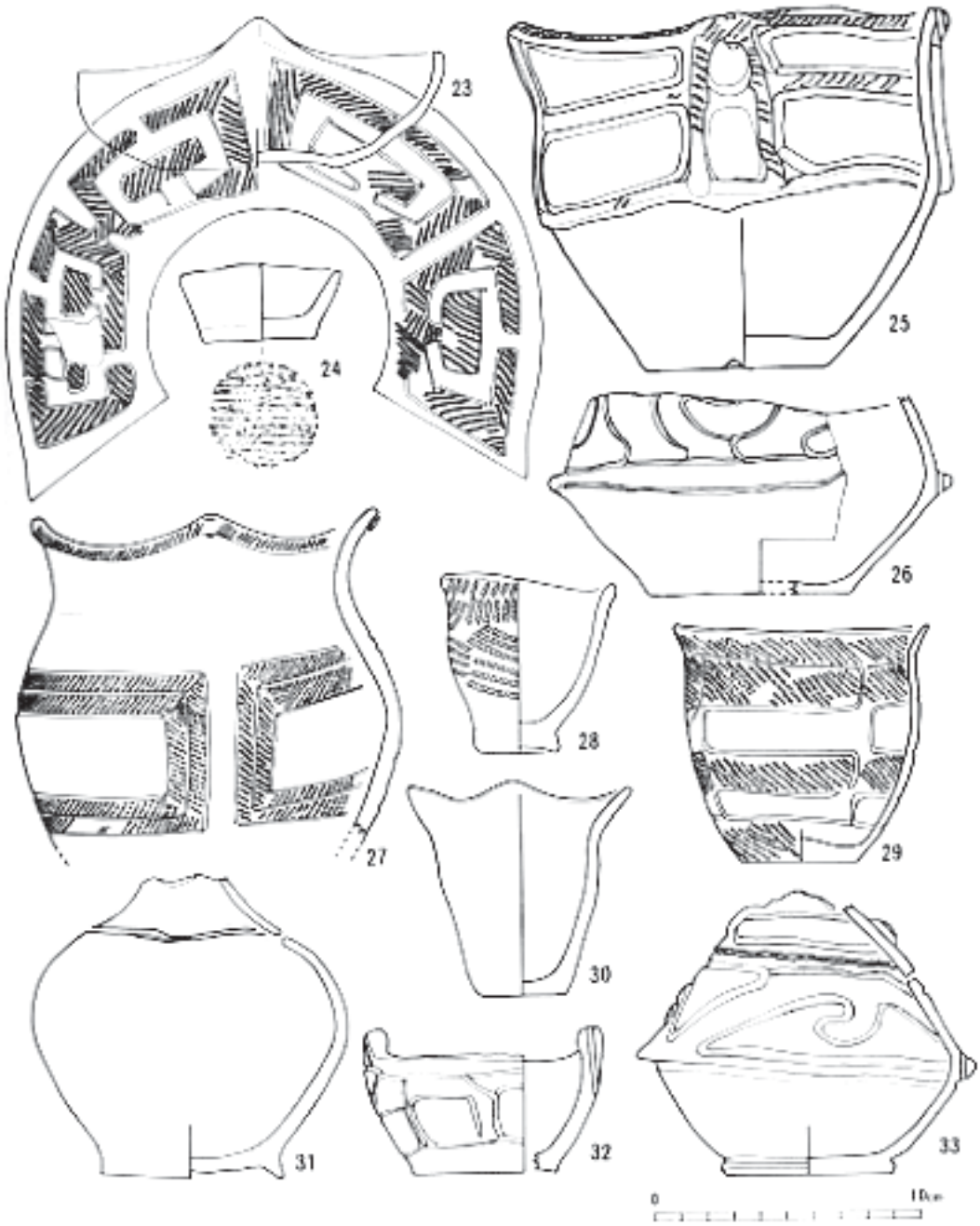
第 92 図　出土土器実測図



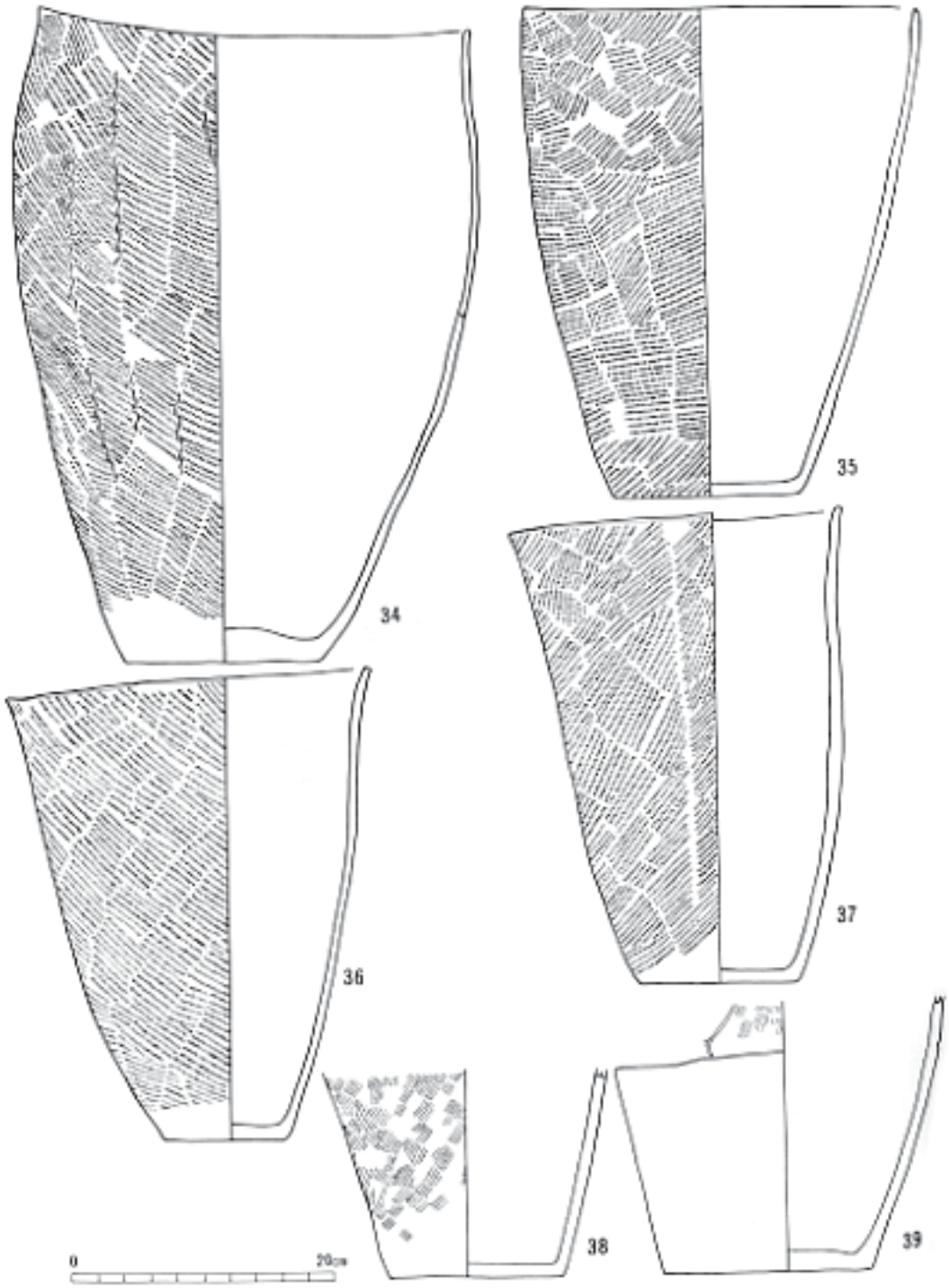
第 93 図　出土土器実測図



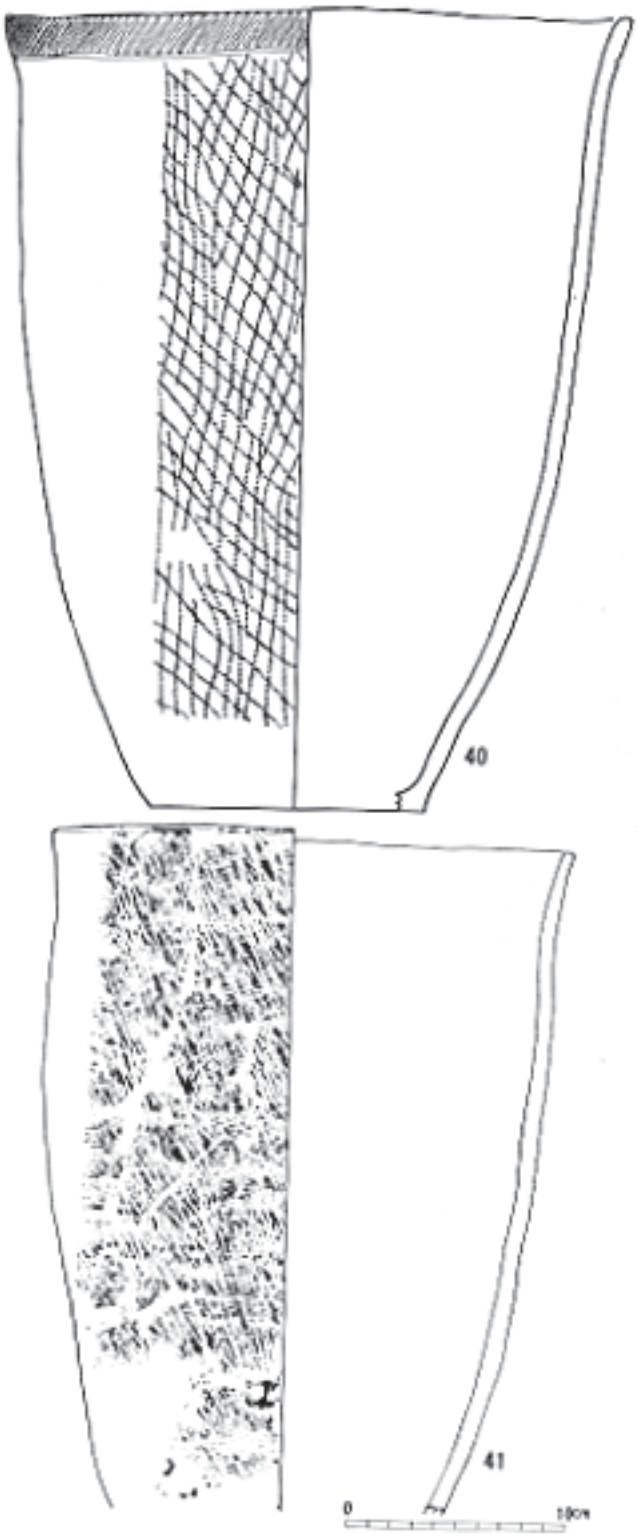
第 94 図　出土土器実測図



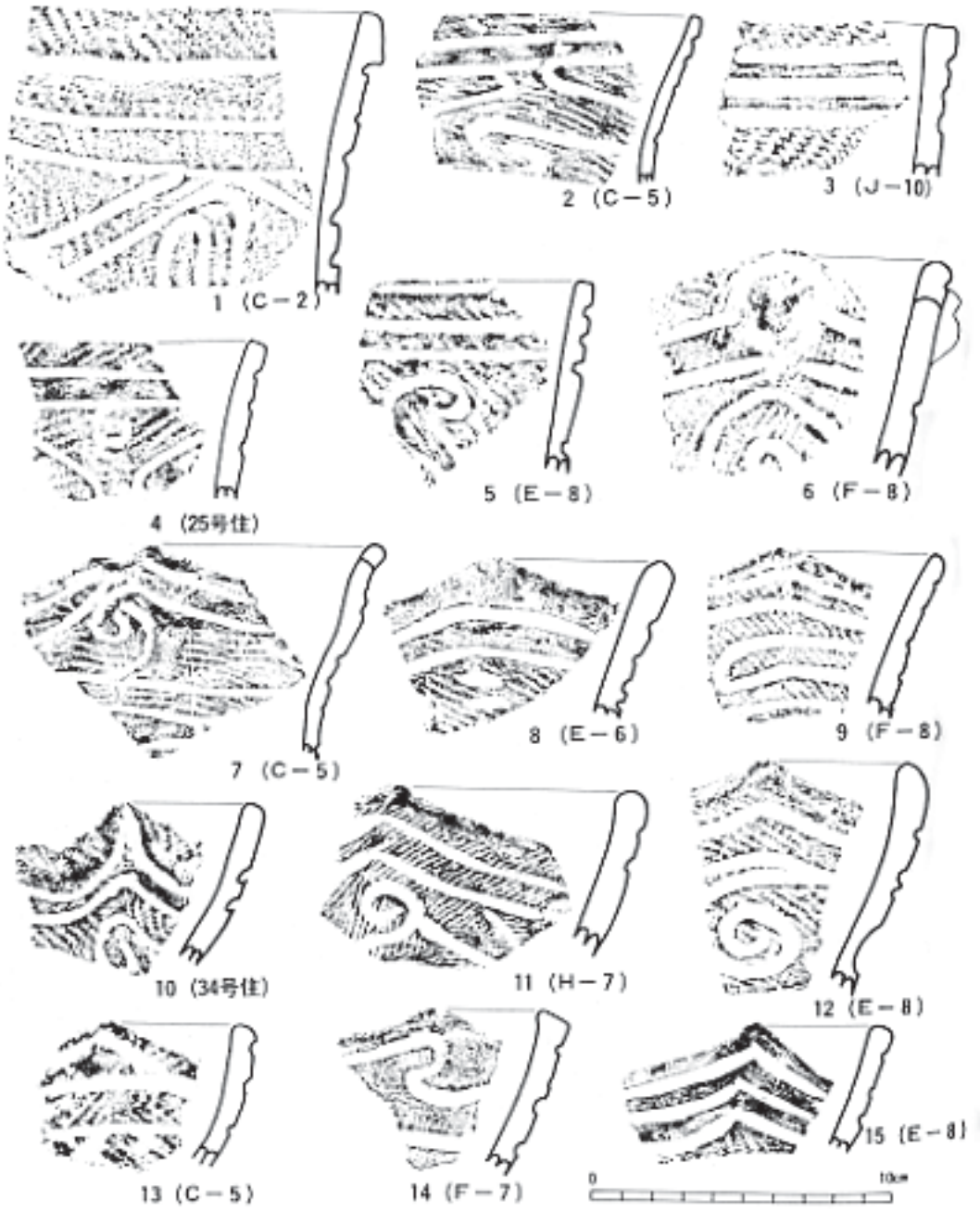
第 95 図出土土器実測図



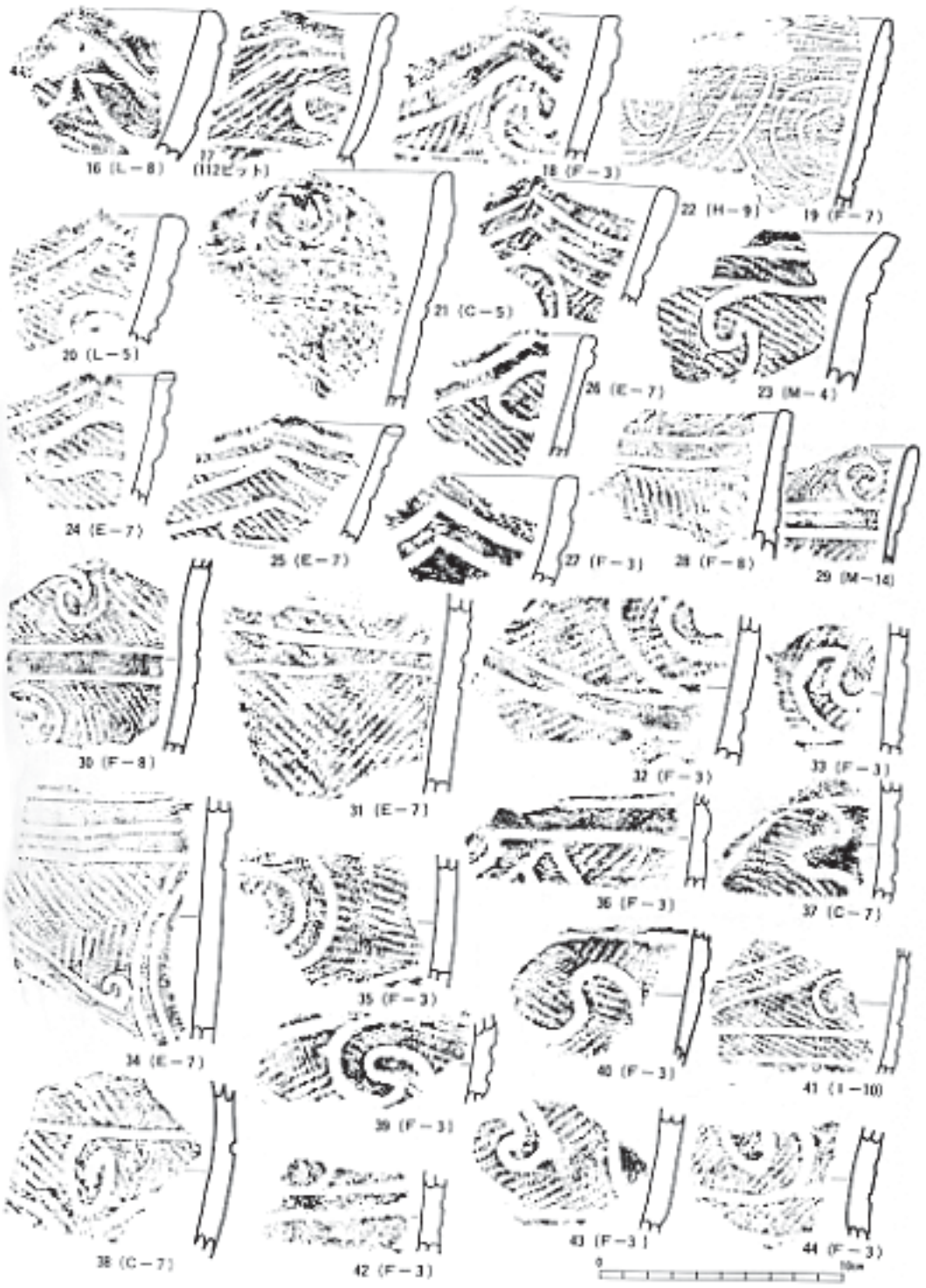
第 96 図　出土土器実測図



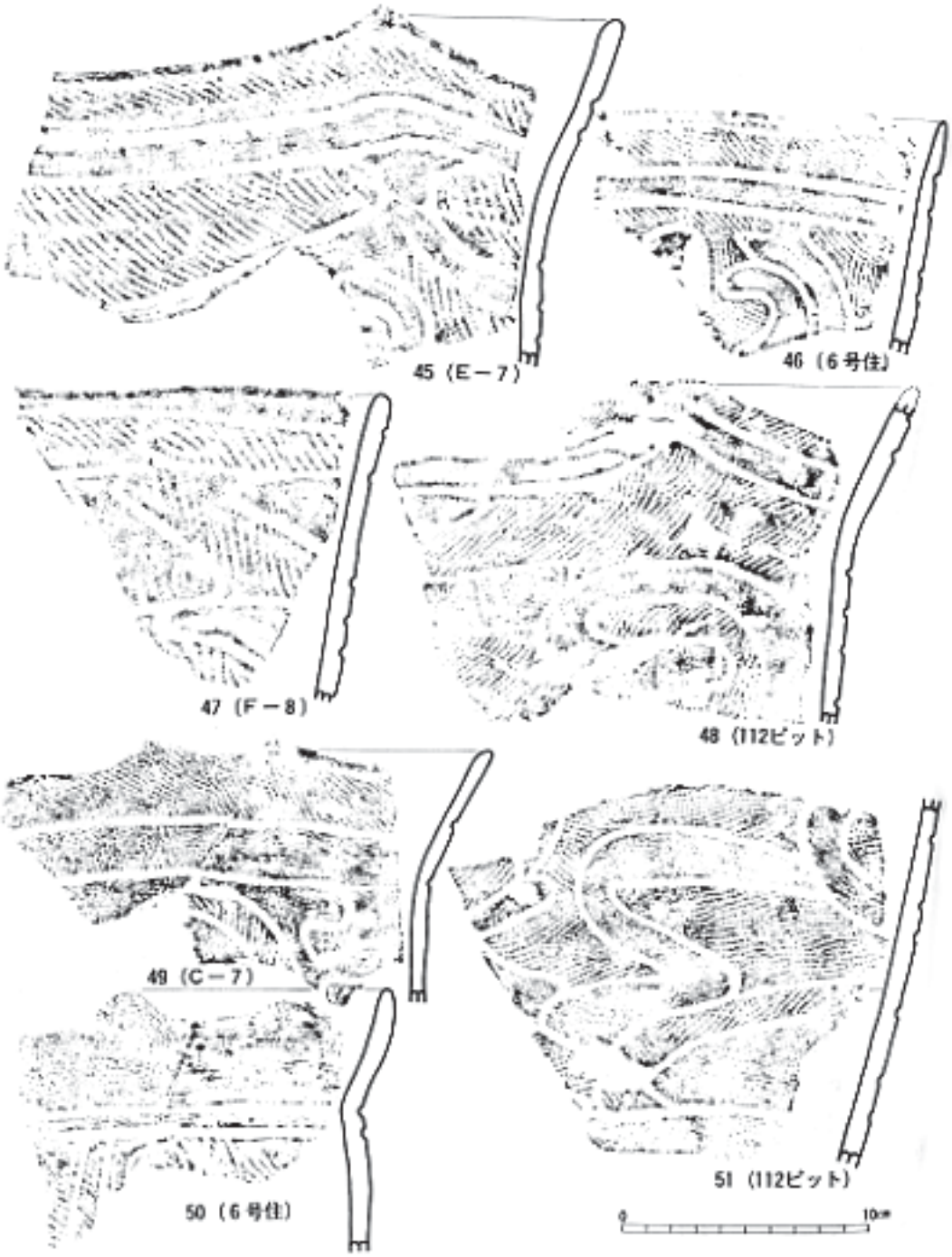
第 97 図　出土土器実測図


1 (C－2)
2 (C－5)
3 (J－10)
4 (25号住)
5 (E－8)
6 (F－8)
7 (C－5)
8 (E－6)
9 (F－8)
10 (34号住)
11 (H－7)
12 (E－8)
13 (C－5)
14 (F－7)
15 (E－8)
0
10cm

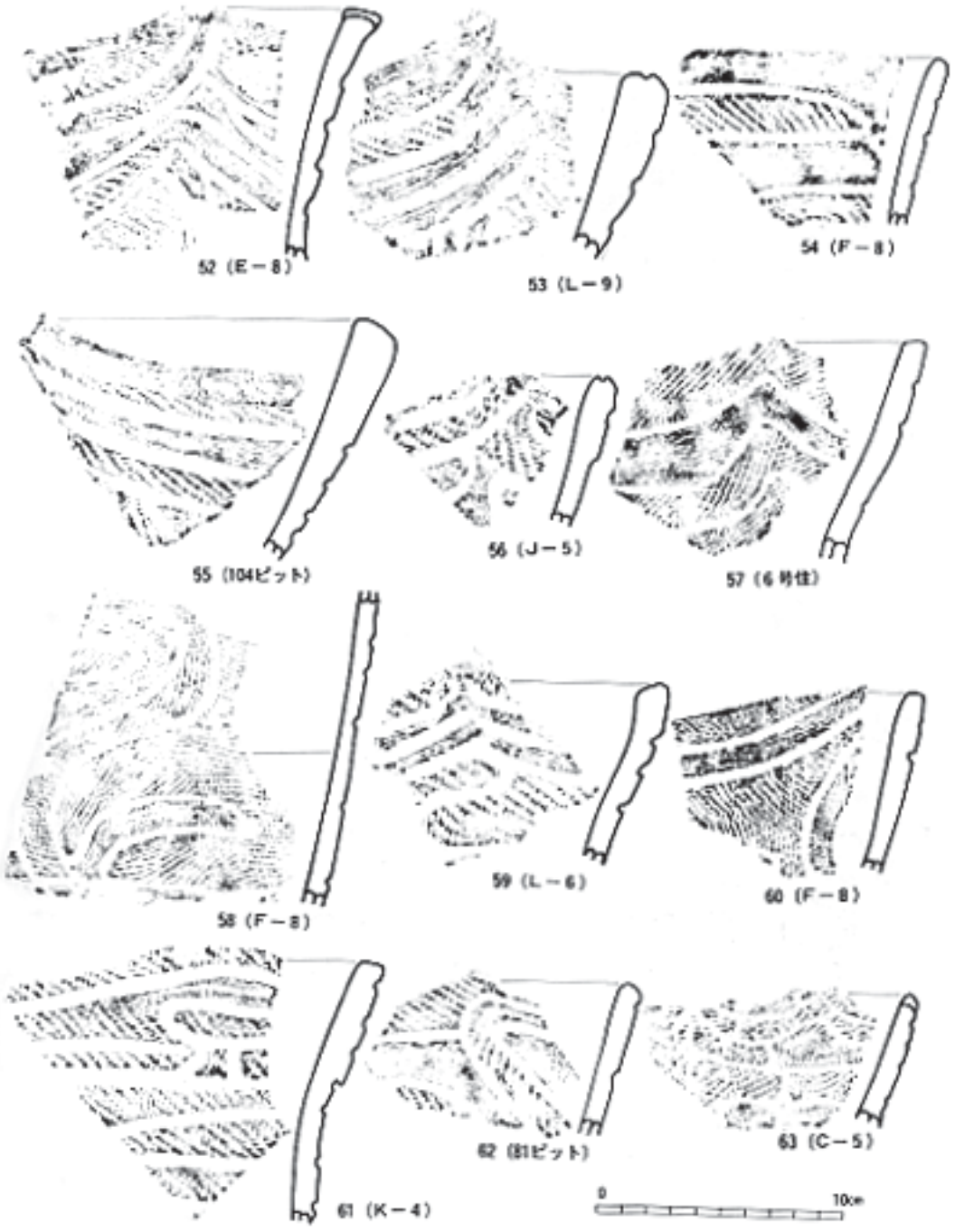
第98図　出土遺物


16 (L－8)
17 (112ピット)
18 (F－3)
19 (F－7)
20 (L－5)
21 (C－5)
22 (H－9)
23 (M－4)
24 (E－7)
25 (E－7)
26 (E－7)
27 (F－3)
28 (F－8)
29 (M－14)
30 (F－8)
31 (E－7)
32 (F－3)
33 (F－3)
34 (E－7)
35 (F－3)
36 (F－3)
37 (C－7)
38 (C－7)
39 (F－3)
40 (F－3)
41 (I－10)
42 (F－3)
43 (F－3)
44 (F－3)

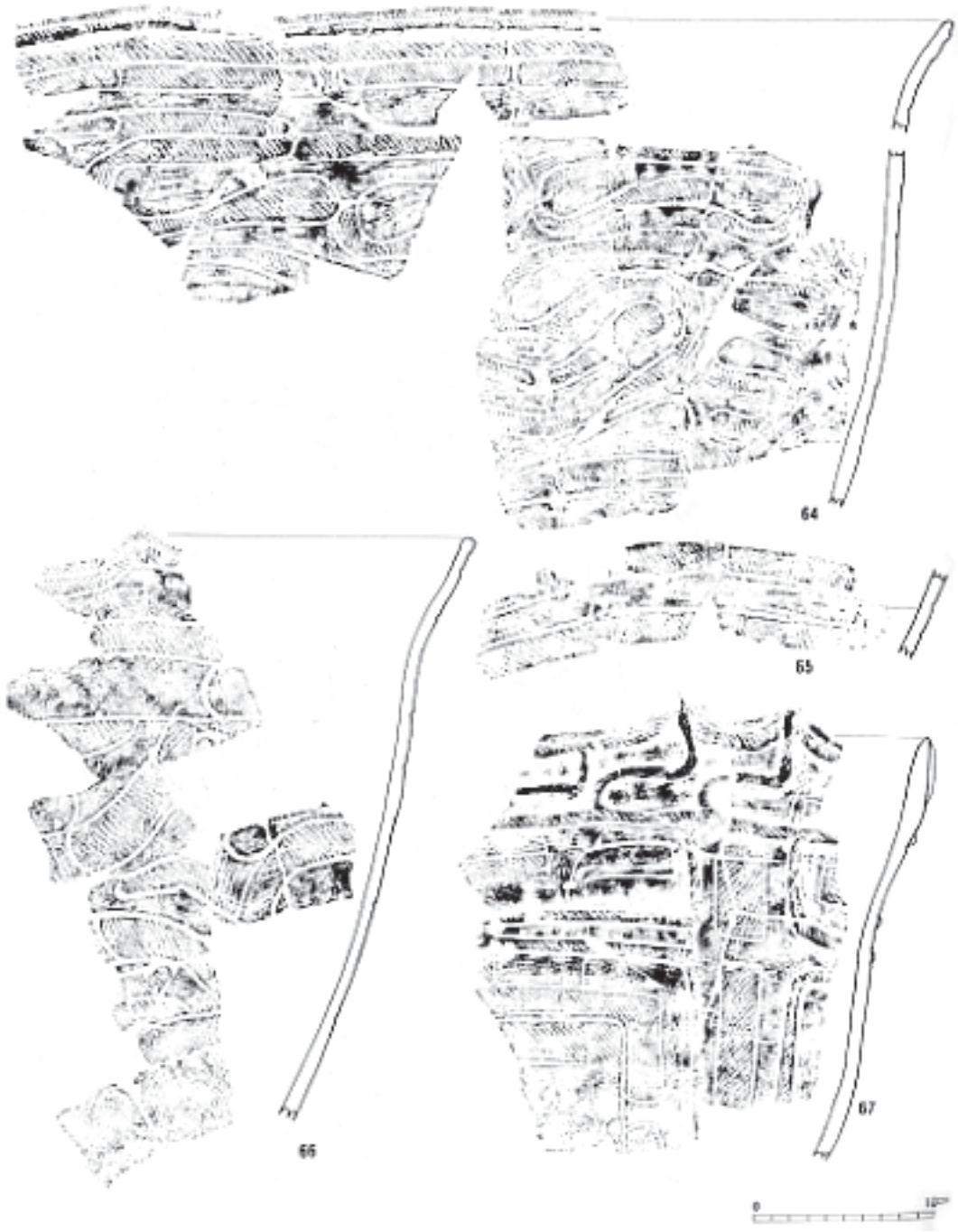
第 99 図　出土遺物



第100図　出土遺物


52 (E－8)
53 (L－9)
54 (F－8)
55 (104ピット)
56 (J－5)
57 (6号住)
58 (F－8)
59 (L－6)
60 (F－8)
61 (K－4)
62 (81ピット)
63 (C－5)
0
10cm

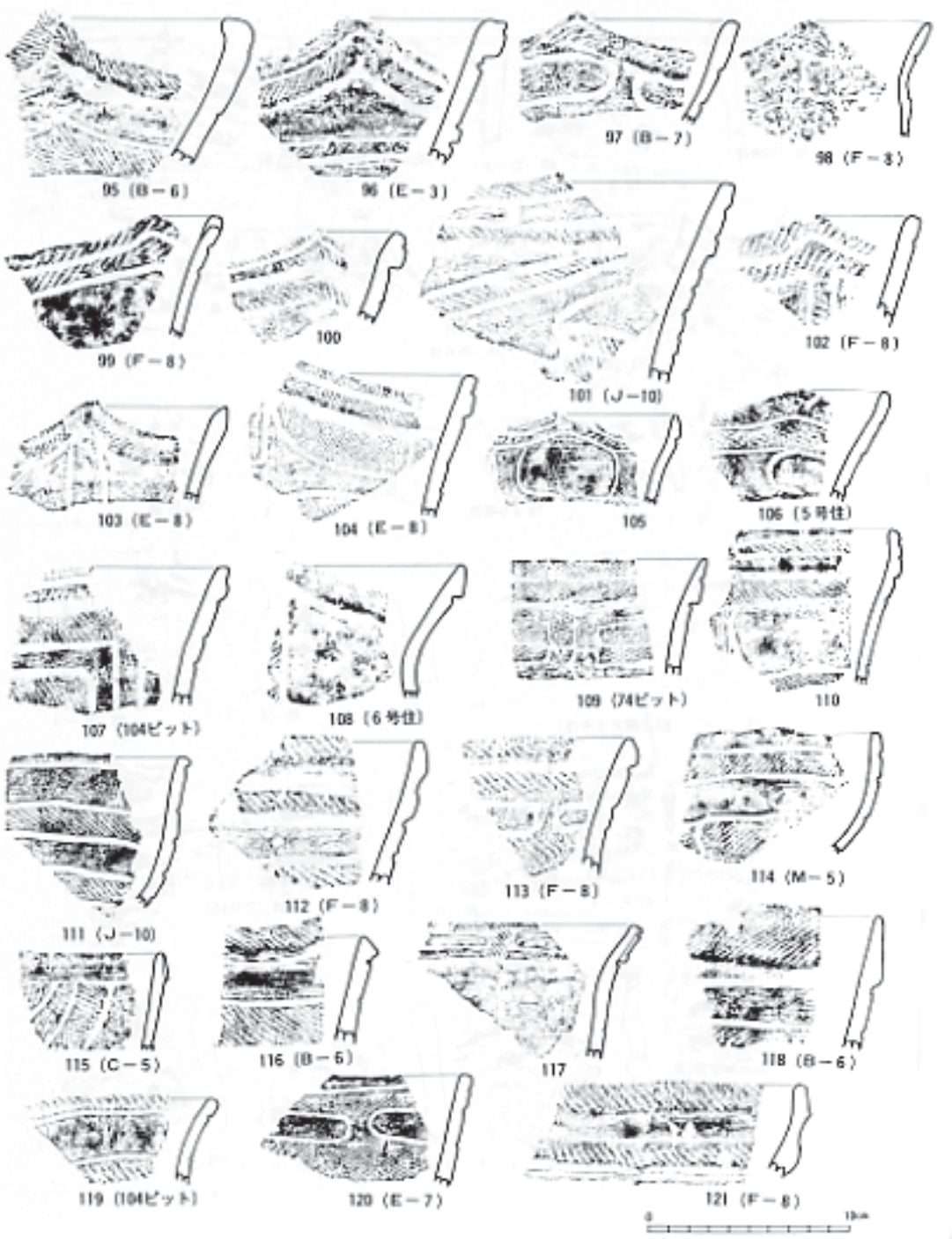
第 101 図　出土遺物



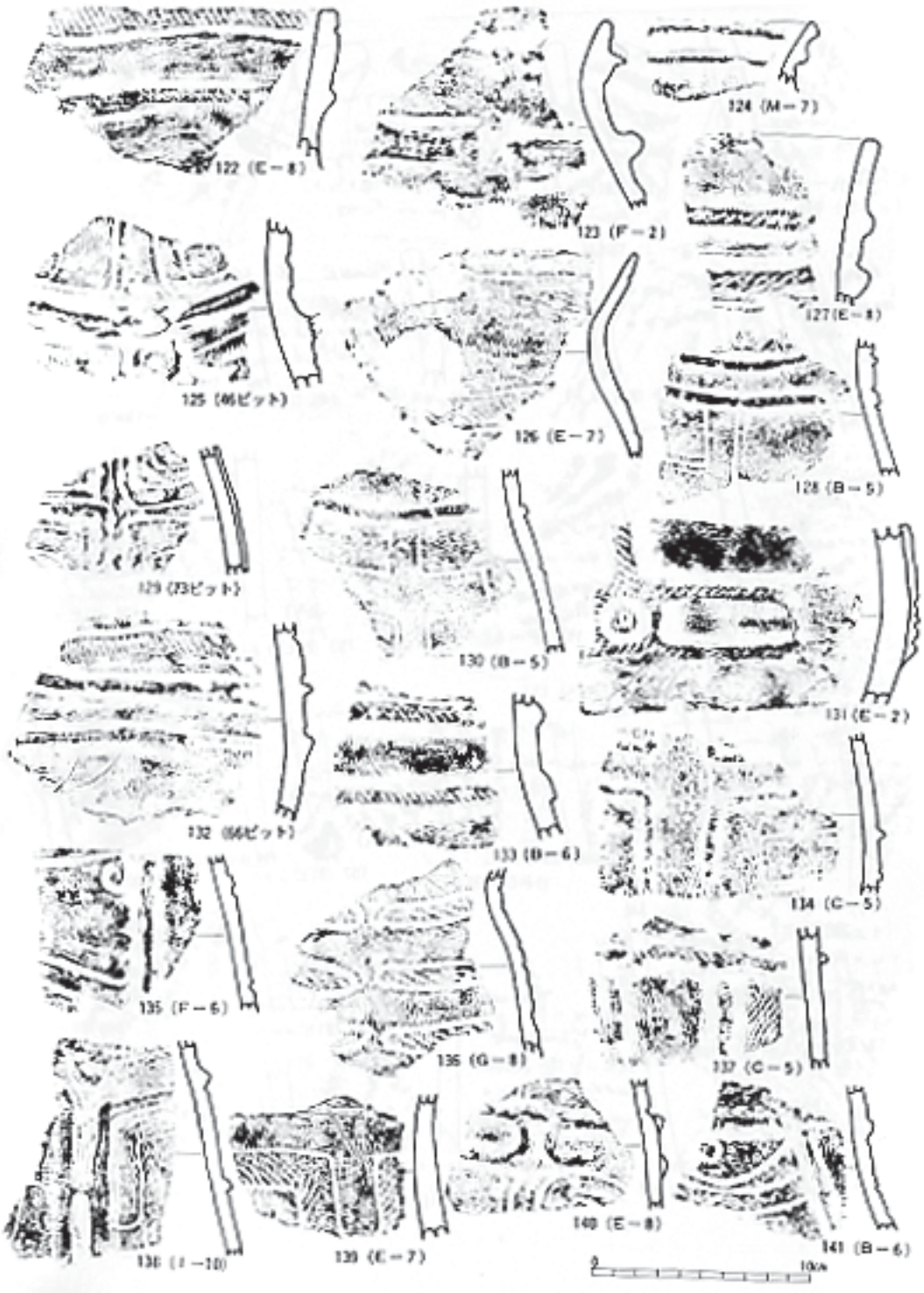
第 102 図　出土遺物

68 (10号住)
69 (D－6)
70 (D－7)
71 (10号住)
72 (F－8)
73 (E－3)
74 (26号住)
75 (I－5)
76 (E－7)
77 (6号住)
78 (J－11)
79 (5号住)
80 (F－8)
81 (5号住)
82 (L－7)
83 (縄文9号住)
84 (E－3)
85 (E－3)
86 (E－8)
87(E－8)
88 (E－7)
89 (21号住)
90 (14号住)
91 (E－3)
92 (F－8)
93 (F－8)
94 (E－8)
10cm

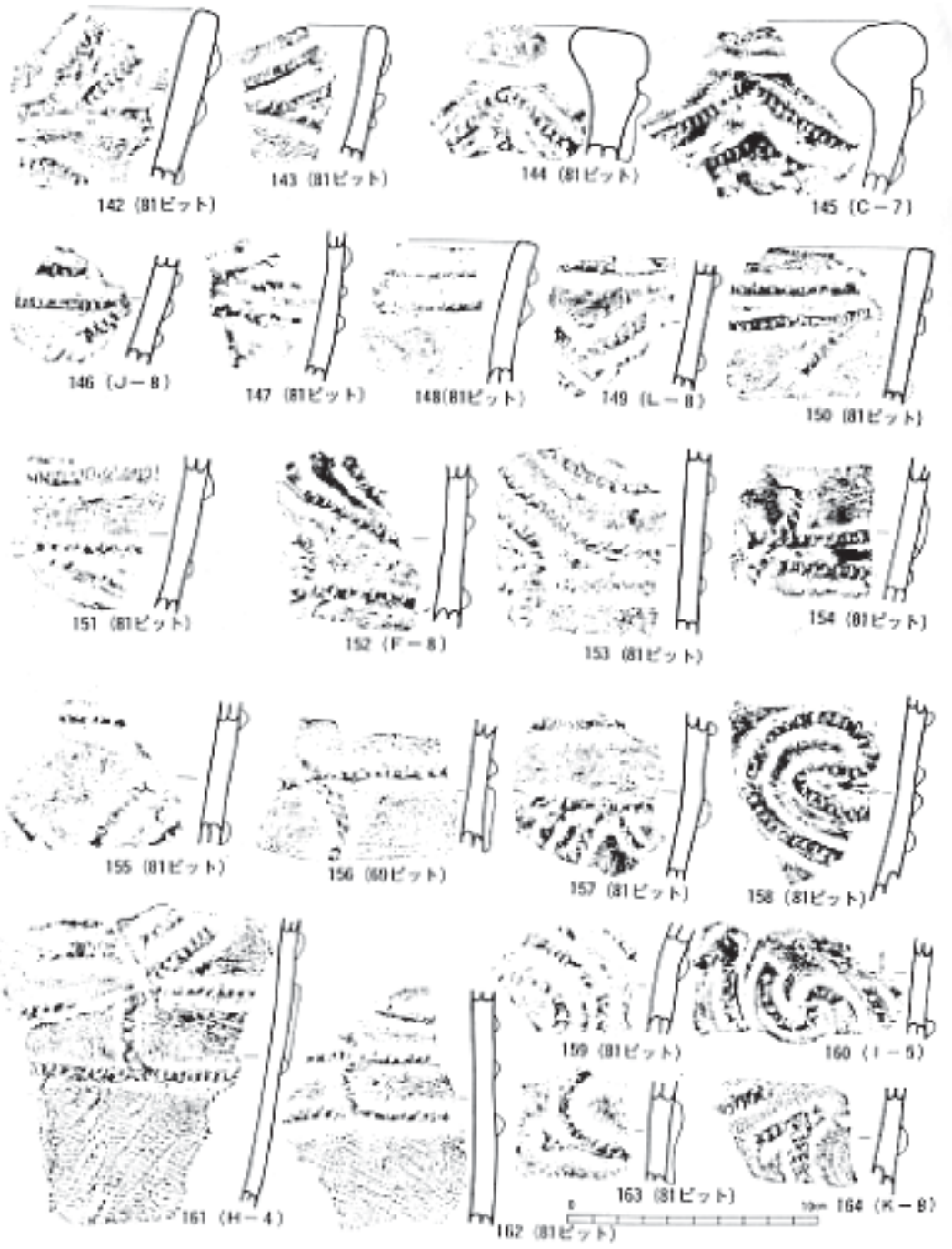
第 103 図　出土遺物


95 (B－6)
96 (E－3)
97 (B－7)
98 (F－8)
99 (F－8)
100
101 (J－10)
102 (F－8)
103 (E－8)
104 (E－8)
105
106 (5号住)
107 (104ピット)
108 (6号住)
109 (74ピット)
110
111 (J－10)
112 (F－8)
113 (F－8)
114 (M－5)
115 (C－5)
116 (B－6)
117
118 (B－6)
119 (104ピット)
120 (E－7)
121 (F－8)

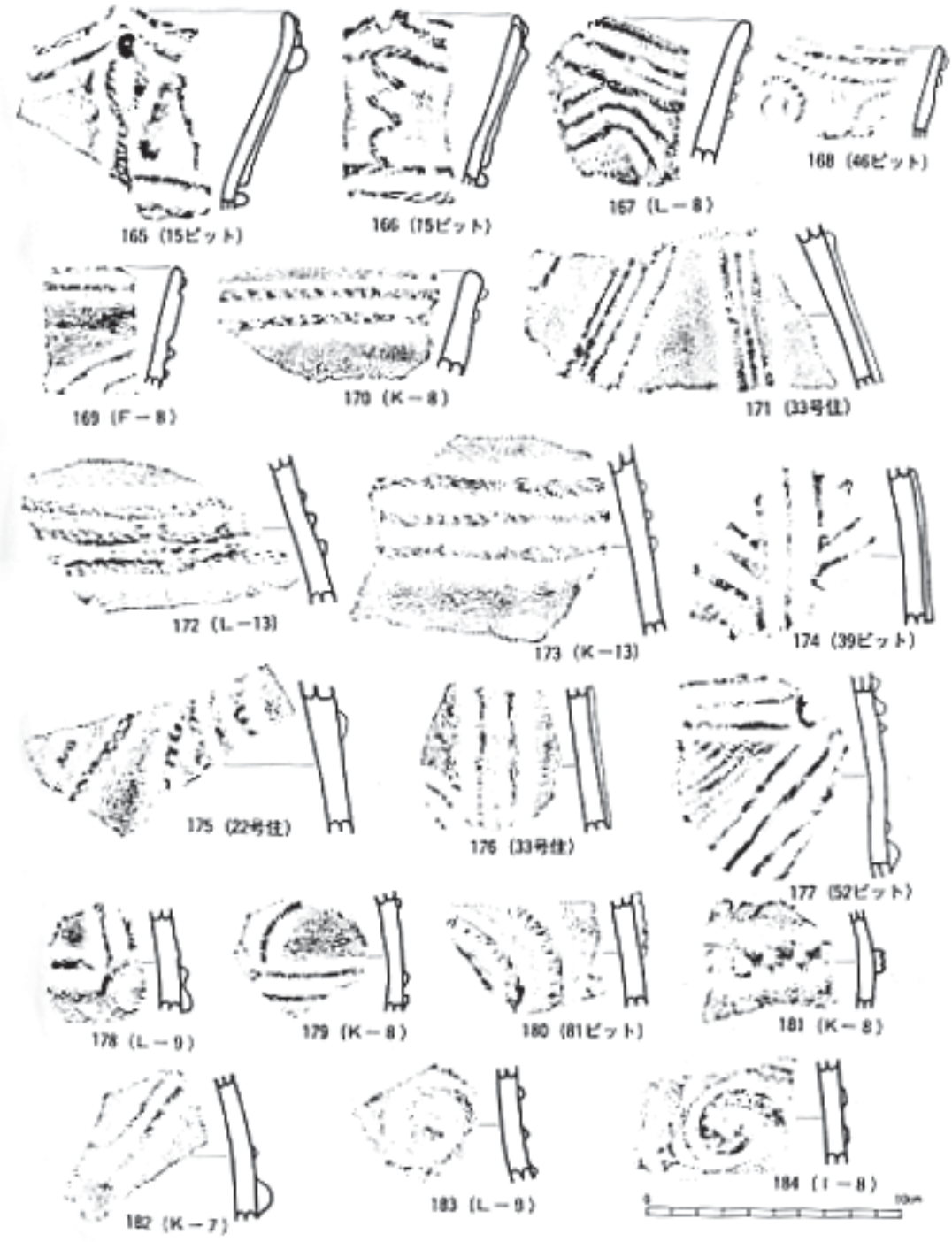
第 104 図　出土遺物


122 (E－8)
123 (F－2)
124 (M－7)
125 (46ピット)
126 (E－7)
127 (E－8)
128 (B－5)
129 (73ピット)
130 (B－5)
131 (E－2)
132 (66ピット)
133 (B－6)
134 (C－5)
135 (F－6)
136 (G－8)
137 (C－5)
138 (I－10)
139 (E－7)
140 (E－8)
141 (B－6)
0
10cm

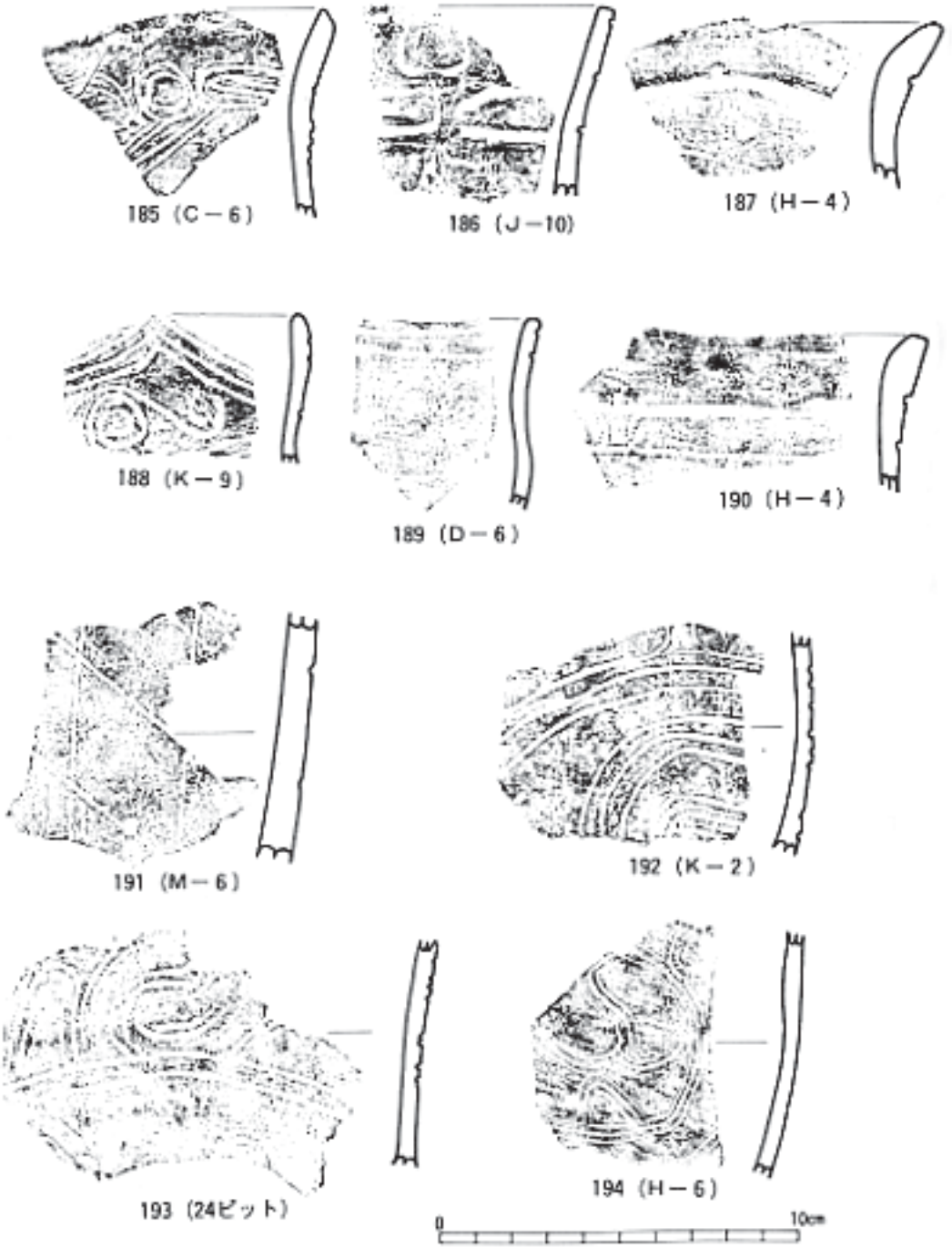
第 105 図　出土遺物


142 (81ピット)
143 (81ピット)
144 (81ピット)
145 (C－7)
146 (J－8)
147 (81ピット)
148(81ピット)
149 (L－8)
150 (81ピット)
151 (81ピット)
152 (F－8)
153 (81ピット)
154 (81ピット)
155 (81ピット)
156 (80ピット)
157 (81ピット)
158 (81ピット)
159 (81ピット)
160 (I－5)
161 (H－4)
162 (81ピット)
163 (81ピット)
164 (K－8)

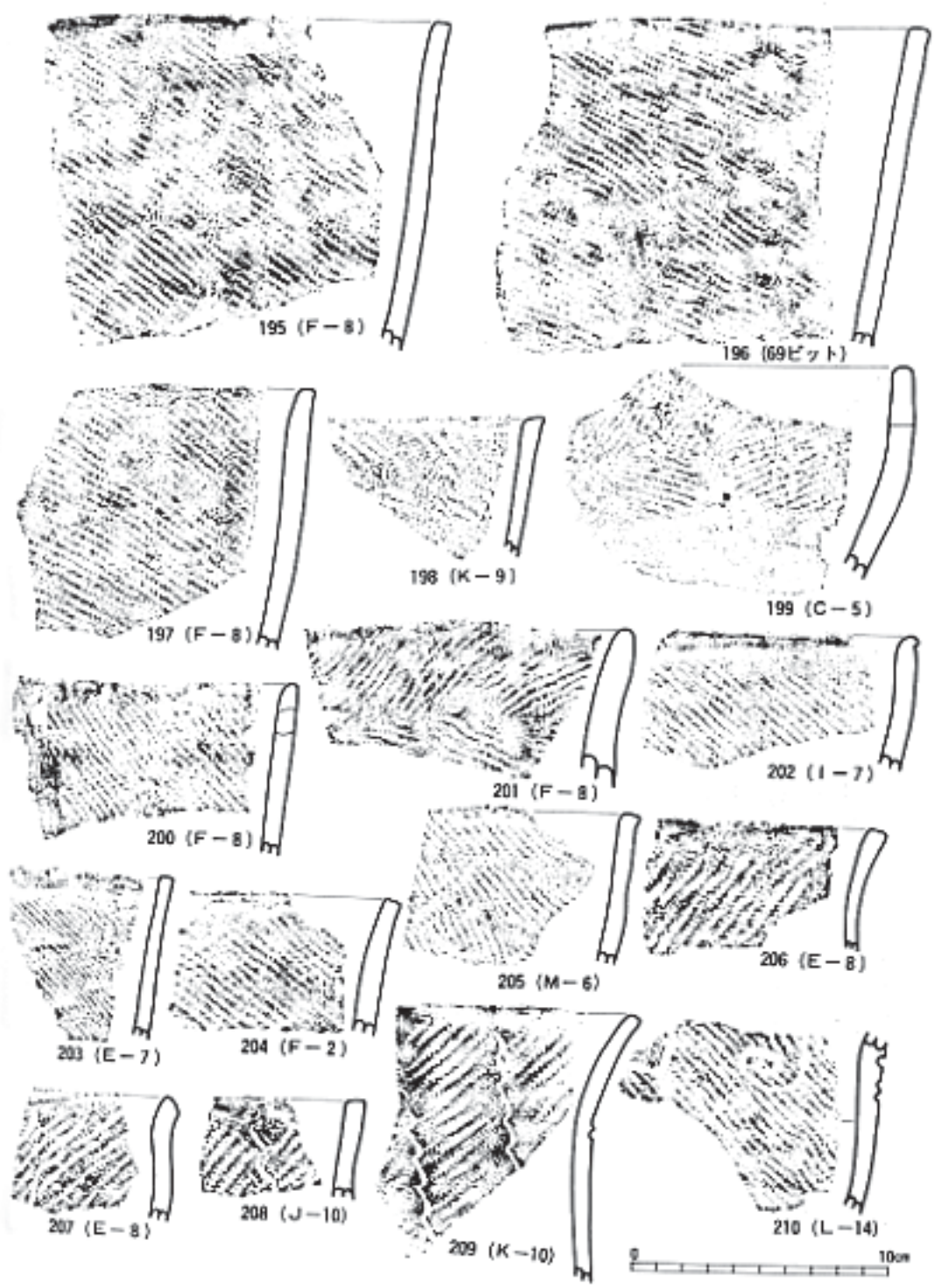
第 106 図　出土遺物


165 (15ピット)
166 (15ピット)
167 (L－8)
168 (46ピット)
169 (F－8)
170 (K－8)
171 (33号住)
172 (L－13)
173 (K－13)
174 (39ピット)
175 (22号住)
176 (33号住)
177 (52ピット)
178 (L－9)
179 (K－8)
180 (81ピット)
181 (K－8)
182 (K－7)
183 (L－9)
184 (I－8)

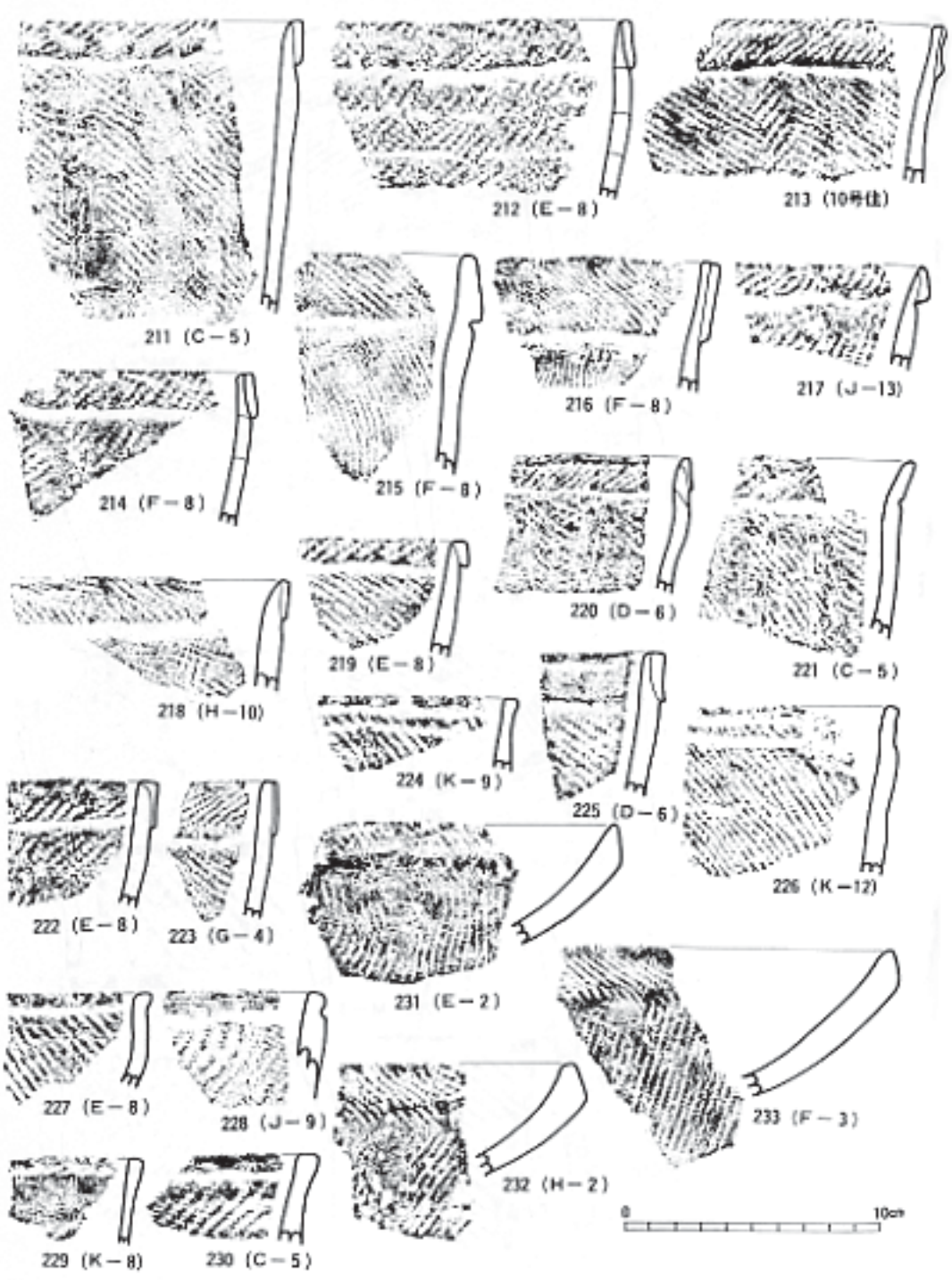
第 107 図　出土遺物


185 (C－6)
186 (J－10)
187 (H－4)
188 (K－9)
189 (D－6)
190 (H－4)
191 (M－6)
192 (K－2)
193 (24ピット)
194 (H－6)
0
10cm

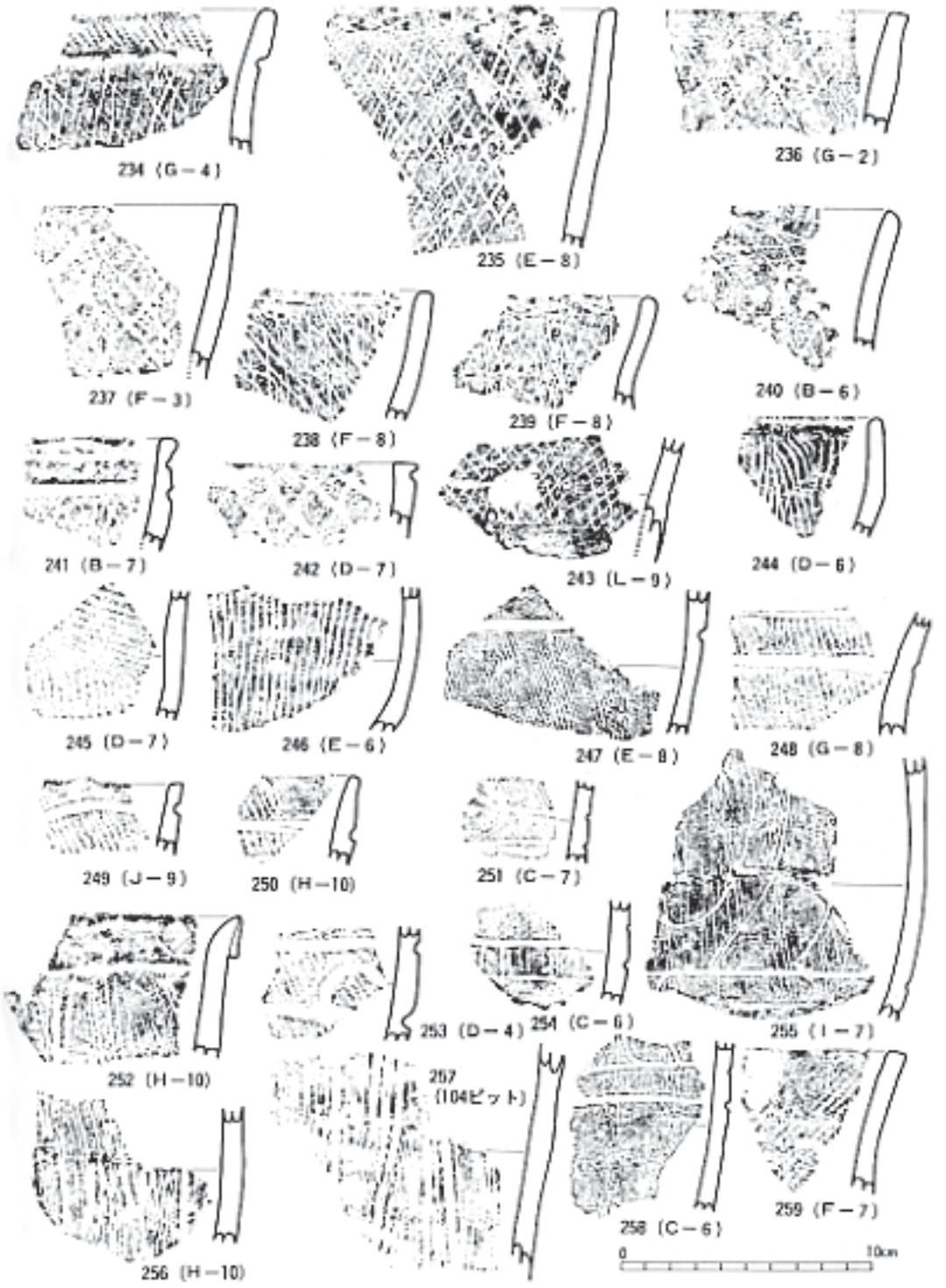
第108図　出土遺物


195 (F－8)
196 (69ピット)
197 (F－8)
198 (K－9)
199 (C－5)
200 (F－8)
201 (F－8)
202 (I－7)
203 (E－7)
204 (F－2)
205 (M－6)
206 (E－8)
207 (E－8)
208 (J－10)
209 (K－10)
210 (L－14)
0
10cm

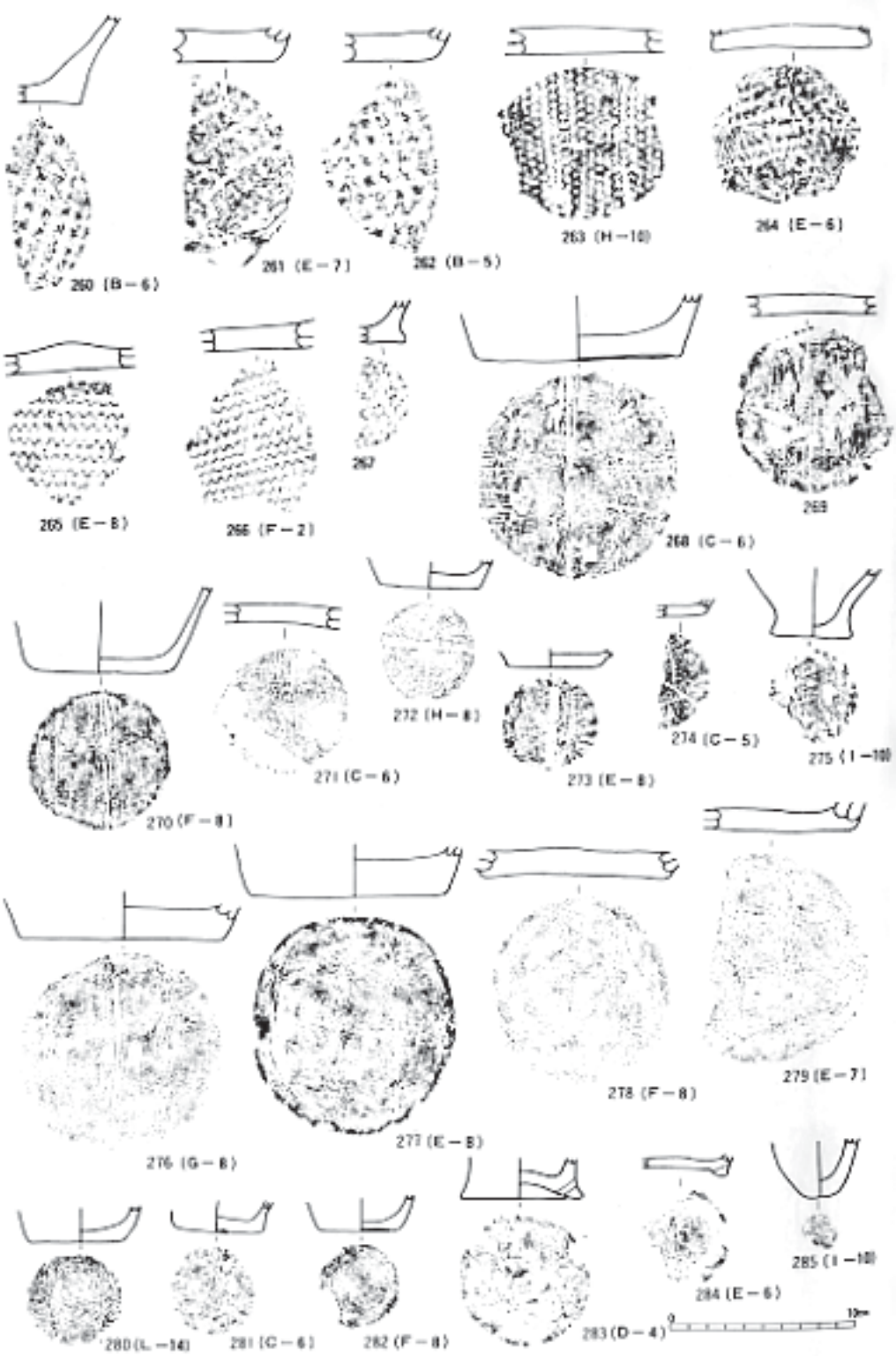
第 109 図　出土遺物


211 (C－5)
212 (E－8)
213 (10号住)
214 (F－8)
215 (F－8)
216 (F－8)
217 (J－13)
218 (H－10)
219 (E－8)
220 (D－6)
221 (C－5)
222 (E－8)
223 (G－4)
224 (K－9)
225 (D－6)
226 (K－12)
227 (E－8)
228 (J－9)
229 (K－8)
230 (C－5)
231 (E－2)
232 (H－2)
233 (F－3)
0
10cm

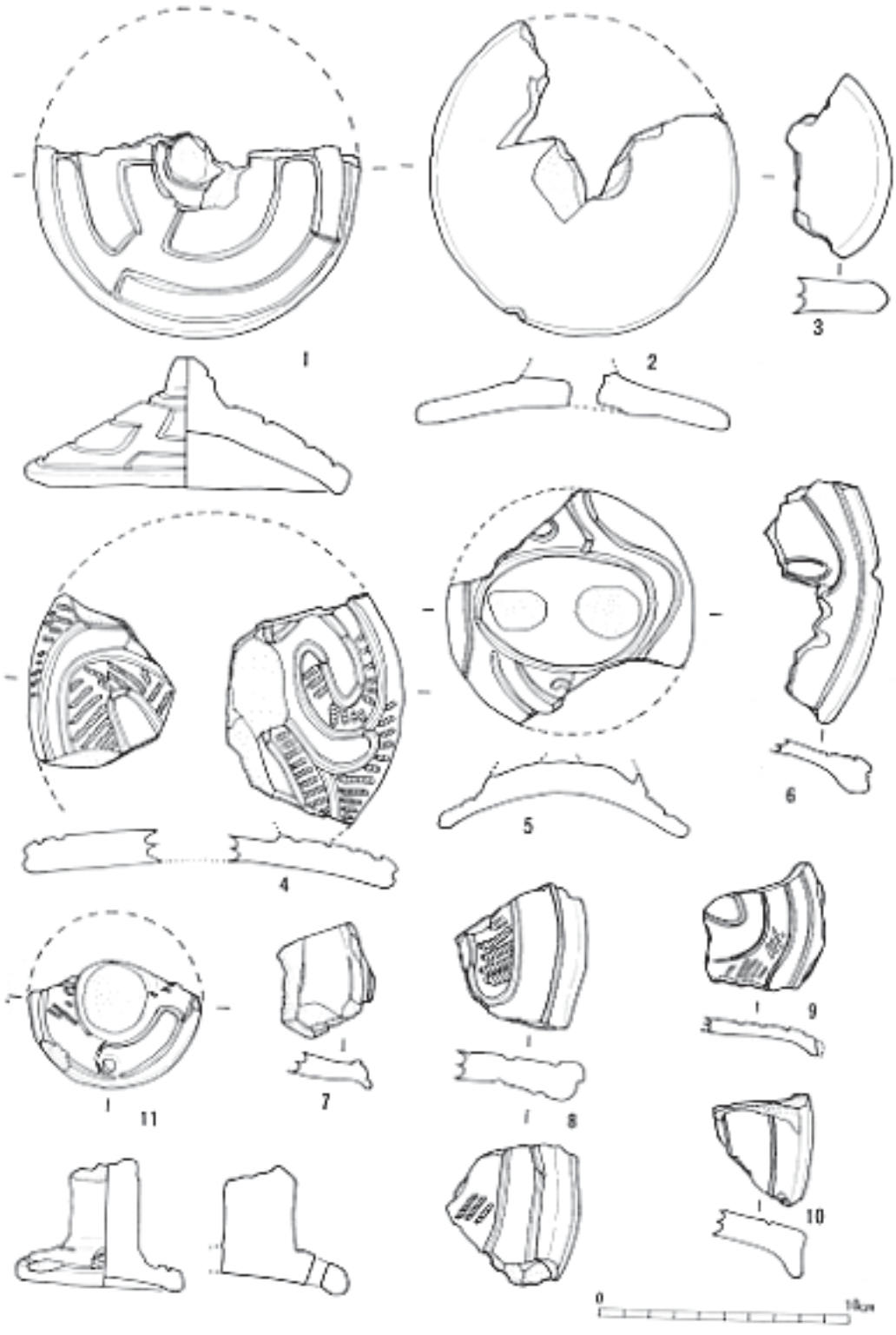
第 110 図　出土遺物


234 (G－4)
235 (E－8)
236 (G－2)
237 (F－3)
238 (F－8)
239 (F－8)
240 (B－6)
241 (B－7)
242 (D－7)
243 (L－9)
244 (D－6)
245 (D－7)
246 (E－6)
247 (E－8)
248 (G－8)
249 (J－9)
250 (H－10)
251 (C－7)
252 (H－10)
253 (D－4)
254 (C－6)
255 (I－7)
257
(104ピット)
256 (H－10)
258 (C－6)
259 (F－7)
0
10cm

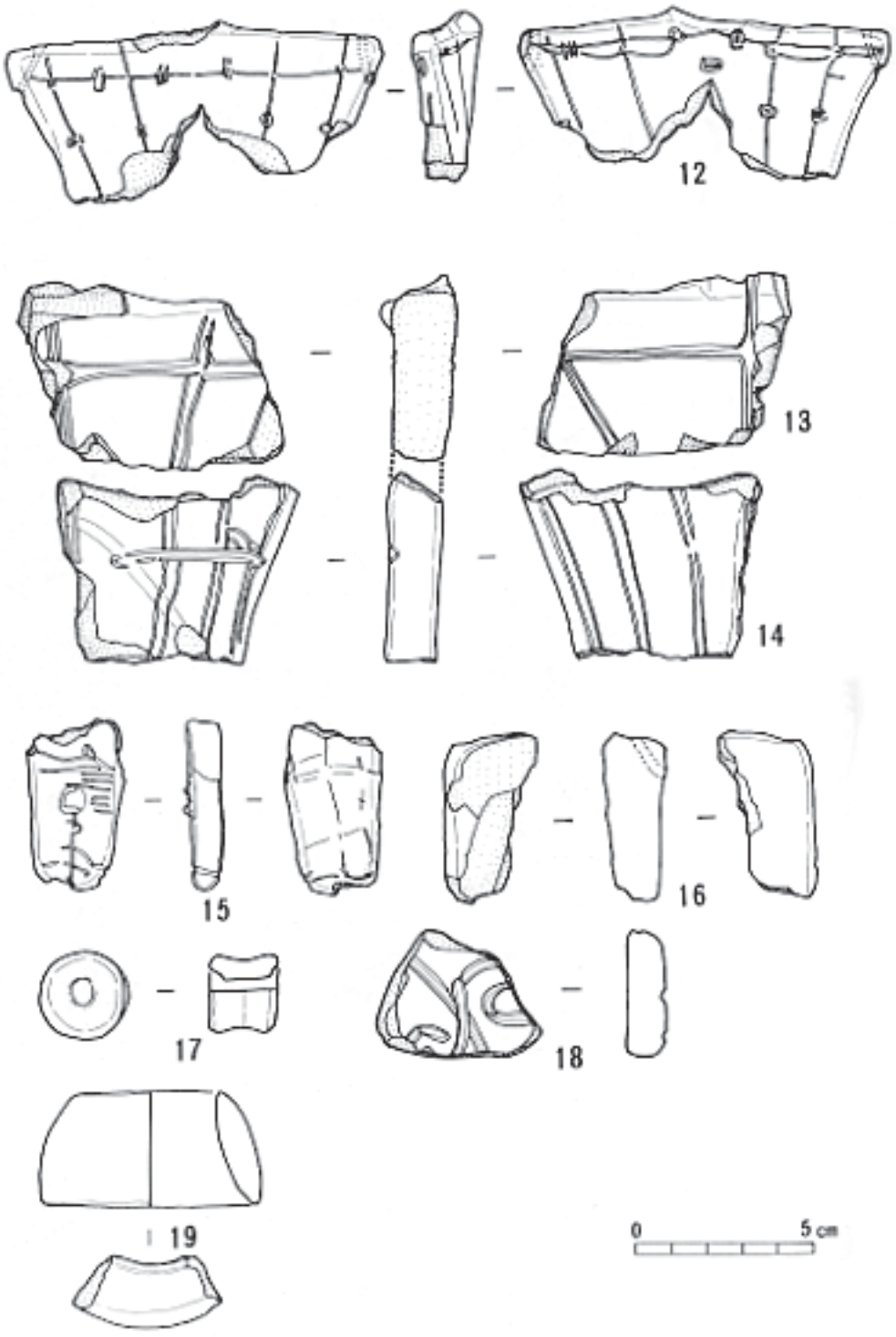
第 111 図　出土遺物


260 (B－6)
261 (E－7)
262 (B－5)
263 (H－10)
264 (E－6)
265 (E－8)
266 (F－2)
267
268 (C－6)
269
270 (F－8)
271 (C－6)
272 (H－8)
273 (E－8)
274 (C－5)
275 (I－10)
276 (G－8)
277 (E－8)
278 (F－8)
279 (E－7)
280 (L－14)
281 (C－6)
282 (F－8)
283 (D－4)
284 (E－6)
285 (I－10)

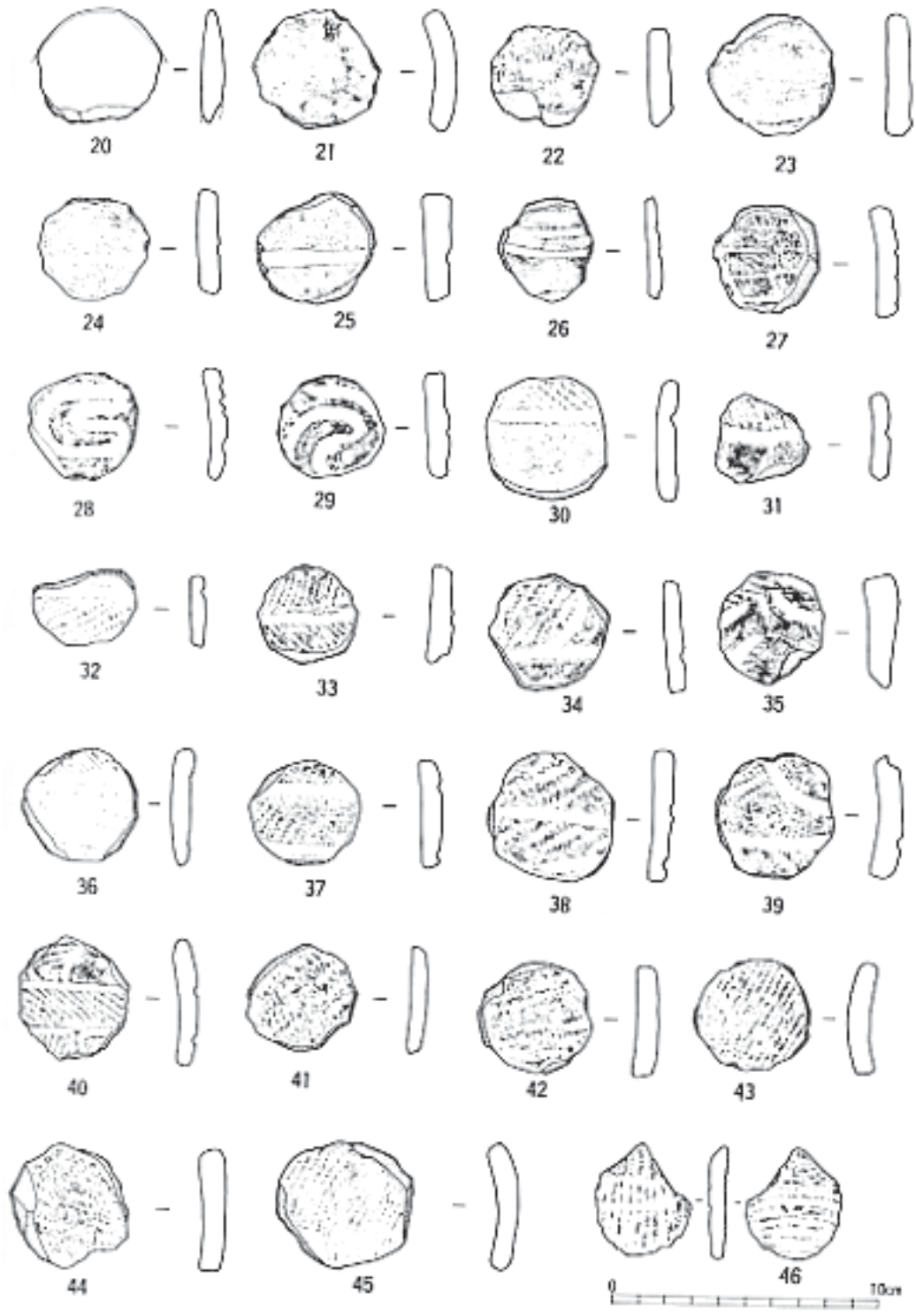
第 112 図　出土遺物



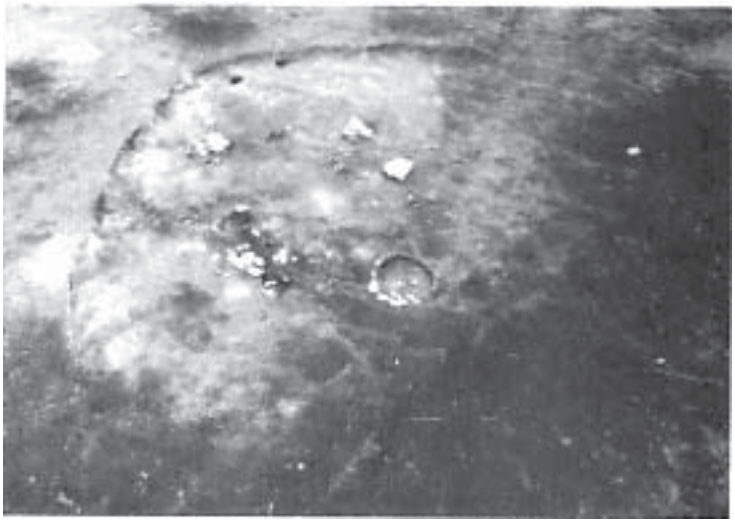
第 113 図　出土遺物



第 114 図　出土遺物


20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
10cm

第 115 図　出土遺物



第 8 号住居跡

第 9 号住居跡

第 10 号住居跡

図版 21　縄文後期初頭住居跡

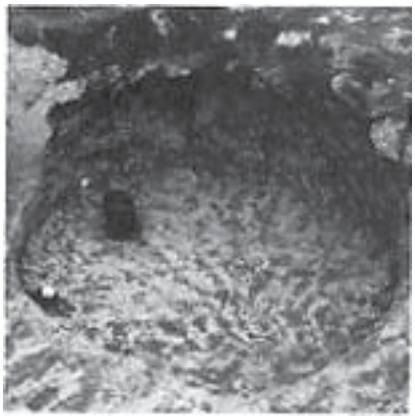
第 5 号ピット（遺物出土状態）縄文晩期

第 19 号ピット（縄文後期初頭）

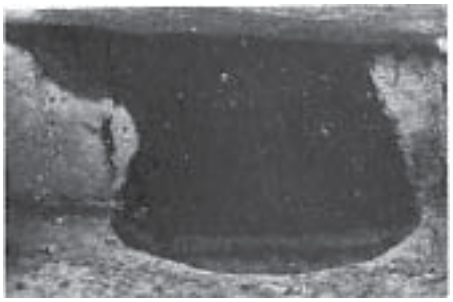
第 12 号ピット（縄文後期初頭）

同　上

図版 22　ピット遺構



第 39 号ピット（土器出土状態）縄文晩期



第 43 号ピット（縄文後期初頭）

第 44 号ピット（縄文後期初頭）

第 46 号ピット（縄文後期初頭）

第 49 号ピット（縄文後期初頭）

第 50 号ピット（縄文後期初頭）

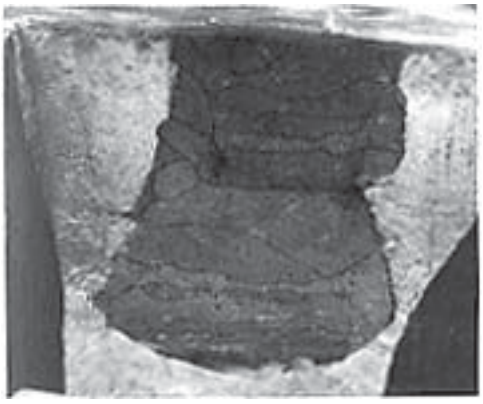
図版 23　ピット遺構

第 56・57 号ピット（縄文後期初頭）

第 59 号ピット（縄文晩期）

第 62 号ピット

第 73 号ピット（縄文後期初頭）



第 74 号ピット（縄文後期初頭）

同左（完掘）縄文後期初頭

図版 24　ピット遺構

第 79 号ピット（縄文後期初頭）

第 81 号ピット（縄文後期初頭）

第 83 号ピット（縄文後期初頭）

第 86 号ピット（縄文後期初頭）

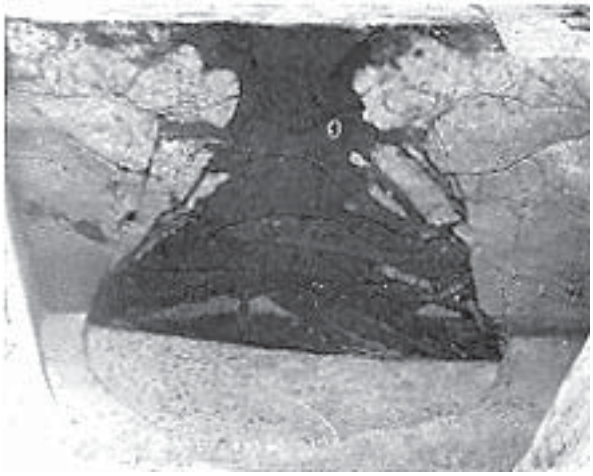
第 93 号ピット（縄文後期初頭）

第 42 号ピット（縄文後期初頭）

図版 25　ピット遺構

第 104 号ピット（縄文後期初頭）

内上発掘スナップ



第 105 号ピット（縄文後期初頭）

図版 26　ピット遺構

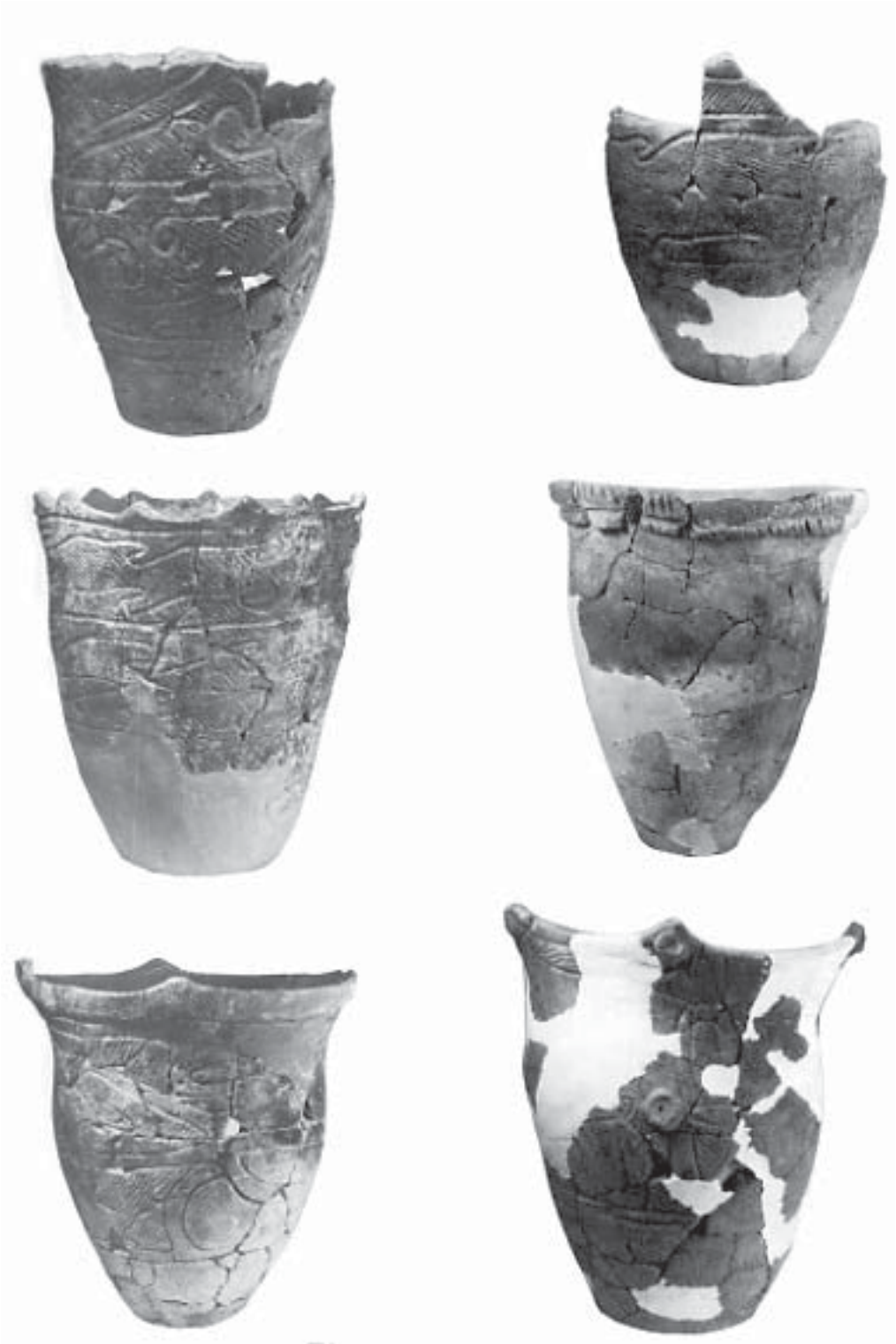
第 105 号ピット（完掘）縄文後期初頭

第 111 号ピット

第 1 号甕棺

同上（断面）

図版 27　ピット遺構



図版 28　縄文後期初頭出土土器

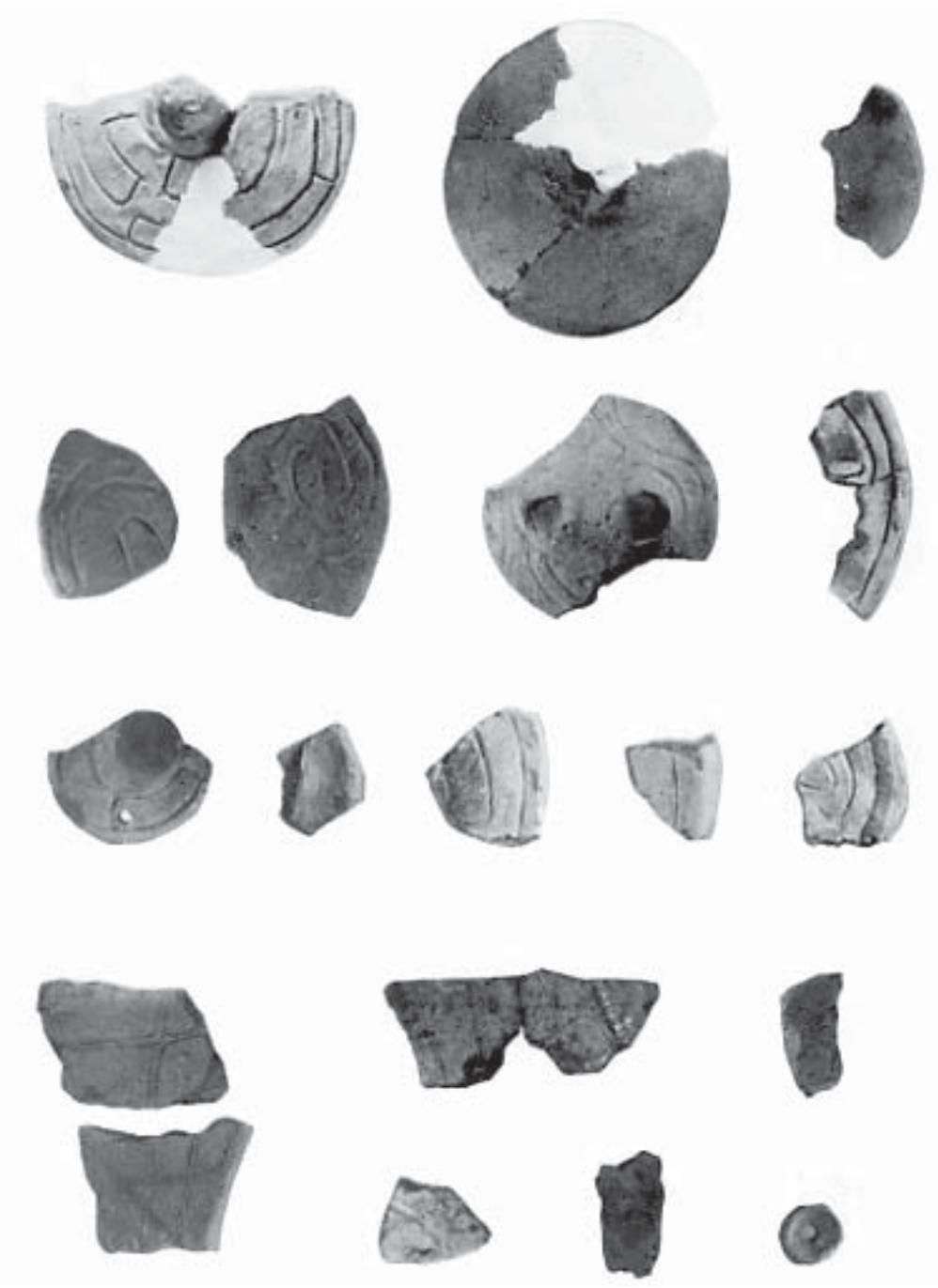
図版 29　縄文後期初頭出土土器

図版 30　縄文後期初頭出土土器

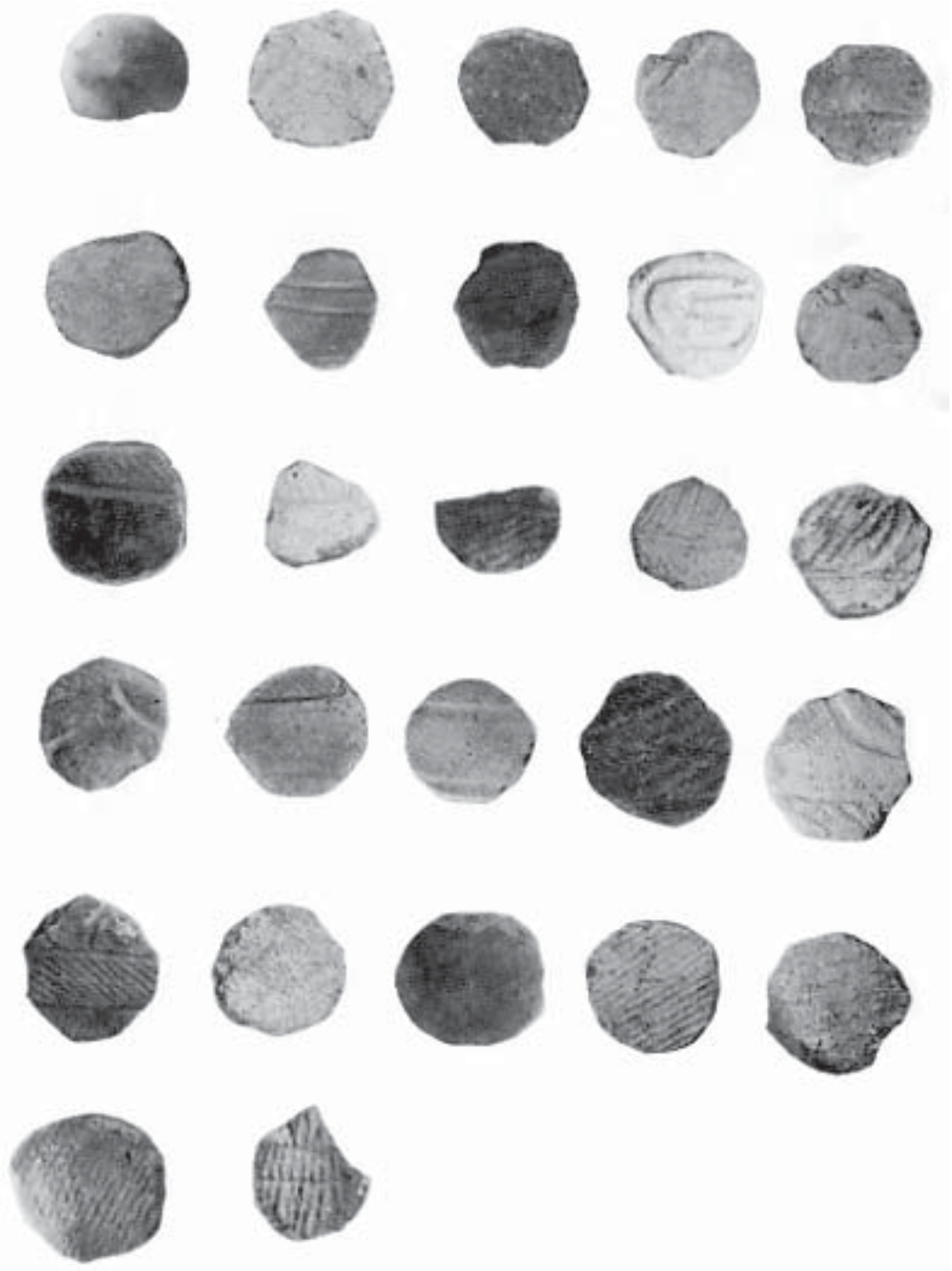
図版 31　縄文後期初頭出土土器

図版 32　縄文後期初頭出土土器

図版 33　縄文後期初頭出土土器



図版 34　縄文後期初頭出土土器



図版 35　縄文後期初頭出土土器

第２節　後期縄文式土器文化末葉

いわゆる貼瘤文付土器文化の遺構と遺物である。この時期の遺構、遺物は発掘区域内の北東傾斜面において集中して発見されており、住居跡の一部がＪ－11に若干触れるが、大方Ｋ－11から北東側に位置している。住居跡は大小合せて7軒検出されていて、住居跡内の遺物も豊富で保存状態も良好である。

（1）住居跡

住居番号は第12号から第18号までで、7軒のうち第18号住居跡を除けばすべて西高東低の傾斜に構築されており、第18号住居跡はほぼ平坦面に構築されている。他の遺構との切り合い、重複関係では、第12号住居跡が第1号住居跡（中期）の南西側の一部と重複関係にある。第13号住居跡の内部からピットが2個検出されているが、これは後期初頭のもので重複関係にある。第15号住居跡は第59号住居跡（歴史時代）と第2号住居跡（中期）と重複し、第60号住居跡（歴史時代）と一部切り合い関係にある。第16号住居跡は第3号住居跡（中期）の東側の一部を切っており、南側の一部が第55号住居跡（歴史時代）に切られている。第17号住居跡は第4号住居跡（中期）と重複し、東側が第55号住居跡（歴史時代）に南側が第54号住居跡（歴史時代）に切られている。第18号住居跡の北東はザンゴウによって切られ、更に西側が第52号住居跡（歴史時代）に切られている。

7軒の住居跡の配列をみると第15号住居跡の西側半分を囲むように配列している。

第12号住居跡（第116図）

０－14区に所在する。長辺4.8m、短辺4.5mでほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直で壁高は西側が最も高く55cmあり、東側は確認面から掘り下げたためほとんど壁は認められなかった。床面はほぼ平坦に調整しており、全体にしまっている。柱穴と思われるピットは西側半分に認められ、ほぼ壁に沿って配列してある。深さは約20cm～30cmである。炉は中心よりやや東側に設定してある。長径80cmで深さ10cmほどに掘りくぼめたもので、南東面に礫を配している。炉の周囲には床面上に焼土と少量の炭化材が認められた。遺物は第117図～第120図に示すもので、土器は、注口（1、2、13、18、20、）が5個、壺（3、11）が2個、鉢（5、7～10）が5個、深鉢（16、21）が2個、小鉢（4、12、19）が3個、台付鉢（14）が1個、香炉（17）が1個の合計19個である。石器は、石匕（22、23）が2点、不定形刃器（15、24）が2点、くぼみ石（25、27、28）が3点、石皿（29）が1点の合計8点である。その他蓋（6）と思われるものが1個出土している。遺物出土状況は、炉の上に深鉢が散在し、炉の南側に東から西にかけて遺物が集中してみられた。西側の壁ぎわにあるピットからは、壺と注口がかさなり合った状態で出土した。

第13号住居跡（第121図）

Ｎ－13区に所在する。長辺4.9m、短辺4.1mのほぼ楕円形を呈する。壁の立ち上りはほぼ垂

直で壁高は西側が最も高く30㎝ほどある。東側は確認面から掘り下げたため、はっきりと壁をとらえることができなかった。床面はほぼ平坦に調整されており、全体が比較的しまっている。柱穴と思われるピットは西側の東壁から南壁にそって認められるが、いずれも3㎝～5㎝ほどの小ピットである。炉はほぼ中心に設定されており、長径が60㎝の円形を呈し、東側から北側にかけて角礫が配されている。内部には焼土が厚く認められた。遺物は、第122図～第123図に示すもので、土器は、深鉢（1、2）が2個、鉢（6、9）が2個、小鉢（5）が1個、台付鉢（7）が1個、注口（3、4、8）が3個、合計9個である。石器は、石鏃（10）が1点出土している。遺物は、いずれも南側に集中して認められる。

第14号住居跡（第124図）

Ｍ－13区に所在する。長辺3.5m、短辺3.05mでほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上り、壁高は西側が最も高く40㎝ある。東側は確認面から掘り下げたためほとんど壁を確認することができなかった。床面はほぼ平坦に調整されており、比較的しまっている。柱穴と思われるピットは、壁にそって多く認められるが、いずれも3㎝～5㎝程度のピットである。炉はほぼ中心に設定され、長径が30㎝で若干の掘り込みが認められ、内部には焼土が散布状態で認められた。遺物は、第125図に示すもので壺（1）が1個と、石匕（2）が1点出土している。壺は西壁よりから出土し、石匕は南側から出土した。

第15号住居跡（第126図）

Ｍ、Ｎ－14、15両区にまたがって所在する。長辺10.9m、短辺9.4mのほぼ楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上り、西側の壁高が最も高く1mある。東側は、黒色土を掘り込んで構築されているため若干しか確認することができなかった。床面はほぼ平坦に調整されており全体的にしまっている。柱穴と思われるピットは、全面に散らばっており大きさは、20㎝～30㎝程度のものである。遺物は、第127図に示すもので、土器は、深鉢（3）が1個、鉢（2、4）が2個、小鉢（1）が1個、壺ないしは注口と思われるもの（5）が1個、台付鉢台部（6、7）が2個、合計8個出土している。特に台付鉢台部（7）の底には、2㎜～3㎜程度の小孔が、いくつもあけられている。いずれの遺物も壁ぎわより出土している。

第16号住居跡（第128図）

Ｌ－14、15区に所在する。長辺7m、短辺6.7mのほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上り、壁高は西側が最も高く60㎝である。床面は平坦に調整されており、比確的軟弱である。柱穴と思われるピットは、壁にそって配列され、大きさは、5㎝～20㎝程度のものである。炉はほぼ中心に設定され、長径80㎝で内部を掘り込み、東側から西側にかけて角礫を配している。遺物は、第129図～131図に示すもので、土器は、深鉢（7、11）が2個、注口（1、2、3、4）が4個、台付注口（5）が1個、壺（6、8、9、10）が4個、合計11個である。石器は、匕（12、13）が2点、石鏃（14）が1点、有孔石器（15）が1点、棒状石器（18）が1点、合計7点出土している。土器は、北側から西側にかけての壁ぎわと炉の周囲にかぎられている。

深鉢はいずれも西壁付近より出土し、特に深鉢（7）は、西壁ぎわに倒立し、口縁部を1㎝ほど床面に埋まった状態で出土した。石器では棒状石器（18）が床面に半分ほど埋った状態で、出土し、東側では、チャートのフレークチップが20㎝～40㎝の範囲内に散在していた。

第17号住居跡（第132図）

Ｋ－14区に所在する。長辺7.2ｍでほぼ円形を呈すると思われる。壁はほぼ垂直に近く、壁高は西側が高く90㎝ほどある。東側半分は切り合いの為、確認はできなかった。床面は平坦で、比較的しまっている。炉はほぼ中心に設定していたと思われる。長径40㎝で内部を掘り込み、周囲に角礫を配しており若干の焼土の散布が認められる。遺物は、第133図に示すもので、注口（1、2）と香炉（3）の計3個とくぼみ石（4、5、6）が3点出土している。遺物はすべて壁ぎわにそって出土しており、南壁付近より頁岩のフレークチップが多量に出土した。

第18号住居跡（第134図）

J、Ｋ－11、12両区にまたがって所在する。長辺9.3ｍでほぼ円形を呈すると思われる。壁ははっきりと確認することができなかった。壁ぎわには一条の周溝がめぐらされている。中心部より南側に焼土が散在しているが掘り込み等はまったく認められなかった。遺物は、第135図に示した。土器は深鉢（1）が1個出土した。そのほか、土偶（2）が1点、石器が、磨製石斧（3）とくぼみ石（4）の2点が出土した。深鉢（1）は、西南壁ぎわより出土したものであるが、これ以外の遺物はすべて覆土内から出土したものである。

2　出土遺物

(1) 土　器

この時期の出土遺物では土器が大半を占める。完形品が多く、最も多く出土したのは第12号、第13号、第16号住居跡である。貼瘤文付土器系の後半の土器で、深鉢、鉢、台付鉢、浅鉢、注口、台付注口、壺、香炉などが見られ、バラエティーに富んでいる。基本的には鉢、注口、壺がセットで、それに香炉が伴っている。また各器形とも装飾的文様を有するものと、無文に分類される。尚、文中の数字は写真図版の番号を示すものである。

深鉢（1～4・7～12・15～18・57）

口縁部に山形の突起を有するもの（4．11．15．16．17）と平縁（1～3．7～10．12．18～57）があり、これは更に胴にくびれをもつもの（3～4．11～12．15～18）と、くびれをもたず逆放物線状を呈するもの（1～2．7～10．57）にわけられる。一般に口径の割に底径が小さいのが特徴で、不安定なものが多い。貼瘤文の見られるのは装飾的文様を有するもの（3～4．16～17）に多く、3のように木葉状の磨消縄文文様の接点に大小の瘤を配置するものや、4のように山形突起及び口唇部にデコレーション的に割瘤を配置したもの、また16．17のように縁に沿って2～3段に列を作って配置されたものなどがある。いずれも地文には磨消縄文技法が見られ、そのモチーフが木葉状を呈する移行期のものである。1～2は全面に縄文を施文するもので、1は最終段階の撚りが1段多条の左撚りで高さ40㎝を越える大型で、底部は若干揚げ底になっている。2は最終段階の撚りが左の原体と右の原体を相互に施文してできた羽状縄文を施文しているものである。以上の他はすべて無文の土器で、25は胴部の段を呈する部分に等間隔に瘤を配置したものである。また57は口縁部に刻目を有するものである。

鉢形土器（5～6．13～14．19）

形態的には5のように胴部にくびれを有するものと、6のように口縁部が「く」の字形に外反するもの、13．19のようにコップ形に近いもの、14のようにボール状のものがある。これらは更に有文（5～6）と無文（13～14・19）に分けられる。5は口縁部に四ヶの突起を有し、その下部に3ヶの瘤を縦に4ヶ所配置し、瘤と瘤の間に弧線を連らね、磨消縄文技法によって木葉状の文様を構成したものである。6は屈曲部に9ヶの穿孔が見られ、最終段階が1段多条左撚りの縄文原体を全面に施文し、その後帯状に3段の磨消部をつくりだしたもので、縄文が施文されている部分は無文部より盛り上っている。

台付鉢（50～55）

50・51は小形であるが胴体の割には台が大きく作られている。51は胴上半から上部を欠いているが、両者とも透し彫りの文様が見られる。50は口唇に内側に傾斜する縦割の瘤を配列してあり、文様は胴部上半に見られる。即ち縦長の孔を起点として弧線で結ぶもので、孔の周囲は盛り上がっている。51は胴の中ほどに4ヶの瘤を配置し、透しの部分から欠失しているので、上部の形態は不明であり、あるいは香炉かも知れない。現存では貼瘤以外に文様は認められない。

52・53は無文であり、52は口唇部に縦割の瘤を配列し、胴は多少カーブをもっており、口縁が「く」の字状に外反する形態で台部のすそが欠失している。53は台部が胴の割に大きく、ずん胴形で、口縁部は短かく屈曲を有している。54は底部から台部にかけての部分であるが、底部に穿孔の認められる特異な土器である。孔はすべて貫通しており、現存部の数は12ヶであり底部に集中しているが、胴下端部にも1ヶ認められることから実数はもっと多いであろう。
孔の直径は2㎜ほどである。

浅鉢（55） 小鉢（21）

55は腕形の浅鉢で、口縁部に2段に粘土紐を貼り付けた後に瘤を2段に貼り付け、更にヘラ状工具の先端で刻目を施したものである。またほぼ中央部に一段大きい突起が1ヶ付けられており、基部に横位の穿孔が認められる。底部は若干揚げ底であり、研磨された土器である。21はずんぐりした厚手の小鉢で、文様は認められないが、55のように中央部に穿孔のある突起が見られる。

注口土器（20．22～38）

総数18ヶで最も多く、第14号．第18号住居跡を除く他の住居跡と住居跡外から出土している。形態的には丸底の先端をくぼめて底部にしたものと、台付のもの（34．37．38）があり、前者が多く出土している。両者は更に細分が可能である。前者をａ類、後者をｂ類とする。

ａ類は装飾的文様をもつもの（22～29．36）と全くの無文のもの（32．33）、素文地に貼り瘤の認められるもの（20．30．31）が見られる。形態的には、22．25．27．29．31のように頸部の下端が脹むもの、23．24．26．33．35のように脹みがなく長頸のもの、30のように短頸で広口のものがあり、20．28は頸部を欠失しているので明らかでなく、36は小型の土器である。有文のものは22～27．29．36のように磨消縄文に貼瘤が加わったものと、28のように条線文のものがある。ほとんどのものは胴部最張部で文様帯は切れるが、26．36のように胴部下半にまで文様帯が施文されるものもある。

ｂ類の台付注口は34のように形態的にａ類の土器に台が付くものと、台付鉢に似た形態に注口が付けられたものがある。34の文様は沈線によるもので、37は素文に貼瘤が付けられたもの38は磨消縄文手法によるものである。全般に注口部は胴の最張部に約45度の角度で付けられているが、注口部が現存しているのは28．30．32．34．35だけで、他はすべて欠失している。

壺形土器（39～47）

装飾的文様が認められないものがほとんどで、有文は46の1ヶである。40．41は素文に瘤を付けただけのものである。形態的にはフラスコ状を呈するもの（39～40．42～45）と、胴部がやや潰れているもの（41．46）、短頸で胴部が張るもの（47）がある。46は頸部から口縁にかけてすぼむもので、口縁部に2ヶの穿孔が見られる。文様は磨消縄文手法によるもので、文様帯は胴部下半にまでおよんでいる。

香炉形土器（49a～c）

貼瘤の1ヶを欠いているが、完形の土器である。頂部に横位穿孔の見られるつまみ状の突起を有し、台部を除くと栗実形を呈している。3ヶの三角窓を有しているが、そのうち1ヶだけは特別大きくつくられている。胴部には全体に2段右撚りの斜向縄文を施し、最張部には4ヶの貼瘤が見られ、更に1ヶは最も大きい三角窓の頂部の上につけられている。三本の柱の部分には上下に2本一組の平行沈線が施文されているだけで特別な文様は見られない。台部は無文で安定している。

(2) 土製品

蓋形土製品（56）

同一個体の破片が2ヶ出土しているが接合はできない。円盤状であるが、中心部は盛り上っており、その部分につまみ状の突起を有するようであるが欠失している。周囲に沿って刻目文が巡っている。

土偶（第135図2）

1ヶだけ第18号住居跡から出土している。胴の上半部の部分で、頭部、腕部、胴下半部を欠失している。乳房は両方とは剥脱しているが左方は基部が残っている。胸部から腹部にかけて連続刺突文が施文されているだけで他には文様が見られない。

(3) 石　器

土器の出土量に比較すると石器の数は非常に少ない。そのため各形態別の細分は不可能のため形態別の記述にとどめる。尚数字は実測図の番号を示すものである。

石匕（第120図23．第125図2．第131図12．13）

合計4ヶで第125図2の横形以外は他の3ヶは縦形である。横形のものはつまみが左側に片寄っており、つまみおよび刃部の作り出しは入念である。縦形のものはすべて片面剥離で、第120図23と第131図12のつまみの作り出しは顕著であるが、第131図13は全体に貧弱で、つまみの作り出しも前者に比較して粗雑である。

石鏃（第123図10．第131図14）

2点出土しており、第123図10は身部が三角形であり、柄部との区別が明確であるが、第131図14は柳葉形に近く、柄部との区別が明確でない。いずれも剥離調整は入念である。

不定形打製石器（第118図15．第120図22．24）

第118図15は第1剥離で得られた剥片に若干刃部を作り出した痕跡が認められるものである。第120図22は刃部の作り出しが入念で、図の右端に折れた痕跡があり、石匕の一部分とも思われる。第120図24は図の下端部に刃部が認められるものである。

石斧（第135図）

完形品である。整形時の擦痕を各所に残しており、刃部は多少磨滅しているが、長期間使用したとは思われない。頭部は尖っており、定角式に近い形態である。

くぼみ石（第120図25．27～28．第133図4～6．第135図4）

計7ヶ出土している。自然石を長円形に調整したもの（第120図28．第133図4～6）と自然石をそのまま利用したもの（第125図25．27．第135図4）があり、第120図27には敲打痕が認められる。

その他

第120図26．29は第12号住居跡の石組炉の一部に利用されていたもので、26は石錘状であり、縄文中期の石器と思われる。29は偏平な自然石の一面を擦り減らしたもので石皿であろう。第131図16は擦石か砥石と思われる。第131図17は自然石であるが一部に敲打痕が認められ敲き石と思われる。第131図81は棒状の自然石で、石棒と思われる。

（4）石製品

第131図15に示した1ヶである。全体の2分の1であり、中心に穿孔の痕跡が認められることから有孔石製品と思われる。

3 小　括

住居跡は合計7軒発見されているが、そのうち明らかにこの時期の住居跡と判断できるものは第18号住居跡を除く6軒である。これら6軒の住居跡は最大の第15号住居跡を囲むように配列されており、集落跡としての把握が可能である。第18号住居跡はこれら6軒の住居跡より南西方向の離れた位置にあり、周溝が巡っている点が他のものと異っている。炉には石組が認められず地床炉である。この住居跡をこの時期に編年づけた理由は出土した遺物からの判断で、第135図1に示す無文の深鉢形土器が他の住居跡から出土している無文の深鉢形土器と同時期のものと判断したからである。

第15号住居跡は直径11mもあり、県内では岩木山麓の大森勝山遺跡（註1）で発見された径約13mに次ぐ大きさである。この第15号住居跡の西側の壁は高さ約1m20cmもあり、大規模な土木工事であったことが予想される。おそらく集落の人々による共同作業であったろう。残念な事に歴史時代の住居跡が中にすっぽり入っており、この住居跡の性格を鮮明すべき資料に乏しいが、住居の配列などを考慮すれば集会所的な存在であったのではないかと思われる。

住居跡から出土した遺物は豊富であるが、石器が非常に少ない。その理由は発掘作業にあたった人の経験不足から見逃しによるものかも知れない。土器は鉢、注口、壺が主体であり、基礎的な分類は時間の関係上できなかったが、各住居跡から出土した土器はほぼ同時期のものであり、時期的な差は認められず、縄文式土器文化後期後半のいわゆる「貼瘤文土器」の終末期に近い時期のものであり、十腰内第5群（註2）の土器の範疇に所属するものである。特異な土器は底部に多数の穿孔を有する台付鉢であるが、同種の穿孔を有する土器は津軽地方で出土例があり（註3）、更に東北地方にも2～3の例がある（註4）。いずれも貼瘤文土器に伴出している。

以上蛍沢遺跡における縄文式土器文化後期後半の遺構と遺物を報告したが、執筆者の身辺が多忙なことと、時間の関係で略報にとどまってしまった。今後折りをみて研究報告をしたいと考えている。本文執筆にあたり、札幌大学学生の山岸英夫君の協力があり、末筆ながら感謝の意を表します。

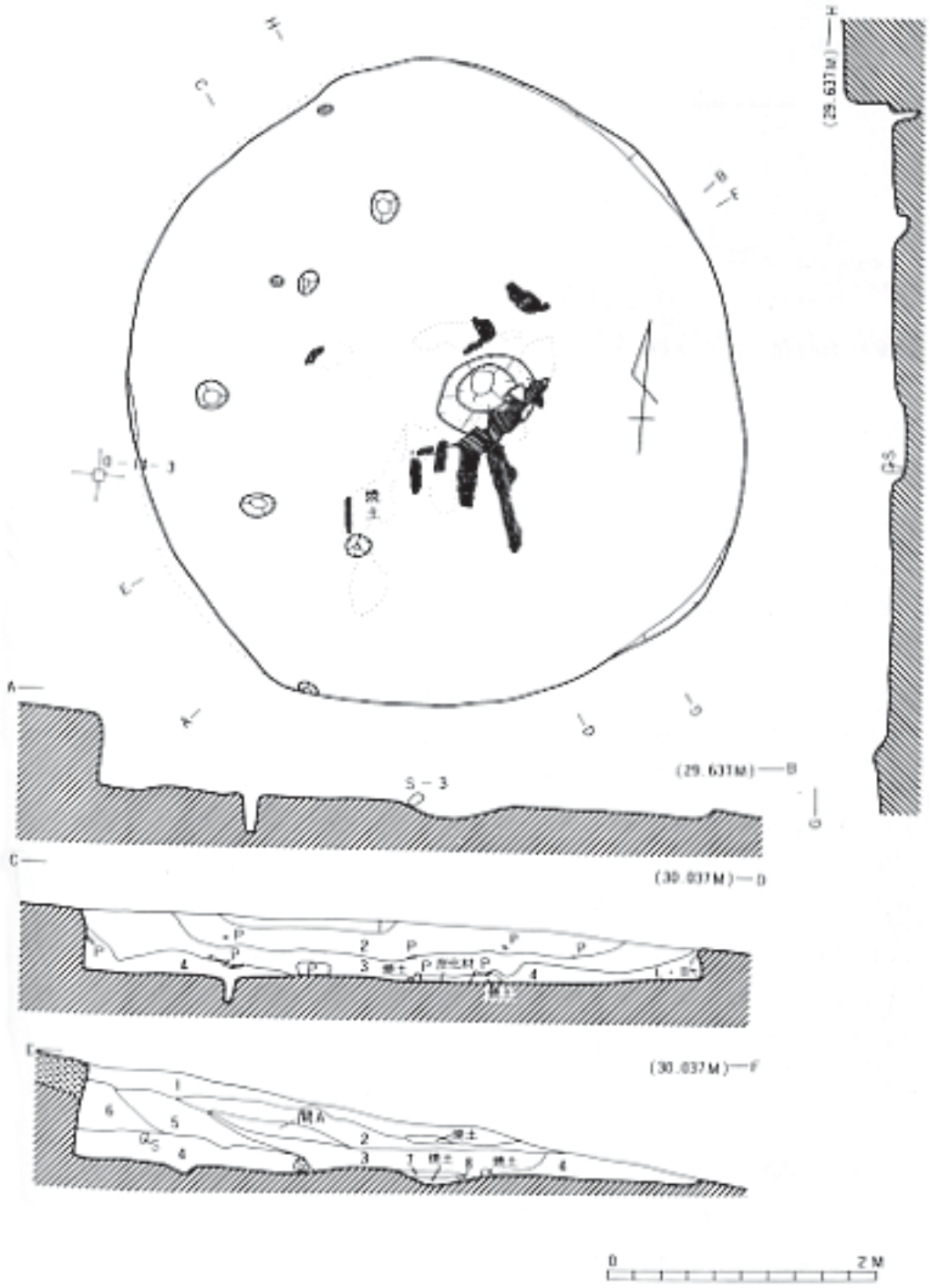
（葛　西　励）

註1　村越　潔他　大森勝山遺跡　「岩木山」所収　（1968）

註2　磯崎正彦他　十腰内遺跡　「岩木山」所収　（1968）

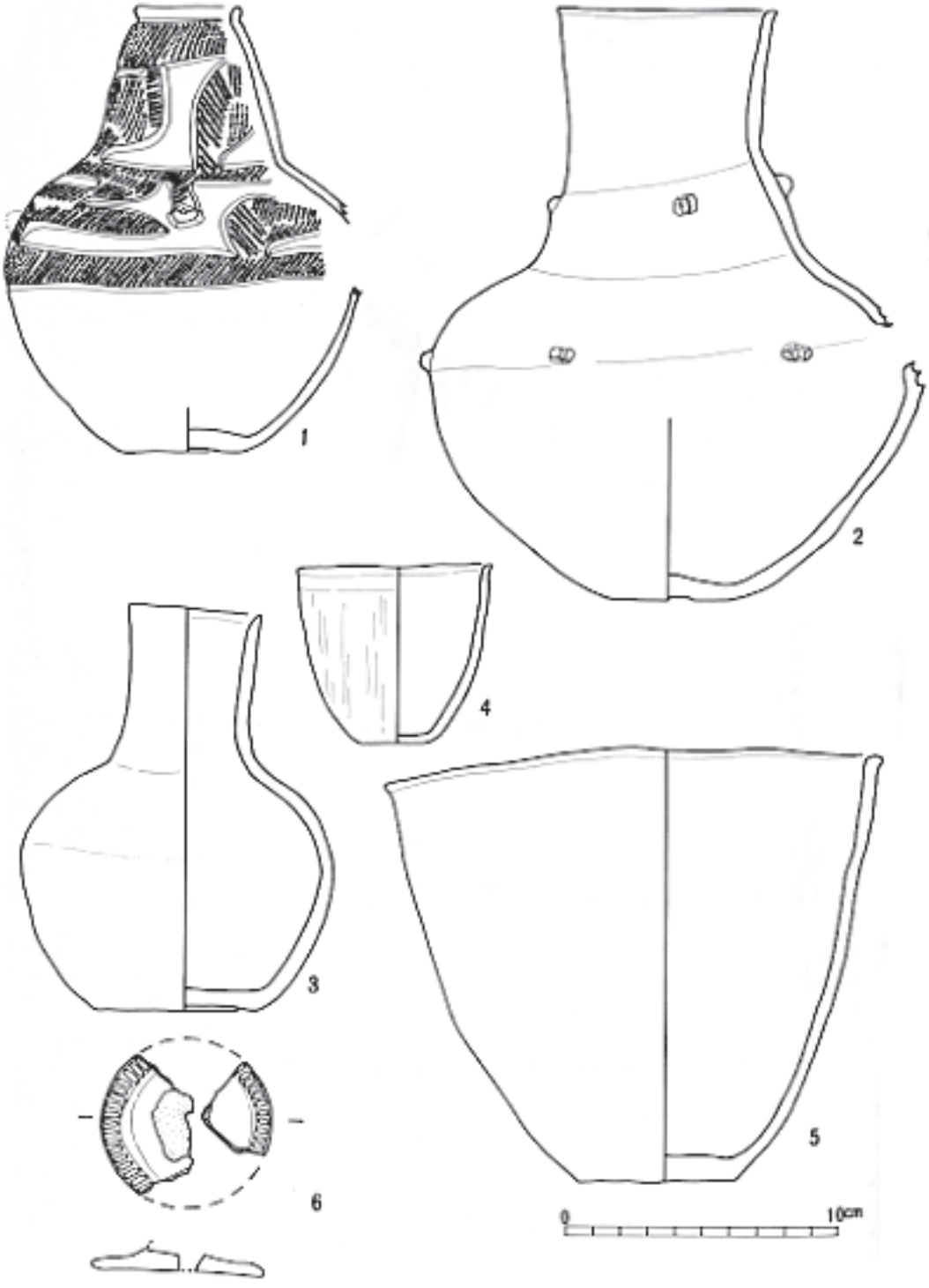
註3　丸底のボール状の土器で、黒石市沼頭遺跡から出土している。十腰内第4群の土器に伴出したもので、平賀町考古学研究会で所蔵。

註4　日本原始美術大系1　「縄文土器」　講談社　（1977）

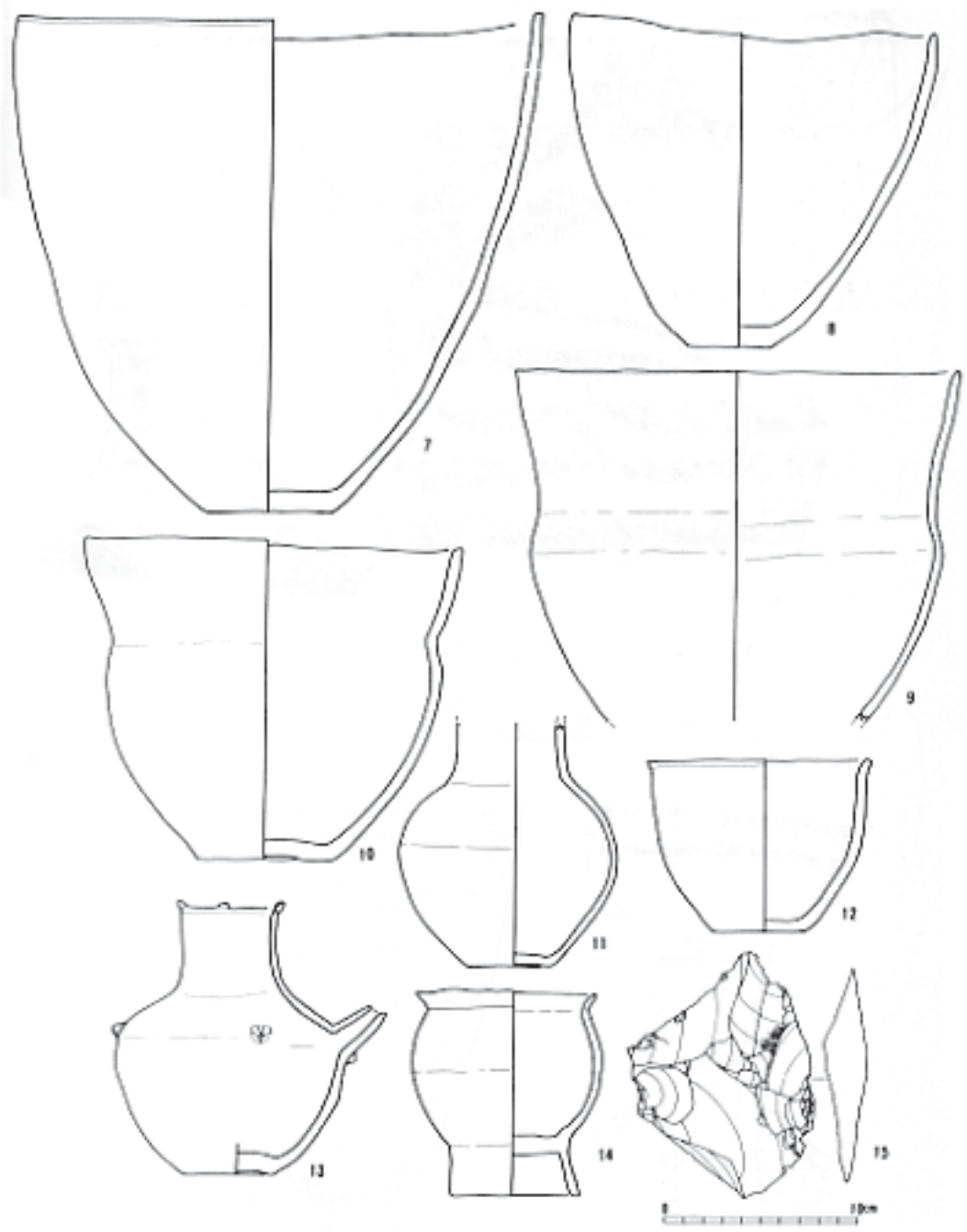


1. 暗褐色土　ローム粒子混入
2. 暗褐色土　多量の炭化物混入
3. 暗褐色土　ローム・ブロック混入
4. 暗褐色土　ローム・ブロック・炭化材混入
5. 暗褐色土　少量のローム・ブロック混入
6. 暗褐色土　多量のローム・ブロック混入
7. 暗褐色土　炉内の層でローム・粒子混入
8. 暗褐色土　ローム粒子若干混入
間A暗褐色土　少量の炭化物混入

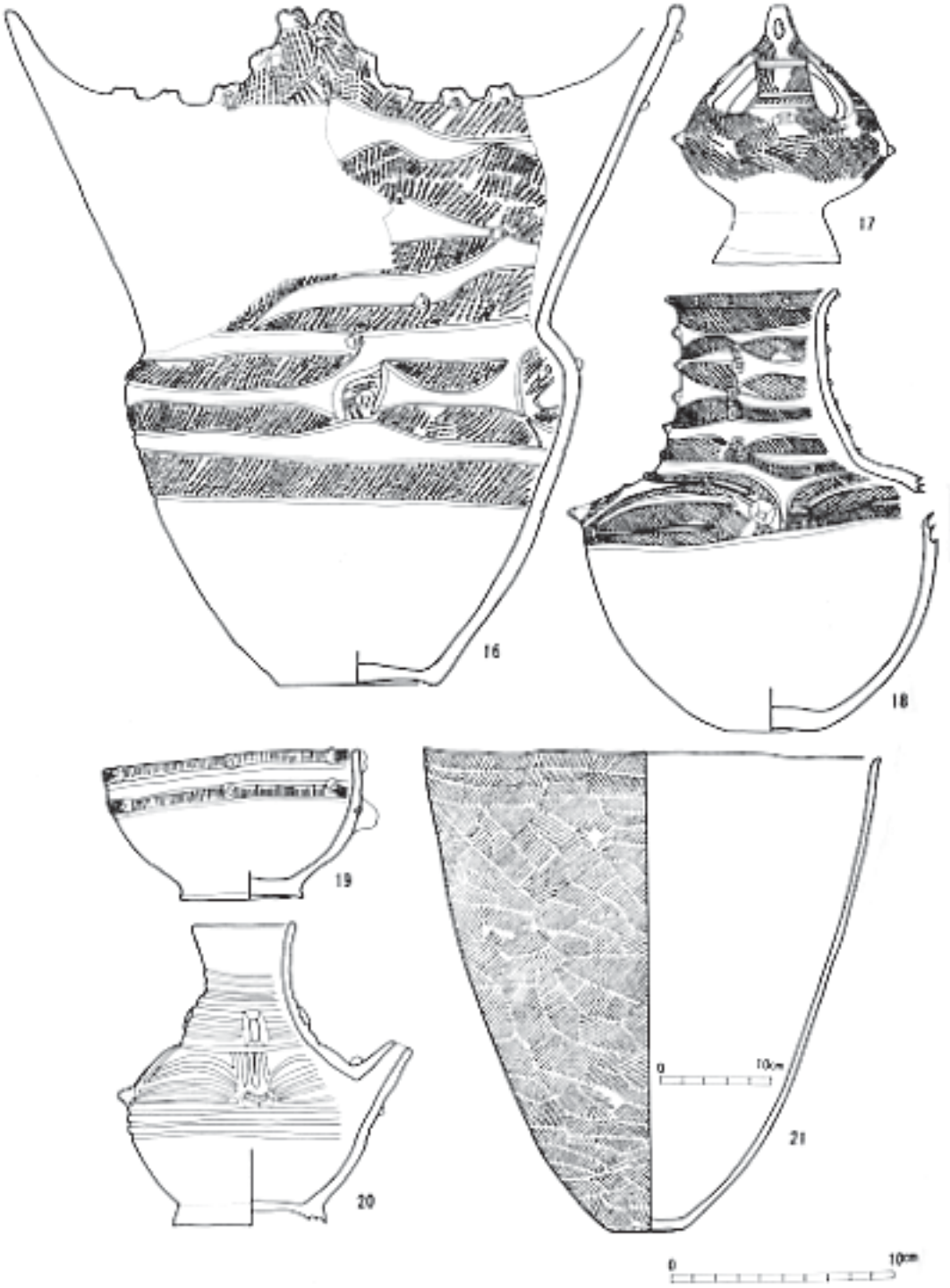
第 116 図　12 号住居跡実測図



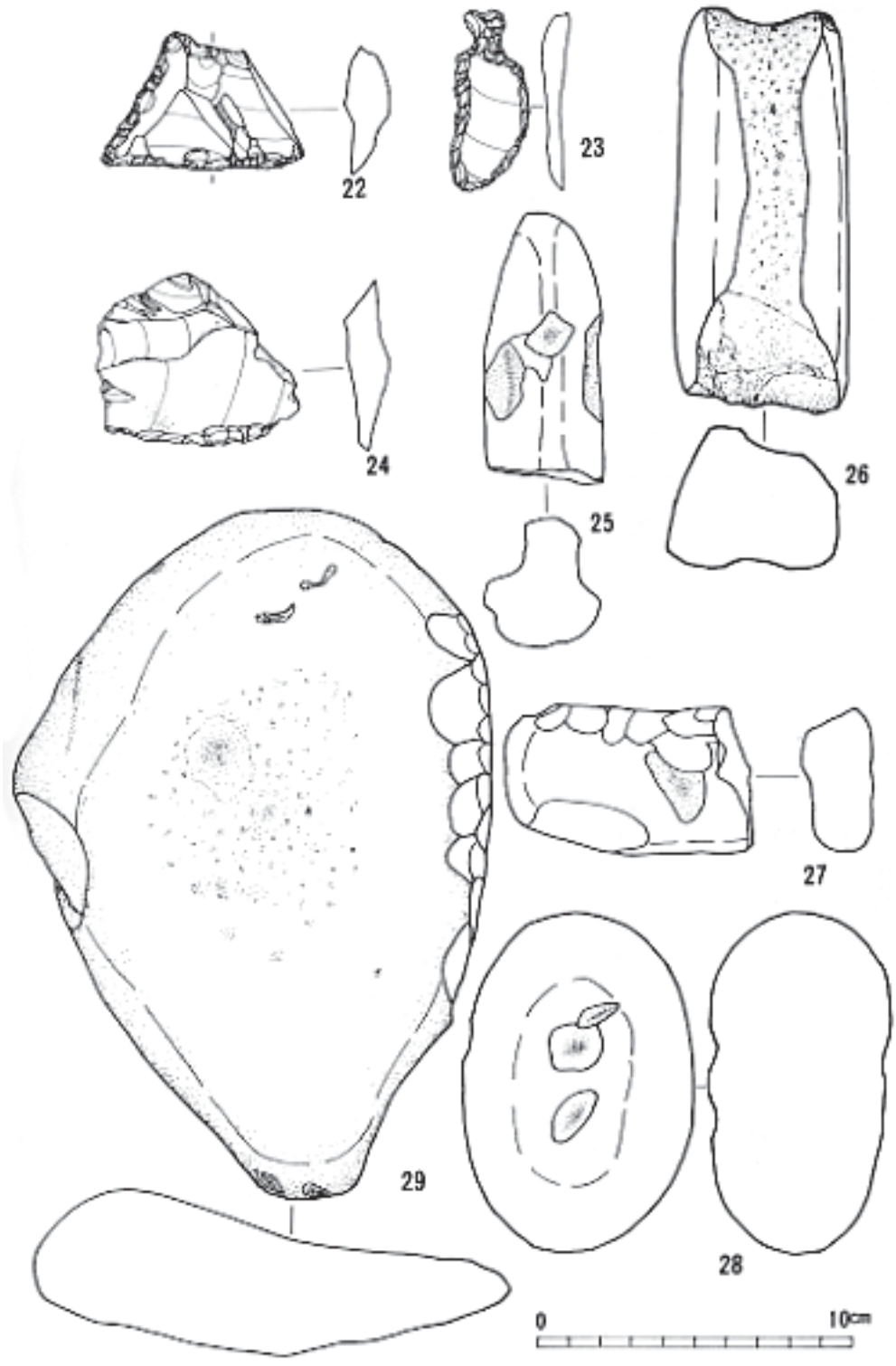
第 117 図　12 号住居跡出土遺物



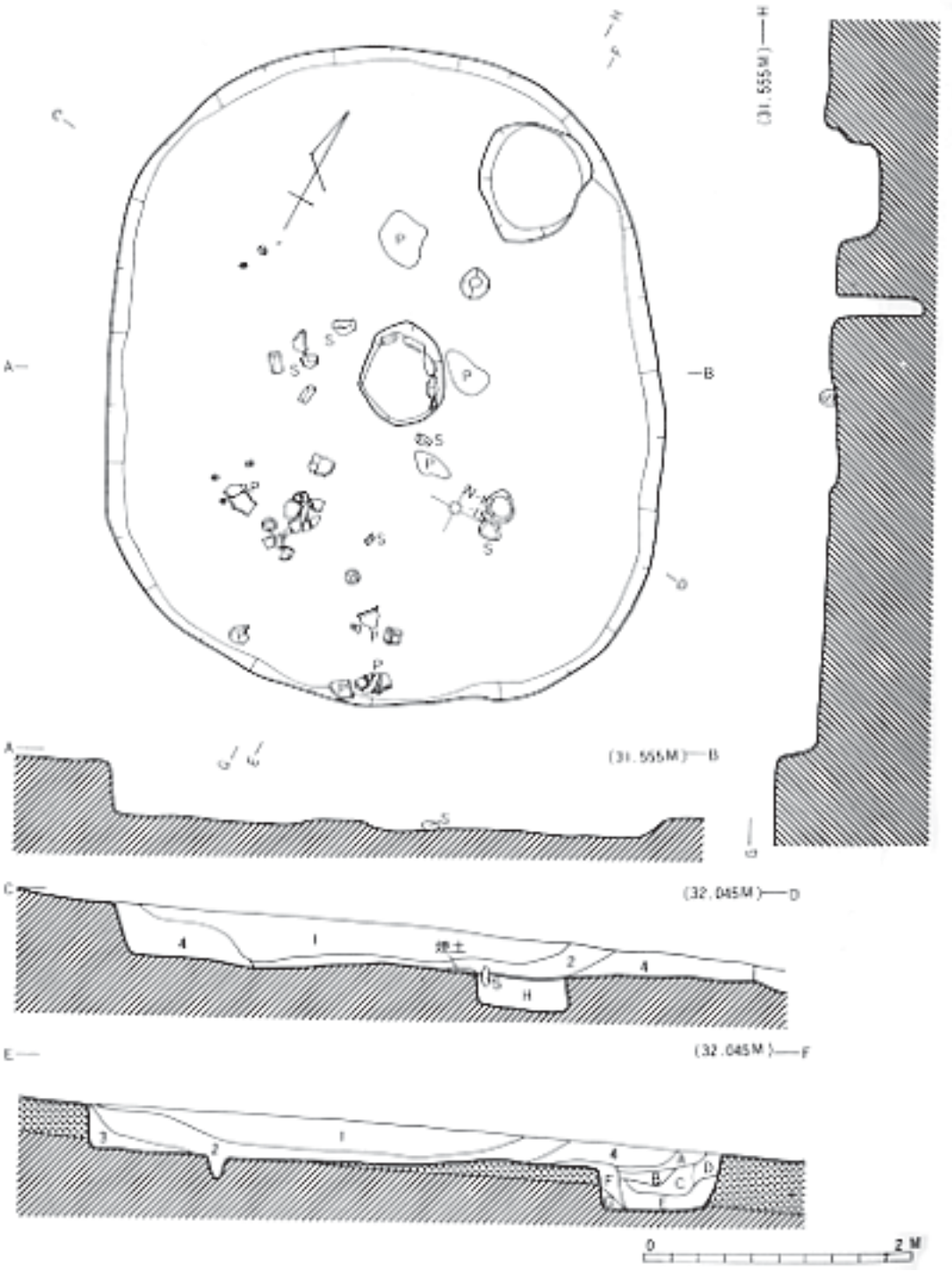
第 118 図　12 号住居跡出土遺物



第 119 図　12 号住居跡出土遺物



第 120 図　12 号住居跡出土遺物

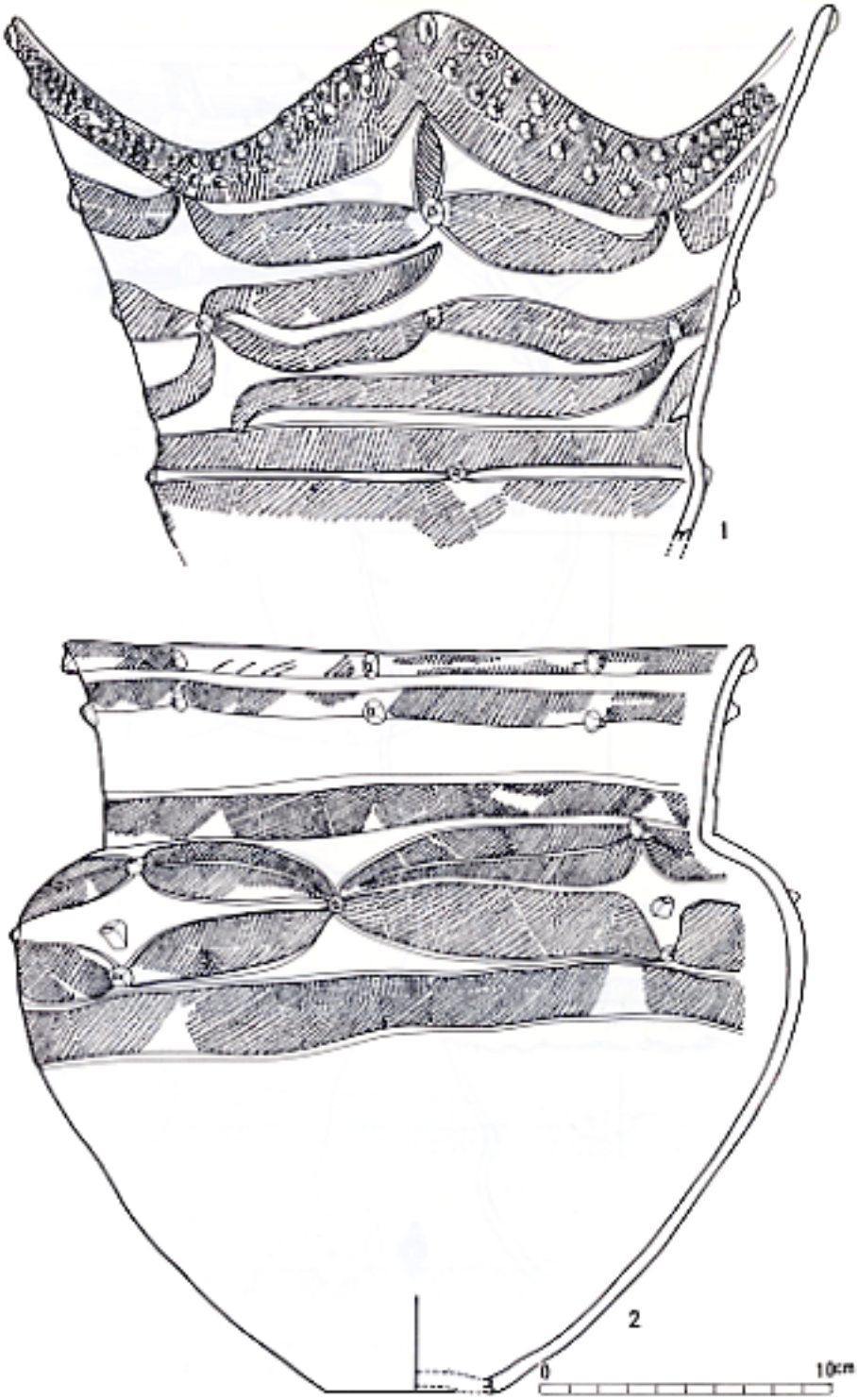


1. 黒色土　火山灰粒子若干混入
2. 茶褐色土　火山灰混入
3. 黒褐色土　炭化物若干混入
4. 褐色土　多量の火山灰粒子混入

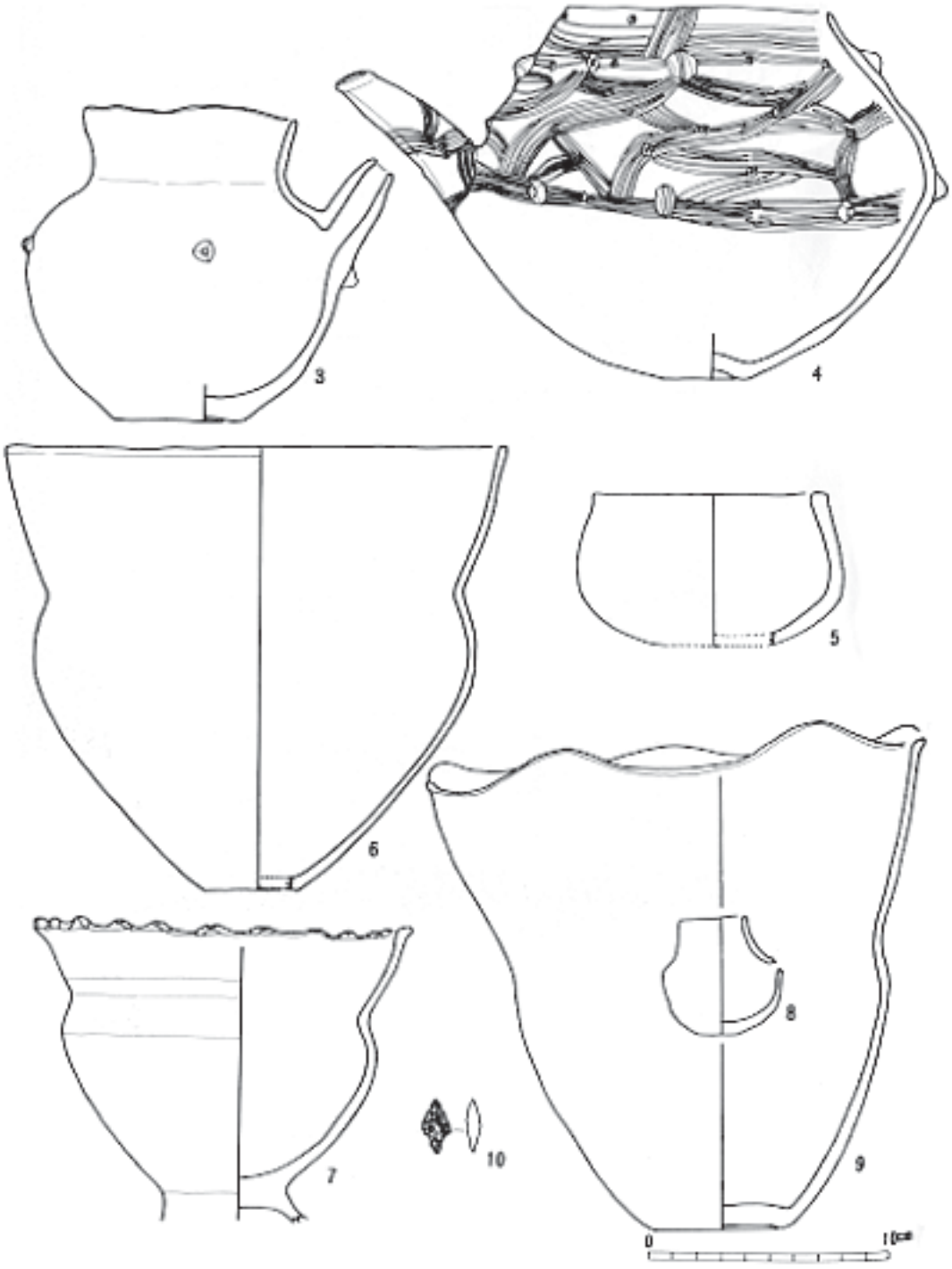
A 黒褐色土（シルト）
B 茶褐色土（粗砂）
C 暗褐色土
D 黒褐色土

E 黒色土（シルト）カーボン若干混入
F 暗褐色土
G 暗褐色土　崩壊土である
H 黒色土　炭化物混入

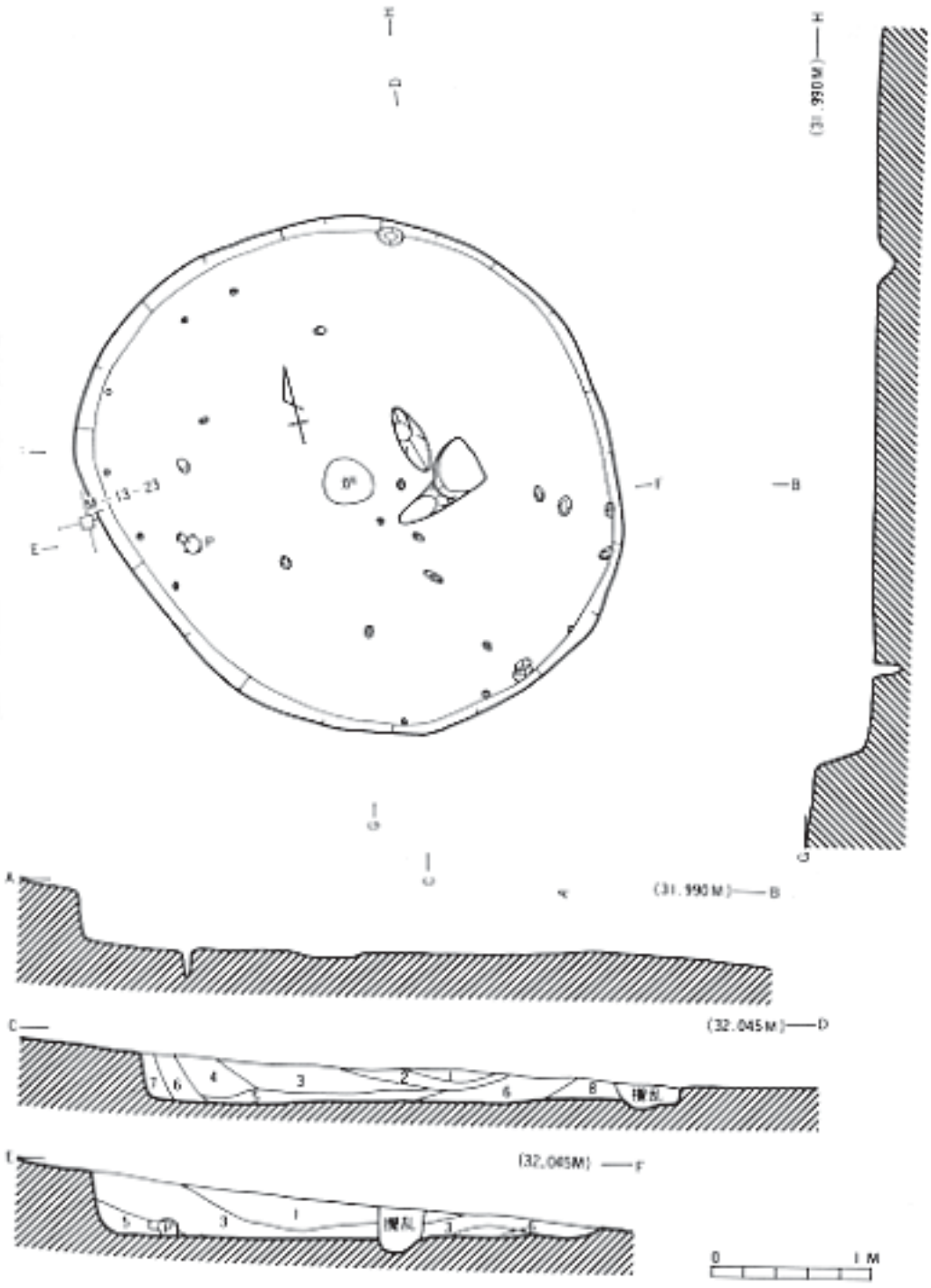
第 121 図　13 号住居跡実測図



第 122 図　13 号住居跡出土遺物

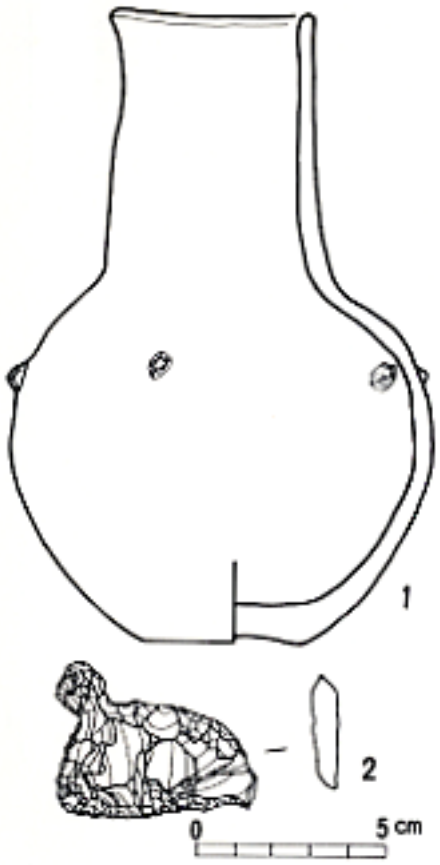


第 123 図　13 号住居跡出土遺物

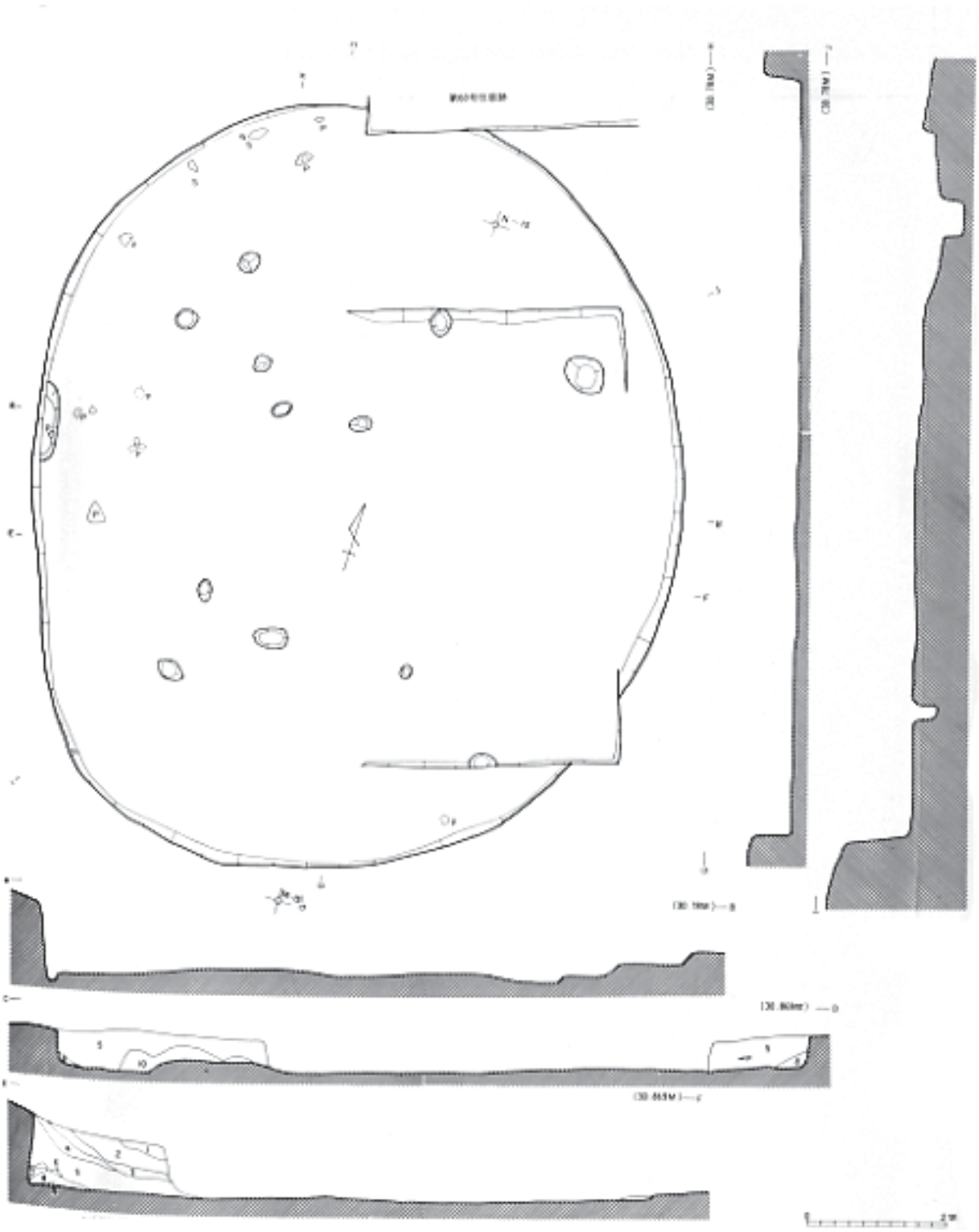


1. 黒色土　火山灰粒子混入
2. 褐色土　多量の火山灰粒子混入
3. 黒褐色土　少量の火山灰粒子混入
4. 茶褐色土　火山灰若干混入
5. 黒褐色土　炭化物若干混入
6. 褐色土　少量の火山灰粒子混入
7. 黒色土　微量の火山灰粒子混入
8. 褐色土　火山灰粒子若干混入

第 124 図　14 号住居跡実測図

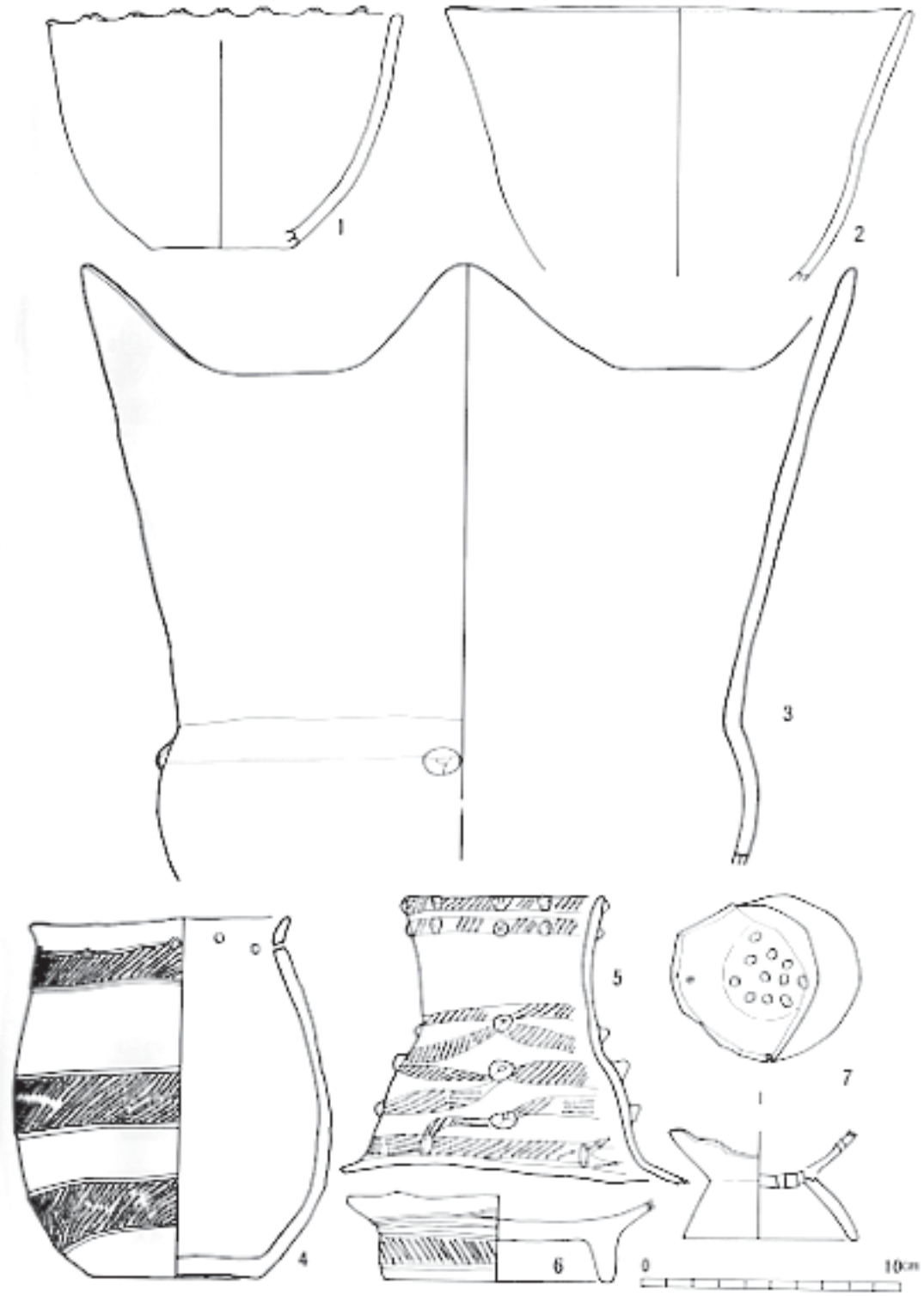


第 125 図　14 号住居跡出土遺物

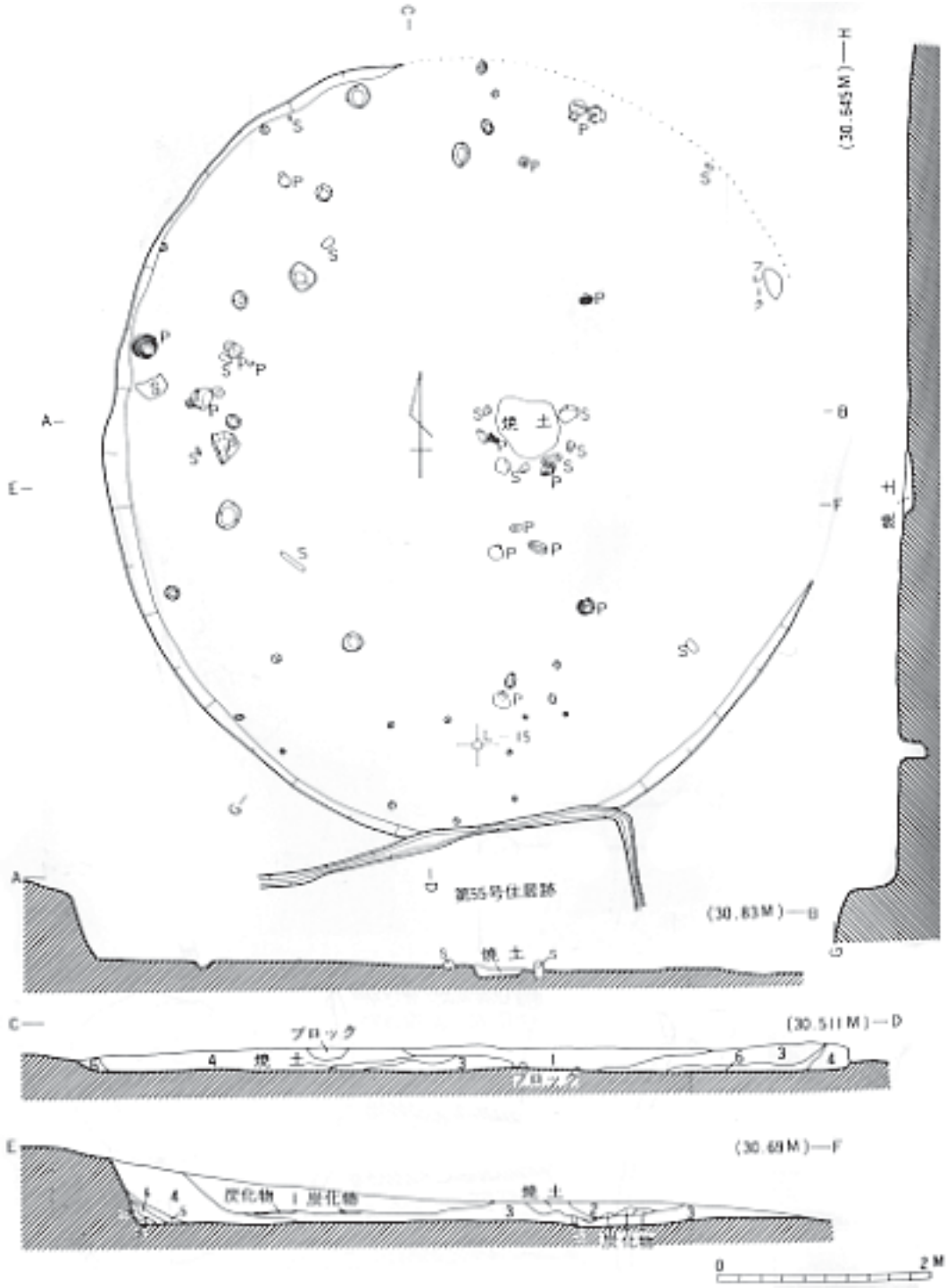


1. 褐色土　　火山灰粒子混入
2. 暗褐色土　　火山灰粒子若干混入
3. 黒色土　　火山灰粒子・炭化物混入
4. 黄褐色土　　火山灰粒子・炭化物混入
5. 褐色土　　ローム・ブロック・炭化物混入
6. 黄褐色土　　5と同じ
7. 黄色土（細砂）小礫混入
8. 黒色土　　火山灰若干混入
9. 褐色土　　ローム・ブロック混入
10 赤褐色土　　粘土である

第126図　15号住居跡実測図

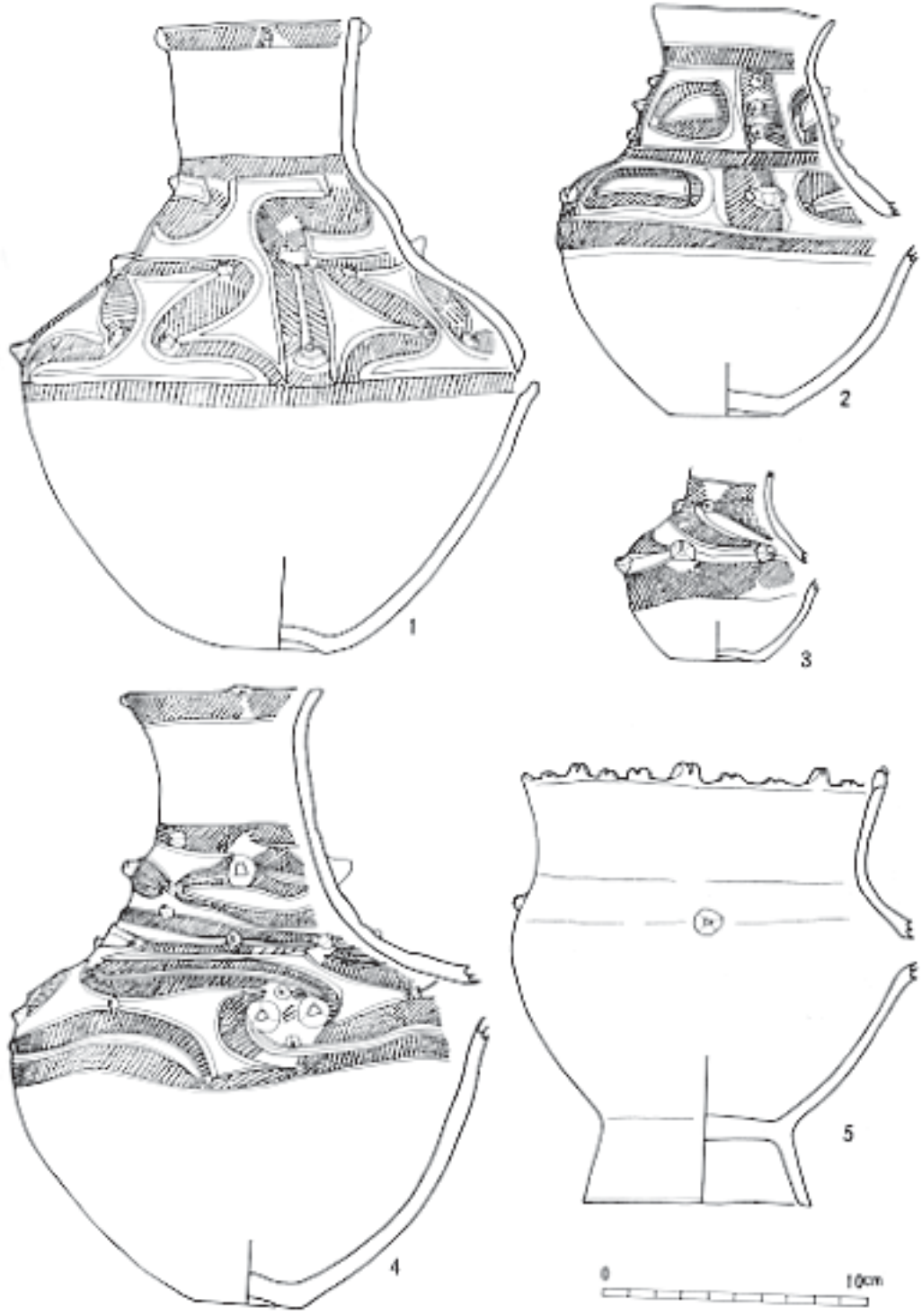


第 127 図　15 号住居跡出土遺物

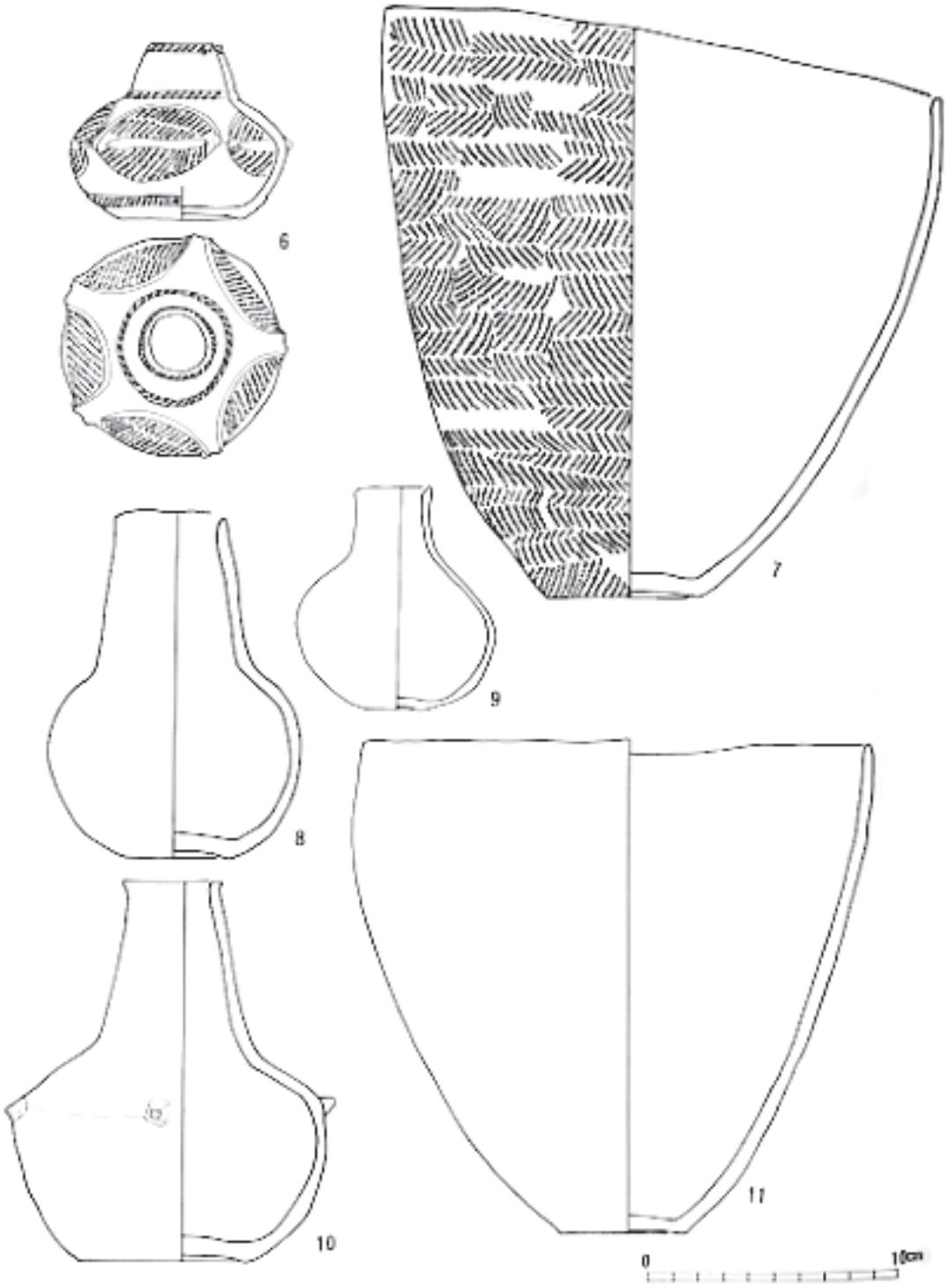


1. 黒色土　　火山灰・小礫・炭化物若干混入
2. 黒褐色土　　火山灰・炭化物若干混入
3. 暗褐色土　　火山灰・炭化物・焼土ブロック混入
4. 褐色土　　火山灰・炭化物混入
5. 黄色土　　多量の火山灰と少量の砂混入
6. 黒褐色土　　少量の火山灰と微量の炭化物混入
7. 黄褐色土　　多量の砂と粘土混入
8. 黒褐色土　　微量の火山灰粒子混入

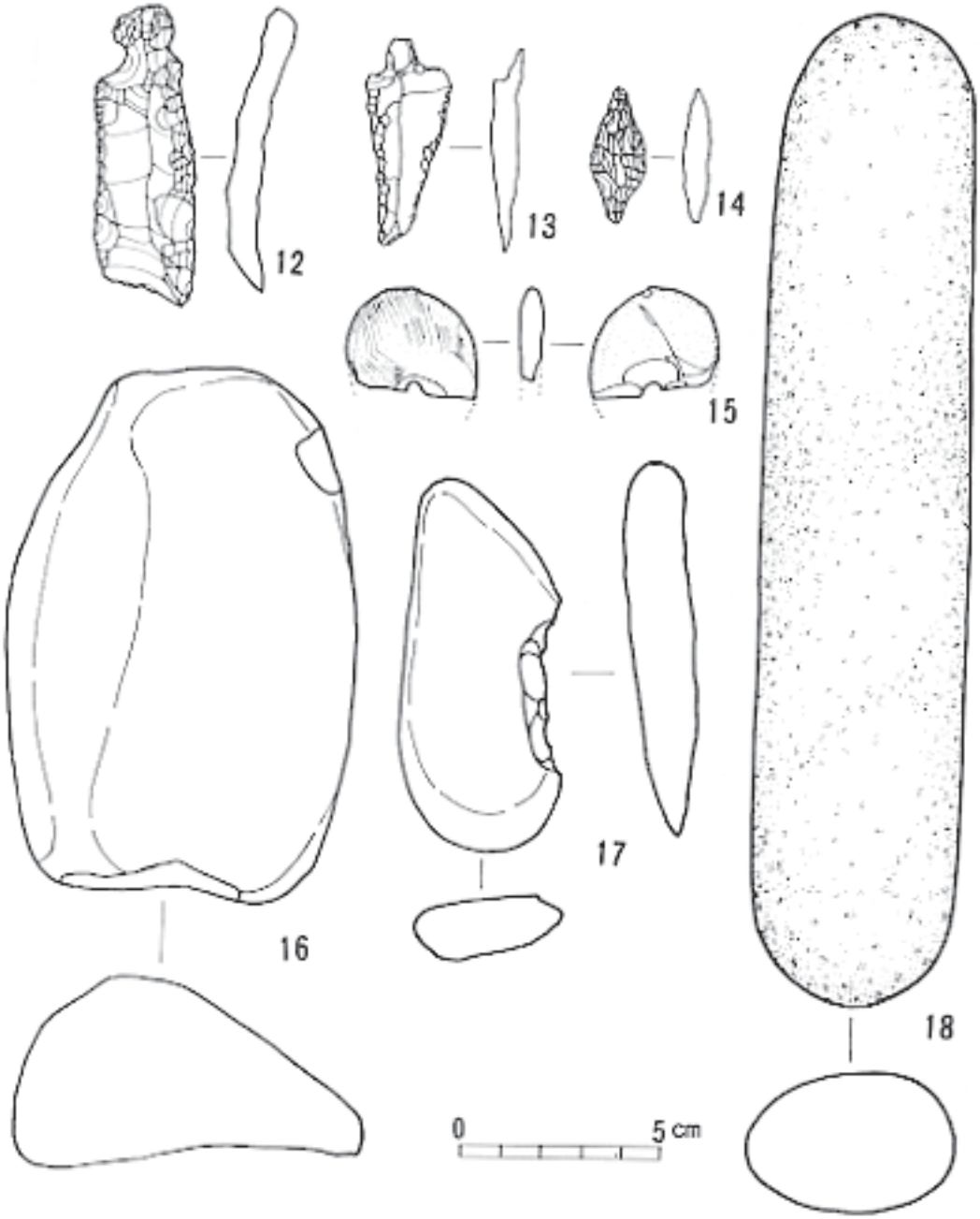
第 128 図　16 号住居跡実測図



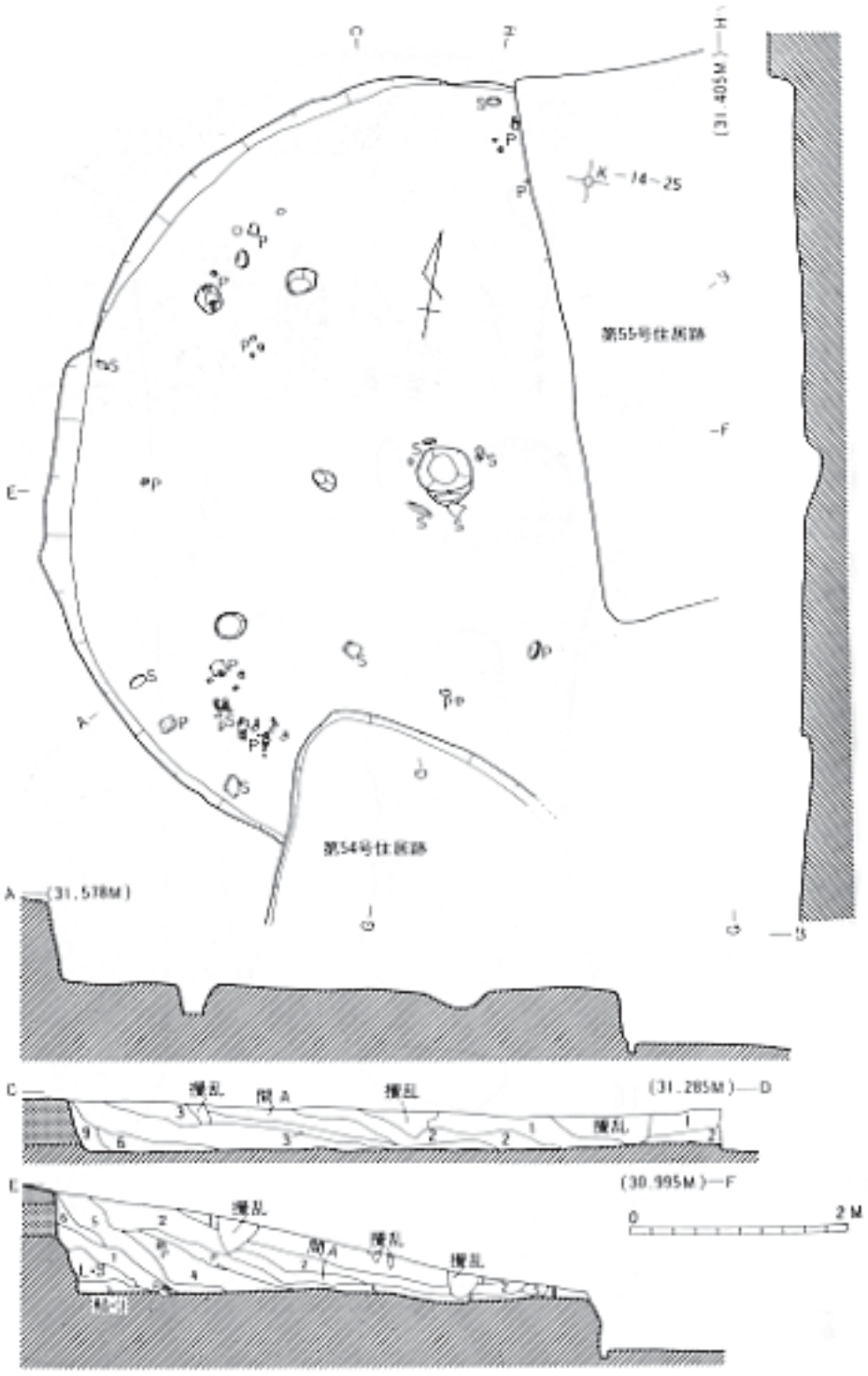
第 129 図　16 号住居跡出土遺物



第 130 図　16 号住居跡出土遺物

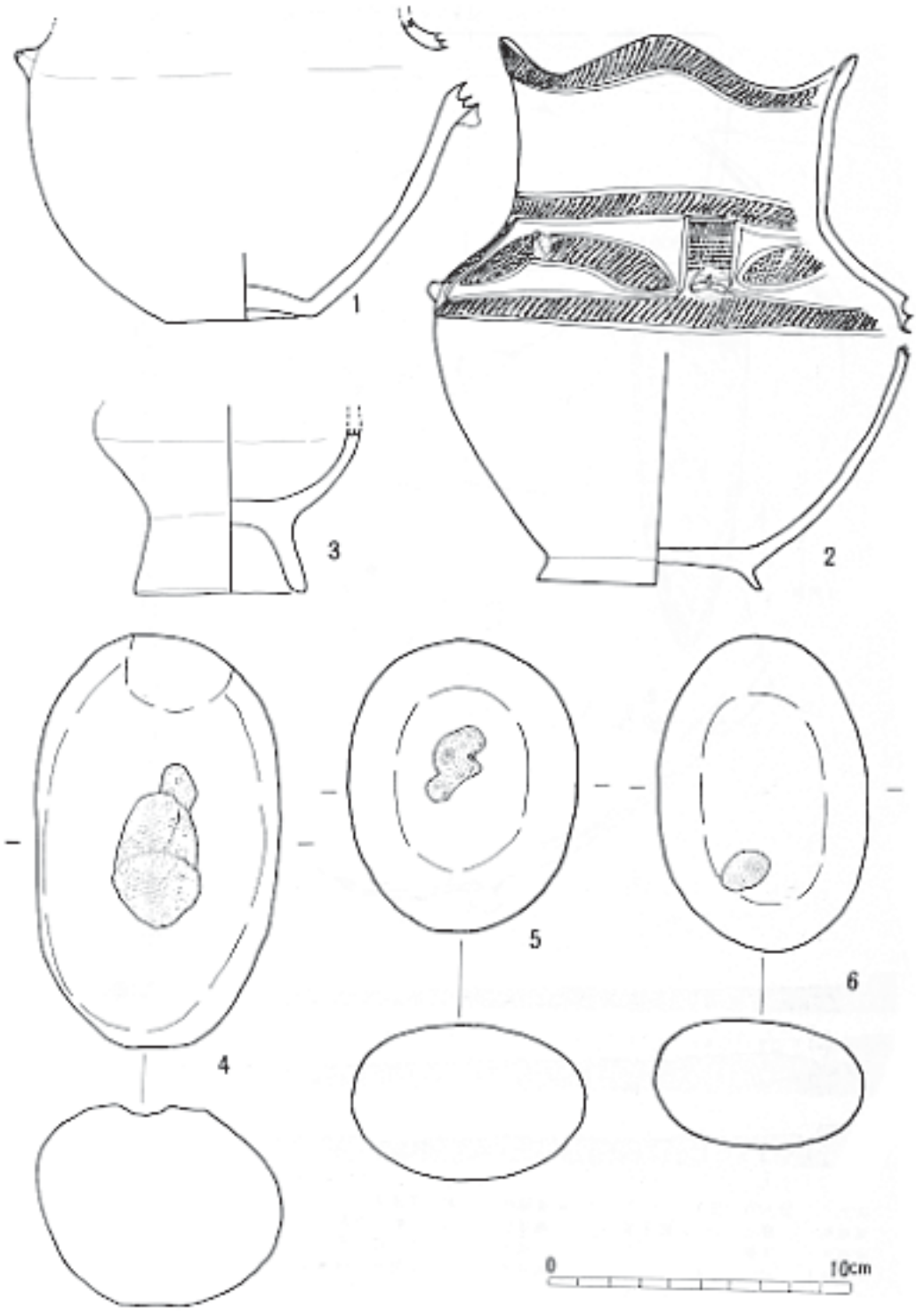


第 131 図　16 号住居跡出土遺物

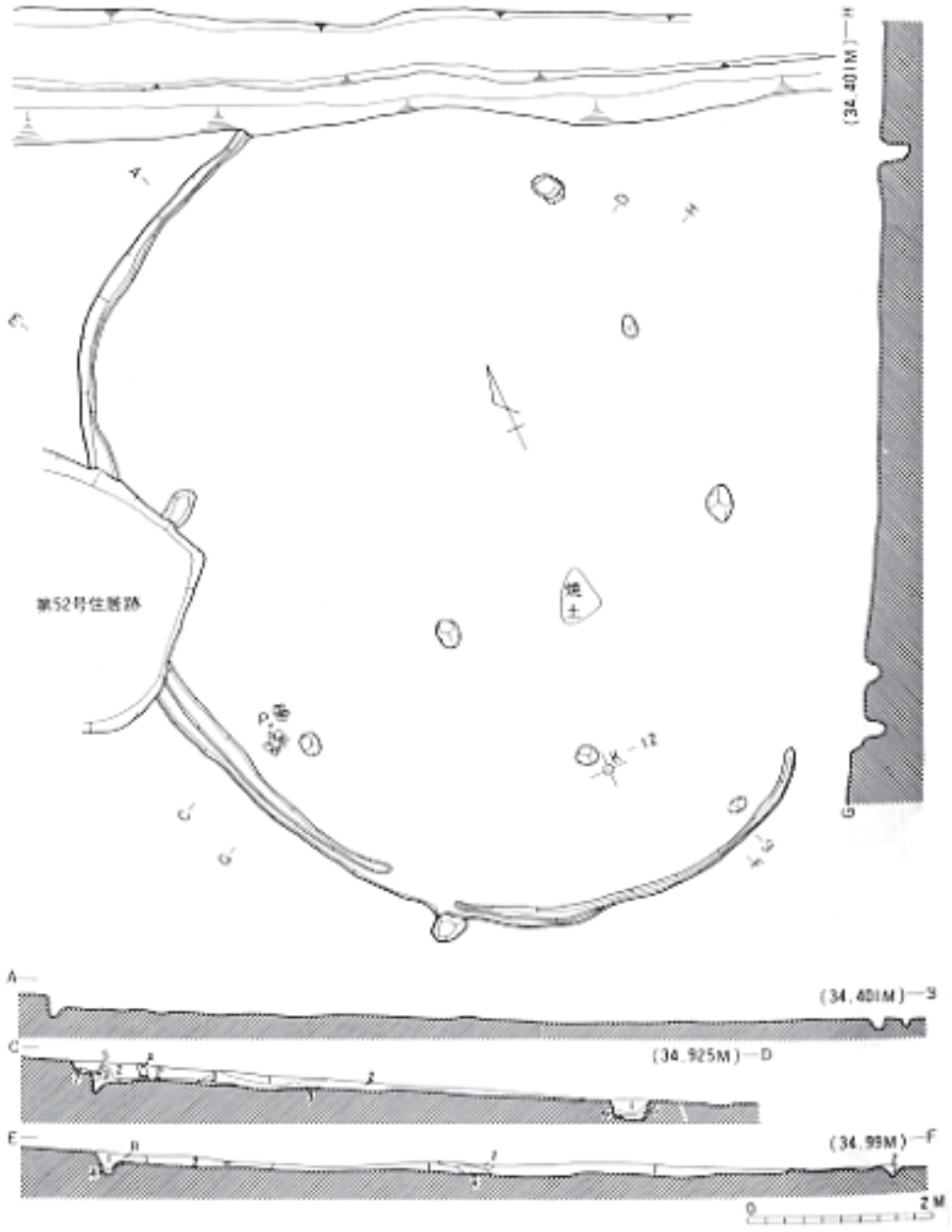


1. 黒褐色土 （シルト） ローム・粒子若干混入
2. 暗褐色土 （細砂） ローム・粒子若干混入
3. 黒褐色土 （シルト） カーボン多量に混入
4. 暗褐色土 ローム・ブロック・ローム粒子混入
5. 褐色土 4と同じ
6. 暗褐色土 （シルト） ローム粒子若干混入
7. 暗褐色土 ローム・ブロック・ローム粒子混入
8. 褐色土 ローム・ブロック混入
9. 暗褐色土 （シルト） ローム・粒子若干混入
間A暗褐色土 ローム・ブロック・ローム粒子混入

第132図　17号住居跡実測図

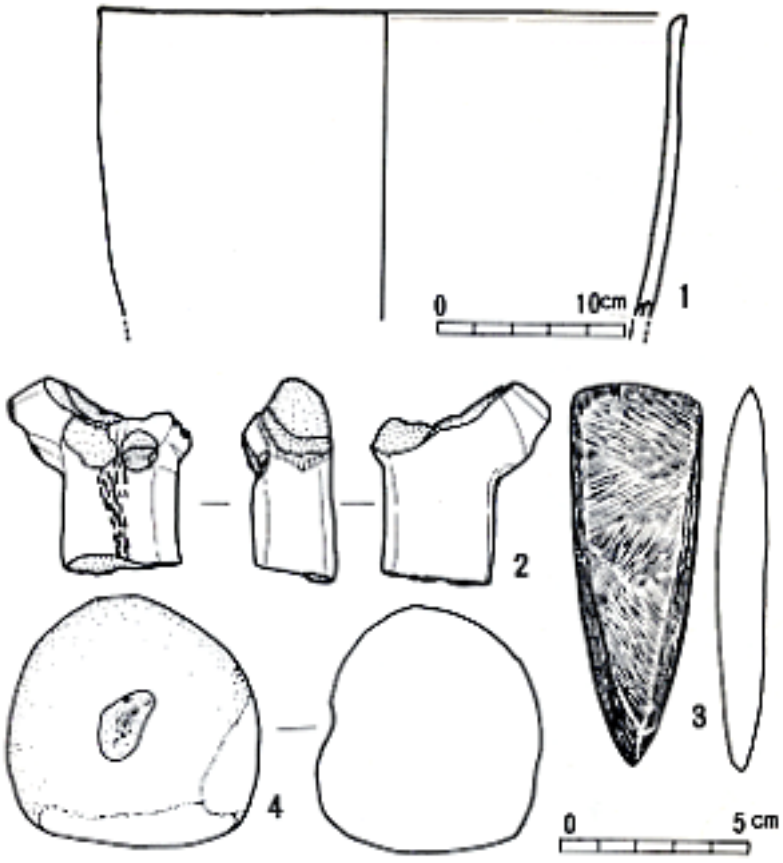


第 133 図　17 号住居跡出土遺物

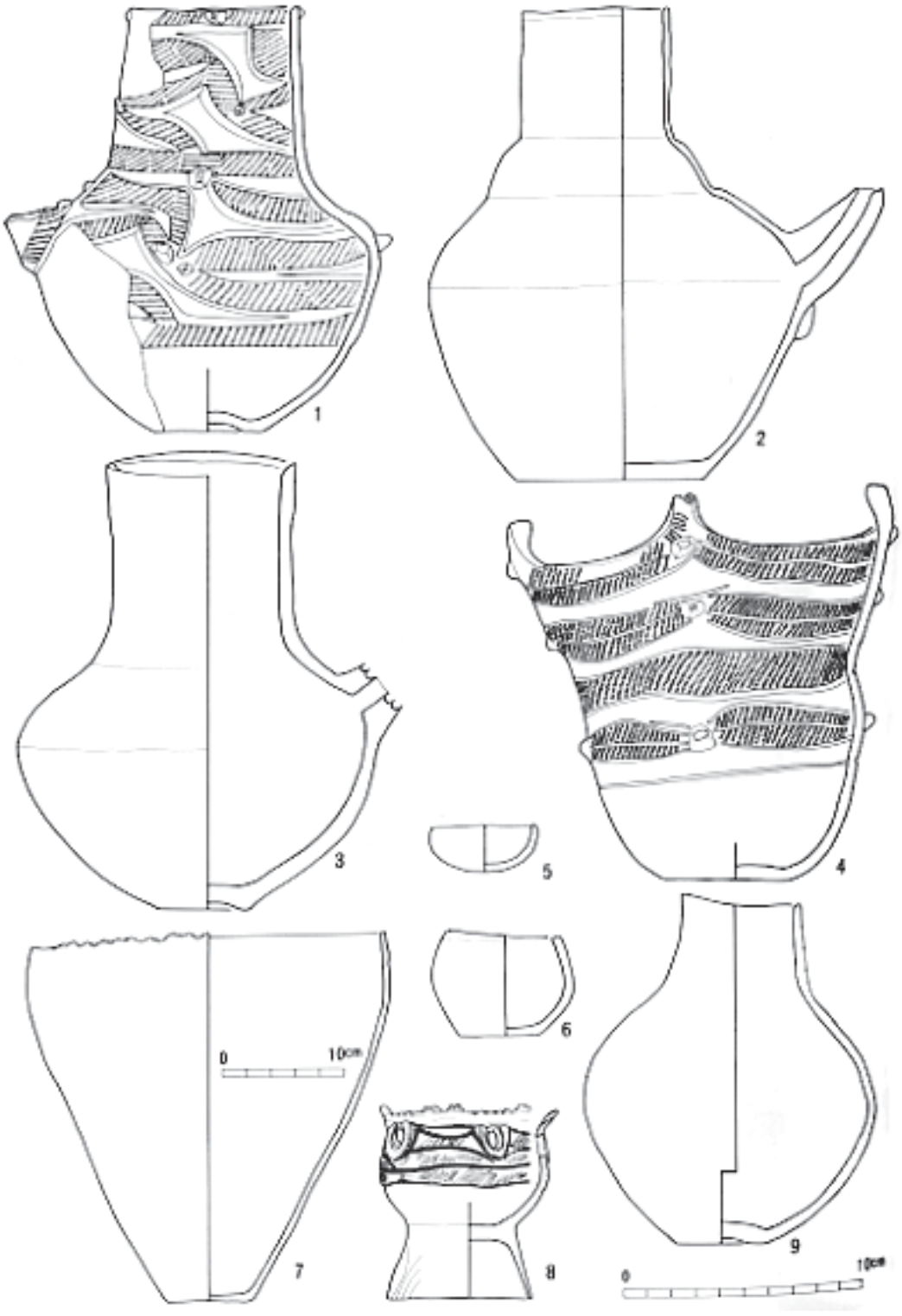


1. 黒色土　　軽石若干混入
2. 黒褐色土　　軽石・ローム粒子混入
3. 暗褐色土　　多量のローム粒子混入
4. 赤褐色土　　粘土である
5. 暗褐色土　　多量のローム粒子混入
6. 黄褐色土　　粘土である
7. 黒褐色土　　ローム粒子混入
A. 灰褐色土　　ローム・軽石混入
B. 暗褐色土　　ローム粒子・軽石混入

第 134 図　18 号住居跡実測図



第 135 図　18 号住居跡出土遺物



第 136 図　縄文後期遺構外出土土器実測図

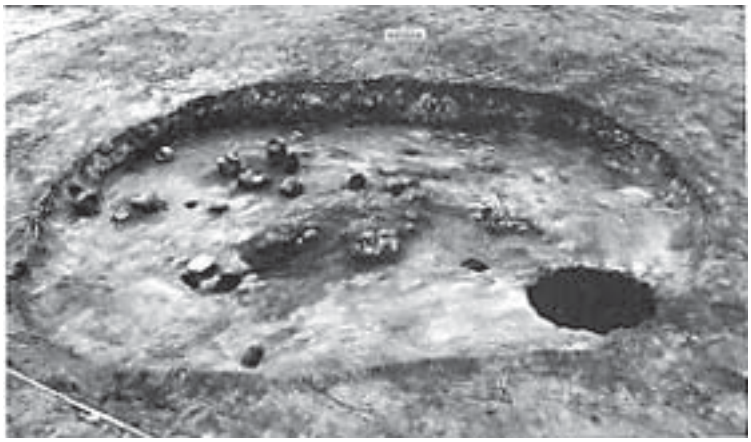
第 12 号住居跡
（覆土出土遺物）

第 12 号住居跡

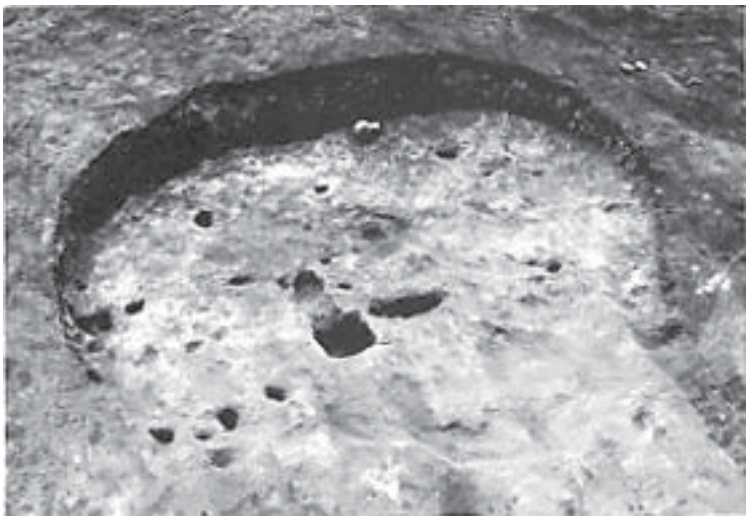
同　上
遺物出土状態

図版 36　縄文後期末葉住居跡

第 13 号住居跡



同　上
遺物出土状態



第 14 号住居跡

図版 37　縄文後期末葉住居跡

第 15 号住居跡

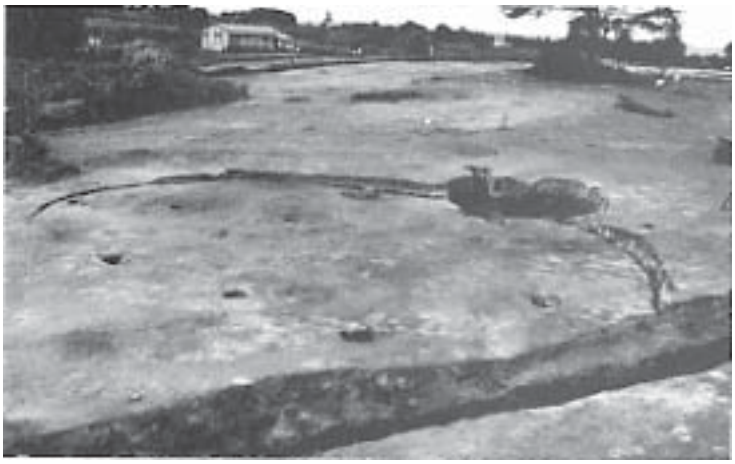
第 16 号住居跡

同　上
（遺物出土状態）

図版 38　縄文後期末葉住居跡

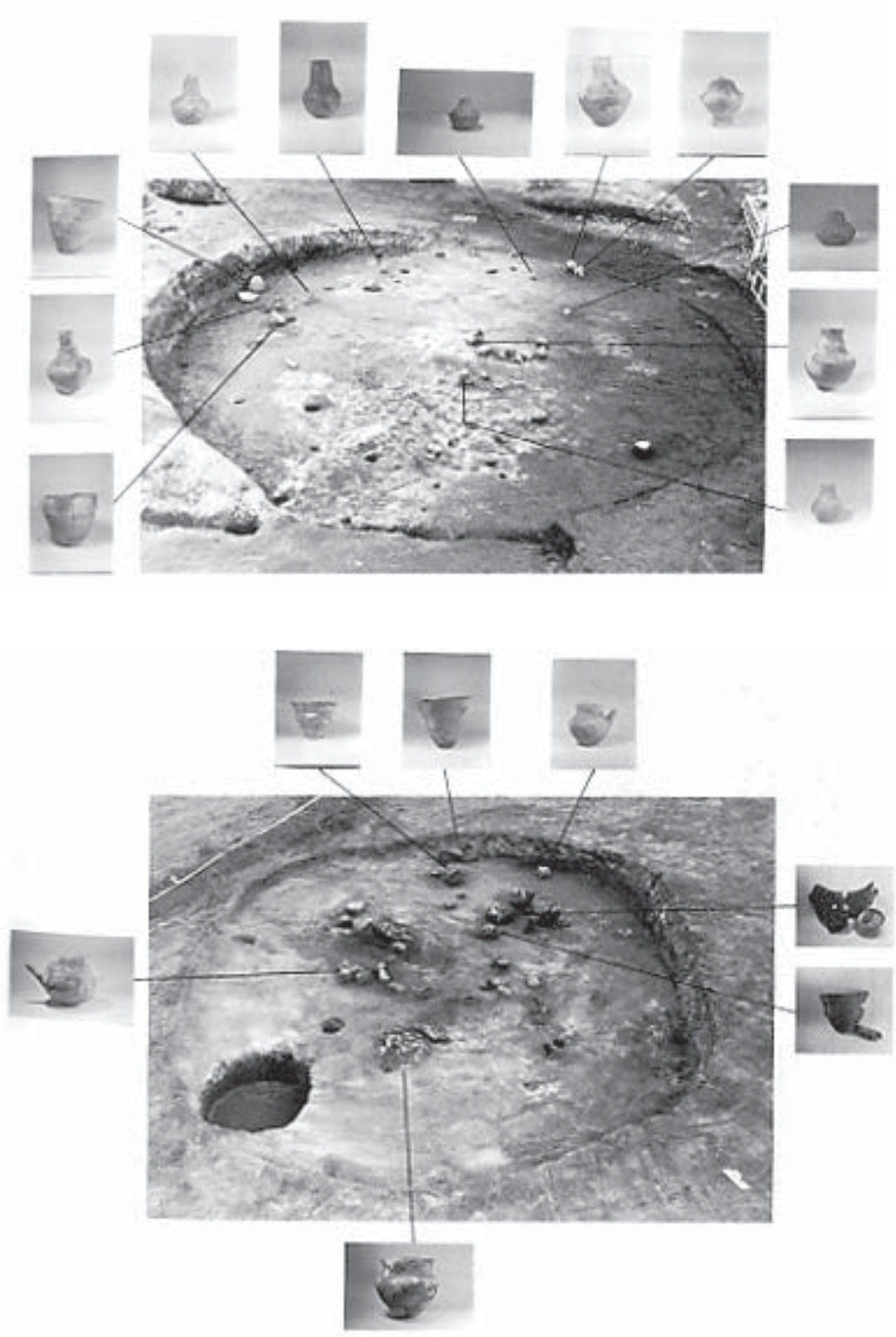
第 16 号住居跡
（土器出土状態）

第 17 号住居跡



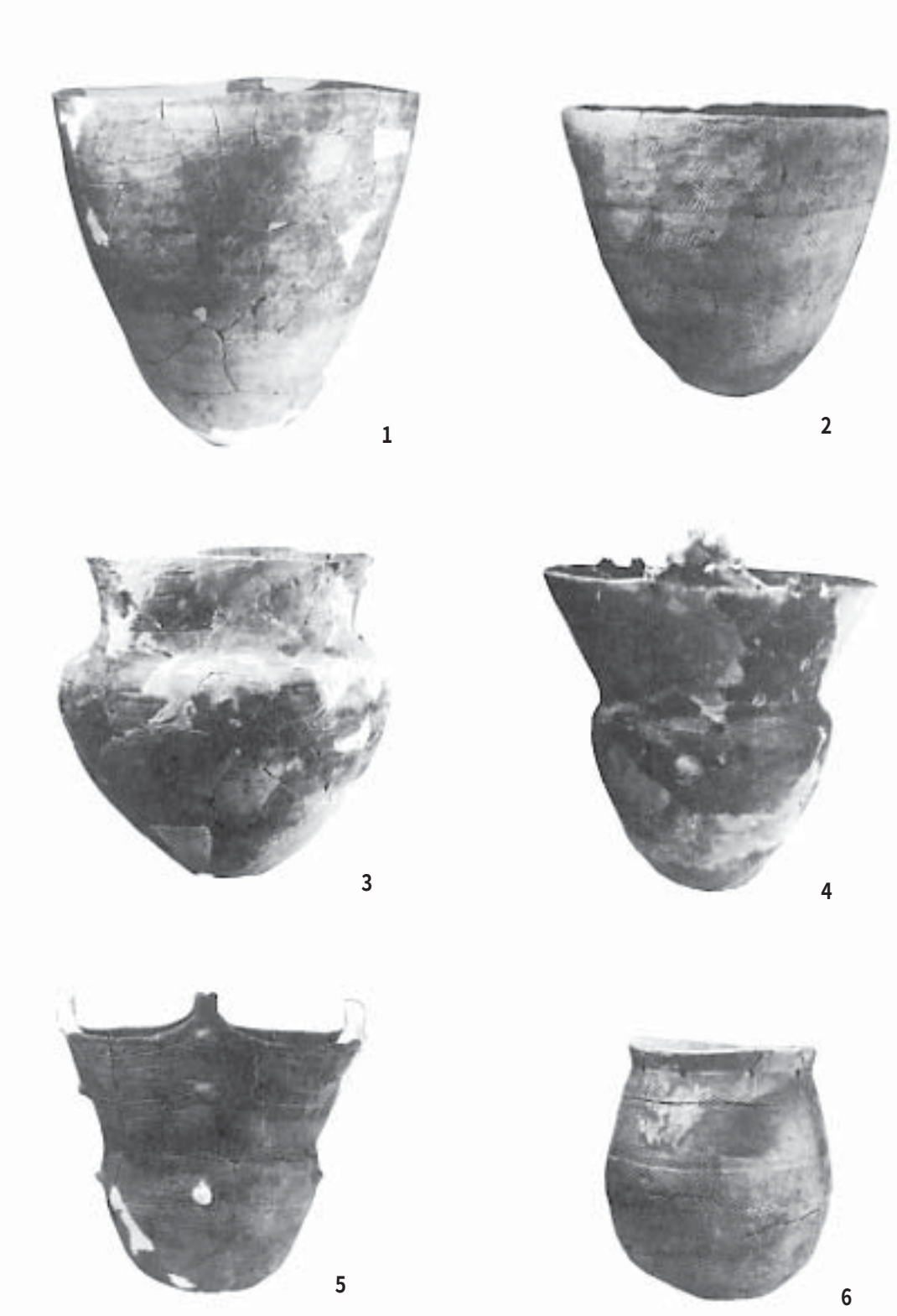
第 18 号住居跡

図版 39　縄文後期末葉住居跡

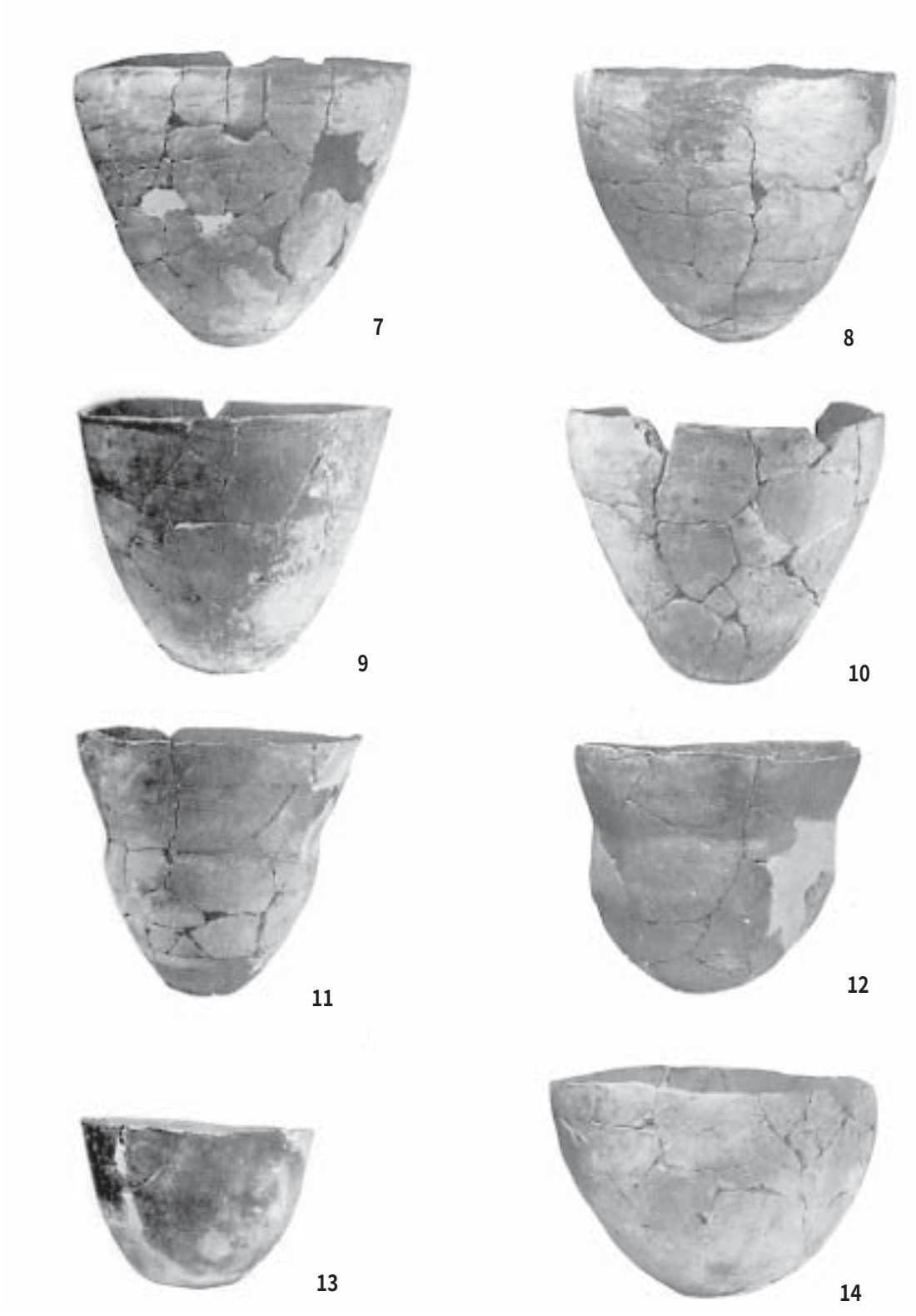


第 13 号住居跡

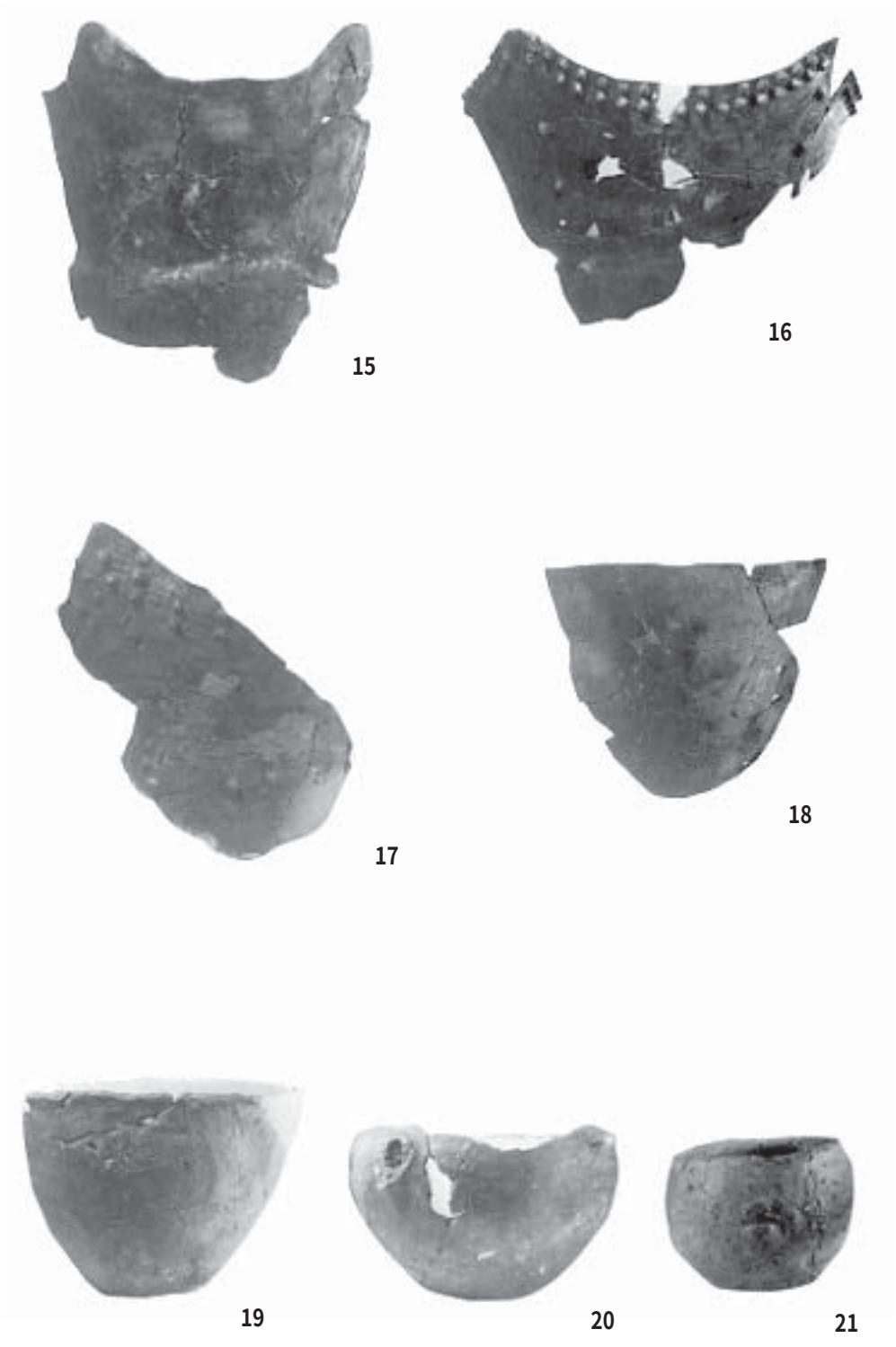
図版 40　縄文後期末葉住居跡及び土器出土状況



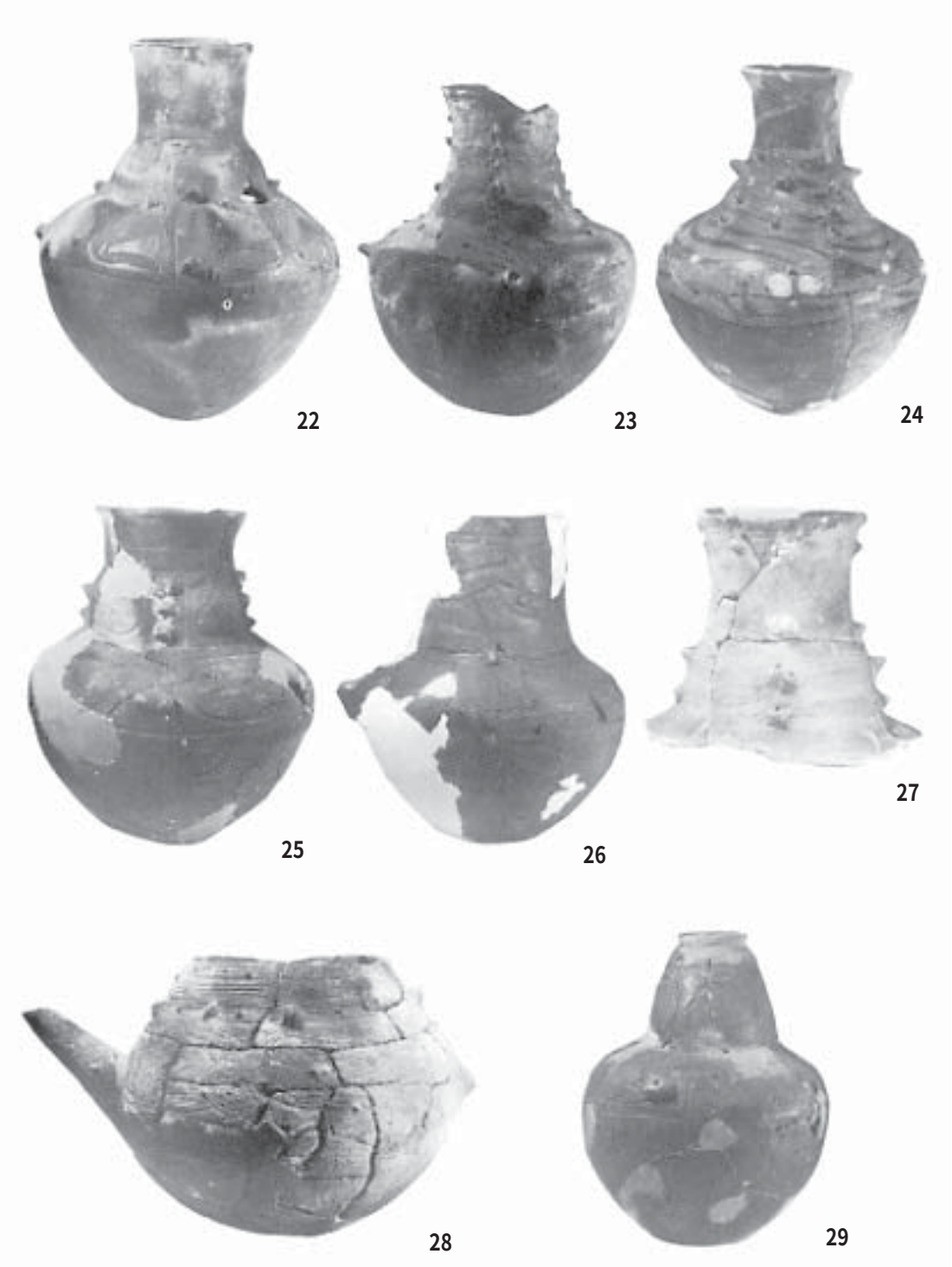
図版 41　縄文後期末葉出土土器



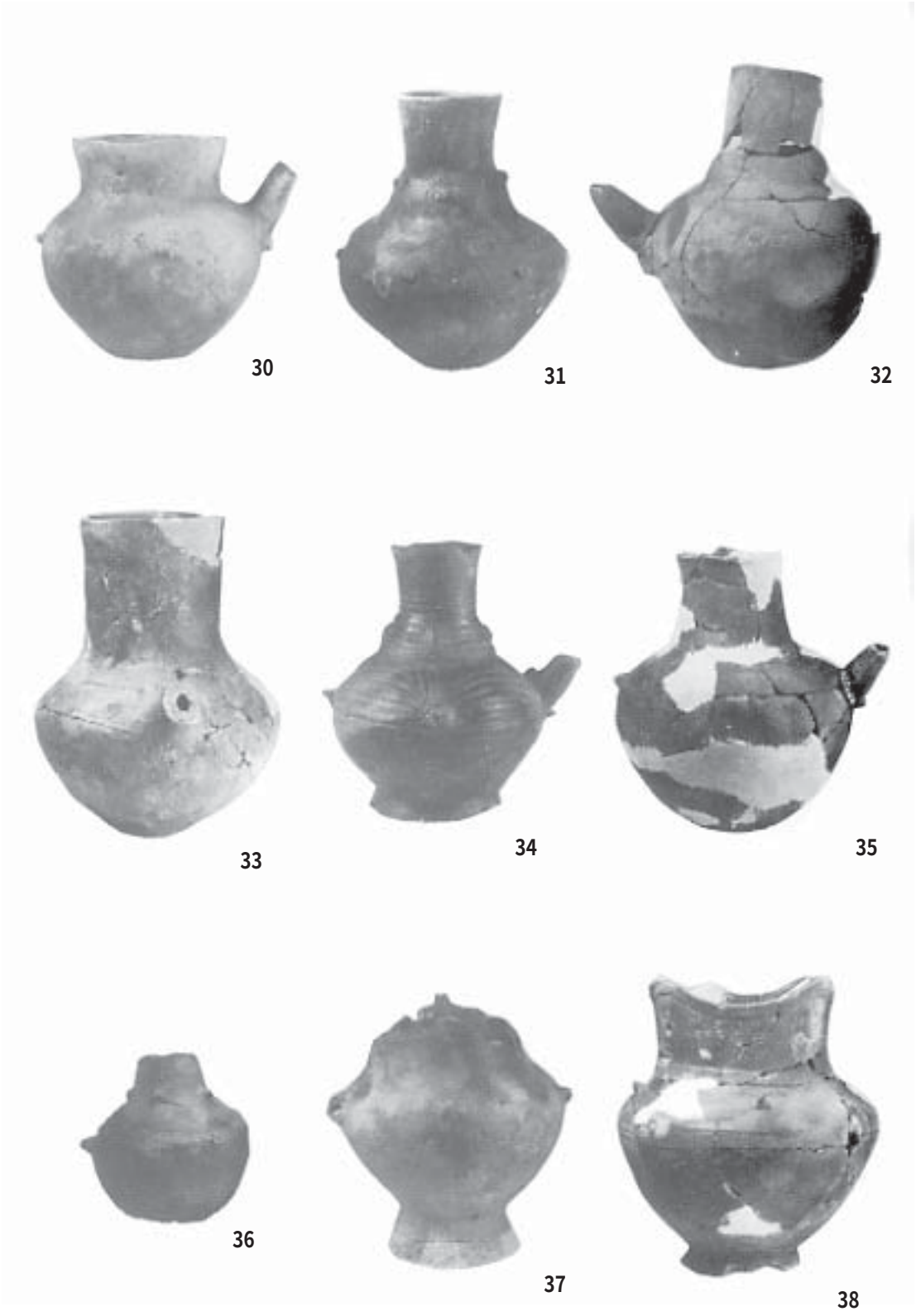
図版 42　縄文後期末葉出土土器



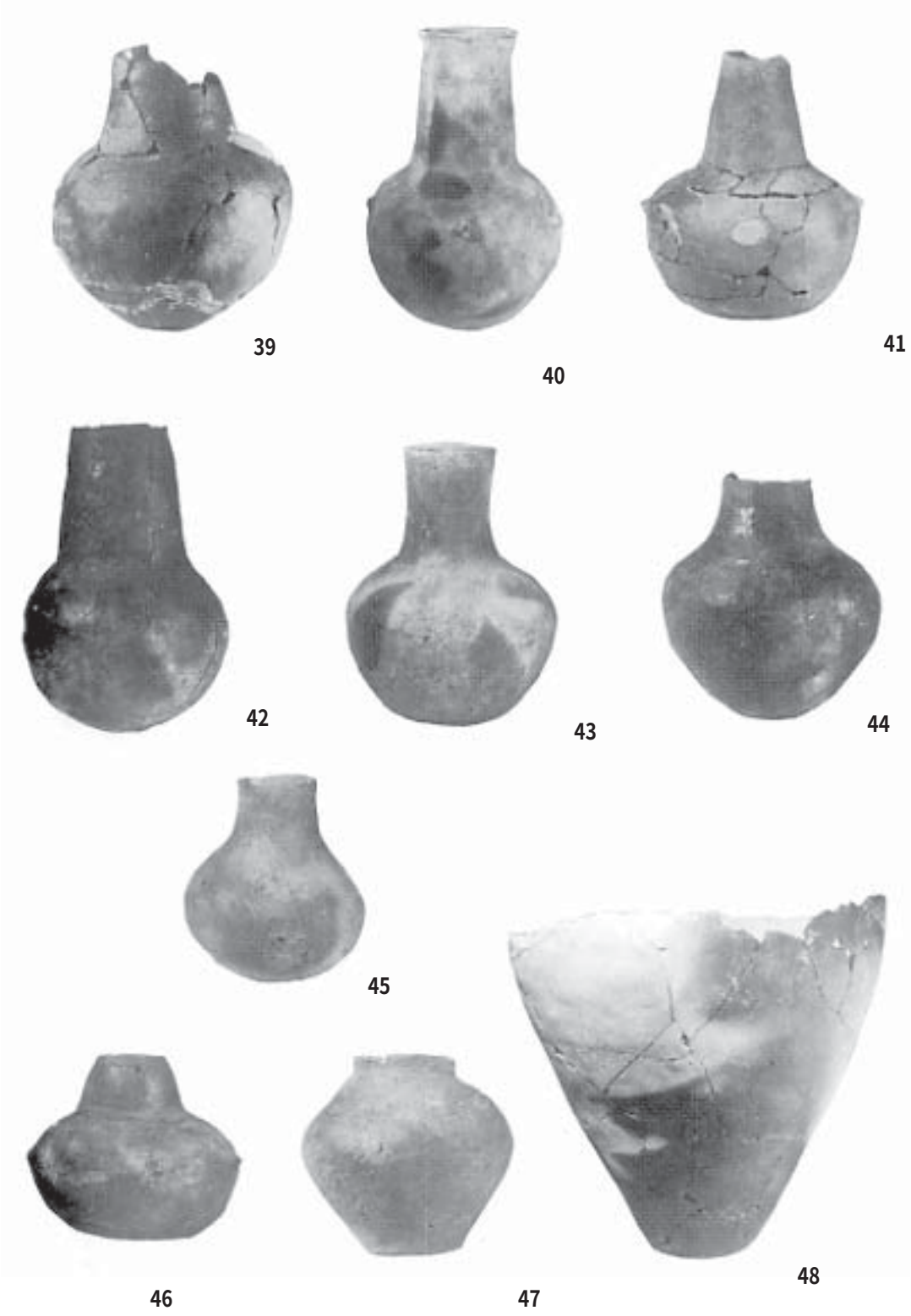
図版 43　縄文後期末葉出土土器



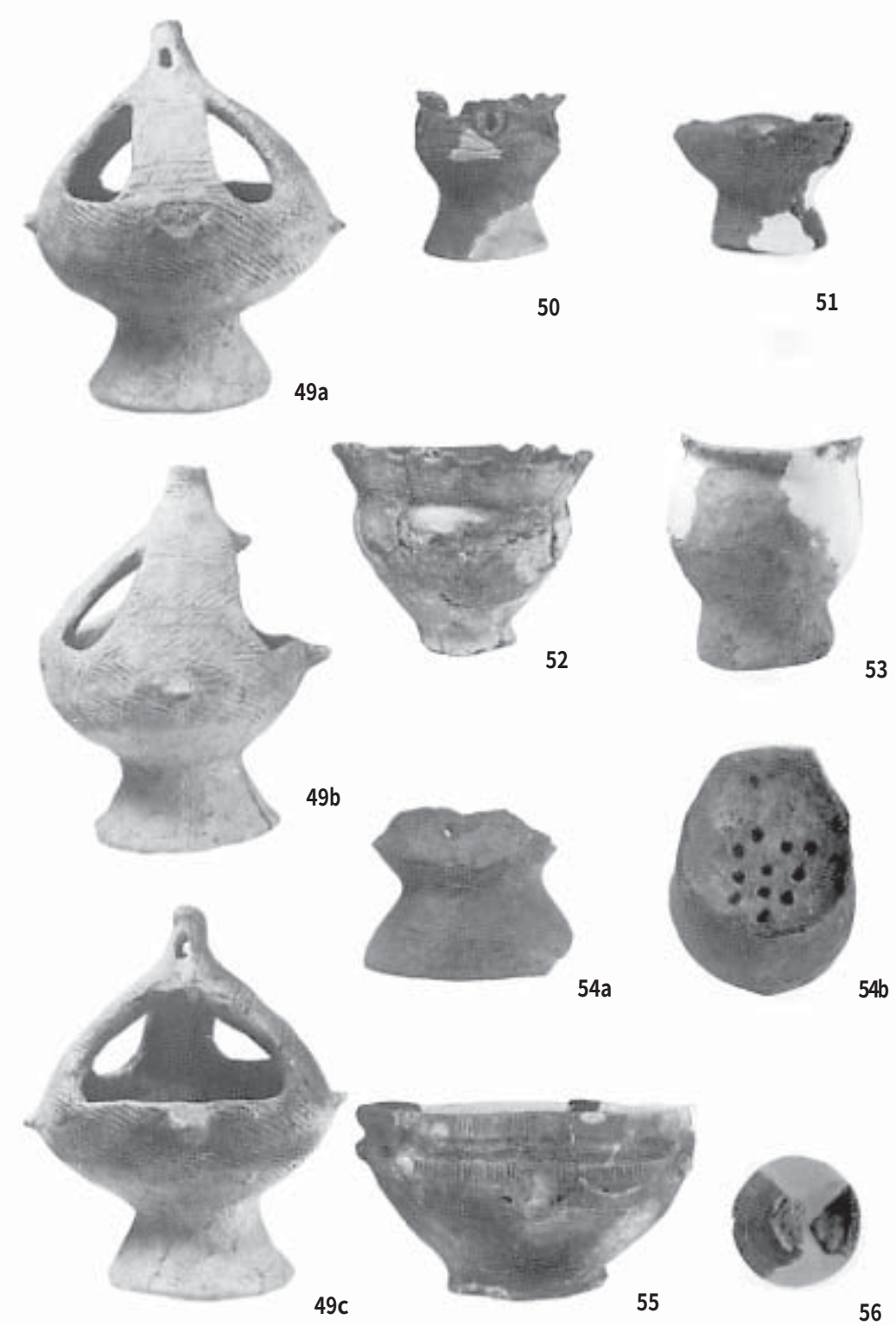
図版 44　縄文後期末葉出土土器



図版 45　縄文後期末葉出土土器



図版 46　縄文後期末葉出土土器



図版 47　縄文後期末葉出土土器

第7章　晩　期　編

本遺跡から縄文晩期の遺物が出土することは、分布調査の段階では知られていなかった。昭和50年におこなわれた試掘調査の際、ピット（第26号ピット）の中から大形深鉢型土器が出土したことから、更に発見が予想された。破片はK－9～10の両グリットに散乱しており、ほとんど耕作によって紛砕され復元の可能な土器は見られなかった。調査が進むにつれて完形土器は、すべて所謂フラスコ状ピットから出土することが判明した。縄文晩期の土器を包蔵したピットは、本発掘区全体で11基あり、いずれも1～3個包蔵している。これらのピットに共通している点は、覆土の堆積状態が自然堆積とは異なっており、なかにはベニガラの混在が認められるピットもある。

第2号ピット（第137図）

ピットは0－12－24区に所在し、口径116×115㎝、底径170×168㎝、深さ91㎝でプランがほぼ円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は、次の如くである。第1層黒褐色土、第2層暗褐色土、第3層黒褐色土、第4層暗褐色土、第5層黒褐色土、第6層黒褐色土、第7層暗褐色土、第8層暗褐色土、第9層暗褐色土、第10層暗褐色土、第11層暗褐色土、第12層黒褐色土、第13層暗褐色土。

第139図7に示した土器は、ピットの北西ほぼ底面から倒立した状態で出土した完形の壺型土器である。器高15㎝、口径12㎝、最張部15㎝、底径6㎝で底部は揚底を呈している。器面全体が丁寧に調整され滑沢を帯び、色調は黒褐色を呈し焼成は良好である。ピットの最下層は、底面に対してほぼマウンド状に堆積しており、ベニガラの混在が認められる。

第5号ピット（第137図）

ピットは0－14－1区に所在する。口径84×82㎝、底径125×110㎝、深さ67㎝でプランがほぼ円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第1層暗褐色土、第2層暗褐色土、第3層黒褐色土、第4層黒褐色土、第5層黒褐色土、第6層黒色土。第139図－1、2に示した土器は、口縁部を互い違いにし、横状に並べおかれたかの様にピットの北西から出土した。1は、壺型土器で器高14㎝、口径6㎝、最張部9㎝、底径5㎝で底部は平底を呈している。二本の沈線によって胴部より区別された肩部には粘土を貼りつけた様な2個1組の、S字状突起の原型的突起が配され、沈線による羊歯状文が施文されている。胴部全体に縄文が施され、中央に二本の平行沈線がめぐっている。底部は、一本の沈線を境として無文調整されている。色調は、若干の緑色を呈し、焼成は良好である。

2は、台付鉢型土器で、器高12㎝、口径12㎝、台接合部径5㎝、底径8㎝である。口唇部には2対1組の突起と細い刻みが見られ、口縁部には2本の平行沈線があり、台接合部には沈線

による羊歯状文が施されている。全面にヘラけずり様の調整が見られ、色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。これらの土器以外に第166図－18、25に示した石器も出土した。このピットも最下層がマウンド状に堆積しているのが認められる。

第10号ピット（第137図）

ピットは0－14－1区に所在する。口径93×82㎝、底径117×109㎝、深さ56㎝でプランはほぼ円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第1層黒褐色土、第2層黄褐色土、第3層暗褐色土、第4層褐色土、第5層黒色土、第6層黒褐色土、第7層ローム、第8層黒褐色土。第140図－9に示した土器は、横におかれた状態で出土した完形の粗製鉢型土器である。器高14㎝、口径10㎝、底径7㎝の平底である。全面にわたり粗雑な縄文が施され、色調は黒褐色を呈し、調整、焼成とも不良である。ピット底面には幅5㎝程度の比較的浅い小ピットが2個作られている。このピットも最下層がマウンド状に堆積しており、ベニガラの混在も認められる。

第26号ピット（第137図）

ピットはL－11－16区に所在する。昭和50年度の試掘調査の発見されたピットで、口径190×110㎝底径250×240㎝、深さ90㎝でプランはほぼひょうたん形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層状況は次の如くである。第1層茶褐色土、第2層暗褐色土、第3層暗褐色土、第4層淡赤褐色土、第5層暗褐色土、第6層黒褐色土、第7層黒色土、第8層黄褐色土、第9層暗褐色土、第10層黒橙色土、第11層黒色土。第141図－16に示した土器は深鉢型土器で、器高38㎝、口径33㎝、底径10㎝である。昭和50年度試掘調査の際出土したもので、第2層中に横倒しの状態で出土した。口唇部には4個の三角状の突起と細かい波状がみられ、口縁部には、三本の平行沈線と三角状の突起が1個施されている。全体に黄褐色を呈し、焼成は良好である。このピットは最下層がほぼ平面に堆積している。昭和50年度調掘調査の際、このピット上に土器片と礫を含み、固くしまっていたマウンドが存在していたことを付記しておく。

第27号ピット（第137図）

ピットはJ－12－25区に所在する。口径133×120㎝、底径200×193㎝、深さ90㎝でプランはほぼ円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第1層暗褐色土、第2層暗橙色土、第3層暗褐色土、第4層暗褐色土、第5層暗黄色土、第6層暗褐色土、第7層黄褐色土、第8層黒褐色土、第9層暗橙色土、第10層黄褐色土、第11層黒褐色土。第140図－12に示した鉢型土器は、ピット底面より、正立の状態で出土した土器で、器高17㎝、口径18㎝、底径8㎝である。口唇部に6個の突起が1まとめに配され、それ以外の所にも小突起がめぐらされている。いずれの突起にも、圧痕文が施されている。口縁部には三本の平行沈線がめぐり、突起の下部にも一本の沈線が施されている。全面に炭化物が付着しており、煮沸用の土器をそのままうめたものと思われる。このピットも最下層がマウンド状に堆積しているのが認められる。

第 32 号ピット（第 137 図）

ピットはＪ－11－14 に所在し、A・B2 つのピットからなっている。A ピットは、口径 108 × 90㎝、底径 110 × 86㎝、深さ 29㎝でプランはほぼ円形を呈する円筒形のピットである。B ピットは、口径 100 × 96㎝、底径 135 × 128㎝、深さ 104㎝でプランは円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第 1 層黒褐色土、第 2 層黄褐色土、第 3 層黒褐色土、第 4 層褐色土、第 5 層黒色土、第 6 層黄褐色土、第 7 層黒褐色土、第 8 層黒褐色土、第 9 層灰褐色土、第 10 層黄褐色土、第 11 層灰褐色土、第 12 層黒褐色土、第 13 層灰黄褐色土、第 14 層暗褐色土、第 15 層黒褐色土、第 16 層黒褐色土、第 17 層暗褐色土、第 18 層褐色土、第 19 層灰黄褐色土、第 20 層黒褐色土、第 21 層灰色土、第 22 層黒褐色土、第 23 層暗褐色土、第 24 層黄褐色土、第 25 層黒褐色土。

A ピットに於いて全く遺物が出土せず、性格、年代とも全く不明である。B ピットからは第 141 図－14、15、17、18 に示した遺物が出土した。14、15 はピットの覆土に包含されていた鉢型土器の破片である。14 は、口唇部に横位に浅いきざみが施され、口縁部がくの字状に内反し、三本の平行沈線がめぐらされている。15 は、口縁部に 3 本の平行沈線がめぐり、第 2、第 3 沈線間に刻みが施されている。17 は、耳せんで覆土下層から出土した完形品である。高さ 2.5㎝、長径 3㎝、中央径 1㎝、短径 2㎝で一方向がオチョボ口状にすぼまった環状耳せんである。全面に朱がみられ、比較的調整、焼成とも良好である。18 は石棒の一部で耳せんとともに覆土下層から出土した。現存長 25㎝、長径 3㎝、短径 2㎝、石材は粘板岩で、非常にもろい。胴部上方に沈線がめぐり、表面に朱がぬられている。

第 35 号ピット（第 138 図）

ピットはＪ－9－5 区に所在し、口径 82 × 63㎝、底径 162 × 152㎝、深さ 78㎝でプランは楕円形を呈したフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第 1 層黒褐色土、第 2 層褐色土、第 3 層黄褐色土、第 4 層黒褐色土、第 5 層暗褐色土、第 6 層褐色土、第 7 層褐色土、第 8 層黒褐色土。第 140 図－10 に示した粗製鉢型土器である。きめの細い縄文が全面に施され、口唇部に浅いきざみがみられる。色調は黒褐色を呈し、調整、焼成とも不良である。このピットも最下層がマウンド状に堆積しているのが見られる。

第 39 号ピット（第 138 図）

ピットは、Ｊ－9－10 区に所在し、口径 135 × 125㎝、底径 155 × 135㎝、深さ 90㎝でプランはほぼ楕円形を呈している。形態は現存形が円筒形を呈しているが、覆土内にロームの落ち込みが見られることから、くずれ落ちたことと思われ、原形はフラスコ状ピットであったと考えられる。覆土層位状況は次の如くである。第 1 層黒色土、第 2 層灰褐色土、第 3 層茶褐色土、第 4 層茶褐色土、第 5 層黄褐色土、第 6 層灰褐色土、第 7 層黒褐色土、第 8 層茶褐色土、第 9 層黒褐色土、第 10 層茶褐色土、第 11 層褐色土、第 12 層灰褐色土、第 13 層黒褐色土、第 14 層茶褐色土、第 15 層茶褐色土、第 16 層黄褐色土、第 17 層茶褐色土、第 18 層茶褐色土、第 19 層黒褐色土、第 20 層粘土ブロック、第 21 層褐色土。第 139 図－3、4、5 に示した土器で、3 はピット底面に

おかれており、4と5は、2個重ねにされていた。3は粗製のコップ状の土器で、調整はなされていない。4は、鉢型土器で口唇部に細かい刻みが施され、口縁部がくの字状に内反し、三本の沈線がめぐり最上線に刻みが見られ、胴部には縦位の縄文が施文されている。内面には口縁部に一本の沈線が施され、炭化物の付着も認められる。5は、鉢型土器で口唇部に細い刻みが施され、口縁部に三本の沈線がめぐり胴部には縦位の縄文が施文されている。内面には炭化物の付着が認められる。

第44号ピット（第138図）

ピットはH－9－24区に所在し、口径143×120㎝、底径160×145㎝、深さ60㎝でプランはほぼ楕円形のフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第1層暗褐色土、第2層褐色土、第3層橙褐色土、第4層黒褐色土、第5層黒褐色土、第6層黒褐色土、第7層赤褐色土、第8層橙褐色土。第140図－8に示した土器は、ピット内から横位に出土した粗製の鉢型土器で、口縁部がくの字に外反し口唇部が小波状を呈している。胴部には、比較的粗い縄文が施文されている。ピットの最下層がマウンド状に堆積し、その上にベニガラの混在も認められた。

第59号ピット（第138図）

ピットはH－8－7に所在し、口径110×105㎝、底径151×138㎝、深さ98㎝でプランはほぼ円形を呈するフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の如くである。第1層黒褐色土、第2層明褐色土、第3層黒褐色土、第4層明褐色土、第5層明褐色土、第6層暗褐色土、第7層褐色土、第8層暗褐色土、第9層暗褐色土、第10層暗橙色土。第139図－6に示した土器は、底面より横位の状態で出土した鉢型土器である。口唇部に細かい刻みをもち、口縁部に三本の平行沈線をめぐらせ、沈線下に、所謂S字状突起を施している。胴部には、縦位の縄文が施文されている。口縁部内面には一本の沈線が施され、炭化物の付着も認められる。

第84号ピット（第138図）

ピットはJ－8－4に所在し、口径92×85㎝、底径150×145㎝、深さ97㎝でプランは円形を呈したフラスコ状ピットである。覆土層位状況は次の通りである。第1層黒褐色土、第2層暗褐色土、第3層暗褐色土、第4層暗褐色土、第5層明褐色土、第6層暗褐色土、第7層明褐色土、第8層暗褐色土、第9層黒褐色土、第10層黒褐色土、第11層黒褐色土、第12層明褐色土、第13層明褐色土、第14層黒褐色土。第140図－11、13に示した土器は覆土内から出土した鉢型土器で、11は口唇部に刻みをもち、口縁部がくの字状に内反し、二本の平行沈線がめぐりS字状突起が配されている。胴部には、ほぼ縦位の縄文が施文され、底部付近にも沈線が施されている。口縁部内面にも一本の沈線がめぐらされている。13は、口唇部に刻みをもち口縁部に三本の平行沈線がめぐり、胴部が施文されている。このピットも最下層がマウンド状に堆積している。

2．小括

晩期の遺構は調査区域内ではピット（土壙）以外に検出されなかった。このことは晩期における蛍沢遺跡の性格を考える上で大きな意義がある。即ち住居跡など日常生活に伴う遺構が検出されなかったことは、本遺跡（晩期における）は日常生活の場でなかったとの仮説ができる。

この時期のピットは計11個検出されたが、未調査の部分もあるため実際はそれを上回る可能性がある。これらのピットに共通している第1点は、ピットはいずれもフラスコ状を呈していることである。本県において晩期にフラスコ状ピットが検出されたのはこれまでの調査で報告例がなく、本遺跡が最初のようである。これは縄文晩期遺跡におけるこれまでの調査が、遺物包含地が主体であったことに機縁しているかも知れない。共通の第2点はピットの内部に完形土器を包蔵しているものが多いことである。土器の位置はピット内の比較的上部にあるものと、底面あるいは底面から若干浮いているものがある。ピット内の上部に包蔵されているものは別として、ピットを南北を軸として分けた場合、底面および底面近くの土器はすべて南北線から西側に包蔵されている共通性がある。更に第3点は3個所のピットで底面直上の堆積土にベンガラの混在が認められることである。これら３点の共通点と特徴および完形土器が包蔵されていなかった第32号ピットから石刀及び耳飾りが出土したことなどからフラスコ状ピットの性格を考えれば、墓壙説が有力と思われる。

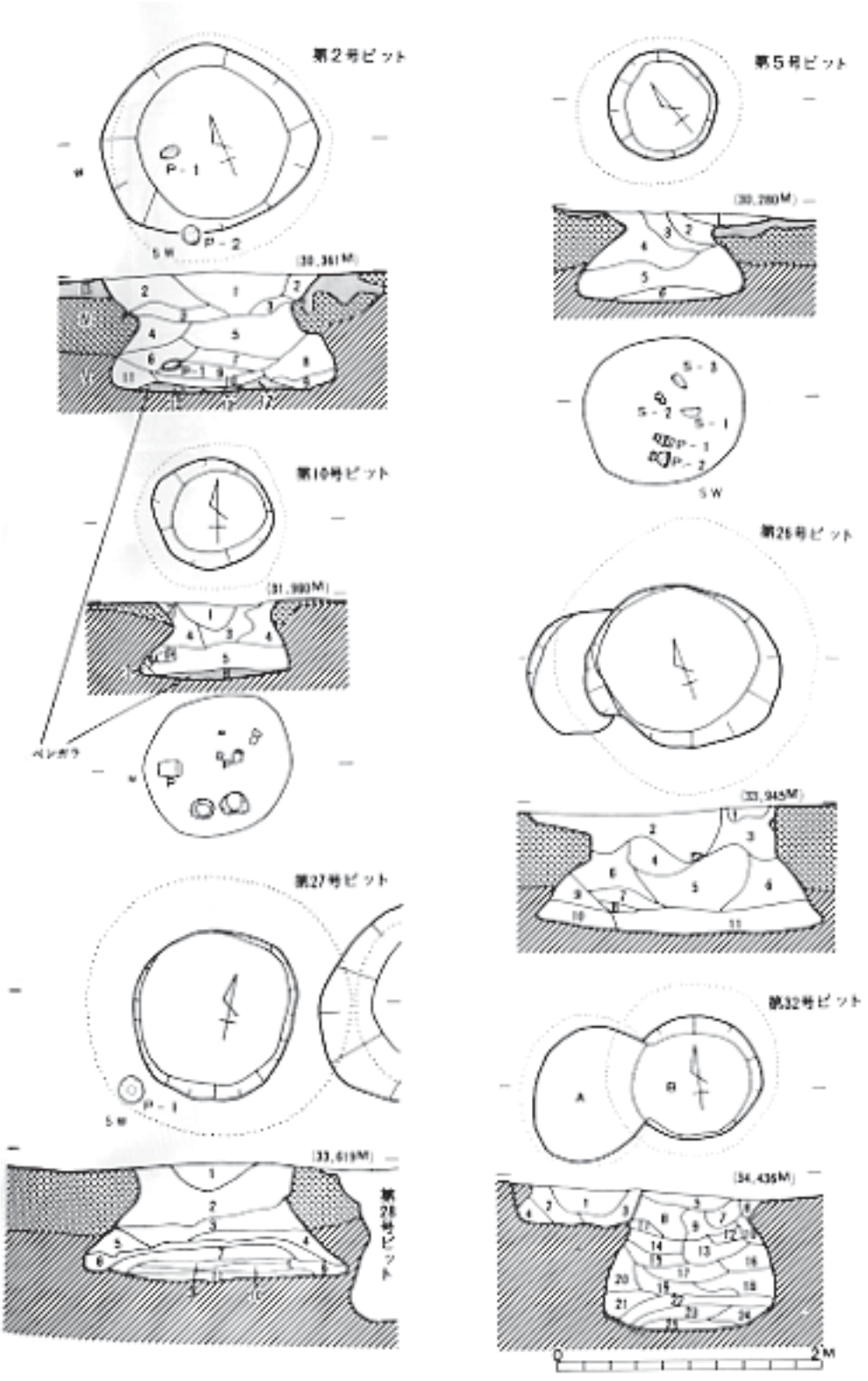
それぞれのピットから出土した土器からその時期を想定してみるならば、第5号ピットの2個の土器は大洞Ｂ－Ｃ式期、第26号・第27号・第32号・第39号・第59号・第84号のピットから出土した土器はいずれも大洞C_2式期に想定されるものである。第10号・第35号・第44号のピットから出土した縄文のみの土器と、第2号ピットの広口壺形土器の型式名は不明であるが、少なくとも前者二式のいずれかに所属するものと思われる。蛍沢遺跡の周辺で縄文式晩期の土器が出土する遺跡は4個所あり、玉清水Ⅰ・Ⅱ遺跡（大洞Ｂ式～C_2式）（註1）、月見野Ⅱ遺跡（大洞B_1式）、沢山Ⅰ号遺跡（大洞Ａ式～Ａ´式）（註2）があげられる。もし仮説の通り蛍沢遺跡（晩期における）が墓地遺跡とするならば玉清水Ⅰ・Ⅱ遺跡に関係がありそうである。ちなみに玉清水遺跡は蛍沢遺跡から南東方の尾根を隔てた約1㎞の所に位置している。

晩期中葉の土壙墓は北海道の木古内町札刈遺跡（註3）で多数発見されており、内部に完形土器や石刀などを包蔵している共通点はあるが、ピットの形態は長方形ないしは長円形で、形態上は共通性を欠いている。

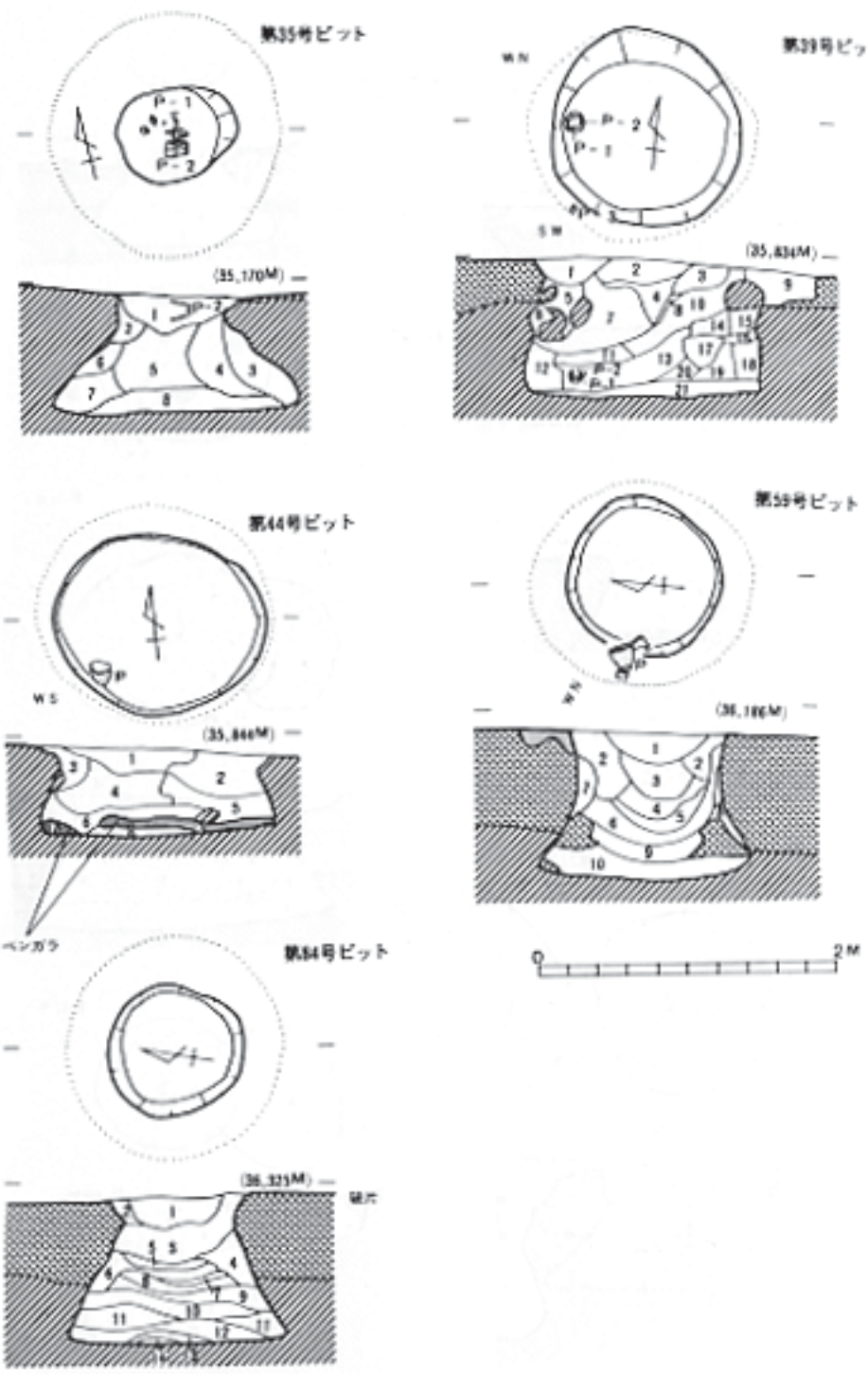
本県の場合フラスコ状の出現はいつ頃になるかは不明であるが、蛍沢遺跡においては早期にすでに見られるし、中期以降後期にかけて多く認められている。しかしその性格を裏付ける積極的な資料に乏しいのが現状である。底面近くの堆積土にベンガラの混在が認められたピットは平賀町小金森遺跡（註4）で検出されており、改葬甕棺墓に伴なったものであり、この時期から土壙墓としての性格が濃厚になってきている。このことから本県において晩期までフラスコ状ピットが存続していることは伝統的なものであると考えられる。

以上縄文式晩期における蛍沢遺跡は性格上墓地遺跡的要素が濃厚である。したがってピット内部に包蔵されていた土器及び他の遺物は副葬品と思われ、土器の特徴から晩期中葉の土壙墓群であろう。　（葛　西　励）

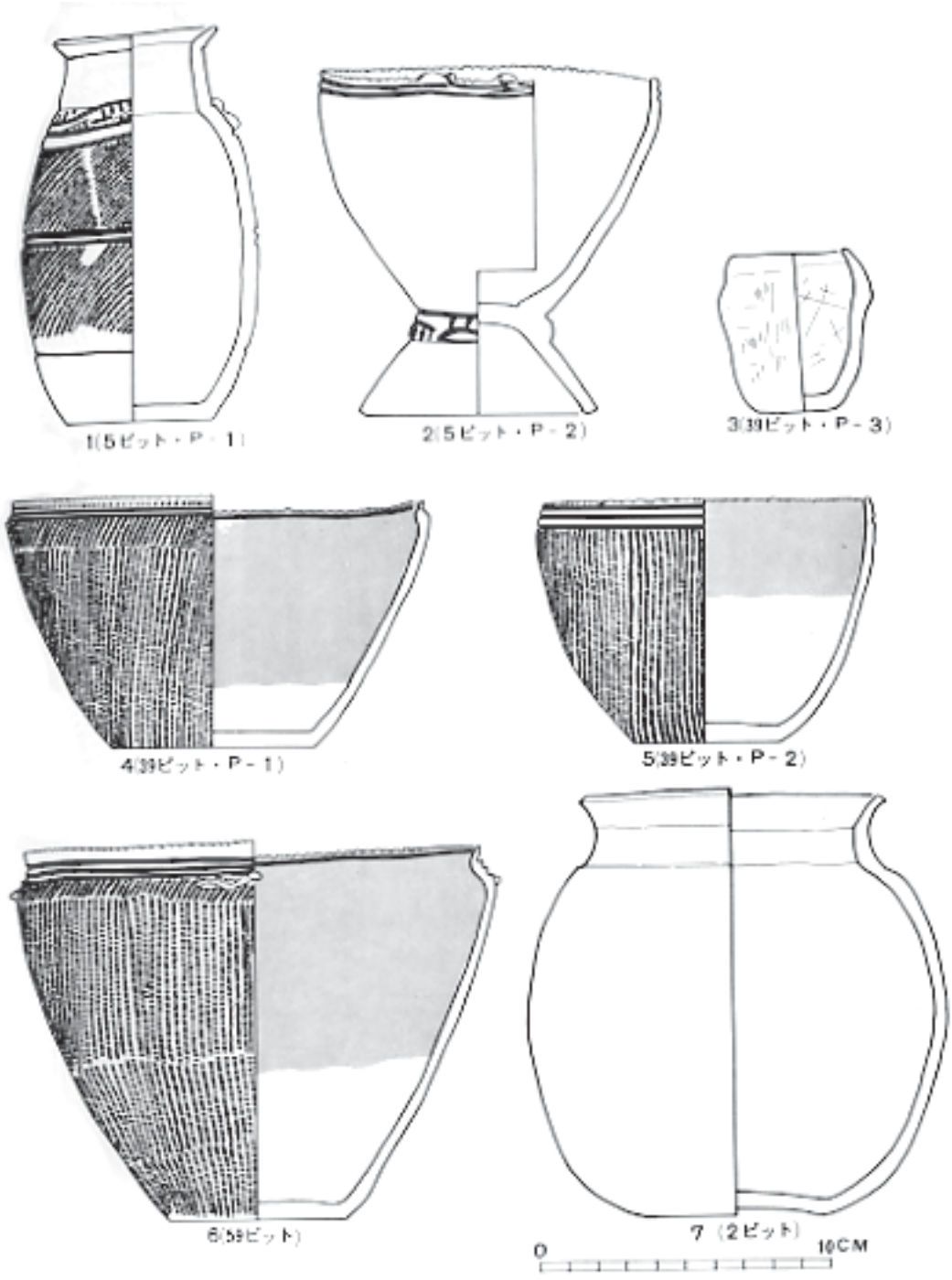
註1　青森市教育委員会
「玉清水遺跡調査概報」 1967
註2　葛　西　励
「青森市沢山Ⅰ号遺跡調査速報」
考古学ジャーナル　32号　1969
註3　野　村　崇　他「札刈」
北海道開拓記念館　1976
誌4　葛　西　励
「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」
平賀町教育委員会　1974



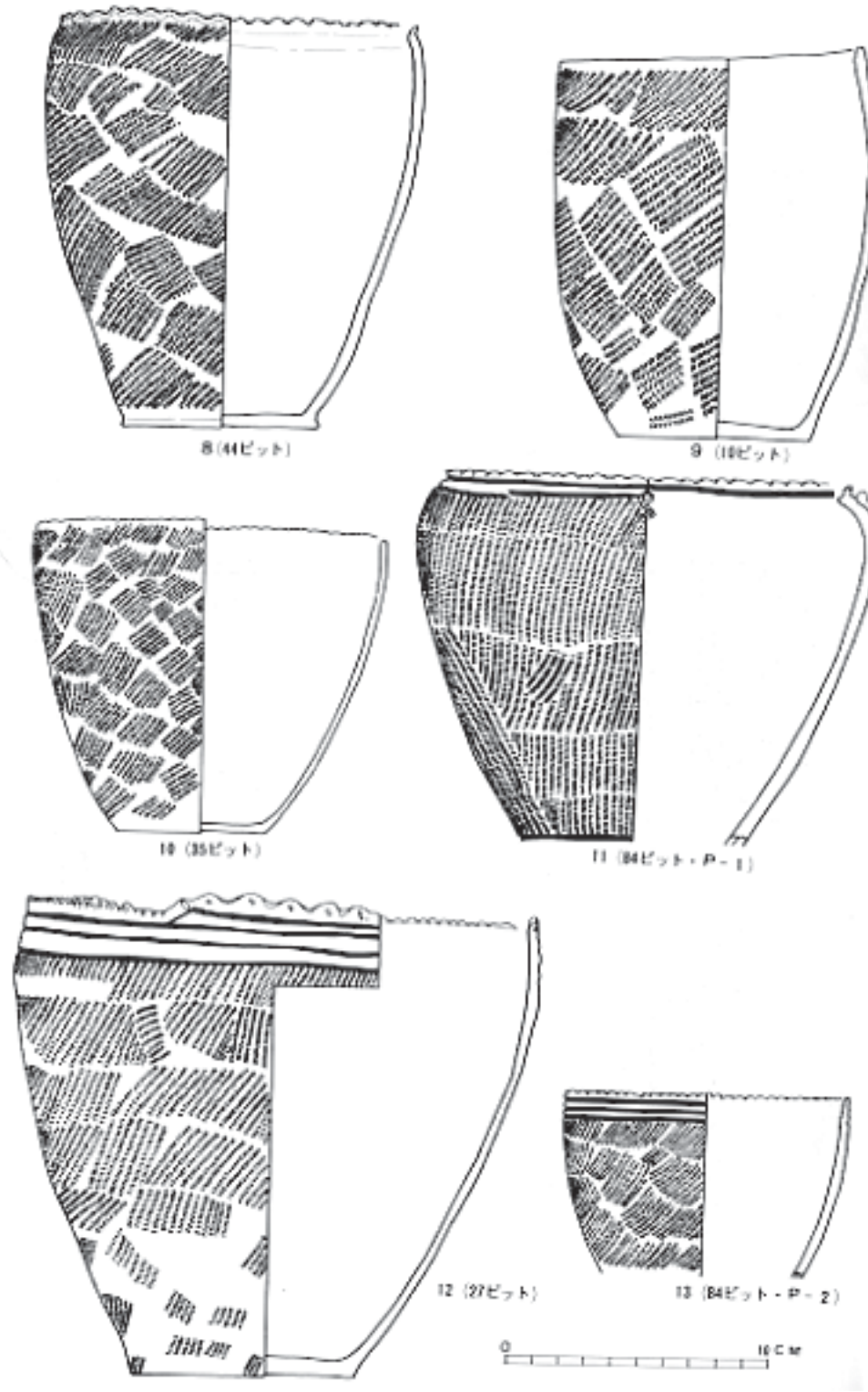
第 137 図　ピット実測図



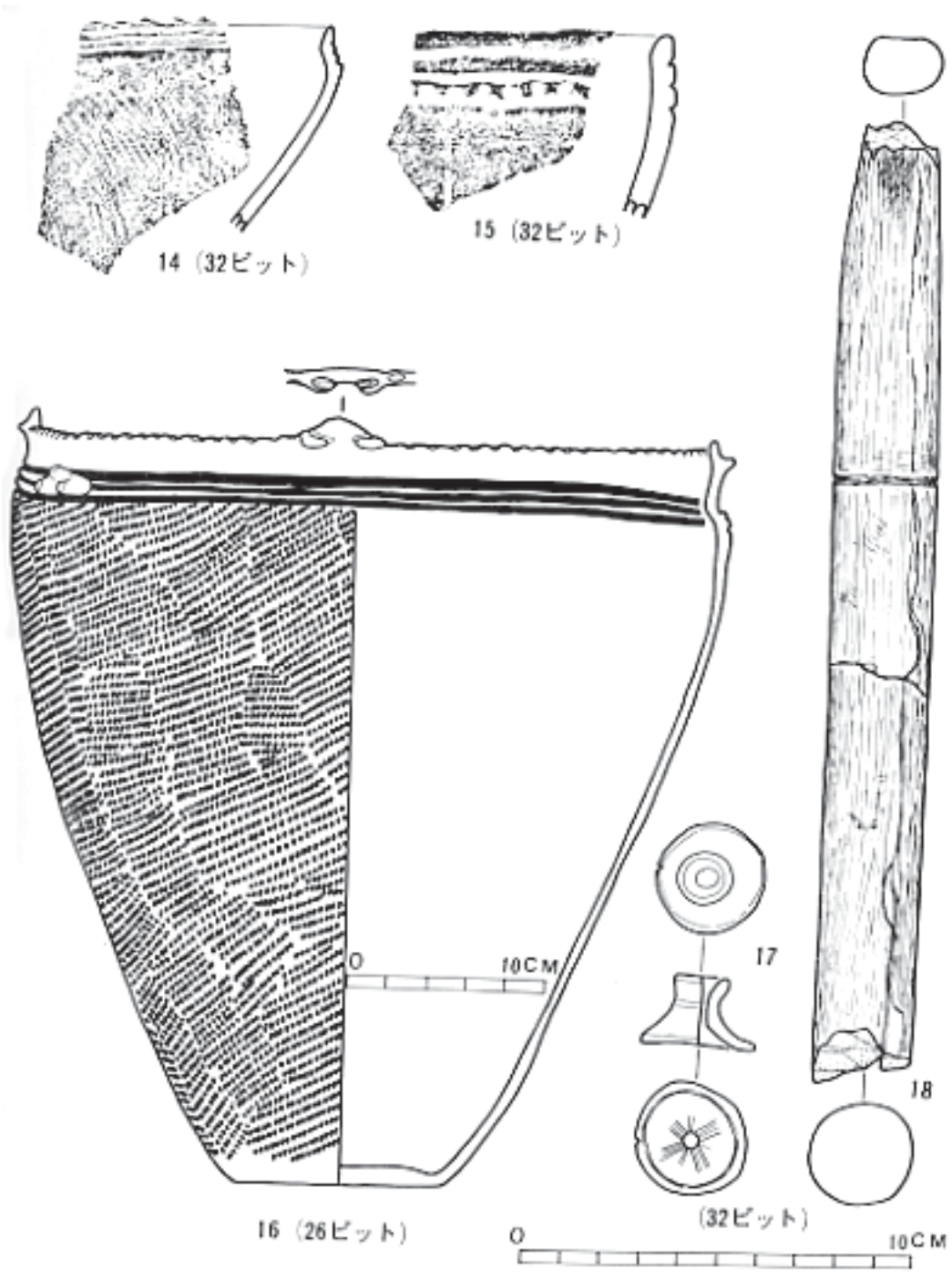
第 138 図　ピット実測図



第 139 図　出土遺物実測図



第 140 図　出土遺物実測図



第 141 図　出土遺物実測図

第 27・28・29 号ピット（縄文後期初頭）

第 27 号ピット　縄文晩期(土器出土状態)

第 30 号ピット

第 32 号ピット（縄文晩期）

第 39 号ピット（縄文晩期）

図版 48　ピット遺構

図版 49　縄文晩期出土土器

第8章　縄文時代・中・後・晩期・石器・石製品
（第142～167図）

本遺跡出土の石器・石製品は一部遺構に伴出したものを除けばそのほとんどは時期不明のものでここに一括掲載した。種類としては、石鏃・石槍・石錐・石匕・篦状石器・不定形石器・打製石斧・擦切石斧・磨製石斧・敲打石・擦り石・石錘・くぼみ石・半磨製石斧・石棒・三角形岩版・円盤状石製品・岩版・有孔石製品・石皿・石冠・半円形状石冠・砥石など400点ほど出土している。中でもくぼみ石が一番多く、次いで不定形石器（刃器）・石錘のようである。石質は石鏃・石鎗・石錐・石匕・篦状石器・不定形石器は硬質頁岩・硅質頁岩がほとんどで、若干松脂岩のものが含まれている。石斧類は打製が硬質頁岩・花崗閃緑岩・粘板岩・凝灰岩・シルト岩と種類が多いのに対して、磨製は、粘板岩・花崗閃緑岩・安山岩・石英安山岩などで特に安山岩系のものが多いようである。敲打石・擦り石・石錘などは安山岩が非常に多く使用されているが、浮石質凝灰岩・安山岩質凝灰岩・凝灰岩・石英安山岩質凝灰岩・石英安山岩・花崗岩・粗粒玄武岩なども使われている。最も多く出土したくぼみ石は擦り石と併用されたものも多数あり、石質は凝灰岩・安山岩系がその割合のほとんどで、凝灰岩・安山岩質凝灰岩・安山岩・石英安山岩・浮石質凝灰岩・石英安山岩質凝灰岩などがあり、若干シルト岩も含まれている。その他はケイソウ岩・ヒスイ・角礫凝灰岩などがある。

これらの石器・石製品は遺物包含層が非常に薄く幾時期もの複合（縄文時代全時期）のため時期が確定できないものがほとんどである。しかし、次のもののように時期の制約を出来るものもある。図142－2・図145－89などの松脂岩を素材とした石器は縄文時代後期初頭に多く使われているものである。また、図153－184～187の半円形状石冠は縄文中期に普遍的に見られる石器である。しかし、その時代特有の何らかの特徴があれば時期推定も可能なわけであるが、実際伴出土器がなければ困難なことであることは言うまでもない。

本稿もそうであるが、報告書掲載の石器・石製品を見るとほとんどが単なる形態別の羅列にとどまり置き、生活用具の一つとしての石器の研究が足踏み状態を続けているのが現状のようである。自分自身への反省も含め、活発なる資料分析研究を期待するものである。

（藤田亮一）

1. 石器計測表（第144～166図）

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
1	石鏃	J－8	表土	18	12	2	珪質頁岩	1
2	〃	表採		27	10	5	〃	346
3	〃	I－9	II	34	9	6	松脂岩	3
4	〃	K－7	〃	36	12	4	硬質頁岩	284
5	〃	表採		33	16	9	〃	211
6	〃	M－15	II	38	18	6	珪質頁岩	194
7	〃	L－14	表土	42	16	4	硬質頁岩	2
8	〃	E－7	〃	46	15	7	〃	5
9	〃	表採		29	18	6	珪質頁岩	261
10	〃	〃		35	16	7	〃	260
11	石槍	M－5	表土	53	23	5	硬質頁岩	4
12	〃	N－15		59	22	9	〃	109
13	〃	L－14	III	80	33	10	〃	44
14	石錐	E－7	表土	61	32	10	珪質頁岩	111
15	〃	M－5	〃	53	32	8	〃	117
16	石匕	J－9		72	45	8	硬質頁岩	186
17	〃	K－3	表土	79	26	8	珪質頁岩	17
18	〃	J－6	II	60	27	7	〃	8
19	〃	D－6	表土	90	20	13	〃	10
20	〃	K－3	〃	66	17	6	〃	18
21	〃	J－2		59	16	7	〃	380
22	〃	K－3		77	26	7	〃	236
23	〃	F－8	II	92	27	8	〃	493
24	〃	M－13－16	表土	27	44	7	〃	9
25	〃	D－4		27	41	5	〃	255
26	〃	O－4	表土	37	62	10	珪質頁岩	6
27	〃	J－9－13		43	81	9	〃	15
28	〃	L－10		44	65	10	硬質頁岩	241
29	篦状石器	C－6	表土	47	19	10	珪質頁岩	25
30	〃	K－3	〃	58	18	8	硬質頁岩	43
31	〃	I－5		51	16	7	〃	187
32	〃	M－5	表土	44	30	10	珪質頁岩	115
33	石匕	E－7	〃	66	19	7	〃	13
34	〃	D－6	〃	80	9	6	〃	11

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
35	篦状石器	E－7	表土		46	41	10 硬質頁岩	114
36	〃	K－6	〃	54	33	15	〃	33
37	〃	F－7		60	40	8	〃	216
38	〃	K－3	表土	60	31	12	珪質頁岩	29
39	〃	F－8	Ⅱ	44	25	7	〃	344
40	〃	L－8	Ⅱ上	50	35	15	〃	24
41	〃	G－8		56	40	9	硬質頁岩	389
42	〃	H－8		57	32	11	珪質頁岩	266
43	不定形石器	K－9	Ⅱ	59	44	11	硬質頁岩	35
44	〃	K－3	表土	40	52	10	珪質頁岩	19
45	〃	E－7	〃	52	45	10	硬質頁岩	34
46	〃	E－8	〃	43	30	8	珪質頁岩	38
47	〃	C－8	〃	49	47	14	硬質頁岩	121
48	〃	E－7	〃	60	43	10	珪質頁岩	119
49	〃	G－8		53	43	9	〃	370
50	〃	C－5		76	43	13	硬質頁岩	239
51	〃	E－7	表土	47	52	16	〃	118
52	〃	F－7	〃	75	40	9	〃	124
53	〃	E－7	〃	49	42	12	〃	122
54	〃	K－9	〃	65	39	11	〃	120
55	〃	表採		66	38	8	珪質頁岩	355
56	〃	K－8	表土	60	39	9	〃	129
57	〃	M－5	〃	50	30	12	硬質頁岩	123
58	〃	F－7		56	36	11	珪質頁岩	200
59	〃	I－9	表土	73	37	9	〃	203
60	打製石斧	L－7	〃		71	38	19 硬質頁岩	28
61	不定形石器	F－7		46	43	18	〃	201
62	〃	F－6	Ⅱ	40	48	15	〃	372
63	〃	J－4	Ⅲ	82	50	10	〃	390
64	打製石斧	K－4	表土		80	54	25 〃	36
65	不定形石器	D－5		66	60	17	〃	278
66	〃	K－9	表土	80	57	10	珪質頁岩	41
67	〃	K－9	〃	78	50	15	硬質頁岩	40
68	〃	O－4	〃	85	52	16	〃	127
69	〃	G－9		60	50	17	〃	371
70	〃	K－8	Ⅱ	96	40	12	硬質頁岩	126

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
71	不定形石器	H － 10	表土	90	22	8	硬質頁岩	112
72	〃	L － 8	〃	83	33	10	〃	16
73	〃	I － 9	〃	79	30	14	〃	202
74	〃	E － 8	〃	76	33	9	〃	37
75	〃	F － 8	Ⅱ	52	19	5		350
76	〃	I － 10	表土	70	24	10	硬質頁岩	21
77	〃	E － 8	〃	73	29	8	〃	39
78	〃	K － 12	〃	69	39	6	〃	110
79	〃	N － 13	〃	58	23	9	〃	32
80	〃	G － 8	〃	72	31	12	珪質頁岩	113
81	〃	K － 8	〃	56	22	11	硬質頁岩	22
82	〃	I－5－23	Ⅲ	62	29	11	〃	7
83	〃	M － 5	表土	67	21	9	〃	358
84	〃	H － 5		38	40	5	珪質頁岩	345
85	〃	K － 8	Ⅱ	38	31	8	硬質頁岩	125
86	〃	J － 4	〃	33	32	6	珪質頁岩	381
87	〃	J－9－13		83	57	12	硬質頁岩	14
88	〃	K － 9		41	89	12	〃	238
89	〃	L － 6	表土	31	57	20	松脂岩	369
90	〃	K － 3	〃	54	45	5	硬質頁岩	116
91	〃	D － 5		78	45	14	〃	217
92	〃	E － 7		93	50	10	〃	279
93	〃	K － 9	表土	122	47	6	〃	12
94	〃	表採		127	72	18	〃	367
95	〃	K － 8	Ⅱ	68	75	15	〃	31
96	打製石斧	C － 5	Ⅱ	136	70	33	花崗閃緑岩	57
97	〃	G － 4		111	55	32	硬質頁岩	48
98	〃	H － 8		49	18	7	粘板岩	185
99	〃	F－8－8		54	21	6	凝灰岩	272
100	〃	E － 8	表土	61	36	24	硬質頁岩	56
101	〃	F － 8	〃	57	61	12	〃	52
102	〃	E － 7	〃	50	38	17	〃	47
103	〃	F － 8	Ⅱ	53	38	9	シルト岩	264
104	〃	E － 7	表土	46	48	18	硬質頁岩	51
105	〃	M － 15	〃	113	26	16	粘板岩	49
106	〃	D － 6		111	57	31	〃	375

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
107	擦切石斧	F－8	Ⅱ		61	19	16 粘板岩	343
108	磨製石斧	Ⅰ－9	表土		56	44	9 〃	204
109	〃	E－8－17	Ⅱ	67	37	22	花崗閃緑岩	45
110	〃	K－10	〃	72	50	26	〃	50
111	〃	F－7	表土	55	31	24	安山岩	53
112	〃	F－8	〃	145	57	30	石英安山岩	471
113	〃	Ⅰ－10	〃	116	41	25		54
114	〃	E－8	〃	140	52	30	石英安山岩	470
115	〃	〃	〃	130	50	28		55
116	〃	D－5	〃	108	47	27	石英安山岩	46
117	〃	L－6		151	55	26	花崗閃緑岩	260
118	三角形岩版	J－9		83	72	9	凝灰岩	276
119	円盤状石製品	F－8	Ⅱ	57		9	シルト岩	492
120	岩版	K－8	〃	61	33	10	凝灰岩	302
121	三角形岩版	F－8－2		36	45	13	ケイソウ上	686
122	〃	O－13	表土	45	55	11	凝灰岩	262
123	円盤状石製品	F－8－8		47		9	〃	265
124	〃	K－10	表土	53		11	安山岩	81
125	〃	F－6	〃	50		8	シルト岩	82
126	〃	C－6	〃	39		9	〃	78
127	〃	D－4		51		10	凝灰岩	254
128	〃	Ⅰ－9	表土	41		8	シルト岩	80
129	〃	C－5	〃	53		13	凝灰岩	79
130	〃	F－8	〃	50		6	〃	182
131	〃	D－7		56		7	安山岩	341
132	岩版	E－8	表土	48	52	5	凝灰岩	192
133	〃	F－8	表採	55	52	9	〃	87
134	〃	J－10		45		8	安山岩質凝灰岩	379
135	〃	J－13		46	55	9	石英安山岩質凝灰岩	189
136	〃	L－3	表土	49	56	14	凝灰岩	85
137	〃	D－5		50	39	9	シルト岩	219
138	〃	C－5	Ⅱ	42	40	10	凝灰岩	374
139	〃	J－2	表土	45	43	6	〃	361
140	〃	E－3		43	40	6	シルト岩	240
141	〃	M－3		90	40	13	〃	242
142	〃	F－8－2	Ⅱ	43	67	6	凝灰岩	84

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
143	岩版	K－3		37	31	6	シルト岩	191
144	〃	L－7	表土	40	26	7	〃	108
145	〃	F－2	〃	47	29	7	〃	373
146	〃	J－11	〃	50	35	8	〃	184
147	〃	K－8	Ⅱ上	75	27	8	凝灰岩	83
148	〃	F－8－2	Ⅱ	71	58	12	〃	107
149	有孔石製品	L－7	表土	47		36	〃	89
150	石皿	F－8－2	Ⅱ	59	55	13	〃	77
151	敲打石	E－7	表土		46	44	浮石質凝灰岩	67
152	〃	〃	〃		48	49	安山岩	68
153	有孔石製品	K－8	Ⅱ上	110	58	8	〃	71
154	岩版	O－4	表土	61	37	12	シルト岩	518
155	有孔石製品	B－6－22			11	10	ヒスイ	88
156	〃	B－5		49	35	7	安山岩	258
157	石冠	K－15	Ⅱ	74	58	42	シルト岩	193
158	石錘	K－8	〃	45	40	13	安山岩質凝灰岩	282
159	〃	L－12		52	45	9	凝灰岩	340
160	〃	表採		62	50	16	〃	263
161	〃	J－10	表土	47	45	7	安山岩	135
162	〃	K－5		61	52	20	石英安山岩質凝灰岩	274
163	〃	L－6	表土	73	58	24	凝灰岩	363
164	〃	L－7	〃	65	50	15	〃	134
165	〃	K－6	Ⅱ上	75	56	16	〃	132
166	〃	H－10	表土	75	51	19	石英安山岩質凝灰岩	65
167	〃	K－6	Ⅱ上	69	58	11	凝灰岩	133
168	〃	K－8	〃	61	60	16	凝灰岩	64
169	〃	C－8	Ⅱ	62	50	12	〃	281
170	〃	H－10	表土	70	52	12	凝灰岩	327
171	〃	K－3	〃	69	59	14	〃	136
172	〃	I－2	〃	73	68	23	安山岩	66
173	〃	表採		54	50	14	凝灰岩	365
174	〃	H－5		88	80	16	石英安山岩	283
175	〃	C－8	表土	66	66	9	安山岩	131
176	〃	表採		67	44	11	〃	364
177	〃	〃		137	43	25	凝灰岩	349
178	〃	G－8	表土	100	78	30	〃	137

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
179	石錘	J－8		195	73	13	〃	296
180	擦り石	H－8		155	70	53	安山岩	526
181	石錘	B－4		140	48	44	〃	288
182	擦り石	K－7		102	70	63	安山岩	386
183	石錘	H－3		115	110	35	凝灰岩	388
184	半円形状石冠	L－14	Ⅱ	122	69	53	石英安山岩	151
185	〃	L－15	表土	110	73	49	〃	62
186	〃	O－4	〃	120	74	39	安山岩	61
187	〃	L－12		113	59	41	〃	366
188	擦り石 くぼみ石	B－5	表土	130	91	53	〃	96
189	〃	J－3		136	74	67	〃	384
190	〃	E－8		128	70	53	〃	139
191	〃	I－10	表土	128	72	50	〃	57
192	擦り石	E－6		105	70	46	〃	383
193	擦り石 くぼみ石	D－5	表土	112	70	45	花崗岩	60
194	〃	L－11	Ⅱ	127	80	57	〃	101
195	擦り石	M－14	表土		95	50	安山岩	59
196	〃	K－10	Ⅱ		97	50	〃	385
197	〃	D－5	表土	95	76	51	〃	141
198	〃	L－15	〃	100	75	58	〃	138
199	〃	O－15		103	88	54	〃	339
200	〃	K－5		100	95	63	〃	145
201	〃	L－5	表土	126	107	62	〃	146
202	〃	M－3	〃	120	105	60	花崗岩	149
203		K－7	Ⅰ	111	80	75	粗粒玄武岩	140
204	くぼみ石	K－8			170	75	40 凝灰岩	338
205	〃	C－5	表土	122	64	50	安山岩質凝灰岩	103
206	〃	E－8	〃	118	65	52	〃	98
207	〃	H－9	Ⅱ	136	60	32	凝灰岩	336
208	〃	J－10	表土	147	60	52	石英安山岩	93
209	〃	G－8	〃	148	85	35	凝灰岩	162
210	〃	表採		129	60	23	〃	348
211	〃	〃		122	80	51	安山岩	378
212	〃	C－6		118	40	24	凝灰岩	387
213	〃	E－8	表土	133	58	27	〃	97
214	〃	E－7	〃	136	70	43	〃	174

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
215	くぼみ石	J－10	表土	110	66	28	安山岩	92
216	〃	〃	Ⅱ	137	65	23	〃	335
217	〃	K－5		155	74	22	凝灰岩	275
218	〃	G－9	表土	166	58	35	安山岩質凝灰岩	169
219	〃	J－9		110	50	33	安山岩	334
220	〃	I－10	表土	112	70	24	シルト岩	105
221	〃	H－9	Ⅱ	122	70	26	安山岩質凝灰岩	99
222	〃	J－4	〃	150	50	42	凝灰岩	290
223	〃	L－7	表土	157	56	33	〃	165
224	〃	J－10	〃	160	60	45	安山岩	157
225	〃	I－9	〃	105	53	25	凝灰岩	161
226	〃	K－5	〃	98	72	22	安山岩質凝灰岩	163
227	〃	E－7	〃	94	91	13	シルト岩	75
228	〃	I－10	〃	215	60	32	石英安山岩	106
229	〃	L－3	〃	75	102	31	安山岩質凝灰岩	170
230	〃	I－10	〃	115	73	45	〃	104
231	〃	I－6	〃	103	91	56	安山岩	175
232	〃	F－8	〃	80	63	10	凝灰岩	152
233	〃	K－6	Ⅱ上	85	79	35	安山岩	95
234	〃	I－9	表土	132	94	111	〃	167
235	〃	L－8	Ⅱ上	129	108	32	〃	63
236	〃	M－4		118	47	33	凝灰岩	287
237	〃	K－3	表土	105	71	34	〃	172
238	〃	N－6	〃	143	99	61	〃	102
239	〃	H－6		165	58	44	〃	337
240	〃	I－9	表土	142	90	32	〃	177
241	〃	M－5	〃	122	83	31	石英安山岩	179
242	〃	L－5	〃	99	84	43	凝灰岩	159
243	〃	F－7		113	95	46	安山岩	199
244	〃	G－3	表土	107	99	68	安山岩質凝灰岩	94
245	〃	M－3	〃	146	135	73	凝灰岩	176
246	〃	G－8	〃	104	96	18	シルト岩	173
247	〃	E－4		145	75	28	凝灰岩	286
248	〃	表採		147	71	26	安山岩	160
249	〃	F－8	Ⅱ	116	71	33	〃	342
250	〃	J－10	表土	87	67	27	〃	91

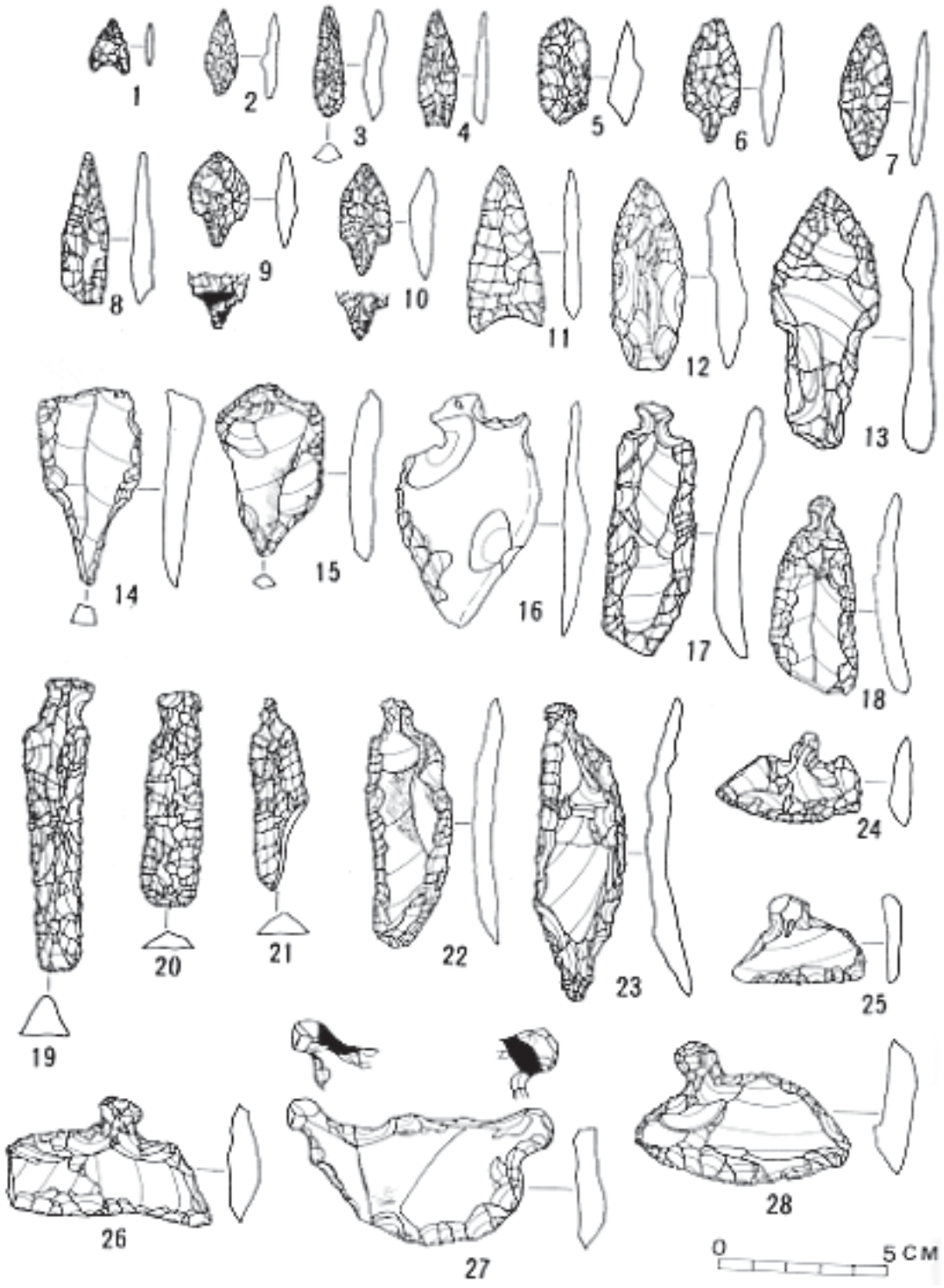
番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（mm）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
251	くぼみ石	J－9	表土			92	37 浮石質凝灰岩	100
252	〃	I－2	〃	120	85	40	凝灰岩	158
253	〃	K－5	〃	85	75	41	安山岩	171
254	〃	K－3	〃	105	95	40	凝灰岩	168
255	〃	D－6		130	95	44	安山岩	289
256	〃	K－9	Ⅱ上	90	80	35	〃	154
257	〃	L－2	表土	111	92	48	凝灰岩	356
258	〃	H－10	〃	129	80	25	〃	166
259	〃	K－9	Ⅱ	127	56	27	〃	153
260	〃	L－15	表土	127	53	25	〃	180
261	〃	L－8	〃	122	69	33	石英安山岩	90
262	〃	B－5	〃	139	70	43	安山岩質凝灰岩	155
263	〃	J－10	〃	113	68	33	石英安山岩質凝灰岩	164
264	〃	K－9	Ⅱ上	113	59	20	凝灰岩	156
265	〃	J－10	Ⅱ	156	51	21	〃	333
266	〃	K－8	表土	195	62	31	〃	178
267	石皿	K－12	〃	151	174	54	〃	76
268	〃	15住居	床面	166	224	64	〃	464
269	砥石	K－11	表土	286	170	116	石英安山岩	520
270	石棒	F－8－23	Ⅱ	244	92	104	安山岩	181
271	石皿	I－10－23	〃	274	202	49	石英安山岩	477
272	くぼみ石	C－5		286	118	42	シルト岩	295
273	石皿	18住居	床面	300	180	94	安山岩	477
274	磨製石斧	30住居	覆土	86	44	26	硬質頁岩	316
275	三角形岩版	32住居	〃	48	41	6	シルト岩	351
276	石匕	〃	覆土	74	28	6	珪質頁岩	315
277	打製石斧	33住居	〃		75	32	17 硬質頁岩	439
278	くぼみ石	30住居	床面		170	43	30 凝灰岩	463
279	磨製石斧	33住居	覆土		106	52	27 安山岩	440
280	石錘	〃	〃	74	65	10	安山岩質凝灰岩	438
281	不定形石器	〃	〃	53	42	19	硬質頁岩	442
282	くぼみ石	〃	〃		140	103	58 安山岩	441
283	擦り石	〃	〃	107	83	47	〃	437
284	くぼみ石	〃	〃		145	47	34 〃	436
285	〃	〃	〃	168	83	36	石英安山岩質凝灰岩	435
286	〃	59住居	〃	142	92	18	凝灰岩	459

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（㎜）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
287	くぼみ石	59 住居	覆土	155	112	39	石英安山岩質凝灰岩	460
288	〃	53 住居	〃	117	103	22	安山岩	329
289	半磨製石斧	10 住居	〃	145	63	38	花崗閃緑岩	462
290	石錐	I－4	II	35	43	7	珪質頁岩	529
291	くぼみ石	33 住居	覆土	136	98	31	凝灰岩	328
292	円盤状石製品	12 住居	〃		43	7	〃	301
293	三角形岩版	5 住居		42	46	5	シルト岩	297
294	石匕	8 住居		50	57	8	珪質頁岩	245
295	三角形岩版	〃		40	42	12	シルト岩	298
296	擦り石 くぼみ石	9 住居		103	75	49	安山岩	405
297	敲打石	〃			102	91	〃	406

2. ピット出土石器計測表（第167～169図）

番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（㎜）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
1	石槍	6ピット		127	39	17	硬質頁岩	475
2	〃	〃		126	36	17	珪質頁岩	474
3	〃	〃		105	33	16	硬質頁岩	473
4	〃	7ピット	覆土	55	19	7	珪質頁岩	455
5	石鏃	15ピット		36	15	6	硬質頁岩	500
6	石匕	110ピット		39	54	8		401
7	〃	〃		53	32	6	硬質頁岩	403
8	〃	74ピット	覆土	65	17	6	珪質頁岩	479
9	不定形石器	6ピット		41	73	8	硬質頁岩	472
10	打製石斧	110ピット			94	38	15 珪質頁岩	402
11	三角形岩版	47ピット	覆土	44	57	7	シルト岩	251
12	〃	74ピット		25	23	9	シルト岩	300
13	岩版	110ピット		23	22	5		404
14	円盤状石製品	105ピット		53	47	10	シルト岩	270
15	岩版	38ピット		49	42	9	凝灰岩	232
16	有孔石製品	3ピット	覆土	51	52	11	〃	487
17	擦り石	74ピット		55	51	41	〃	527
18	石皿	5ピット		117	61	65	石英安山岩	231
19	半円形石冠	6ピット		143	71	53	花崗閃緑岩	476
20	くぼみ石	15ピット			158	60	石英安山岩質凝灰岩	501
21	〃	〃		85	65	51	安山岩	504
22	〃	〃		110	85	28	石英安山岩質凝灰岩	502
23	〃	76ピット		120	75	35	安山岩	498
24	〃	〃		165	67	30	石英安山岩	499
25	石皿	5ピット		228	170	64	〃	230
26	くぼみ石	80ピット			151	95	63 〃	516
27	石鏃	81ピット		31	14	7	珪質頁岩	447
28	打製石斧	〃			53	32	15 硬質頁岩	506
29	不定形石器	〃		53	44	11	〃	505
30	磨製石斧	〃			80	46	31 花崗閃緑岩	509
31	くぼみ石	〃			68	45	18 凝灰岩	507
32	三角形岩版	〃		60	56	12	〃	508
33	石錘	〃		88	56	19	〃	454
34	擦り石	〃		116	75	17	〃	448

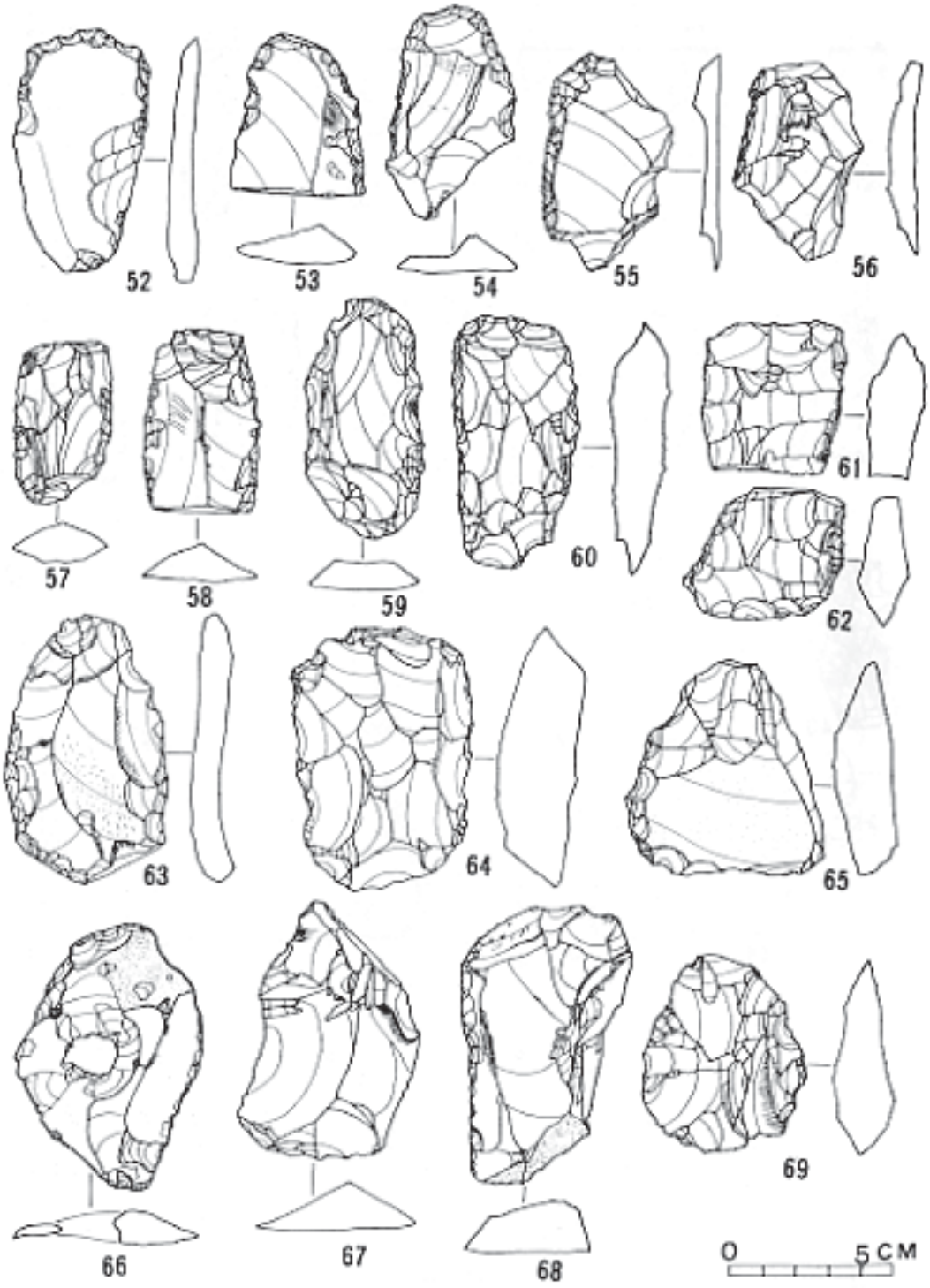
番号	名称（種別）	出土地区	出土層位	計測値（㎜）			石質	整理番号
				最大長	最大幅	最大厚		
35	擦り石	81ピット		104	52	22	安山岩	511
36	くぼみ石	〃		107	63	42	凝灰岩	449
37	〃	〃		120	99	42	石英安山岩質凝灰岩	453
38	〃	〃		135	75	28	〃	450
39	〃	〃		152	85	44	凝灰岩	451
40	〃	〃		135	61	36	〃	515
41	〃	〃		174	44	36	石英安山岩	510
42	〃	〃		128	92	44	角礫凝灰岩	513
43	擦り石	〃		158	88	15	凝灰岩	512


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
5 CM

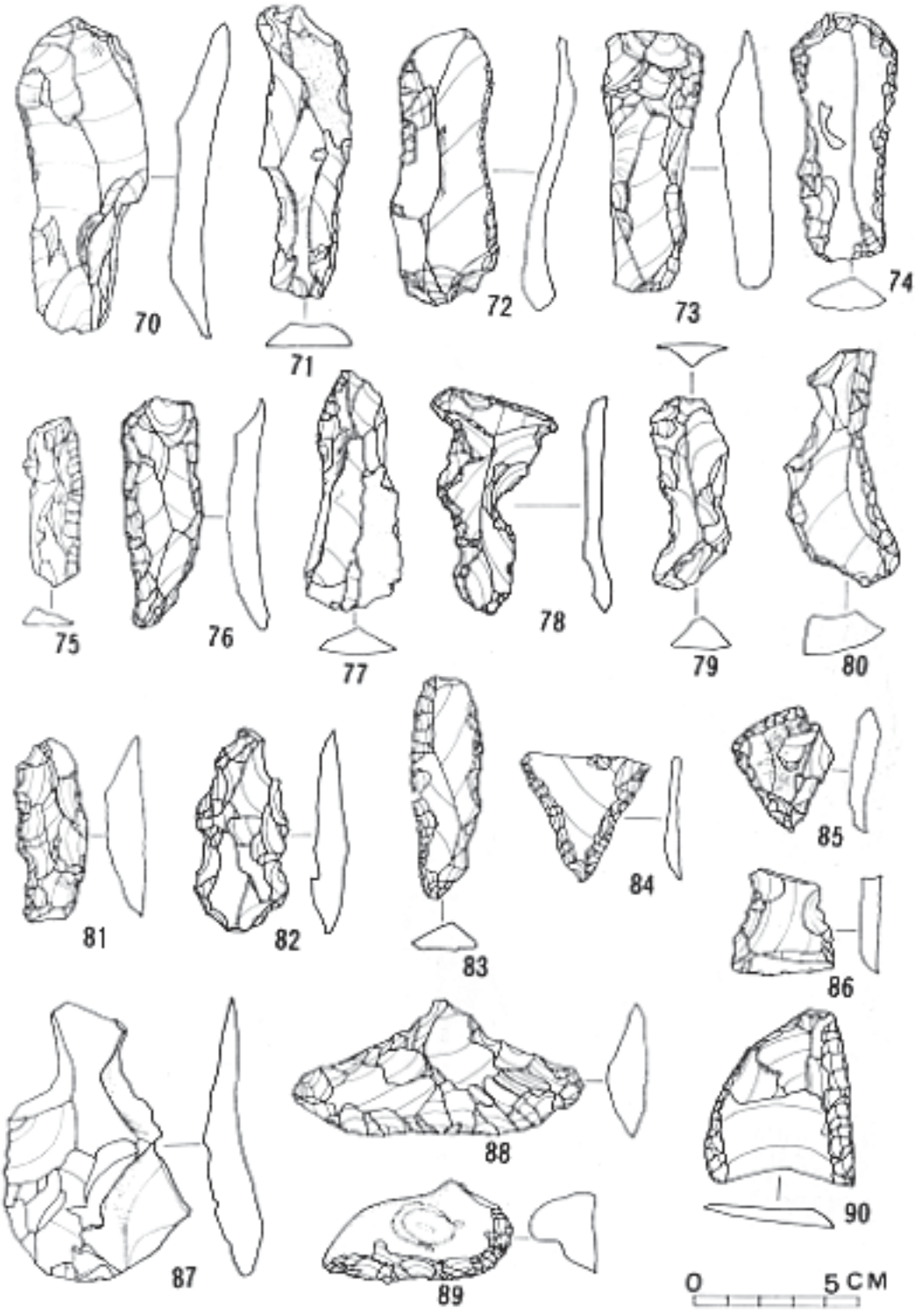
第 142 図　石器実測図

29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
5CM

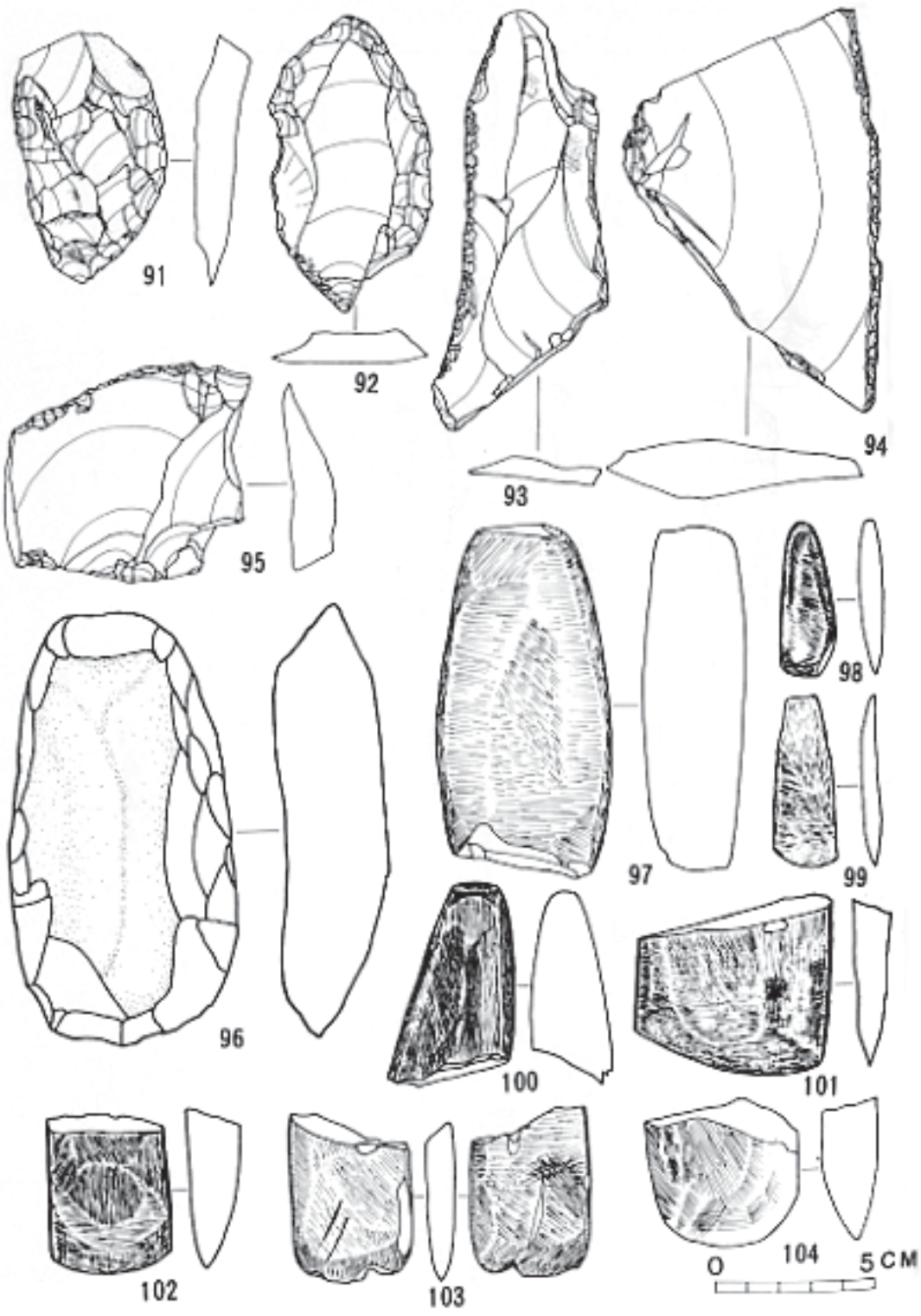
第 143 図　石器実測図



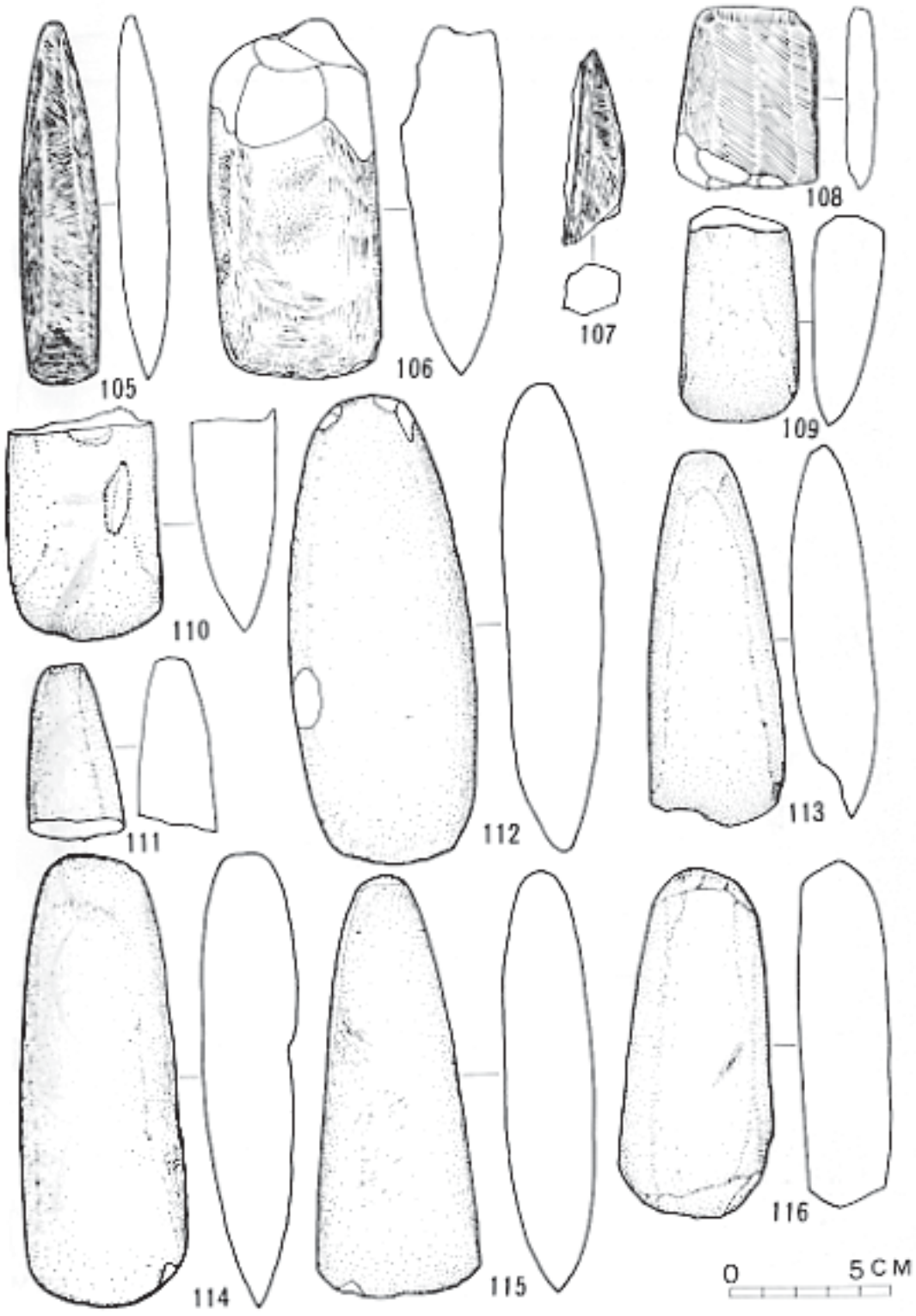
第 144 図　石器実測図



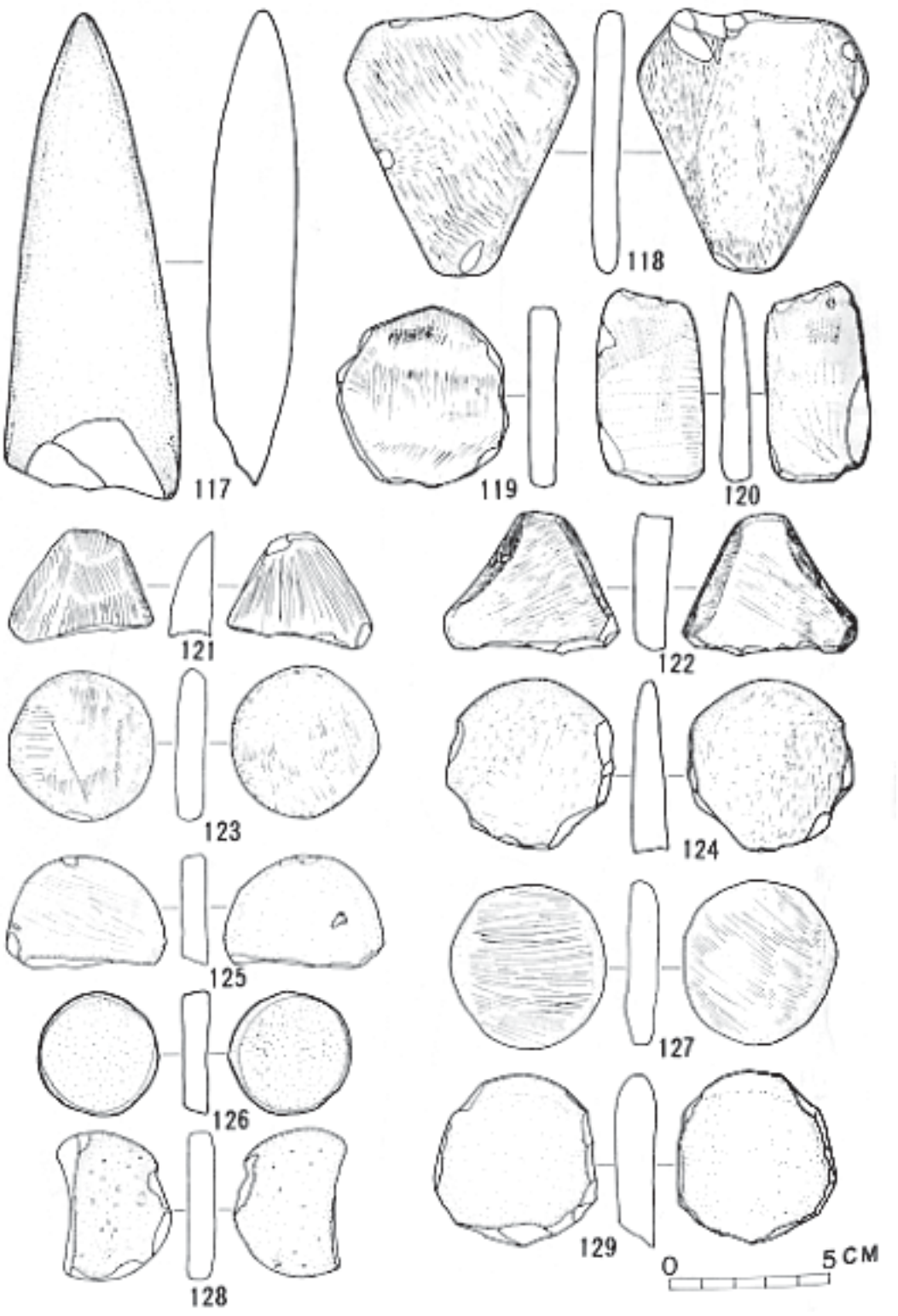
第 145 図　石器実測図



第 146 図　石器実測図



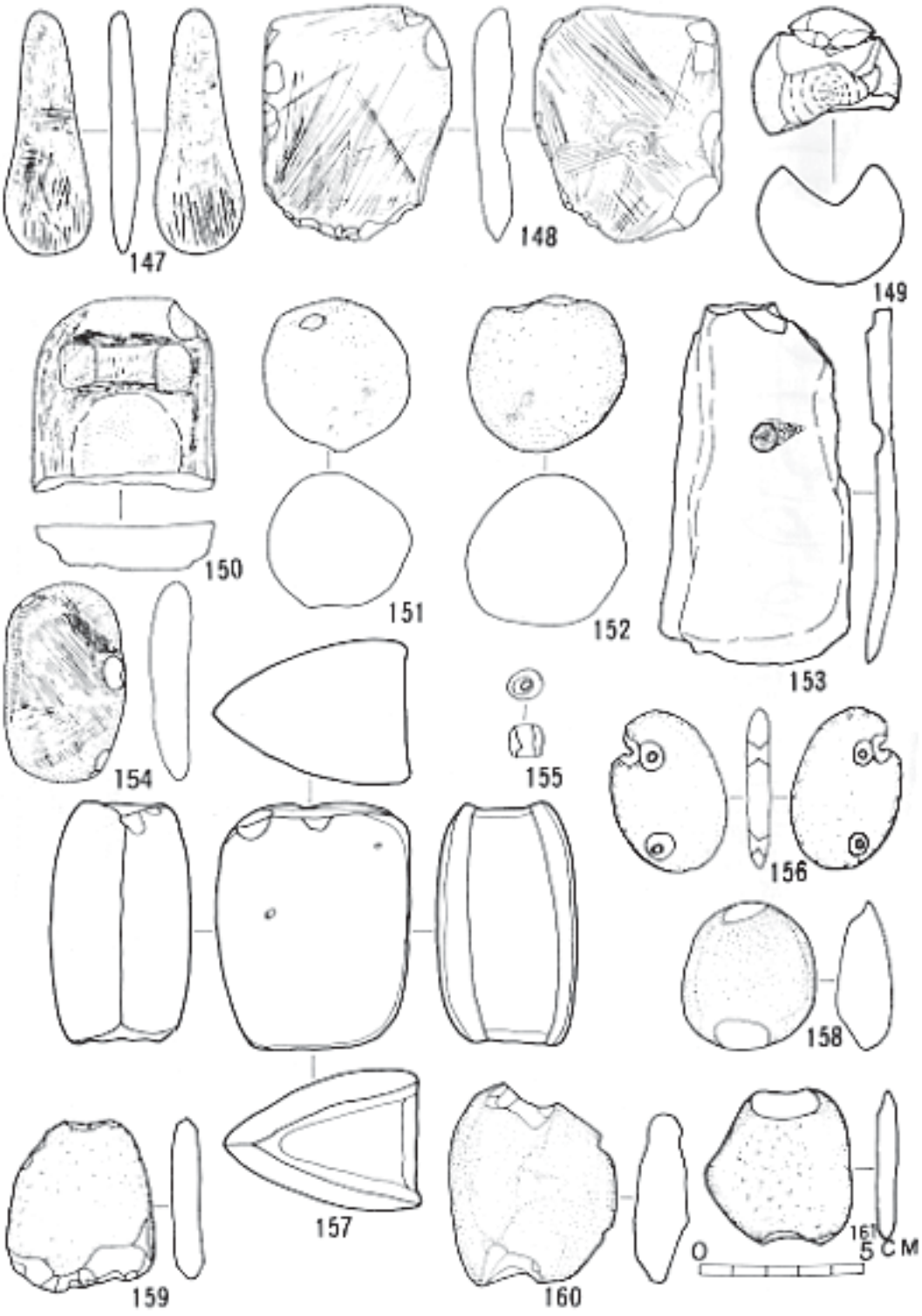
第147図　石器実測図



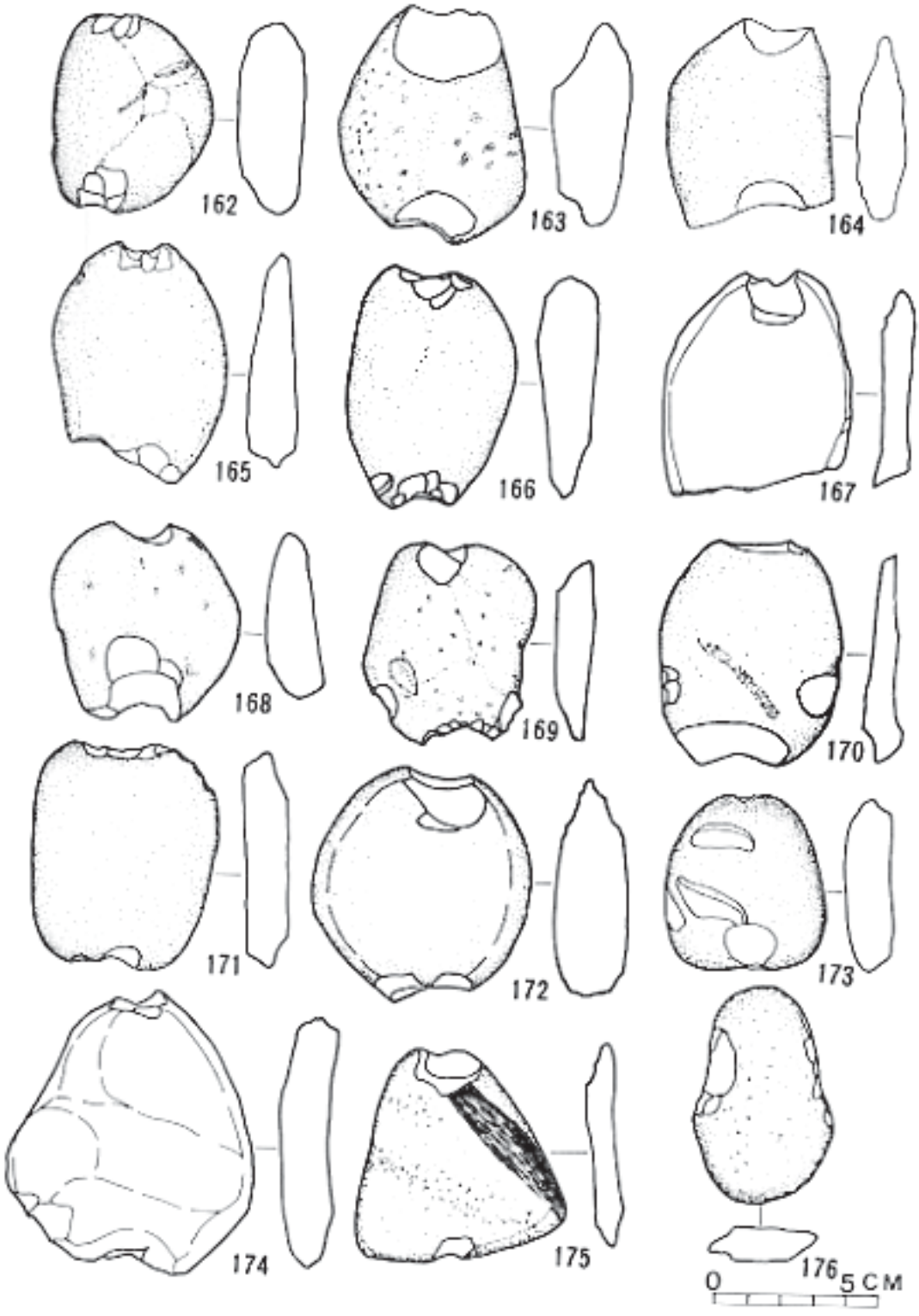
第 148 図　石器実測図

130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
0 5CM

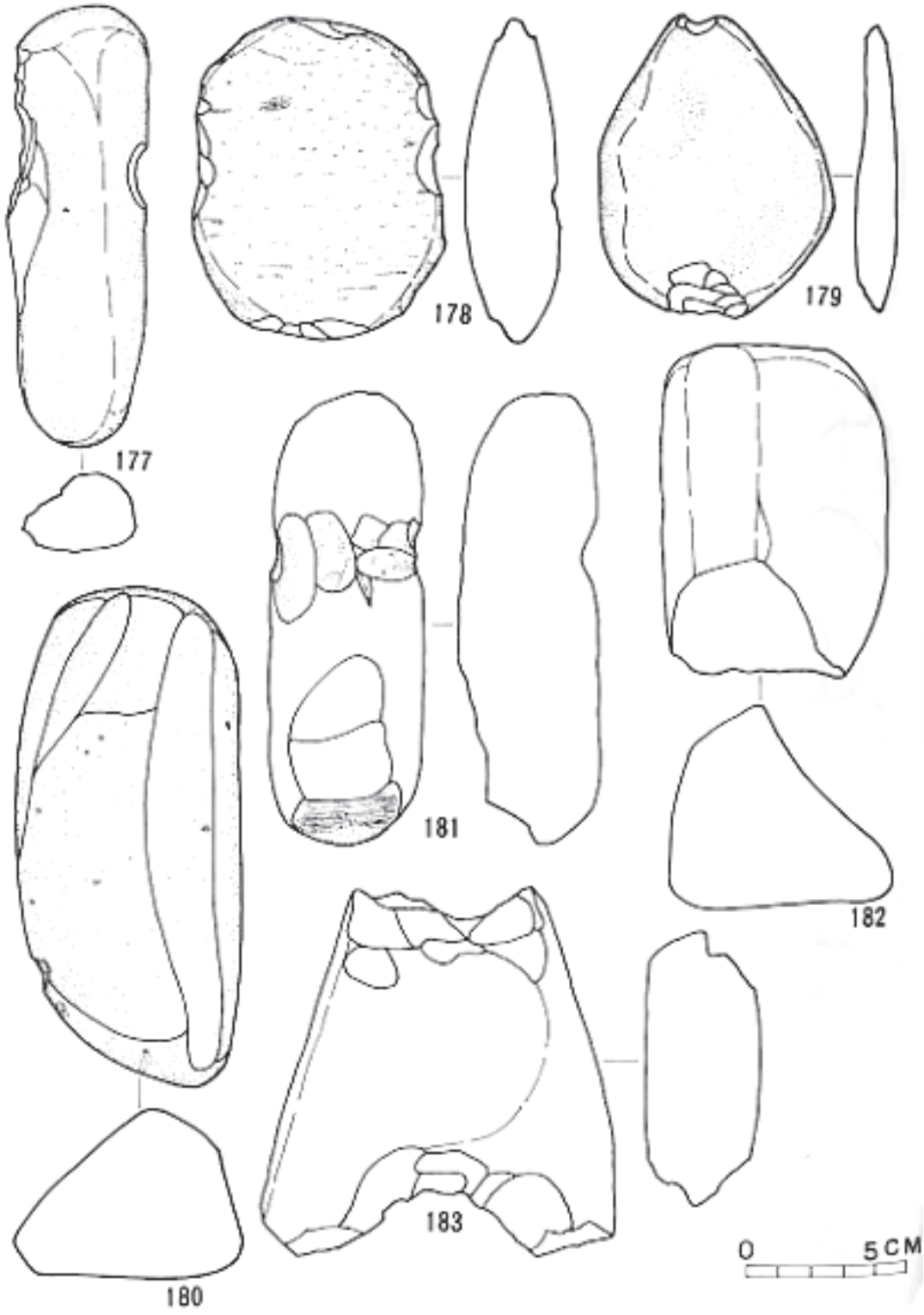
第 149 図　石器実測図



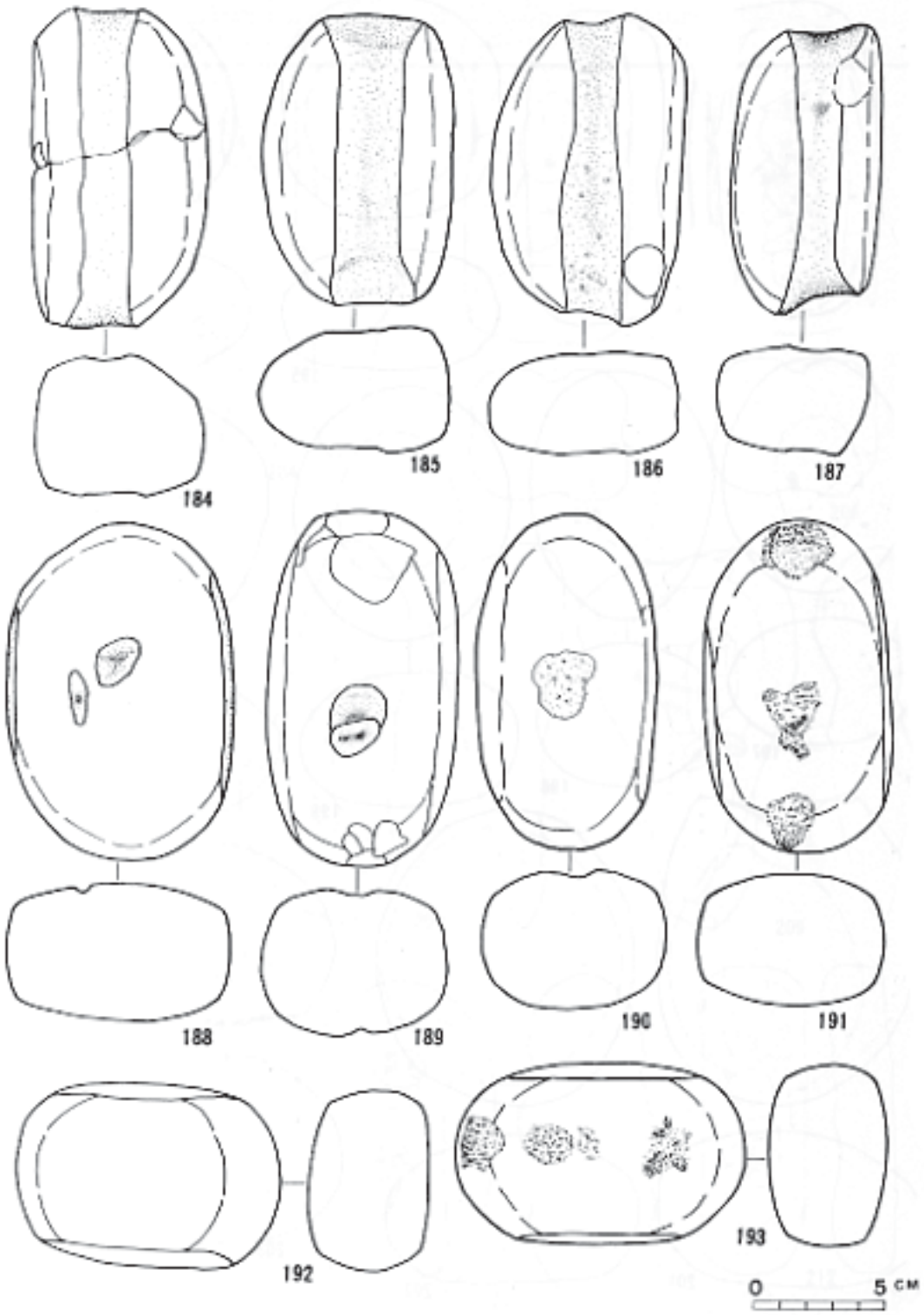
第 150 図　石器実測図



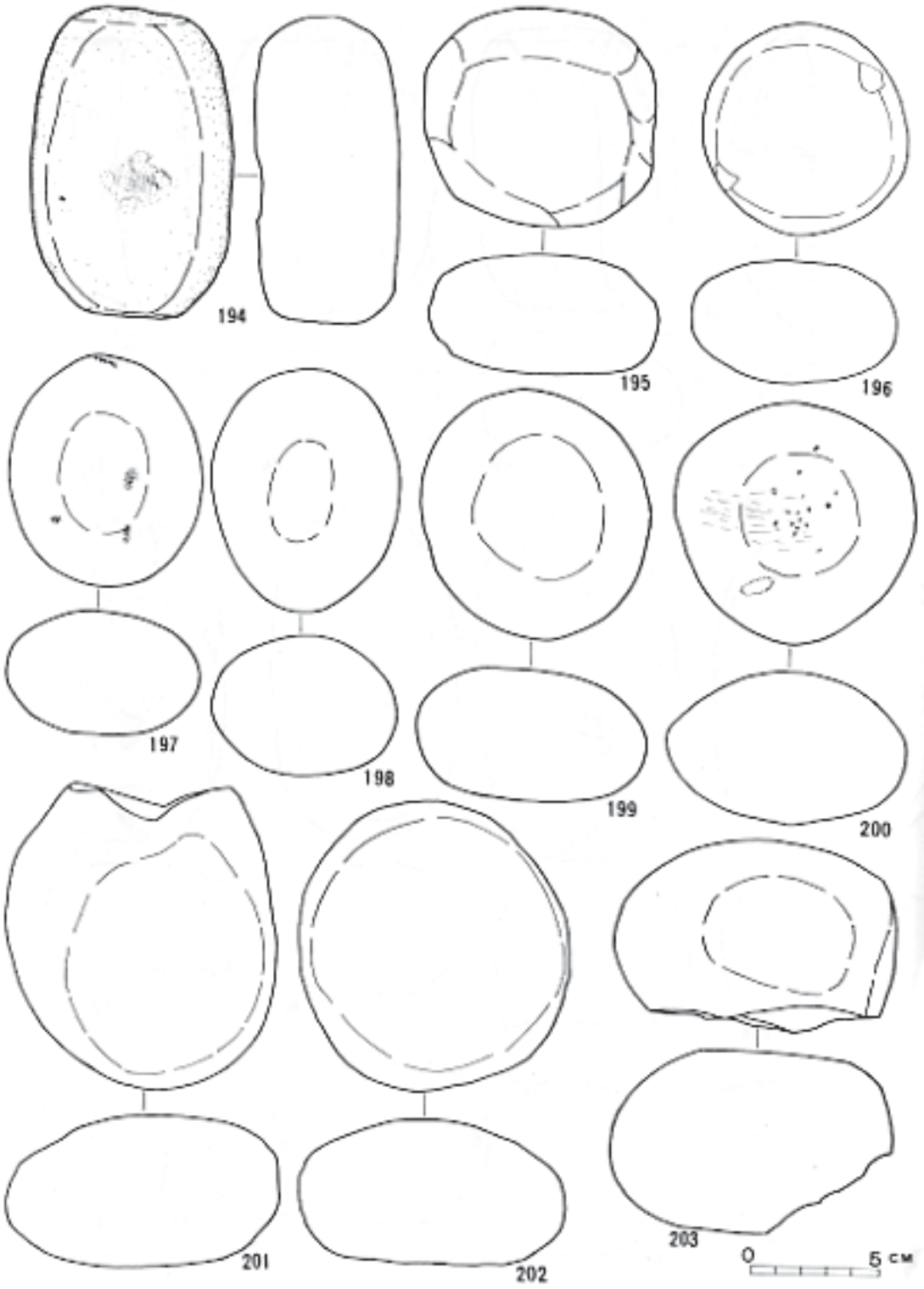
第 151 図　石器実測図



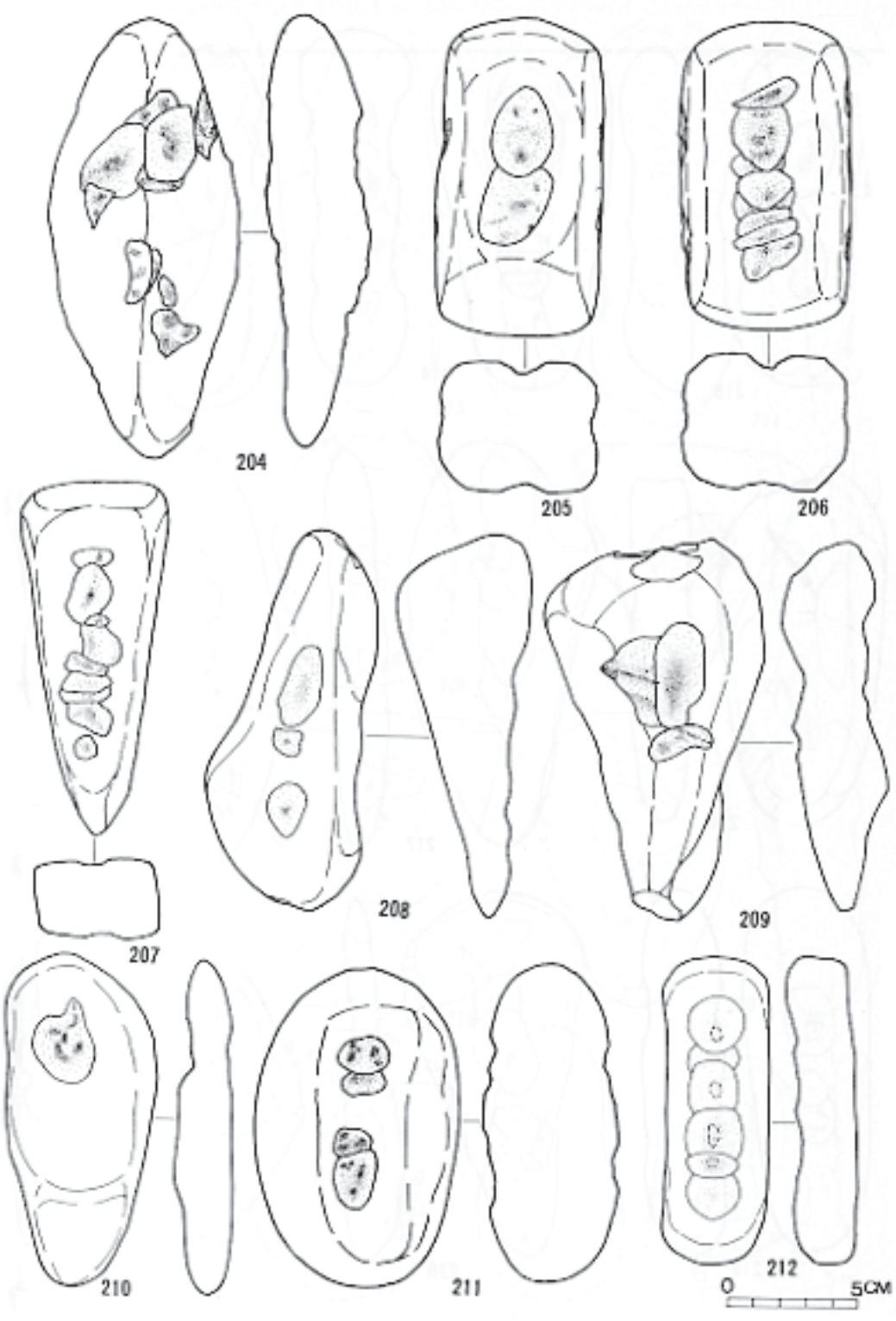
第 152 図　石器実測図



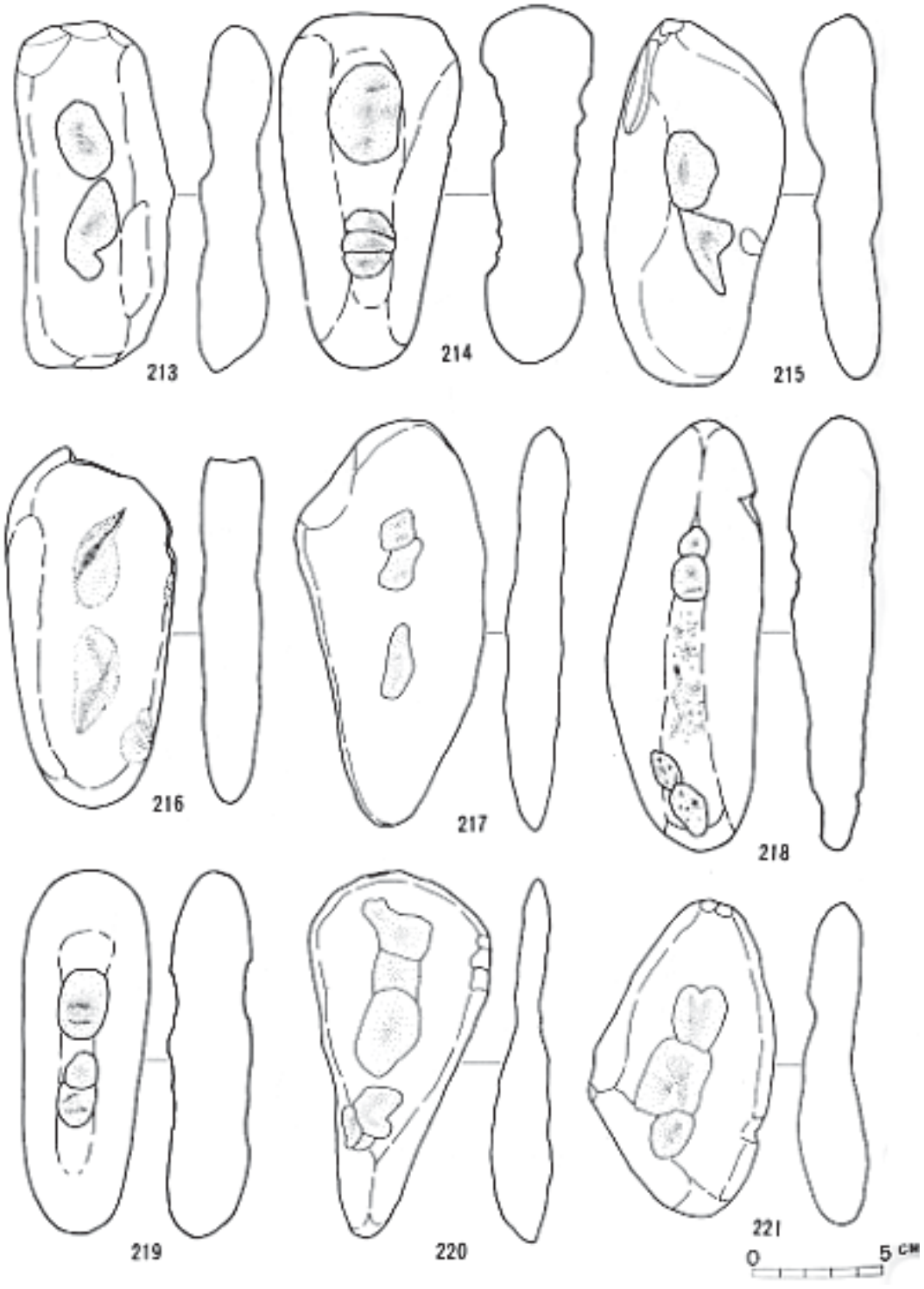
第 153 図　石器実測図



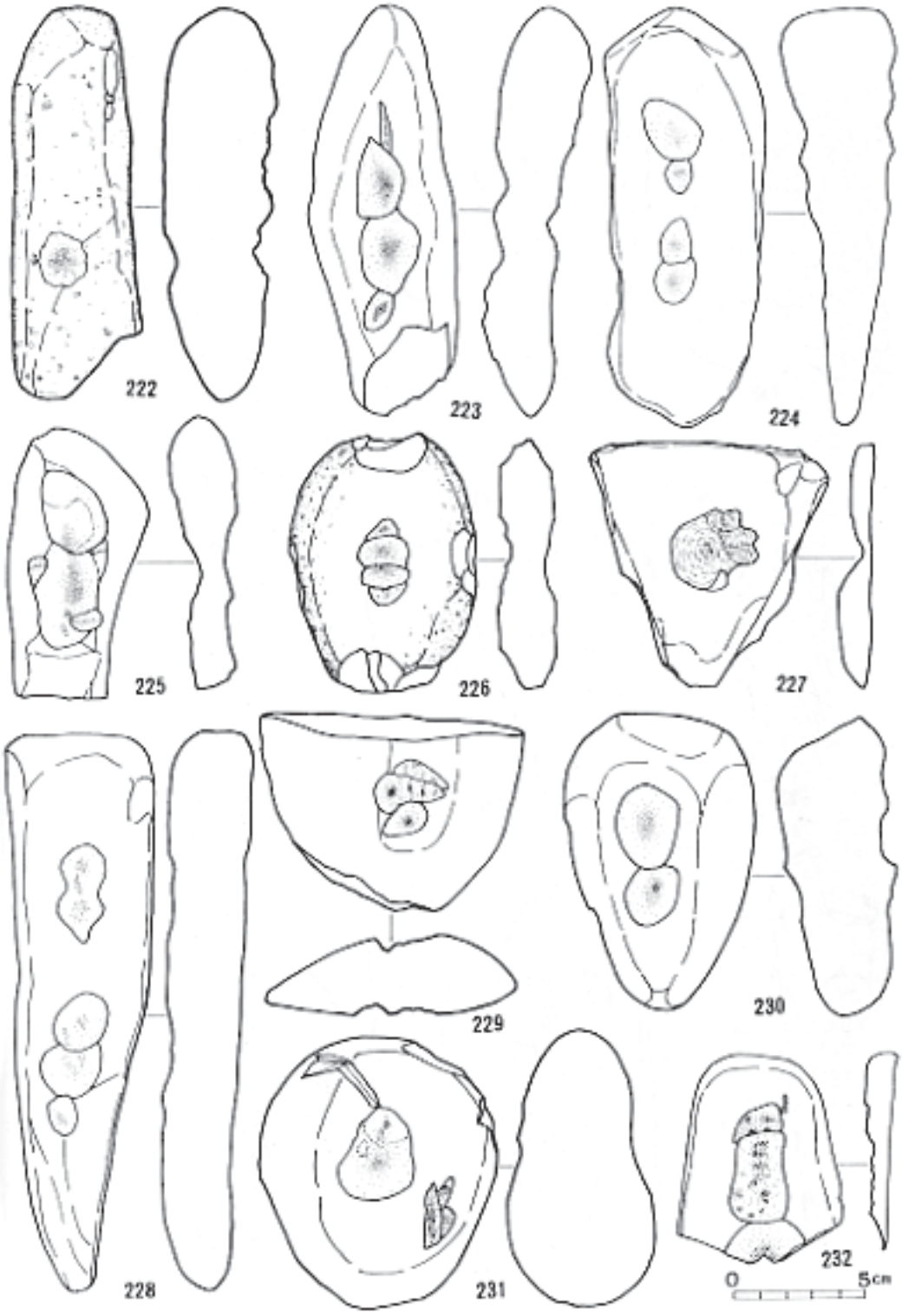
第 154 図　石器実測図



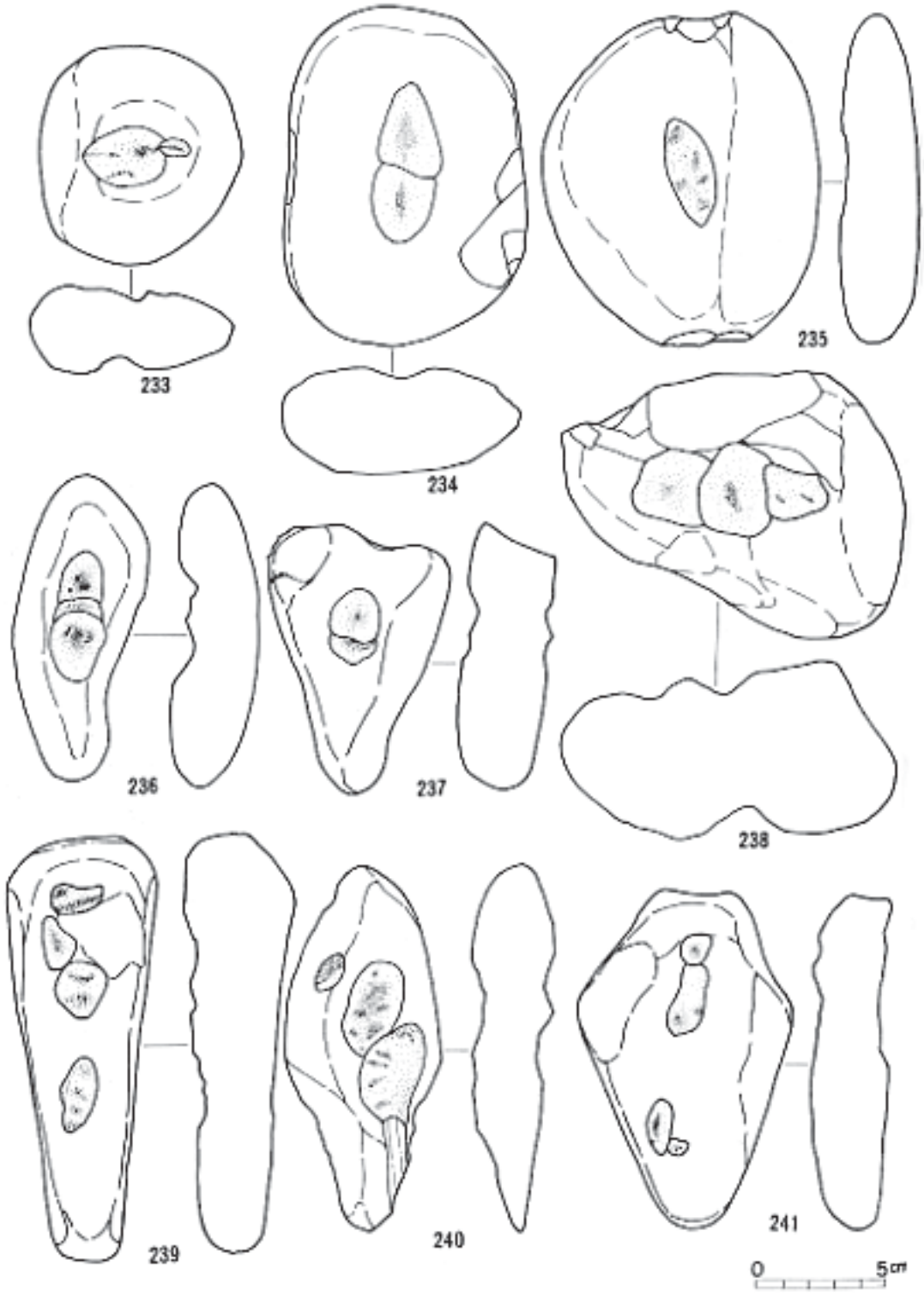
第 155 図　石器実測図



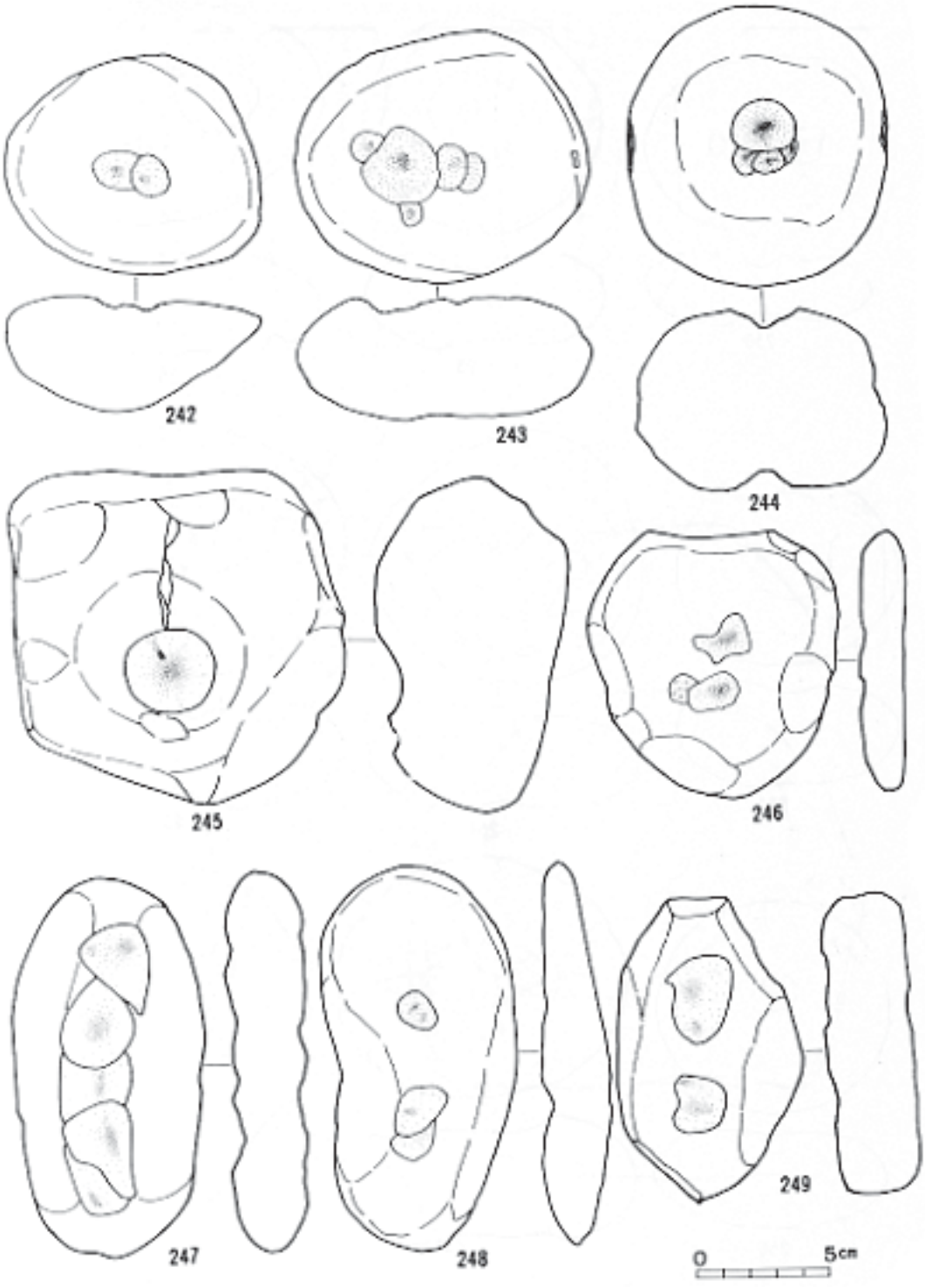
第 156 図　　石器実測図



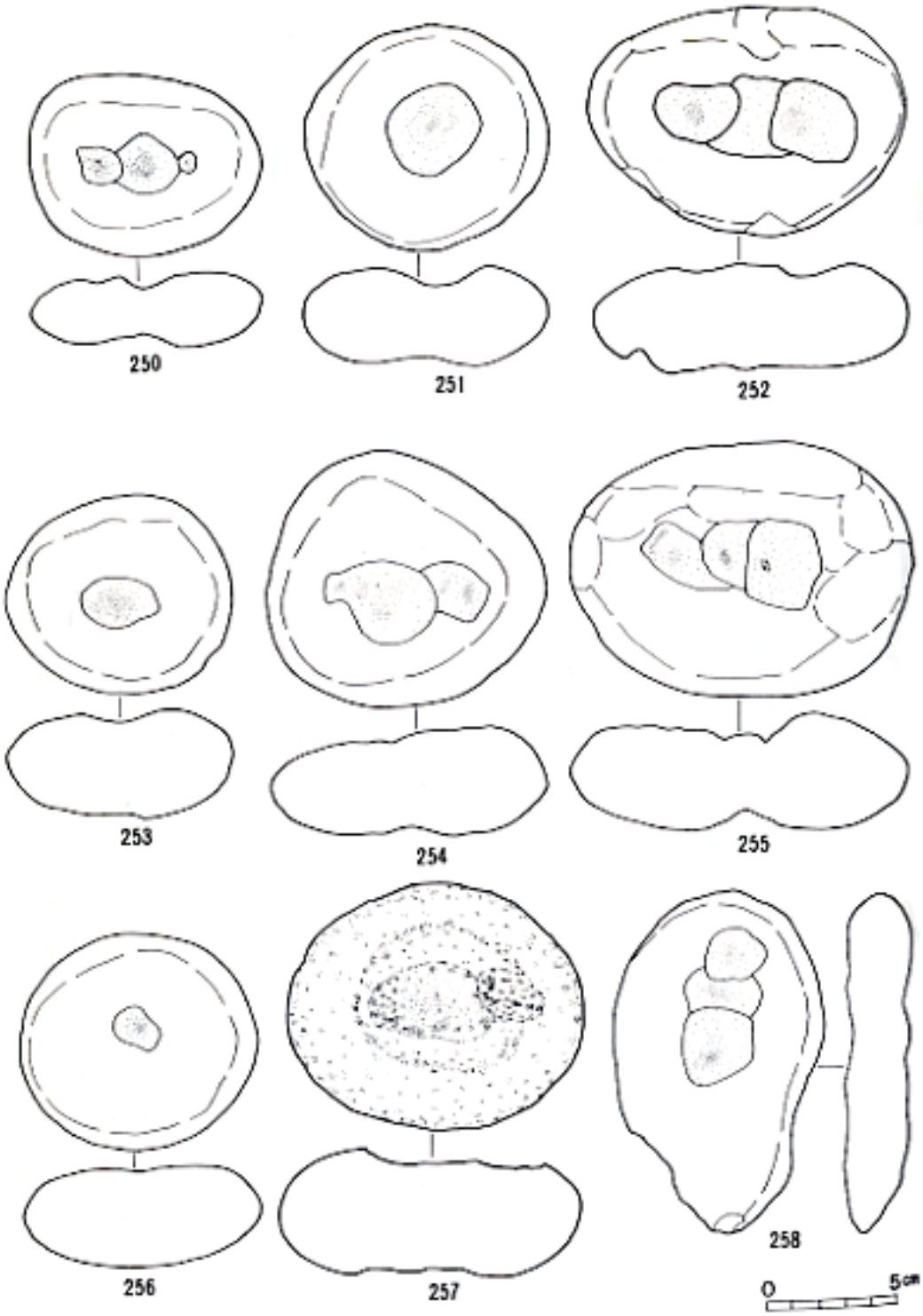
第 157 図　石器実測図



第 158 図　石器実測図

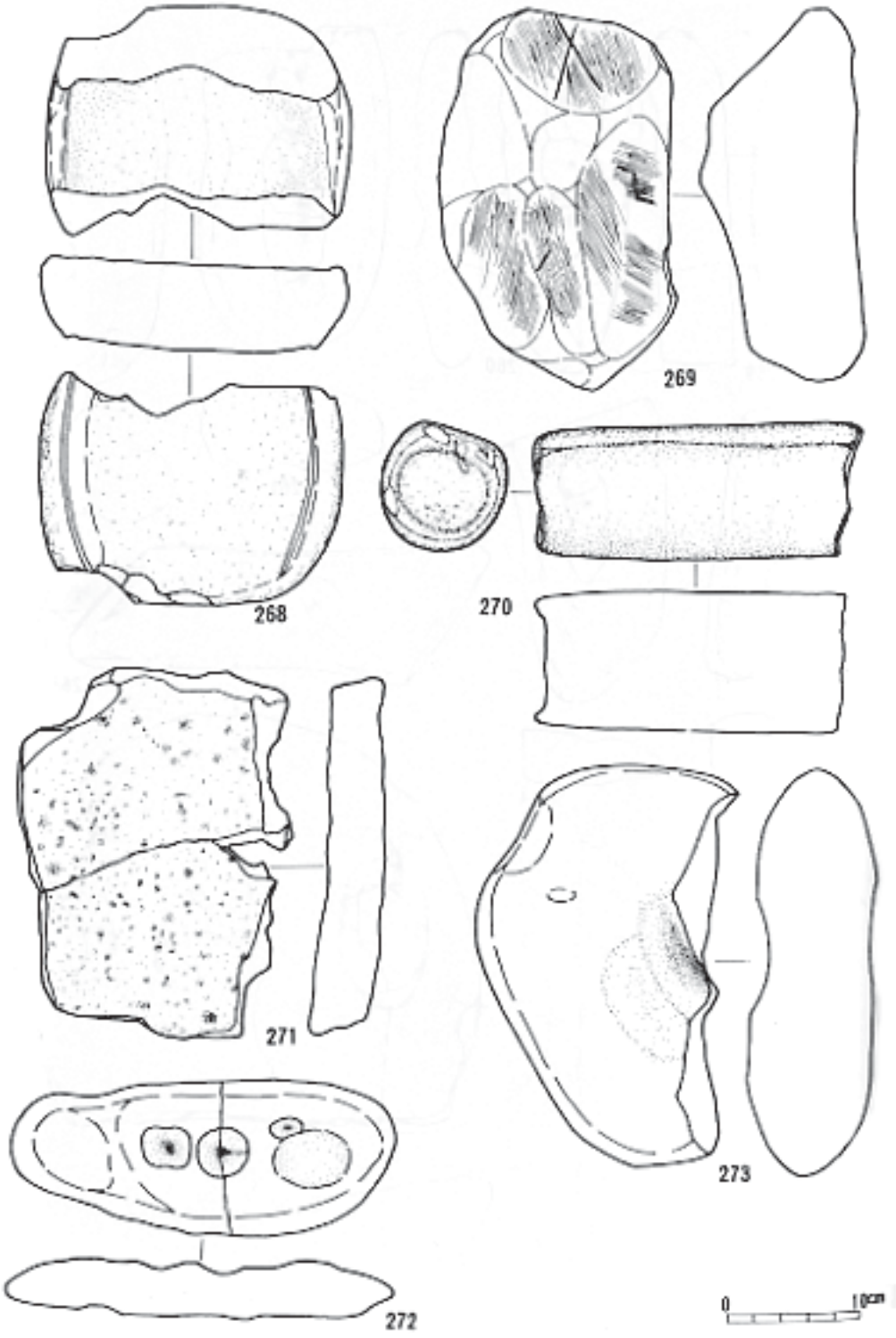


第 159 図　石器実測図

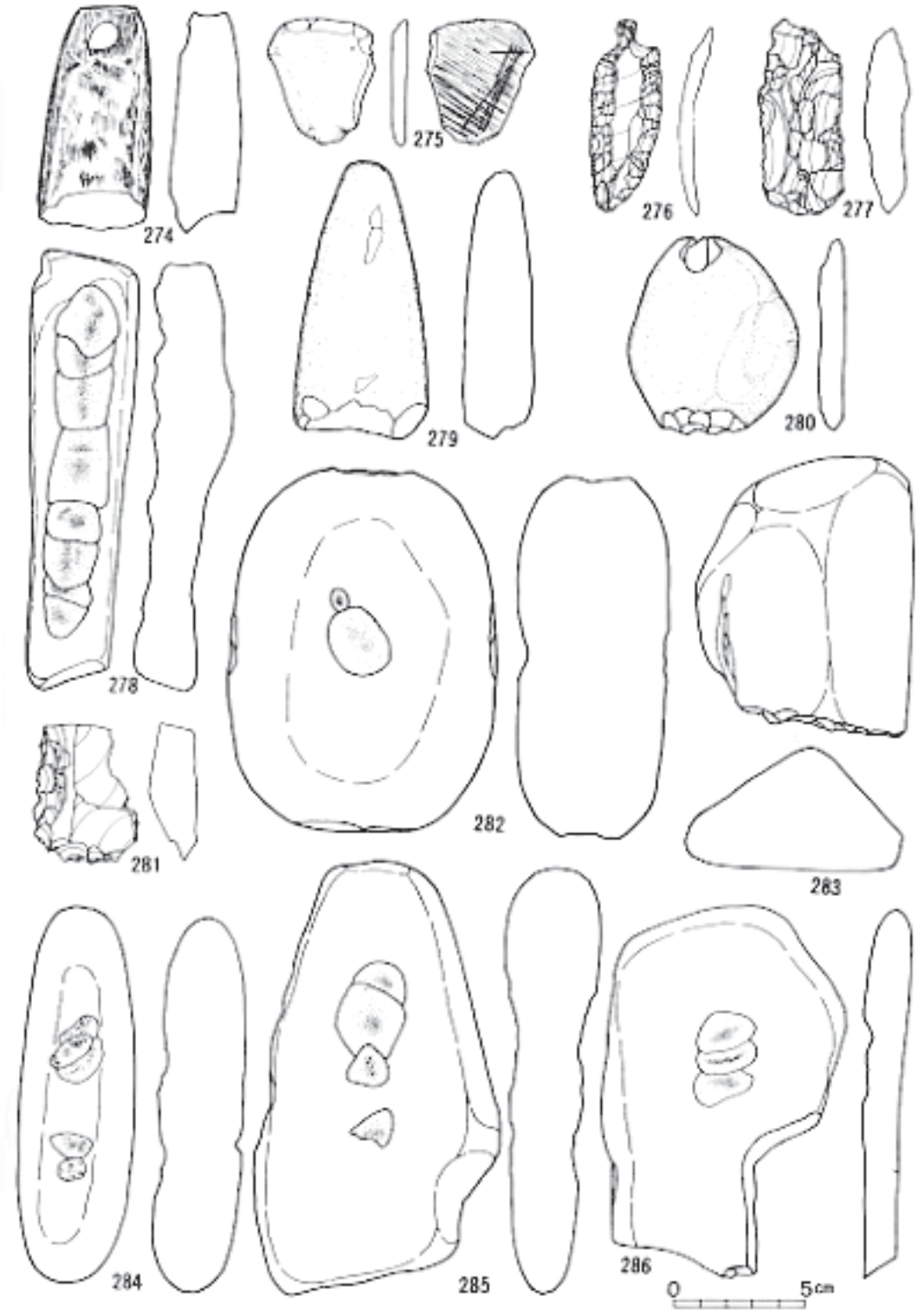


第 160 図　石器実測図

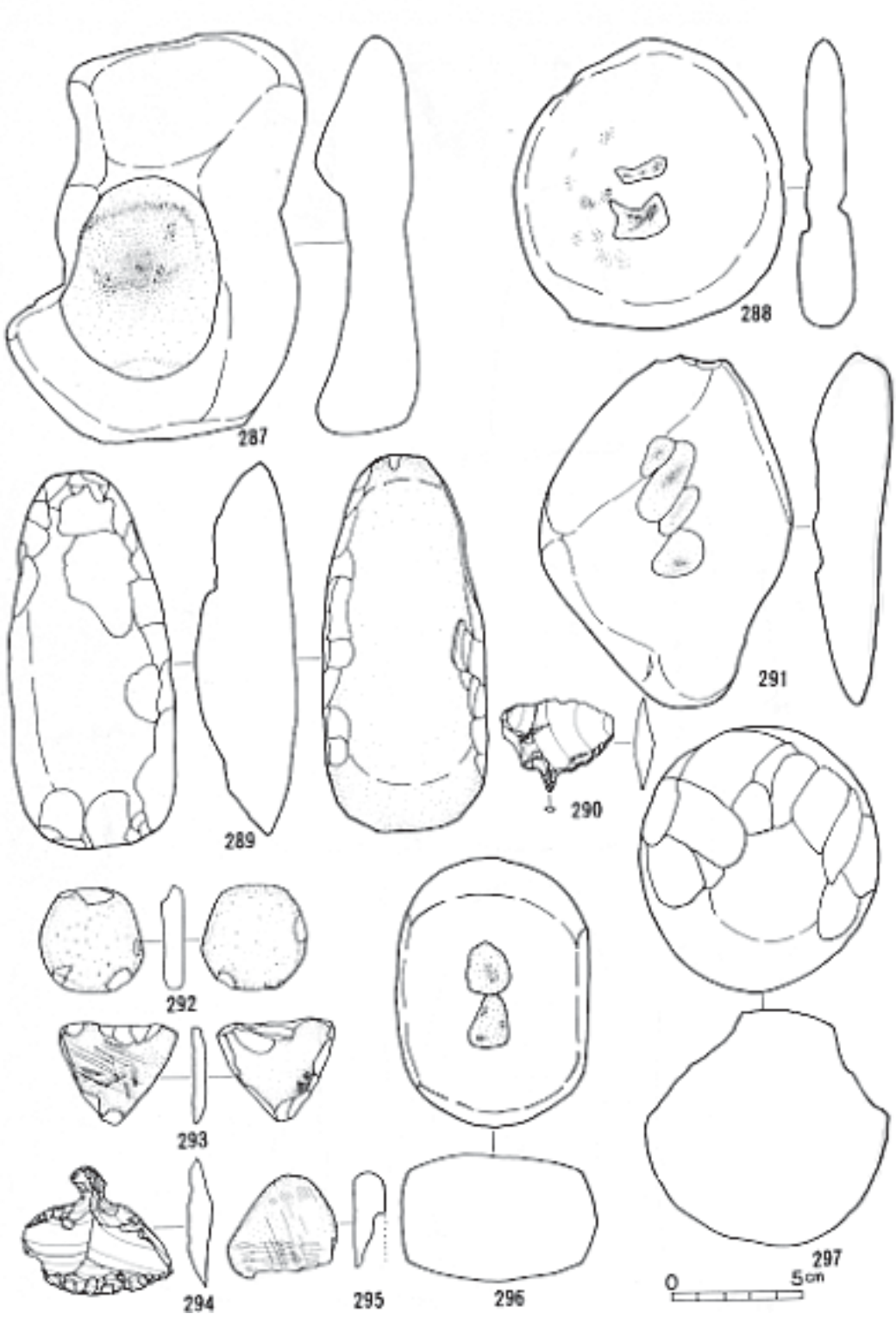
第 161 図　石器実測図



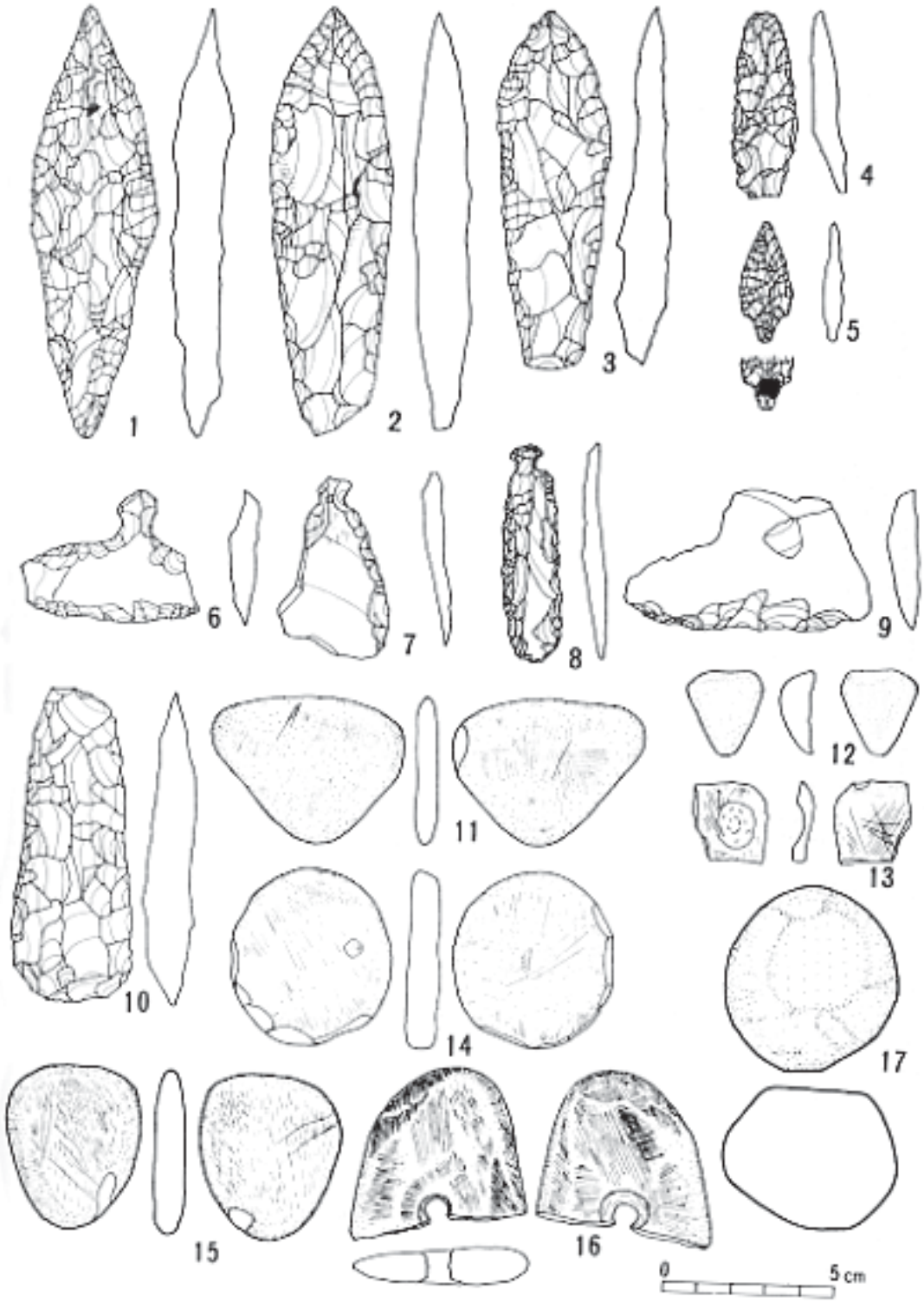
第 162 図　石器実測図



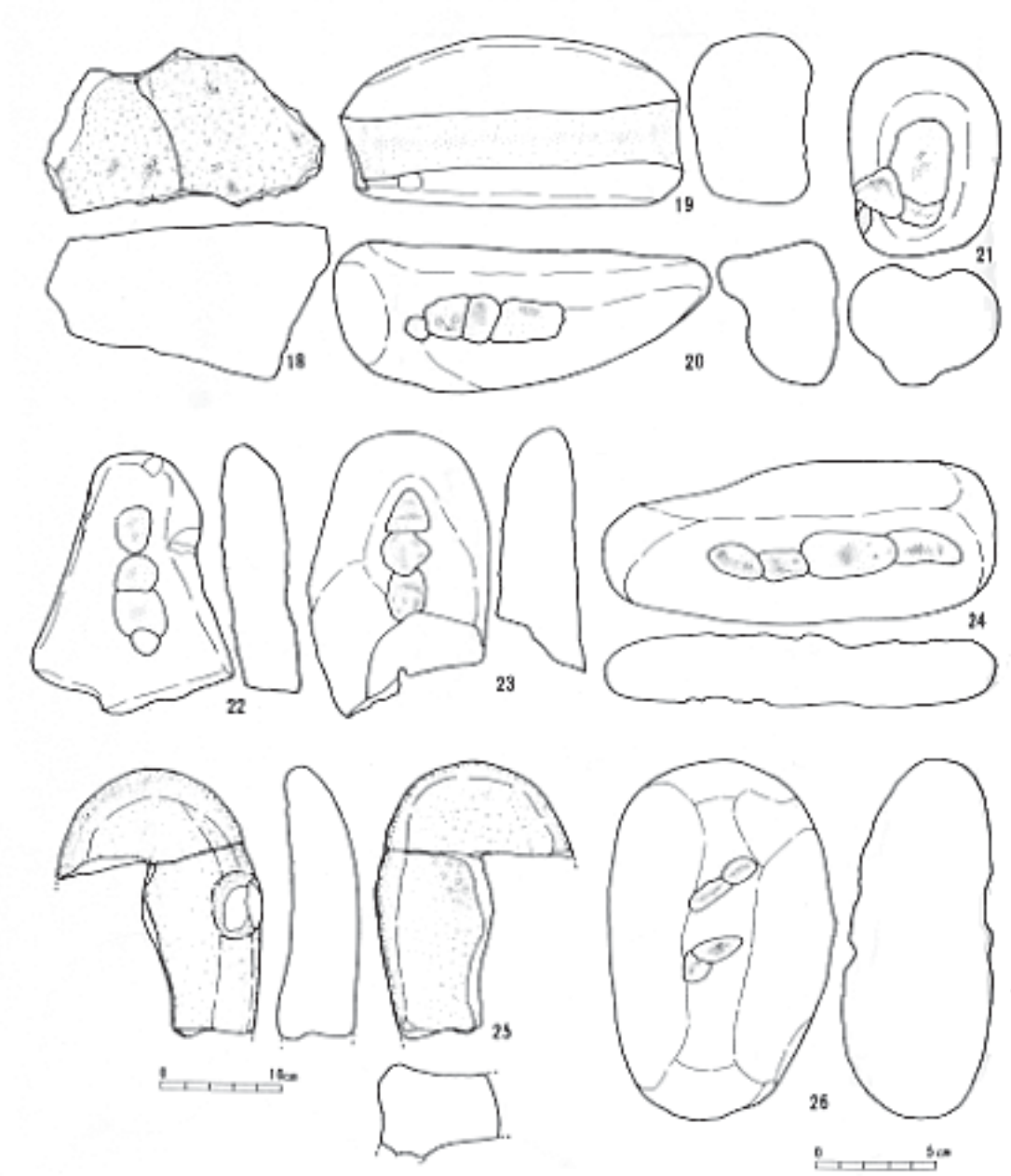
第 163 図　石器実測図



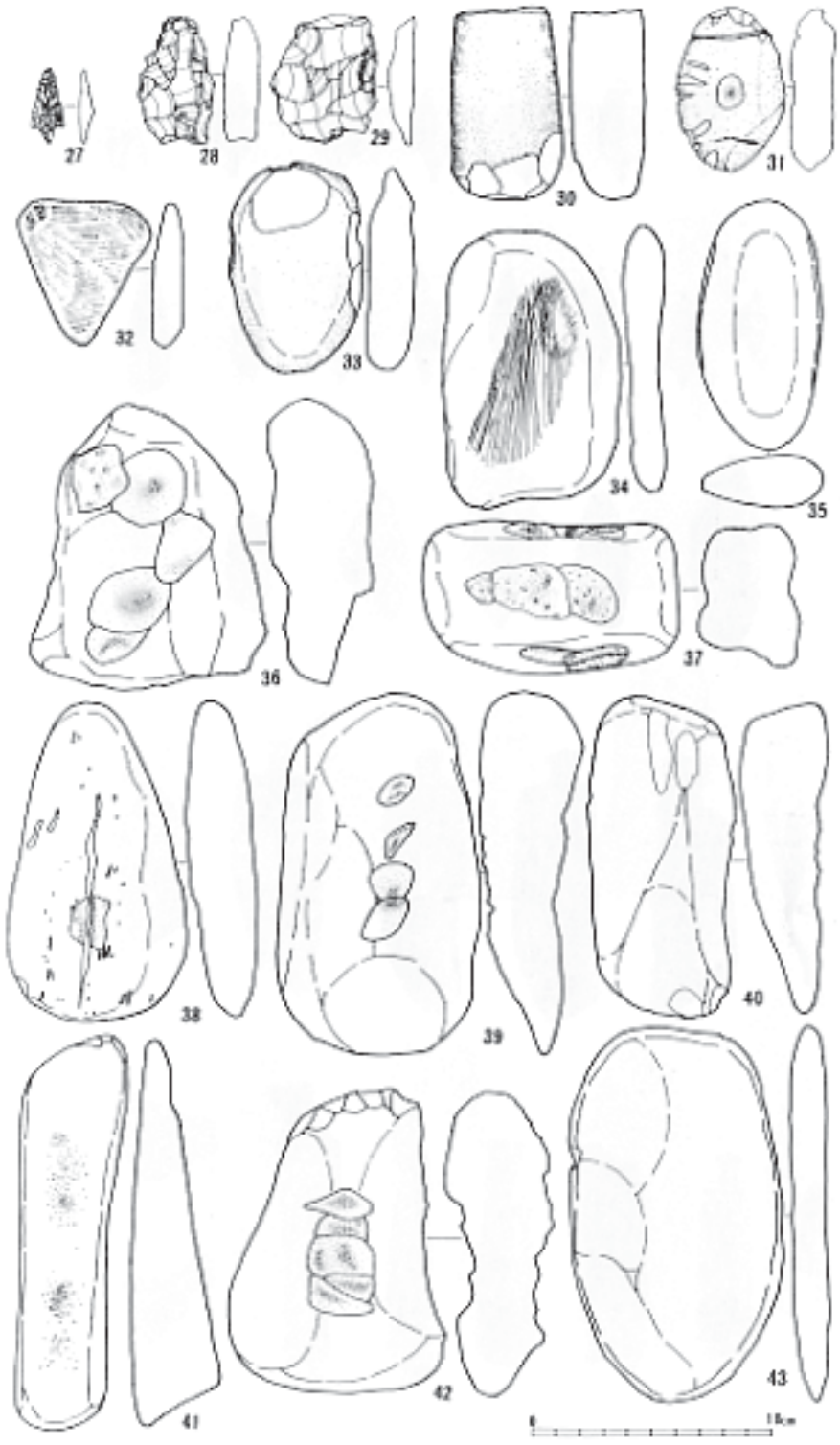
第 164 図　石器実測図



第 165 図　ピット出土石器実測図



第 166 図　ピット出土石器実測図



第 167 図　ピット出土石器実測図

図版50　石　　器

図版51　石　　器

図版 52　石　　器

図版53　石　　器

図版 54　石　　器

図版55　石　　器

図版 56　石　　器

図版 57　石　　器

図版58　石　　器

図版 59　石　　器

図版 60　石　　器

図版61　石　　器

第9章　弥　生　式　土　器　文　化

本遺跡から弥生式土器が出土することは昭和47年7月の第1回遺跡分布調査で知られていた。本調査で得られた土器はほぼ復元できた1点を除けば、他は約200点の破片である。遺構としては1個の土壙だけで、住居跡等の検出はできなかった。また文化層も不明で、土器片の多くは、土師器・須恵器の伴う竪穴住居跡の覆土から出土している。また明らかにこの文化期に所属すると思われる特徴的な石器やその他の遺物も出土しなかった。

(1) 土　　壙（第168図）

第111号ピットで、0－2－4区で検出され、第39号住居跡(歴史時代)の西側に位置している。平面プランは略円形で、確認面は第Ⅴ層上面であるが、この面ですでに土器が露出していたので、実際の掘り込み面は更に上層になるであろう。底面の平面プランも略円形で、壁は全体に内側に傾斜していて、全体として鍋底状を呈しているが底面は多少の凹凸が認められる。埋土は5層に分けられ、中心よりやや東北寄りに甕形土器が壙底から約10㎝浮いて埋設されていた。そしてこの土器以外には他の土器片や人工遺物は出土しなかった。土壙の計測値は確認面で長径1.15m、短径が1mあり、底面の直径は0.7mで、中心部の深さは25㎝ほどである。土器（第168図1）は口縁部を欠くが現存の高さは21.5㎝である。

(2) 土　　器

ア．甕形土器

甕形土器と思われる破片はかなり出土しているが、その特徴がほぼ判明できたのは、第168図1、第169図2（第172図4)、第169図5（第172図5）の3個体である。

第168図1は口縁部を欠失しているが、胴は丸身をもっており、頸部と接する部分に3条の平行沈線を巡らし、その直下に一定の間隔をおいて「へ」の字状の山形文が一巡して施文されている。胴から底部にかけては約1㎝の幅をもった2段右撚りの縦走する帯縄文が施文されている。底部は心もち揚げ底になっている。焼成は良好であるが堅緻というほどのものではなく、外器面の一部に炭化物の付着が認められる。

第169図2（第172図4）は第33号住居跡（歴史時代）の覆土から出土したもので、胴部下半の一部を欠くが、器形及び文様構成が復元できるものである。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部はゆるやかにカーブを描くようである。口縁は平縁で、口唇部に沿って小波状沈線文が表裏に巡っており、その下部は縦走ぎみの縄文が施文され口縁部の文様を構成している。胴部の文様は上半に展開している。頸部の屈曲部に沈線を巡らし、その下に波状文更にその下部に平行沈線にはさまれる小波状文が見られ、文様帯の中心部に平行沈線を中心に上下に円弧を連らね、円弧内に横位に近い右傾の縄文が施文され磨消縄文的効果を表現している。文様帯の下端には2条の平行沈線とその下部に2段の小波状沈線が巡り、以下は底部まで縦

走する2段右撚りの帯縄文である。平底で暗褐色を呈し、焼成は脆く炭化物の付着が認められる。

第169図5（第172図5）も第33号住居跡（歴史時代）の覆土から出土し、口縁から胴上半にかけて観察できるものである。口縁部はゆるやかに外反し、口唇部には刻目が施されている。頸部あたりに平行沈線を巡らし、文様帯を口縁と胴部に区切っている。口縁部の文様は7～11本の沈線で山形文を構成し、地文に縦走ないしは右傾の帯縄文が施文されている。胴部の文様は平行沈線直下に上向の連弧文を2段に施し、その下に間隔をおいて波状沈線文が見られる。地文は2段右撚りの縦走帯縄文である。全体に文様が隠れるほどに炭化物がこびりついており、暗褐色を呈し、焼成は堅緻である。

その他甕形に所属するものと思われる破片は第173図、第174図26～37、第175図56～68、第176図76～83に示したものがあげられる。第173図に示した口縁部片は、24を除くとほぼ縦走する縄文を施文するもので、縄文原体は2段右撚である。破片のもつカーブから推察すると口縁部はほぼ「く」の字形に外反するものと思われる。口縁はすべて平縁のようで、18～25の口唇部のように、細い棒状の工具を押捺した刻目が巡っているものもある。また22は口唇部近くと頸部に沈線が巡っているものである。これらの土器は22．24を除くと焼成はきわめて良好堅緻である。色調は黄褐色ないしは淡褐色を呈するものが多く、中には黒色系のものもあるが、全般に土師器質を思わせる。22．24の焼成も良好ではあるが、前者ほどではなく、むしろ縄文式に近いものである。第174図の26～37と第175図の59～61に示すものは、頸部から胴部の破片で、特徴的には第173図（22．24を除く）に酷似しているもので、同一系統の土器と思われる。26．60のように頸部に無文部を残すものもあるが、前述した口縁部と合せて考えれば、ほぼ縄文地のみの甕であろう。そしてすべて縄文原体は2段右撚りで、幅1㎝～2㎝の縦走する帯縄文の見られるものが多い。

第175図56は口縁部が「く」の字形に外反するもので、口縁は水平と思われ、口唇部にも縄文が施文されているものである。文様は上部に縦走縄文を下部に横走縄文を施し、それを地文に3条の平行沈線を巡らしたものである。暗褐色を呈し、焼成は良好である。57は口縁部下端が肥厚した有段口縁で、頸部以下には沈線文が施文されるらしいが、口縁部には右傾の繊細な縄文が施文されているものである。表面は黒色を呈しているが、裏面は黄褐色で、薄手であるが焼成は堅緻である。第176図76～78は第28号住居跡（歴史時代）の覆土より出土した口頸部の破片で、76．77は同一個体と思われる。素文地に太い沈線文様が展開するもので、頸部に平行沈線を巡らし、それをはさんだ上下に連続山形文が施文されるものらしい。78もほぼ同様の文様構成と思われるが細片のため明らかでか。三者とも暗褐色を呈し、焼成は極めて良好で土師器質と思わせるものである。また表面には炭化物がこびりついている。

第176図79～82はJ－4～5区の基本層第Ⅱa層から出土したもので、同一個体の破片のようである。80が口頸部に近い部分と思われ、他は胴部片のようで、文様帯の下端部の破片であろう。80は平行沈線の上部に小波状文を巡らし、胴部は要所に縄文を施し、磨消縄文的効果を示

した文様構成となるものと思われ、あるいは縄文帯による山形文が構成されるものかも知れない。79、81～82からすると、文様帯の下限は平行沈線と小波状文をもって区切り、それ以下は縦走帯縄文だけとなるものと思われる。胎土、色調は第169図2と酷似してしいるが、焼成は良好で炭化物の付着が認められる。

その他として第175図58は胴部上半の破片で、沈線文の下に縦横に交差した繊細な撚糸文が施文されているものである。また同図62～64、第176図83は胴部片で、縄文を地文に沈線文が加わっており、第175図65～68は鋭利な工具で施文したと思われる縦走の沈線文が見られる。

イ．鉢形土器(1)

復元されたものがないので器形については確かではない。甕形と文様構成において類似しているものもあるが、破片のカーブを考慮してみれば、独立した器形を示すものもあると思われる。第175図52～55に示す口縁部は甕形に分類したものより、口頸部の屈曲が弱く、むしろ直線的である。52、53は厚さにおいて若干の差は認められるが、文様構成は全く同じで、おそらく同一個体であろう。口縁部は直線的で、口唇部に沿って沈線を巡らし、その下に磨消縄文による工字文が構成され、2条の平行沈線で区切って胴部の文様が展開するようで、その文様構成は明らかではないが、縄文帯による山形文が上部に展開するようである。なお両者は口唇部にも縄文が施文されている。この土器と同様な文様構成の見られるものが49～51である。いずれも焼成は堅緻で明褐色を呈している。54、55はいずれも口唇部に縄文を有し、口頸部の外反度は弱いものである。54は右傾の縄文地に頸部に平行沈線が巡っており、55は縦走縄文を地に口縁に沿って3条の平行沈線を巡らしたものである。

ウ．鉢形土器(2)

鉢形土器(1)よりはむしろ浅鉢に近い形態を示すものと思われる。第175図44～48は赤褐色を呈し、磨かれた無文地に斜位の沈線を幾重にも施すものである。焼成は堅緻で、内器面も磨かれ滑沢を帯びている。また第176図70～75の土器であるが、72を除けば同一個体で第33号住居跡(歴史時代)の覆土から出土したものである。地文に縦走する帯縄文を施文したようであるが、口縁部付近はその余影が伺えるが胴部はかすれてしまっている。口縁部と胴部下半に平行沈線を巡らし、その内部に上向の円弧を数段重ね、横に連らねたものである。沈線は比較的細目で、焼成も脆いせいかかすれている部分もあり、くすんだ褐色を呈している。72は黄褐色を呈しており、文様構成はほぼ前者と似ている。胴部片のようで、連弧文の下部は斜向縄文で、断面にカーブをもっている。

エ．壺形土器

壺形と思われるものは3個体出土している。第169図に復元予想図を示したが、その拓影図が第170図、第171図である。

第169図3（第170図2）は第21号住居跡（歴史時代）の覆土から出土したものである。口縁部は「く」の字状に外反し、胴の下半部に最張部が位置するものと思われる。地文に2段右撚り

の縦走縄文を施文しているが、かすれて不明瞭な部分も認められる。また縄文は口唇部にも施文されている。頸部に2条の平行沈線を巡らして口縁部と胴部の文様区画している。口縁部には不整の山形文が巡っている。胴部は中ほどに刺突文を埋めた2条の平行沈線を境いとして上半に2段の山形文で菱形文を構成し、その内部に上下の円弧文を施文したもので、下半には1段の山形文が巡っていて、それ以下は底部まで縄文のみであろう。色調は黄味がかった白色を呈し焼成はきわめて良好で堅緻である。

第169図4（第170図1）は第58号住居跡（歴史時代）の覆土および住居跡の周辺から出土したものである。胴部の中ほどに最張部が位置するものと思われ、頸部に向って序々に内弯し、口縁部は直上あるいは多少外反ぎみになる器形であろう。口縁部内面に張り出しが認められるのが特徴で、おそらく蓋受け装置であろう。口縁部には右傾の縄文が施され、頸部から胴部上半にかけては逆方向に渦巻く渦巻文を2段展開させ、その部分に縄文を埋めて磨消縄文的効果を表現している。渦巻文の下部には波状に沈線を配し、以下底部まで右傾の斜行縄文と思われる。なお施文されている縄文原体は2段右撚りである。色調は赤褐色に部分的に黄褐色そして黒斑を呈する。胎土に砂粒を含み、薄手であるが焼成はきわめて良好堅緻である。

第169図6（第171図）は第33号住居跡（歴史時代）の覆土から主に出土したものである。前者2例より大型で、文様構成も複雑である。口縁部、頸部、胴部と明確に区別できる。胴部は略球形を呈するようで、頸部で若干立ち上り、口縁部は内側にカーブを描きながら強く外反する器形である。口縁には弧状の4個の突起を有し、口唇部を巡って刻目が施されている。口縁部文様帯は縦走帯縄文を地文として、口縁に沿って2条の沈線が巡り、中間部に山形文くずれの小波状沈線文が巡らされている。また突起の張り出し部分に沿って弧線を4箇所施文している。頸部には地文としての縄文がなく、上下両端に2条の平行沈線を巡らした中間に、小波状沈線文が2段巡らされている。胴部上半は頸部同様素文地に沈線文が展開するもので、上端には小円弧を上下交互に施文し、上半から最張部付近にかけて2条の平行沈線が4段に巡り、最張部あたりは平行沈線による複雑な文様が施文されているが、破片が少ないためその文様構成は明らかでない。胴部下半から底部にかけては縦走する帯縄文が施文されているようで、最張部直下には縄文地の上に下向の円弧を連らねた大柄な波状文が施文されているようである。焼成は前者2例と比較してあまり良くなく、胎土に多くの砂粒を含んでいて、内器面は口縁部を除くと剥脱していて肌が荒れている。色調は全般的に黄褐色を呈しているが、胴下半に黒斑を有する部分も見られる。施文されている縄文の原体は、口縁部が2段右撚りで、胴部下半は2段左撚りである。

（3）小　　括

出土した土器は復元された1個の他は約200片の破片で、その大半が歴史時代の住居跡の覆土から出土したため一括して分類したが、これらが同時期のものかあるいは複合されているものかは不明である。したがって図上復元された土器を中心に若干まとめてみたい。図上復元された土器は甕形土器が3個、壺形土器が3個である。これらの土器に最も近似したものに、秋田県鹿角郡小坂町内岱出土の土器（註1）があげられる。甕形土器の口縁部に刻目が巡っていることや、文様に連弧文が多いことなどは蛍沢と類似している。壺形土器では大型壺と全く同形のものが出土している。但し文様面では差異が認められ、蛍沢の壺の交互連弧文の部分は交互刺突文になっているし、胴部上半の文様が渦巻文になっている。縄文の施文方法は蛍沢と全く同じである。内岱出土の土器は交互刺突文や連弧文が見られることから、福島県白河市の天王山式土器（註2）の影響がうかがわれるもので、蛍沢の土器もほぼ同じ系統のものであろう。しかし蛍沢の土器には交互刺突文は全く認められず、交互刺突文をメルクマールの一つとする天王山式とは若干の差異を示しているといえよう。本県で交互刺突文を有する土器は六ヶ所村千歳13遺跡（註3）、平賀町堀合Ⅱ号遺跡（註4）で出土例があり、やはり連弧文が加わっている。交互刺突文は見られないが、天王山式系の土器としては下北郡東通村の念仏間式土器（註5）があげられる。特徴的には蛍沢の土器とほぼ同じ文様構成であるが、念仏間式の中には蛍沢の壺に見られた逆方向に渦巻く渦巻文は見られないようである。共通面の他一つに焼成が非常に堅緻な土器が含まれていることがあげられる。渦巻文様の土器は東北南部の土器に古くから見られるものであるが、天王山式には見られない文様である。渦巻文は北海道で恵山式にも伴って出土している。西桔梗遺跡（註6）で出土例があり、やはり逆方向に渦巻く渦巻文である。伴出した恵山式土器は恵山Ｃ式（註7）と呼ばれる土器で、恵山式の後半の土器で、ほぼ天王山式に平行する時期とされている。但し恵山Ｃ式の中には交互刺突文は見られないようである。

以上の比較から検討してみると蛍沢の弥生式土器は天王山式系の土器であるが、念仏間式と同様に交互刺突文はみられないもので、本来の天王山式とは差異が認められる。このことは両遺跡の土器を天王山式とするかあるいは天王山式平行の別形式にするかの分岐点になるかの重要な問題を含んでいるといえよう。また恵山C式土器との関係も注意しなければならないであろう。現段階では資料が少ないので即断は避け、一応一括して仮称蛍沢Ｙ式土器としておきたい。

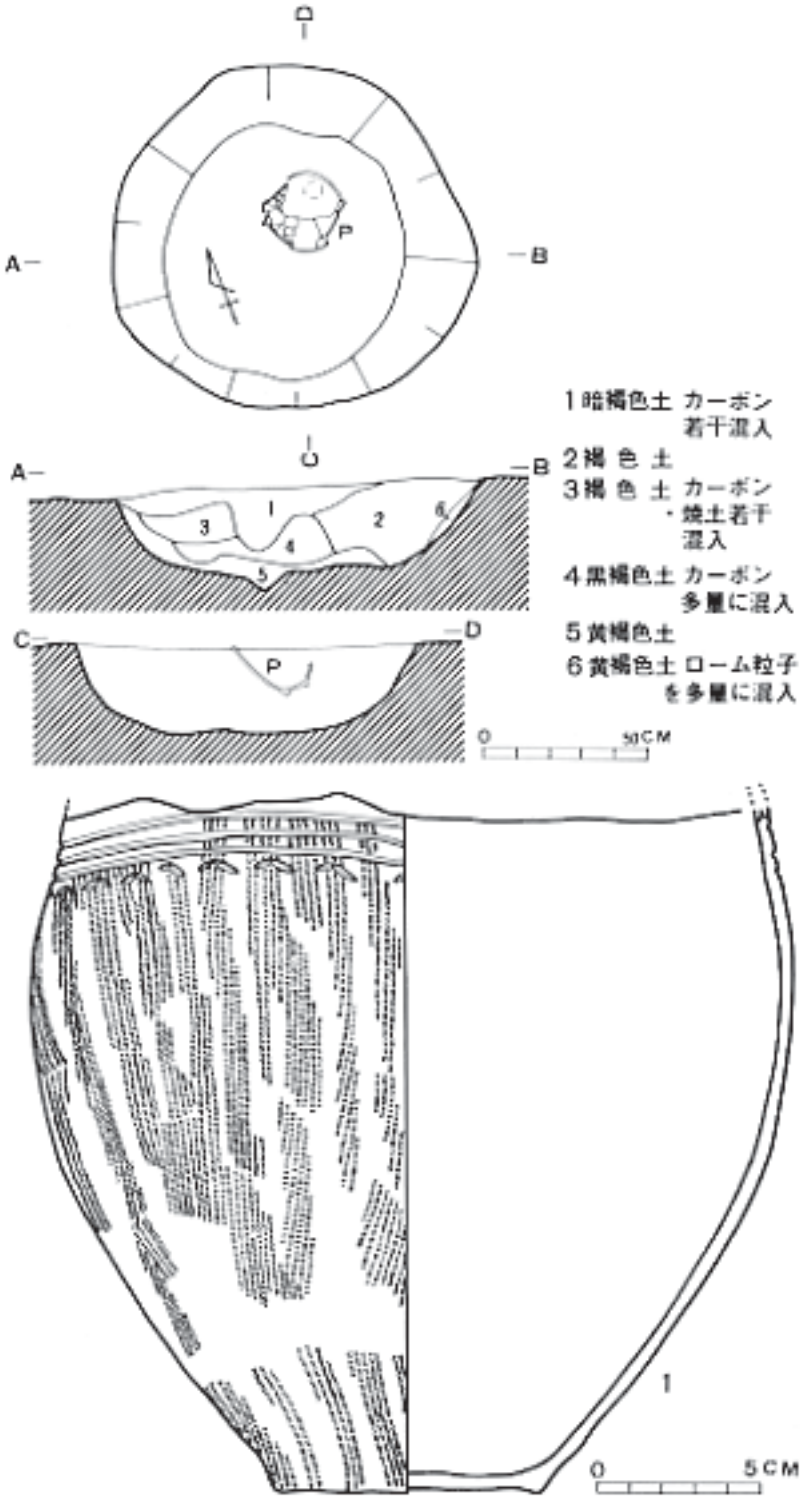
本報告書執筆にあたり東北大学名誉教授の伊東信雄先生と函館市立博物館の千代肇氏より多大なる御教示があり、末筆ながら深謝の意を表します。　　（葛　西　励）

註１　奥山潤、安保彰「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生式文化とその後続形態」上、下「考古学雑誌」49巻2～3号

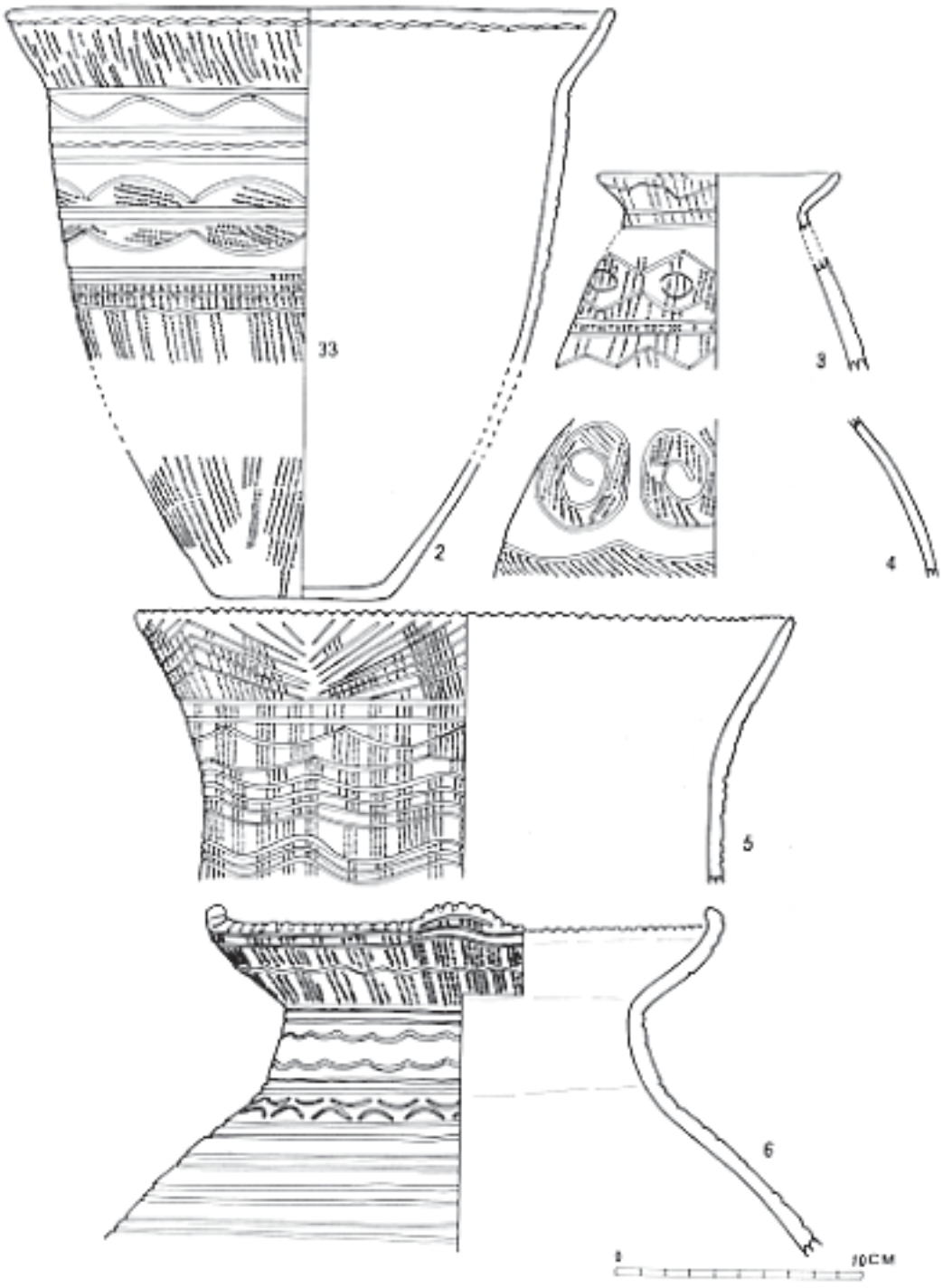
註２　坪井清足「福島県天王山遺跡の弥生式土器」史林36－1　昭和28年

註３　青森県教育委員会「千歳13遺跡」　1975年

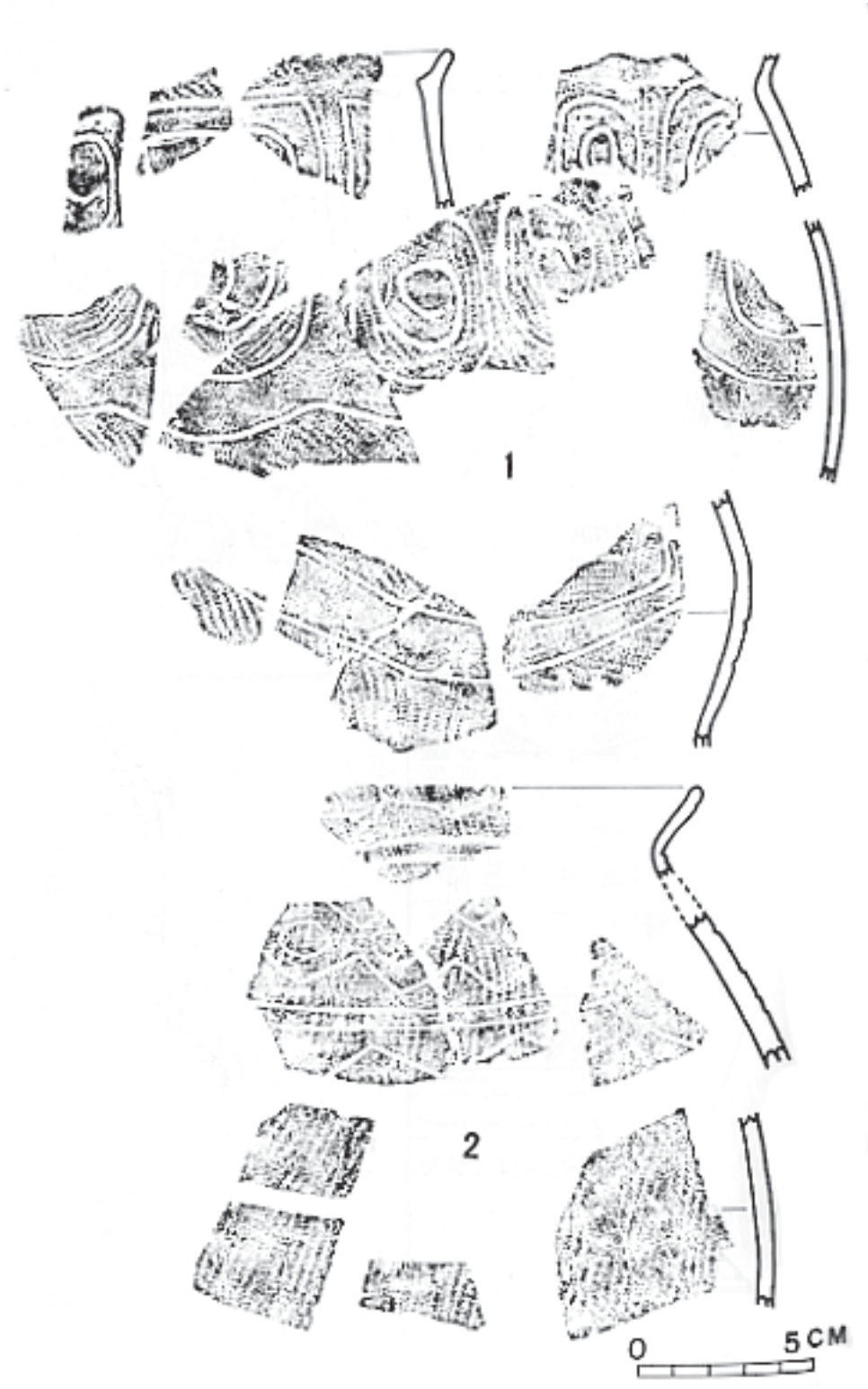
註4　平賀町教育委員会「青森県平賀町堀合Ⅱ号遺跡発掘調査報告書」1972年
註5　橘善光「下北の古代文化」 1977年　単行本
註6 「西桔梗遺跡」千代肇編　1975年
註7　中村五郎「北海道南部の続縄文土器編年」北海道考古学第9輯　1973年



第 168 図　ピット及び出土土器実測図

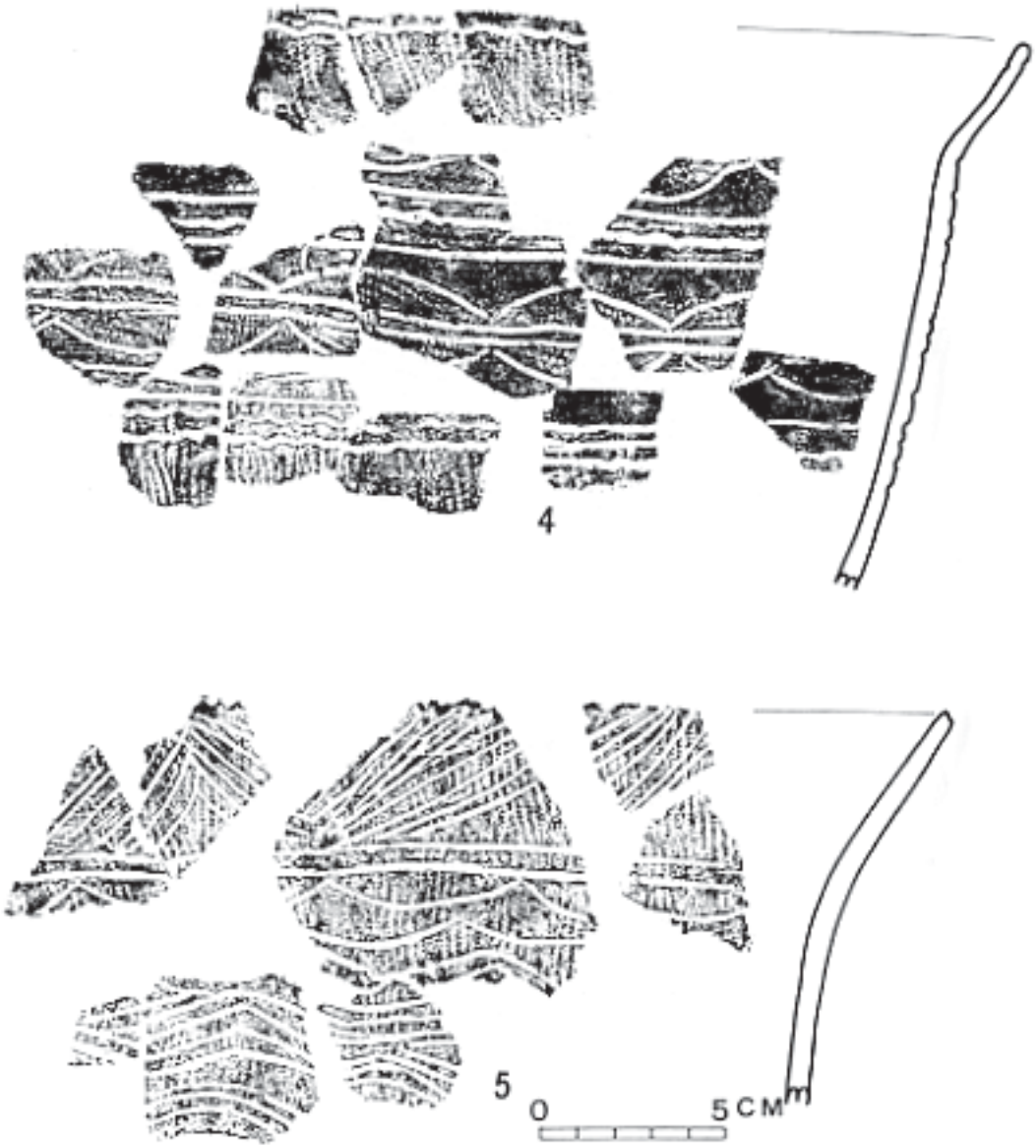


第 169 図　出土土器実測図

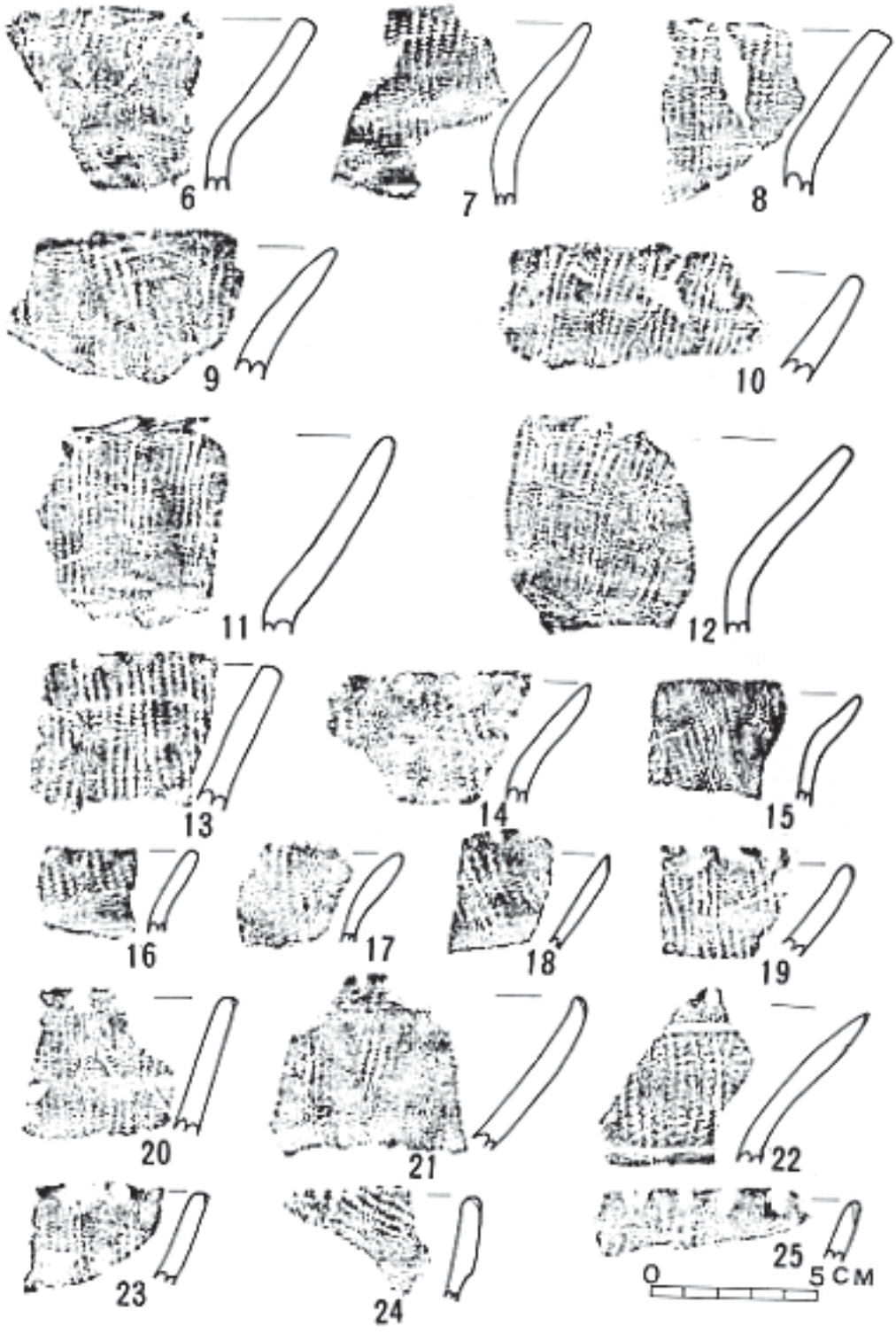


第 170 図　出土遺物

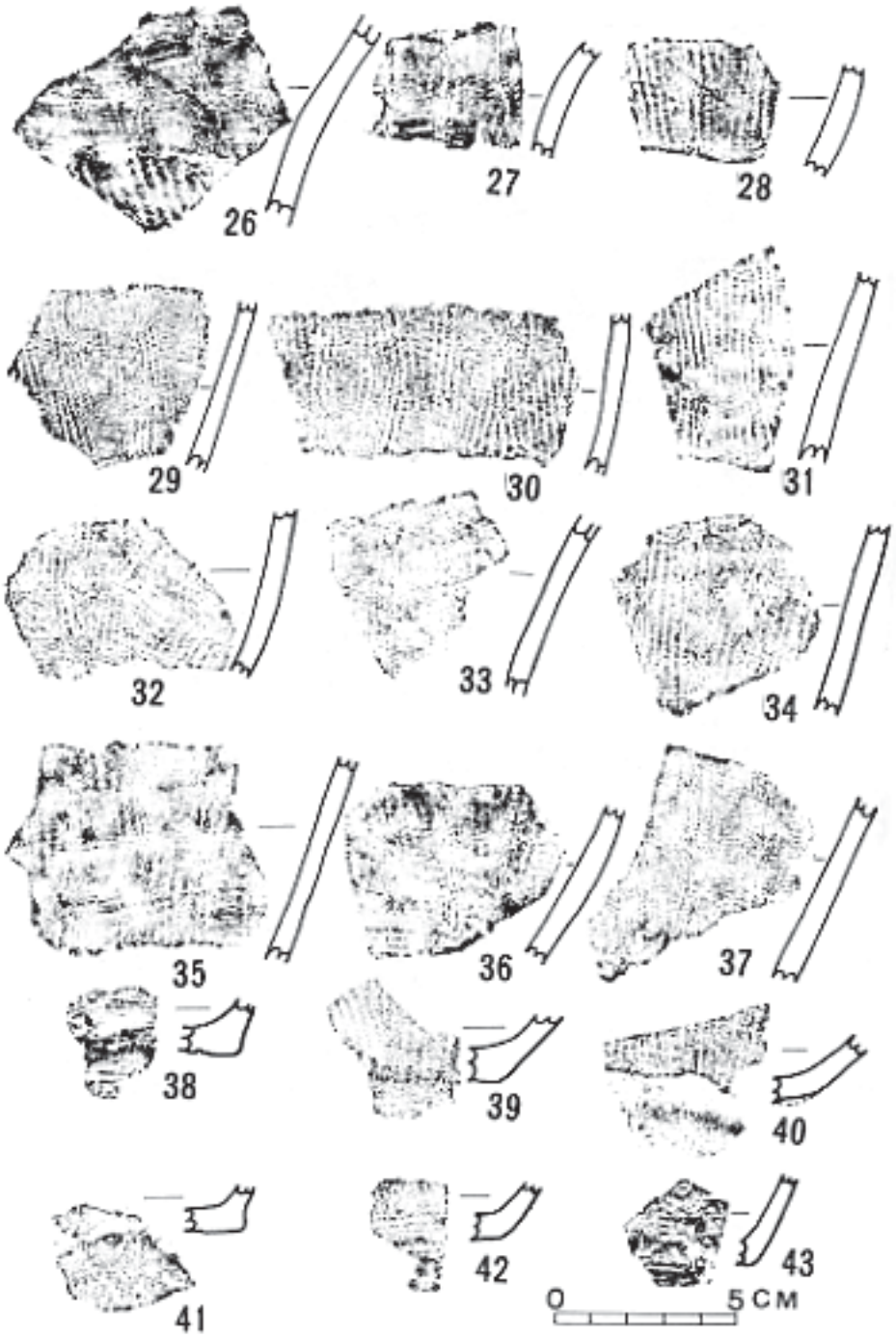
第 171 図　出土遺物



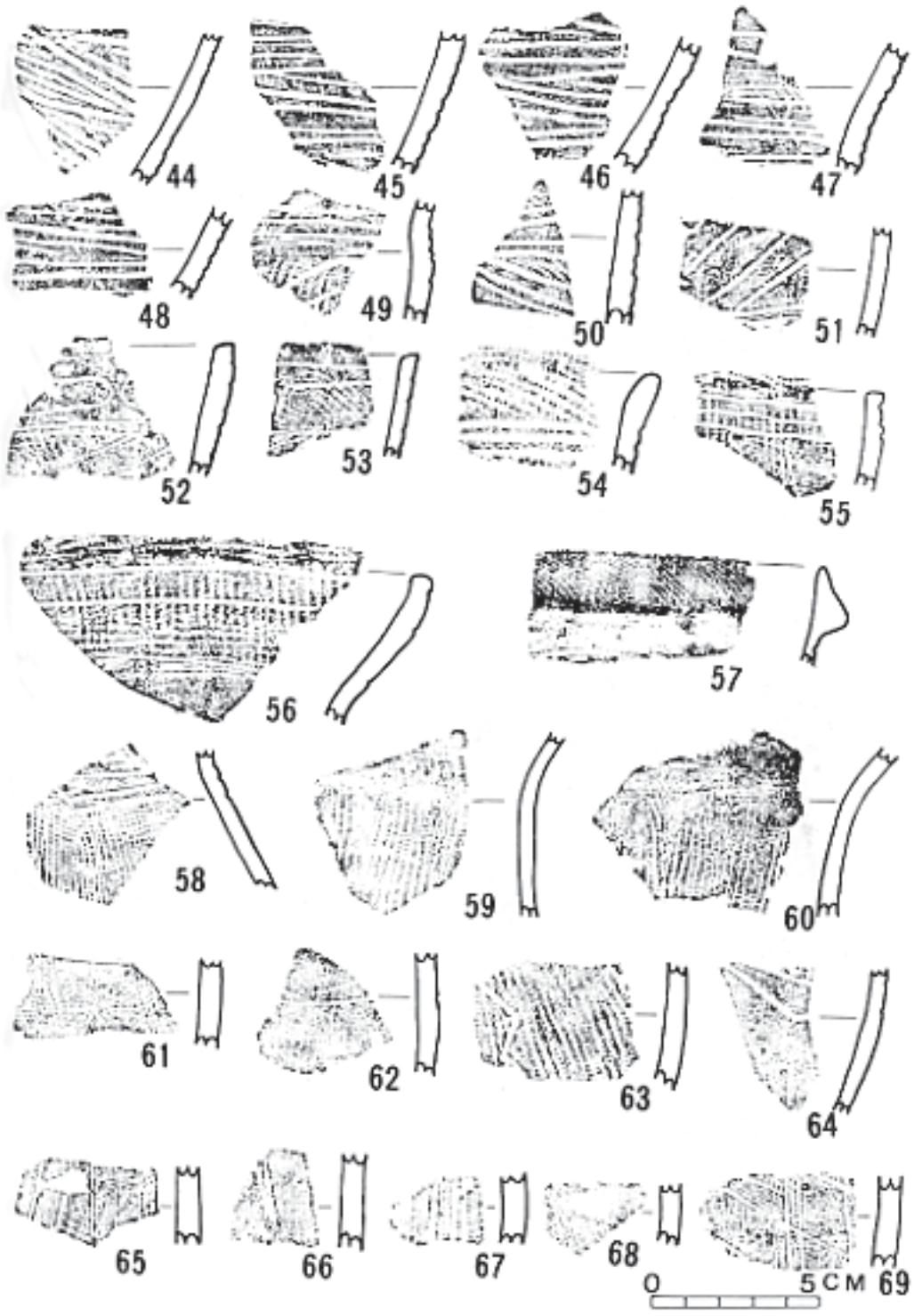
第 172 図　出土遺物



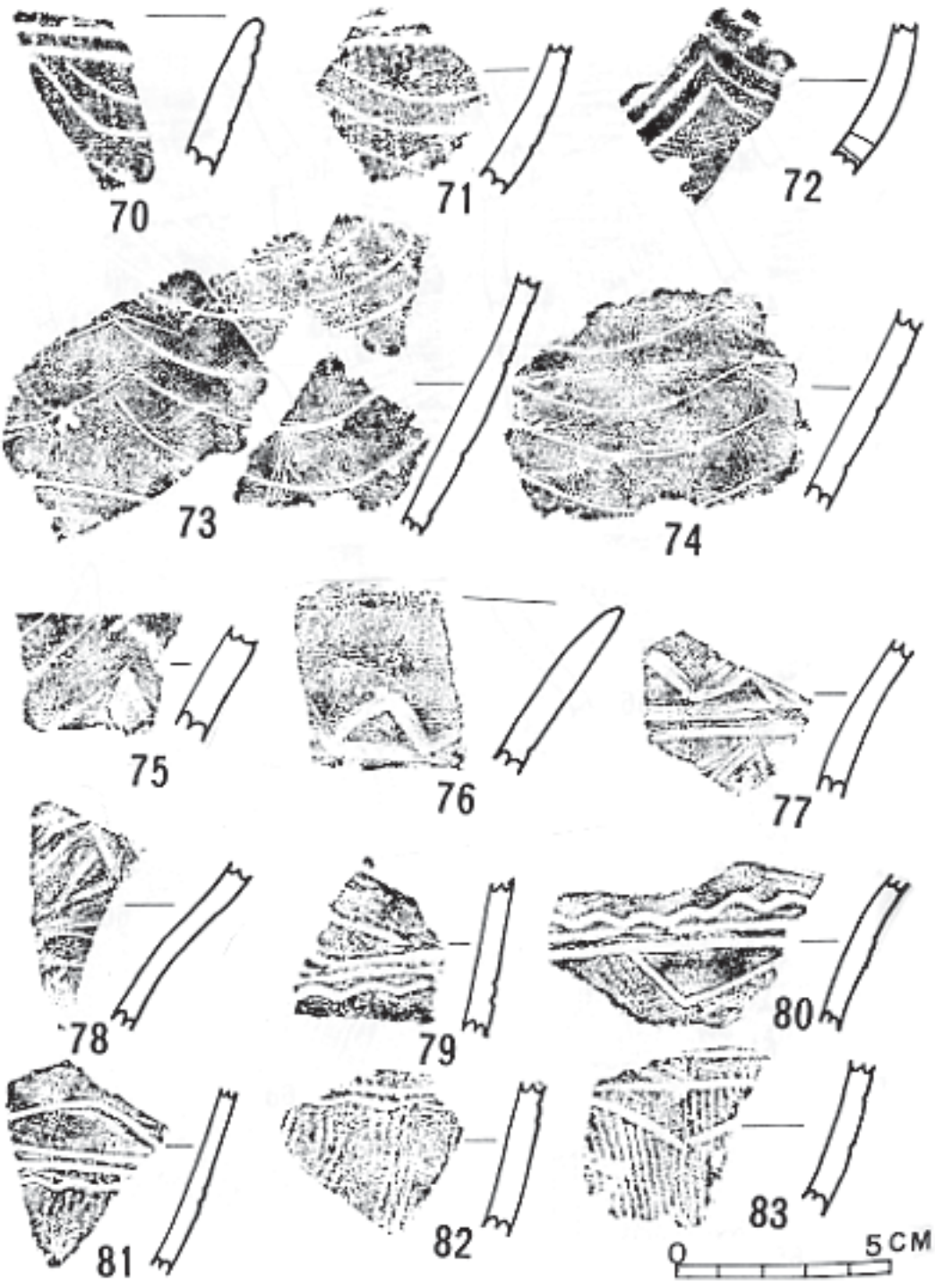
第 173 図　出土遺物



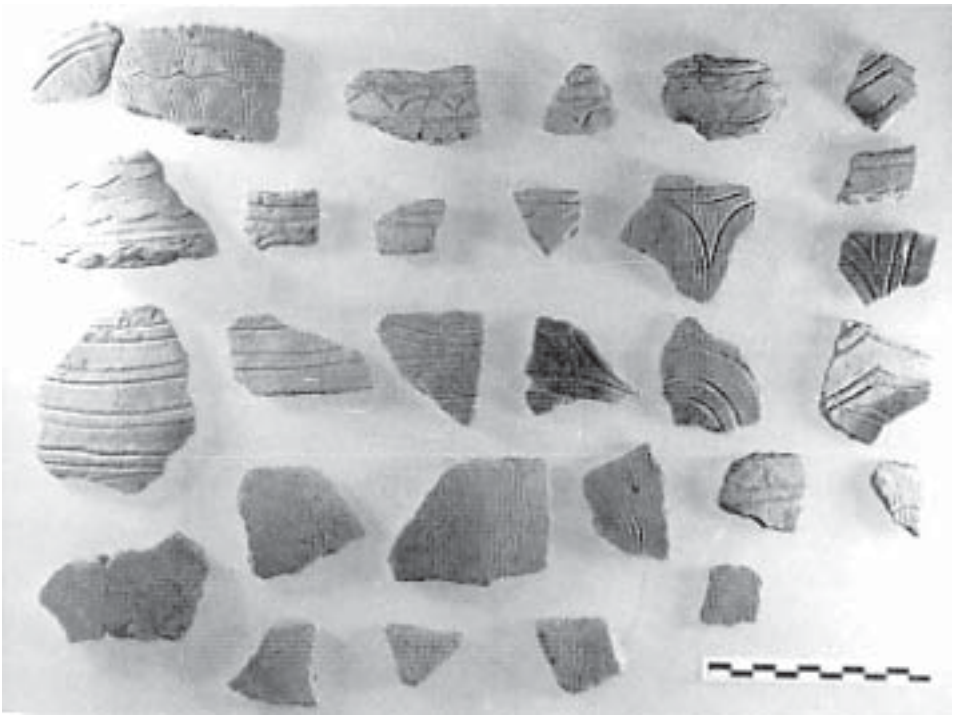
第 174 図　出土遺物


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
0
5CM

第 175 図　出土遺物



第 176 図　出土遺物



図版 62　出土遺物

第10章　歴　史　時　代

第1節　住居跡と遺物

第1号住居跡（第178～180図）

調査区南端のB－4区で、暗褐色土（第Ⅲ層）上面で確認された。東・西壁7.8m×南・北壁7.78mの方形で、四壁はほぼ直線的であり主軸はS－3°－Eを示す。

堆積土は細別して11層に区分されるが、いずれも自然層である。しかし、2・3層のように非常に多量のローム粒子・ブロックを混入した層の堆積も見られる。この層はこれから順に紹介してゆく殆どの住居跡にも見られる層である。

壁はⅣ層（黄褐色火山灰）・Ⅴ層（ローム）を掘り込んで構築しているため堅く、立ち上がりはほぼ垂直にちかい。貼り床の痕跡は見られず、竪穴掘り方をそのまま床としており、よく踏み締められて堅く平坦である。

周溝は各壁に沿って幅10cm、深さ15～25cmのものを巡らし、柱穴は南・北西コーナーに検出されたが、南・北東には認められなかった。又、多数のピットも検出されたがいずれも柱穴とは認め難いものである。

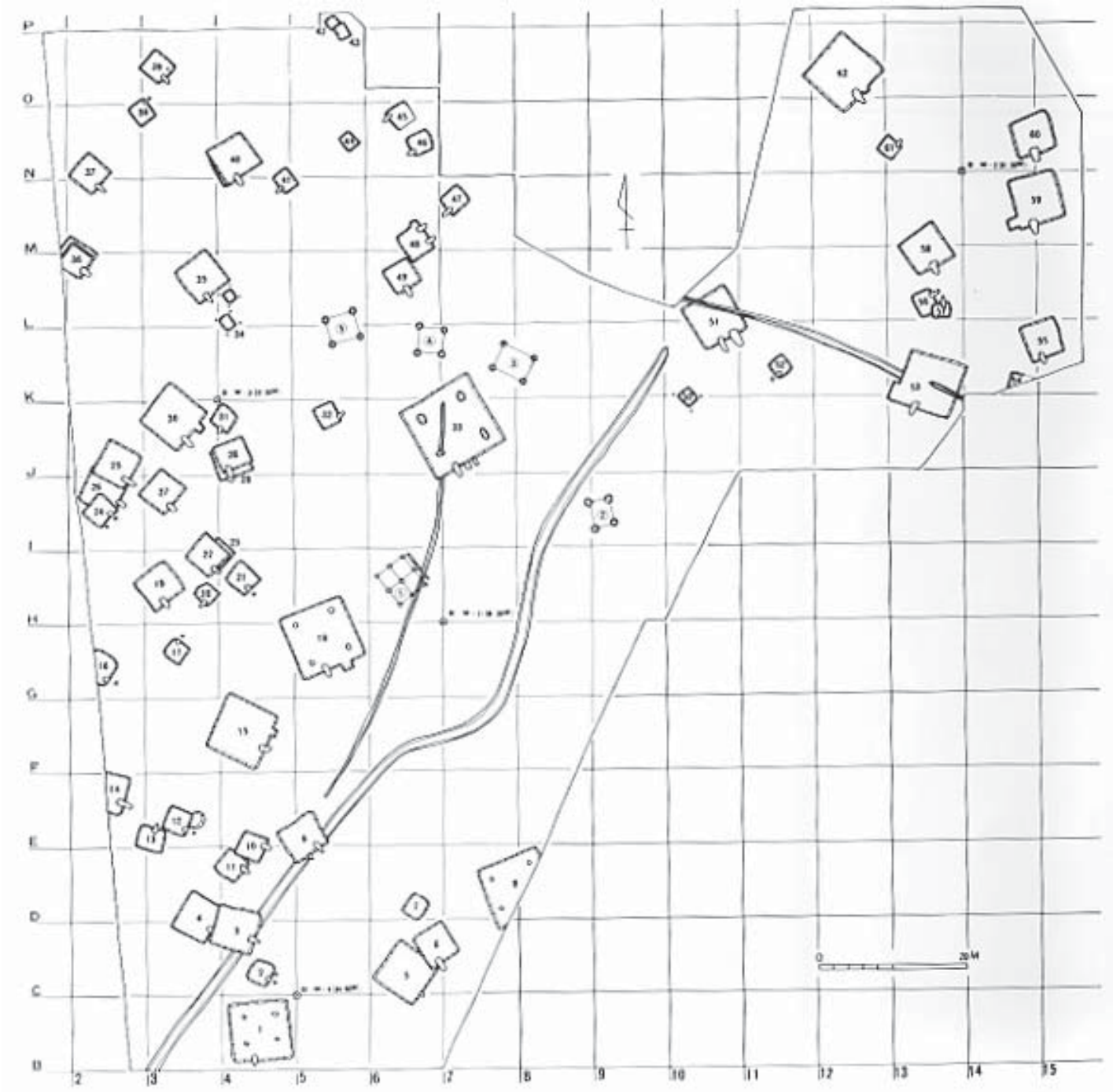
カマドは南壁中央部からやや西寄りに設置されている。灰白色粘土を素材としているが、袖部には石材を使用し補強している。燃焼部天井も粘土で構築されているが土圧によりかなり押し潰されて崩壊している。煙道部はローム層を掘り下げ、天井及び壁部を粘土で構築している。本遺跡におけるカマド構築はこの作りが一般的のようである。

住居跡床面からの出土遺物は甕形土器2点（第180図－1・2）、坏形土器2点（第180図－3・4）、須恵器大型甕破片2点が出土した。第180図－2の甕は口頸部を横ナデ、その他は縦方向のヘラナデで調整している。

第2号住居跡（第181～183図）

C－4区のⅤ層（ローム）上面に確認したもので、本遺跡唯一の完全な隅丸方形の住居跡である。主軸はS－66°－Eを示し、南北壁3.4m×東・西壁3.2mの規模を呈する。覆土は自然堆積を呈し18層に区分した。壁はⅤ層を掘り込んで構築しているため非常に堅く、立ち上がりはほぼ垂直に近く、床面は平坦で堅く締まっている。柱穴と見られるものはないが灰捨て場と考えられるピットがカマド脇にある。周溝は北壁中央で一部途切れるが幅15cm、深さ5cmのものを壁沿いに巡らしている。

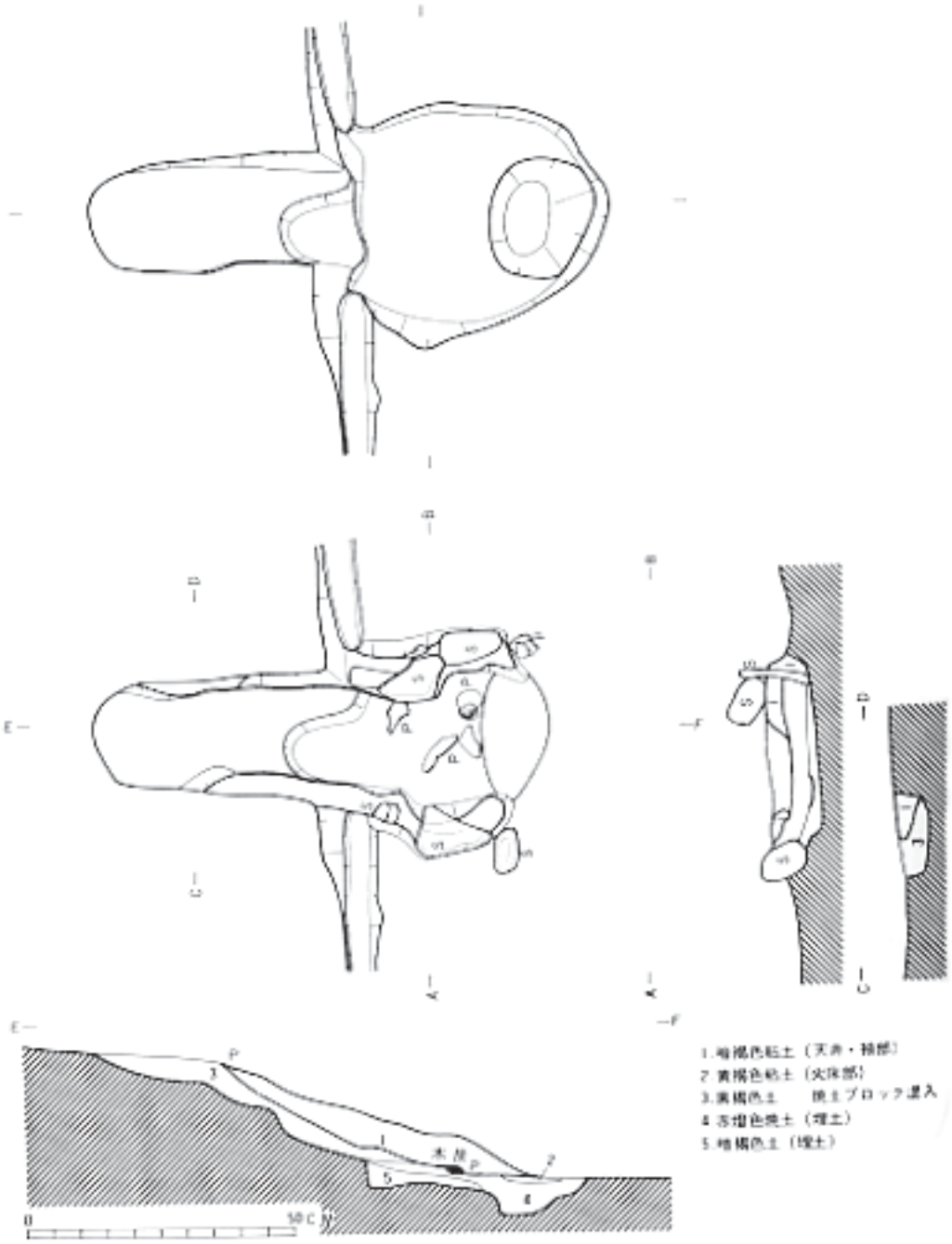
カマドは東壁に中央部から若干ずつ北・南寄りに2基検出した。左側のカマドは住居構築と同時に設置されたものと思われ燃焼部は消滅していた。右側のカマドはその後改築したものと思われ、袖部に石材を使い赤褐色粘土（灰白色粘土）でかため、さらに燃焼部天井もこの粘土でつくられている。又、煙道はローム層をくり抜いたトンネル方式のもので、きわめて保存状



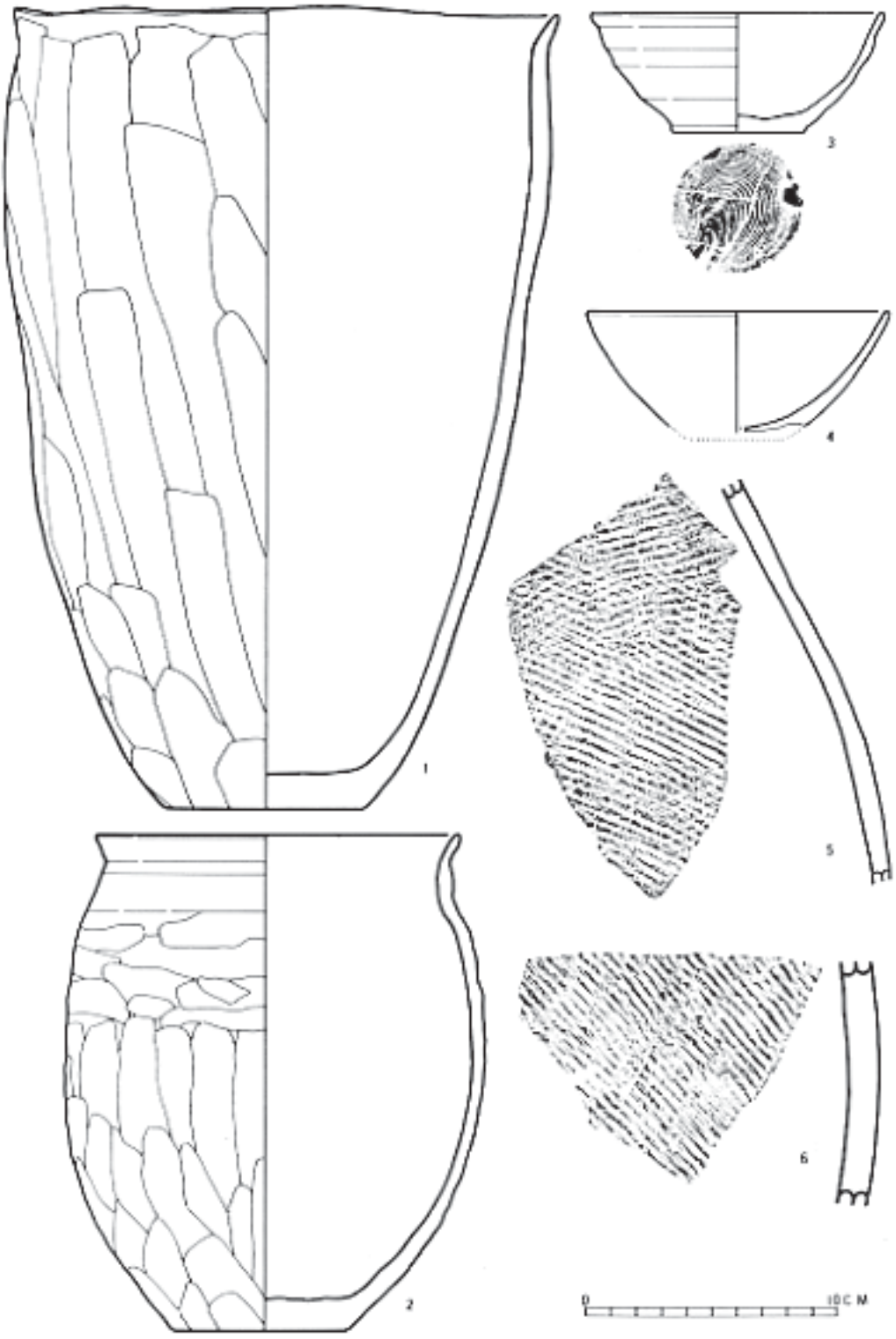
第 177 図　歴史時代遺構配置図

1. 黒褐色土（シルト）
2. 暗褐色土　ローム粒子・カーボン若干混入
3. 暗褐色土　小さな粘土ブロック若干混入
4. 暗褐色土　カーボン焼土多量に混入
5. 暗褐色土　カーボンが多量に混入
6. 暗褐色土　粘土ブロック混入
7. 褐　色　土　6層と同じ
8. 黒褐色土　6層と同じ
9. 暗褐色土　粘土ブロック混入
10. ロームブロック混入
11. ロームブロック若干混入

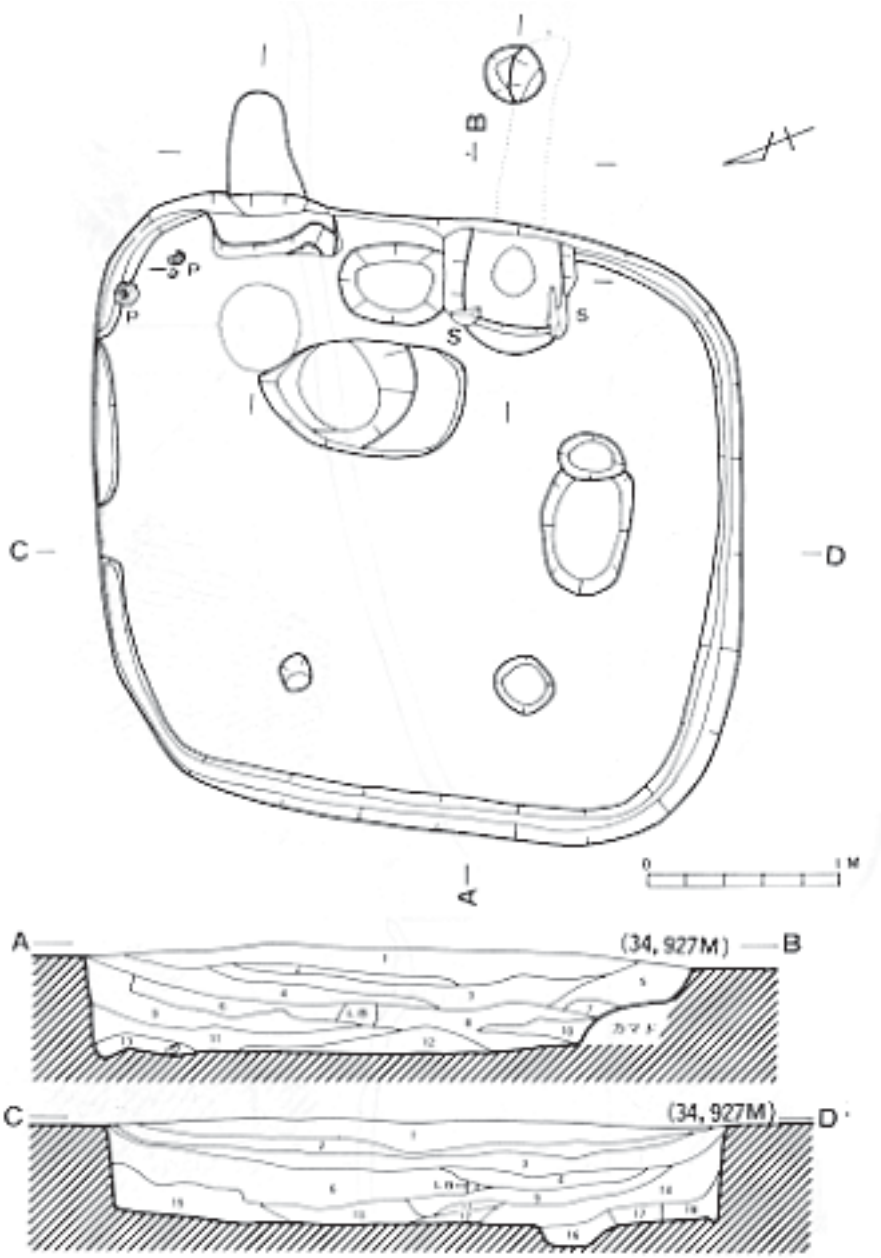
第178図　第1号住居跡実測図



第 179 図　第 1 号住居跡カマド実測図

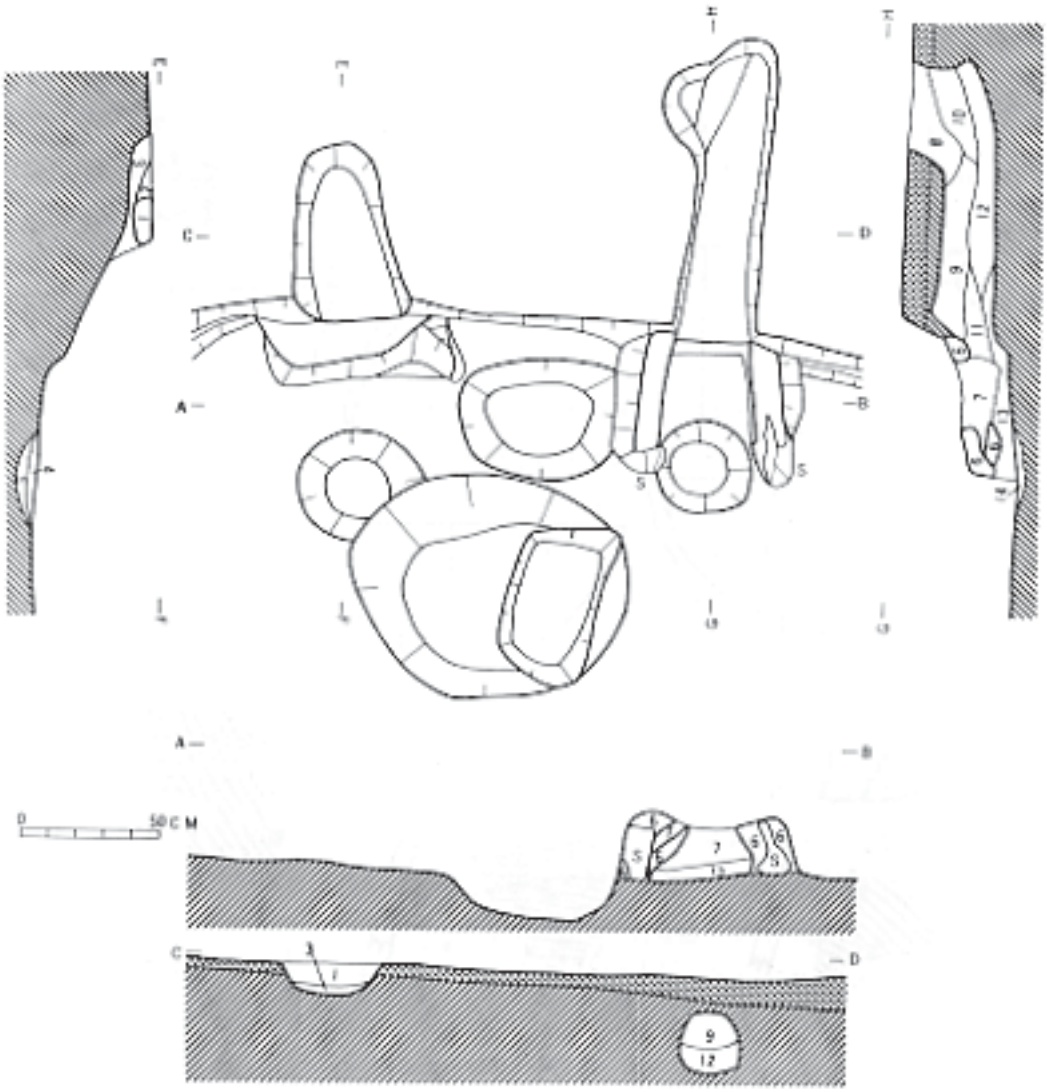


第 180 図　第 1 号住居跡出土遺物



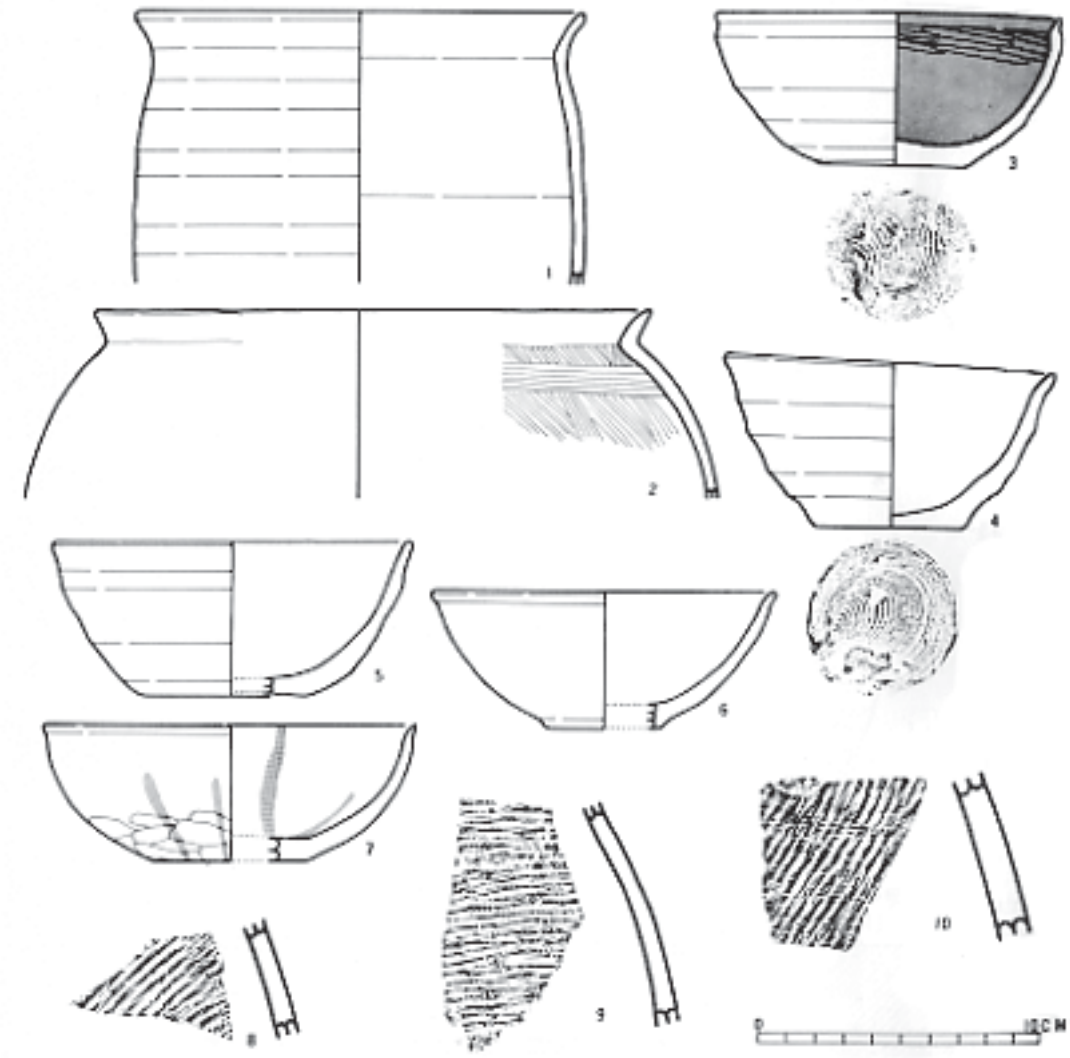
1. 暗褐色　ローム粒子、軽石混入
2. 暗褐色土　ローム粒子、軽石若干混入
3. 黄褐色粘土　粘土にローム粒子多量混入
4. 暗褐色土　ローム・ブロック混入
5. 暗褐色土　カーボン・粘土混入
6. 暗褐色土　カーボン・軽石混入
7. 明褐色土　粘土である。
8. 黒褐色土・粘土ブロック混入
9. 暗褐色土　粘土・カーボン若干混入
10. 明褐色土　粘土である。
11. 黒褐色土　カーボン・軽石・ローム混入
12. 明褐色土　ローム粒子・カーボン混入
13. 灰褐色土　白色ローム混入
14. 暗褐色土　カーボン・焼土・ローム粒子混入
15. 茶褐色土　粘土ブロック・軽石混入
16. 暗褐色土　カーボン・焼土混入
17. 赤褐色土　焼土である
18. 灰褐色土　白色ローム混入

第 181 図　第 2 号住居跡実測図



1. 赤褐色粘土（煙道部天井）
2. 暗褐色土（粗砂）焼土混入
3. 黒褐色土（粗砂）カーボン混入
4. 赤橙色焼土（埋土）
5. 赤橙色焼土（埋土）
6. 明褐色粘土（燃焼部天井）
7. 暗褐色土（細砂）若干粘土粒子混入
8. 暗褐色土　7と同じ
9. 暗褐色土（細砂）
10. 明褐色土（細砂）粘土ブロック・焼土混入
11. 暗褐色土（粗砂）焼土混入
12. 黒褐色土（粗砂）
13. 暗褐色土（粗砂）焼土・カーボン混入
14. 赤橙色焼土（火床部）

第 182 図　第 2 号住居跡カマド実測図



第 183 図　第 2 号住居跡出土遺物

態が良好である。若干、第 2 カマドの煙出し孔が煙道からずれている。

出土遺物は、甕形土器 2 個体、坏 4 個体、須恵器の坏 1 個体と大形甕の破片が出土している。（第 183 図－ 1）は回転台使用で器面の調整を行っており、（7）の器面には須恵器の坏特有の重ね焼きの火だすきの痕跡を有する。

第3号住居跡（第184～186図）

D－4区のIV層上面で確認したもので、第4号住居跡と重複しており東壁、カマド煙道部を切断して構築している。平面形は方形を呈し主軸S－74°－Eで、南・北壁5.7m×東・西壁5.6mを測る。覆土はいずれも自然堆積土を示し、10層に区分でき1・2層を除く層に多量のローム粒子、ブロックを混入する。西壁は4号住居跡の覆土を壁としているため若干柔かいが、他壁はIV・V層であるため堅く、また立ち上がりもほぼ垂直である。床面はほぼ平坦で貼床の痕跡は見られず堅く踏み締まっている。柱穴は各コーナーに1個ずつ配しており、又、床面中央部に100cm×70cm、深さ40cmのピットも検出された。内部からは多量の石と坏形土器（第186図・7）が1点出土した。周溝は南壁の西側で一部切れるが、幅10cm、深さ20cmのものを壁沿いに一巡させている。

カマドは灰白色粘土を素材として、多量の石材を袖部に使用しているがかなり崩壊している。燃焼部及び、煙道部の天井はすでに消滅しており、燃焼部から前庭部にかけて多量の石材が散乱している。又、左袖脇に甕形土器底部の埋甕が検出された。

出土遺物は、甕形土器3個体（第186図－1～3）、耳皿（4）、坏形土器7個体（5～11）須恵器小型甕（12）などが出土した。第186図－5の坏形土器は外器面に墨書「大」字が記されている。

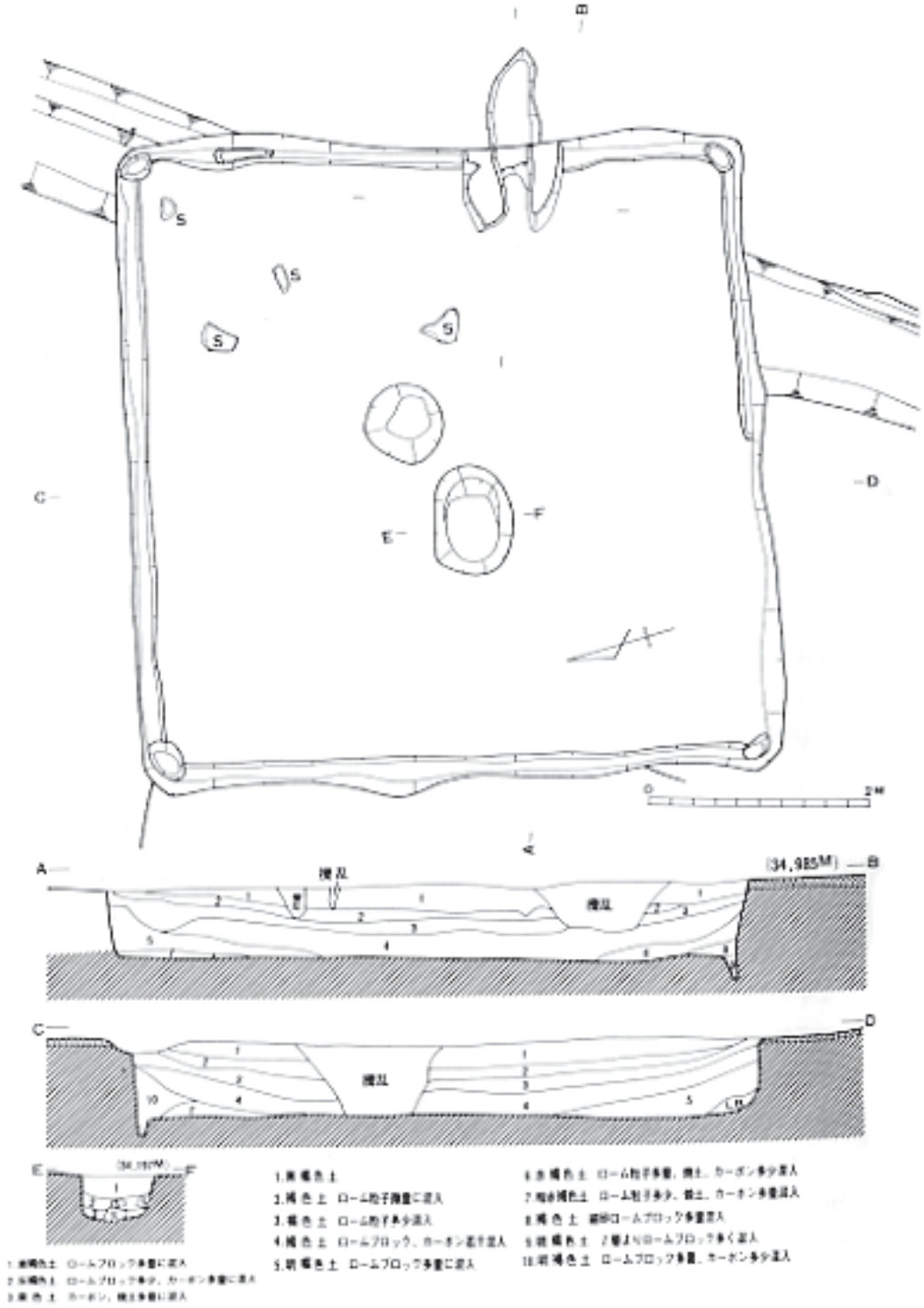
第4号住居跡（第187～189図）

C・D－3区のV層上面で確認したもので、主軸S－63°－Eで、規模は南壁5.6m×西壁5.6mの方形を呈する住居跡であり、第3号住居跡と重複している。

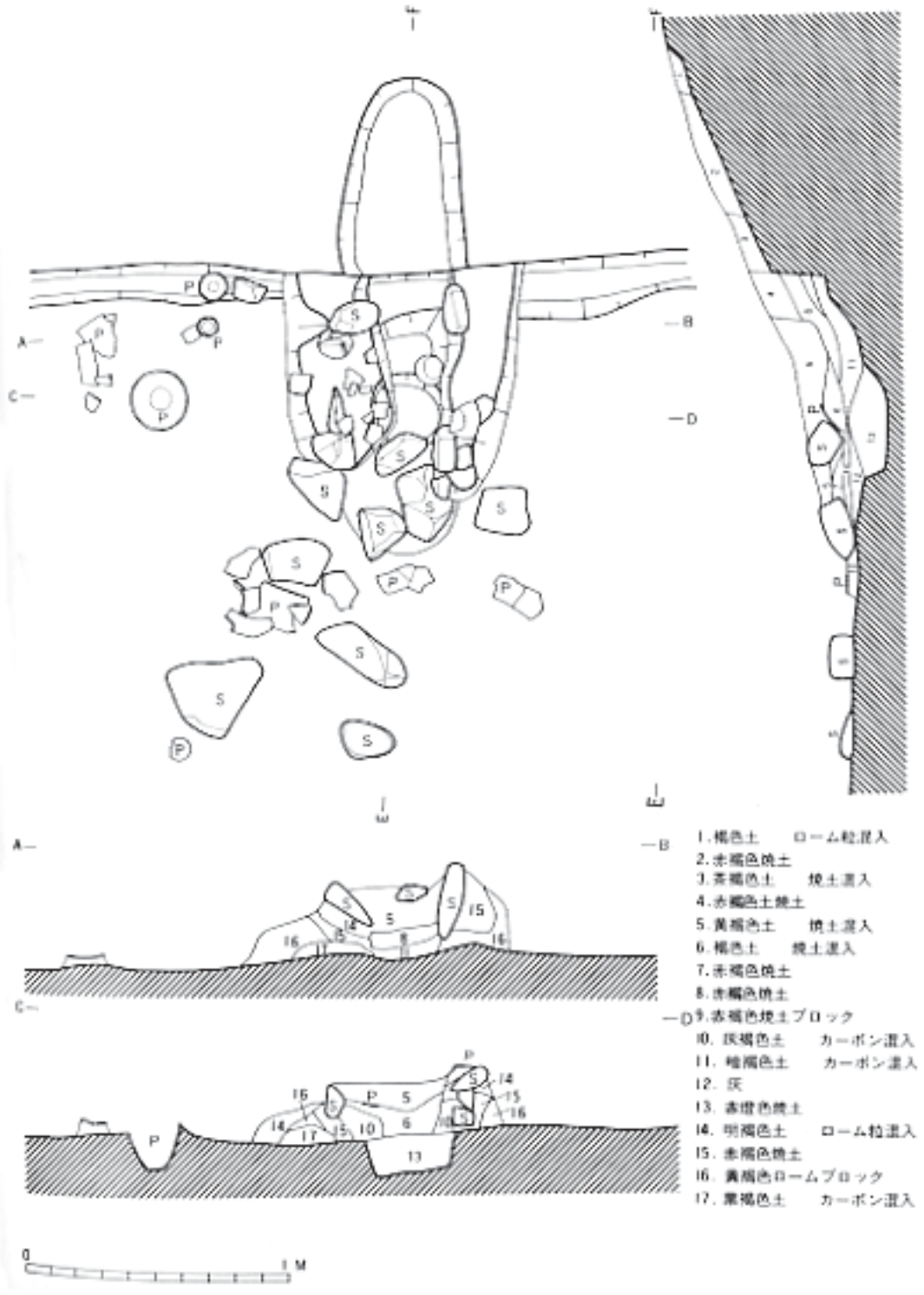
覆土は10層に区分でき、いずれも自然堆積を示すが全層に多量のロームを混入する。壁は直線的で、立ち上がりは垂直に近く、床面はほぼ平坦で堅く貼床の痕跡は認められない。又、3号住居跡と切り合っているため、東壁と煙道は破壊されている。柱穴は北東を除く3コーナーにあり、深くしっかりしたものである。ピットはカマド右袖脇（灰捨て場）と前庭部後方にあるがいずれも浅いものである。周溝は南壁東寄りで途切れるが壁沿いに一巡させている。カマドは東壁中央部から南寄りに設置しており、両袖に石材を使用し灰白色粘土で本体を構築している。煙道部は重複によって消滅しており、土圧によって燃焼部天井は潰れていたが比較的明瞭に現存していた。又、前庭部は床面より10cm程低く作られており、非常に堅く締まっている。出土遺物は甕形土器・坏・須恵器片などがあり、複合有段口縁の甕（第189図－1・2）ロクロ製内黒坏（5）も出土した。

第5号住居跡（第190～192図）

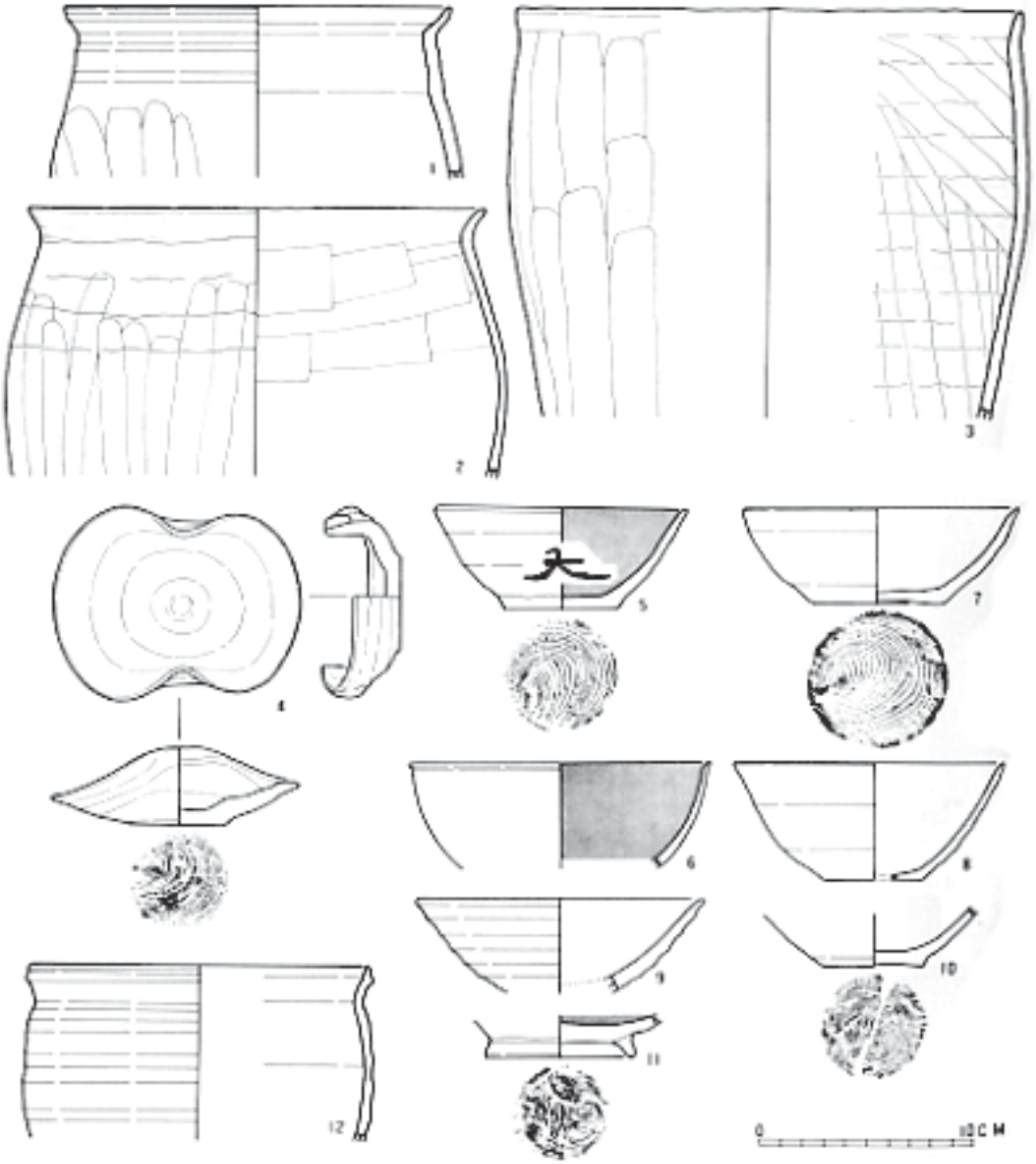
南東斜面のC－6区のIV層上面に確認したもので第6号住居跡と重複しており一部を切断し、本遺構が構築されている。又、後世溝遺構によって東壁半分とカマド燃焼部が破壊されている。主軸S－53°－E、規模南・北壁6.45m×東・西壁6.3mで、方形を呈する。覆土は細分して25層に区分でき、いずれも自然堆積の層序を示す。なお6～11層には多量のロームを混入する。



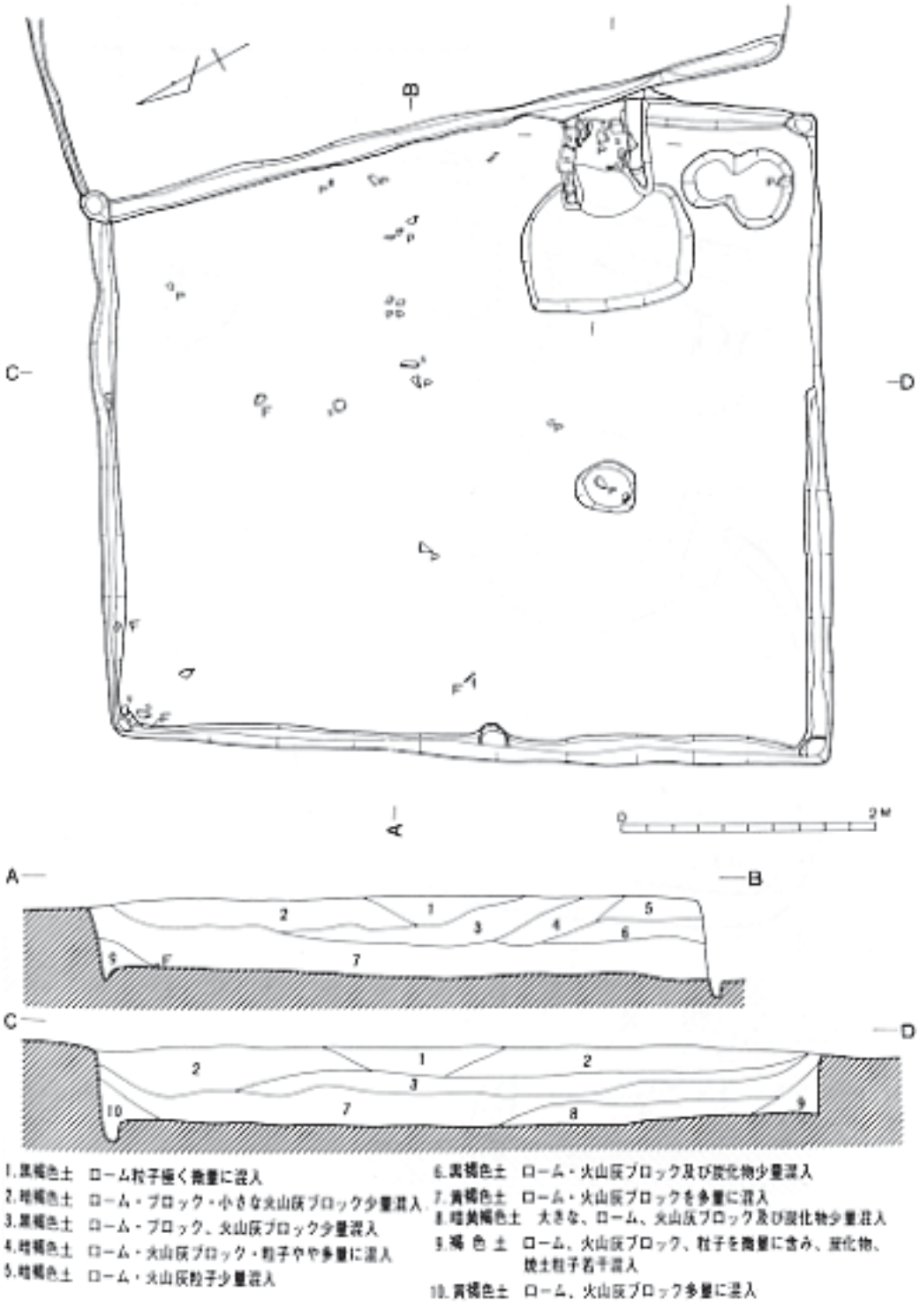
第 184 図　第 3 号住居跡実測図



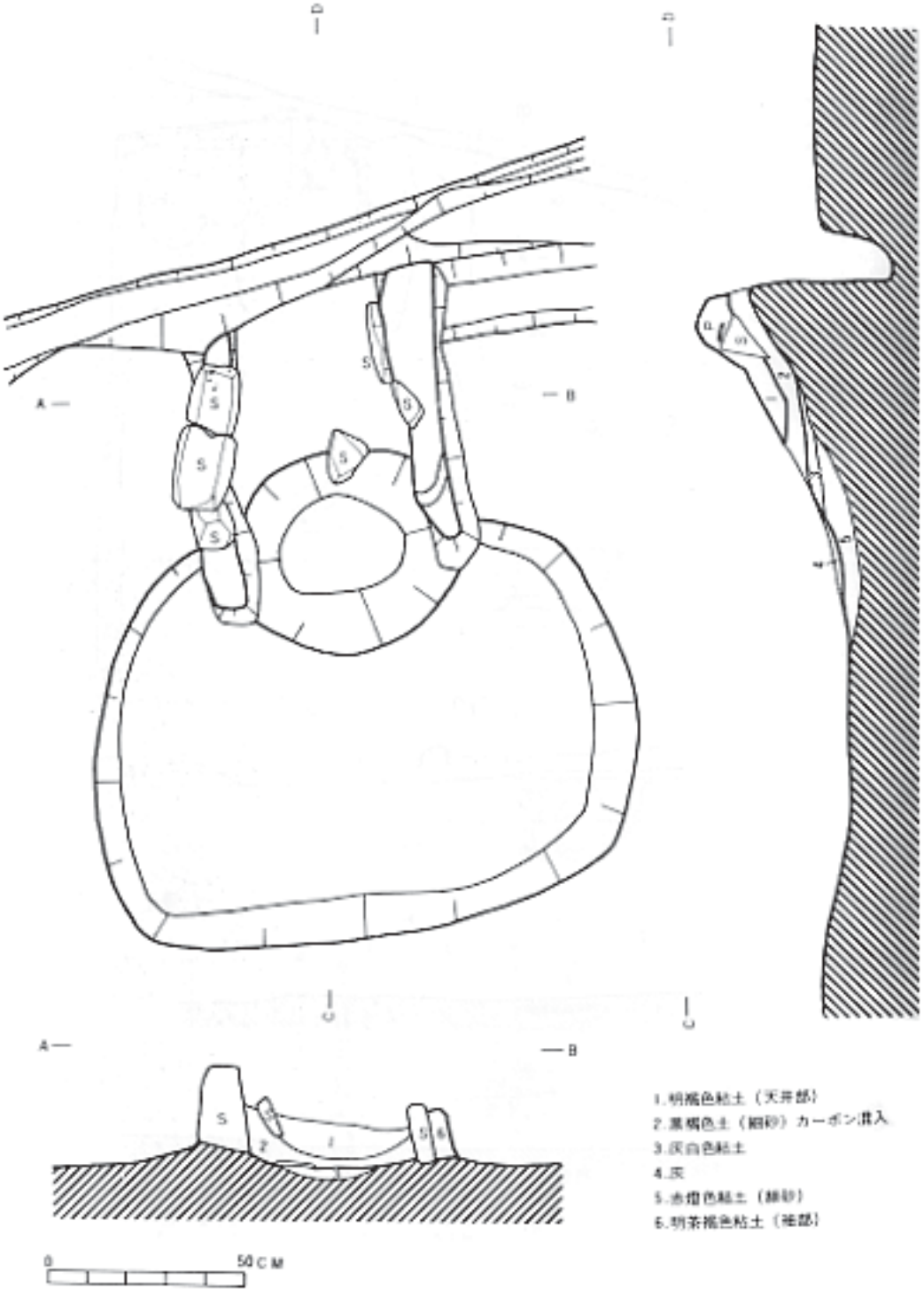
第 185 図　第 3 号住居跡カマド実測図



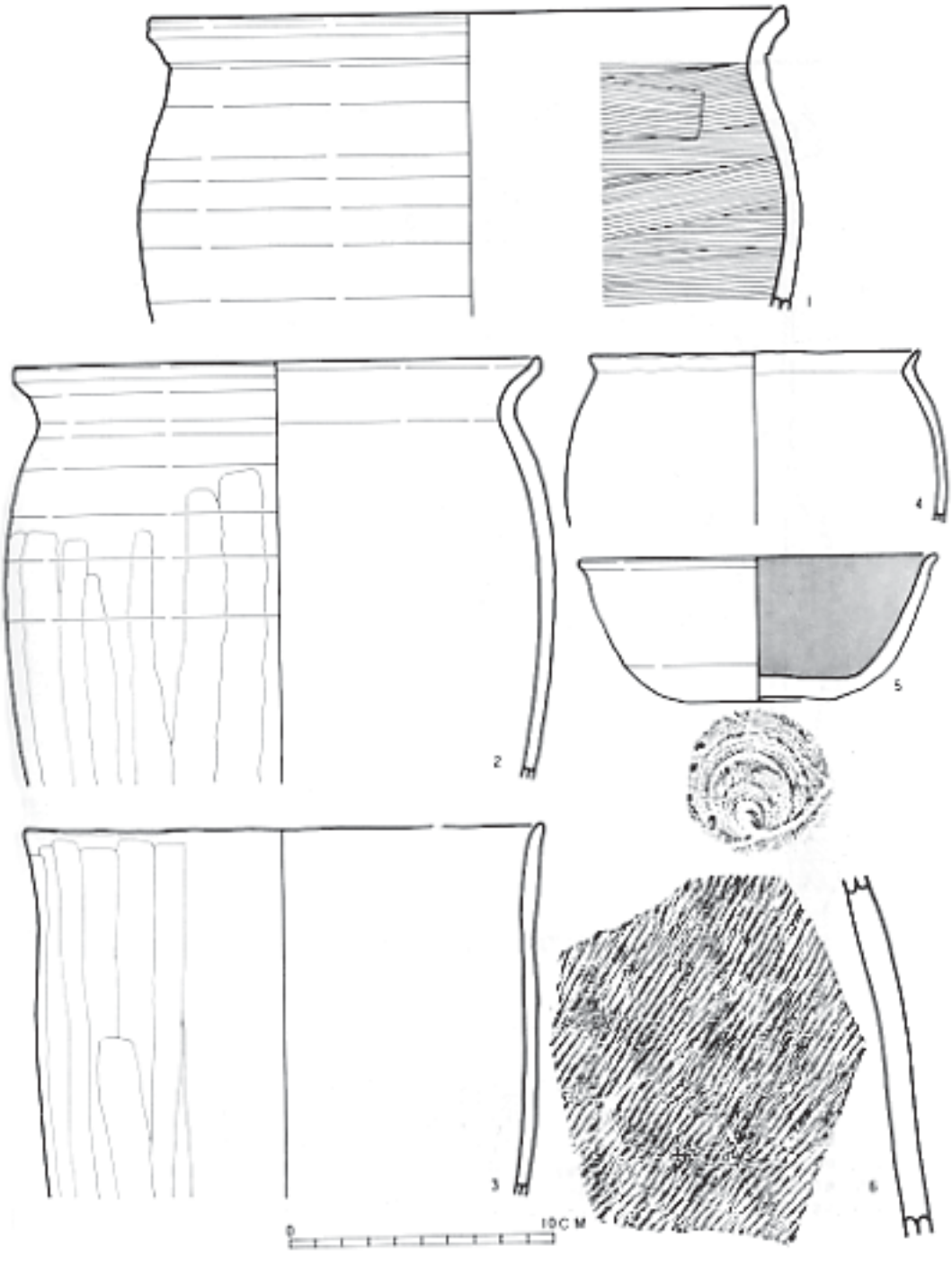
第 186 図　第 3 号住居跡出土遺物



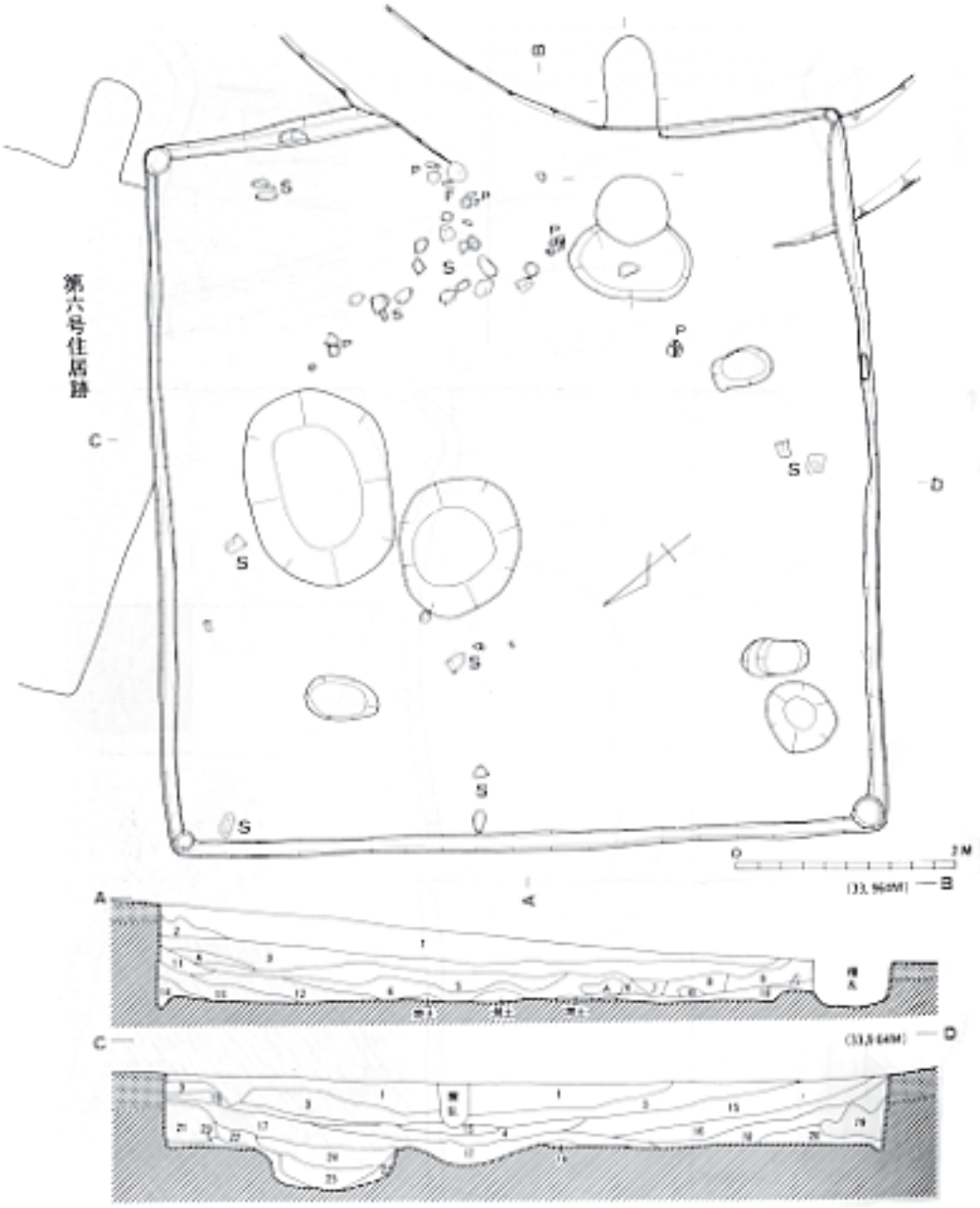
第 187 図　第 4 号住居跡実測図



第 188 図　第 4 号住居跡カマド実測図

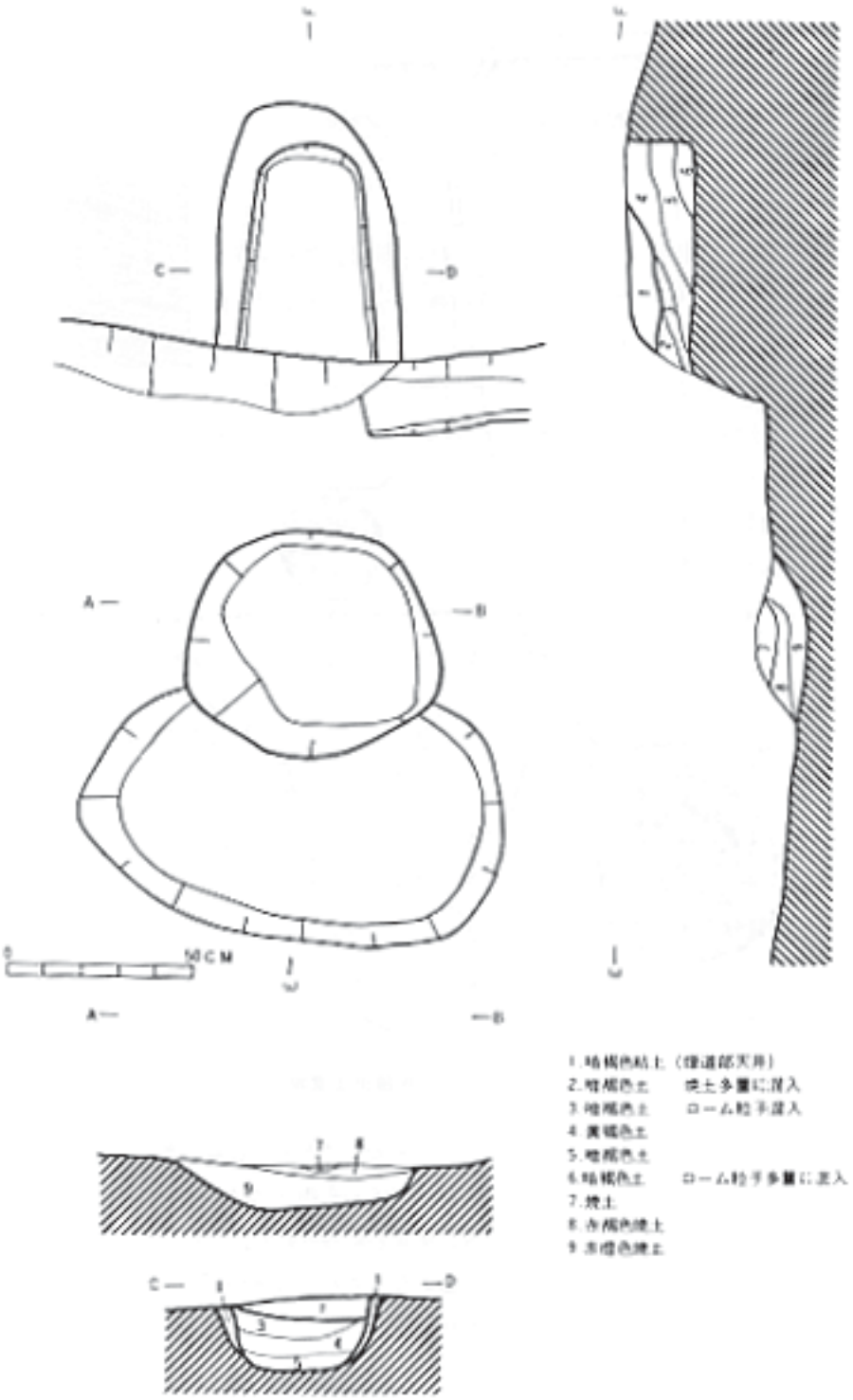


第 189 図　第 4 号住居跡出土遺物

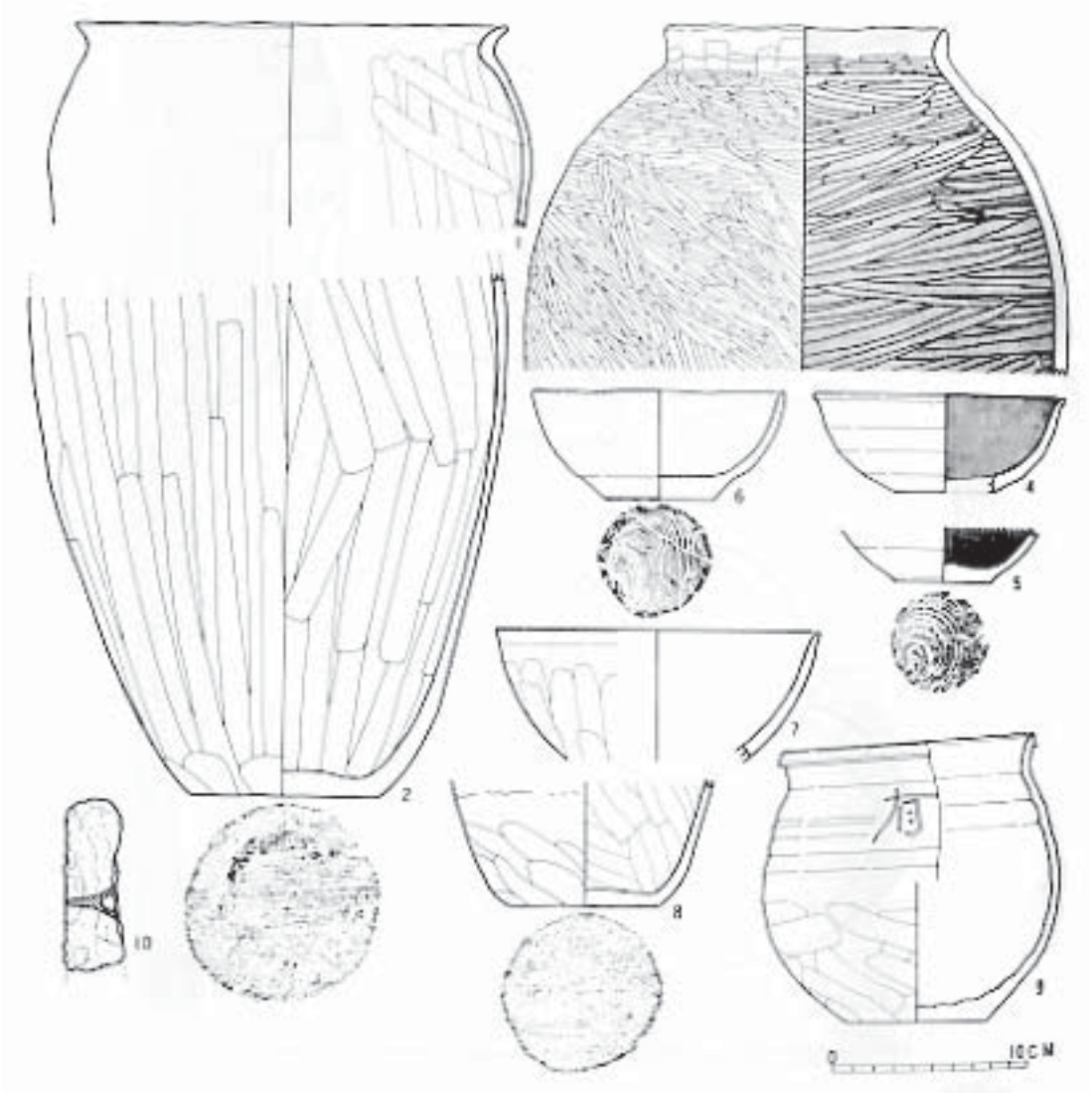


1. 黒　色　土　軽石混入
2. 黒褐色土　軽石、多量の粘土混入
3. 黒褐色土　軽石、ローム、粘土粒子混入
4. 黒褐色土　多量の軽石、粘土粒子混入
5. 黒褐色土　3と同じ
6. 暗褐色土　ローム、粘土ブロック混入
7. 暗褐色土　ローム、粘土粒子若干混入
8. 暗褐色土　6と同じ
9. 暗褐色土　7と同じ
10. 暗褐色土　ローム粒子混入
11. 暗茶褐色土　10と同じ
12. 黒褐色土　微量の粘土粒子
13. 暗褐色土　多量の粘土粒子混入
14. 黄褐色粘土
15. 黒褐色土　粘土ブロック混入
16. 黒　色　土　微量の粘土粒子、ブロック混入
17. 暗褐色土　粘土粒子、ブロック混入
18. 暗茶褐色土　微量の粘土粒子混入
19. 黒褐色土　粘土粒子若干混入
20. 暗褐色土　多量の粘土粒子、ブロック混入
21. 暗褐色土　黒色土若干混入
22. 暗褐色土　粘土粒子、軽石混入
23. 暗褐色土　22と同じ
24. 暗褐色土　ロームブロック、黒色土混入
25. 暗褐色土　ロームブロック混入
A 暗褐色土　粘土若干混入
B 黒褐色土　粘土粒子混入
C 黄茶褐色土　ロームブロック混入

第190図　第5号住居跡実測図



第 191 図　第 5 号住居跡カマド実測図



第 192 図　第 5 号住居跡出土遺物

壁は直線的で、立ち上がりは垂直であるが、北壁の東寄りは6号住居跡の覆土を壁としているため若干柔かいが他は堅く締まっている。床面は平坦で、北西床面は貼床をしており、柱穴は各コーナーに1個ずつあり深いものである。又、床面の北寄りに1.8m×1.3m、深さ40cmの大ピットがあり、隣接して1.3m×1.0mのピットもあり、これらは層位から住居跡と同時廃棄であり、住居内施設と見られる。各壁に沿って幅10cm、深さ10cmの周溝が一巡しており、南西壁と南東壁に1個ずつピットが検出された。カマドは東壁中央部から若干南寄りに設置しており、燃焼部は撹乱によって破壊されているが煙道部、火床部は現存していた。煙道部天井、壁部は灰白色粘土によって作られており保存も良好であった。又、前庭部は床面より10cm程低くつくられており、左袖脇には甕形土器（第 192 図－ 2）が床面に埋められており、その周辺には多量

の石が散布していた。

出土遺物は甕形土器、壺形土器、坏、須恵器小形甕、鉄製スキクワ等が出土した。（第192図－2・8）の甕形土器底面には板目痕があり、（9）の須恵器甕の頸部にはヘラ書きによる「有」字が刻まれている。

第6号住居跡（第193～195図）

C－6区のⅡB層上面（縄文後期包含層）に確認されたもので、5号住居跡と重複しており、主軸S－34°－E、北西・南東壁4.6m×北東・南西壁4.65mの規模で、方形を呈する。覆土は36層に細分でき自然堆積を示し、2・3・5・7・10・11・13・14・21・24・27・31・33～36層に多量のローム粒子・ブロックを混入している。壁は垂直に立ち上がり、床面は水平で貼床の痕跡は見られず堅く踏み締まっている。柱穴は若干浅いものを東コーナを除く3コーナーに1個ずつあり、周溝は壁に沿って幅20cm、深さ10cmのものを一巡させている。

カマドは南東壁中央部から南西寄りに位置しており、すでに燃焼部天井と両袖部は消滅していたがわずかに火床部だけが現存していた。白色粘土で構築された煙道部は土圧によってかなり潰れてはいたが保存は良好であった。なお確認面から床面までは1.1mと非常に深く掘り込んで構築している。甕形土器と内黒坏2個、須恵器片が出土している。

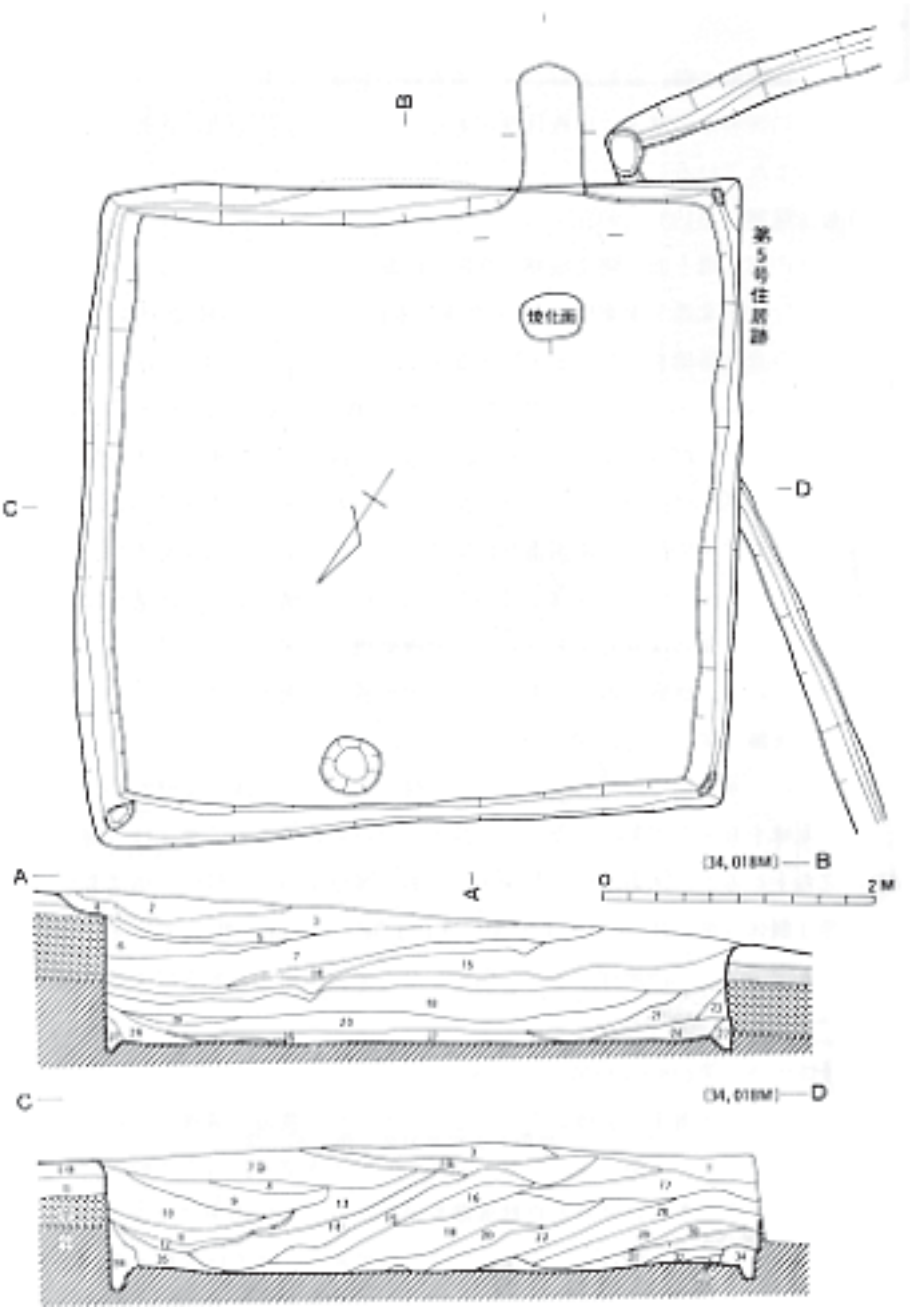
第7号住居跡（第196～197図）

D－6区のⅡ層上面で確認したもので、主軸S－57°－E、南・北壁2.7m×東・西壁3.0mで若干隅に丸味を有する方形で、カマドの設置のないものである。覆土は7層に区分され、壁は垂直に立ち上がるが、床面はかなりの凹凸があり幾分柔かい。柱穴、周溝も検出されなかった。甕形土器3個体（第197図－1・4・5、うち1個（4）は内黒）、若干荒い糸による切り離しの見られる坏（2）と内黒坏（3）が出土した。又、断面正方形を呈する鉄製鏃（6）も検出された。

第8号住居跡（第198～199図）

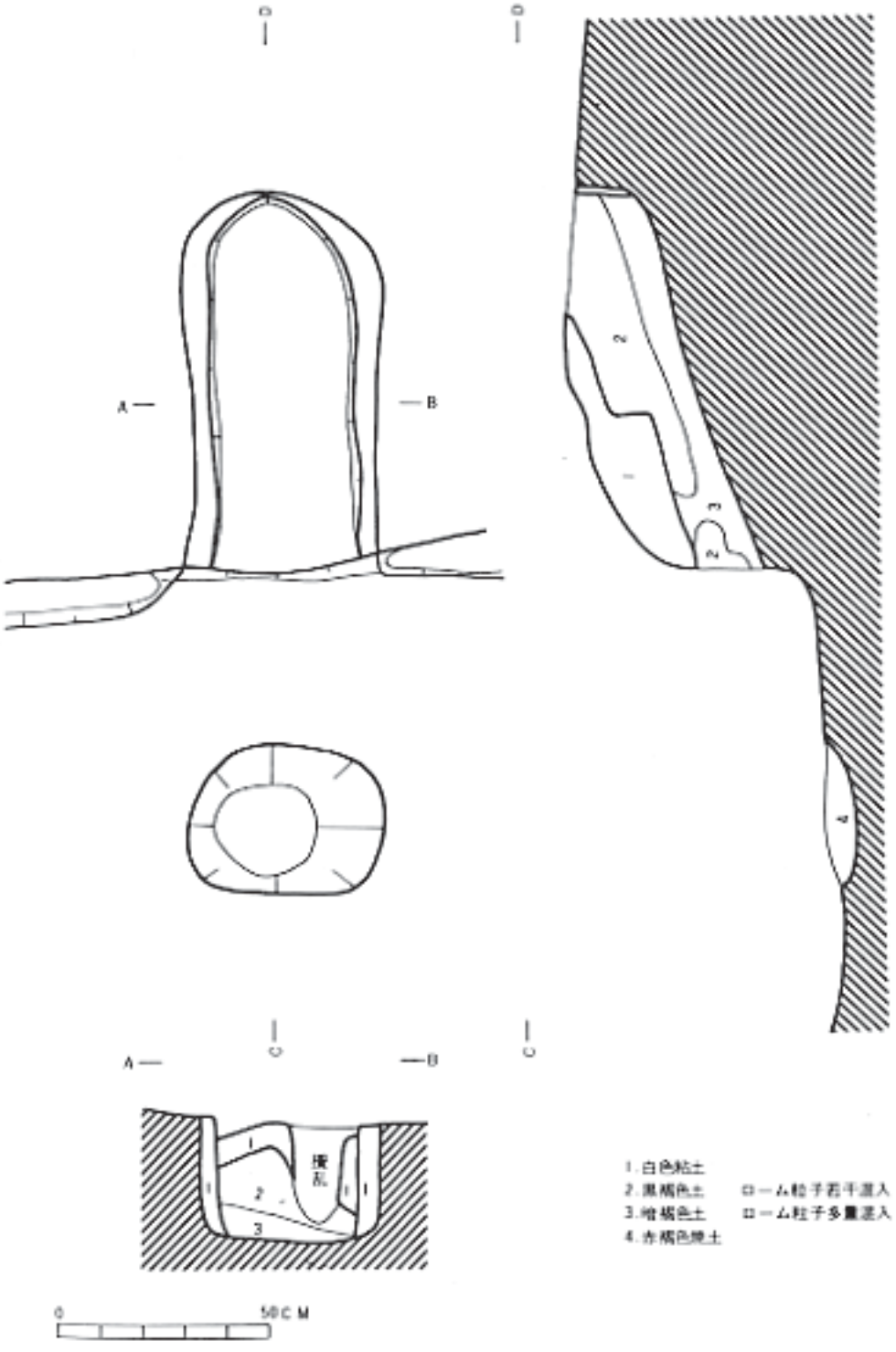
D－7・8区のⅣ層上面で確認されたものであるが、農道に隣接しているため3分の2程しか精査できなかった。主軸S－22°－E、北壁8.65m×西壁8.55mの比較的大形のものである。覆土は25層に区分でき、いずれも自然堆積を示し、ローム粒子・ブロックの混入量が窮めて多い。壁立ち上がりは垂直に近く、床面もほぼ平坦である。柱穴は北東・西コーナーに若干内傾したものがあり、その他にも西壁側に多数のピットが検出されたがこれらは柱穴ではない。又、北側中央部に90×50cm・深さ30cmの大ピットも検出され、中からは坏（第199図－6）も出土した。周溝は壁沿いに幅15cm・深さ10cmのものを巡らしている。農道の為カマドの検出はできなかったが、南側に焼土の跡があったのでその付近に設置しているものと見られる。

出土遺物は甕形土器・坏・須恵器壺片・甕片などが出土した。（第199図－2）は甕形土器の底部片であるが、底面に編み物状の圧痕を有する。内面上半を横位、下半を縦位にヘラナデ痕を有する内黒坏（3・4）、器高の低い坏（7）なども出土した。

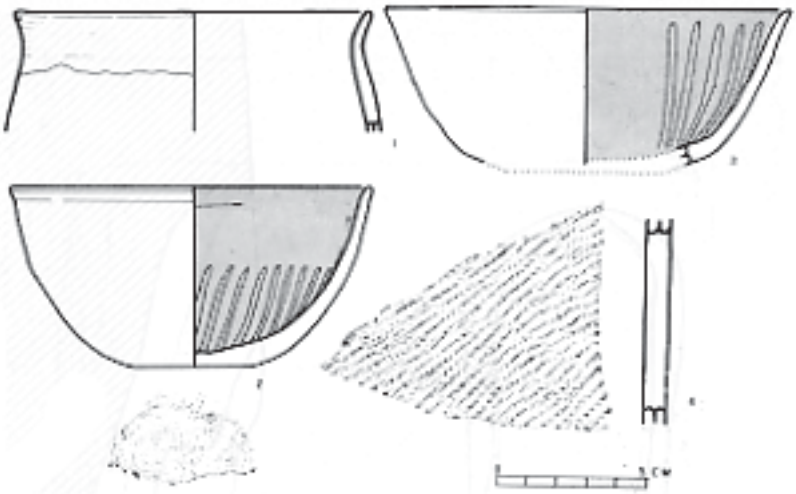


1. 黒　色　土(細砂)
2. 明茶褐色粘土　(V層のローム多量に混入)
3. 茶褐色土　全体に粘土小ブロック混入
4. 暗褐色土　(細砂)
5. 茶褐色土　IV、V層の小ブロック混入
6. 黒褐色土　(粗砂) カーボン若干混入
7. A 明茶褐色粘土　(火山灰ロームの混合)
7. B 暗褐色土　ロームブロック混入
8. 黒　色　土(シルト)
9. 黒褐色土　カーボン、ローム粒子若干混入
10. 明褐色土　ローム粒子多量混入
11. 明褐色土　ロームブロック層
12. 木　炭　層
13. 明褐色土　ローム小ブロック層
14. 明褐色土　ローム大ブロック層
15. 黒褐色土　(細砂) 火山灰ブロック混入
16. 黒褐色土　(細砂)
17. 黒褐色土　(細砂) ロームブロック混入
18. 黒褐色土 (細砂)
19. 黒褐色土　(シルト) ローム、カーボン混入
20. 黒　色　土(シルト)
21. ロームブロック層　黒色土、火山灰の混合
22. 暗褐色土　ローム粒子、カーボン混入
23. 黒褐色土　ローム粒子若干混入
24. ロームブロック層
25. 木　炭　層
26. 黒褐色土　ローム小ブロック混入
27. ロームブロック　(壁崩壊土)
28. 暗褐色土　ローム小ブロック多量に混入
29. 黒褐色土　ローム粒子、カーボン混入
30. 暗褐色土　ローム、カーボン混入
31. 黒褐色土　火山灰、ローム混入
32. 黒褐色土　若干カーボン混入
33. 暗褐色土　ロームブロック混入
34. ロームブロック　(壁崩壊土)
35. 暗褐色土　ローム小ブロック多量混入
36. ロームブロック　(壁崩壊土)

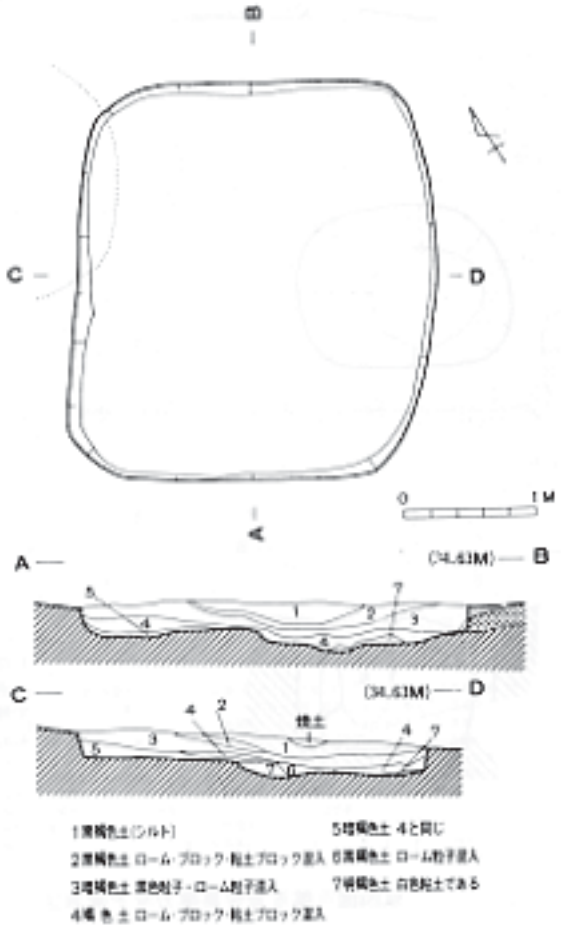
第 193 図　第 6 号住居跡実測図



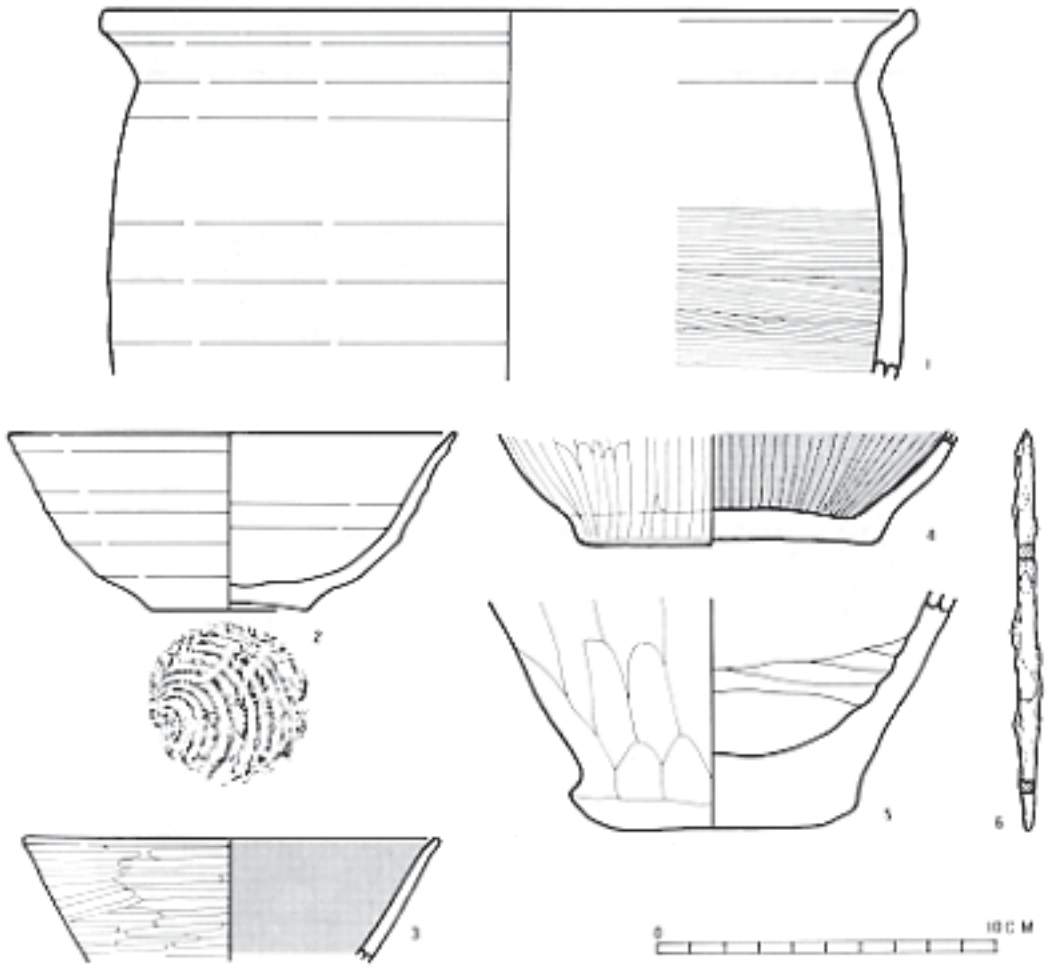
第 194 図　第 6 号住居跡カマド実測図



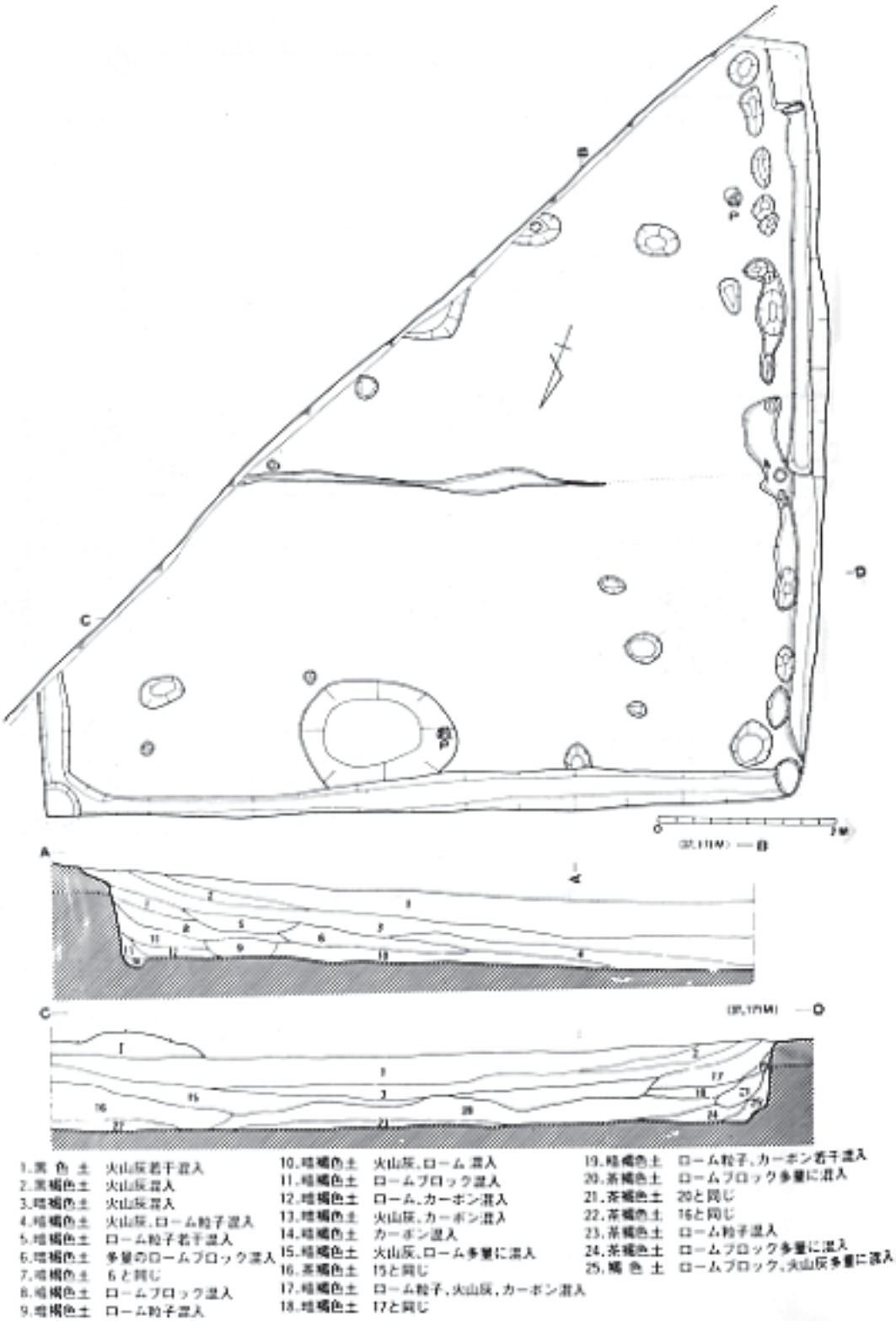
第 195 図　第 6 号住居跡出土遺物



第 196 図　第 7 号住居跡実測図



第 197 図　第 7 号住居跡出土遺物



第 198 図　第 8 号住居跡実測図

第 199 図　第 8 号住居跡出土遺物

第9号住居跡（第200～202図）

E－5区でⅣ層上面に確認したもので、主軸S－32°－E、規模南・北壁5.5m×東・西壁5.0mの方形を呈するもので、塹壕によって北・南東壁の一部が破壊されている。覆土は15層に区分でき、自然的堆積を示し、3層のような多量のロームブロックを混入する層もある。壁は若干曲線を呈するが立ち上がりはほぼ垂直で、床面も平坦で堅く締まっている。柱穴は検出できず多数のピットはあったがいずれも浅いものである。

カマドは南東壁中央部から若干南西寄りに1基（第1カマド）、北東寄りに1基（第2カマド）が検出された。第1カマドはすでに燃焼部は壊され消滅しておりわずかに煙道部と火床部だけが残っていた。第2カマドは本体が暗褐色粘土（灰白色粘土）で構築されており保存状態が窮めて良好であった。多少土圧によって潰れていたが燃焼部には火床に埋め込み直立した土製支脚も出土した。又、右袖脇には灰捨て場と見られるピットも確認した。

出土遺物は甕形土器・坏・鉢・須恵器坏・甕破片・土製支脚・砥石・鉄製スキクワなどが出土した。（第202図－3・4）はいずれも内黒の台付坏で内面には縦位のヘラミガキが見られる。(9）の須恵器坏の外面にはヘラ書きによる「✕」印が記されている。これは第49号住居跡より出土した大形甕の頸部に刻印されたものと類似する。又、スキクワ（15）の完全な形の鉄製農具も出土した。

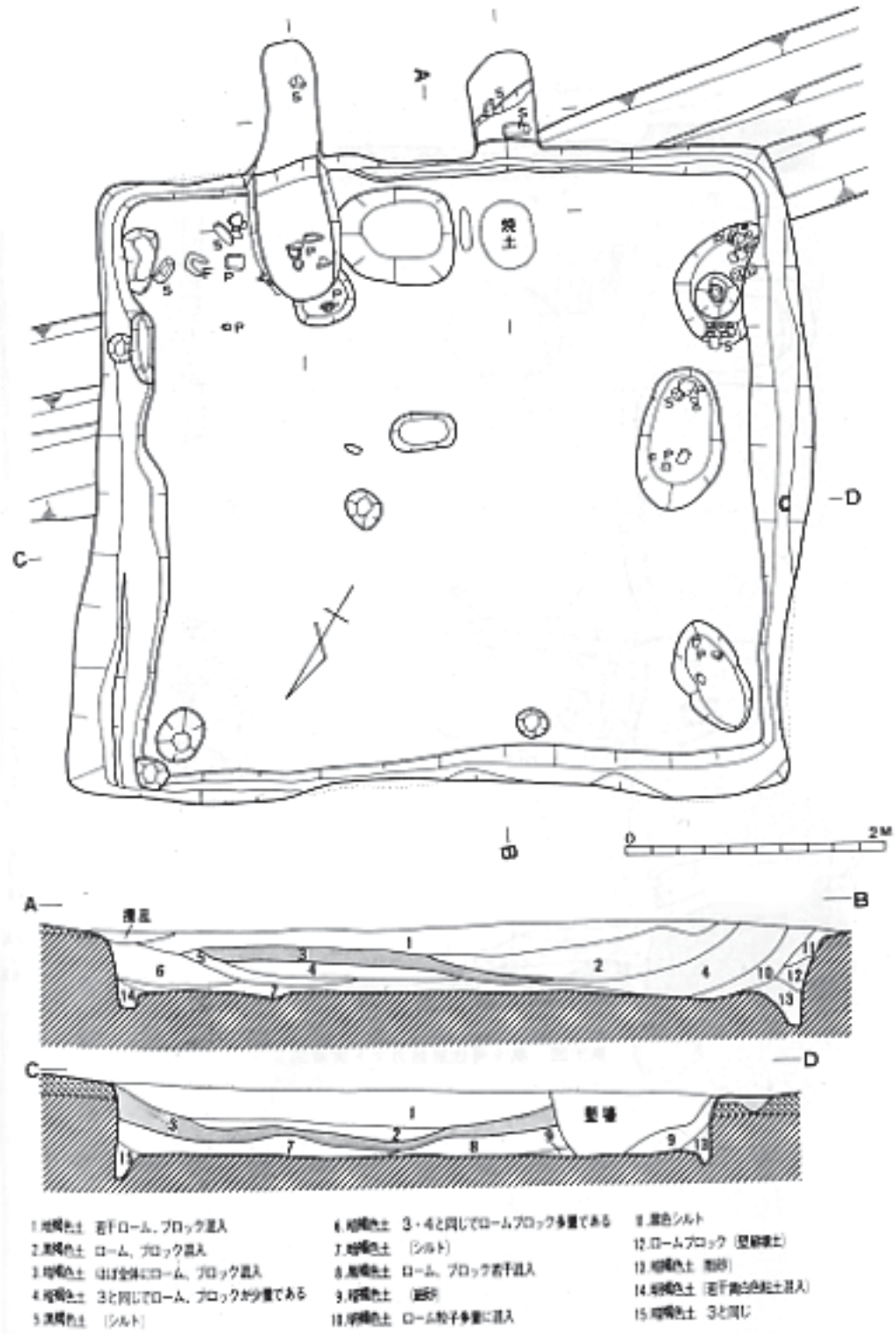
第10号住居跡（第203～205図）

E・D－4区のⅤ層上面で確認したもので、主軸S－66°－E、規模南・北壁3.5m×東・西壁3.5mで方形を呈するもので、第11号住居跡と重複しているが時間的には本遺構の方が新しいものである。覆土は12層に区分でき自然堆積を示す。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直にちかいものである。柱穴は北壁コーナーに1個検出したがほかにはない。周溝は南・東壁の一部で途切れるが、他は壁沿いに一巡させている。

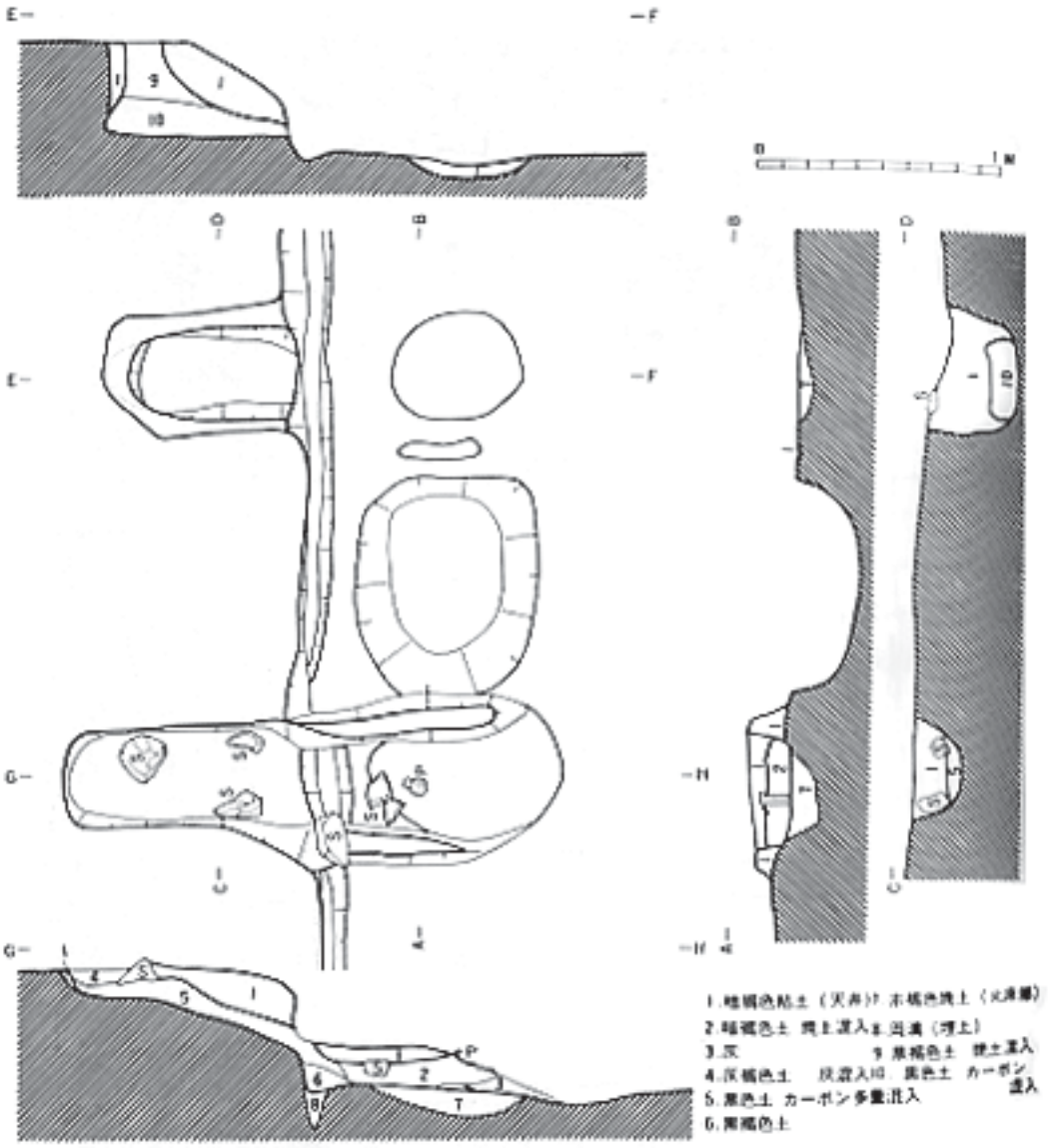
カマドは東壁中央部から若干北寄りに設置しており、保存も良好である。袖部に石材を用い粘土でかためたもので、煙道はローム層を掘り抜いたトンネル状のものである。燃焼部は天井が崩壊し消滅していた。甕形土器（第205図－1・2）・坏（3）・須恵器大型甕破片（4・5）が出土した。

第11号住居跡（第206～208図）

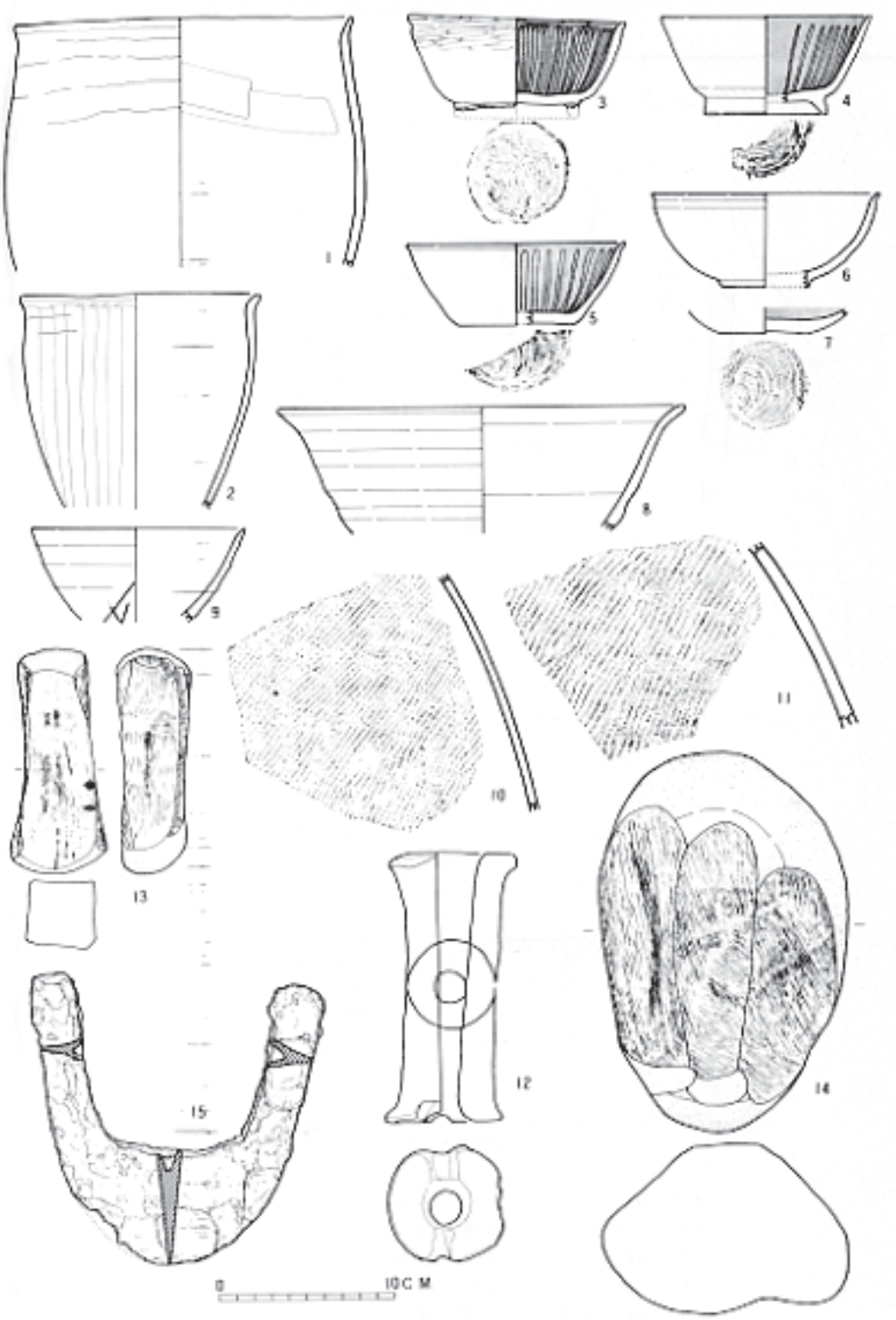
D－4区Ⅲ層上面で確認したもので、第10号住居跡と重複している。主軸S－55°－E、規模南・北壁3.5m×東・西壁3.6mの方形を呈するもので切り合いにより北壁の一部が破壊されている。自然堆積を示す14層に区分でき、壁は若干緩い立ち上がりで、床面は幾分凹凸が見られる。柱穴は四隅に検出され、周構は東壁を除く各壁沿いに幅30cm、深さ15cmのものを巡らしている。カマドは東壁中央部から北寄りに設置しているが、燃焼部天井、左袖部は崩壊していた。甕形土器（第208図－1～3）と、須恵器大型甕の口縁部から肩部にかけてのもの（4）が出土した。



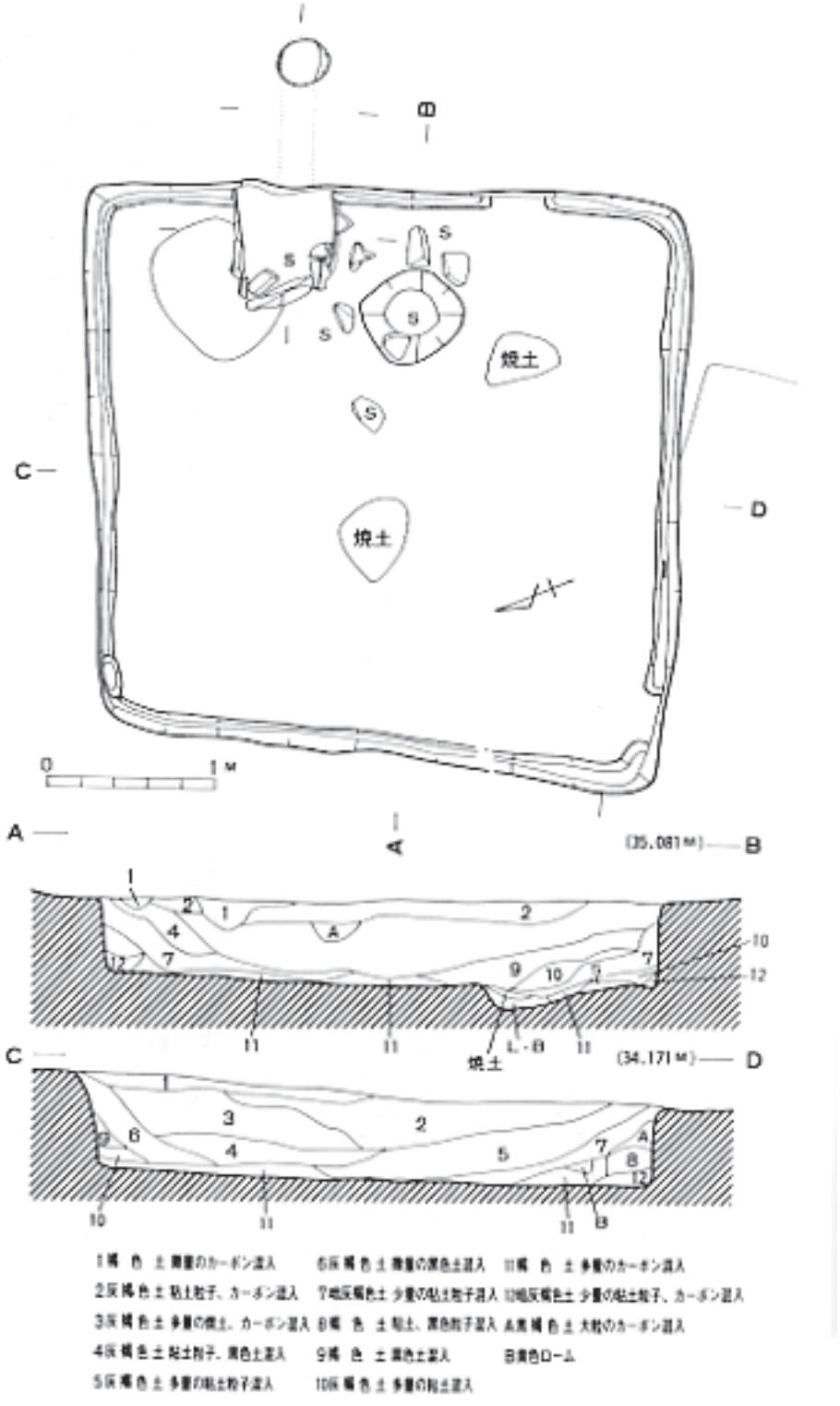
第 200 図　第 9 号住居跡実測図



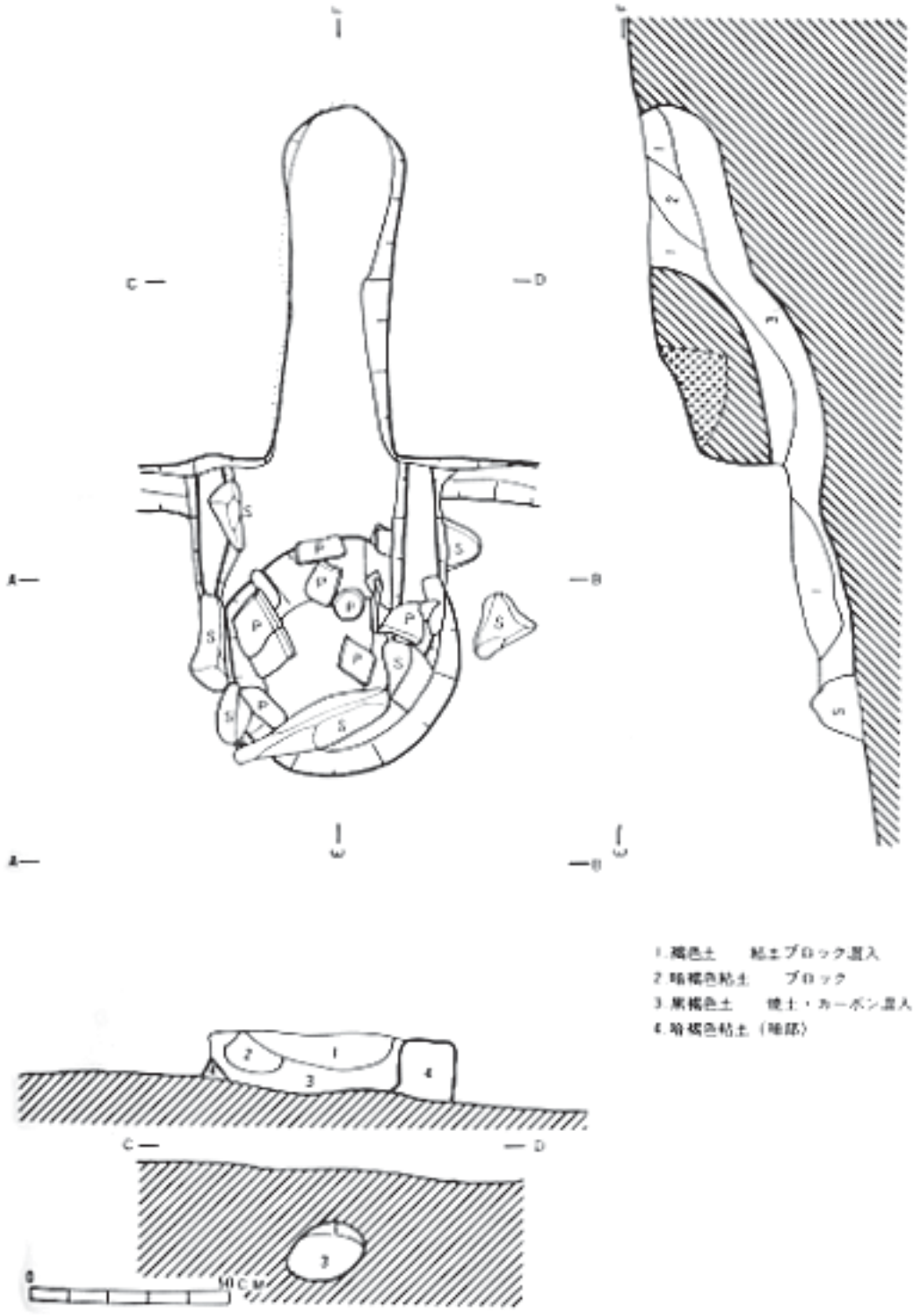
第 201 図　第 9 号住居跡カマド実測図



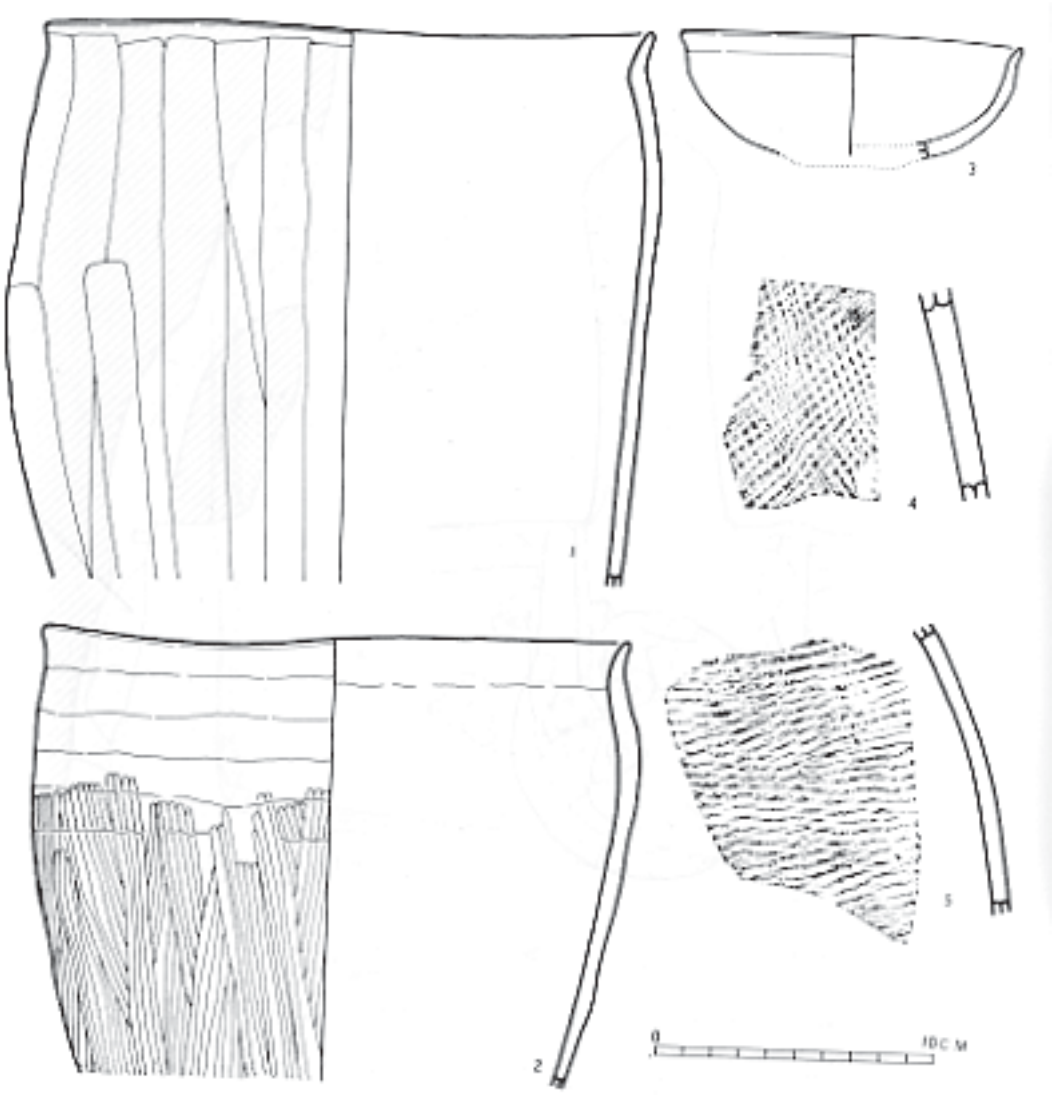
第 202 図　第 9 号住居跡出土遺物



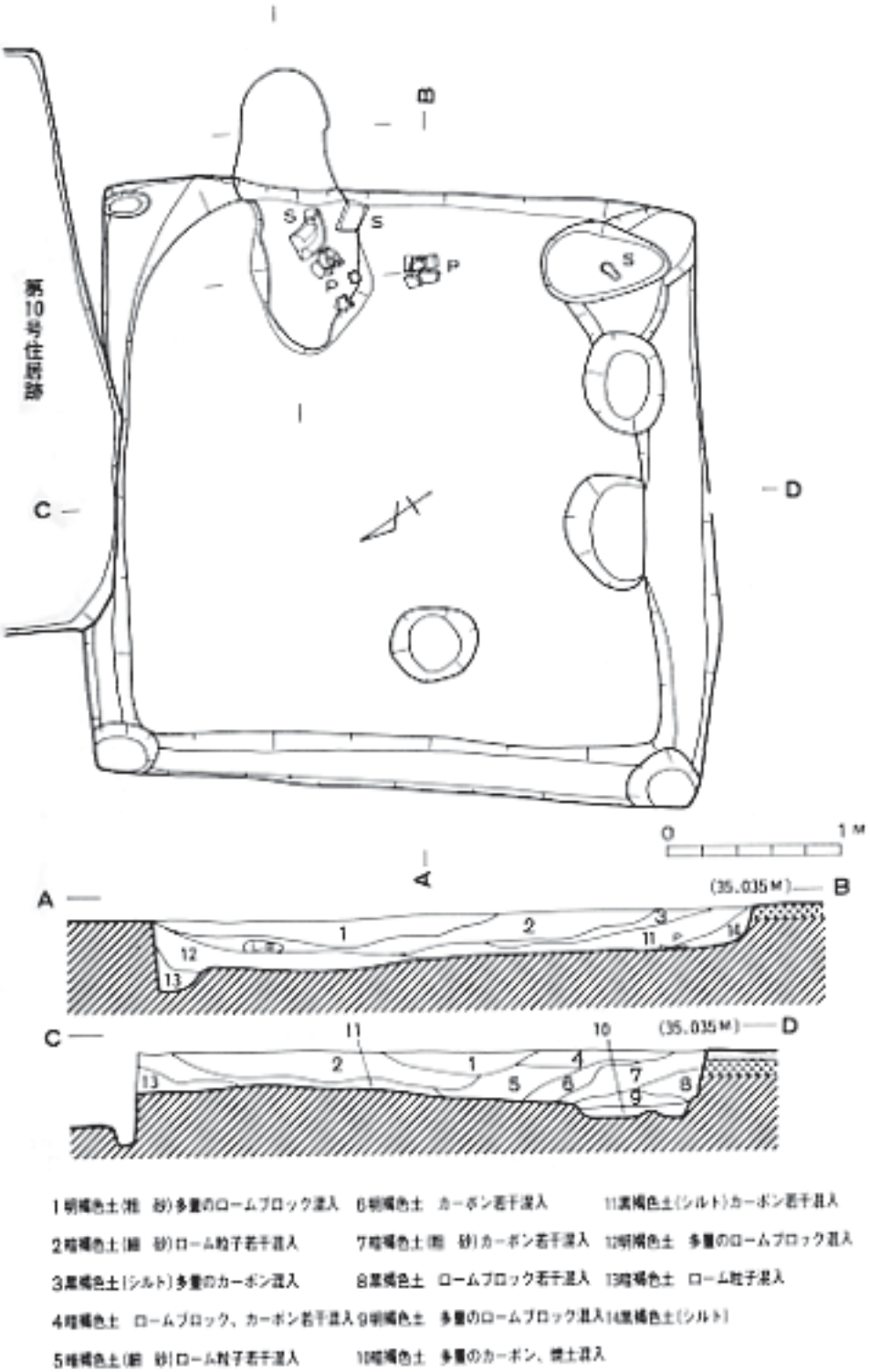
第 203 図　第 10 号住居跡実測図



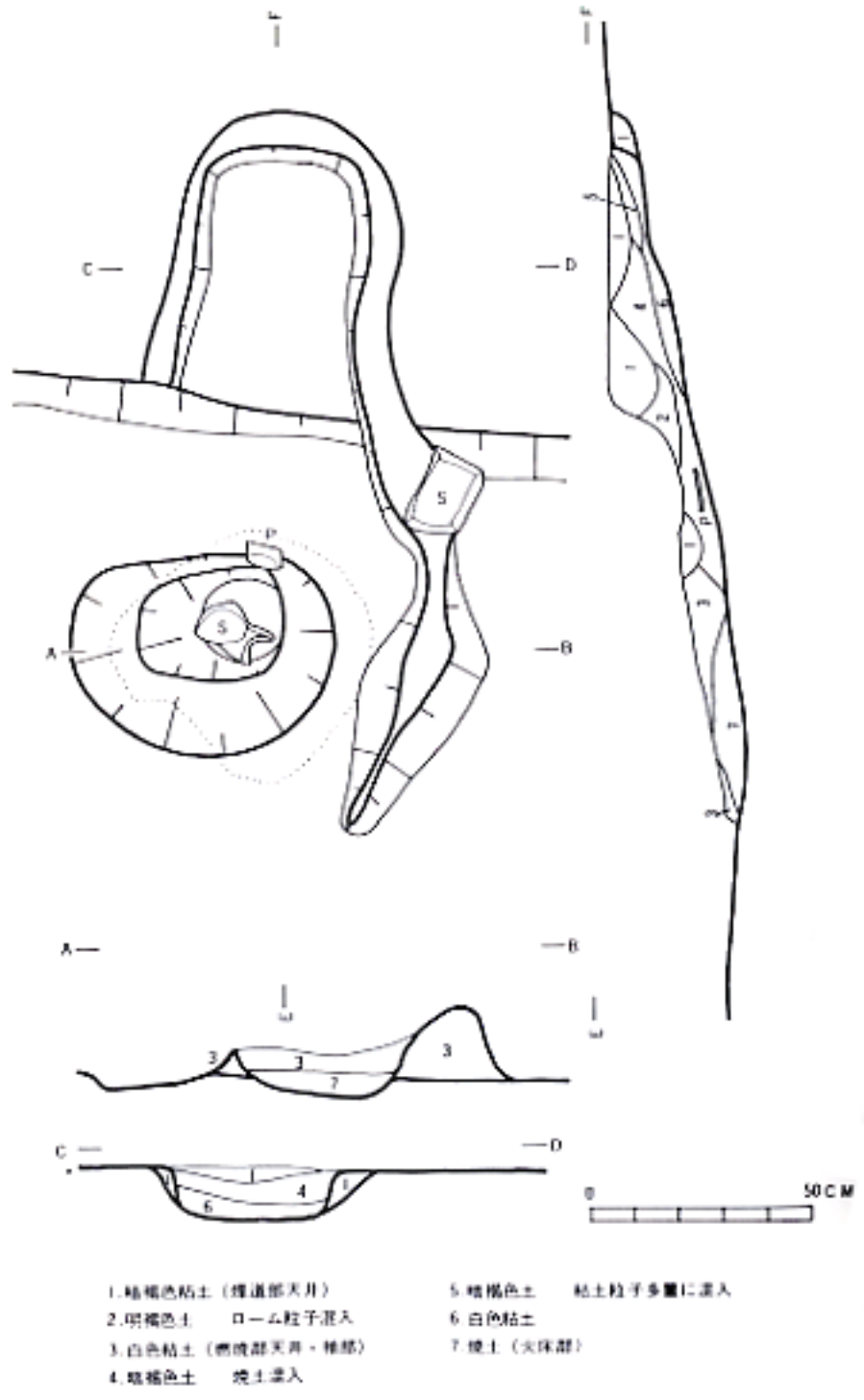
第 204 図　第 10 号住居跡カマド実測図



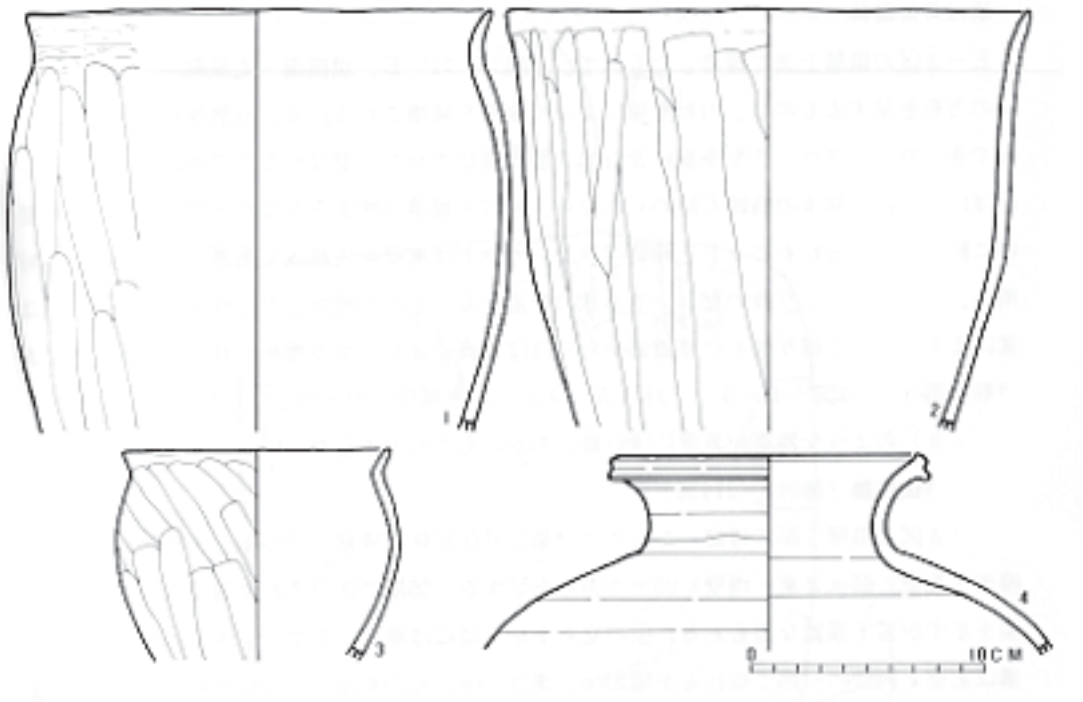
第 205 図　第 10 号住居跡出土遺物



第 206 図　第 11 号住居跡実測図



第 207 図　第 11 号住居跡カマド実測図



第 208 図　第 11 号住居跡出土遺物

第 12 号住居跡（第 209 ～ 211 図）

Ｅ－3 区のⅢ層上面で確認したもので、主軸Ｓ－71 °－Ｅ、規模南・北壁 3.3m ×東・西壁 3.45m の方形を呈するもので、円形塹壕によって東壁を破壊されている。自然堆積を示す 23 層に区分でき、ロームブロックを多量に含む第 7 層が確認された。壁はかなりの傾斜を有するが、床面はほぼ平坦で貼床の痕跡も認められない。柱穴・周溝は検出されなかったが、南・北の壁沿いに貯蔵穴と見られるピットを確認できた。カマドは東壁中央部から南寄りに、袖部に石材を用い、ローム層をくり抜いたトンネル状の煙道をもつものを検出した。煙道部の保存状態は非常によく、水平に掘り進んだ煙道部から、ほぼ垂直に立ち上がる煙出し孔を有するものである。甕形土器（第 211 図－１～ 4)、坏（5 ～ 9)、須恵器片（10・11）などが出土した。なかでも（8・9）のような器高が非常に浅い皿にちかいものも出土した。

第 13 号住居跡（第 212 ～ 214 図）

Ｅ－3 区のⅢ層上面で確認したもので、第 12 号住居跡と隣接している。主軸Ｎ－19 °－Ｅ、規模南・北壁 3.65m ×東・西壁 3.25m で方形を呈する。25 層に区分された層位はいずれも自然堆積を示すが若干複雑な面もある。壁の立ち上がりはほぼ垂直にちかく、床面は平坦である。周溝は北壁と西壁の一部で切れるが幅 20cm、深さ 10cm のものを巡らしているが、柱穴は検出できなかった。カマドは北壁中央部から若干東寄りの位置に設けているが、すでに燃焼部天井・袖部は消滅しており、わずかに火床部によってその範囲を知ることができる。器面ヘラケズリの甕形土器（第 214 図－ 1)、内黒杯（2)、外面に墨書痕（字体解読不明）を有するもの（3）などが出土した。

第 14 号住居跡（第 215 ～ 217 図）

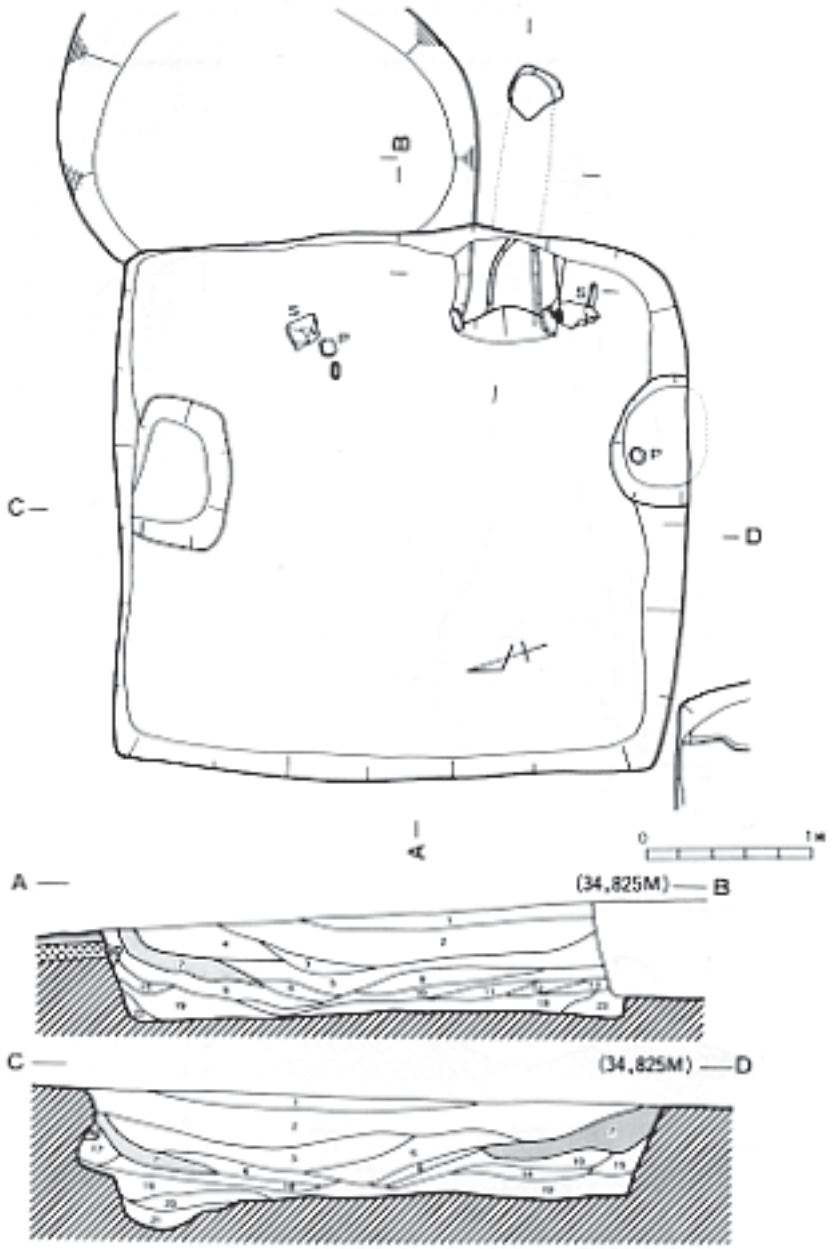
Ｅ－3 区のⅡ層上面で確認したものであるが、農道に隣接しているため半分程しか検出できなかった。主軸Ｓ－76 °－Ｅを示し、東壁 5.6m で方形を呈するものと見られ、9 層に区分された層位は自然堆積を呈する。壁は若干傾斜しており、床面は平坦で堅く蹄まっている。柱穴はなかったが、幅 20cm の周溝が壁沿いに確認された。

カマドは東壁中央から南寄りのところに設置しており、袖部に石材を使用し粘土でかためている。なお、煙道は作り変えの痕跡が確認された。最初の煙道はローム層を掘り抜いたもので、2 回目のものはローム層を若干掘り込んで壁と天井を粘土でつくったものである。

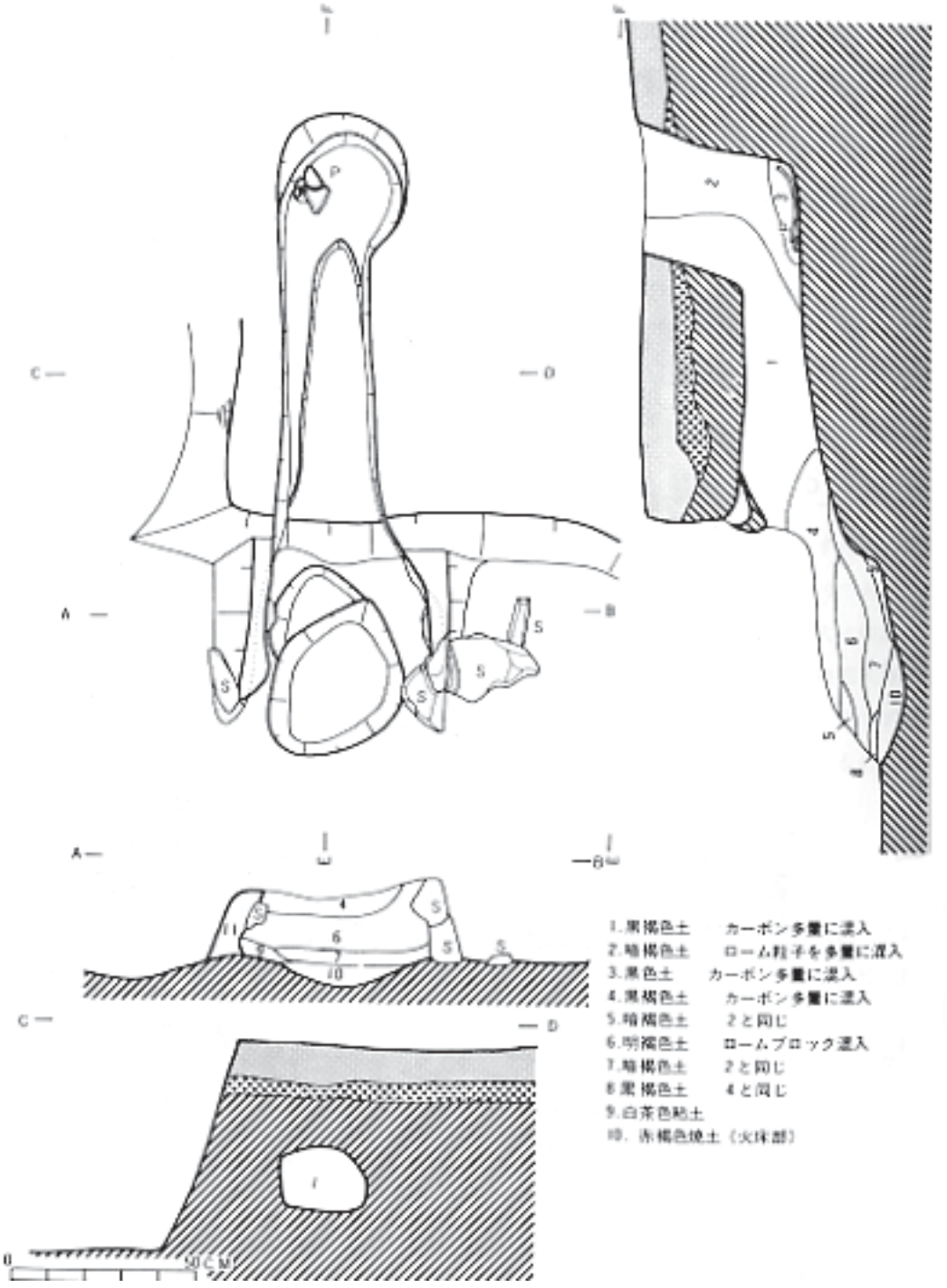
甕形土器 2 個体（第 217 図－１は、器面に巻き上げ痕を残しヘラナデ調整を施している。)と坏の底部片が出土した。

第 15 号住居跡（第 218 ～ 220 図）

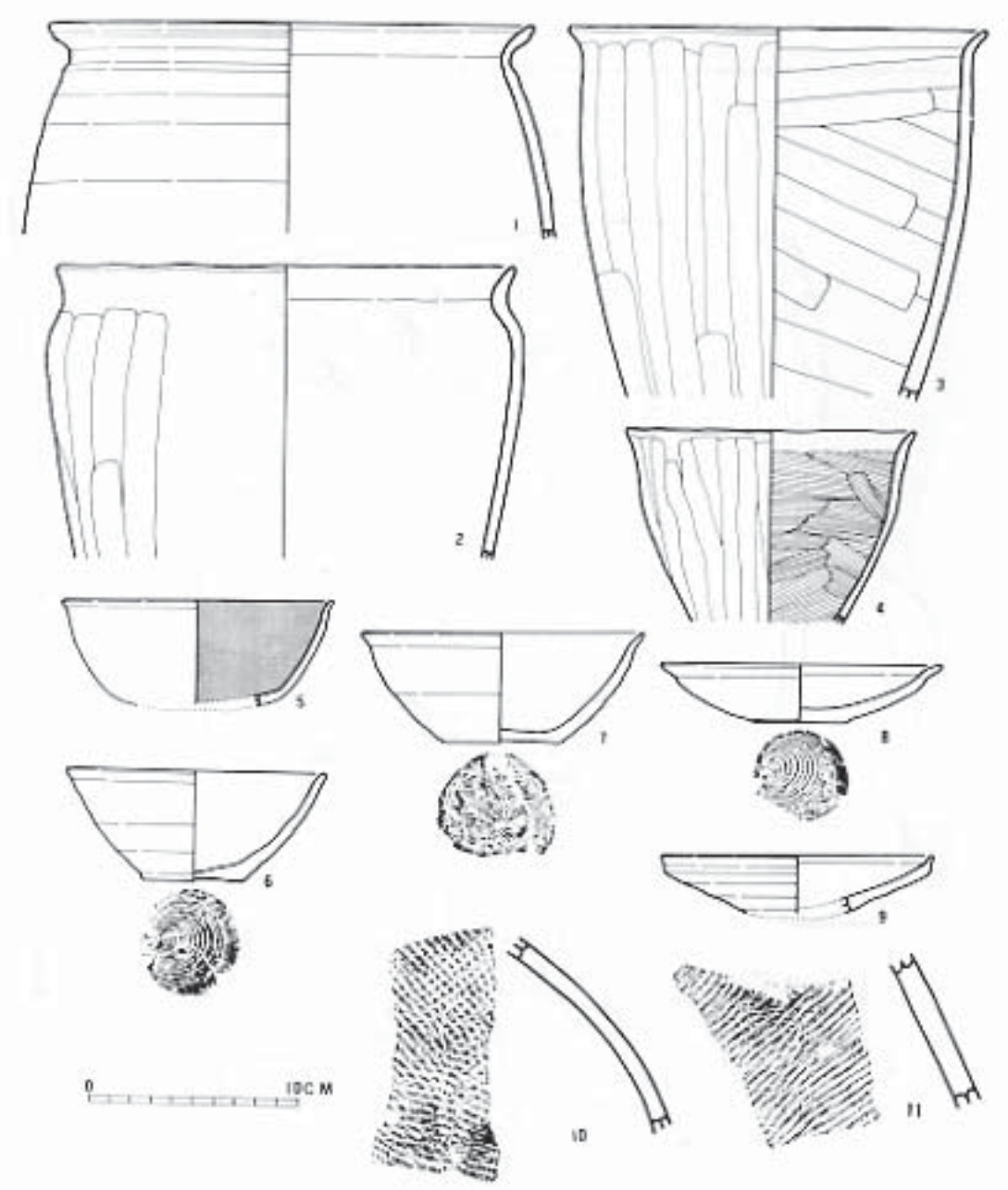
Ｆ－4 区のⅤ層上面で確認したもので、南・西壁の一部が塹壕によって壊されている。主軸Ｓ－65 °－Ｅ、規模南・北 7.4m ×東・西 7.8m の方形を呈する。覆土は 25 層に細分され、いずれも自然堆積を示すが、第 6・7・12・13・18・24 層のようなロームブロックを多量に混入する層などもある。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦で堅く締まっている。柱穴は四コーナー



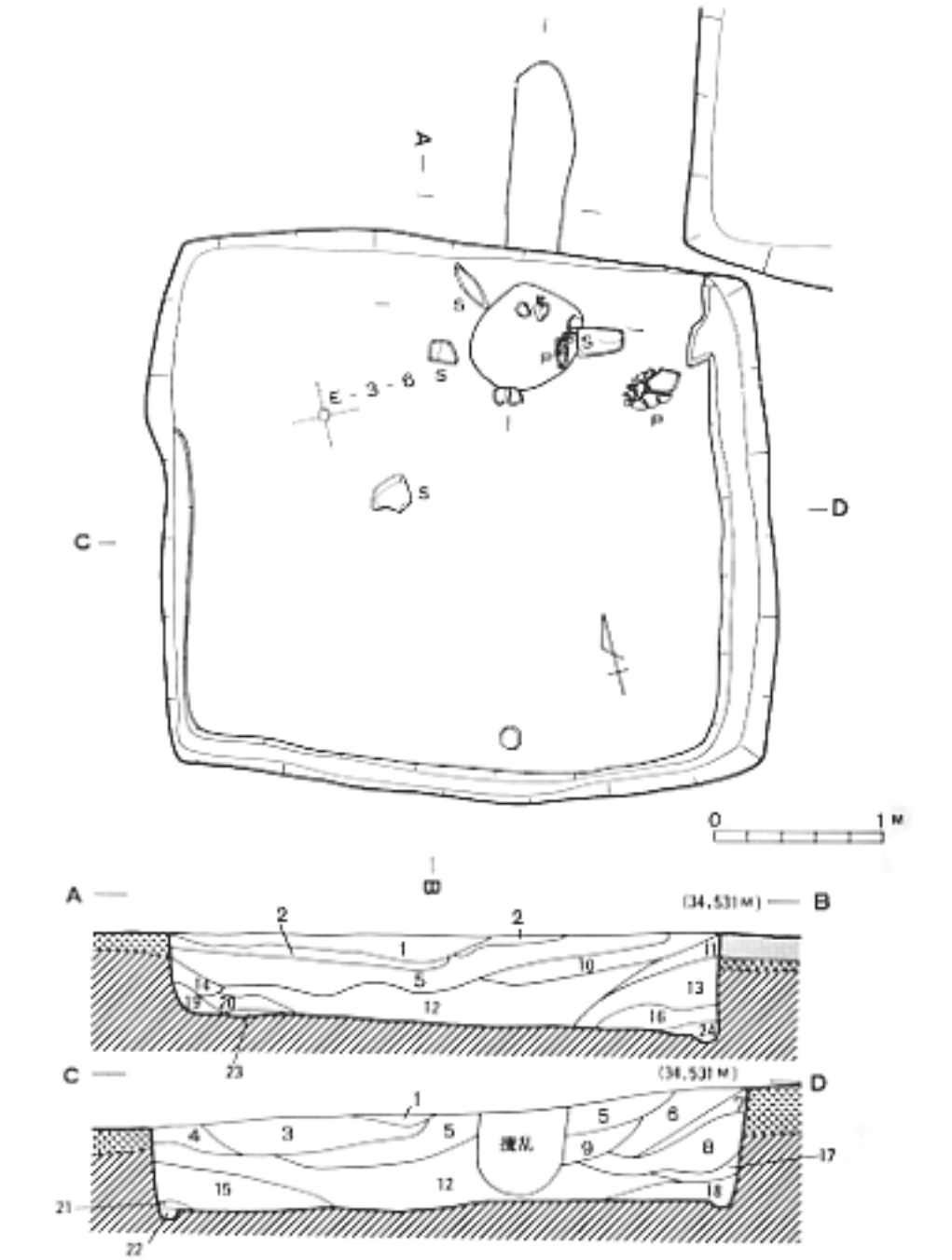
第 209 図　第 12 号住居跡実測図



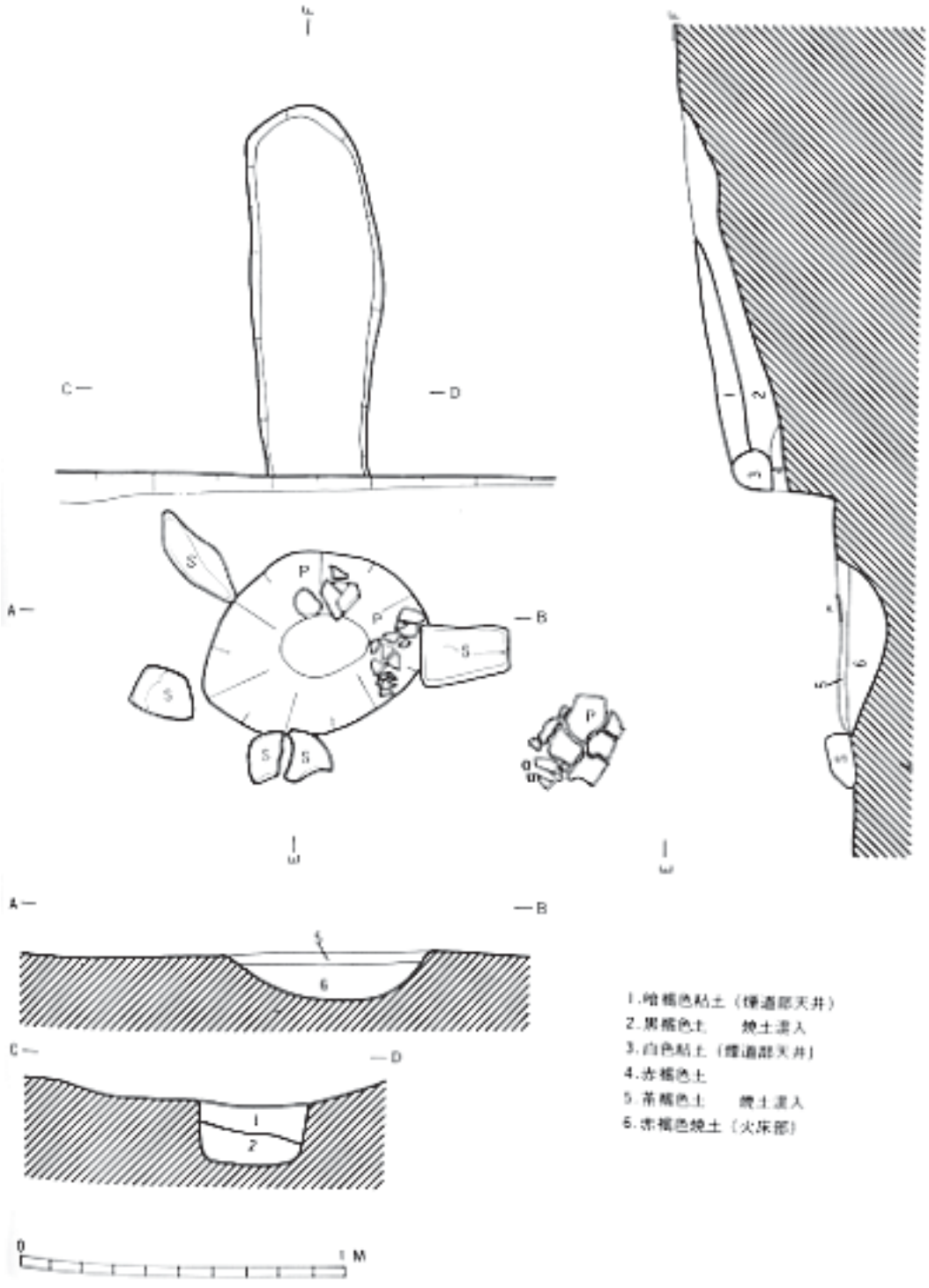
第 210 図　第 12 号住居跡カマド実測図



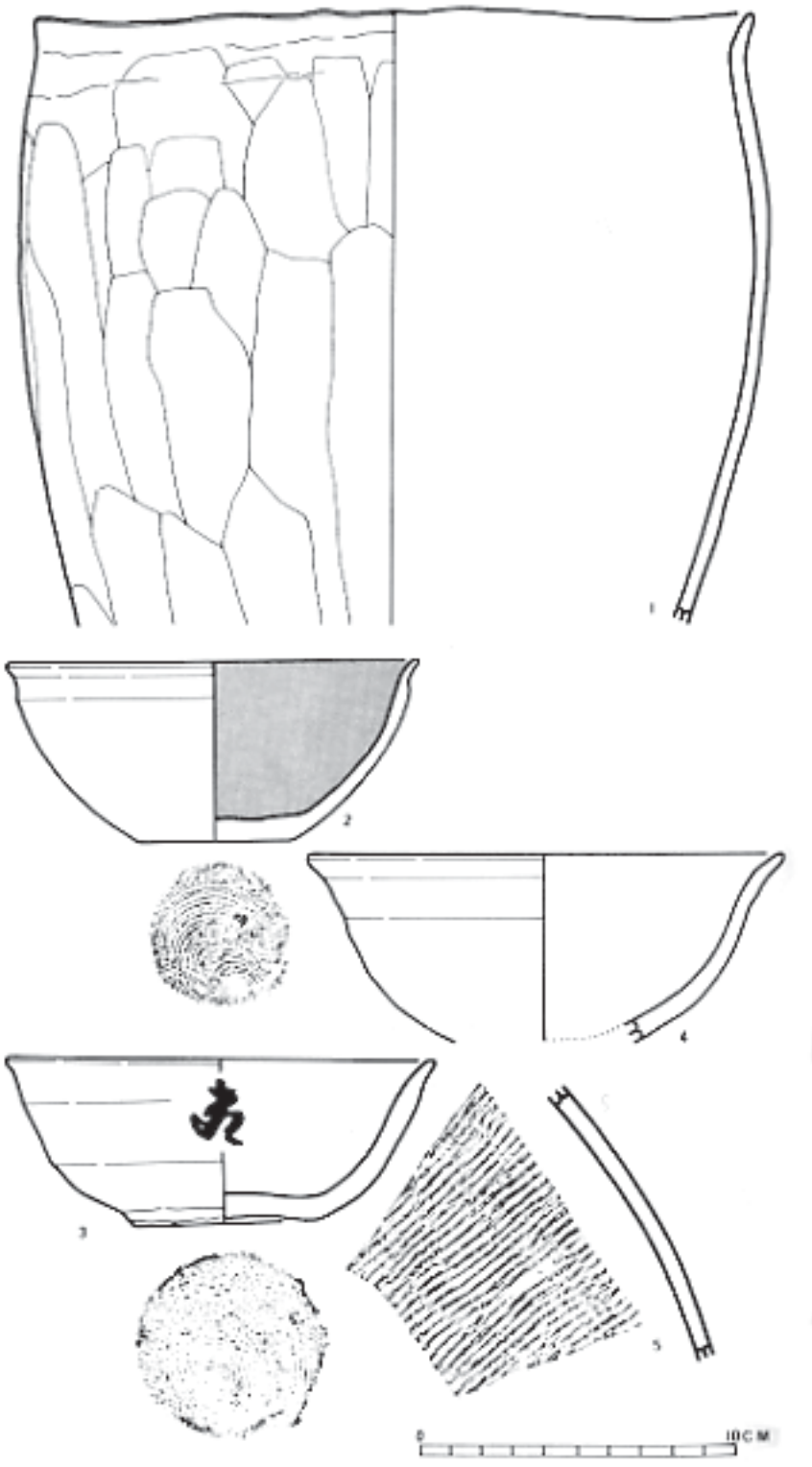
第 211 図　第 12 号住居跡出土遺物



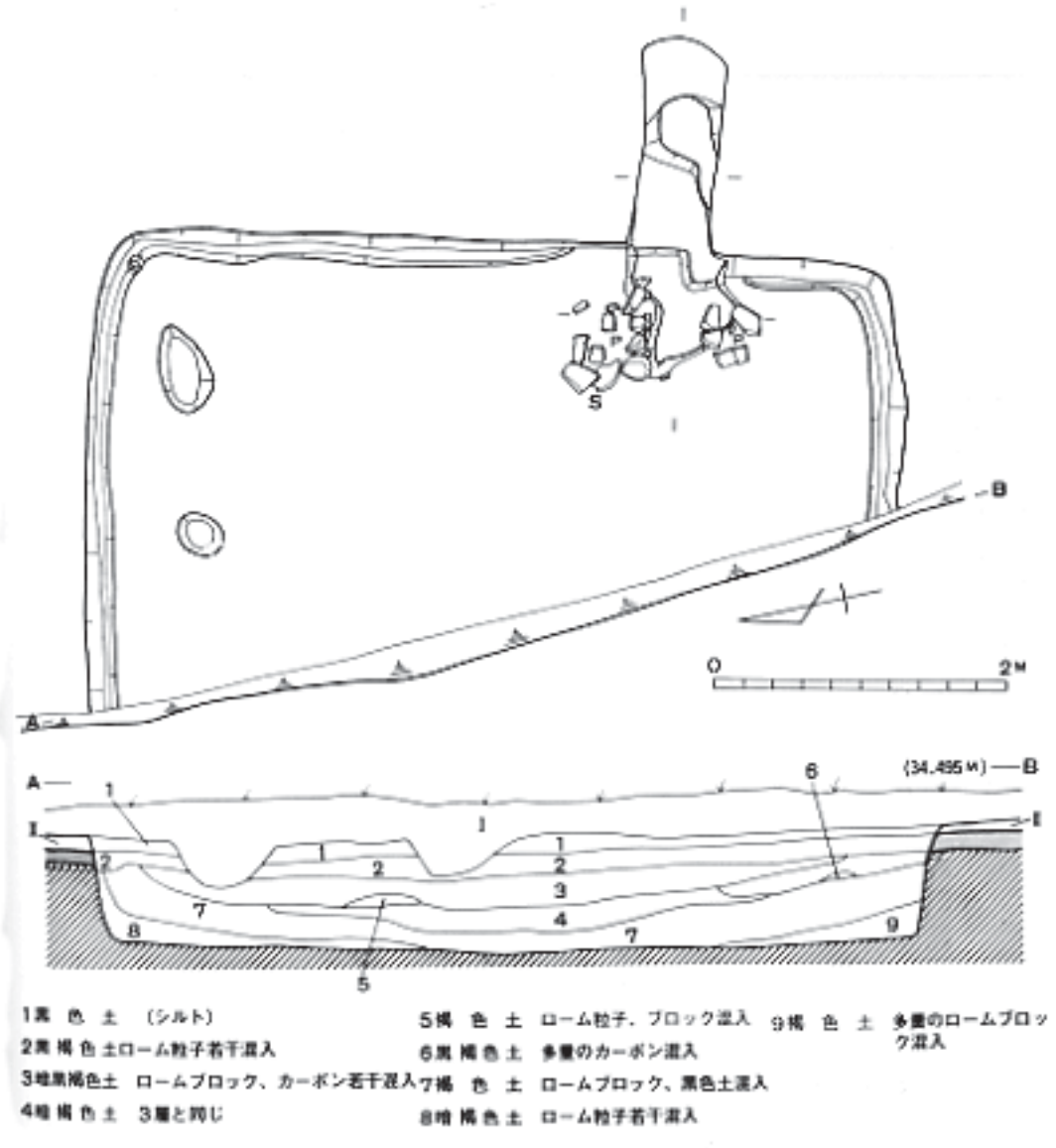
第 212 図　第 13 号住居跡実測図



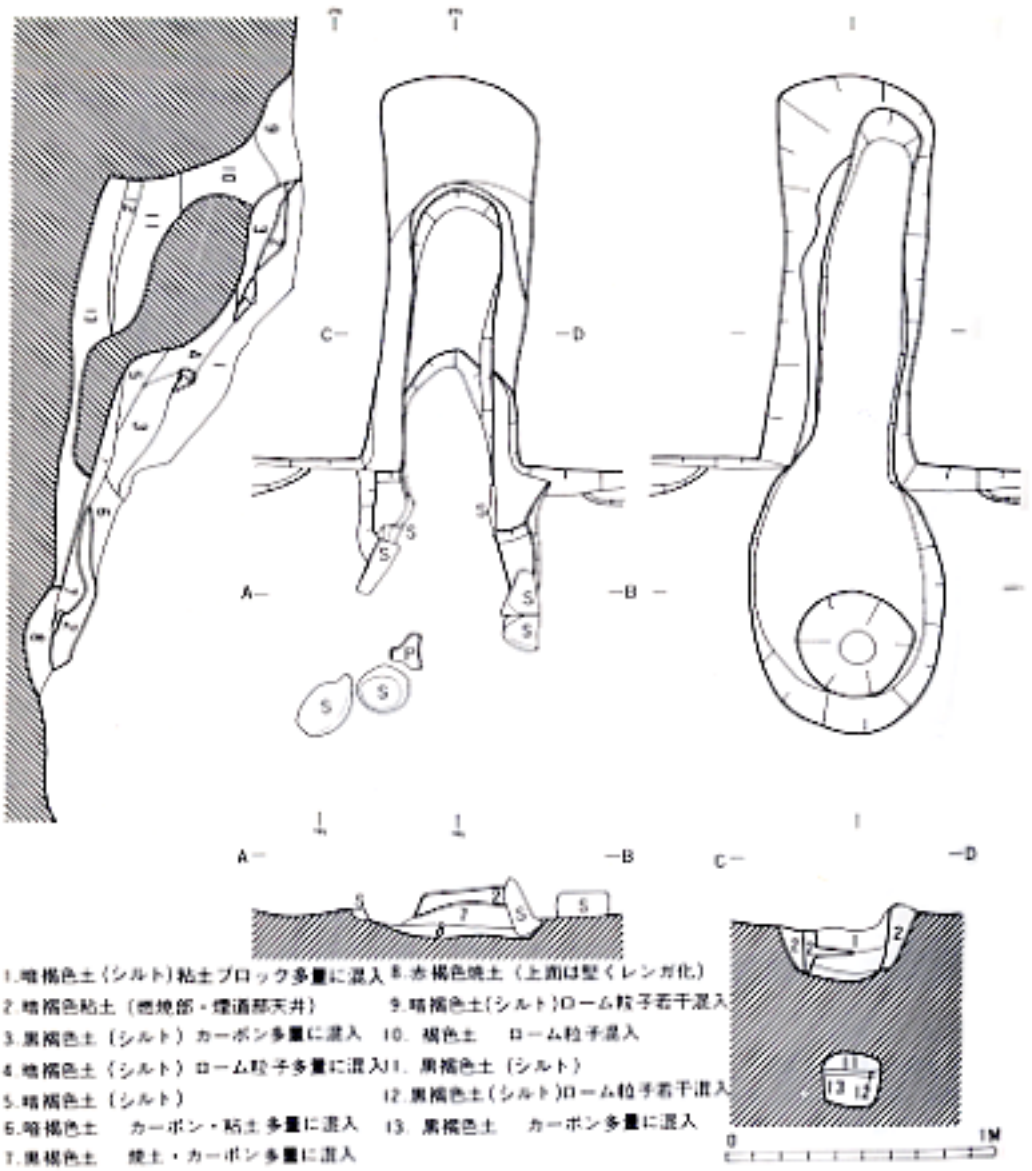
第 213 図　第 13 号住居跡カマド実測図



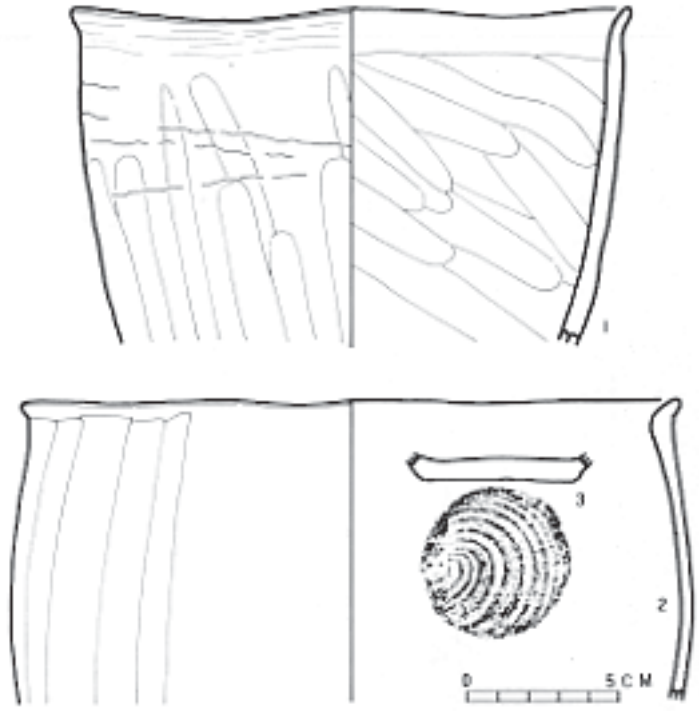
第 214 図　第 13 号住居跡出土遺物



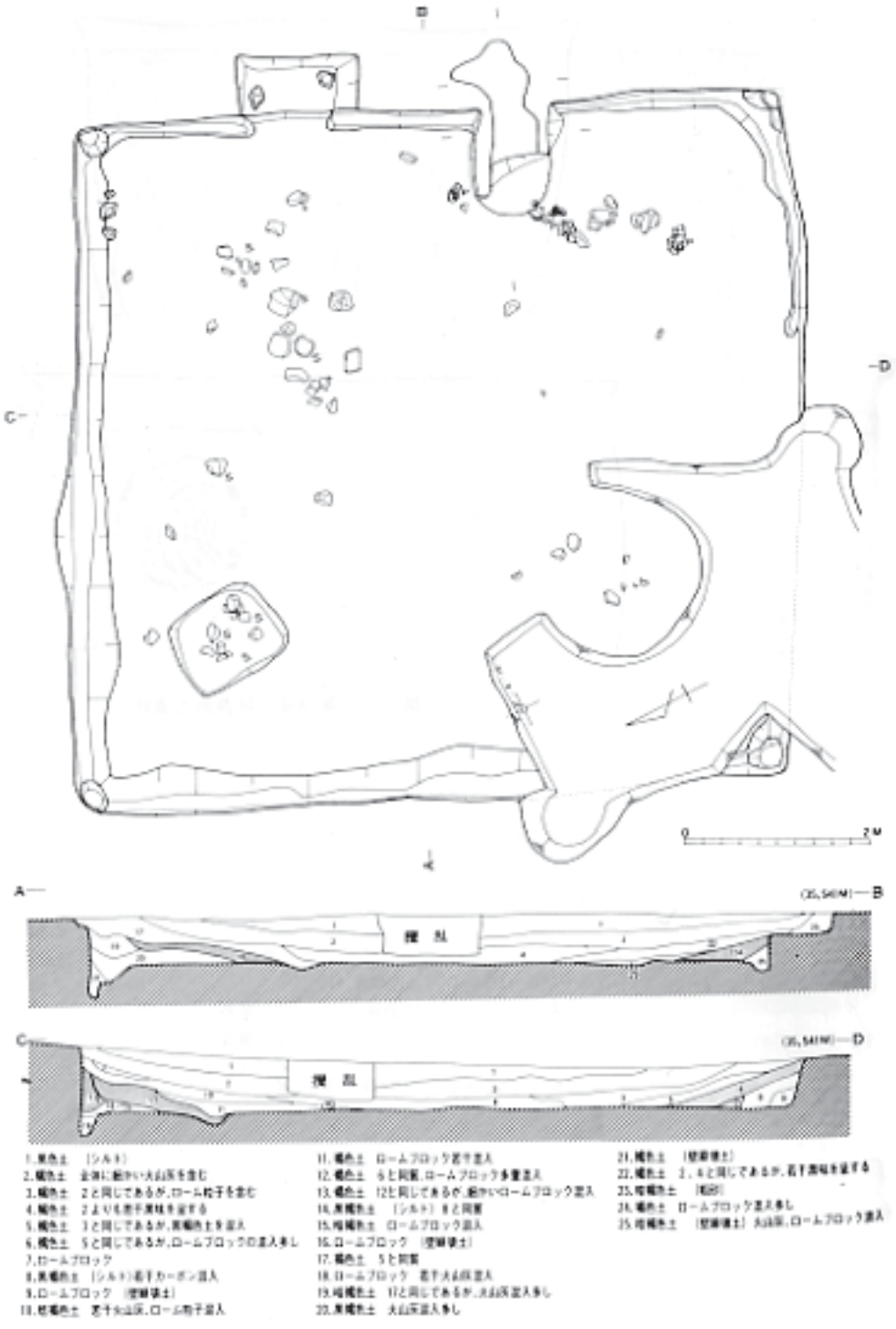
第 215 図　第 14 号住居跡実測図



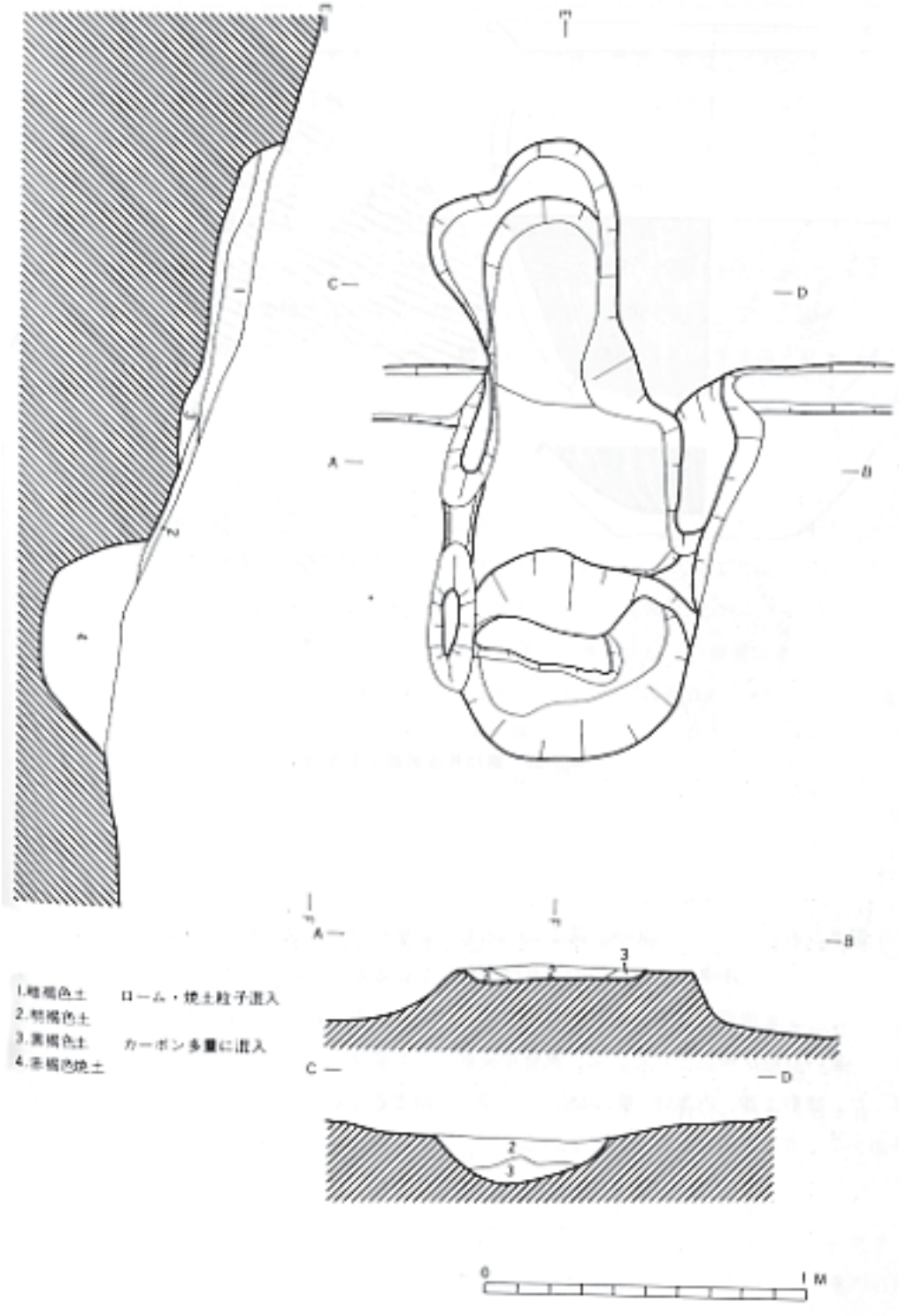
第 216 図　第 14 号住居跡カマド実測図



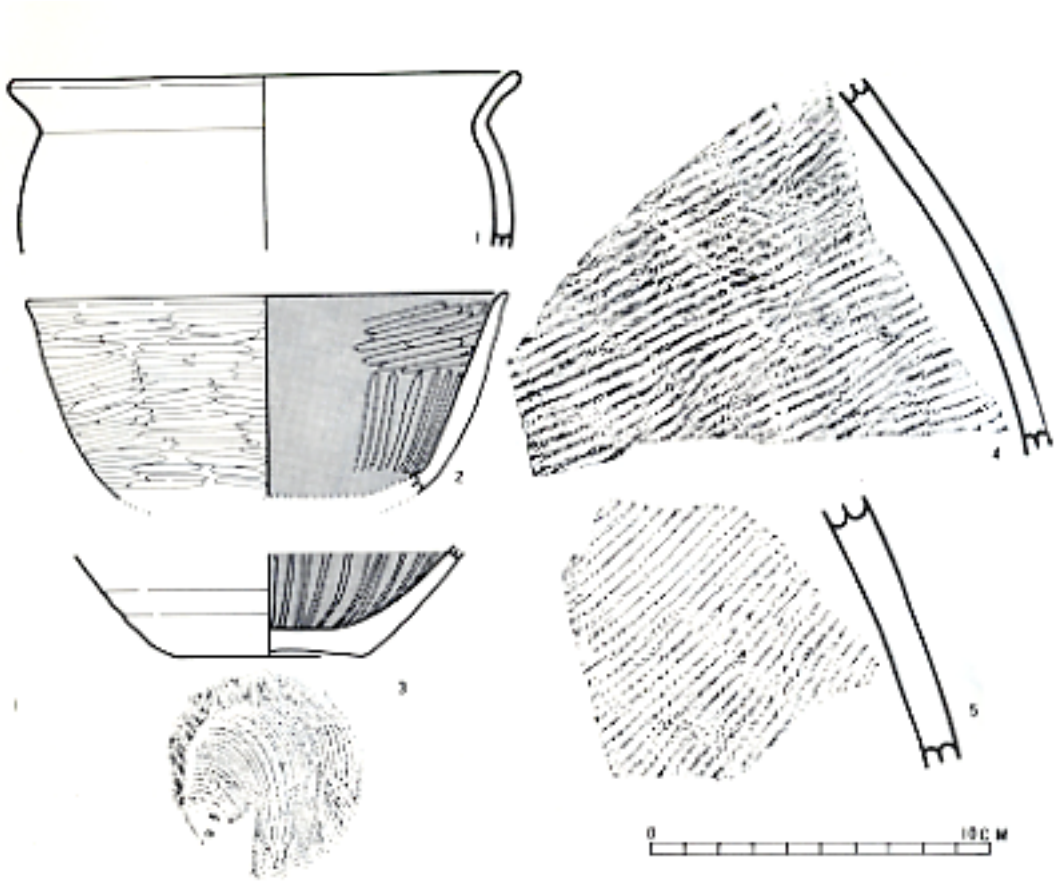
第 217 図　第 14 号住居跡出土遺物



第 218 図　第 15 号住居跡実測図



第 219 図　第 15 号住居跡カマド実測図



第 220 図　第 15 号住居跡出土遺物

に 1 個ずつあり、周溝は幅 30㎝、深さ 20㎝ のものを壁沿いに一巡させている。

カマドは、東壁中央部から若干南寄りに設置しているが、だいぶ崩壊している。袖部はローム層をそのまま使用した備え付けのものである。北西床面に1.2×0.9mの規模のピットがあり、中に多量の石材が検出された。又、東壁中央部から北寄りのところに張り出し状の出入口を確認した。甕形土器、内黒坏（第 220 図－ 2・3）、須恵器片などが出土した。なお、（2）は内外面ヘラミガキの調整が行なわれている。

第16号住居跡（第221～223図）

G－3区のⅡ層上面で確認したもので、14号住居と同様に農道に隣接して検出されたため、半分しか精査できなかった。主軸S－60°－E、南東壁3.9m×北東壁3.7mの規模で方形を呈する。覆土は16層に細分することができ、いずれも自然堆積を示す。壁は若干緩い立ち上がりで、床面はほぼ平坦で堅く締まっている。柱穴は北コーナーに1個検出したがほかになかった。周溝は南東の一部と、南コーナーにしかなく他は検出されなかった。

カマドは南東壁中央から南東寄りに設置しており、壁辺に対して煙道が左に曲っているが、トンネル状のもので、燃焼部天井、袖部の粘土は保存もよく明瞭である。又、左袖脇に灰捨場と見られるピットも検出された。外面ヘラナデの甕（第223図一1)、上半部回転ヨコナデ調整の甕（2)、内外面ヘラミガキの黒色処理の施された壺形土器（3)、ヘラミガキの内黒坏（4）などが出土した。

第17号住居跡（第224～226図）

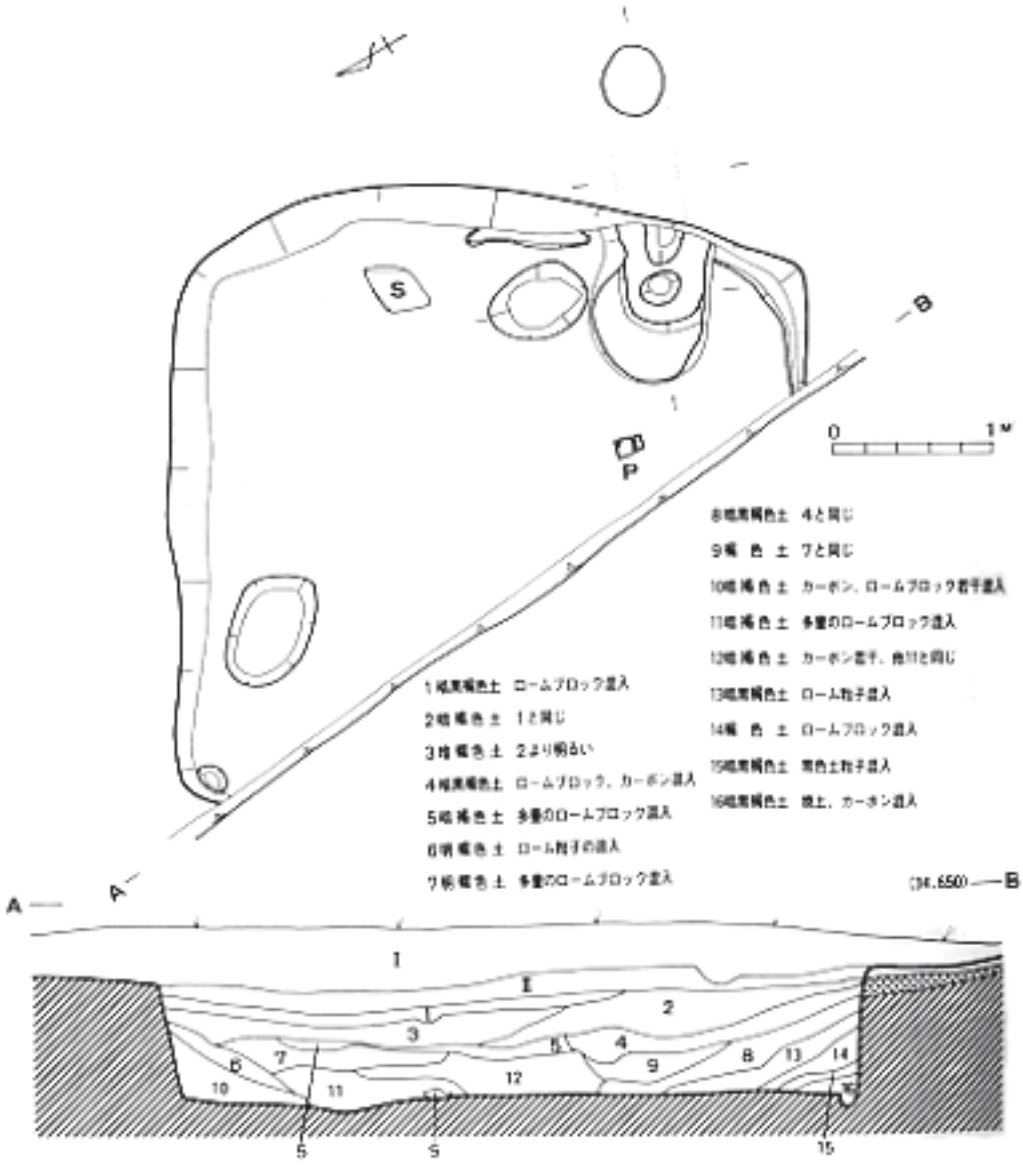
G－3区のⅤ層上面で確認されたもので、主軸北東、南西壁2.75m×北西、南東壁2.8mで方形を呈する。自然堆積の6層に区分され、非常にローム粒子、ブロックの混入が見られる。壁は立ち上がりがやや傾斜しており、床面も若干凹凸である。柱穴は北コーナーを除く3コーナーに1個ずつと、北西壁を除く3壁の中央部に1個ずつ確認したが、周溝は検出されなかった。カマドは北東壁中央部から若干北西寄りに設置し、両袖部には板状の石材を配しているが、天井部は消滅していた。また、煙道部はローム層を掘り抜きトンネル状のものにしているが、土圧のため若干潰れている。外面ヘラケズリの見られる甕（第226図－1)、ヘラミガキの内黒坏（2）が出土した。

第18号住居跡（第227～229図）

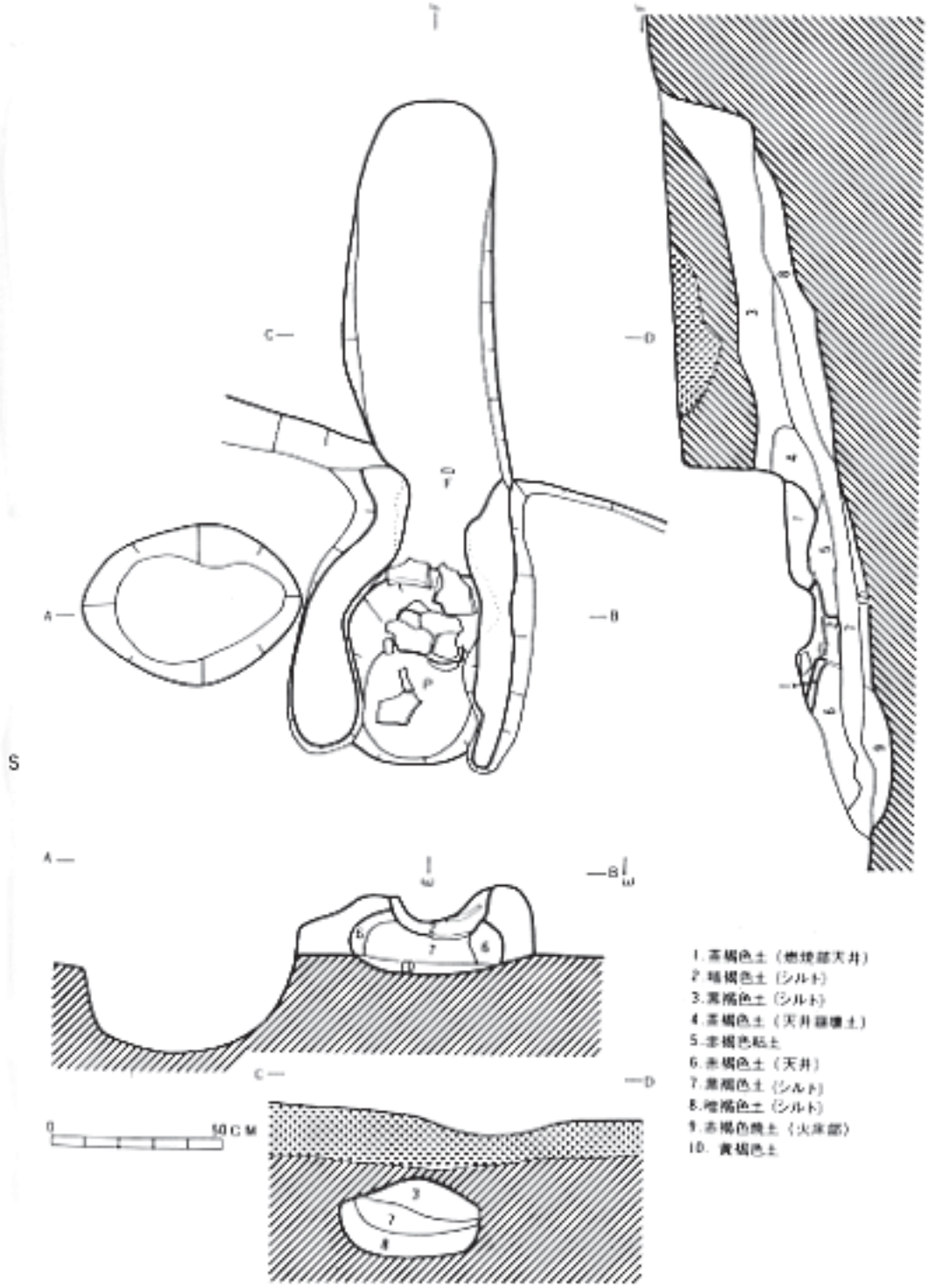
G・H－5区のⅣ層上面で確認されたもので、本遺跡では第33号住居跡に次いで2番目に大きい住居跡である。主軸S－22°－E、規模南、北壁9.0m×東・西壁8.65mで方形を呈する。覆土は19層に細分でき、いずれも自然堆積の層序を示すが第4・5・7・10層のように多量のロームを混入するものもある。壁の立ち上がりは垂直にちかく、床面はほぼ平坦で堅く踏み締まっている。柱穴は各コーナーに1個ずつと、各壁の中央部に1個ずつと、対角線上のコーナーから約2m程中央に寄ったところにそれぞれ大柱穴を確認した。大柱穴は支柱と見られ、内部には多量の石が入っていた。周溝は幅20cm、深さ25cmのものを各壁沿いに巡らしているが、南壁で一部切れるところがある。

カマドは南壁中央部から若干西寄りに設置しているが、保存状態はあまりよくなくて燃焼部天井・袖部など崩壊している。又、前庭部は床面より5cm程低くつくられており、多量の石材（カマド袖部に使用）が散乱していた。

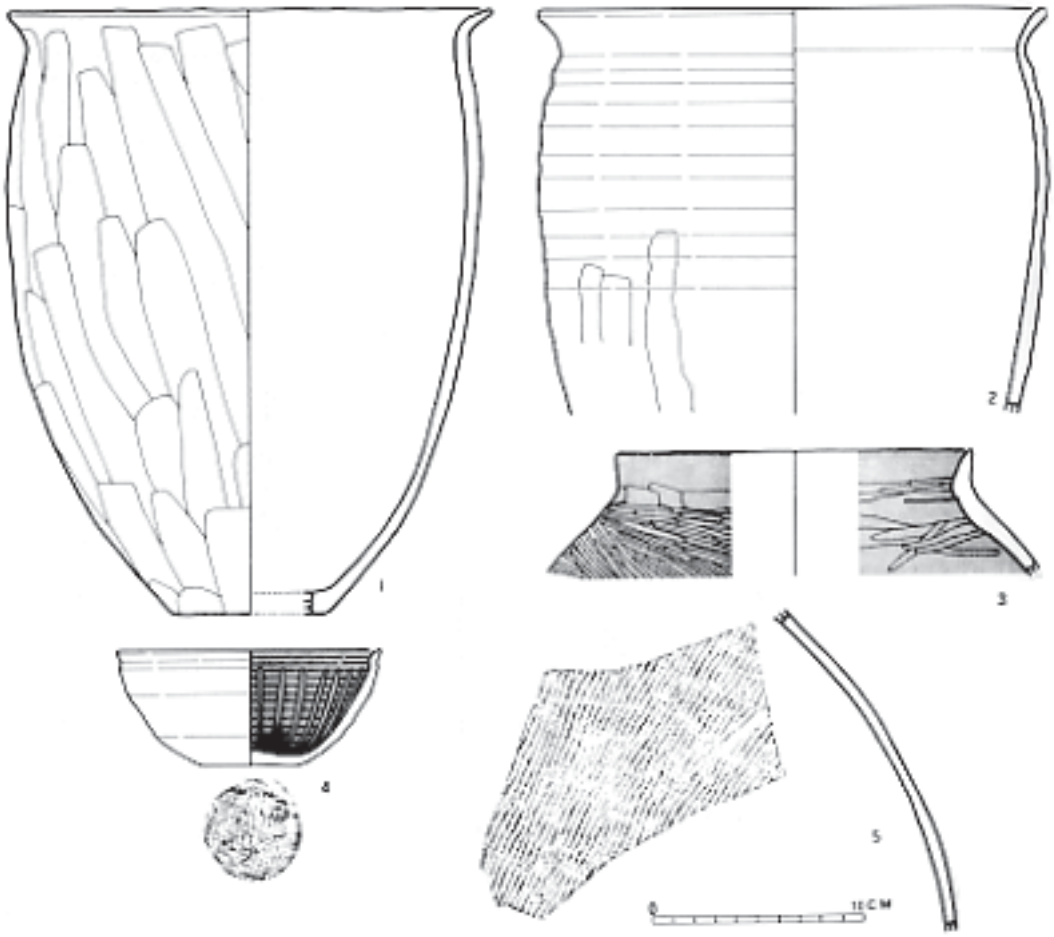
尚、カマドの位置する南壁の東寄りに1m程の張り出し部が検出されたが、これは15号住居と同様に出入口と見られる。



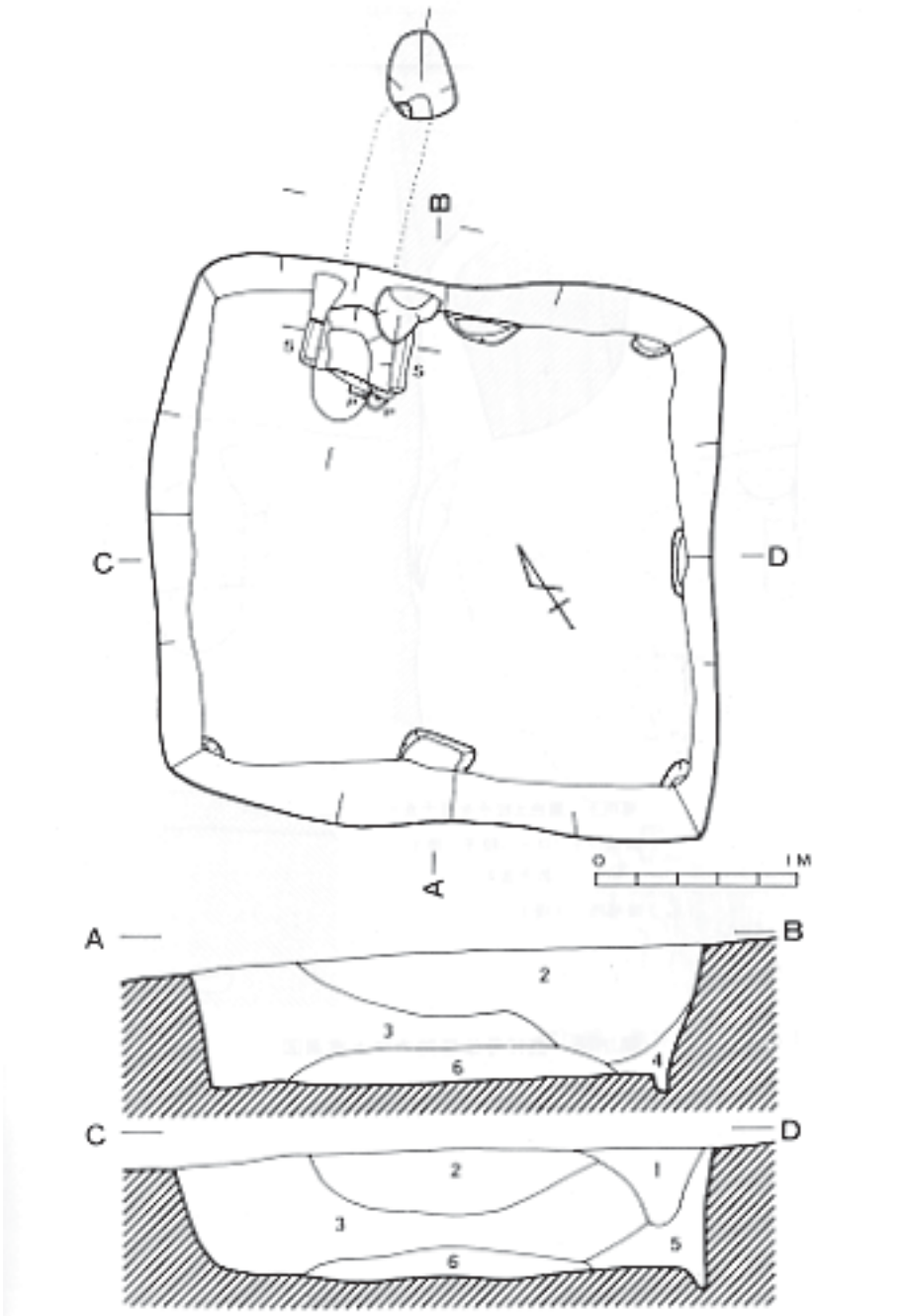
第 221 図　第 16 号住居跡実測図



第 222 図　第 16 号住居跡カマド実測図

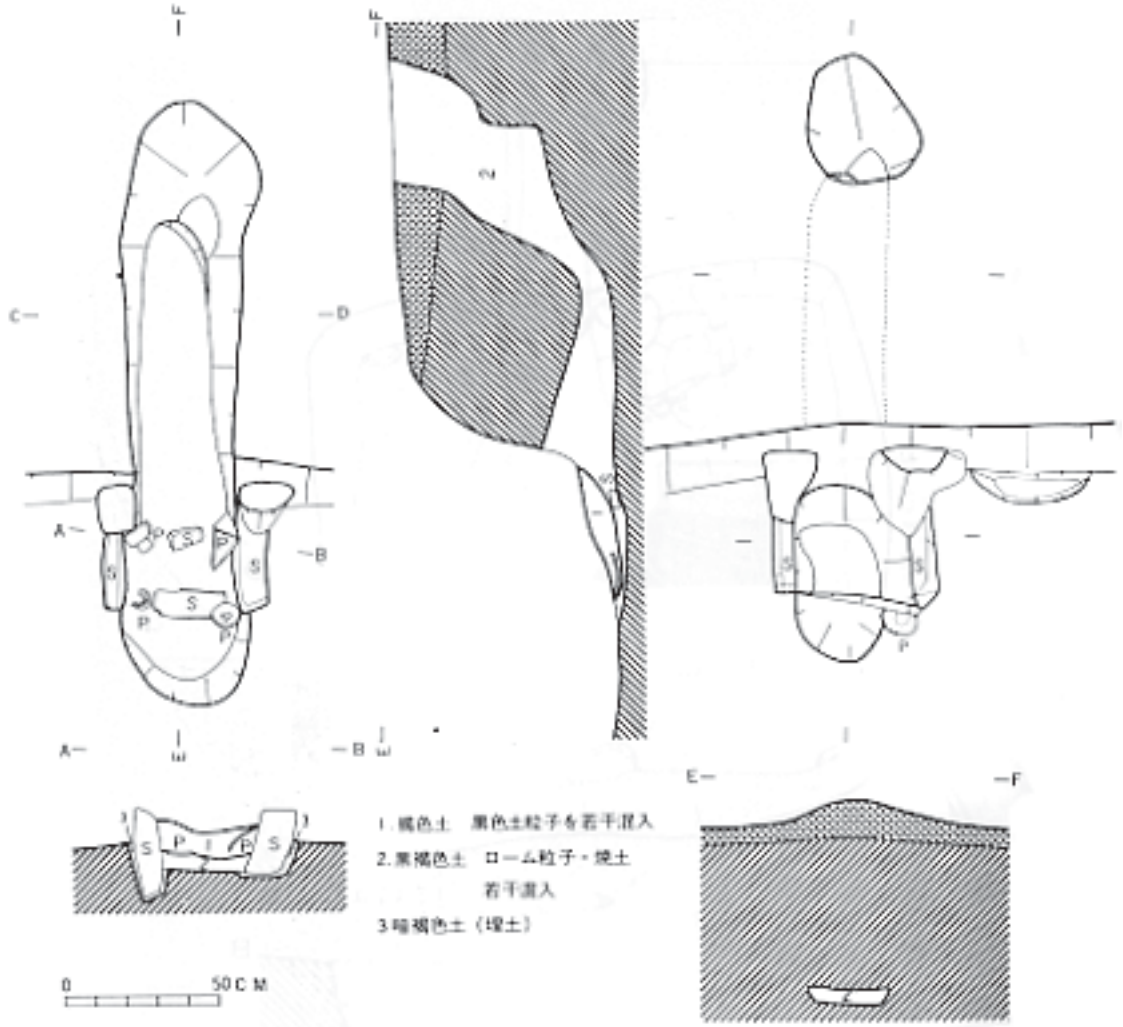


第 223 図　第 16 号住居跡出土遺物

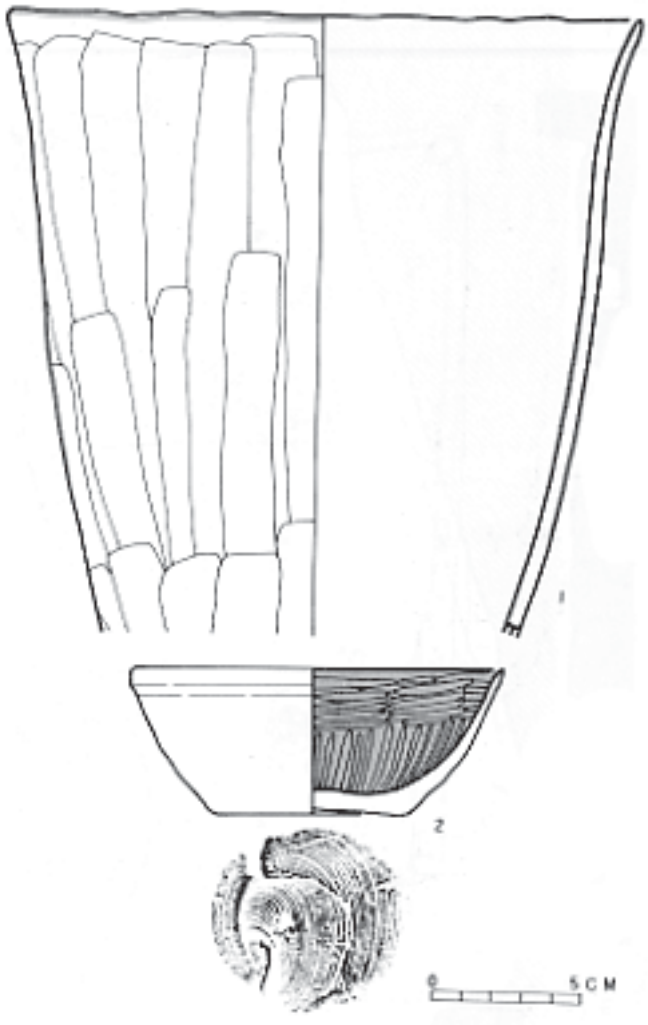


1. 暗褐色土 粘土ブロック混入、撹乱層と思われる　4. 黄褐色土 3と同じで混入物なし
2. 暗褐色土 粘土ブロック、ローム粒子混入　5. 暗褐色土 ローム、ブロック、粒子混入
3. 黄褐色土 黒色ブロック混入　6. 黒褐色土 粘土ブロック、ローム粒子混入

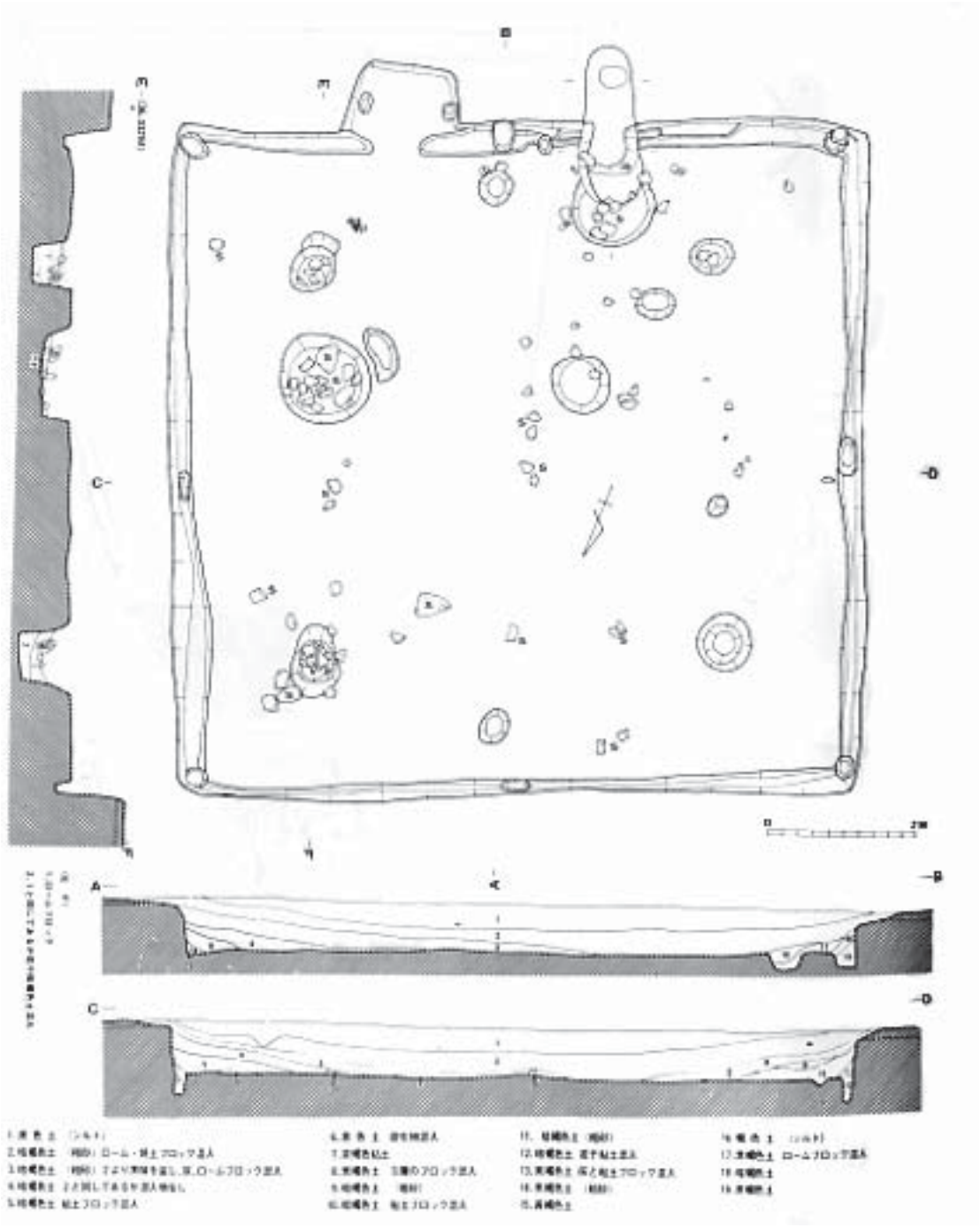
第 224 図　第 17 号住居跡実測図



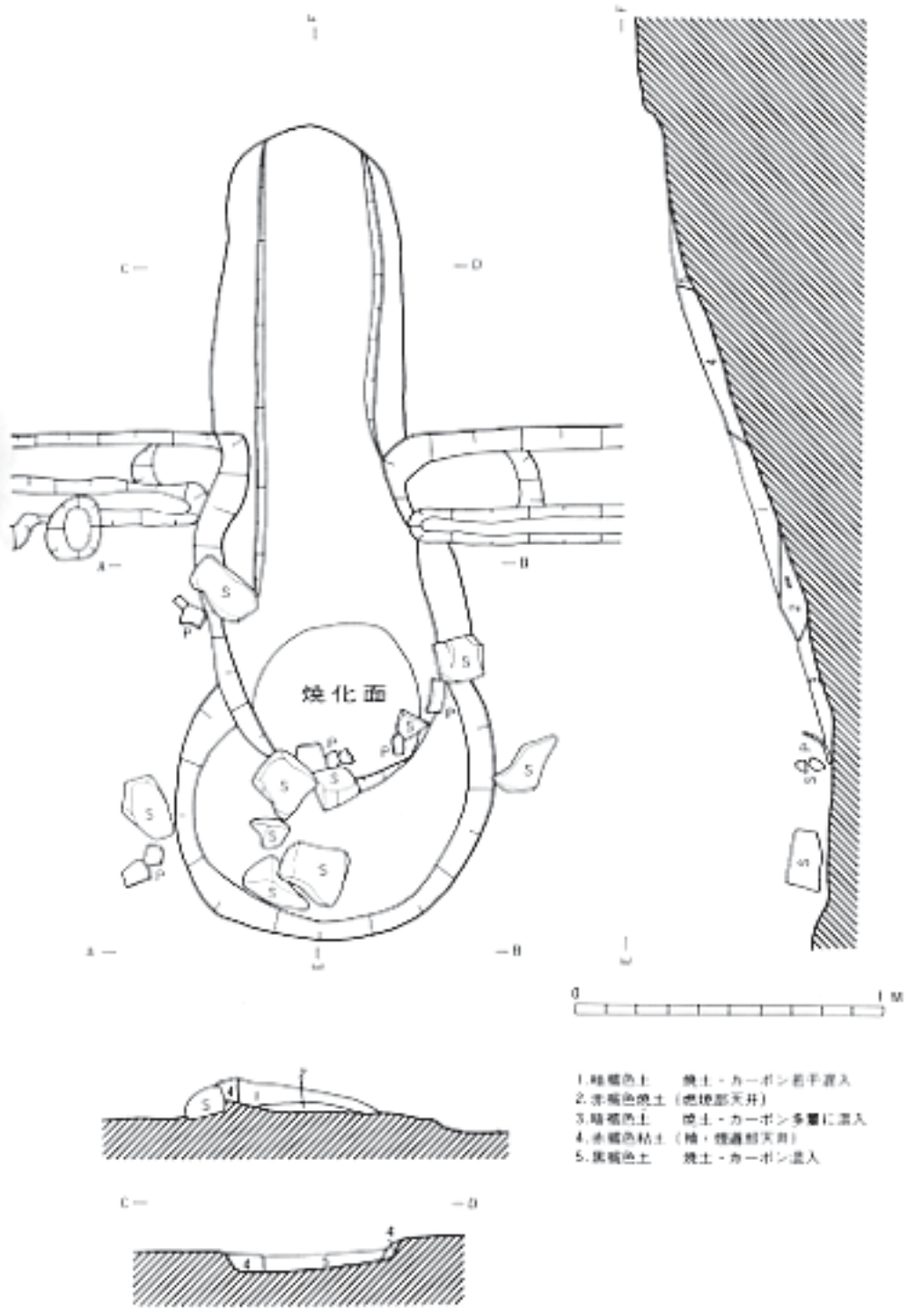
第 225 図　第 17 号住居跡カマド実測図



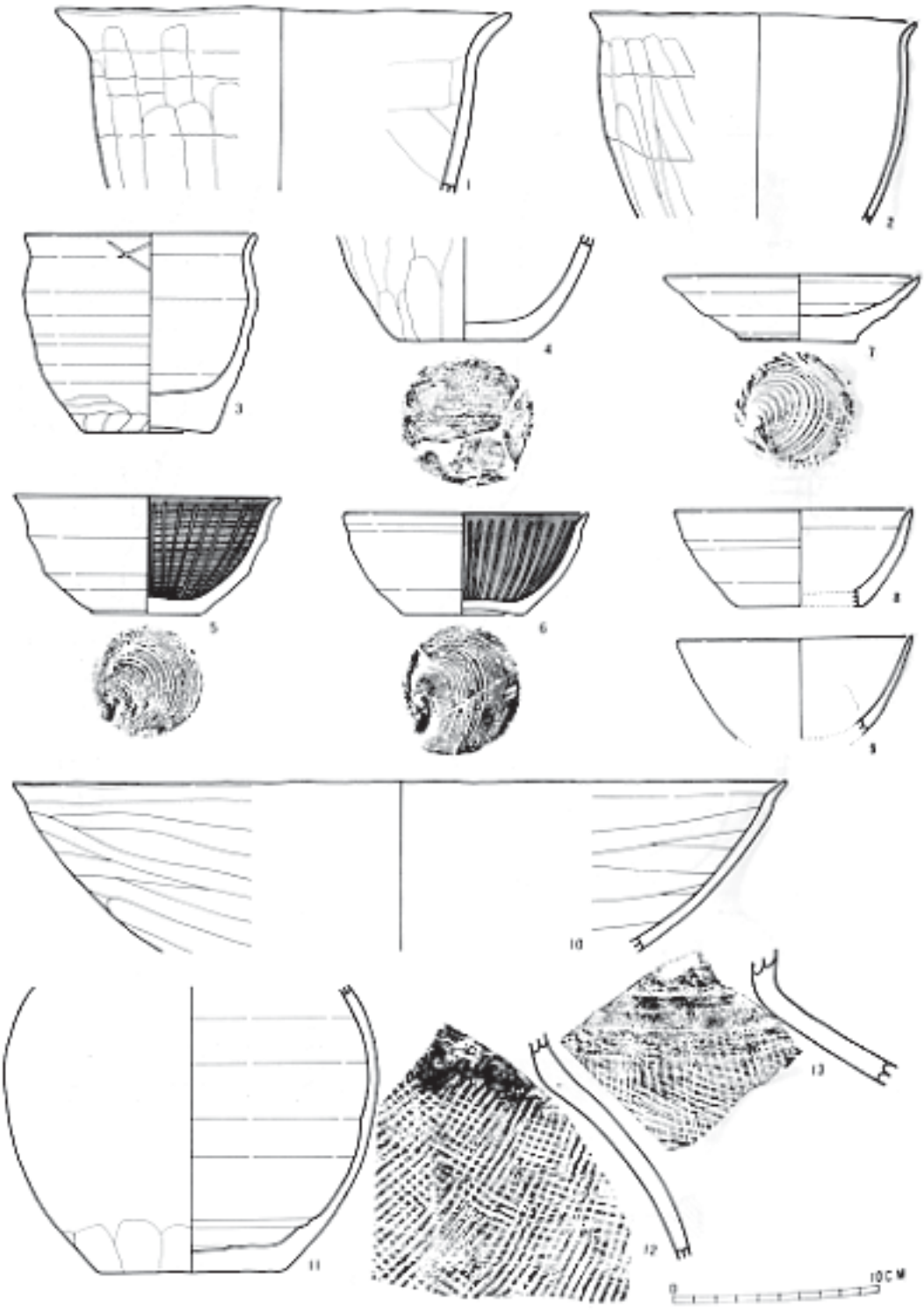
第 226 図　第 17 号住居跡出土遺物



第 227 図　第 18 号住居跡実測図



第 228 図　第 18 号住居跡カマド実測図



第 229 図　第 18 号住居跡出土遺物

出土遺物は、器面に巻き上げ痕を残しヘラナデ調整の甕形土器（第229図一1・2)、ロクロ製で底部付近をヘラケズリで調整し、頸部にヘラ書き記号「×」のあるもの（3)、底面の板目痕を有するもの（4)、器高の低い皿形の坏（7)、内黒坏（5・6)、ヘラナデ調整の大型鉢（10)、須恵器細頸壺（11）など多数出土した。

第19号住居跡（第230～232図）

Ｈ－3区のⅤ層上面で確認したもので、主軸Ｓ－38°－Ｅ、北西・南東壁5・3m×北東・南東壁4. 6mの規模で方形を呈する。覆土は8層に細分でき、層位も自然堆積を示し、壁はほぼ垂直であるが、床面は若干凹凸を呈する。柱穴は東コーナーを除く各コーナーに1個ずつあり、細く深いものである。周溝は幅、深さ20cmのものを各壁沿いに一巡させている。

カマドは南東壁中央から幾分南西寄りに設置しており、土圧で若干潰れているが保存は良好である。本体は暗褐色粘土（灰白色粘土）によって作られているが両袖だけがローム層で備え付けのものである。又、カマド前庭部が床面から25cm程低く擂り鉢状に作られている。
住居内からは甕形土器（第232図－1・2)、坏（3～5)、須恵器片（6・7）が出土した。

第20号住居跡（第233～235図）

Ｈ－3区のⅤ層上面で確認したもので比較的小型の住居跡である。主軸Ｓ－41°－Ｗ、北東・南西壁2.75m×北西・南東壁2.8mの規模で方形を呈するが、北西壁に40cm程の張り出しを有するため若干不整形となっている。覆土は10層に細分され、壁はゆるい傾斜を呈し、床面はほぼ平坦である。柱穴、周溝は検出されなかった。

カマドは南西壁中央から南東寄りにあり、煙道はトンネル状のもので、燃焼部天井と左袖は崩壊しているが、袖部は備え付けのものである。又、火床部にはカマド用支脚として使われた甕形土器の底部が倒立の状態で出土した。（第235図－1）は煙道内出土のもので、ヘラケズリ調整が施してある。

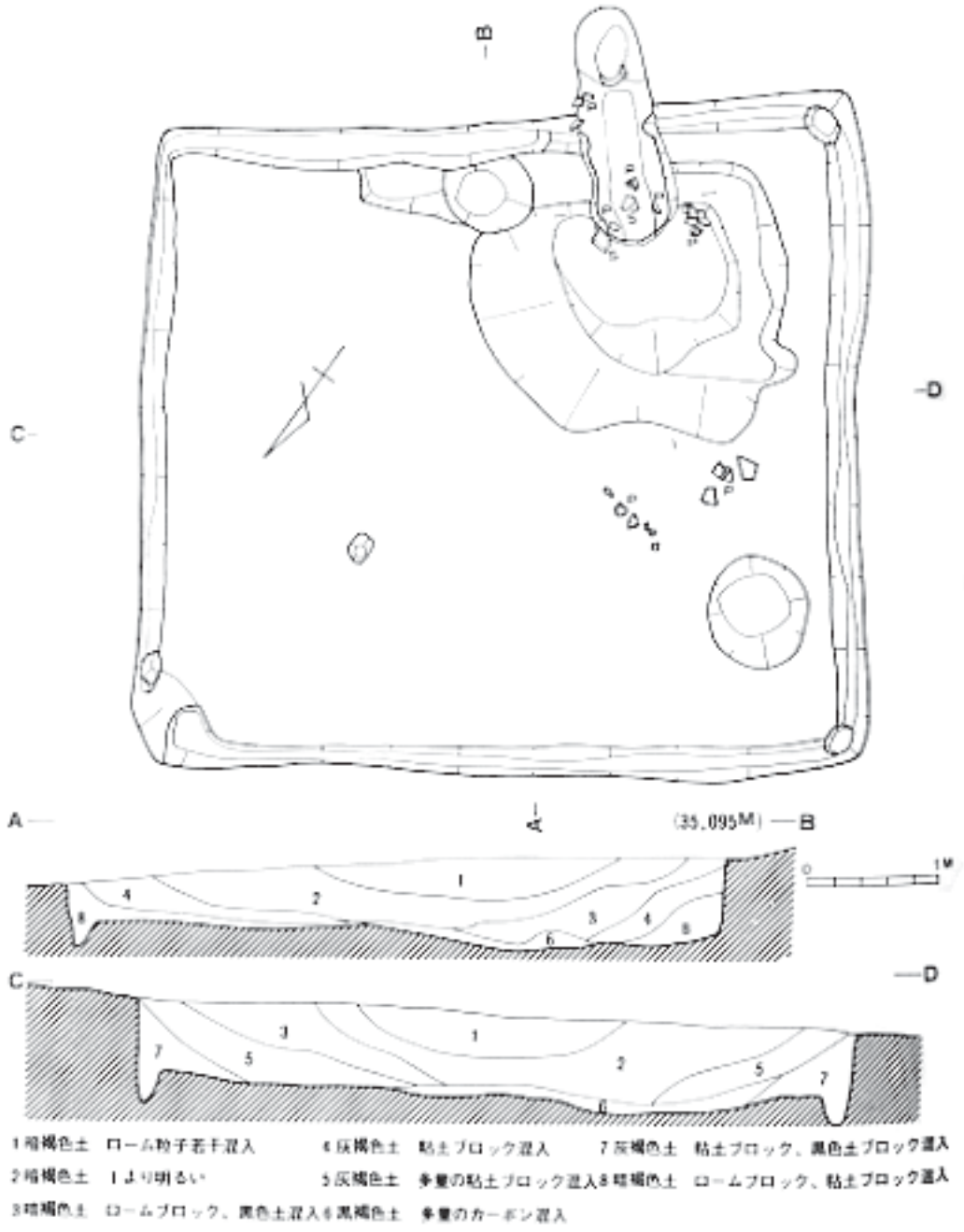
第21号住居跡（第236～238図）

Ｈ－4区のⅢ層（暗褐色土）上面で確認されたもので、方形プランを呈し、北西・南東壁3.4m×北東・南西壁3.75mの規模で主軸はＳ－45°－Ｅの方角を指す。

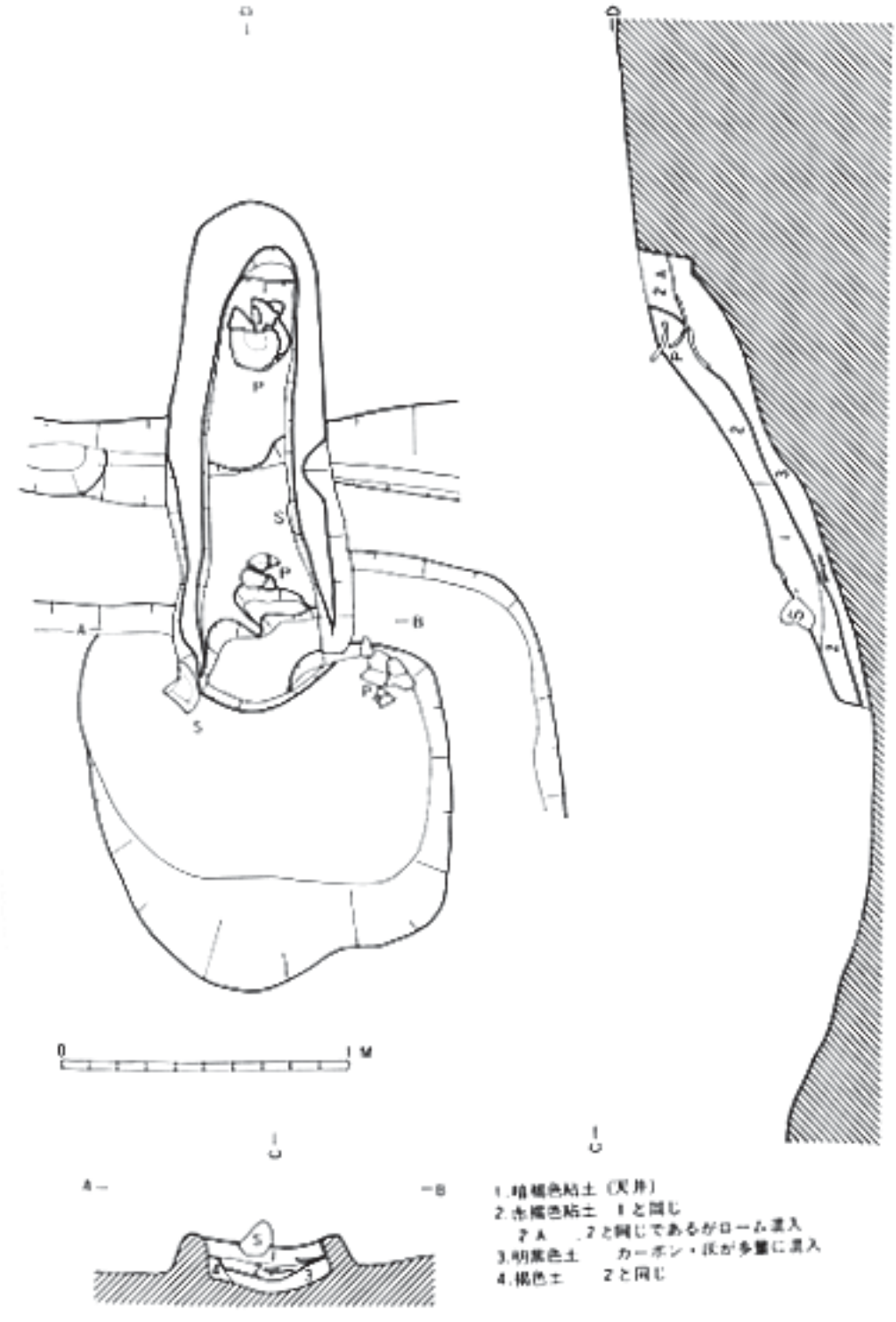
覆土は19層に区分でき、いずれも自然堆積を呈し、ほぼ全層にロームブロック・火山灰ブロックが多量に混入している。壁はほぼ垂直にちかく辺も直線的であるが、北東・北西・南西壁の一部が後世溝のため若干破壊されている。床面は平坦で貼床の痕跡も認められずローム層をそのまま床としているため非常にかたい。柱穴は四コートに各1個ずつ検出され、幅20cm、深さ25cmの若干広い周溝内に位置している。

カマドは南東壁中央部から若干南西寄りに設置しているが、燃焼部と袖部は消滅しており、煙道部だけが明瞭に検出された。

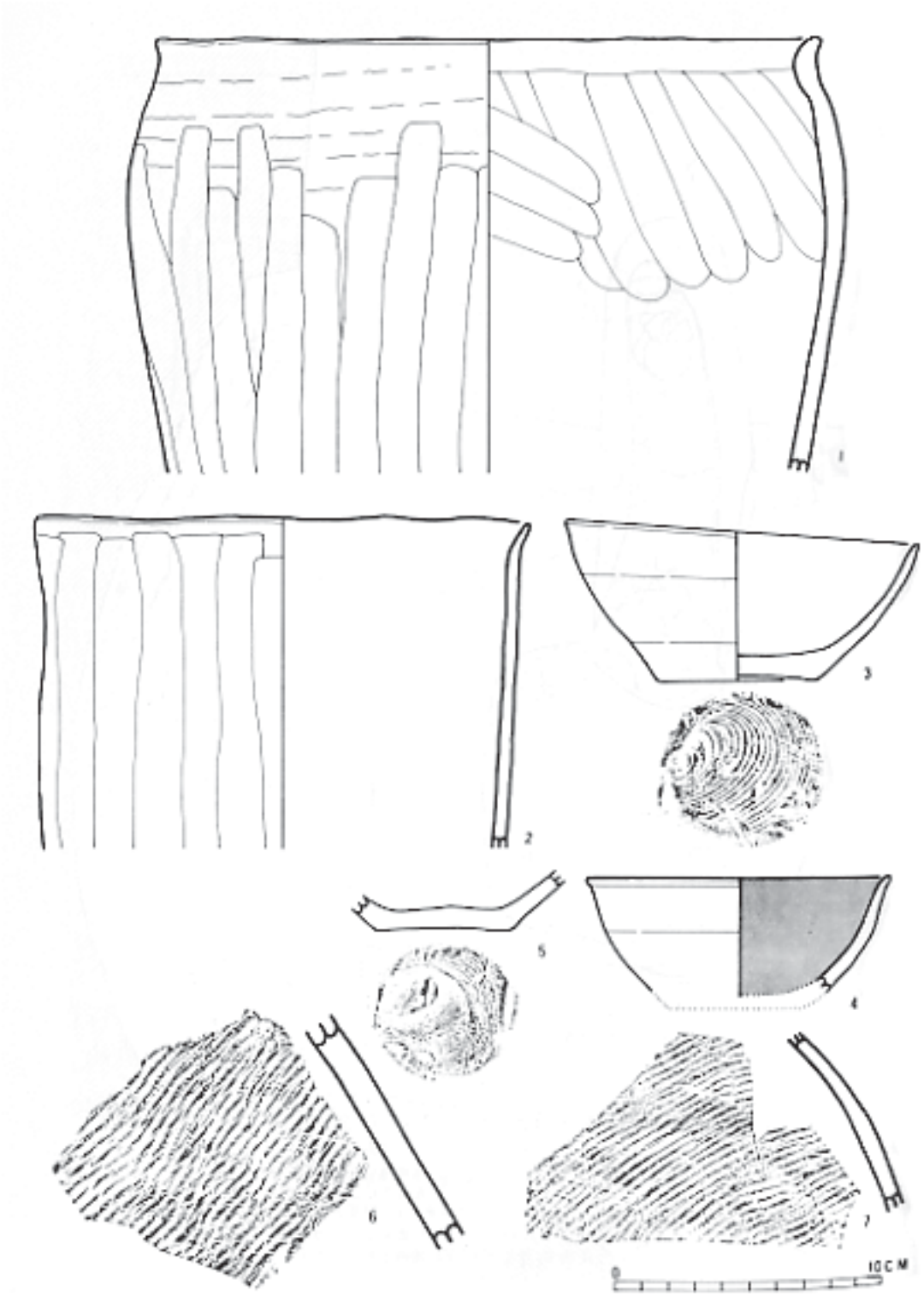
出土遺物は有段口縁と内面黒色の2個体の甕形土器（第283図－1・2）と、内黒坏4個（3～6）と底部近くに「×」のヘラ書き記号のあるもの（7)、内黒台付坏の台部（8）と須恵器



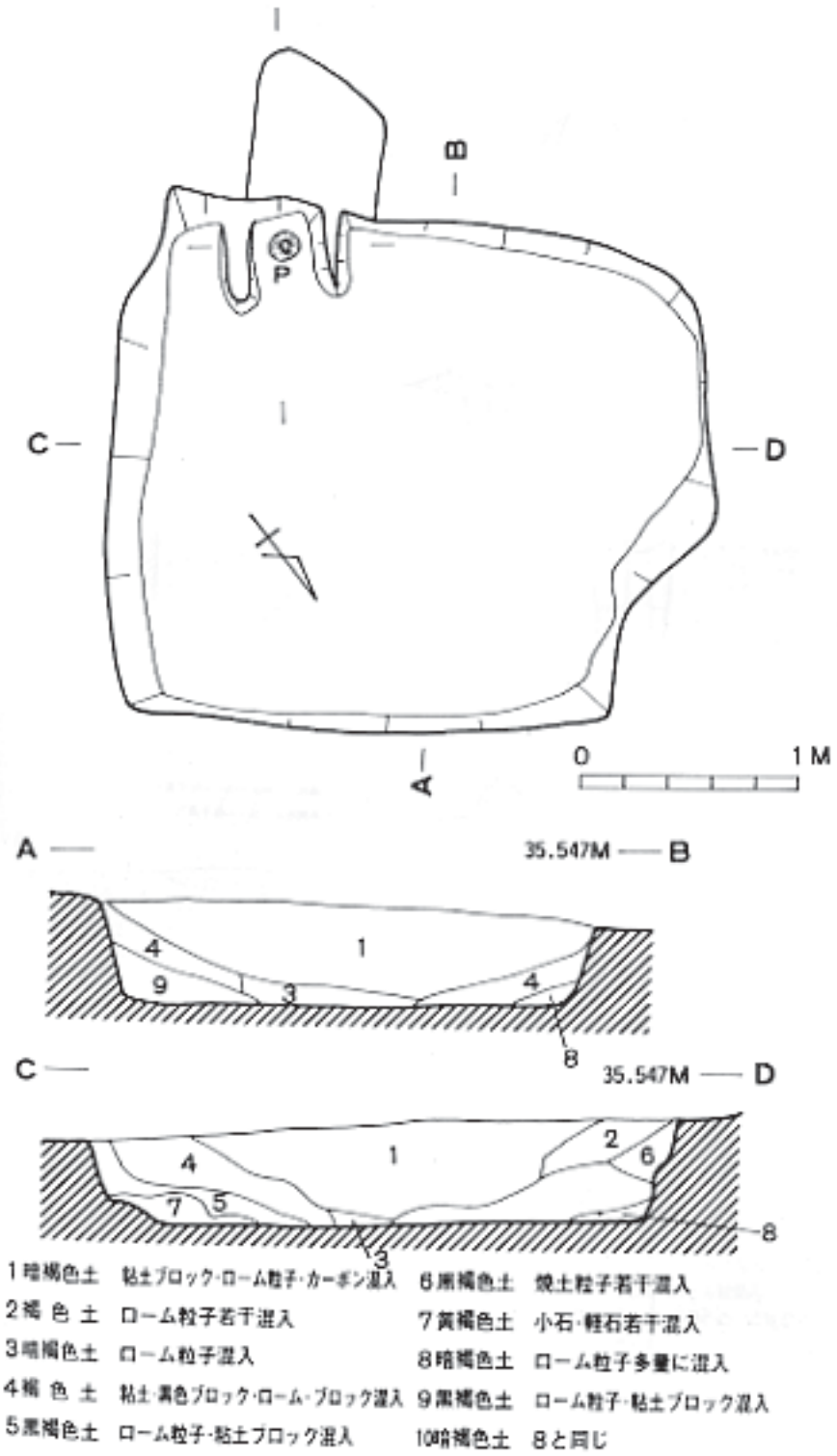
第 230 図　第 19 号住居跡実測図



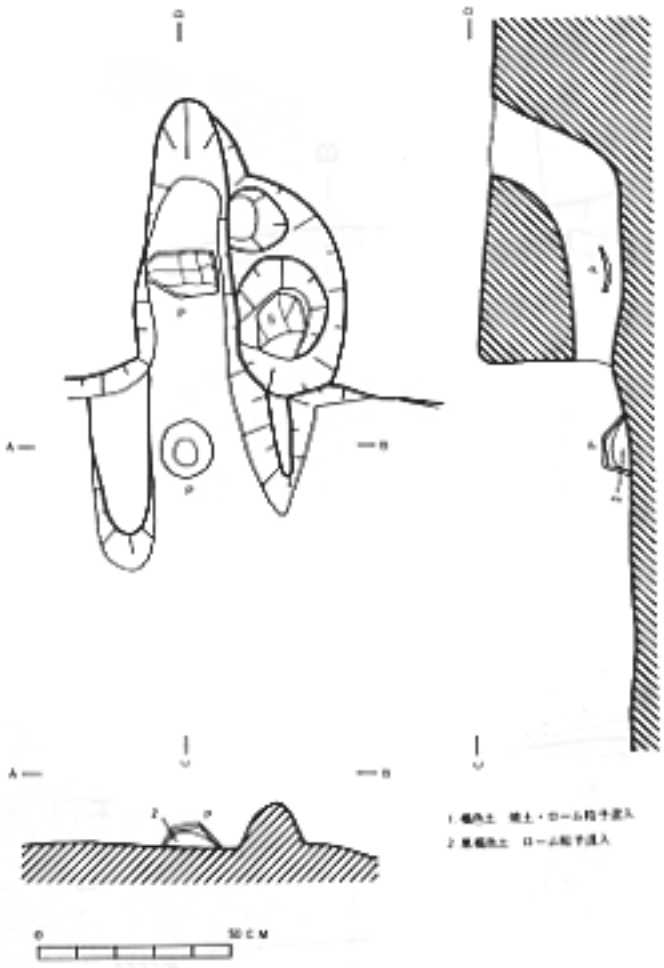
第 231 図　第 19 号住居跡カマド実測図



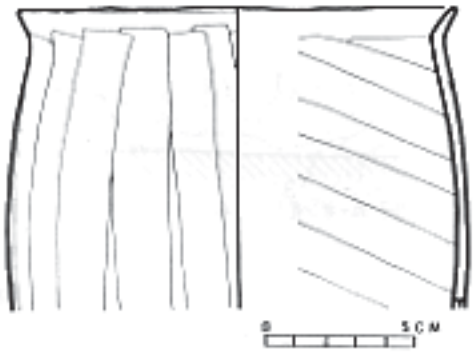
第 232 図　第 19 号住居跡出土遺物



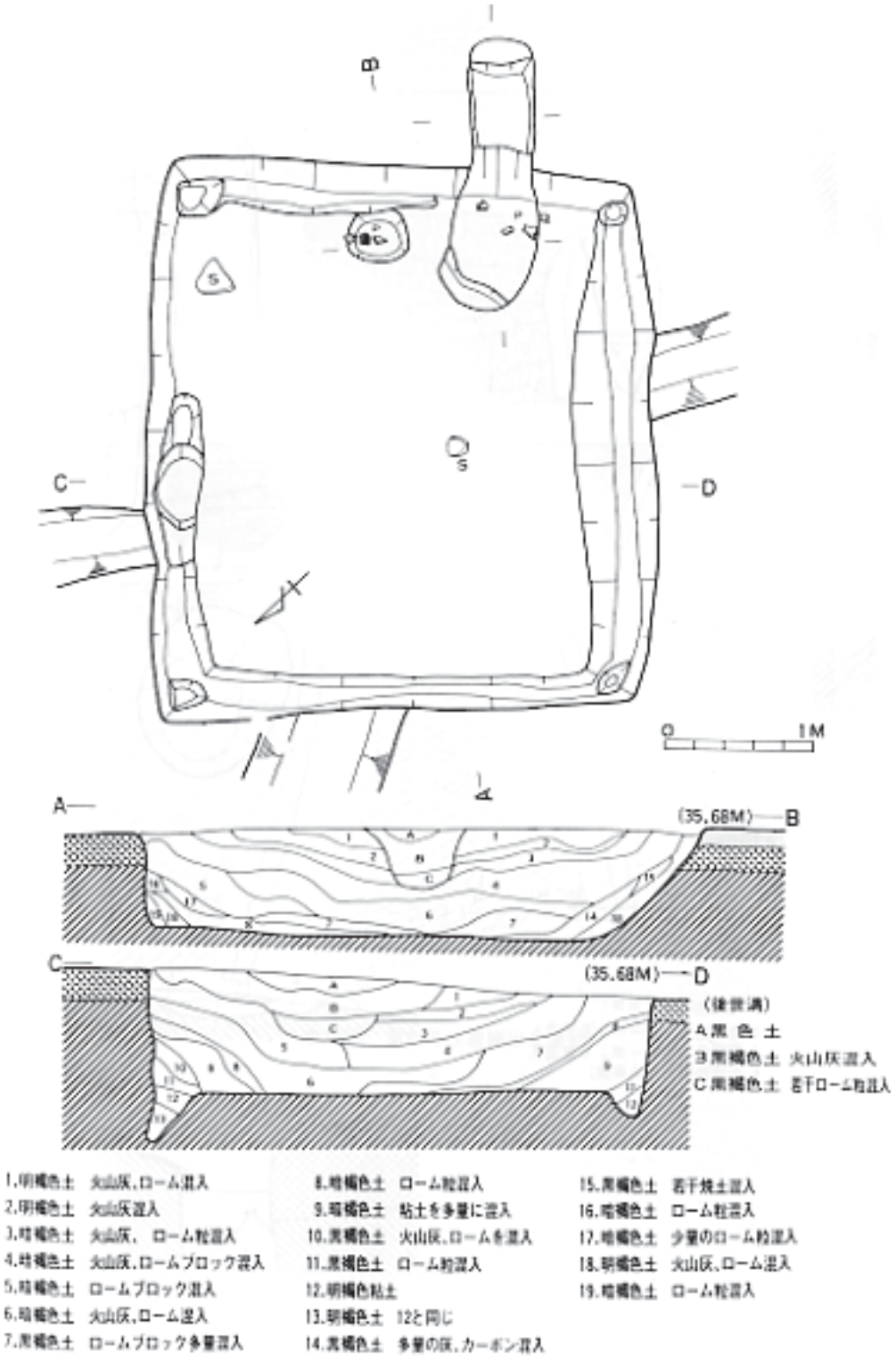
第 233 図　第 20 号住居跡実測図



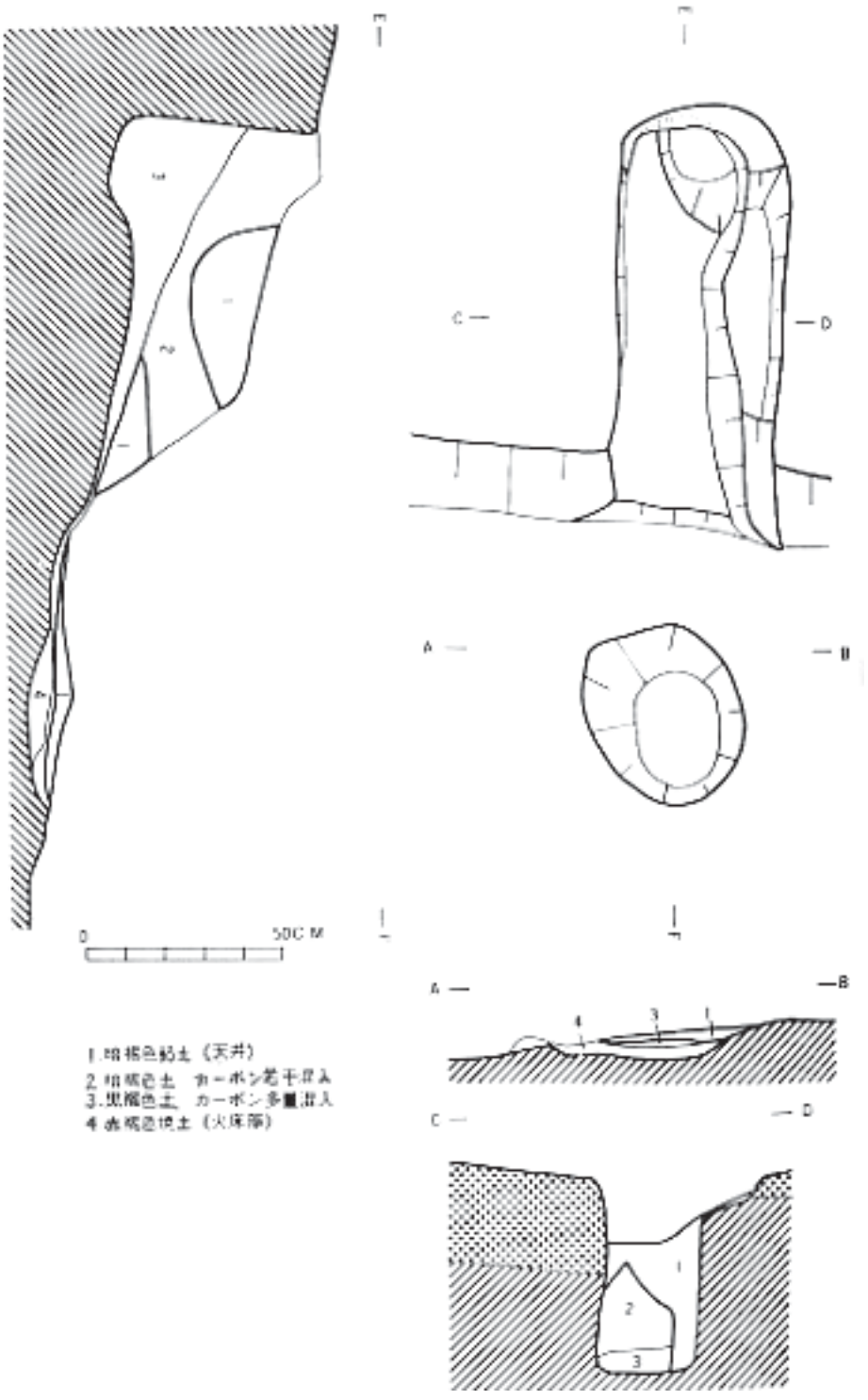
第 234 図　第 20 号住居跡カマド実測図



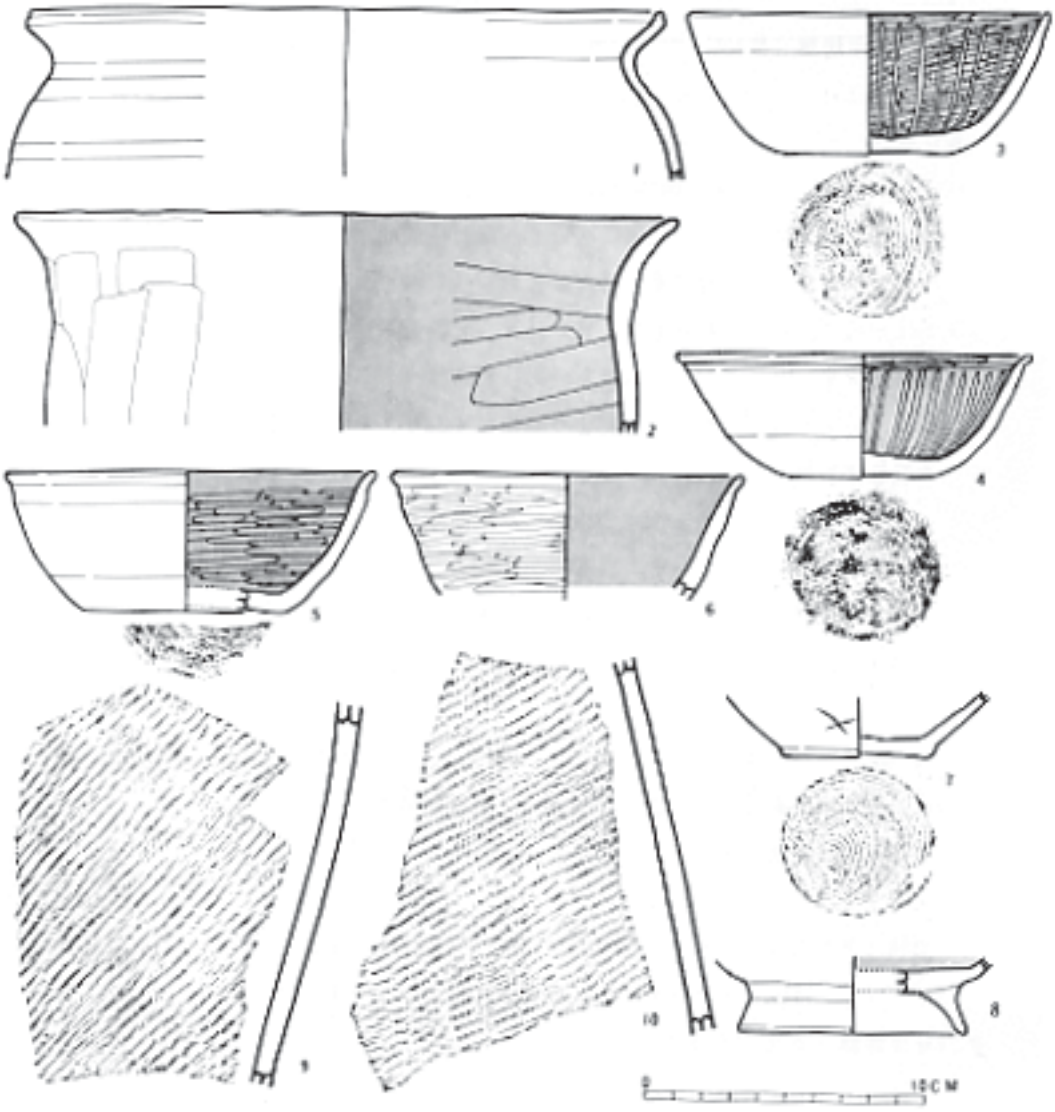
第 235 号　第 20 号住居跡出土遺物



第 236 図　第 21 号住居跡実測図



第 237 図　第 21 号住居跡カマド実測図



第 238 図　第 21 号住居跡出土遺物

大型甕破片（9・10）がそれぞれ出土した。

第22・23号住居跡（第239～241図）

22号住居跡はH－3区のV層上面で確認したもので、23号住居跡と重複している。多量の木炭、炭化材を出土したいわゆる焼失家屋である。

北西・南東壁4.3m×北東・南西壁4.35mの規模で方形プランを呈し、主軸はS－50°－Eを指す。覆土は自然堆積を示し、26層に区分できた。壁は北東壁半分と南東壁は23号住居覆土で若干柔かいが、他はローム層で堅く締まっており、立ち上がりもほぼ垂直で壁辺も直線的である。床面は平坦で、貼床の痕跡もなく堅い。又、北西側床面には多量の木炭・炭化材が出土し、焼失によって廃棄したことが考えられる。尚、北側コーナー付近に炭化した腰板も検出された。年代測定のためのサンプルを本住居跡より摘出しており、その結果は後の方に載せているのでそちらの方も御参照下さい。

柱穴は、東・西コーナーに1個ずつ検出したが他はなかった。又、周溝は壁沿いに幅15cm深さ25cmのものを一巡させている。

カマドは、南東壁の中央から若干南寄りに設置し、両袖部には石材を芯として、その他は暗褐色粘土（灰白色粘土）で作っており保存状態は窮めて良好である。又、前庭部は床面より5cm程低くつくられている。

23号住居跡は重複と後世撹乱のため、北・東コーナーと南東壁の一部しか現存していないが、北東壁4.35mで、主軸はS－49°－Eの方形プランである。

自然堆積を示す9層に区分でき、壁はほぼ垂直に立ち上がり、堅く締まっており、周溝、カマド、貼床等の痕跡は見られない。

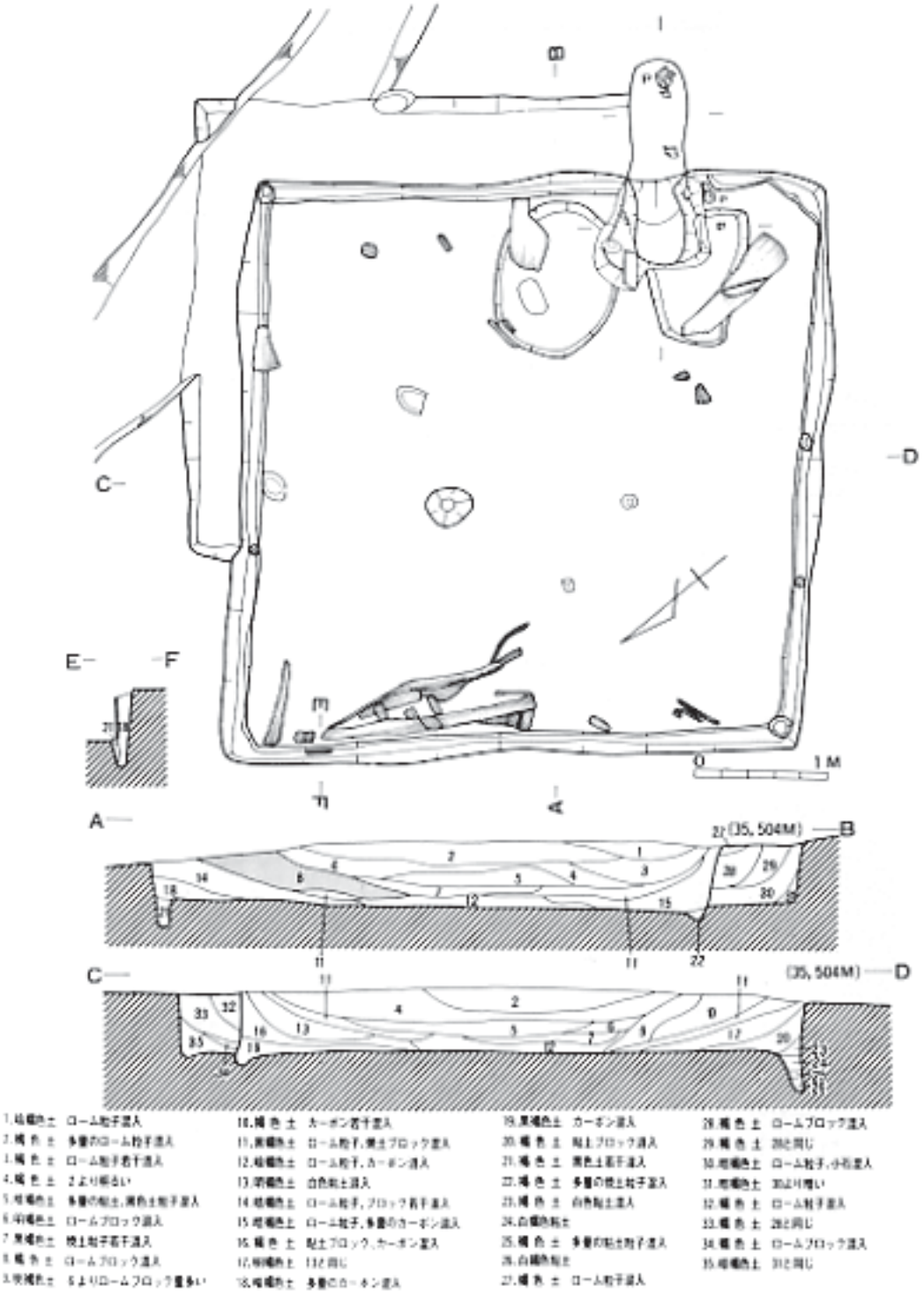
出土遺物は甕形土器・小形甕・坏・須恵器片などで、（第241図－3・4）は内面黒色処理を施しており、（5）は巻き上げ痕を器面に残し、外底面はヘラナデによる調整痕を有する。

第24号住居跡（第242～244図）

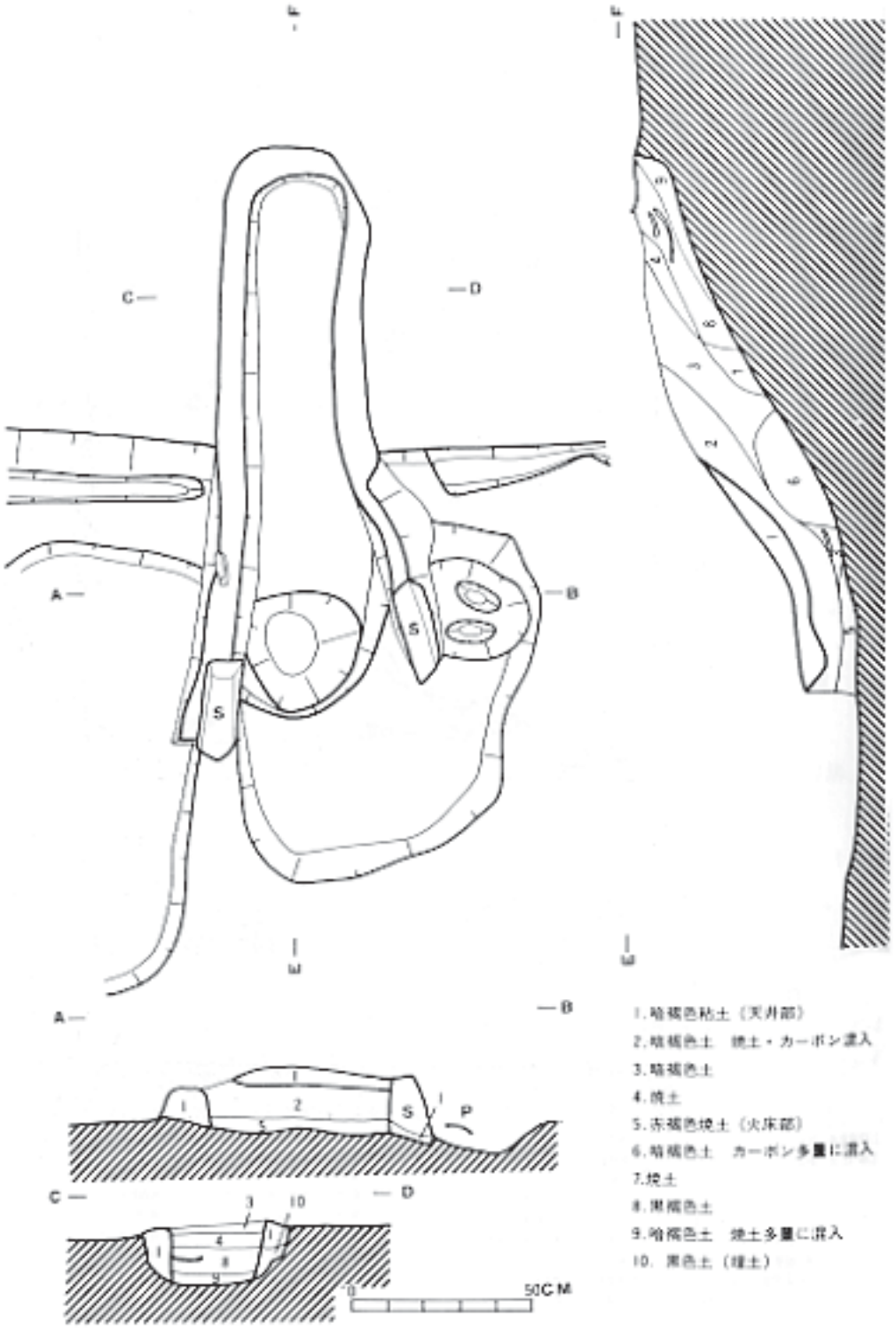
I－2区にV層上面で確認したもので26号住居跡と重複関係にあるが、時間的には本遺構の方が新しいものである。南東・北西壁3.6m×南西・北東壁3.5mの方形プランを呈し、主軸はS－49°－Eを示す。覆土は20層に区分され、いずれも自然堆積を示し，壁は直線的で立ち上がりは垂直であるが、北東壁と北西壁半分は26号住居覆土を壁としているため若干柔かい。床面はほぼ平坦で全般に堅く締まっている。柱穴は北側コーナーを除く3コーナーに1個ずつあり、周溝は幅30cm深さ10cmの比較的広いものを壁沿いに一巡させている。

カマドは南東壁中央部から若干北寄りに1基（改築・第1カマド）と、南寄りに1基（第2カマド）の2つを検出した。いずれも煙道部はローム層をくり抜くトンネル方式のもので保存は窮めて良好である。第1カマドはすでに燃焼部が消滅しており、煙道内は石で埋められていて、第2カマドも燃焼部天井・袖部が崩壊しており、掘り方によってその規模がうかがわれる。

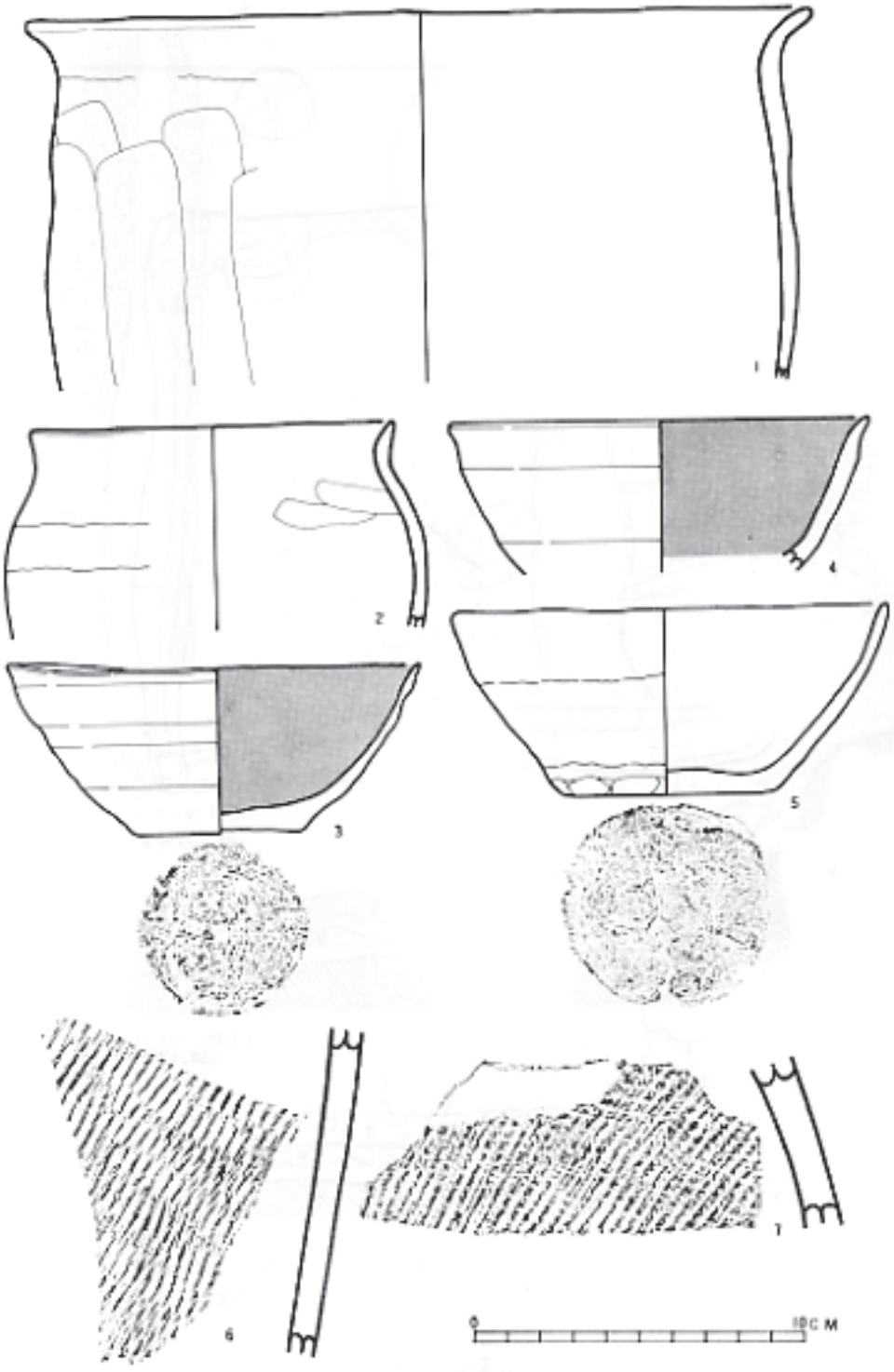
出土遺物は、土師器甕が3個体、坏が3個体、須恵器片1が出土した。（第244図－1）は、



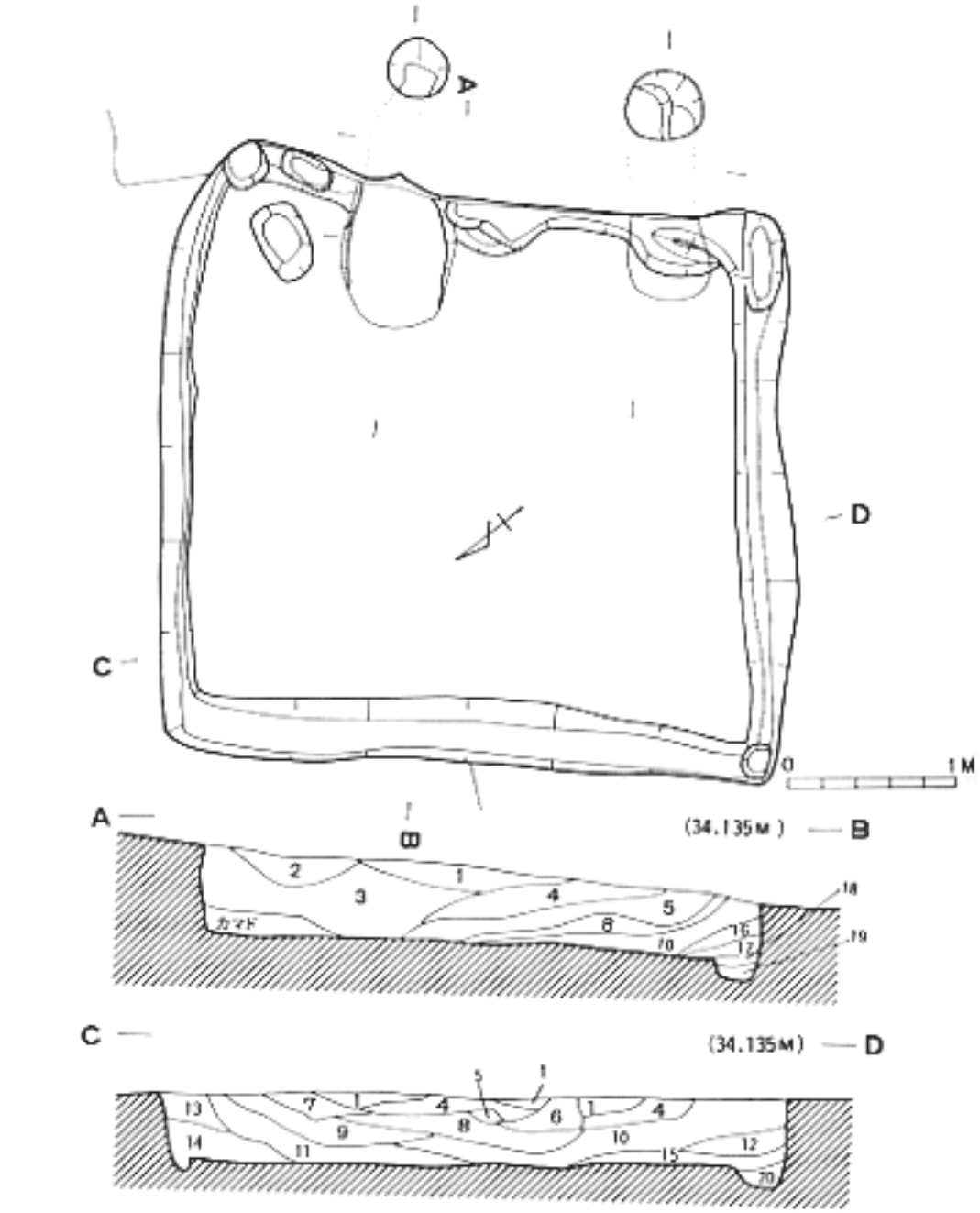
第 239 図　第 22,23 号住居跡実測図



第 240 図　第 22,23 号住居跡カマド実測図

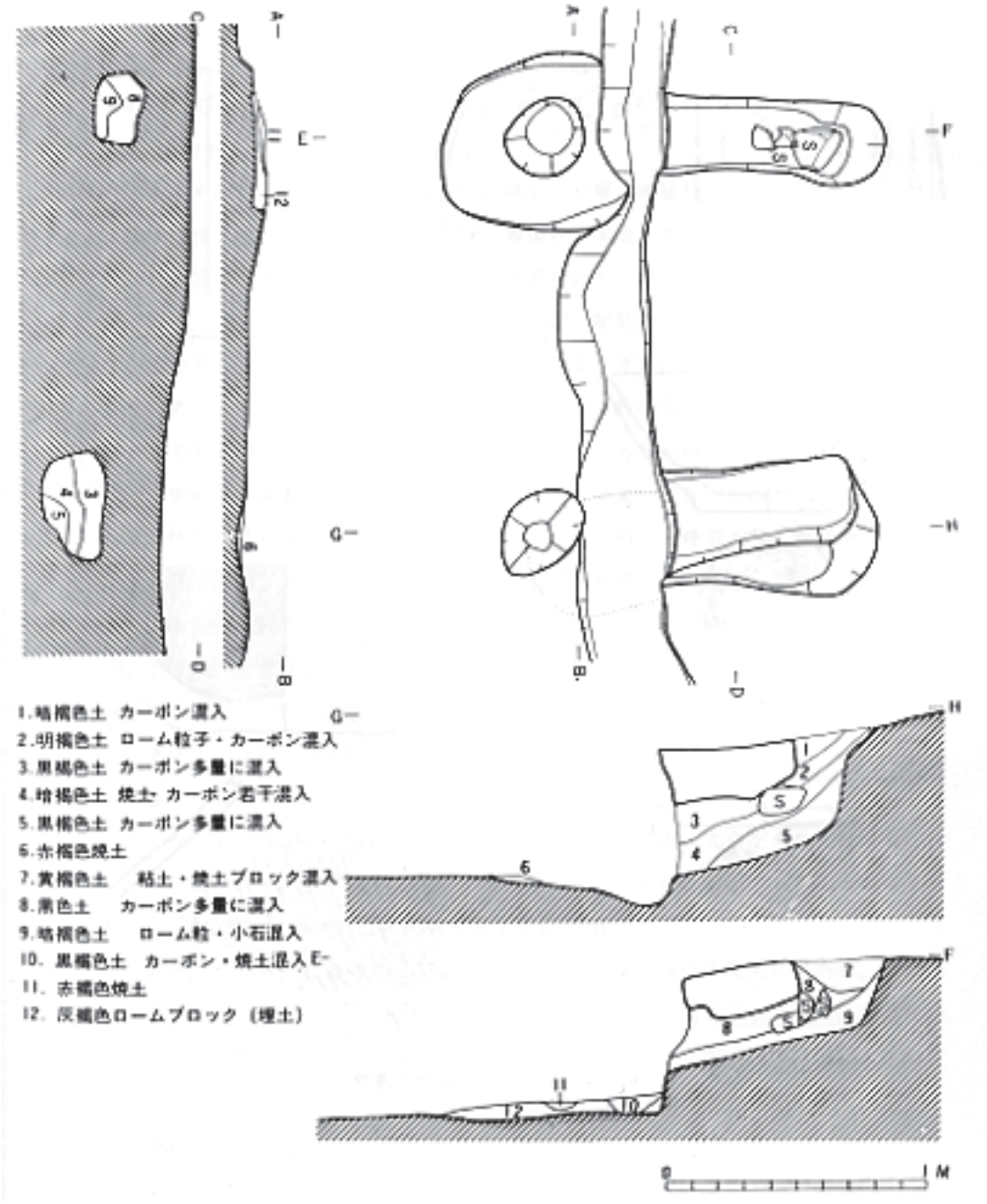


第 241 図　第 22,23 号住居跡出土遺物

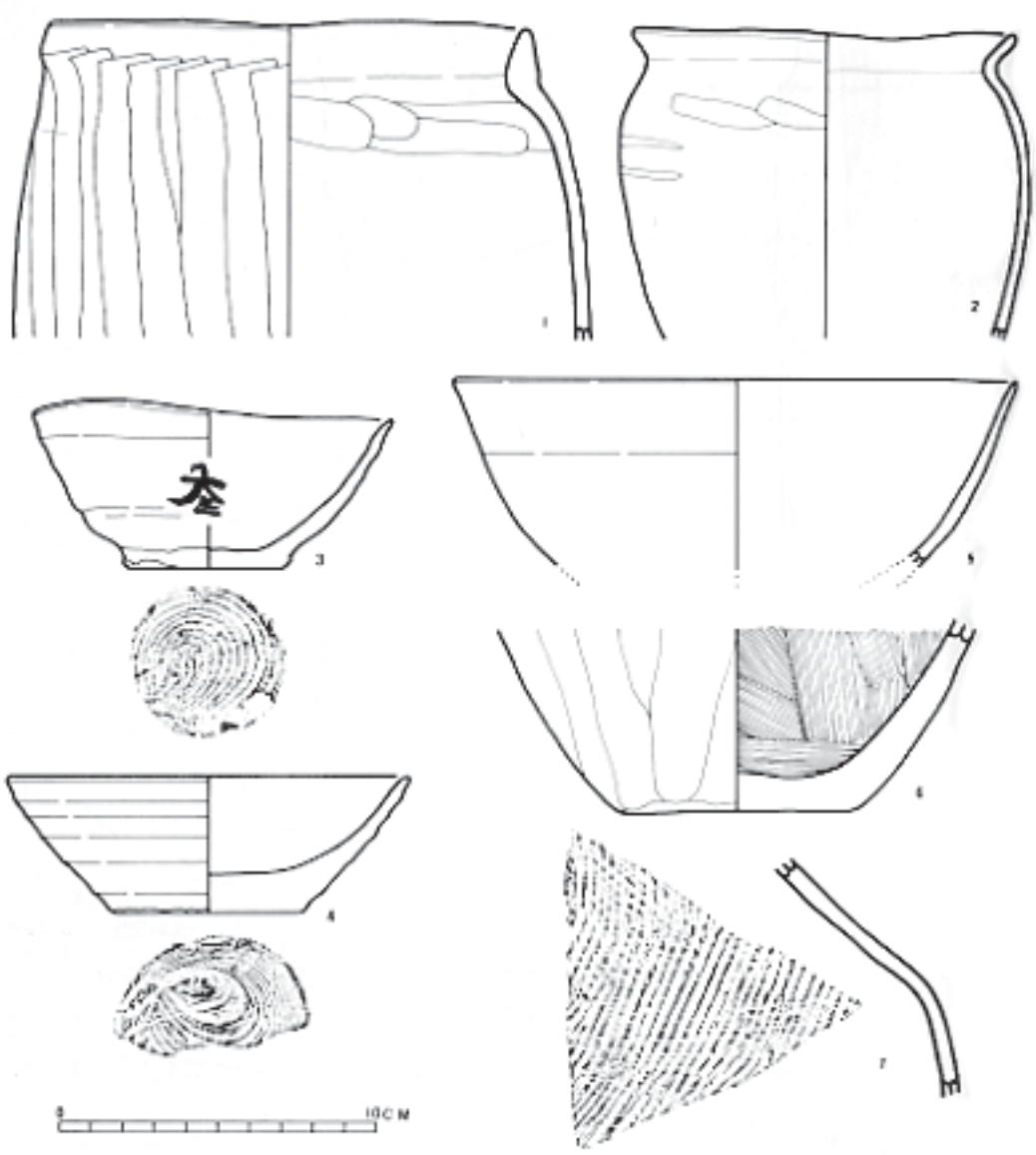


1暗褐色土 ロームブロック混入　6明褐色土 ロームブロック混入　11明褐色土 7と同じ　16黒 色 土 多量のカーボン混入
2暗褐色土 ローム・黒色土粒子混入　7明褐色土 6と同じ　12暗褐色土 カーボン若干混入　17明褐色土 14と同じ
3黒褐色土 多量のカーボン・焼土混入　8暗褐色土 黒色土混入　13暗褐色土 12と同じ　18黒 色 土 16と同じ
4黒褐色土 ローム・焼土ブロック混入　9暗褐色土 粘土粒子混入　14明褐色土 多量の白色粘土混入　19明褐色土 11と同じ
5明褐色土 多量のローム・粘土粒子混入　10暗褐色土 粘土ブロック混入　15明褐色土 14と同じ　20暗褐色土 12と同じ

第 242 図　第 24 号住居跡実測図



第 243 図　第 24 号住居跡カマド実測図



第 244 図　第 24 号住居跡出土遺物

口縁部が内湾するもので器面はヘラケズリの調整が行なわれている。又、(3) は器面に墨書「 」の文字が書かれている。(4) の坏は器高が 4㎝と浅いものでロクロ製の糸切り底である。

第25号住居跡（第245～247図）

J－2区Ⅴ層上面で確認したもので、26号住居跡と重複しており、増築の痕跡も見られた。主軸はS－62°－Eで、増築前の規模は南・北壁3.5m×東・西壁4.15m、増築後は南・北壁5.15m×東・西壁5.0mを測る。

層位は自然堆積を示し、9層に区分できたが、第8・9層は増築後の竪穴埋土である。増築後の床面は10cm程浅く作られており、低い部分（増築前の床面）を埋土を入れ貼床をしている。壁は南側が26号住居の覆土を使用しているため若干柔かいが、他はローム層のため堅く立ち上がりも垂直である。床面は前住居の部分は貼床であるが、増築部分はローム層で非常に堅く締まっており平坦である。柱穴は四コーナーに1個ずつあるが非常に浅く小さいものである。又、貼床下には3個のピットが検出されたが柱穴ではなくむしろ貯蔵穴に近いものである。周溝は北東部コーナーで若干途切れるが、幅10cm深さ10cmのものを各壁沿いに巡らしている。

カマドは東壁中央部から南寄りに設置しているが、これは増築に伴なって改築したものであり、保存状態もよく煙出し孔も明瞭に確認された。灰白色粘土で袖部と煙道天井、壁部を作っているが、燃焼部天井は消滅していた。煙道は掘り下げて壁と天井に粘土を貼ってつくったものであり、煙道内には廃棄後投入したものと見られる多量の石と土器片が検出された。

器面に巻き上げ成形痕を残しその上をヘラナデ調整のもの（第247図－1）、上半部を回転台使用でヨコナデされた複合口縁のもの（2）、内面をハケ目のヨコナデのもの（3）などの甕形土器6個体と、坏形土器4個体が出土した。

第26号住居跡（第248～250図）

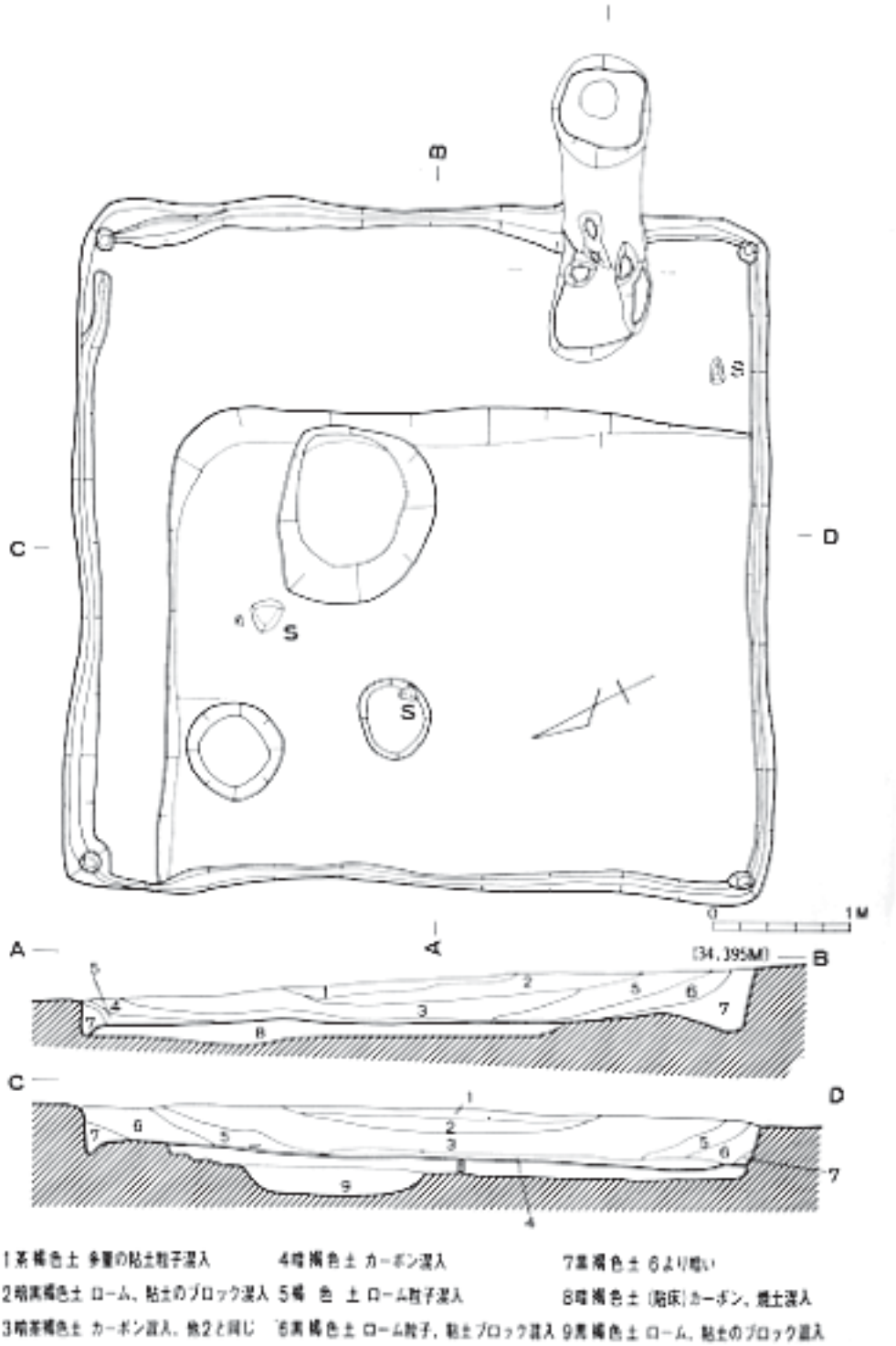
Ⅰ－2区のⅤ層上面に確認したもので、3軒による重複関係で南・北壁がそれぞれ切断されている。尚、24・25・26号住居の中で最も早くに構築されたのが本住居跡である。主軸はS－66°－Eを示し、北壁5.2m×西壁5.25mの方形を呈する。覆土は29層に区分できいずれも自然堆積をしており、5・8・12層の如く多量のロームブロックを混入するものもある。壁はほぼ直線的で立ち上がりも垂直に近い。又、24号住居によって南壁の東寄りと床面を、25号住居によって北壁全体を切断されているが床面まで達していないので、北側の周溝は確認できた。

床面は貼った痕跡はなく、平坦で堅く踏み締まっており、柱穴は南東コーナーを除く3コーナーに1個ずつ確認した。

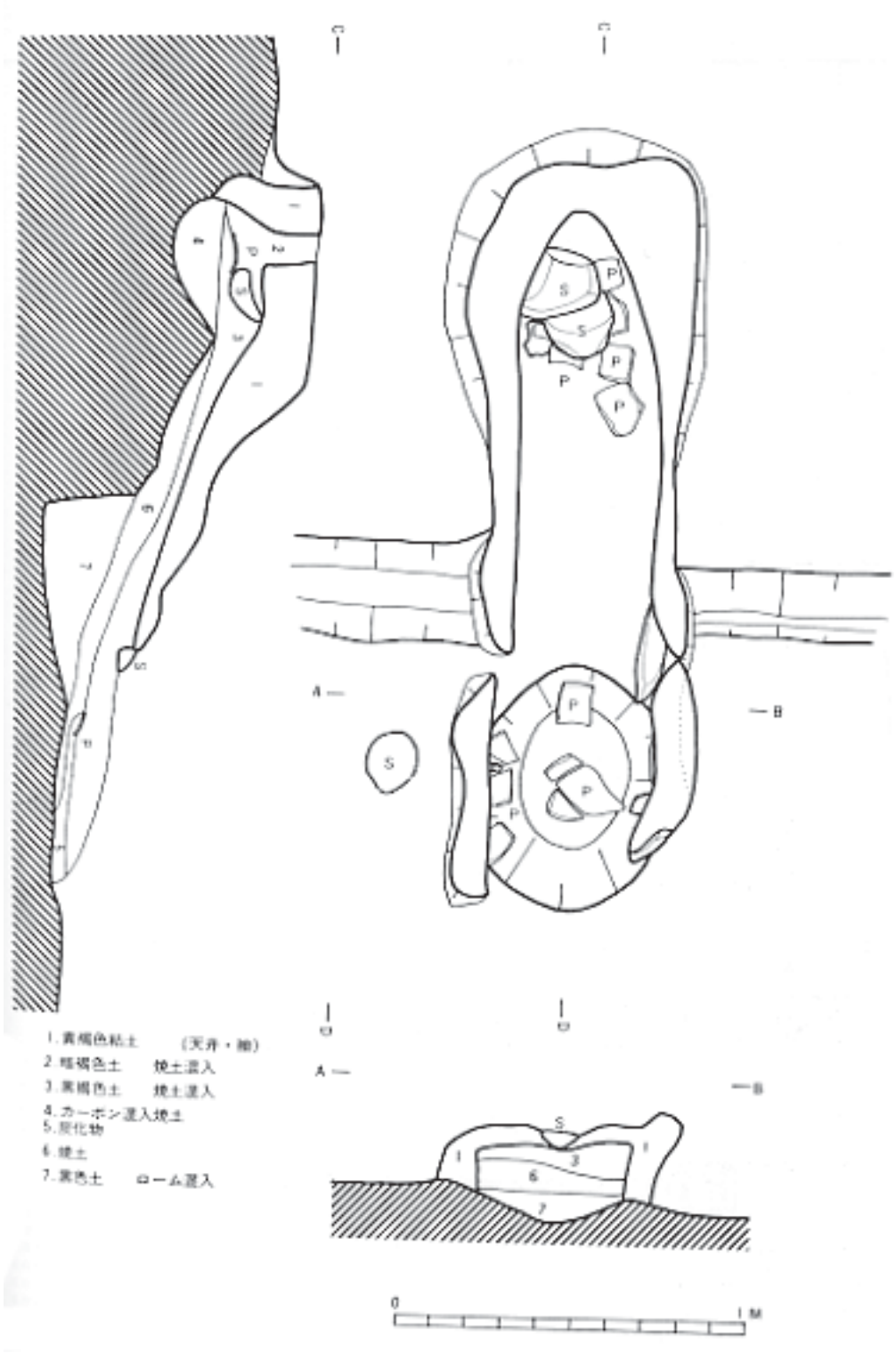
カマドは東壁中央部から南寄りに設置しており、袖部は備え付けのものでローム層をそのまま使用している。又、煙道天井・壁部と燃焼部天井は灰白色粘土で構築しており比較的保存状態は良好である。甕形土器は、ヘラケズリのもの（第250図－1）、器面に巻き上げ成形痕を明瞭に残すもの（3・5）があり、杯は内黒（8）と台部（9）が出土している。

第27号住居跡（第251～253図）

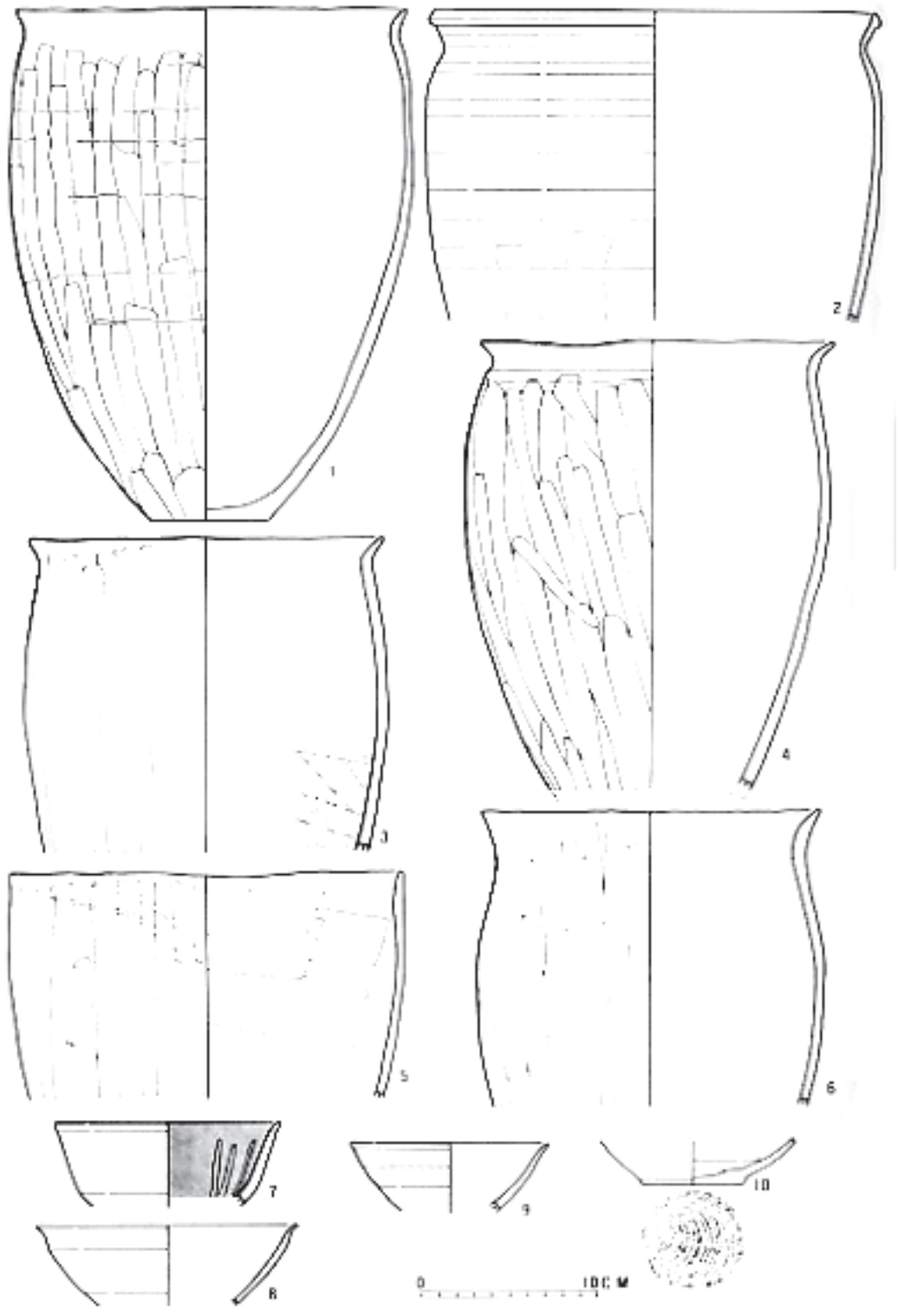
Ⅰ－3区のⅥ層上面で確認したもので、北西・南東壁4.7m×北東・南西壁4.25mの方形を呈し、主軸はS－53°－Eを示す。南西壁だけが若干湾曲しているが、他はほぼ直線的で、立



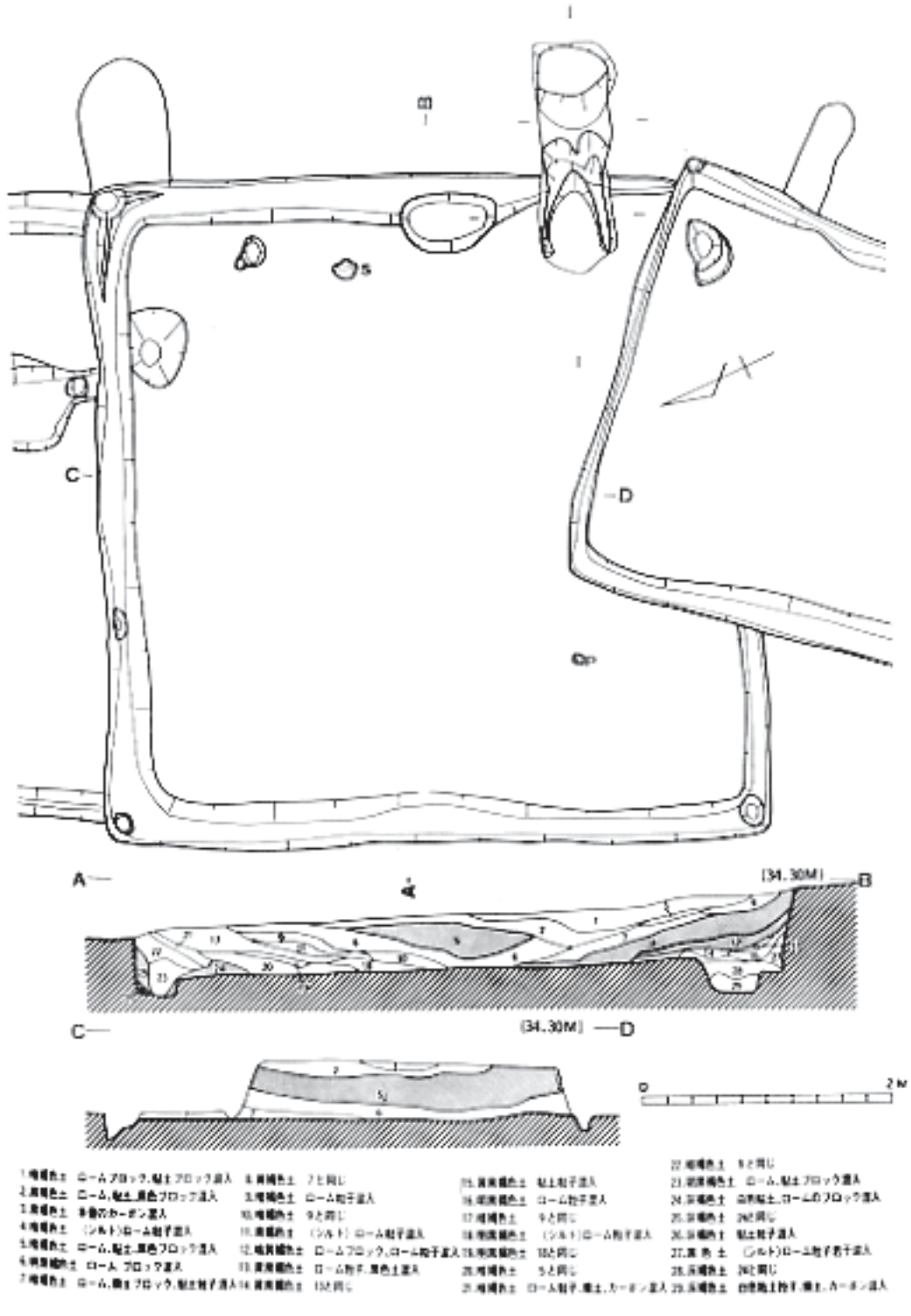
第 245 図　第 25 号住居跡実測図



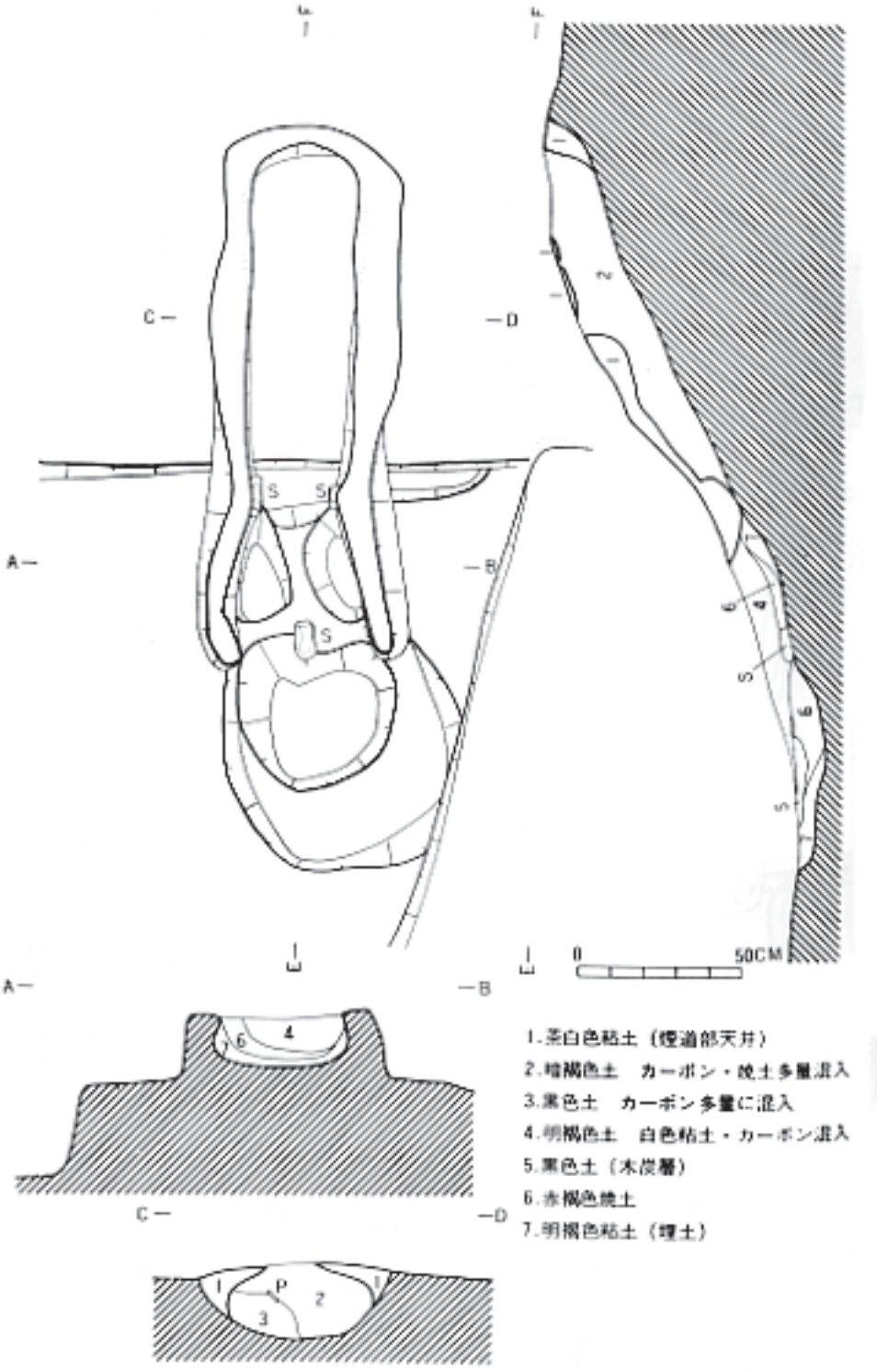
第 246 図　第 25 号住居跡カマド実測図



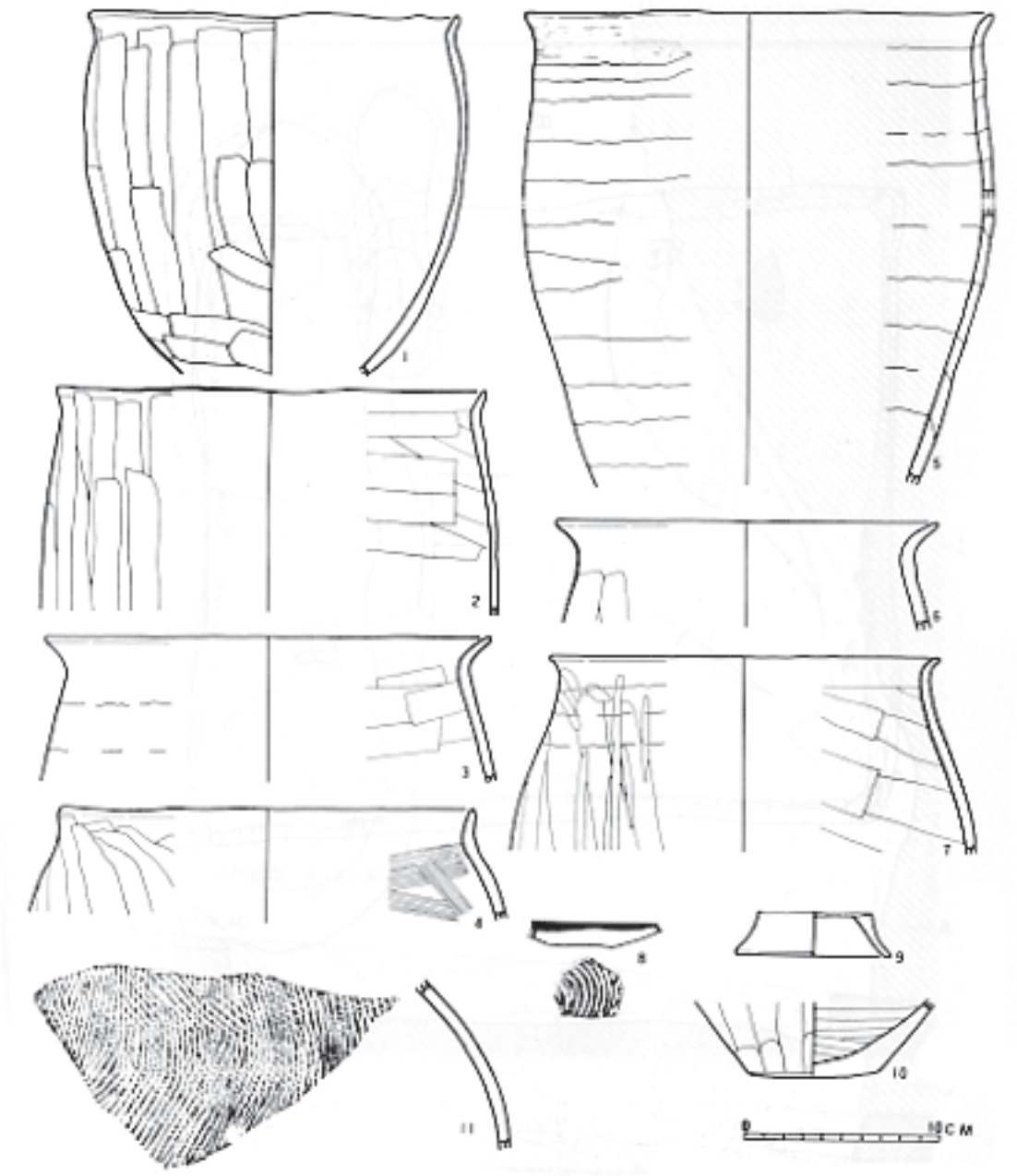
第 247 図　第 25 号住居跡出土遺物



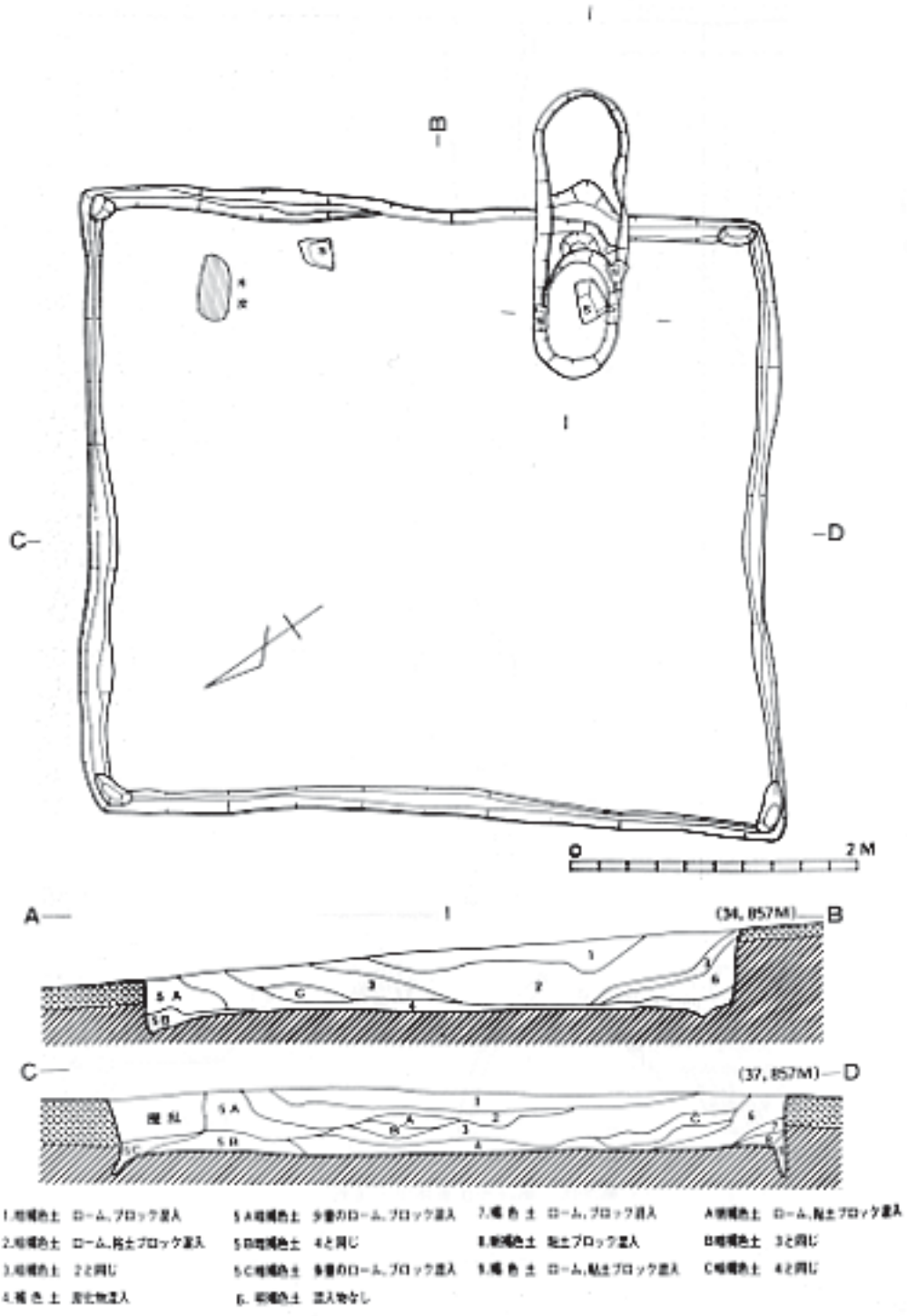
第 248 図　第 26 号住居跡実測図



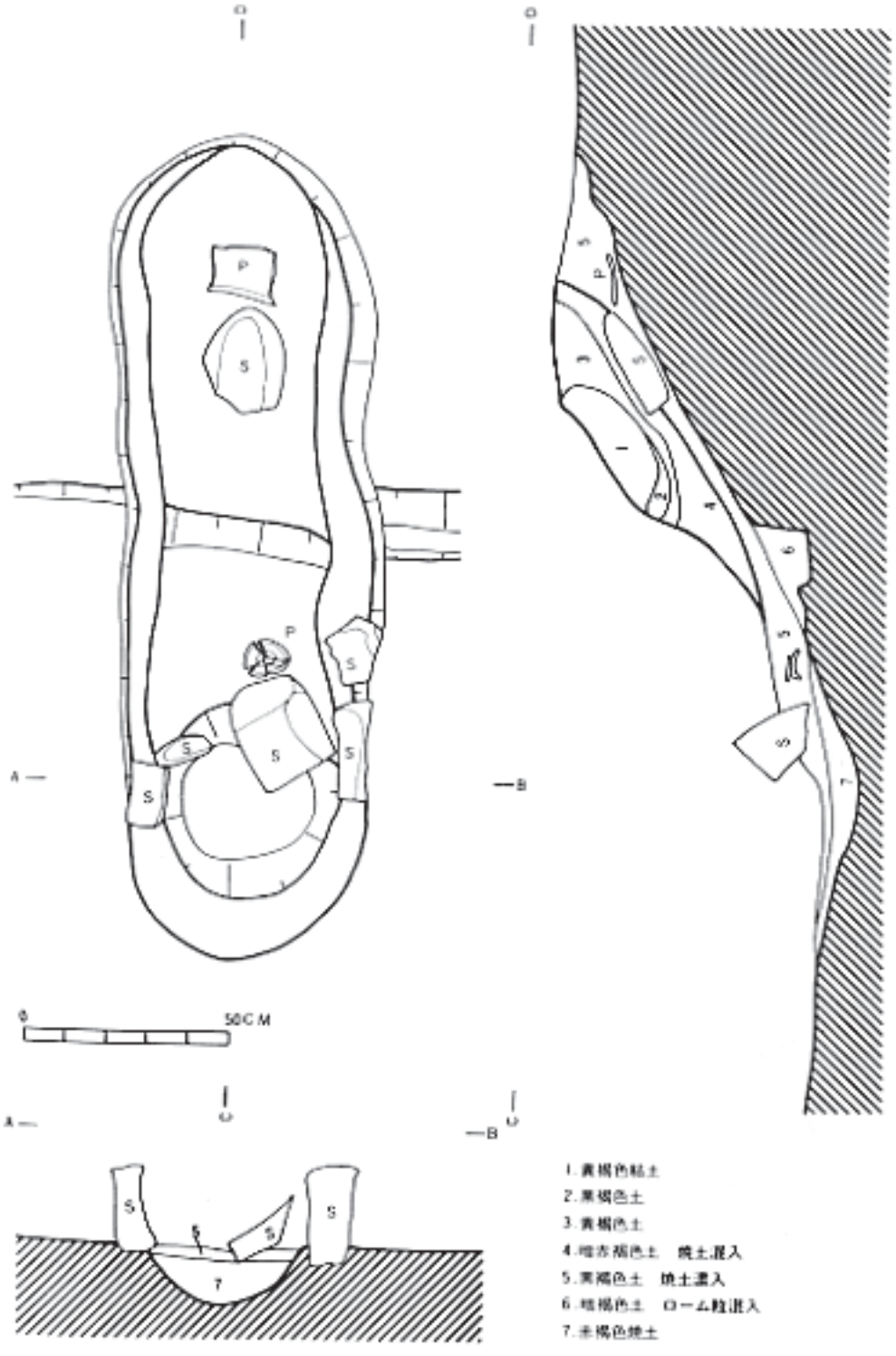
第 249 図　第 26 号住居跡カマド実測図



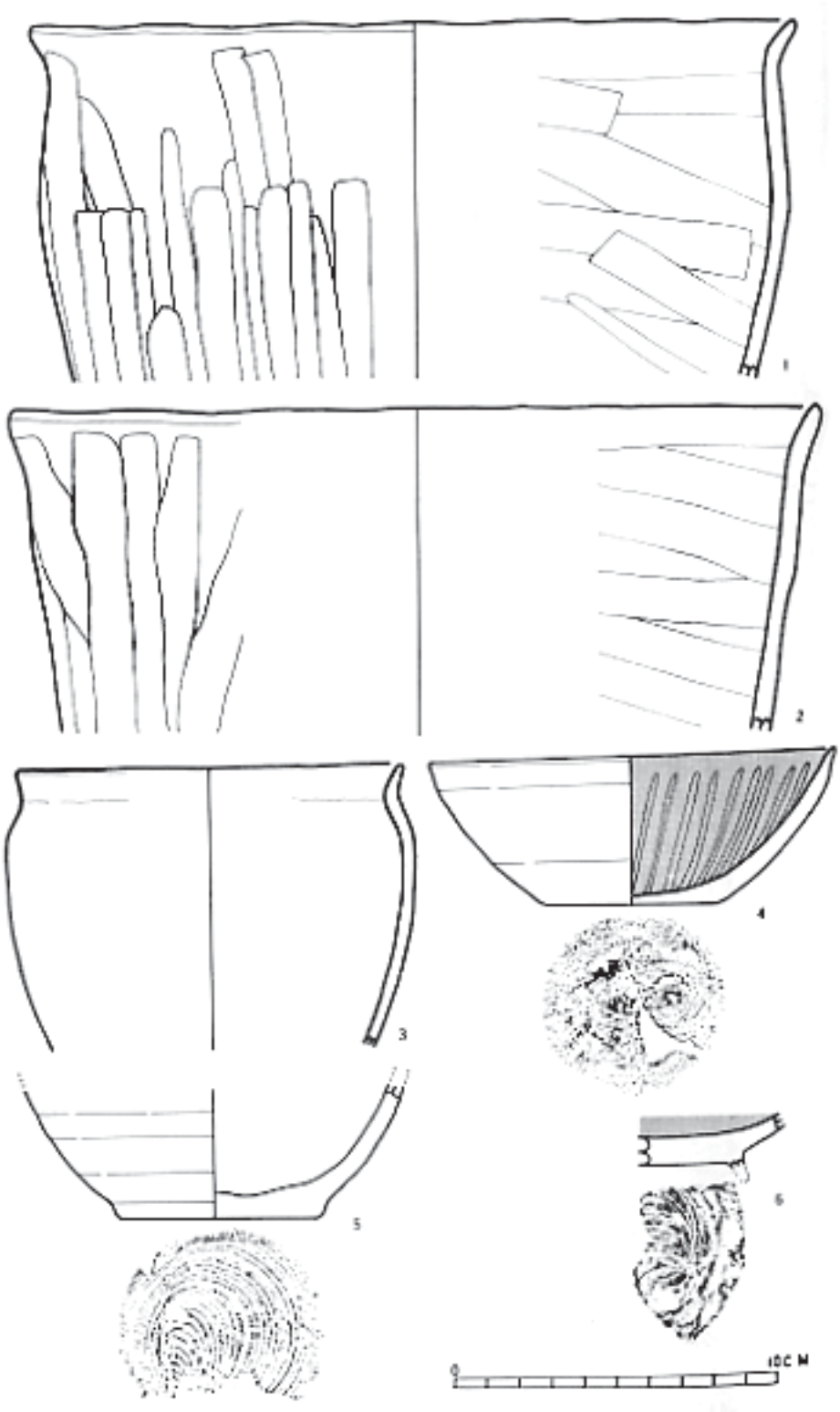
第 250 図　第 26 号住居跡出土遺物



第 251 図　第 27 号住居跡実測図



第 252 図　第 27 号住居跡カマド実測図



第 253 図　第 27 号住居跡出土遺物

ち上がりは垂直にちかいが北東壁が若干傾斜している。床はほぼ平坦で堅く踏み締まっており、貼床の痕跡は見られない。柱穴は四コーナーに1個ずつあり細く深いものであり、周溝は幅8㎝、深さ20㎝のものを巡らしている。

カマドは南東壁中央部から南西寄りにあり、燃焼部天井はすでに崩壊消滅しているが袖・煙道部は保存が窮めて良好であった。袖部には芯として石材を使い、煙道天井・壁部は灰白色粘土で構築している。

ヘラナデ整形による甕形土器（第253図－1・2)、ロクロ成形の甕形土器底部（5)、内黒坏（4)、内黒坏の台付底部（6）などが出土した。

第28・29号住居跡（第254～257図）

J－4区のIV層上面で確認したもので、本遺跡は昭和50年試掘調査の際精査したもので、2軒の複合住居であり、28号住居を切断し構築している。

第28号住居跡は主軸S－22°－Eで、南・北壁4.3m×東・西壁3.7mの方形プランを呈する。覆土は自然堆積を示し、17層に区分でき全般にロームブロックが多量に見られる。壁は南・西壁を除けばIV・V層に構築しているため非常に堅く締まっているがやや傾斜している。西側に若干貼床が確認されたが、その他の床面はロームで堅く、ほぼ平坦である。周溝は南・東側の一部で切断しているがほぼ全体に壁沿い幅10㎝、深さ10㎝のものを一巡させている。

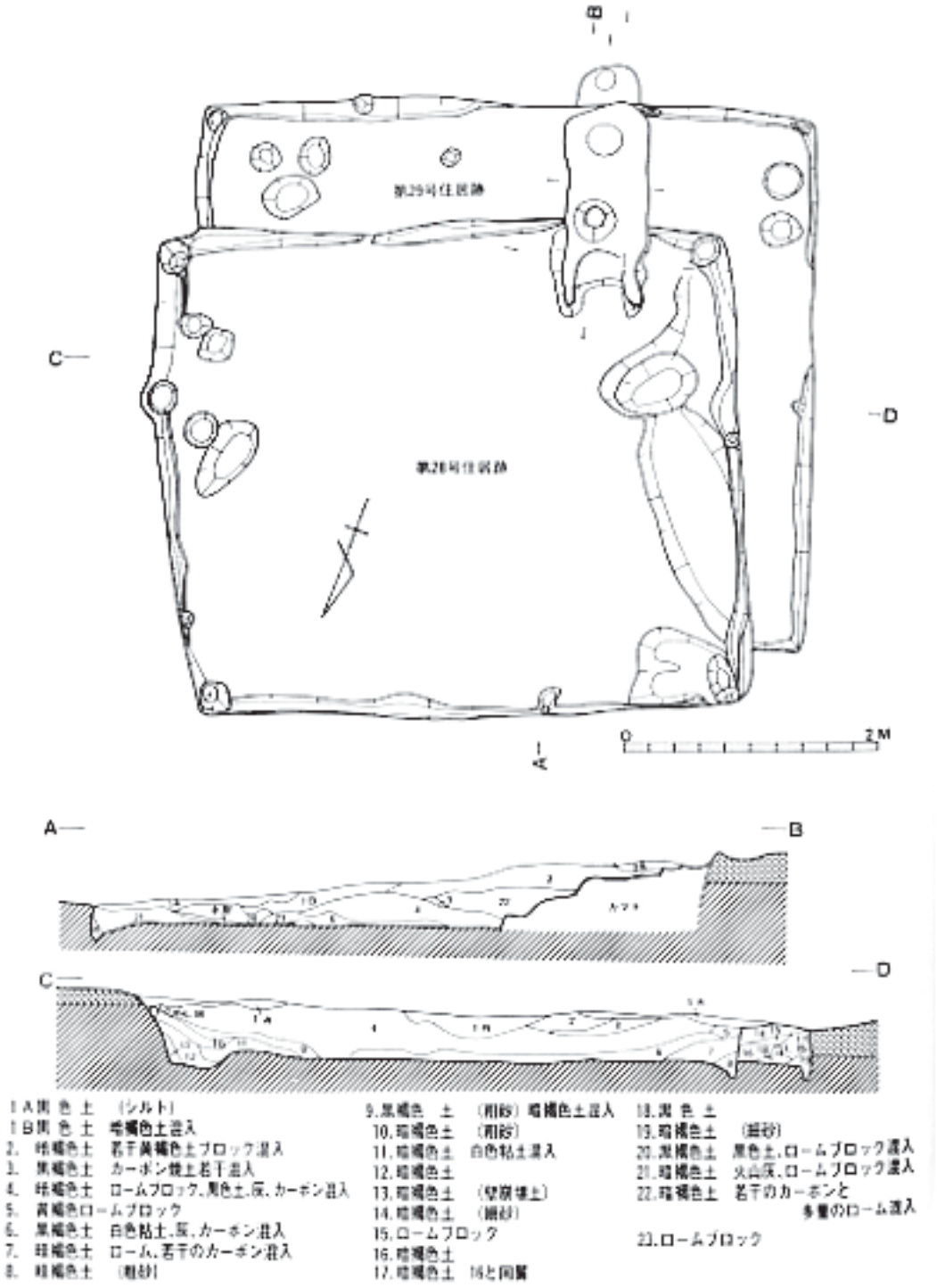
カマドは南壁中央から幾分西寄りに設置しており保存状態は窮めて良好である。本体は灰白色粘土を素材として構築しており、土圧によってかなり潰れているが煙出し孔及び煮沸土器をのせる穴などが非常に明瞭に残っており、カマド構造を知る窮めて貴重な資料の一つである。

出土土器はヘラケズリ調整の甕形土器底部（第257図－1）と坏形土器4個（うち内黒土器3個）が出土した。

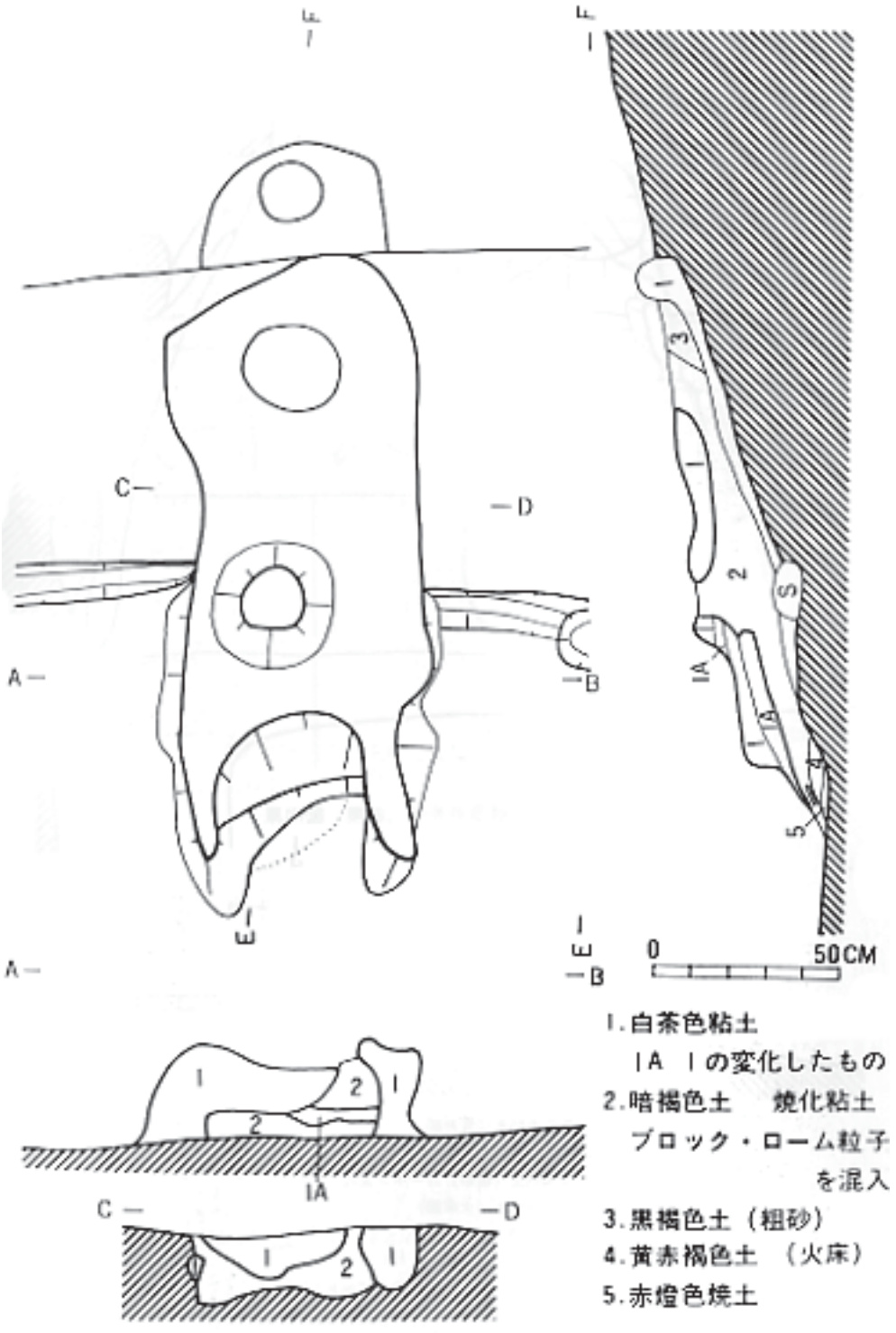
第29号住居跡は28号住居によって北・東壁の殆どが破壊されており、わずかに南・西壁によってその規模を知ることができる。主軸はS－19°－Eで南壁4.75m×西壁4.15mの方形で、その壁辺も直線的で立ち上がりも垂直である。覆土は6層確認できたが壁ぎわのため全容は不明である。床面は若干柔かいが、貼床の痕跡は認められず、柱穴は南東・西コーナーに1個ずつ検出した。周溝は幅8㎝、深さ10㎝のものが西壁中央で途切れるが現存部全体に巡らしてある。カマドは南壁中央から若干西寄りで、28号住居カマドと重り合っているが破壊はされていない。両袖部に芯として石材を配し灰白色粘土でかためたものであるが煙道部は崩壊しているため短かく感じられる。覆土からは巻き上げ成形痕を器面に残す甕形土器（第257図－6・7）が出土したが他の遺物はなかった。

第30号住居跡（第258～261図）

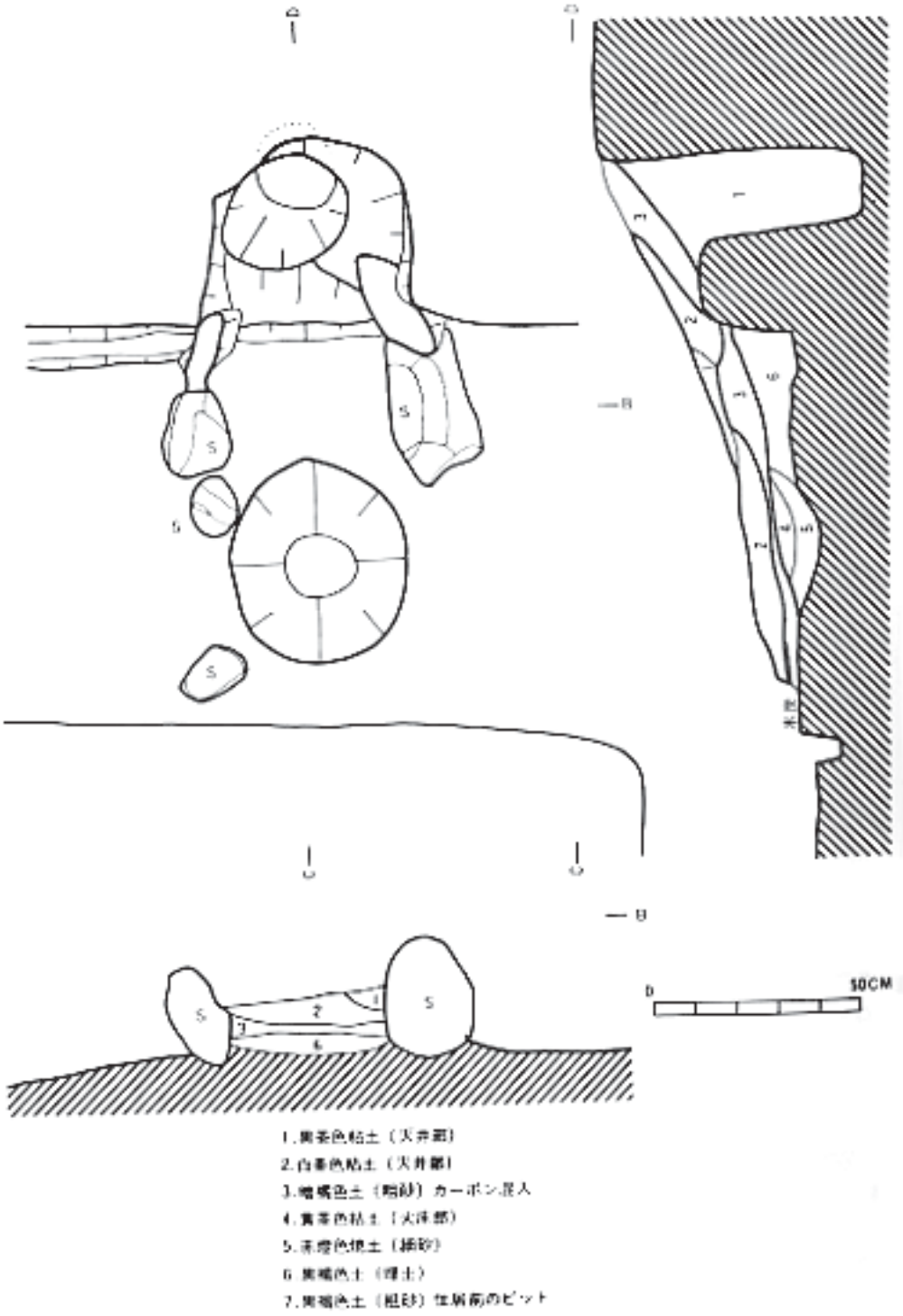
J－3区のIV層上面で確認されたもので、主軸S－52°－E、北西・南東壁6.6m×北東・南西壁6.45mで四壁辺は直線的な方形プランを呈する。覆土は11層に区分されるがいずれも自然堆積土の状態を示し、全般にローム粒子・ブロックの混入量が多い。壁はやや傾斜しているが



第 254 図　第 28,29 号住居跡実測図

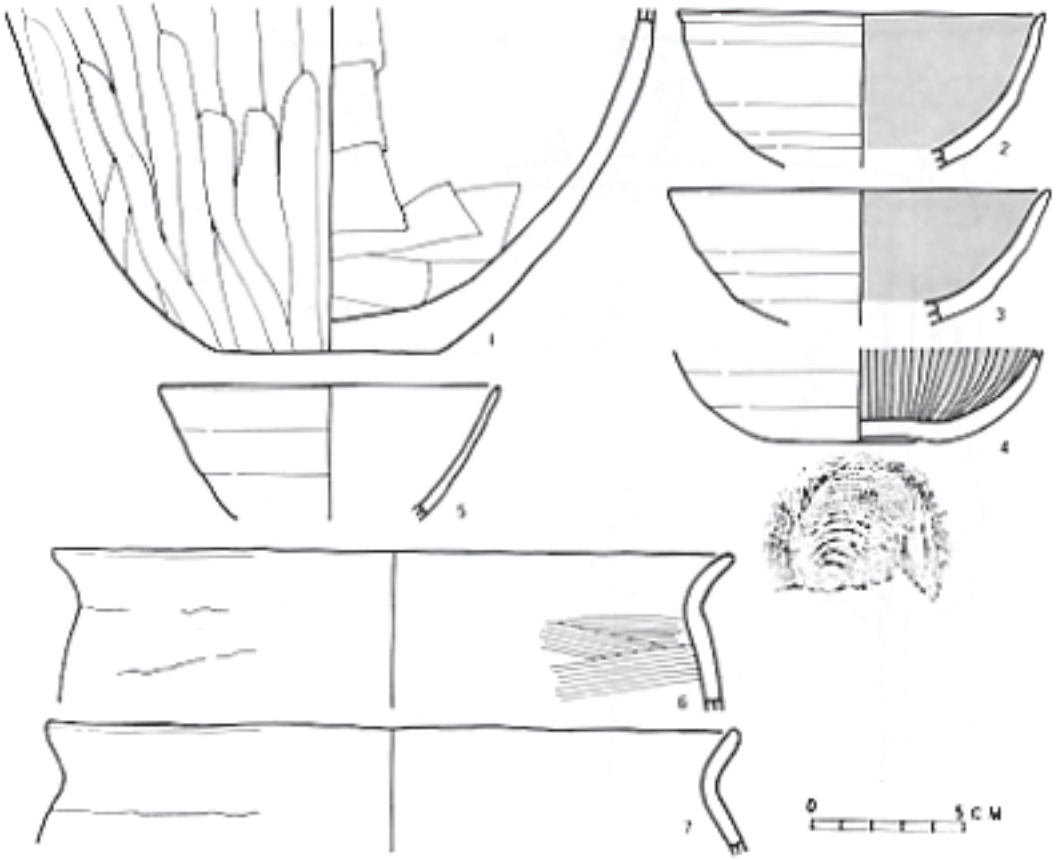


第 255 図　28 号住居跡カマド実測図

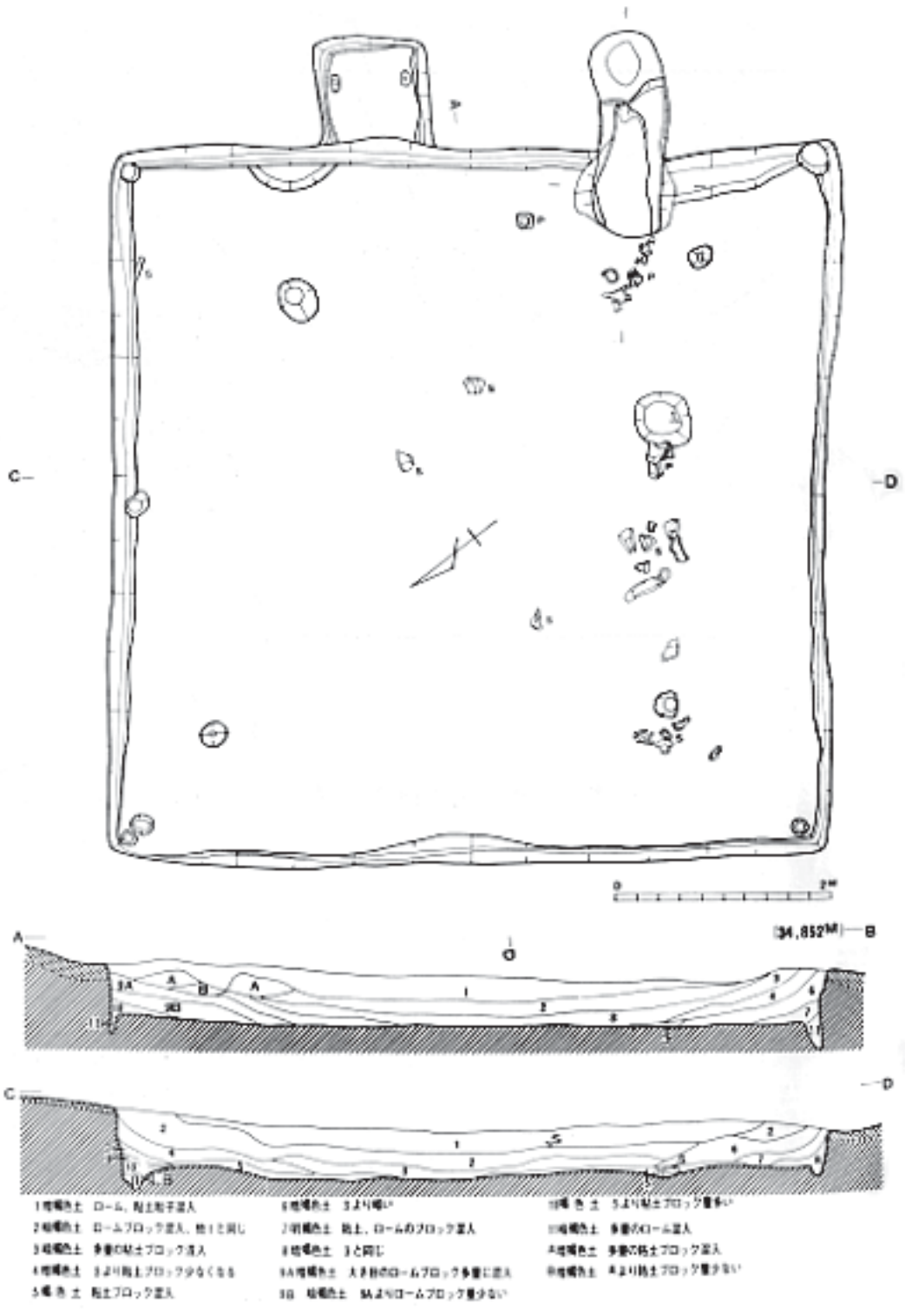


1.黒茶色粘土（天井部）
2.白茶色粘土（天井部）
3.暗褐色土（粗砂）カーボン混入
4.黄茶色粘土（天井部）
5.茶褐色粘土（細砂）
6.黒褐色土（埋土）
7.黒褐色土（粗砂）住居前のピット

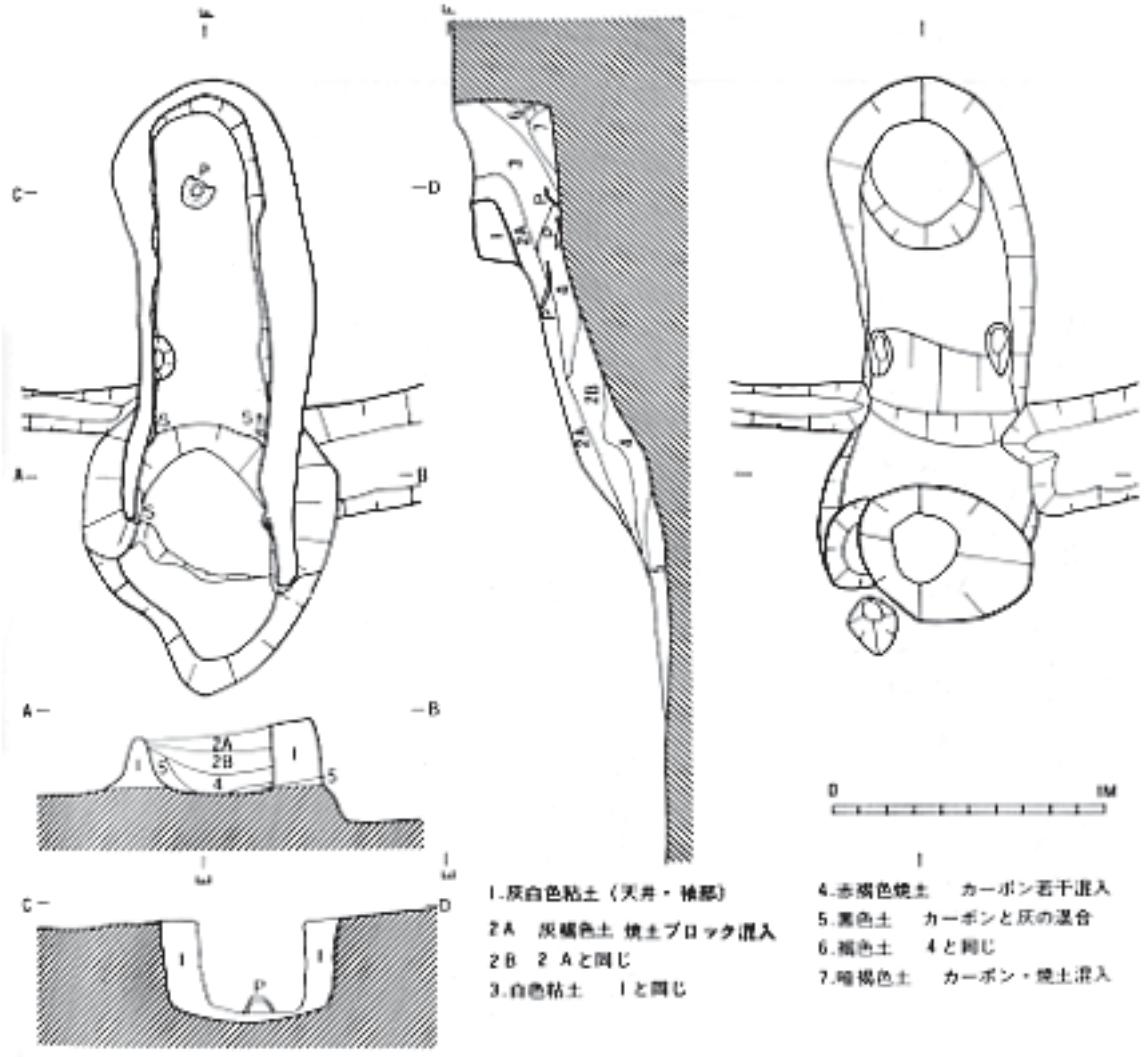
第256図　29号住居跡カマド実測図



第257図　第28,29号住居跡出土遺物



第 258 図　第 30 号住居跡実測図

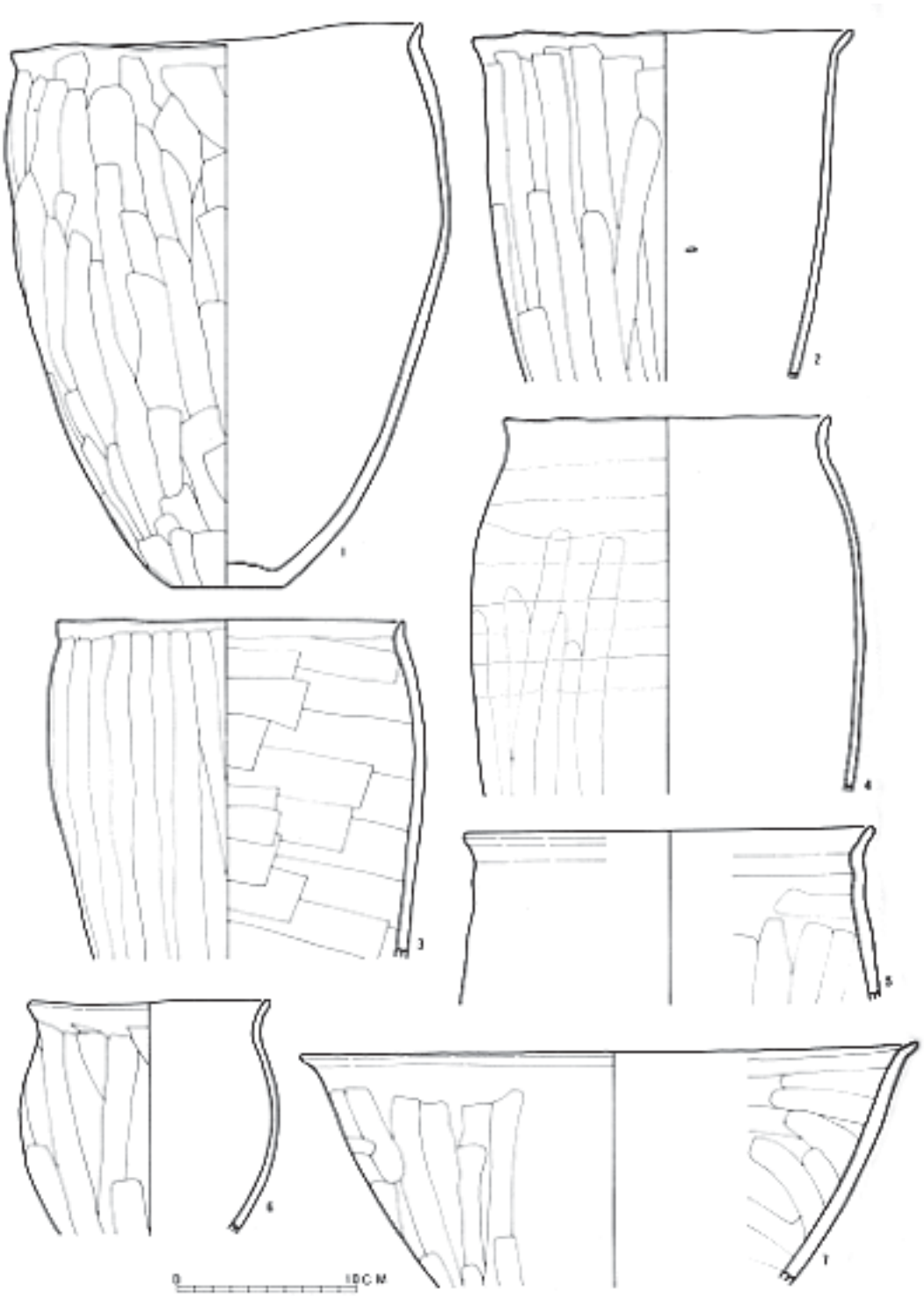


第 259 図　第 30 号住居跡カマド実測図

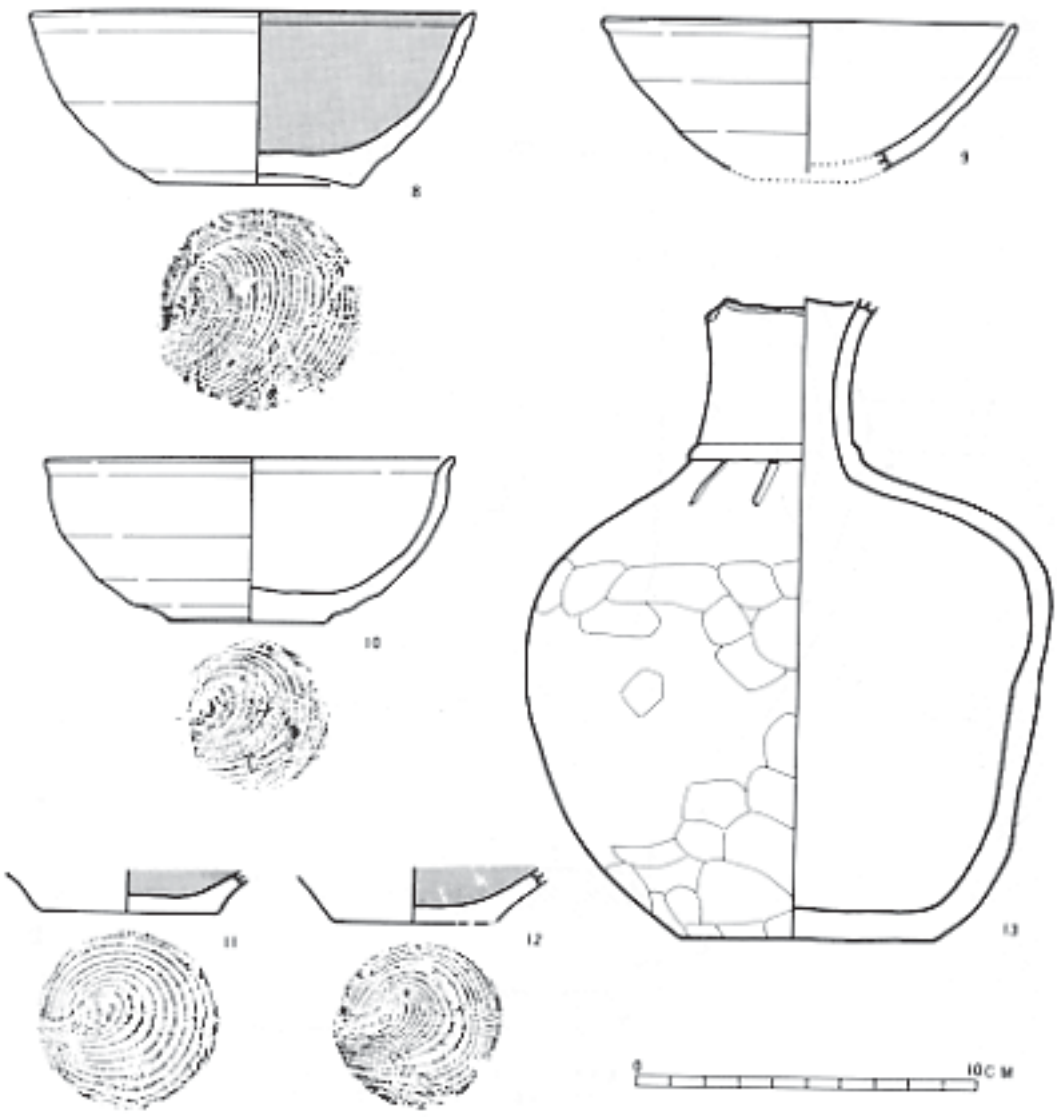
堅く締まっており、南西壁辺が若干湾曲している。床面は貼床の痕跡は認められず、ローム層をそのまま（竪穴掘り方）踏みかためており堅く締まっている。四コーナーに柱穴を配しており、細く深いものであるが、内部にこれらの他に5個ほどのピットがあるけれどもこれらは柱穴とは認め難いものである。中央床面から若干南西寄りに多量の石材があり、その中には片面焼化した石も混っている。周溝は幅10～15㎝、深さ15～20㎝のものを各壁沿いに巡らしており、また、北東にはその中に柱穴が1個検出された。

カマドは南東壁中央から南西寄りのところに設置しており燃焼部、袖部、煙道部ともに保存は良好であった。燃焼部天井はすで崩壊していたが、灰白色粘土を素材として構築した両袖部と煙道壁部、天井部及び煙出し孔も明瞭に確認できた。

南東壁中央から若干北東寄りに出入口と見られる1m × 1mの張り出しが床面より幾分高く



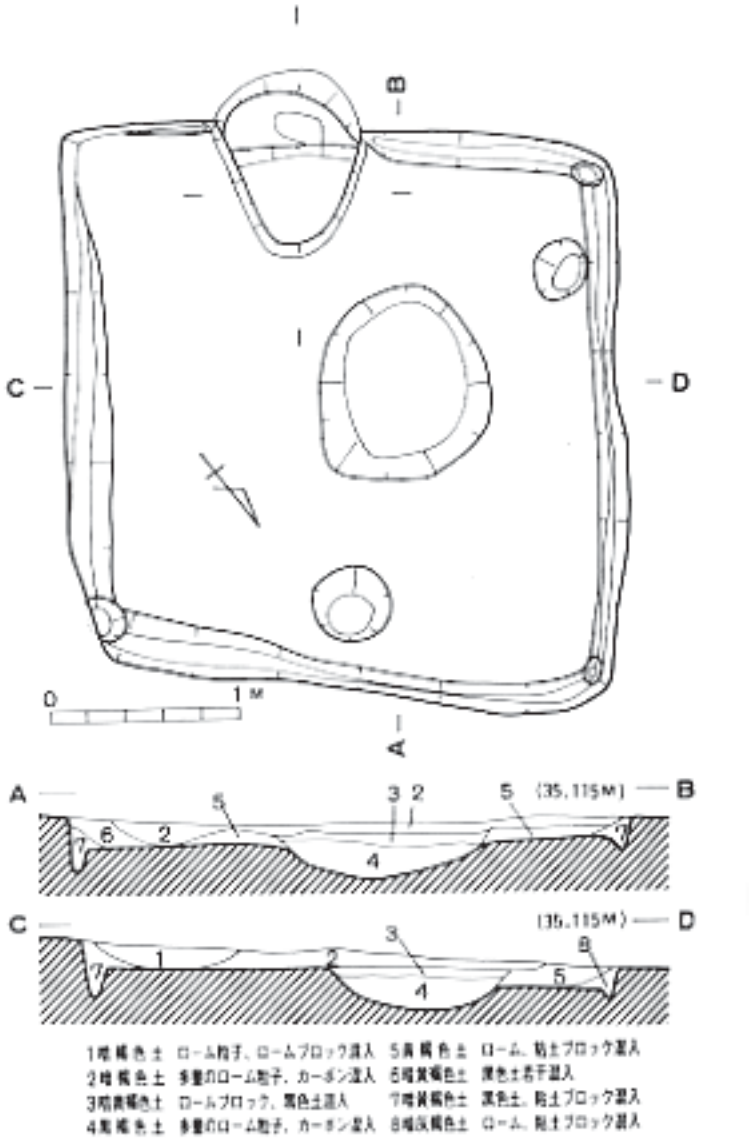
第 260 図　第 30 号住居跡出土遺物



第 261 図　第 30 号住居跡出土遺物

作られたものが確認された。この張り出し部分の床面には2個のピットも検出されたが、これは階段状の踏み板を貼るための台木の柱穴と考えられる。

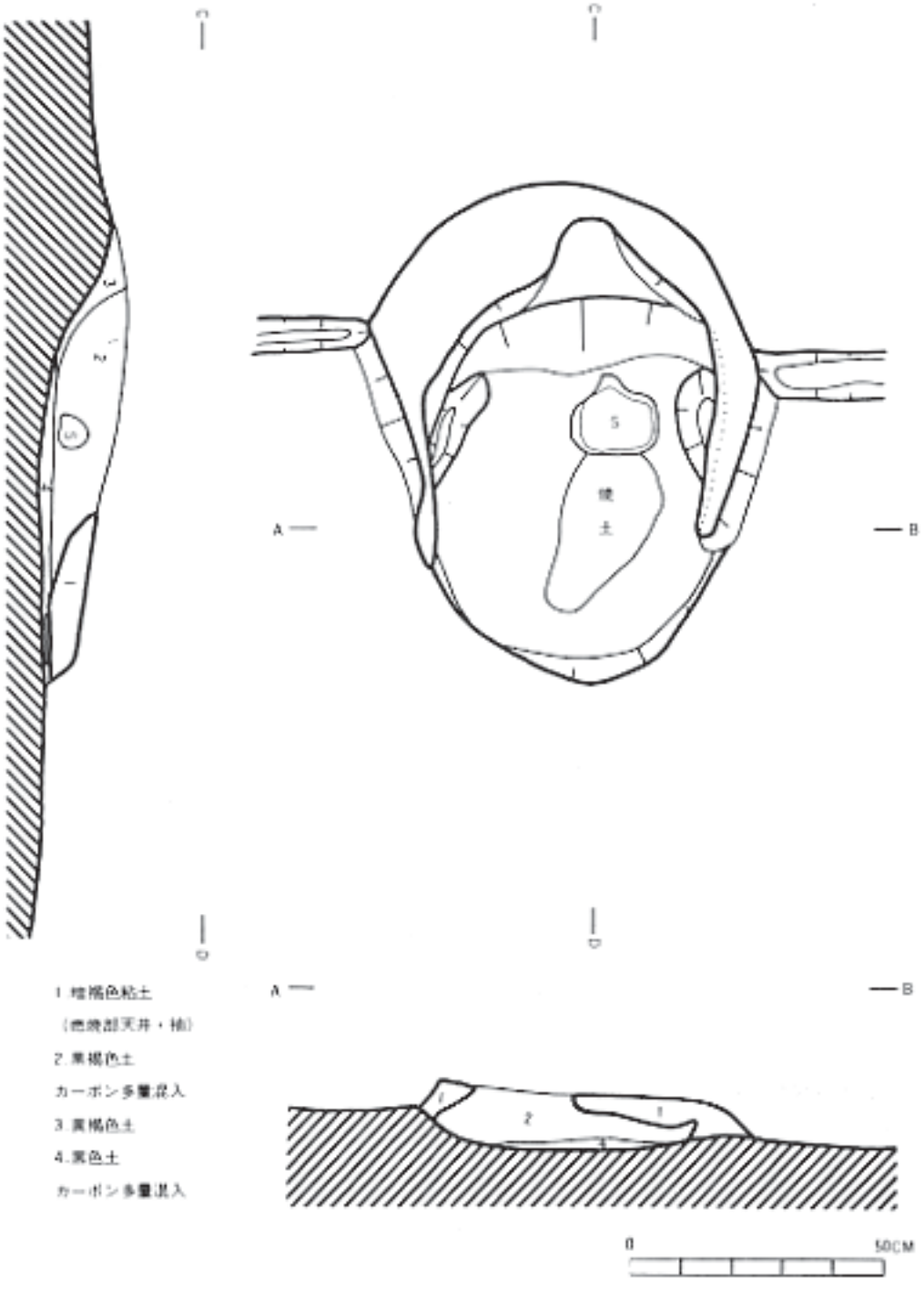
出土遺物は甕形土器 6 個体、大型鉢 1 個体、坏形土器 5 個体、須恵器壺 1 個体が出土した。土師器甕形土器はその殆どがヘラナデ調整によるもので、モミ圧痕を有するもの（第 260 図－2)、器面に明瞭な巻き上げ成形痕を有するもの（4)、横ナデ痕を有するもの（5）などがある。坏形土器は内面黒色処理のもの（第 261 図－8・11・12）と非常に焼成が良好で須恵系土器と呼ばれるものに類似する（10）ものなどがある。又、須恵器の短頸壺（13）の頸部にはヘラ書きによる「|||」記号も見られる。



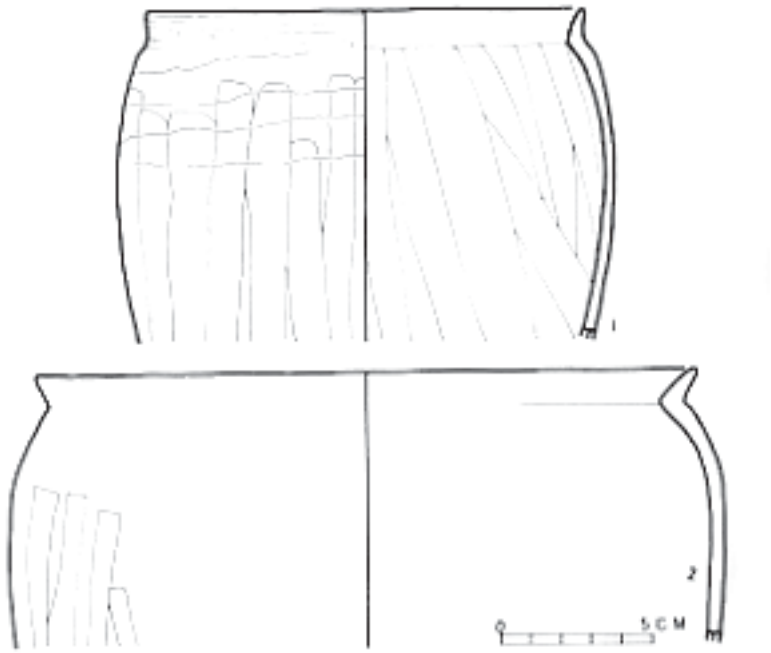
第 262 図　第 31 号住居跡実測図

第 31 号住居跡（第 262 ～ 264 図）

Ｊ－４区のローム層上面に確認したもので、昭和 50 年度試掘住居 28・29 号のすぐ北側 1m に位置する。主軸Ｓ－39°－Ｗ、南・北壁 2.8m ×東・西壁 2.8m で方形を呈するが若干隅が丸く、壁辺も直線的でなく若干ふくらみを有する。覆土は細別して8層に区分できたが全般的にローム粒子・ブロックの混入が多い。壁はやや傾斜しておりロームに構築しているため堅く、又、床面まで15cmと非常に浅いが貼床の痕跡は認められずほぼ平坦で壁ともに堅く締まっている。床面中央から若干西寄りに 90cm × 100cm、深さ 20cm の大ピットが検出されたが、これは覆土第５層堆積後に掘られたものである。柱穴は北・東・西コーナーに１個ずつあり、周溝は南側コーナーで一部切断するが幅 10cm、深さ 15cm のものが一巡されている。



第 263 図　第 31 号住居跡カマド実測図



第 264 図　第 31 号住居跡出土遺物

カマドは南西壁中央部より若干南東寄りに設置しており、崩壊が進んでおり袖部、燃焼部はかろうじて確認できるが煙道は不明である。

ヘラナデ調整による甕形土器（第264図－1・2）が出土しているがその他の遺物はなかった。

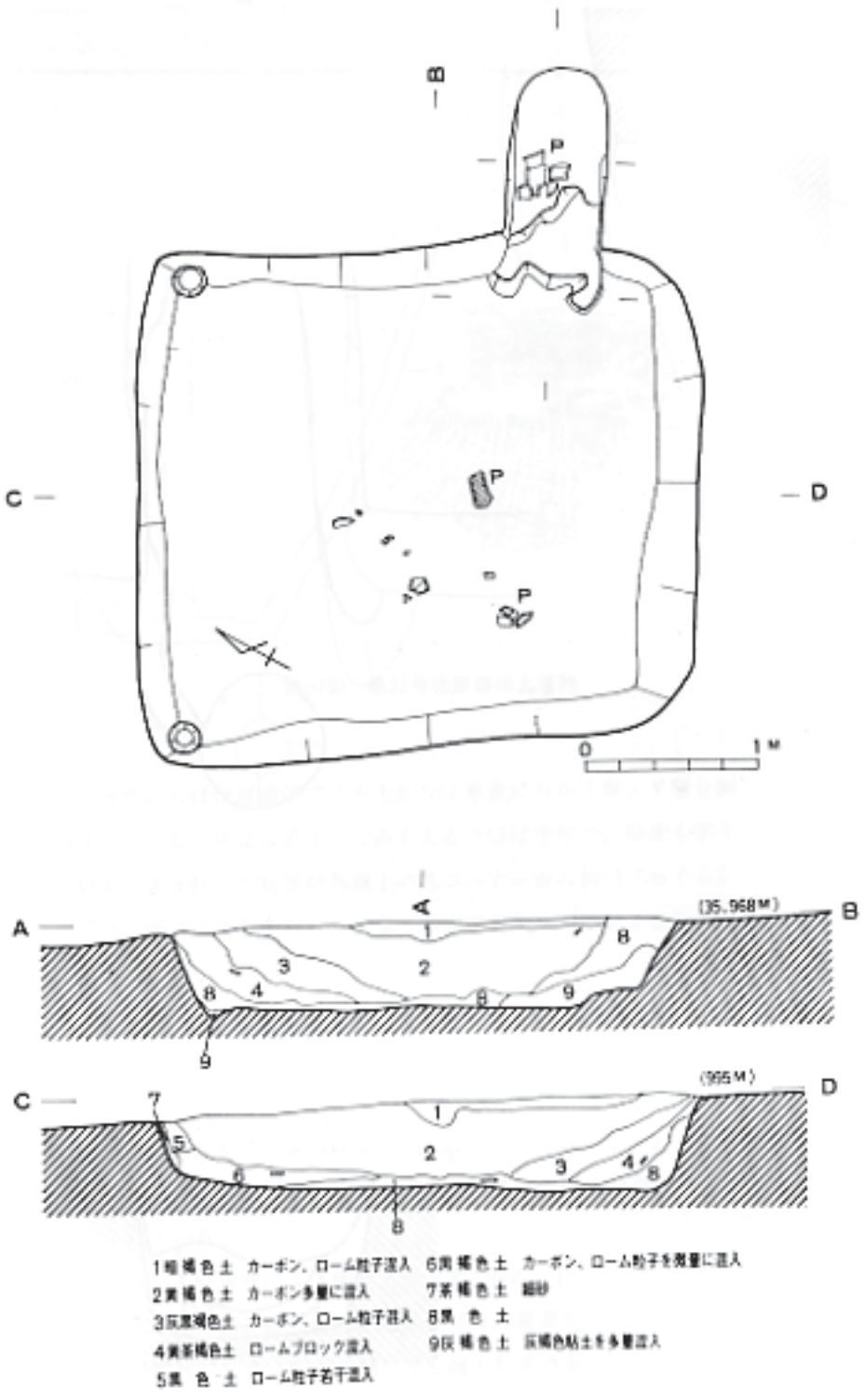
第 32 号住居跡（第 265 ～ 267 図）

調査区中央部のＪ－５区でローム層（Ⅴ層）上面で確認したもので若干小型の住居跡である。主軸はＮ－61°－Ｅで、南・北壁2.8m×東・西壁3.0mを測る隅丸方形である。覆土は自然堆積土を示し９層に細分でき、特に２～６層に多量のローム粒子、ブロックを混入する。又、８層の黒色土は南壁側に多く見られる。壁の立ち上がりはやや全般に緩やかな傾斜を有し、床面はほぼ平坦で堅く締まっている。周溝はなく、柱穴は北東・北西に１個ずつ検出した。

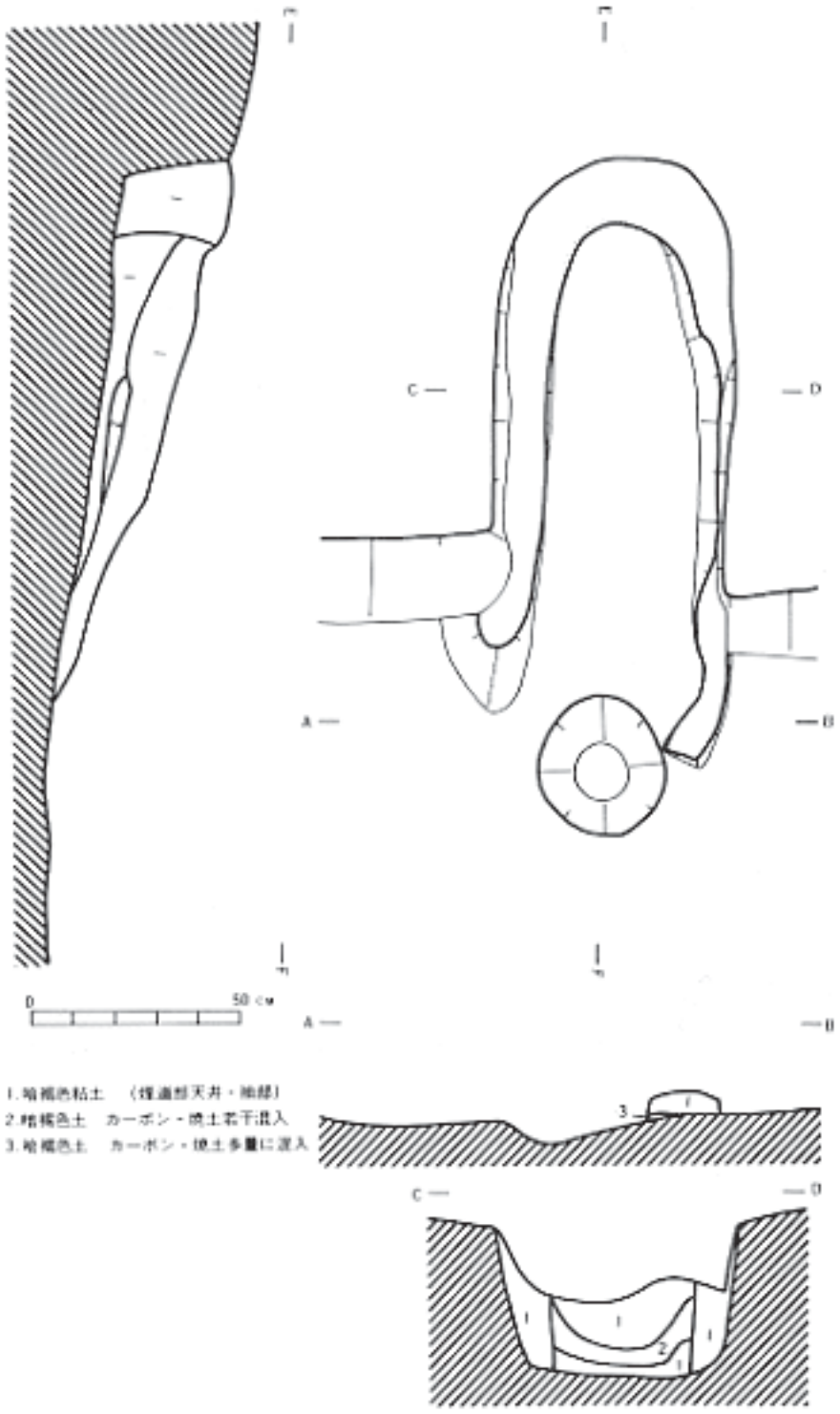
カマドは東壁中央から幾分南寄りに設置しており、煙道部は現存していたが、燃焼部はかなり崩壊していた。出土遺物は外器面ヘラケズリ調整のものと、ヘラナデ調整の甕形土器（第267図－１・2）２個体と、口頸部のみ掲載したが多量に出土した須恵器大型甕（3）が主なる遺物である。

第 33 号住居跡（第 268 ～ 270 図）

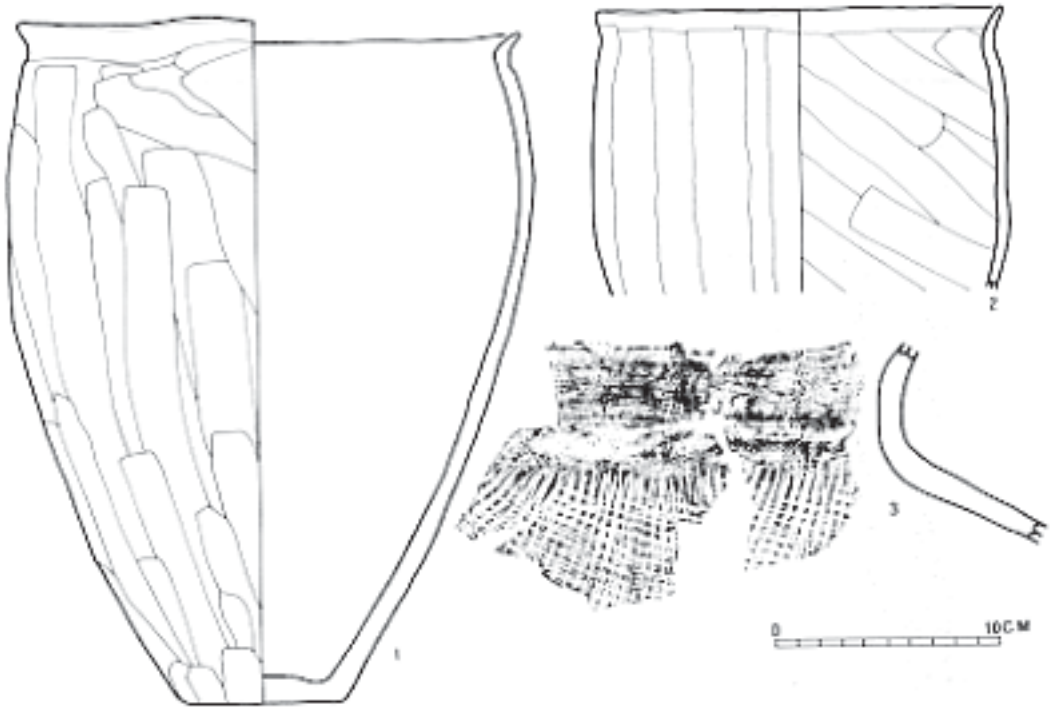
遺跡のほぼ中央部にあたるＪ－６・７区のⅣ層上面で確認したもので、本遺跡最大級の竪穴住居跡である。主軸Ｓ－30°－Ｅで方形プランを呈し、規模は南・北壁10.6m×東・西壁10.4mを測る。覆土は33層に区分したがいずれも自然堆積を示し、西寄りに多量のロームブロック、粒子の堆積を確認した。又、４層堆積後に南北に縦走した溝状遺構が床面、壁を切断して構築



第 265 図　第 32 号住居跡実測図



第 266 図　第 32 号住居跡カマド実測図

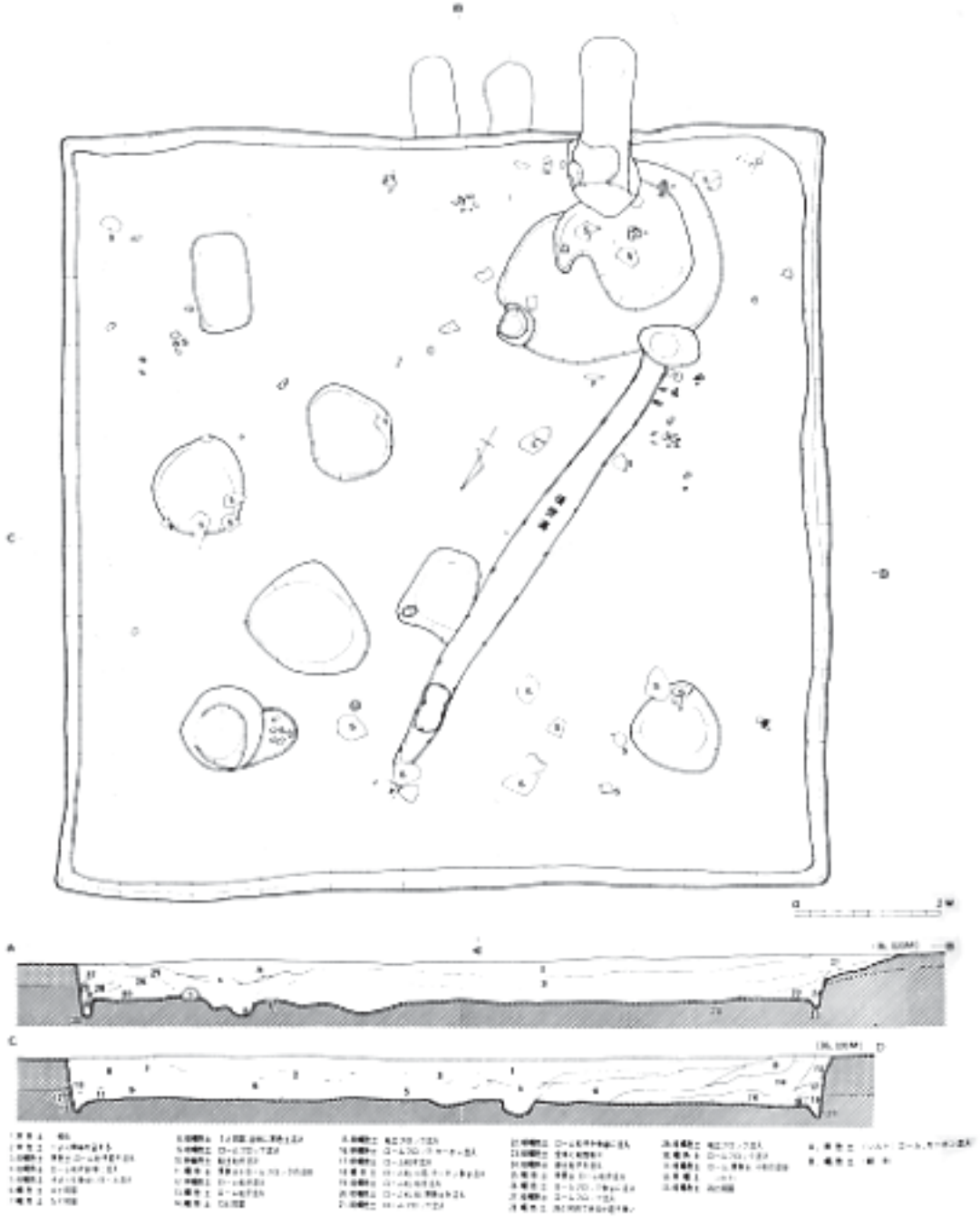


第 267 図　第 32 号住居跡出土遺物

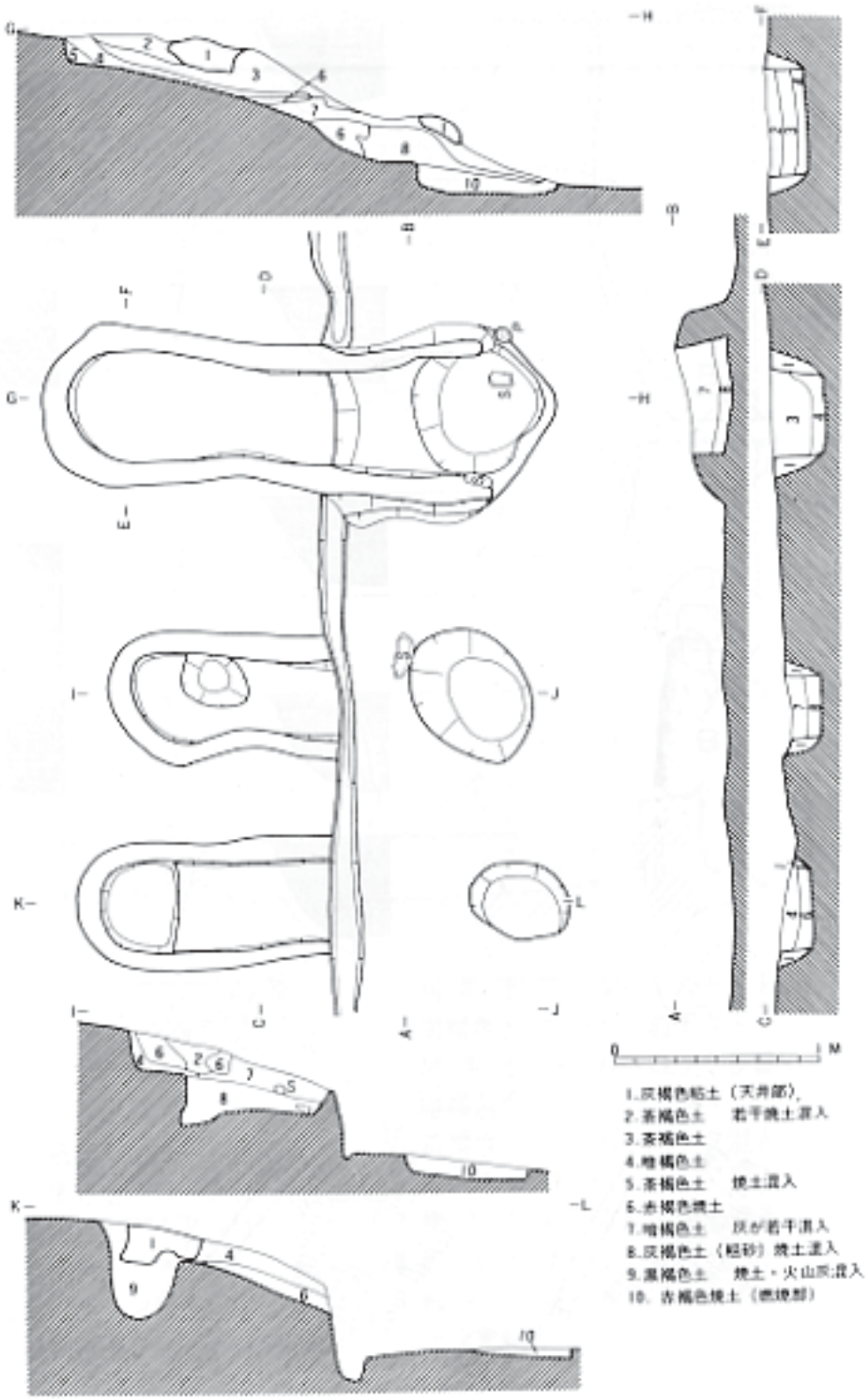
されている。各壁ともほぼ直線的で立ち上がりは垂直にちかくⅣ・Ⅴ層を面としているため非常に堅く締まっている。床面は若干くぼみもあるがほぼ平坦で、貼床も若干みられるがよく踏み締まっている。大支柱穴が住居対角線上の各コーナーから約1.5m ぐらいのところに配置されていたが柱痕の確認はできなかった。又、床面中央から東側に4個の大ピットが確認できたが柱穴とは見られない。幅 15 ～ 20cm、深さ 20cm の周溝が各壁沿いに一巡されている。

カマドは南壁中央部から西寄りに並列に1m程間隔を置いて3基確認できたが同時使用でなく改築したものである。すでに中央部にちかいカマドの燃焼部・袖部は消滅していたが煙道部は現存していた。一番西寄りに設置されたものは保存状態も良好で、3基のカマドの中で最も本住居跡の主体を占めたものと見られる。このカマドは袖部がローム層で煙道部及び天井部が灰白色粘土で作られており、煙出し孔も明瞭に確認できた。カマド前庭部は床面より2段にわたって低く作られている。

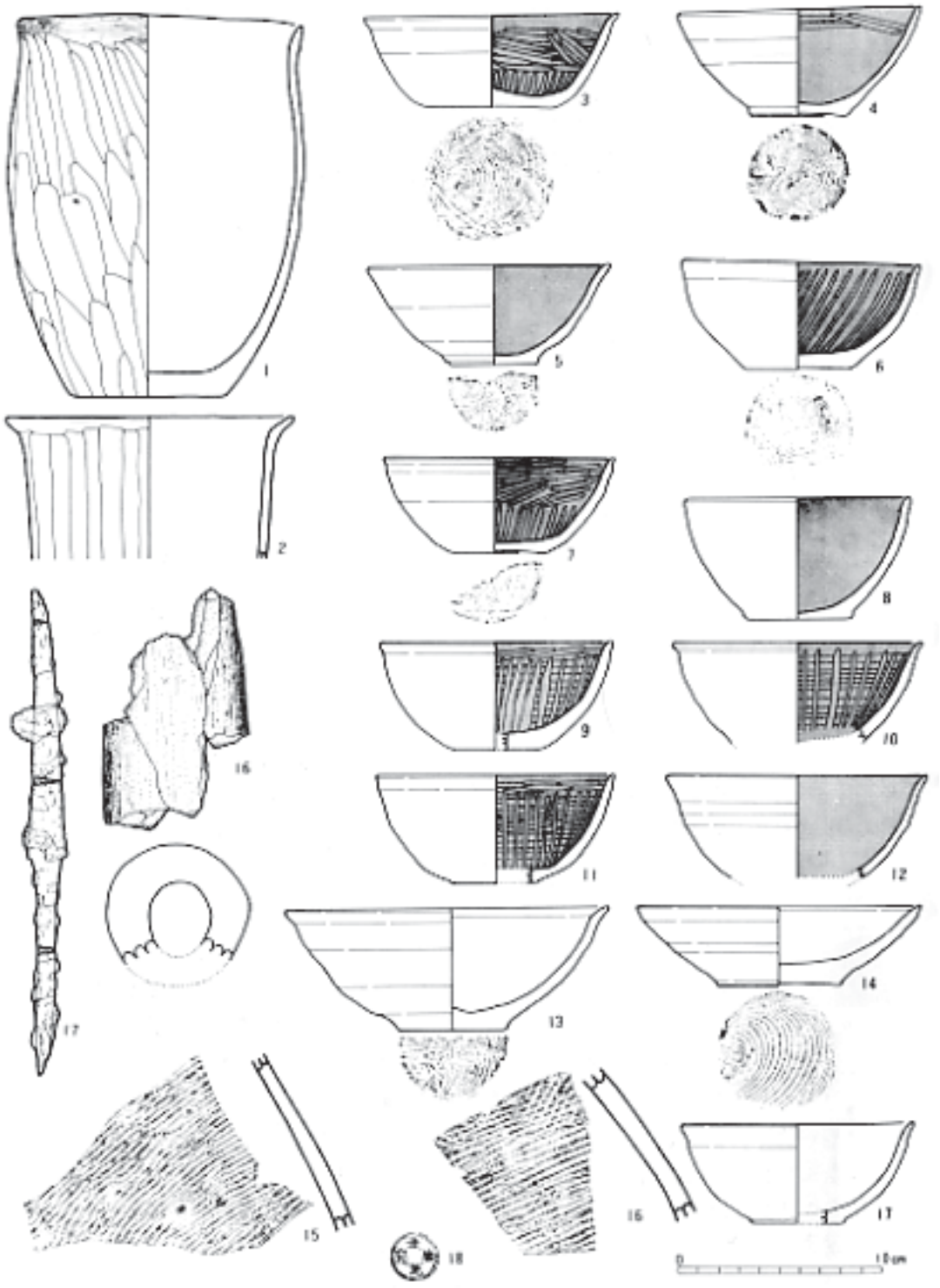
出土遺物はヘラケズリ調整による甕形土器（第270図－1・2）が2個と、坏形土器が13個（第270図－3～17）と多量に出土した。坏の殆どは内面黒色処理を施したものが圧倒的に多く、大型（13)、浅い皿状にちかいもの（14）等も出土している。又、須恵器大形甕破片、フイゴ、鉄製刀子なども出土した。なお重複関係にある溝状遺構内から景祐元宝（北宋・初鋳年 1034 年）が 1 枚出土した。



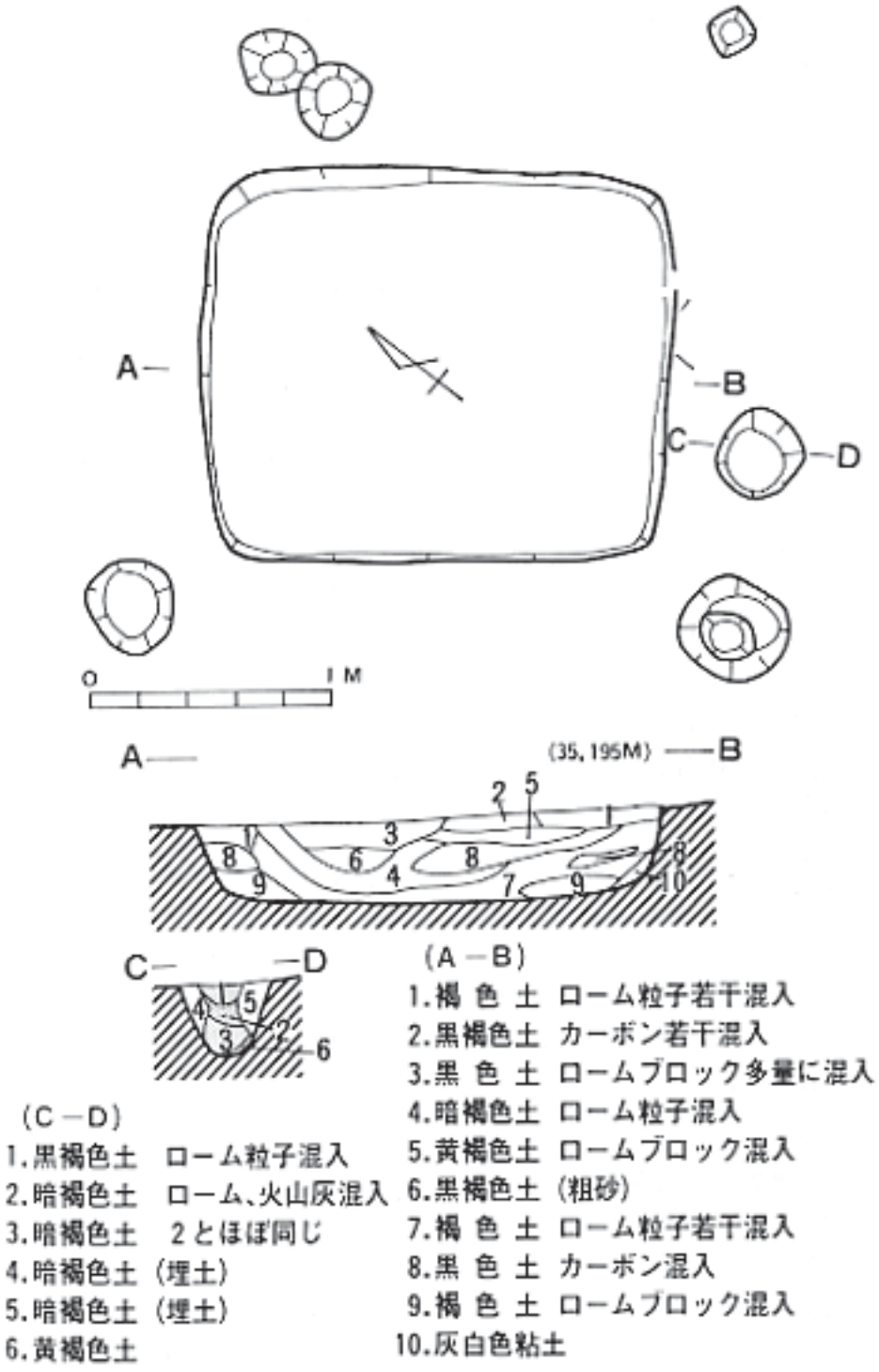
第 268 図　第 33 号住居跡実測図



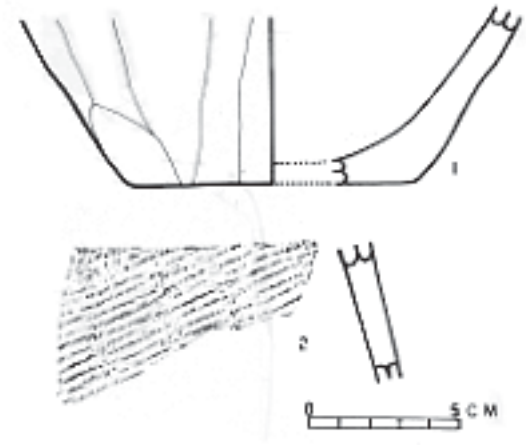
第 269 図　第 33 号住居跡カマド実測図



第 270 図　第 33 号住居跡出土遺物



第 271 図　第 34 号住居跡実測図



第272図　第34号住居跡出土遺物

第34号住居跡（第271～272図）

L－4区のV層上面で確認したもので、主軸S－36°－E、北東・南西壁1.95m×北西・南東壁1.65mで方形を呈するもので、カマドの設置は見られない。覆土は自然的層序を示し10層に区分した。壁は若干緩やかな傾斜を有し、床面はほぼ平坦で堅く締まりがある。

柱穴は内部になく住居対角線上の外部50cm程離れたところにあり柱痕・埋土も明瞭に確認した。外部へラナデ調整による甕形土器底部（第272図－1）と須恵器大形甕の残片（第272図－2）を出土した。　（第1号から34号まで藤田亮一）

第35号住居跡（第273～275図、図版73）

〈構造〉

本住居跡は、L－3・4区のIV層面において確認したもので、主軸はN－32°－E、規模は5.4×5.2mでプランは正方形を呈する。覆土は7層に明瞭に区分され、自然堆積である。柱穴及びピットはない。幅10cm～15cm、深さ10cm～14cmの壁溝が一巡し、壁は床面から垂直に立ち上がっている。

カマド（第274図）は南壁の中央西寄りに設置され、全体の保存状態はきわめて良好であって、天井部は褐色の粘土を使用し、なだらかにトンネル状に煙出し孔に立ち上がり、煙を屋外に排出したものと推測される。袖部の一方は石で固めており、火床部は掘り込みをみせていた。ここで特徴的なのは、図上北東側にある屋外に四本の柱穴を持つ小竪穴プランである。34号住居跡とも関連があるので一言しておく。1.4×1.2mと深さ約13cmと浅く、またカマドも設置されていない34号住居跡には遺物が存在したが、こちらには全くない。34号は若干大きいが、床面、壁の立ち上がりともに作りはほぼ同様であり、住居の対角線上約50cm位の位置に柱穴があり、また柱痕があるのも同様である。

物置小屋とも断定出来ない。35号住居跡との関連があるのかないのか、また34号との関連も

はっきりしない。何かの附帯施設とする資料は得られなかった。

〈遺物〉

土師器甕（第279図－1）は口縁外反し、体部を荒くヘラナデ調整している。坏2は底部は欠損しており、体部はロクロ成形後の再調整は認められない赤褐色の土器である。3は大形の須恵器甕の胴部破片である。

第36号住居跡（第276～278図、図版74）

〈構造〉

調査区Ｌ－2、Ｍ－1、2区にまたがり、Ⅳ層で確認した。主軸はＮ－55°－Ｅ、当初、増改築の住居跡とは気づかずに掘り下げたのだが、床面精査の段階で確認し得た。農道のため、全面調査出来なかったが、第一期の住居跡は4.0×3.9mであり、第二期住居跡は4.5×4.4の正方形プランで、北東壁を40cm、北西壁を40cm拡張して、南東壁及び南西壁はそのまま用いている。また、床面もそのまま用いているが、第一期の壁溝を焼土が若干混入した粘土で埋めてある。カマドもまた第一期の住居跡をそのまま用いている。調査し得た壁溝内の隅にあるピット（柱穴）も第二期は、対角線上に2個確認され、第一期の辺にも2個確認し得たのは、第一期の住居跡の構築方法を、第二期の増改築の際にも、その構築技法を踏襲したものと思われる。

〈遺物〉

甕（1）は口縁部がくの字状に外反し、体部外面を縦位のヘラナデ、内面を横位のヘラナデしている。（2）は外面のみのナデで、内面調整はなされていない粗製のものである。（3）の坏底部は赤褐色を呈し、回転糸切り後、中心が凹み、外側が高くなっている部分を板に押し付けた状を示している。ヘラでケズリやナデの調整をしているとはみえない。

第37号住居跡（第279～281図、図版74）

〈構造〉

Ｎ－2区のⅣ層面で確認され、主軸はＮ－50°－Ｅで、規模は3.2×3.1mの正方形を呈す。覆土は15層に細分でき・自然堆積を示しているが、いずれもローム粒子が混入している。壁の立ち上がりは垂直で、床は平坦に踏み堅められている。壁溝はカマド部と北西中央部が切れている。カマドは南東西寄りに設置しているが、土圧のため天井部が若干つぶれているほか保存状態が良好である。また、燃焼室上部に「掛け穴」も確認出来た。

煙道部は壁面を約20°の角度で立ち上がり、壁及び天井部を灰白色粘土で構築しているが、底面は地山を「U」字状に掘り込むトンネル式で煙出し孔まで続いている。また、火床部を若干掘り窪め、左側袖に芯材として川原石を使用している。煙出し孔の3層の黒褐色土中から第281図（1）土師器甕が、住居廃棄後、投げ込まれていた。

〈遺物〉

土師器甕（1）は底部欠損しており、いびつにゆがんで、焼成以前の割れ目の跡がそのままに焼き上がっており、焼成後では、無理にでも合わせることが出来ない。（2）の甕は口縁部外面

に巻き上げ痕を残している。(3) は内面を黒色処理を施しており、(4) は、底部欠損しているが、再調整のみられない坏である。(5) は須恵器甕胴部破片と思われる。

第 38 号住居跡（第 282 ～ 283 図、図版 74）

〈構造〉

調査区N・0－2・3区にまたがってIV層面で確認され、主軸はN－125°－Eで、規模は3.1×2.7mでほぼ正方形を呈す。覆土は9層に細分されるが火山灰・ロームブロック・粒子がまじっているが自然堆積層である。壁は四方ともゆるい傾斜をもって立ち上がり、床面と壁の立ち上がりの角度も鋭くない。貼り床の痕跡は見られないが、床面に凹凸があり、踏み締められてもいない。全体的に柔弱な感じがする。カマドは北東壁北寄りに設置され、壁面から60cmの処に煙出し孔を持つトンネル式の煙道を有す。地山を「U」字状に掘り込み、天井、壁、袖を粘土で固めている。

〈遺物〉

土師器甕（第 284 図－ 1）破片のみであるが、カマド燃焼室内からの出土である。

第 39 号住居跡（第 285 ～ 287 図、図版 75）

〈構造〉

調査区 0 － 3 区のIV層面に於いて確認され、主軸N － 49° － E で規模は 3.0 × 3.1m で正方形を呈す。覆土は5層に分けられるが、2層のロームブロックまじりの茶褐色土が厚い処で30cmも単層で入り込んでいるので、人為的に埋められたと思われる。火災の痕跡もないので、その原因は知るよしもない。壁溝は北壁に深く明瞭に掘られているが、南壁及び西壁で一部浅くなり切れている。柱穴は四隅にあり、西側の方形のピットがあり、土師器甕が浮いた状態で出土した。カマドは天井がつぶれており、「U」字状にローム層を掘り込んでおり、なだらかな傾斜をなして上昇している。川原石を燃焼室に置いてあるのは支脚として用いたものであろうか。

〈遺物〉

土師器甕 2、杯 1、須恵器甕 1 である。第 287 図－ 1 の甕は外面を縦位にヘラナデし、内面を斜め、横、縦とナデ付けている。3 は、内面を黒色処理しており、底部は回転糸切痕をそのまま残している。

第 40 号住居跡（第 288 ～ 290 図、図版 75）

〈構造〉

調査区N － 4 区VI層面で確認され、主軸N － 30° － E で規模は、6.0 × 5.3m で略方形を呈するが西壁及び東壁に歪がみられる。東壁面は2ヶのピット（時期不明）があったため、壁を削り過ぎ、壁溝が40cm以上も離れてしまっているが、増築跡でないことを謝して断っておく。その上、写真も図面も正直に表わしてしまったものだが、図上復原の暇がなかった。残りの三壁とも垂直に立ち上がり、掘り方をそのまま床面としているため堅く平坦である。壁溝は皮肉なことに東側に深く明瞭に掘られている。

カマド（第289図、図版75）は、「U」字状にローム層を掘り込んで扁平な川原石、土師器甕砂片等で枠組みを作り、その外側を黄褐色粘土で固めている。これほど多量に、又袖部より煙道部に多くの芯材を使用している例は、蛍沢遺跡ではないし、青森県内に於いてもないようである。更に、この一群の中に後述する鉄製の斧2個が混入している事実には、調査員一同驚愕したものだ。恐らく貴重品であったろうと想像される鉄製工具が芯材の一部として使用されているとは、今まで想像だに出来なかった。このカマドにどんな意味合いがあるのだろうか
今はその事実だけを報告しておくことにしょう。

〈遺物〉

住居跡床面からの出土遺物は甕形土器（第290図－1）1点、坏2点、土師器高台部1点で、他は全てカマド内（芯材）出土である。1は完形の土師器甕で口縁部がくの字状に外反し、頸部外面に巻き上げ痕を残し、縦方向にヘラナデ調整を上部で長く、下部に従い短かく施している。2は口唇部を指ナデし、内面を横位にヘラナデを施している。3、4も口唇指ナデ外面体部を縦位のヘラナデ調整をしている。5、6、7は深みのある坏でロクロ成形後の再調整は認められない赤褐色の土器で、須恵系土器と呼ばれている。8は高台坏で内面ヘラミガキした後黒色処理を施している。9は坏の高台部で指ナデによる調整をしていて、くっつけた部分が剥落している状態である。10は須恵器短頸壺、11・12は大須恵器大形甕胴部破片である。13・14は鉄斧で木柄を挿入する袋部を有し、恐らく手斧として使用したであろう。15は刀子で身が先端に向って細くなり、茎部に木柄着装がわずかながら認められた。刀子は農具ではなく、木製農具などを加工製作する工具としてとらえるのが妥当であろう。

第41号住居跡（第291～293図、図版76）

〈構造〉

調査区N－4区IV層面で確認し、主軸N－305°－E、規模2.7×2.3mの方形を呈する。竪穴の掘り込みが25cmと浅く、堆積土層も6層で自然層である。住居内に壁溝及びピットは存在しない。

カマドは南西壁南寄りに設置され、45号、46号、47号とこの附近一帯と50mも離れた20号と5住居跡が同方向にカマドを設置している。41、45、46、47号は北東が傾斜して傾くなっているための風方向の配慮からだろうか。造りはカマド方向に関係なく、ここ蛍沢に一般にみられる地山を「U」字状に掘り込み粘土で天井部及び、壁面をかため煙出し孔を屋外に出している。

〈遺物〉

土師器甕（第293図1、2）で、1は口縁部がく字状に外反し頸部に指ナデを施す。2は口縁部がゆるくわずかに外反して立ち上がり、巻き上げ痕が認められる。

第42・43号住居跡（第294～296図、図版76）

〈構造〉

調査区P－5区に認められ、発掘区を拡張して精査した。42号住居跡は43号住居跡に壊され、

南壁を確認出来ずその規模は明らかでないが、短軸1.7mを測り、深さは20cmである。43号住居跡は長軸2.1m短軸1.8mで、深さは18cmと42号より浅く、東北コーナ附近は暗褐色土による貼り床が一部認められたが、塹壕による攪乱もあり、42号の長軸面を確認するまでには至らなかった。また、42、43号ともにカマド・ピット及び壁溝もなかった。

〈遺物〉

42号住居跡からは、土師器甕（第295図、1)、ロクロ成形、回転糸切痕をそのままの赤褐色の坏（2）と、格子状平行叩き目文の須恵器胴下半部破片（3）が出土した。43号住居跡からは土師器甕（第296図－1）と須恵器胴部破片（2）が出土したに過ぎない。

第44号住居跡（第297～298図、図版76）

〈構造〉

調査区N－5区にIV層面に確認され、北東側壁が一部旧軍隊の演習施設の塹壕により壊されている。西側壁で60cm北側で50cm掘り込んで壁の立ち上がりは垂直である。覆土は14層に細分されたが、床上の暗褐色土の14層が20～25cmと厚く堆積しているのが気になる。カマド、壁溝、柱穴はいずれも存在しない。

〈遺物〉

土師器甕（第298図－1）と内黒の坏（2)、平行叩き目文の須恵器破片（3）のみである。

第45号住居跡（第299～301図、図版77）

〈構造〉

調査区N－6区IV層に於いて確認され、主軸N－300°－E東西の辺が3.3mを測る。これも旧軍隊の遺物の塹壕により南西側$^{1}/_{3}$が削平されてしまっている。覆土は自然堆積を呈し14層に細分される。壁はV層を掘り込んで構築しているが立ち上がりがややゆるく、北側壁で35cmの掘り込みである。壁溝も北東側で15～20cmと巾の広いものになっている。ピットは南東隅に一個存在するが柱穴とはみられない。また床面は平坦で堅く締まっている。

カマドは西壁北寄りに設置され、灰白色粘土を素材として袖部は石材を使用して補強している燃焼室内に土師器甕底部（第301図－2）を伏せて居いてあり、支脚として用いている。煙道部は地山を「U」字状に掘り込み天井部や壁を粘土でつくられ、約30度の傾斜を持って立ち上がっている。

〈遺物〉

土師器甕3点で、第301図は口縁の外反が鋭く、外・内面ともヘラナデ調整を行なっている。2、3も甕底部で仕上げはほとんど同じである。

第46号住居跡（第302～304図、図版77）

〈構造〉

調査区N－6区IV層面で確認され、主軸はN－293°－E、規模は3.0×3.3で方形を呈する。

覆土は1層～2層まで部分的な攪乱がみられたが、10層に区分され自然堆積をなす。壁はV層を掘り込んで構築されているのでほぼ垂直に立ち上がり、床も平坦で堅く締まっている。壁溝は太く浅く、溝内に柱穴が四ヶ所、2ヶは西壁の2コーナーへ、2ヶは南北壁に東壁から40㎝程の途中にあり、溝は東・西壁ともにない。

カマドは西壁南寄りに設置され、灰白色粘土で天井、袖部を固めている。煙道部は地山を「U」字状に掘り込んで30°の傾斜で立ち上がっている。

〈遺物〉

第304図の1は土師器甕、2は口頸部を指ナデ、体部へラナデ調整をしている。3・4は須恵器胴部破片で平行叩き目文を施してある。

第47号住居跡（第305～307図、図版77）

〈構造〉

調査区M－7区IV層上面で確認され、主軸N－315°－E、規模は3.0×3.0mで正方形を呈する。覆土は24層に細分され自然堆積を示すが、全層にロームブロックの混入が目立つ。壁は北西壁は直線的に立ち上がるが、南東壁ではややゆるい。床面は堅く踏み締められてはいるが、凹凸があり貼り床の痕跡は認められない。また、壁溝及び柱穴もなかった。

カマドは南壁東寄りに設置され、きわめて保存状態が良好である。地山は「U」字状に掘り込んで壁から1mの処に煙出し孔が確認され、天井・壁・袖部は粘土で固めている。

〈遺物〉

第307図の1は土師器甕、2はカマド袖わき床面上から出土のロクロ成形後の再調整の全くない赤褐色の坏で須恵系土器といわれているものである。3は底部を欠く坏、4は須恵器胴部破片で平行叩き目文を施している。

第48号住居跡（第308～310図、図版78）

〈構造〉

調査区M－6のIV層上面で確認され、主軸M－125°－E、規模は4.6×3.7mの方形で北壁コーナーに張り出し部が認められる。覆土は一部攪乱がみられるが12層に区分され、自然堆積層を示す。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁はややあまい。床面は第一期の床を第二期も共に使用し、第一期の凹地は、暗褐色土で貼ってある。壁溝はカマド及び北壁で一部途切れるが、巾15㎝、深さ15㎝でほぼ一巡する。なお北壁コーナーに於いて柱穴1個を確認した。

カマドは北東壁に二基検出した。右側のカマドは住居構築時期（第一期）に設置されたもので燃焼部は消滅し、火床部のみを残すだけで、その上に暗褐色土で貼り床してあった。左側のカマドはその後改築したもので、袖部に川原石を芯材として用い暗褐色粘土で天井部及び袖部、壁を固めている。又、煙道部は、どちらも地山をU字状に掘り込み、約30度の傾斜をもって立ち上っており、第一期、第二期とも同様の構造であったと思われる。

なお、第一期の煙出し孔上面に石をつめてあった。第二期の燃焼室内の石は支脚用として使用されたと思われ、赤褐色に焼けていた。

〈遺物〉

第310図－1は土師器甕で口縁部がくの字状に外反し、外面頸を指ナデ、体部を縦位にヘラナデ調整をしてある。2は甕底部であるが胎土を指で引っ張って台部とした痕跡がうかがえる。3は鉄製刀子で、断面V字状で鋭利さがあり先端にいくに従い細く薄くなっている。茎部には木柄着装痕がみられる。

第49号住居跡（第311～313図、図版78）

〈構造〉

調査区L－6区Ⅳ層上面で確認され、主軸N－34°－E、規模は4.1×3.6mで方形を呈す。丁度カマド上面に後世の溝跡が走っているが、煙道は深くトンネル状であったので影響はなかった。覆土は23層に細分され、自然堆積を示している。壁はⅣ、Ⅴ層を掘り込んで構築しているためⅣ層面では柔かくⅤ層面で非常に堅く、立ち上がりはややゆるい。床面は平坦で西側隅及び中央部に窪地があり黒褐色土で貼ってある。中からの出土物はない。壁溝及び柱穴はなく、床面中央カマド寄りに川原石が散らばり、カマド内及び左袖附近の土器片の散乱が目立った。

カマドは南壁やや西寄りに設置されており煙道部の保存状態は非常によいので断面をカットしてみた。（第312図、図版78）袖部に石材を用い、燃焼室壁面には、石、土器片を芯として粘土で固め、同じ粘土で天井も構築している。地山（ローム層）をくり抜いてトンネル状の煙道で20度の傾斜をつけて昇り、垂直に立ち上がる煙出し孔を有している。壁面から煙出し孔まで1m20cmもあり、長いトンネル状の煙道で、まさに煙突である。

〈遺物〉

第313図の1は、土師器甕で外面を縦位に、内面を横位にヘラナデをしている。2は、外面ロクロ成形痕で底部糸切痕を呈し、内面下半部ヘラミガキをして黒色処理を施している坏である。3、4共に内面黒色処理をしている。4は口縁部に段を有する。5は、甕底部にすだれ状圧痕を呈す。6は、鉢で底部が小さく大きく外反し、外部はロクロ成形後下半部をヘラナデ調整をしている。内部は縦横のヘラナデがみられる。7もほぼ同じ。8は、須恵器短頭壺で、口縁部に段を有し、頭部に「　」のカマ印がヘラで記されている。9は、須恵器片。

第50号住居跡（第314図、図版79）

〈構造〉

調査区K－10区Ⅴ層面で確認された。主軸はN－133°－Eで規模は2.2×2.1で正方形を呈する。前述の34号よりはやや大きいが、壁溝やカマドがなく柱穴が住居対角線上にあるのは同じである。柱痕、埋土も確認出来、これで35号住居跡のそばのものとで3住居跡が同様の構造を持つものであり、カマドの設置されない壁穴住居跡にも2形態あることがわかった。出遺物

はない。

第 51 号住居跡（第 315 ～ 317 図、図版 79）

〈構造〉

調査区Ｌ－11 区Ⅳ層上面で確認され、主軸はＮ－31°－Ｅ、規模は 6.6 × 6.4m の正方形を呈す。これも旧軍隊の塹壕により東西に床面 10cm 程の溝にえぐられている。覆土は 7 層に区分出来るが、床面直上にＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅの間層がブロック状に入り込んでいた。壁はＶ層を約 70cm 程掘り込んでいるので垂直な立ち上がりを示し、床面は堅く踏み締められており、ほぼ平坦である。壁溝は、巾 8 ～ 10cm、深さ 8 ～ 10cm で四壁を一巡している。壁溝内各コーナーに柱穴があり、深さは 15 ～ 20cm である。

カマドは南壁に 2 基検出され、左側が住居構築時のものであり、燃焼部は削平され、火床面だけが確認された。右側のカマドはその後改築され、住居跡棄時まで使用されたものである。袖部に石材を芯として暗褐色の粘土で天井及び壁部を固めている。又、煙道部はどちらも地山を掘り込みゆるい傾斜をもって立ち上がり煙出し孔へと向う。第二期（新しい方）のカマド煙出し孔にも川原石をつめていた。燃焼室内に貫通孔を有する土製支脚が設置されていた。

〈遺物〉

第 317 図の 1 は土師器甕で〔字形の口縁をし、頭部に段を持つ。2、3 は外部ロクロ成形し、底部欠損しているが再調整はない。共に内面ヘラミガキ後黒色処理を施している坏である。4 は、底部糸切り痕で、5、6、7 は須恵器で平行叩き目文がついている。8 は、先端部の扁平な鉄製の鏃であり木柄をソケット状に差し込むものであろう。9 は、土製支脚である。

第 52 号住居跡（第 318 ～ 320 図、図版 79）

〈構造〉

調査区Ｋ－11 区Ⅳ層上面で確認され、主軸Ｎ－308°－Ｅ、規模は、2.6 × 2.6m の隅丸方形を呈する。覆土は上面に於いて攪乱があったが、全部で 7 層で自然堆積を示す。壁は、Ｖ層のロームを 80cm も掘り下げているので、やや甘い立ち上がりになっているが、床面共に堅い。壁溝柱穴はなく、南側カマド左にピットがあり、内部から土師器片が出土した。また中央部にピットがあるが、その上を黒色土で貼ってあり遺物はなかった。

カマドは南東壁南寄りに設置されており、燃焼部からローム層をトンネル状に水平にくり抜いており、煙出し孔へ垂直に立ち上がりＬ字状を呈する。第 320 図の 1 は、外面ロクロ成形し、底部は糸切痕をそのまま残し、内面縦位のヘラミガキをし黒色処理を施している。

第 53 号住居跡（第 321 ～ 323 図、図版 80）

〈構造〉

調査区Ｊ－13 区、Ｋ－13 区、Ⅳ層面に於いて確認され、主軸Ｎ－342°－Ｅ、規模は 7.8 × 7.4m であるが、南壁 1.1m、西壁 2.6m の張り出し部があり、住居構築時からの計画らしく、後の

拡張の痕跡はない。旧軍隊の塹壕が、東西に走っているため東西壁と中央より東にかけて約1m巾の溝で床面が破壊されているが、覆土は6層に区分でき、自然堆積を示す。壁溝は、カマド附近及び北西壁で一部切れているが、ほぼ一巡する。柱穴は溝内4コーナーに同し大きさのピットが確認された。床面はV層そのまま用いてあるので堅く踏み締まっている。

カマドは、南壁中央部上設置され、地山をU字状に掘り込んで煙道部を構成している。袖、天井、壁は粘土で固めている。また煙焼室天井部は川原石、土器片を芯材としている。煙道がなだらかに上って煙出し孔にそのまま繋って特別の立ち上がりはない。

〈遺物〉

第323図の1は、土師器長胴型の甕で口縁部有段をなし、ロクロ成形後、体部下半をヘラナデ調整を施している。2は、外面口縁部を指ナデし、内面を横ナデしている。3は、無文の須恵器甕で灰色を呈す。4は、ロクロ成形、底部糸切痕そのままの赤褐色の坏である。5、6は、底部欠損しているが4と同様の坏である。7は、須恵器細口壺で灰色を呈し、8は須恵器壺の胴部で、下半部は格子状平行叩き目文で、立ち上がり部は、木目状平行叩き目文を呈す。9は須恵器で平行叩き目文痕を示す、10は、石製模造品、滑石製の勾玉でよく研磨されている。

第54号住居跡（第324～325図）

〈構造〉

調査区K－14IV層面で確認されたものであり、主軸は、N－184°－Eで、調査区からはずれているので1/3より精査出来なかった。確認した北壁は2.7m、東壁は3.4mで、壁の立ち上がりは垂直に近く、床面も平坦でV層をそのまま用いているので堅い。5層の自然堆積を示す。丁度、この調査区のあたりは、カマドが南壁にあるのが普通なので、未調査の部分にあると思われる。溝、ピット等は確認されなかった。

〈遺物〉

第325図1は、頸に巻き上げ痕を有する土師器甕で、2は、内外面ともヘラナデ調整している。3は、内面をヘラミガキをし黒色処理を施している。底部は糸切り痕を呈する土師器坏である。

第55住居跡（第326～328図、図版80、81）

〈構造〉

調査区K－14、15区IV層面で確認され、主軸N－15°－Eで、規模は、4.8×4.9mで正方形を呈し、炭化材、炭化米を多量に出土した焼失家屋である。覆土は13層に区分され、自然堆積を示す。壁は、傾斜地であるため、西高東底であるが、立ち上がりは垂直で床面も平坦で、V層をそのまま用いており、よく踏み締められており堅い。壁溝は細く深く、ほぼ一巡する。また、西壁面のセクション図（第326図、図版81）みる如く壁に沿って垂直に立っている炭化板材が検出された。腰板は溝の掘り方底部まで届いている部分もあった。柱穴は南西コーナーと北東コ

ーナー、と北壁中央部にいずれも壁溝内か或いは接して存在する。北西コーナーの柱穴は縦長の15×5㎝で深さは他と同じであるが、角材の柱、または板ではないかと考えられるものである。

カマドは、南壁西寄りに設置されており、煙道部は短く、煙出し孔とみられる部分に燃土がつまり、袖、天井、壁は粘土で固められている。燃焼室内に坏を伏せて支脚としていた。

なお、炭化材の同定資料及びカーボン測定の資料をそれぞれの研究所に依頼し、その結果は別稿として記載してあるので参照されたい。

〈遺物〉

図版81の出土炭化米は中央寄りの炭化板材の一群の下より出土したもので、約50㎝四方にまとまった状態で出土した。カーボン測定は学習院大学に依頼し、炭化米の測定結果を佐藤敏也氏に特別ご寄稿預き別稿に記載した。第328図1は底部欠損しているが、ロクロ成形後の再調整のない赤褐色の土器で、火襷痕が明瞭に観察される。2は内面縦位にヘラミガキをし黒色処理をなしている。底部外面回転糸切り後の調整がみられる。3は回転糸切り痕をそのまま残している坏。4～11は鉄製の鏃で、先端部が偏平で身が長い。また、茎部は丸く細い、木柄に刺し込む式のものであり、4～10までは木柄がついたままで、炭化板材の間にはさまれた状態で一括して出土した。恐らく立てかけるか、吊すか、何かに入れてかの保存方法をとられていたのだろう。

第56号住居跡（第329～331図、図版82）

〈構造〉

調査区L－13区のⅣ層土面で確認され、主軸N－112°－E、規模3.3×2.9mの方形を示す。第57号住居跡と切り合っており、56号の廃棄後57号住居跡を構築している。覆土は、6の暗褐色土と7の黒褐色土が一時的に厚く堆積していた。壁は傾斜地であるため、北高南低であるが、立ち上がりが、北側で70㎝も掘り込んでほぼ垂直に立ち上っている。壁溝は一巡し、溝内或いは接して三列縦横に真中に1ヶと計9個確認された。そのうち真中を途いて8ヶは柱穴と思われ小ピットばかりであるが数の多いのが注目される。また床上に柱状節理のある原石が数個存在したことも注意される。またカマドと反対側の西壁寄り60×70㎝、深さ10㎝の略円形のピットがあったが、遺物の出土はない。

カマドは東壁北寄りに設置されており、地山をU字状に掘り込んで煙道部を構築し、なだらかに上昇し煙出し孔へと繋がっており煙出し孔底部は15㎝程の掘り込みをみせている。袖、天井、壁は灰白色粘土で固めていた。

〈遺物〉

第331図1は巻き上げ痕を有する土師器甕であり、2は須恵器坏である。

第57号住居跡（第332～335図、図版82）

〈構造〉

調査区－13区にⅣ層面で確認され、主軸Ｎ－88°－Ｅ、規模2.5×2.0ｍの方形を呈する。56号住居跡の床面を10～15㎝程掘り下げて床面を構成する。堆積土は、ローム、ブロック、粒子、煙土、灰等を含む厚い層が入り込み、一気に埋め込まれた状態を呈す。壁はⅤ層のローム層なので堅いが、80㎝もあるので、下部はややあまいが、上部はほぼ垂直に立ち上っている。壁溝は南壁及び西壁にみられるが、途切れてしまっている。南壁西寄りに縄文時代のピットがあるが、柱穴と思われるものは存在しなかった。床面は堅く踏み締められてはいるが、細かな凹凸がある。

カマドは東壁南寄りに設置され、灰原は凹レンズ状の広がりをみせ、燃焼室内に須恵器細口壺（第335図－7）が押しつぶされた状態で入っていた。煙道は水平にローム層を掘り進み、立ち上がりに段を有して煙出し孔へと繋がっており、袖、天井、壁部は粘土で固めており、石や土器片を芯材としている部分もある。

〈遺物〉

第335図1は、土師器甕で外部に巻き上げ痕を残し、内面はヘラナデしている。2は外面体部をヘラナデしている。3は底部の小さな土師器甕である。4は、ロクロ成形後の再調整の全くない赤褐色の土器で体部下半に「上」の墨書が鮮やかに描かれている。5は土師器坏、6は、糸切痕の坏、7は須恵器細口壺でロクロ成形後体部下半をていねいにヘラナデして調整している。頸部には、「人」印がヘラで記されている。8は、砥石で四面を平坦に使用している。

第58号住居跡（第336～338図、図版83）

〈構造〉

調査区Ｌ、Ｍ－13区のⅣ層上面で確認され、主軸Ｎ－36°－Ｅで規模は5.5×5.2ｍのほぼ正方形を呈す。56、57、58号住居跡共に暗褐色土（ロームブロック、粒子、多量に混入）の2層が厚く床面に達するまで入り込み、急激に埋まったと思われる。壁は垂直に直線的に立ち上がっており、壁溝はカマド附近以外一巡する。床面は堅く踏み締められて平坦である。中央東側にピットが4ヶまとまって存在するが、出土物もなく、柱穴（或いは補強柱）かどうかは判然としない。床面全体に20㎝～30㎝の川原石が散乱しているのが気になる。

カマドは南東壁中央部に設置されており、袖部が歪んでいる。焚き口が凹レンズ状の窪みをみせ、煙道はなだらかな傾斜をみせて上昇し煙出しに向っている。壁、天井に石、土器片を入れ粘土で固めている部分もある。

〈遺物〉

第338図、1は土師器甕で、口縁部く字状に反外し、頸部を指ナデしている。2は坏、3は糸切痕そのままの赤褐色の坏。4は内黒の坏で底部糸切りである。5、6は須恵器片で格子状平行叩き目文と平行叩き目文がみられる。

第59号住居跡（第339～341図、図版83）

〈構造〉

調査区Ｍ－14、15区Ⅲ層に於いて確認され、主軸Ｎ－14°－Ｅで規模は6.6×6.3ｍのほぼ方形を呈する。なおこの住居跡は縄文時代後期の10ｍ以上の大型の住居跡の覆土中に構成されているため、暗褐色土（ローム粒子、カーボン等混入）が床面になっている、壁の立ち上がりは、ゆるく傾斜しており壁溝及びピットは確認できなかった。ただ、南西壁南隅に張り出し部があり、南北1.48ｍ．東西1.42ｍの２段構成の階段状出入口が確認された。西高東低の傾斜地で、高い面からの出入口である。第15号住居跡の出入口には、張り出し部に2ヶのピットがあり、柱穴痕と思われるが、当該施設には、周囲にピットのないところから特別の屋体を被う施設がなかったものとみられる。カマドは南壁西寄りに設置され、袖部、燃焼室は破壊され、川原石が散乱していた。壁部には芯材として石を使用している。また煙出し孔には石をつめており、住居廃棄時に故意にカマド破壊を企てたとも推測される。

〈遺物〉

第341図１は、巻き上げ痕のある体部をヘラナデ調整し、口縁部は鋭く直線的にくびれる。2は、回転糸切り後、底部外側をヘラナデ調整している坏である。

第60号住居跡（第342～344図、図版83）

〈構造〉

調査区Ｎ－14、15区Ⅳ層面で確認し、主軸Ｎ－20°－Ｅ、規模は4.5×5.0ｍの方形を呈するが、北東方向にやや歪む。覆土は13層に区分され、自然堆積を示す。壁は西側で傾斜しながら立ち上っており、東側では床面の堅さを追求して確認したものなので、やや歪になっているのであろう。壁溝は南面と西側は全部、北壁側には、1.8ｍより確認し得なかった。床は中央西半面はローム層をそのまま床面としているため堅いが、東半面の黒色土は若干の踏み締めを頼りに掘り進んだものだが、ピットは大形でカマド側に50×60㎝と西側に90×100㎝のピット、さらに中央部に浅い50×60㎝の３個が、確認された。カマド側のピット内からは土師器甕の出土があり、貯蔵穴とみられるが、他は不明である。なお、カマド左側床面に炭化したカヤも検出された。

カマドは、南壁中央西寄りに設置され、地山をＵ字状に掘り込み、煙道は30°位の傾斜を示してごく短い。袖部及び天井、壁部には、川原石や土器片を芯材として粘土で固めている。なお、南壁東側の焼土は後世のもので、本遺構とは結び付かない。

〈遺物〉

第344図－１は複合有段口縁の甕、2は口頸部が直線的に立ち上がり、胴部にふくらみを持ち、体部外面を縦位のヘラナデ調整している。3は甕底部で木葉状圧痕文を呈す。4はロクロ成形後の再調整のない赤褐色の坏で、底部は糸切り痕をそのまま残している。5は鉄製の曲刃の鎌である。この曲刃鎌は、柄を着装する部分の折りかえしを見ると、柄が刃に対して直角につい

ている。このことは、稲の根刈用に用いられたと思われる。

第 61 号住居跡（第 345 ～ 347 図、図版 84）

〈構造〉

調査区Ｎ－ 12、13 区のⅣ層上面で確認されたもので、主軸Ｎ－ 143 °－Ｅで、規模は、2.5 × 2.5ｍの正方形を呈す。覆土は 12 層に区分され自然堆積を示すが、部分的に 3 層の間層が入り込んでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、東壁中央部に前時期の 120 × 40㎝のピットがあり、壁面追求の際掘り込んでしまっていた。壁溝はないが四隅に柱穴が確認された。またカマド左脇にピット 1 個が存在するが、柱穴と同じ規模を呈する。

カマドは、東壁南寄りに設置されており、燃焼室内に川原石を置いて支脚としており、そのまわりに土器片が散らばっていた。天井、袖、壁部は灰白色粘土で固めてあった。煙道部はゆるい角度で上昇し、急角度で立ち上がって煙出し孔となっていた。

〈遺物〉

第 347 図 1 は外面、ロクロ成形後の調整はなく、内面上部を横ミガキ、縦位に上部から底部にミガキをし、黒色処理を施ている。底部切り離し痕は、みえなくなっている土師器坏である。2 は底部欠損しているが、内面黒色処理をし、外面の調整はない。

第 62 号住居跡（第 348 ～ 350 図、図版 84）

〈構造〉

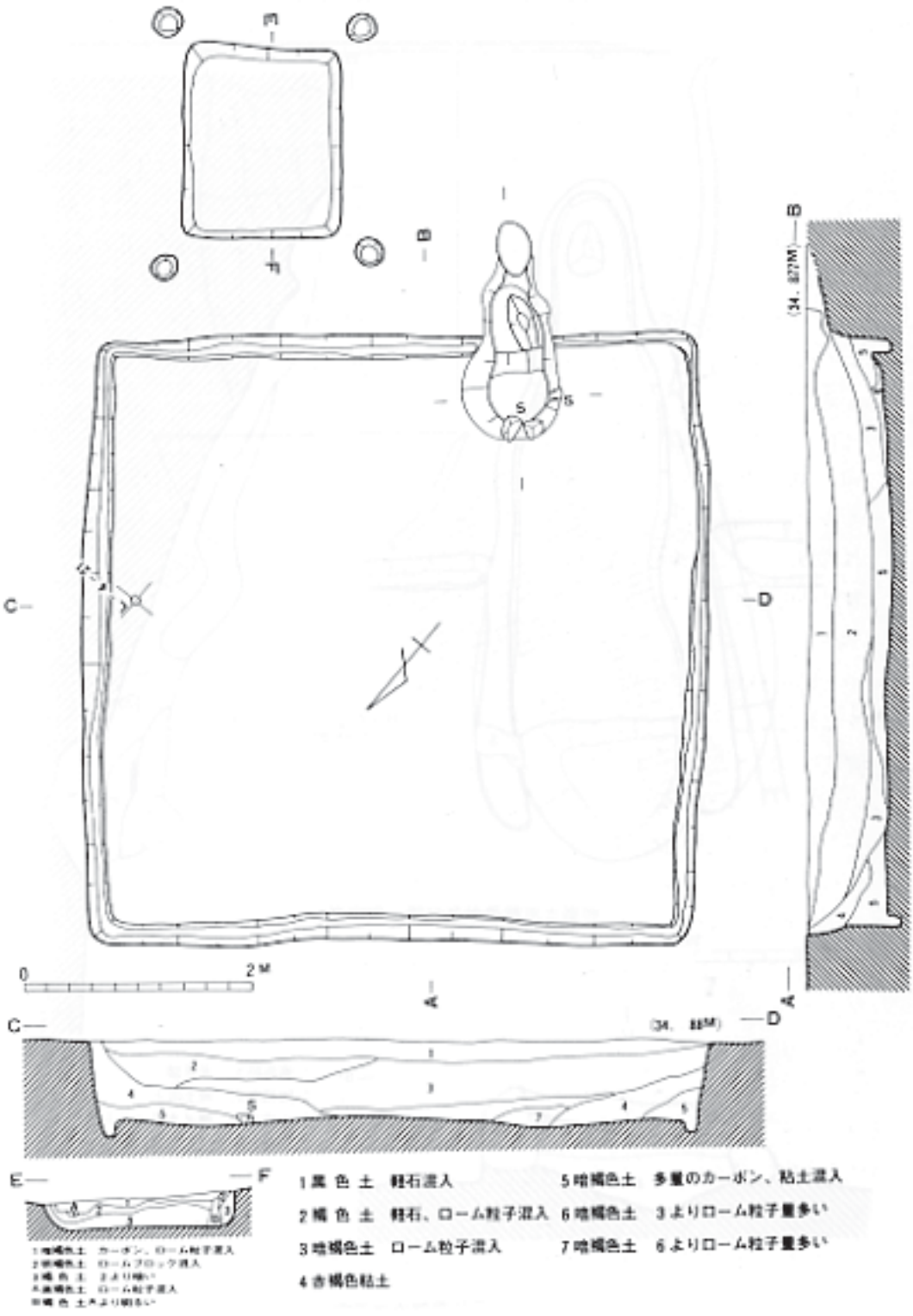
0 － 12 区Ⅳ層上面で確認され、主軸Ｎ－ 48 °－Ｅで、規模 7.8 × 7.8ｍの正方形を呈する。覆土は 8 層に区分され、自然堆積を示す。壁の立ち上がりは垂直で、壁溝はほぼ一巡する。溝内の四隅に柱穴があり、床面上のピットは 5 ～ 8㎝と浅い。床面はⅤ層をそのまま使用しているので堅くて平坦である。また、カマド左脇に 1.24 × 0.44ｍの張り出し部があり、壁溝もピットも存在しないが、住居構築時と同時のものであるので、出入口として差しつかえないであろう。

カマドは東壁中央やや南寄りに設置されており、燃焼室内を深さ約 40㎝程も掘り込んでいるのが特徴である。煙道も急角度で立ち上がり、煙出し孔の垂直な立ち上がり部はみられない。袖には川原石を芯としているが、天井内側にも土器片を粘土で固めてあった。

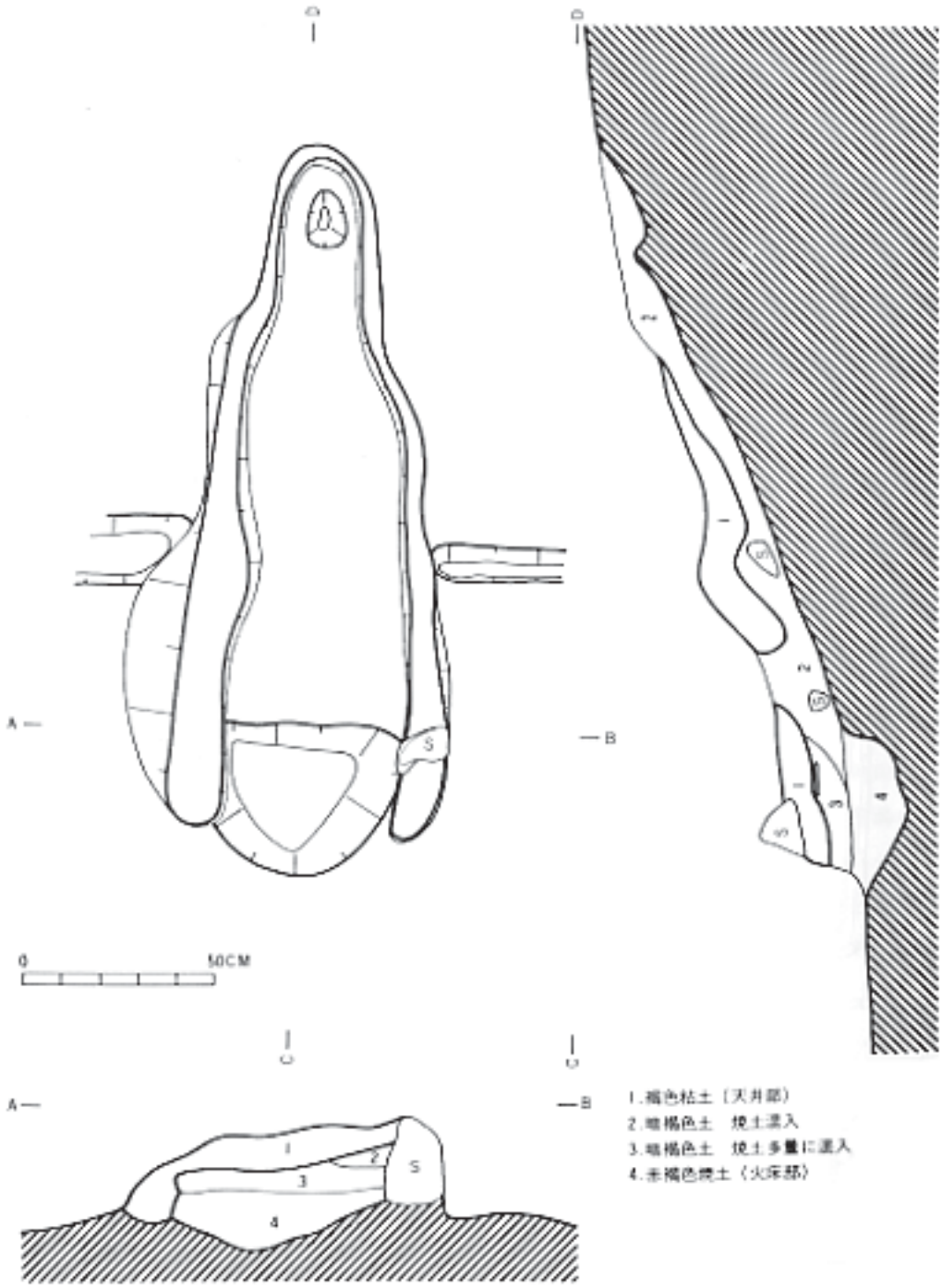
〈遺物〉

第 350 図 1 は土師器甕で体部をヘラナデをしており、2 は大形の坏で若干上げ底風のもので、ロクロ成形後の再調整はみられない赤褐色系の土器である。3はロクロ成形の凹凸が激しく赤褐色の器表に薄ねずみ色の火襷痕が、内外面ともにみられる。4 は平行叩き目文の須恵器、5 は格子目状平行叩き目文の胴部須恵器片である。6 は鉄製紡錘車で、円板、軸ともに鉄製で、中央の穿孔は図で上から下へ穿たれ、軸とともに円形を呈し、両端は欠損している。

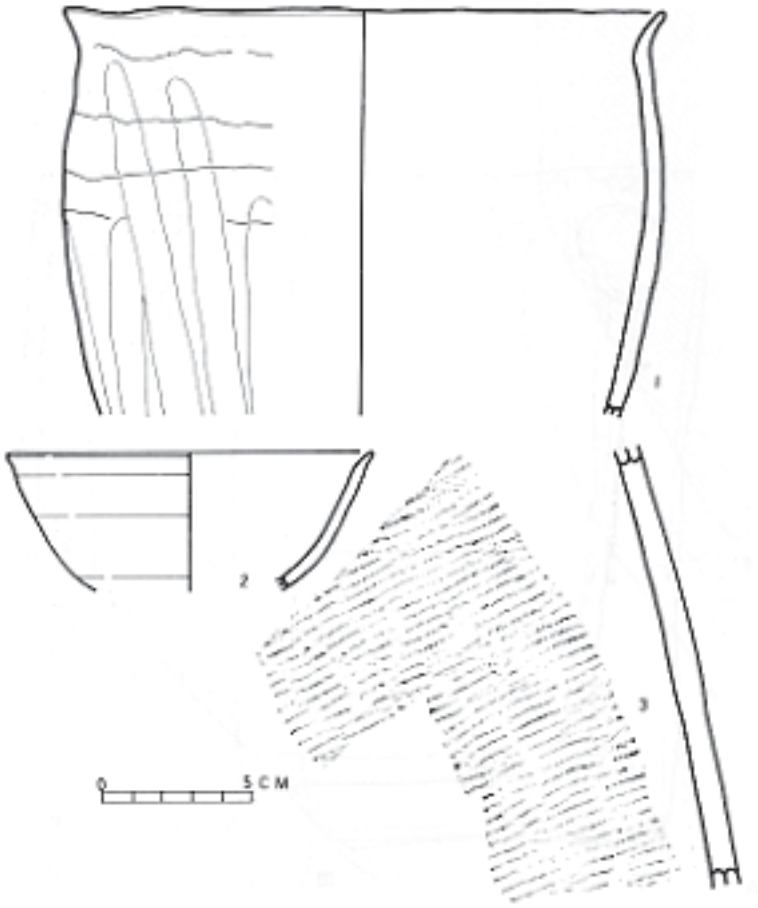
（第 35 号住居跡から第 62 号住居跡まで　塩谷隆正）



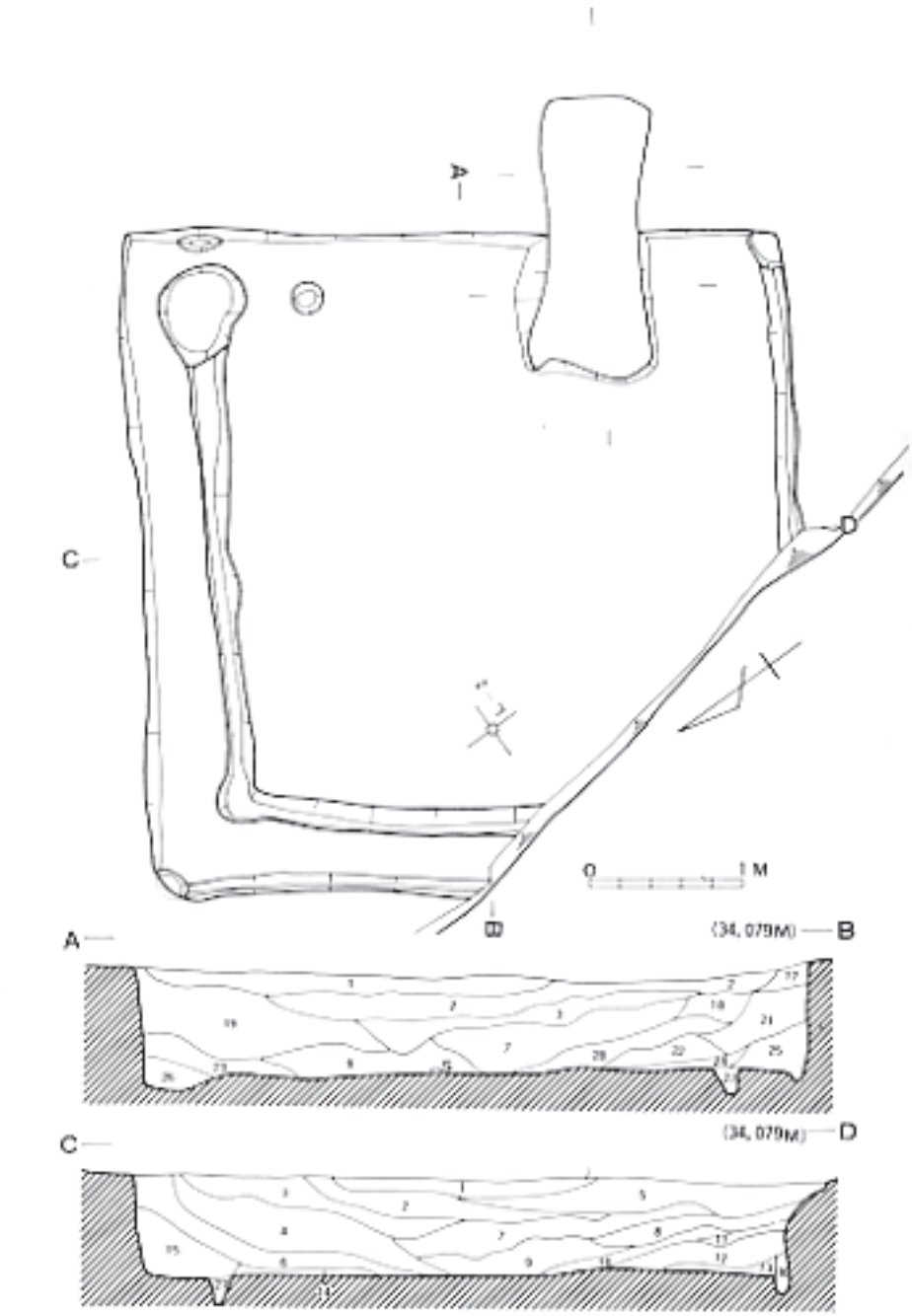
第 273 図　第 35 号住居跡実測図



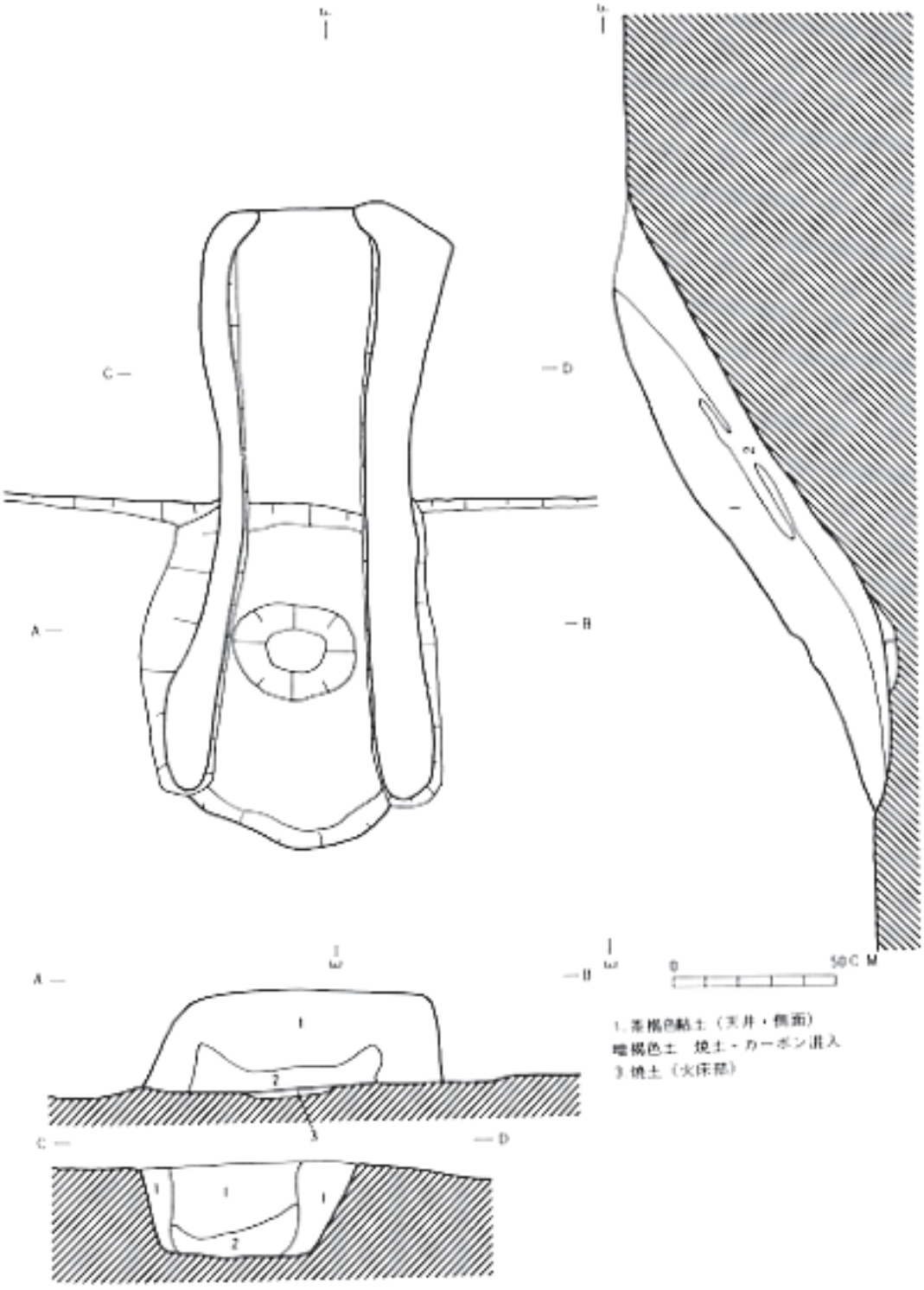
第 274 図　第 35 号住居跡カマド実測図



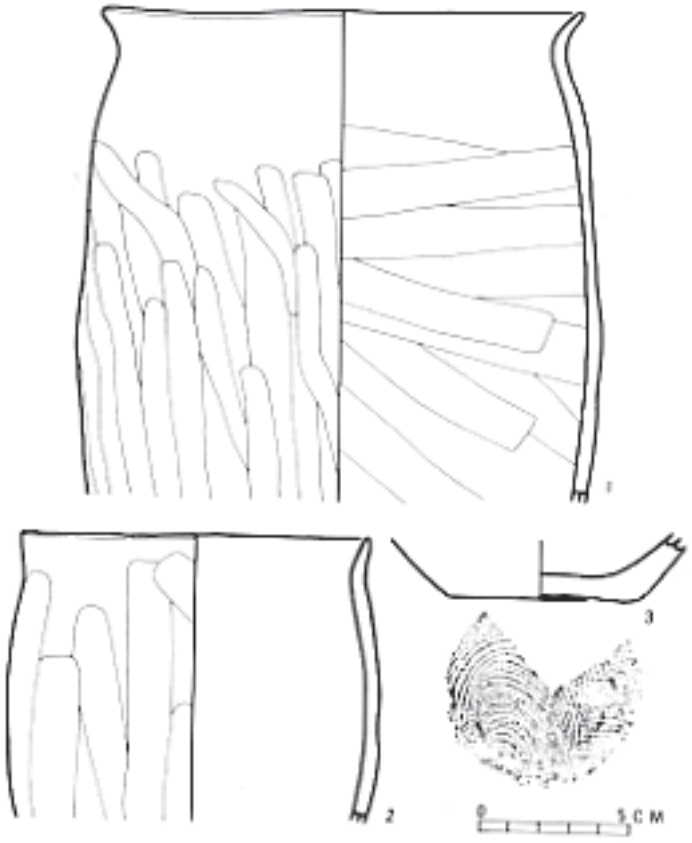
第 275 図　第 35 号住居跡出土遺物



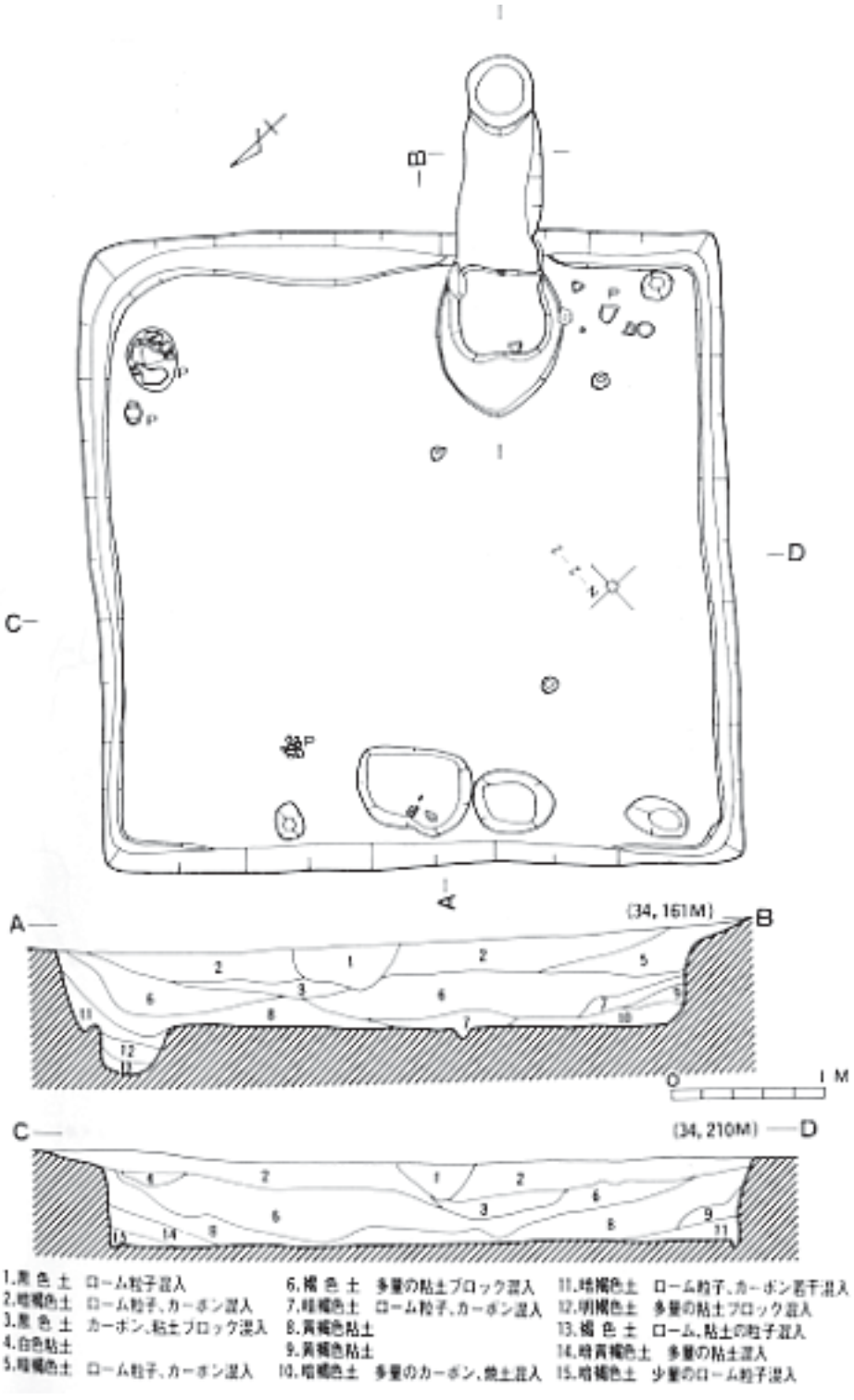
第 276 図　第 36 号住居跡実測図



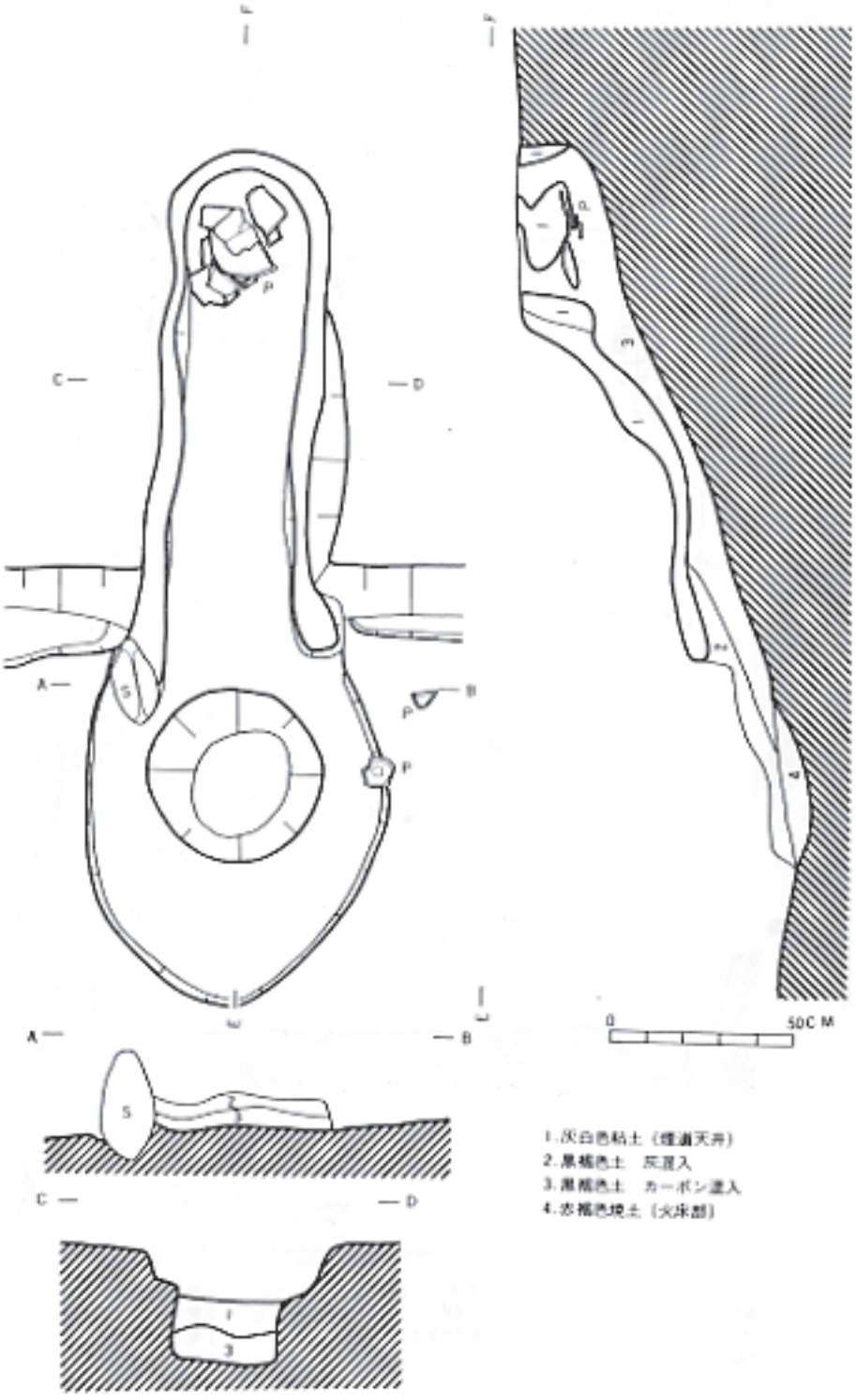
第 277 図　第 36 号住居跡カマド実測図



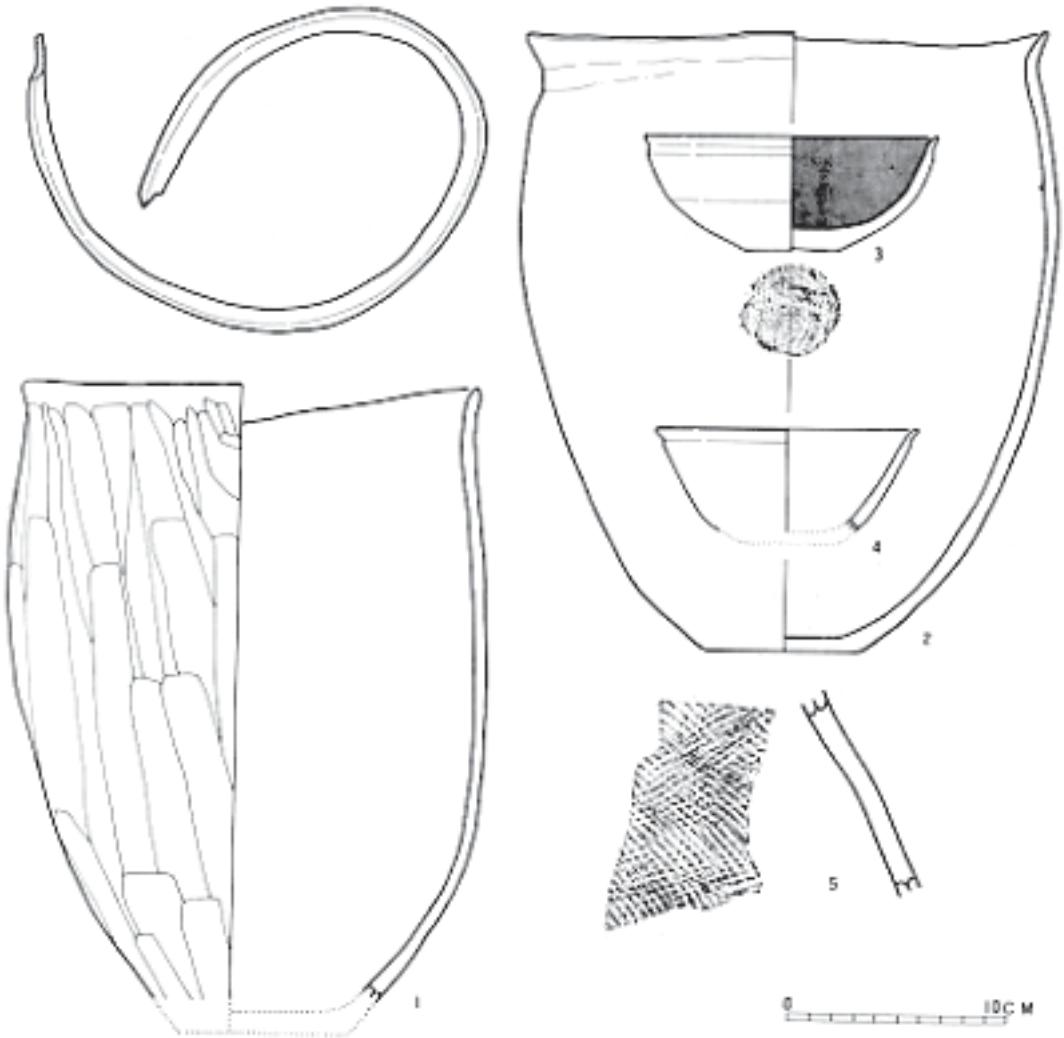
第 278 図　第 36 号住居跡出土遺物



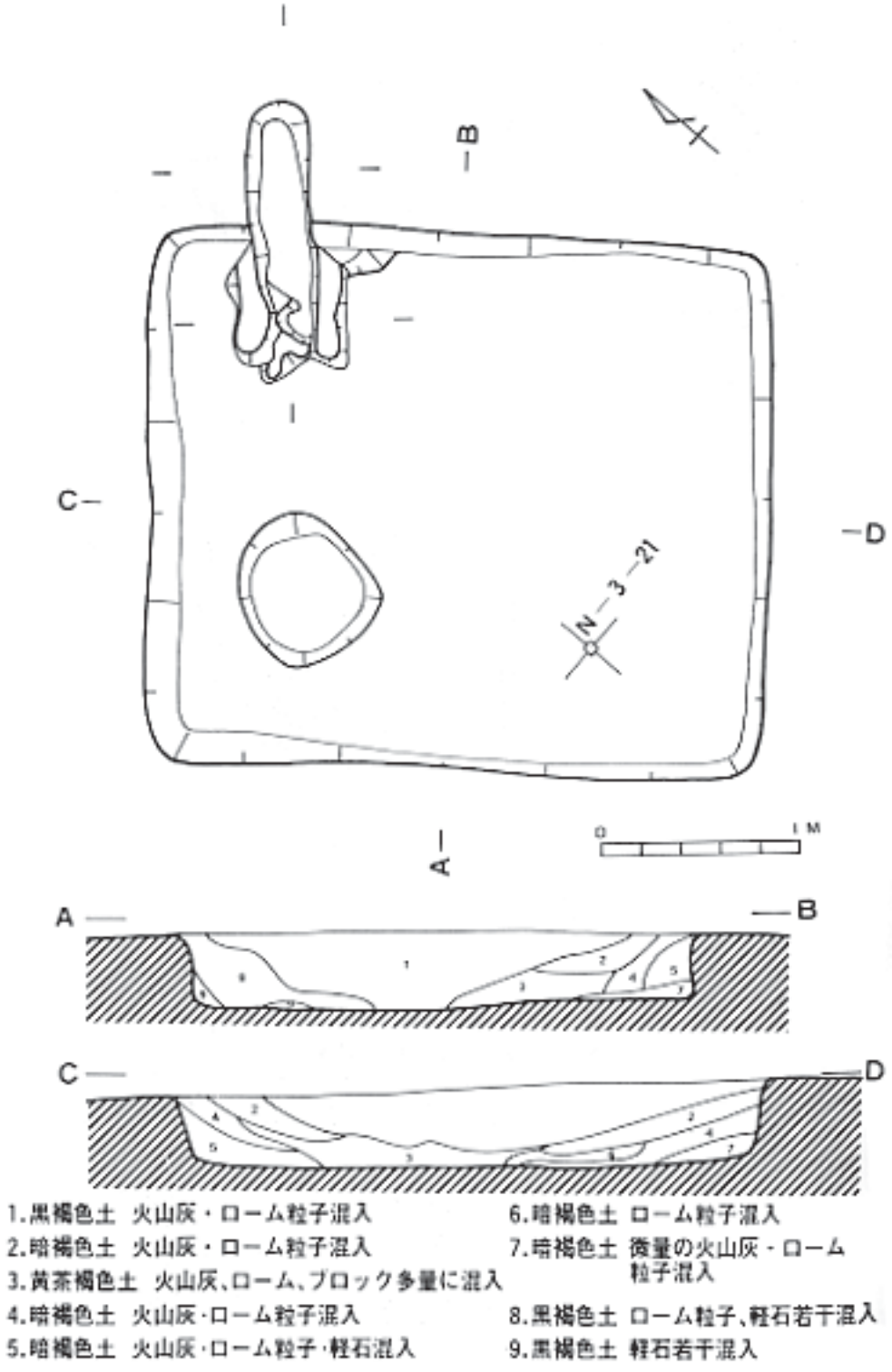
第 279 図　第 37 号住居跡実測図



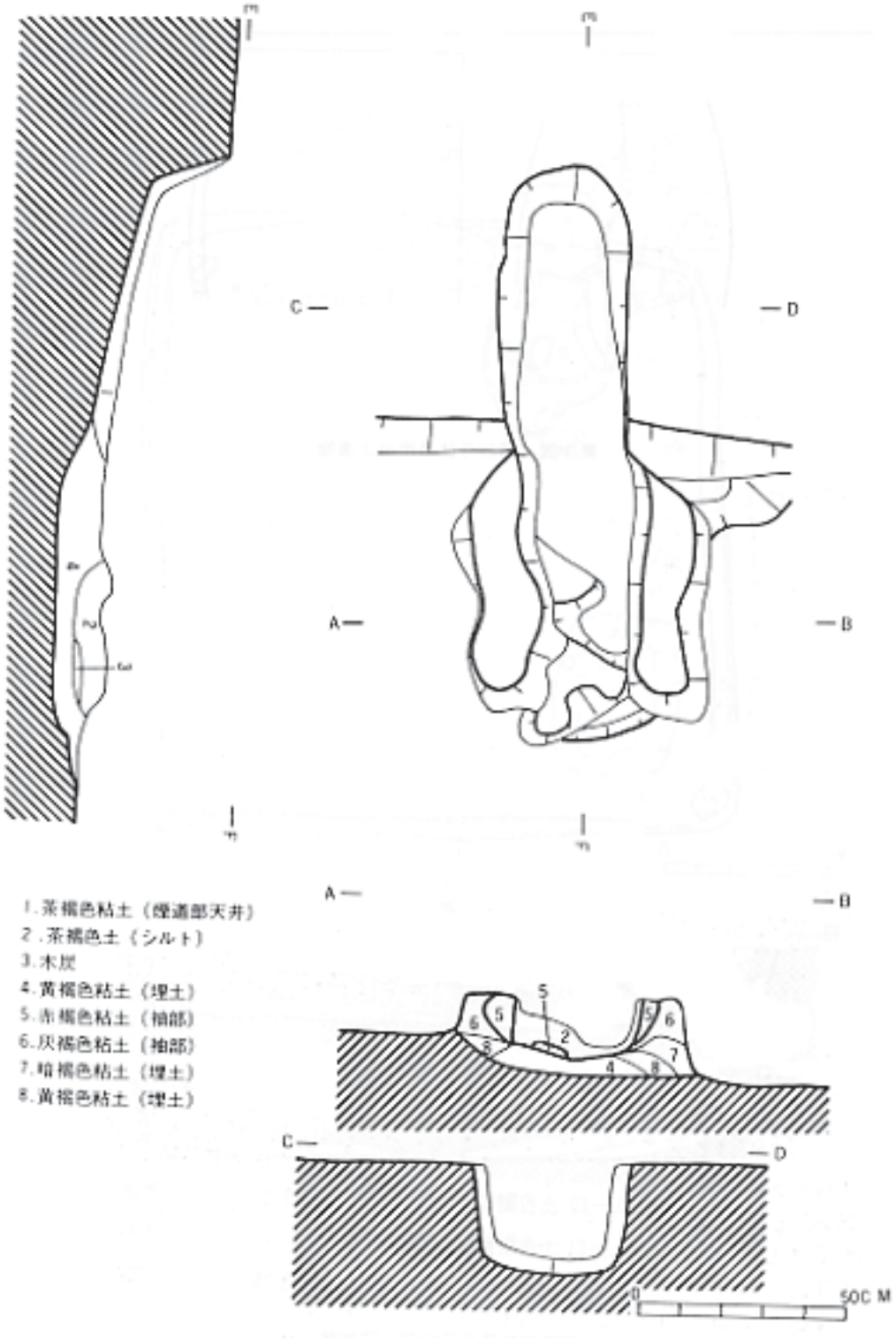
第 280 図　第 37 号住居跡カマド実測図



第 281 図　第 37 号住居跡出土遺物

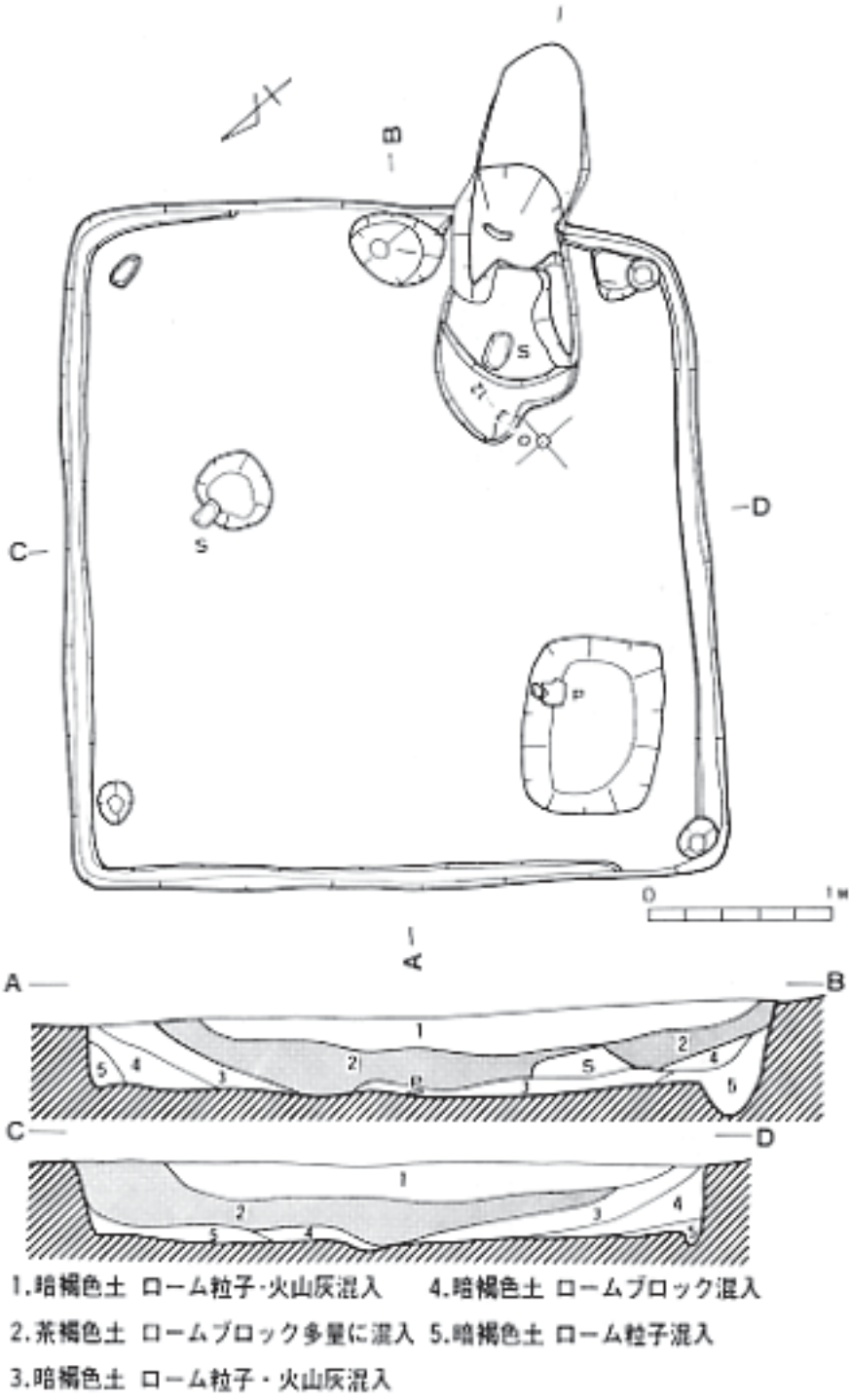


第 282 図　第 38 号住居跡実測図

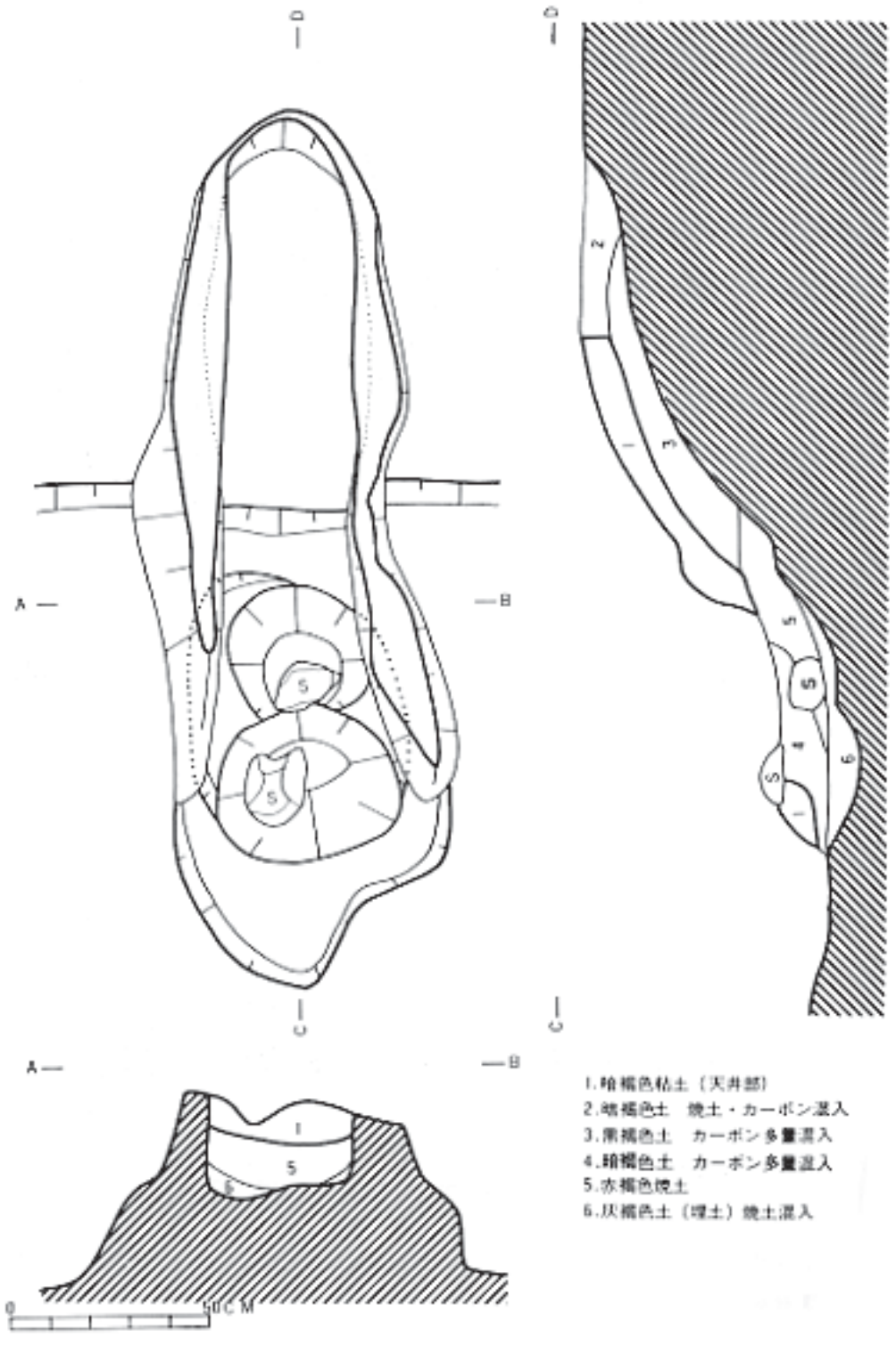


第 283 図　第 38 号住居跡カマド実測図

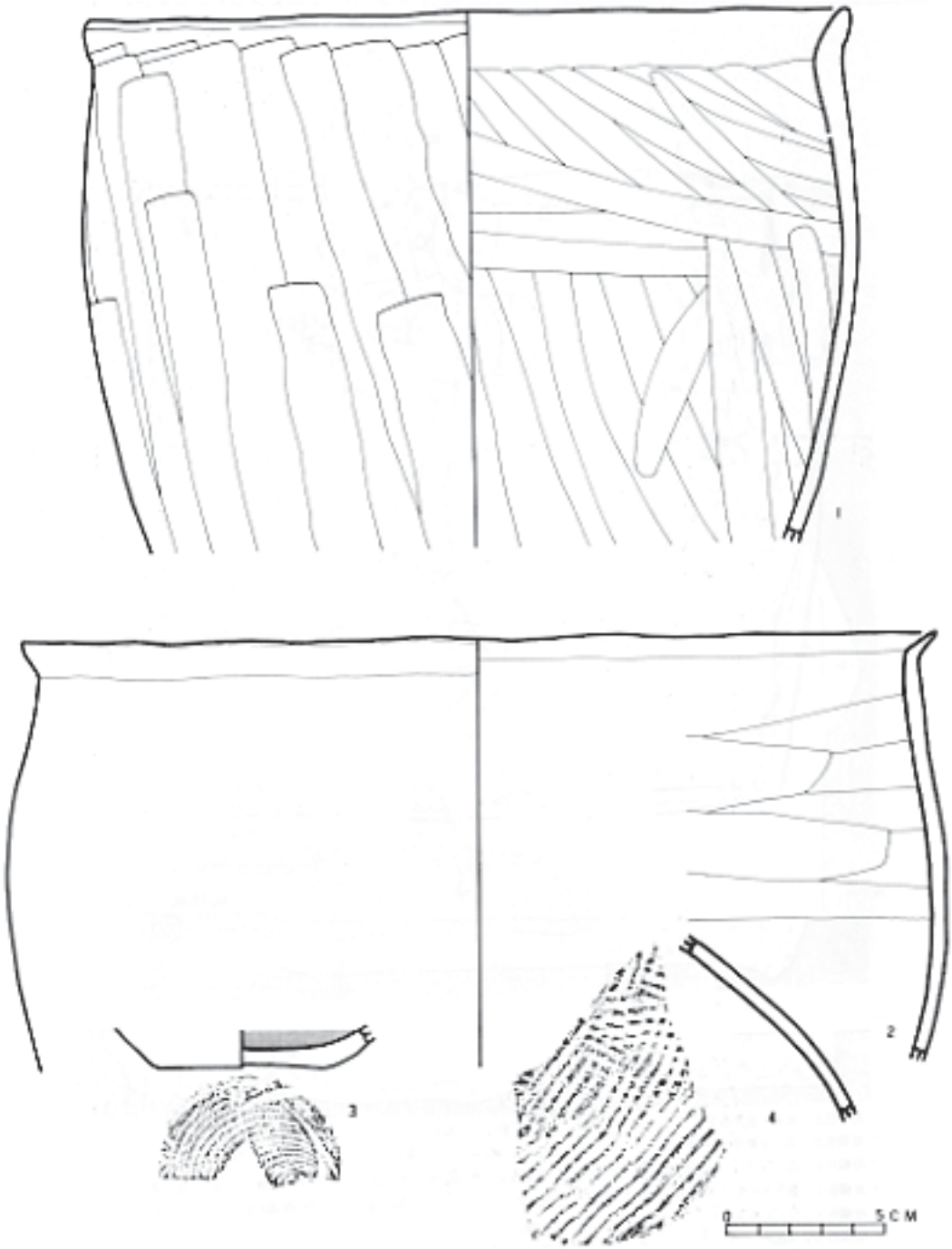
第 284 図　第 38 号住居跡出土遺物



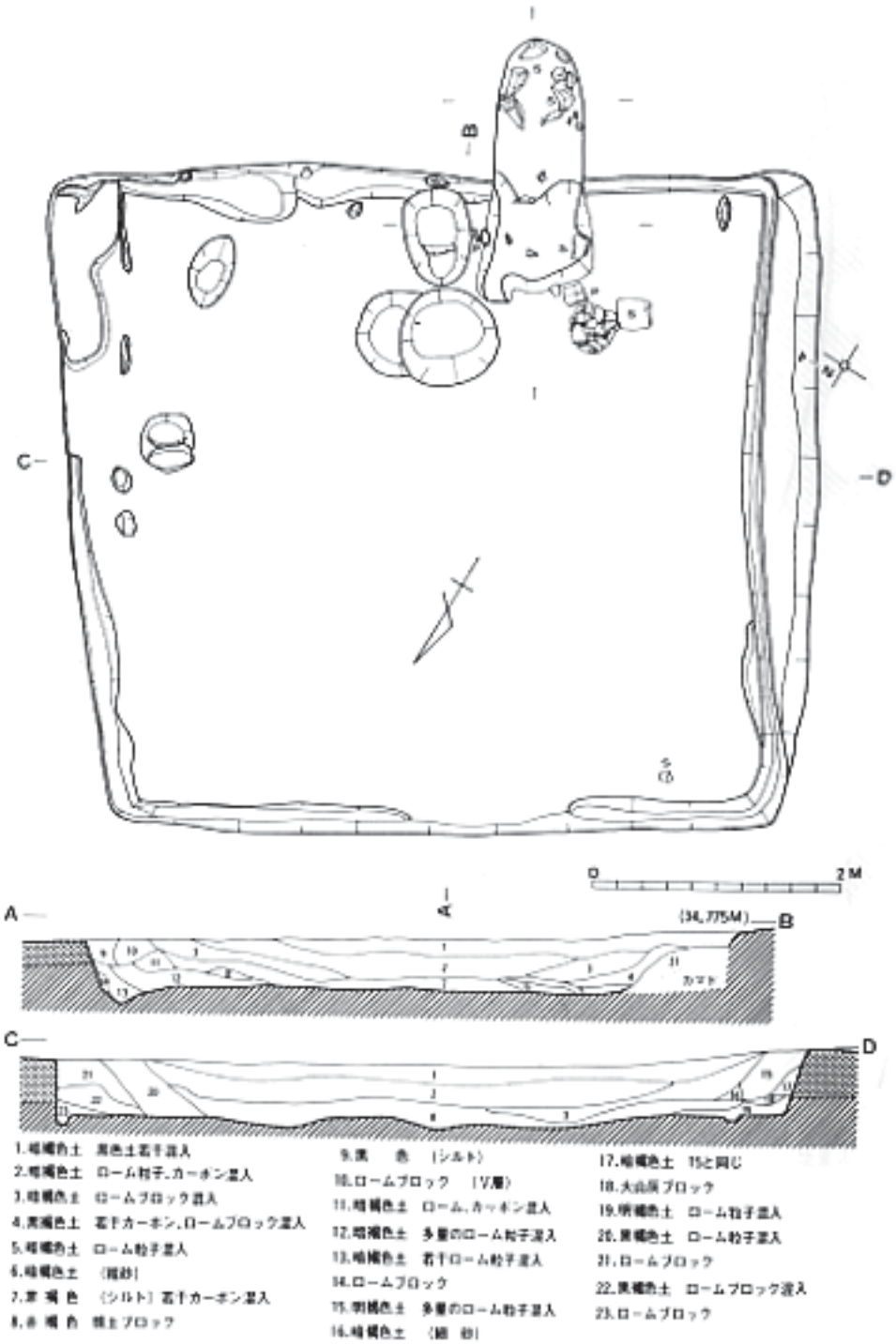
第 285 図　第 39 号住居跡実測図



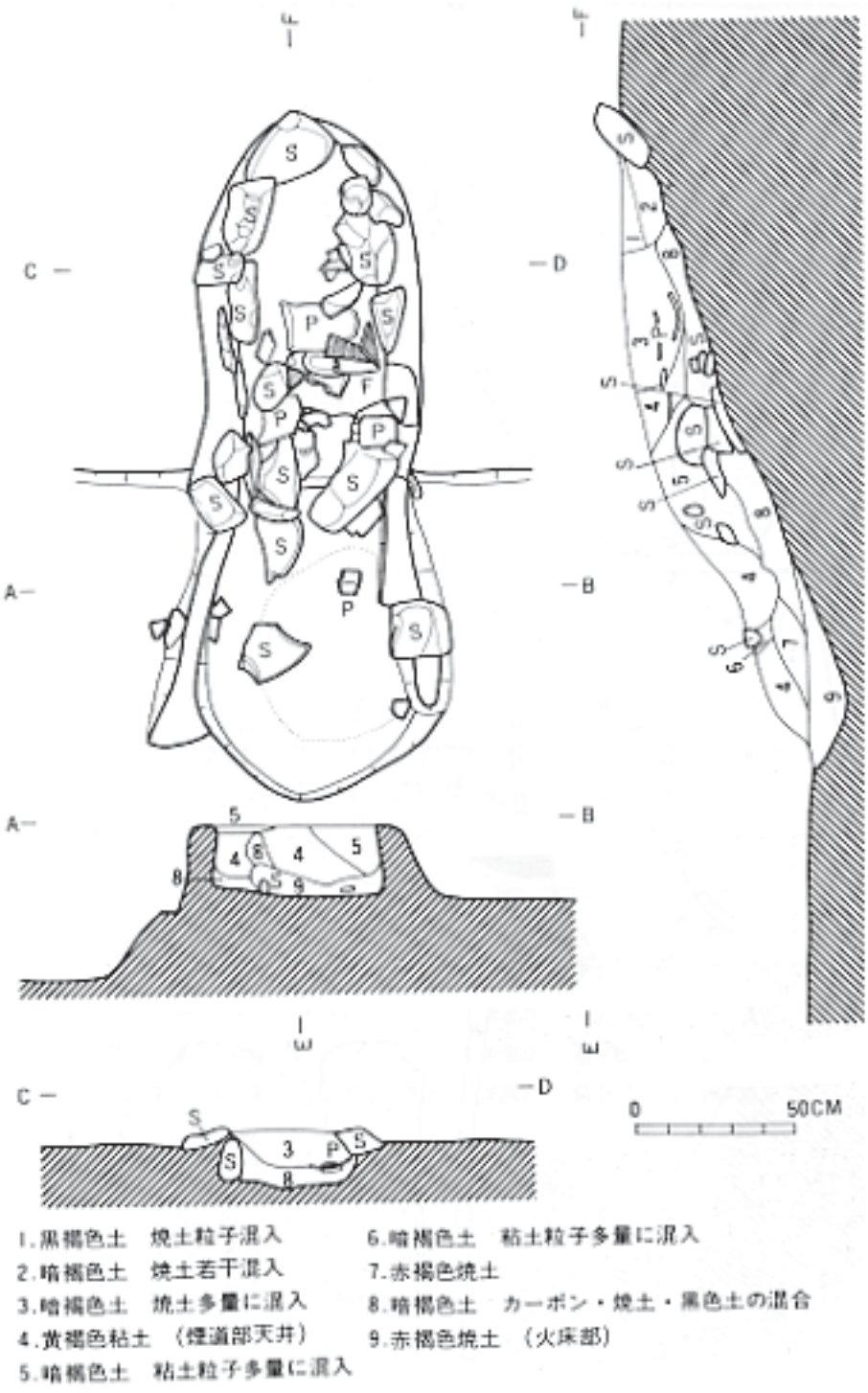
第 286 図　第 39 号住居跡カマド実測図



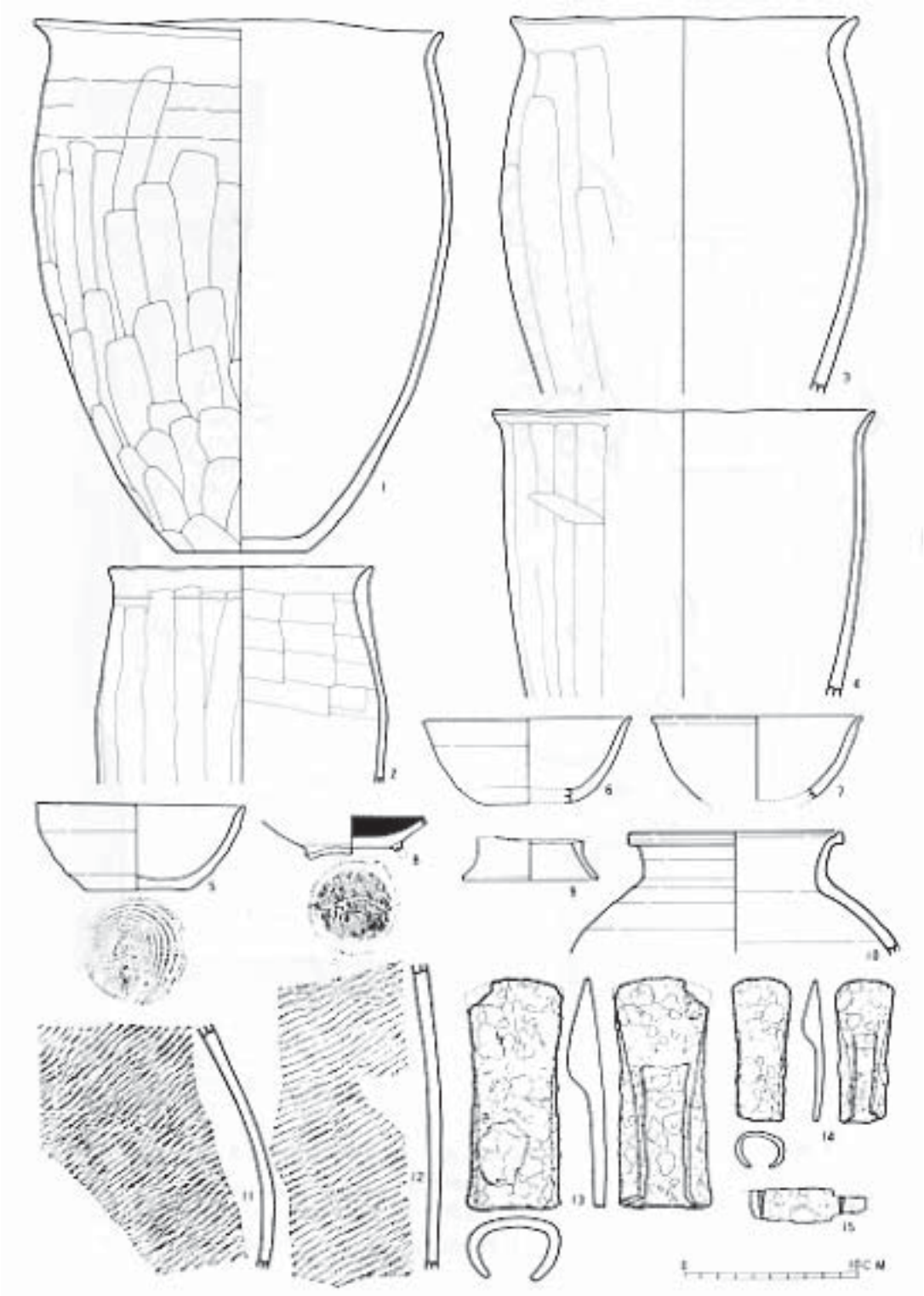
第 287 図　第 39 号住居跡出土遺物



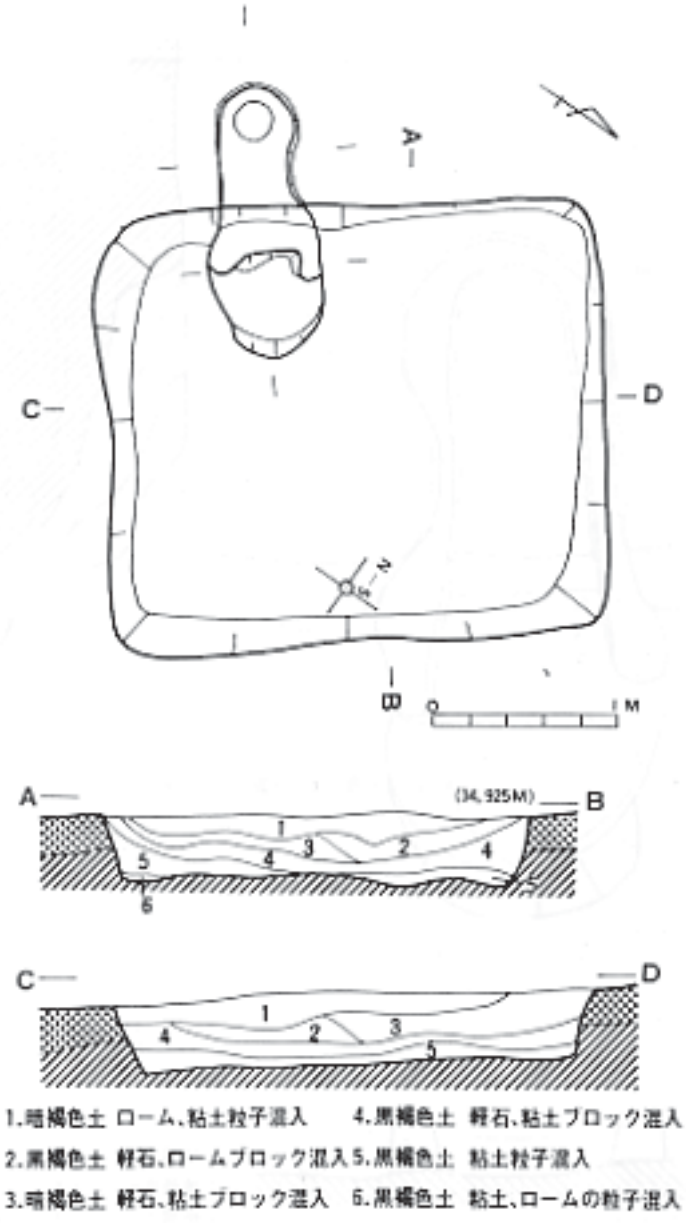
第 288 図　第 40 号住居跡実測図



第 289 図　第 40 号住居跡カマド実測図

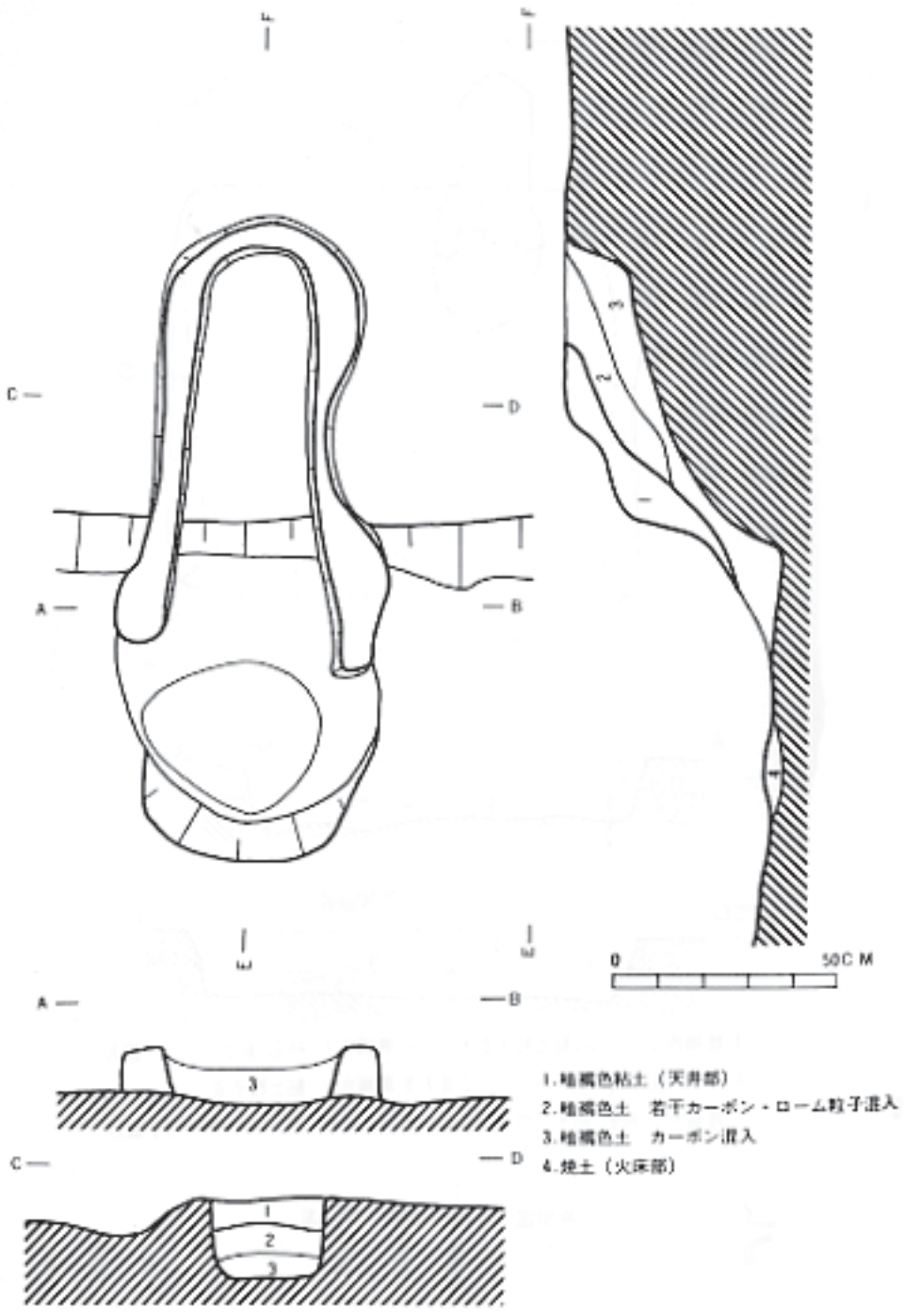


第 290 図　第 40 号住居跡出土遺物

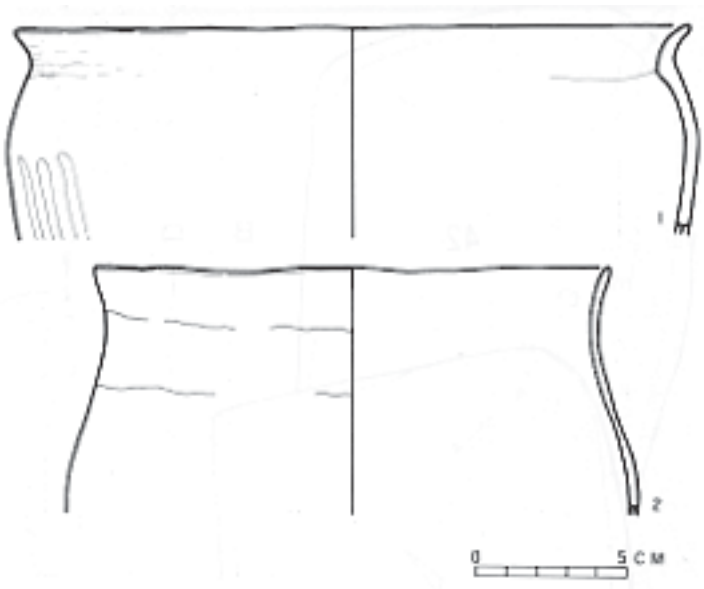


1.暗褐色土 ローム、粘土粒子混入　4.黒褐色土 軽石、粘土ブロック混入
2.黒褐色土 軽石、ロームブロック混入 5.黒褐色土 粘土粒子混入
3.暗褐色土 軽石、粘土ブロック混入　6.黒褐色土 粘土、ロームの粒子混入

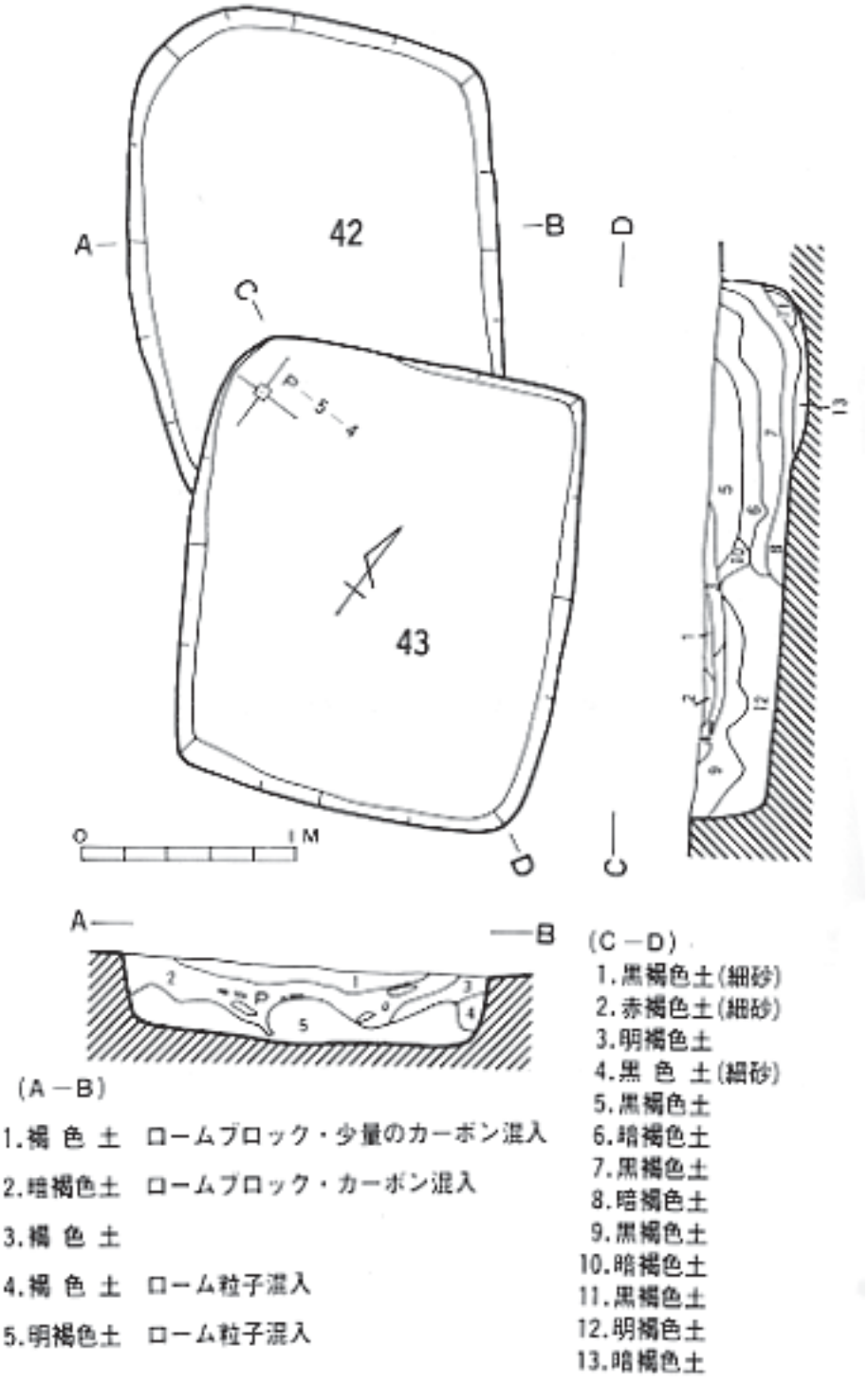
第 291 図　第 41 号住居跡実測図



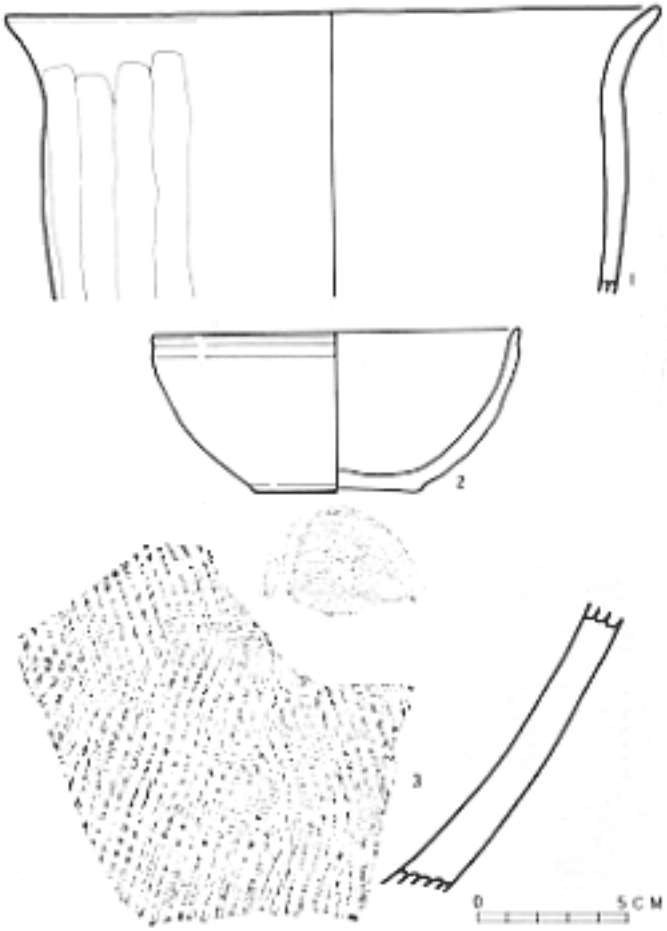
第 292 図　第 41 号住居跡カマド実測図



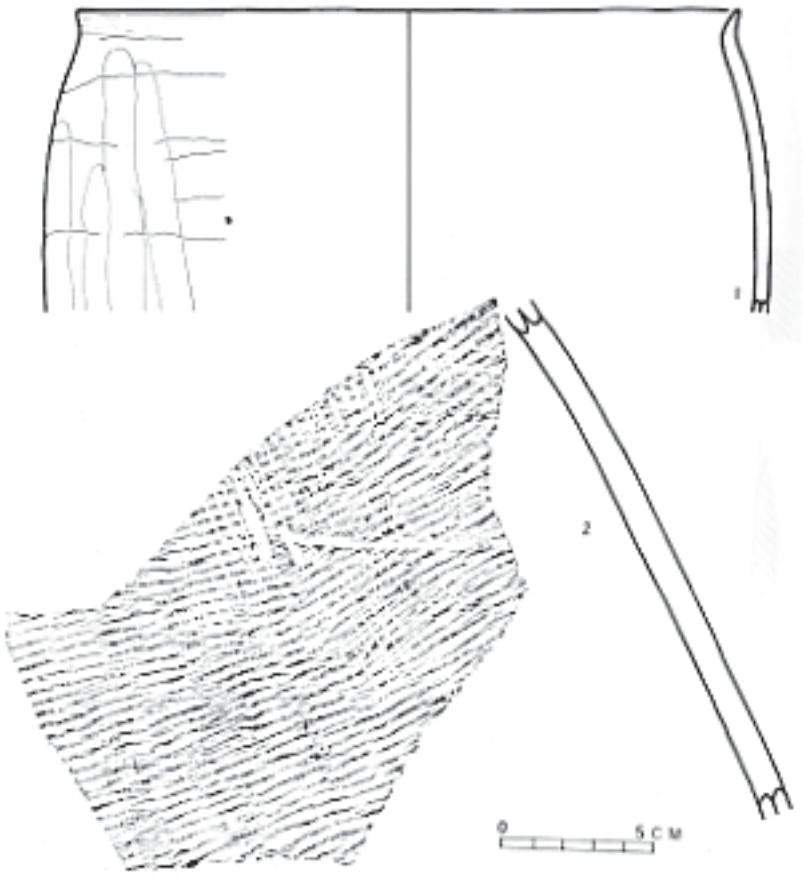
第 293 図　第 41 号住居跡出土遺物



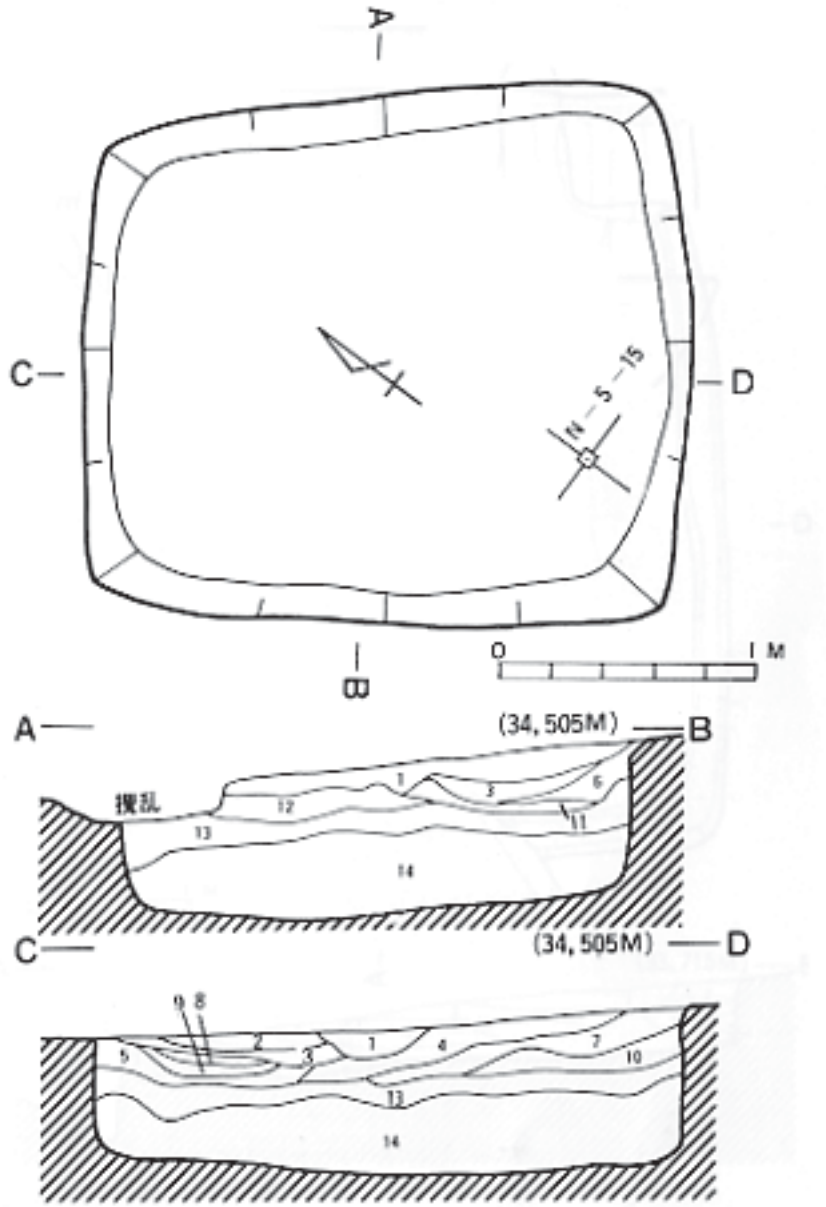
第 294 図　第 42・43 号住居跡実測図



第 295 図　第 42 号住居跡出土遺物

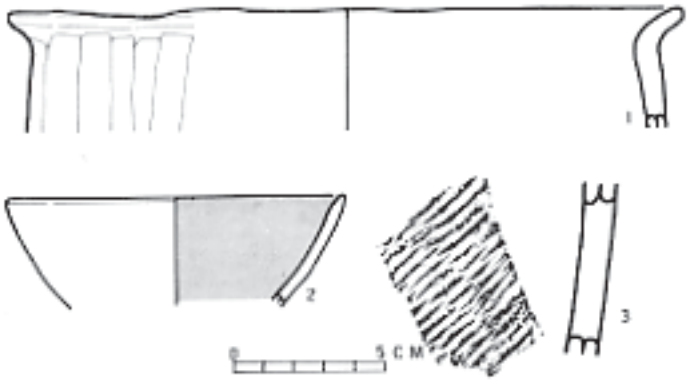


第 296 図　第 43 号住居跡出土遺物

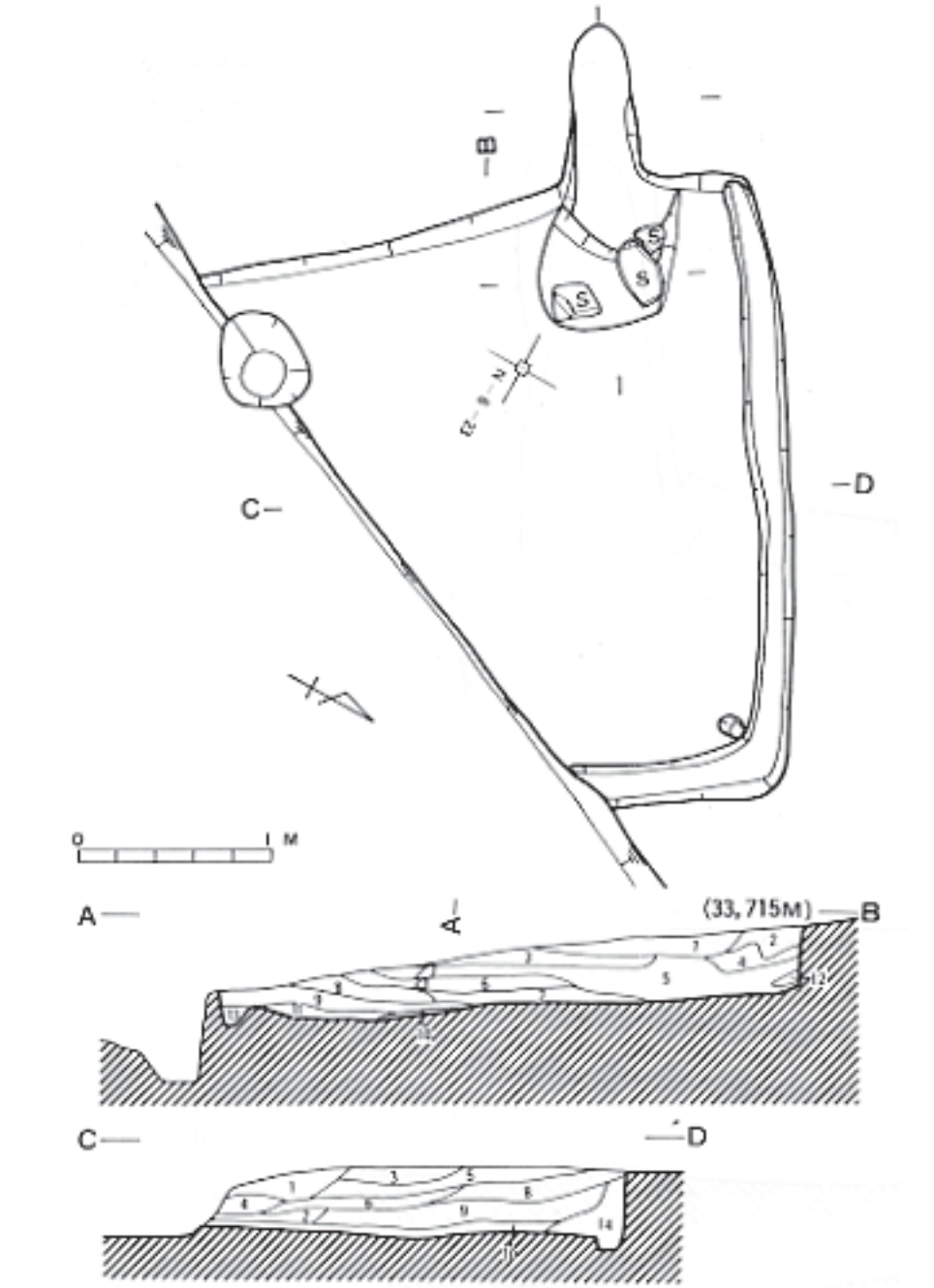


1.黒褐色土　カーボン若干混入
2.暗褐色土　1より暗い
3.黄褐色土　多量の粘土粒子混入
4.褐 色 土　ローム粒子、少量のカーボン混入
5.黒褐色土　カーボン若干混入
6.黒褐色土　カーボン多少混入
7.黒褐色土　(粗砂) カーボン混入
8.黒 色 土　(シルト)
9.明褐色土　ローム粒子混入
10.黒褐色土　(粗砂) カーボン混入
11.黒褐色土　カーボン多少混入
12.暗褐色土　粘土ブロック、カーボン混入
13.茶褐色土　ローム、粘土ブロック混入
14.暗褐色土　カーボン混入

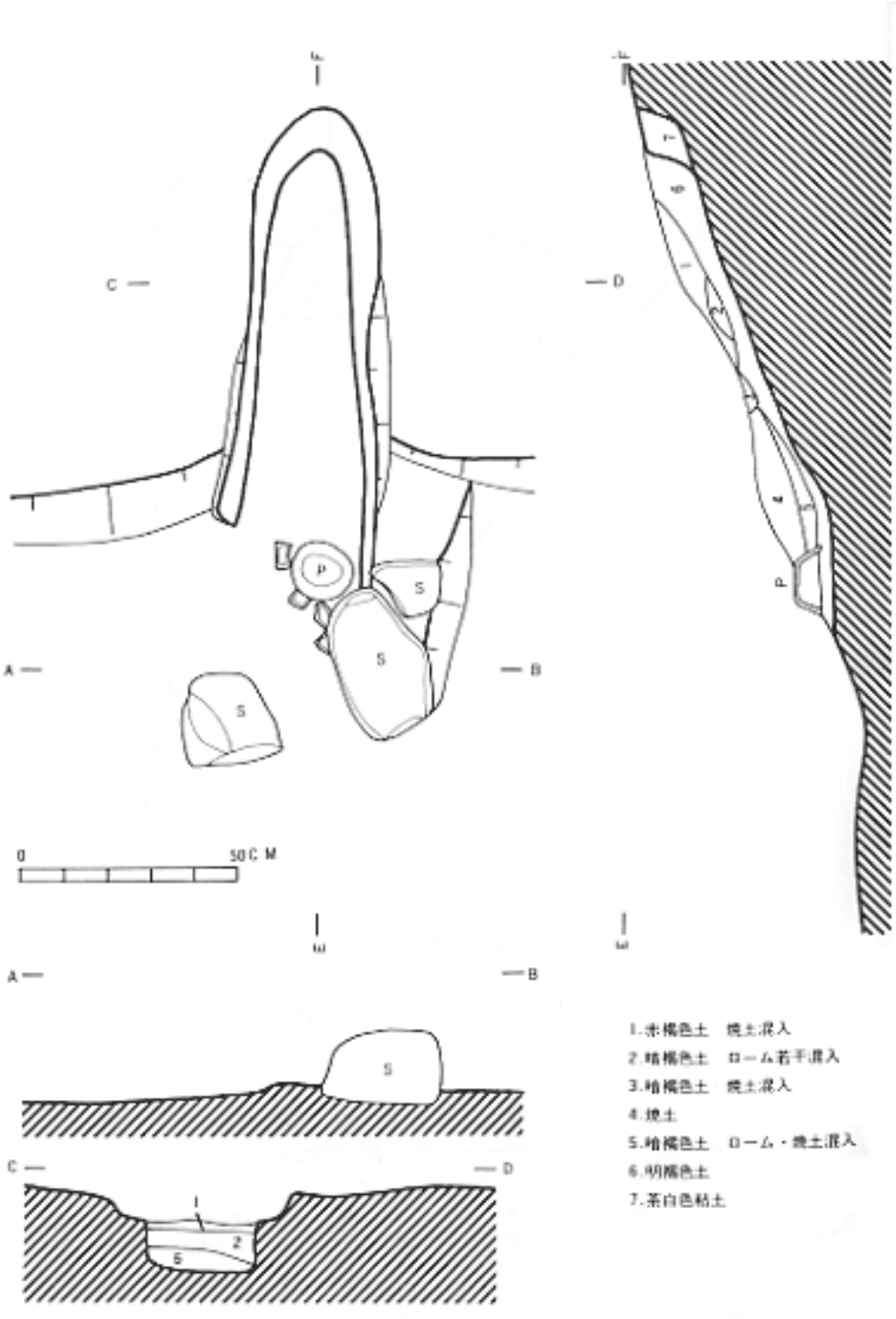
第 297 図　第 44 号住居跡実測図



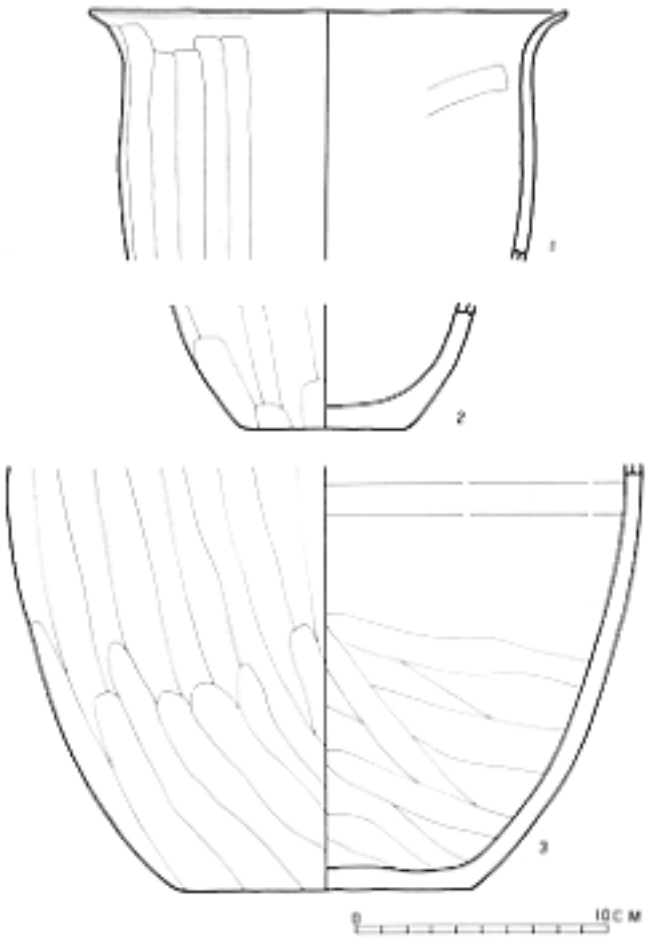
第 298 図　第 44 号住居跡出土遺物



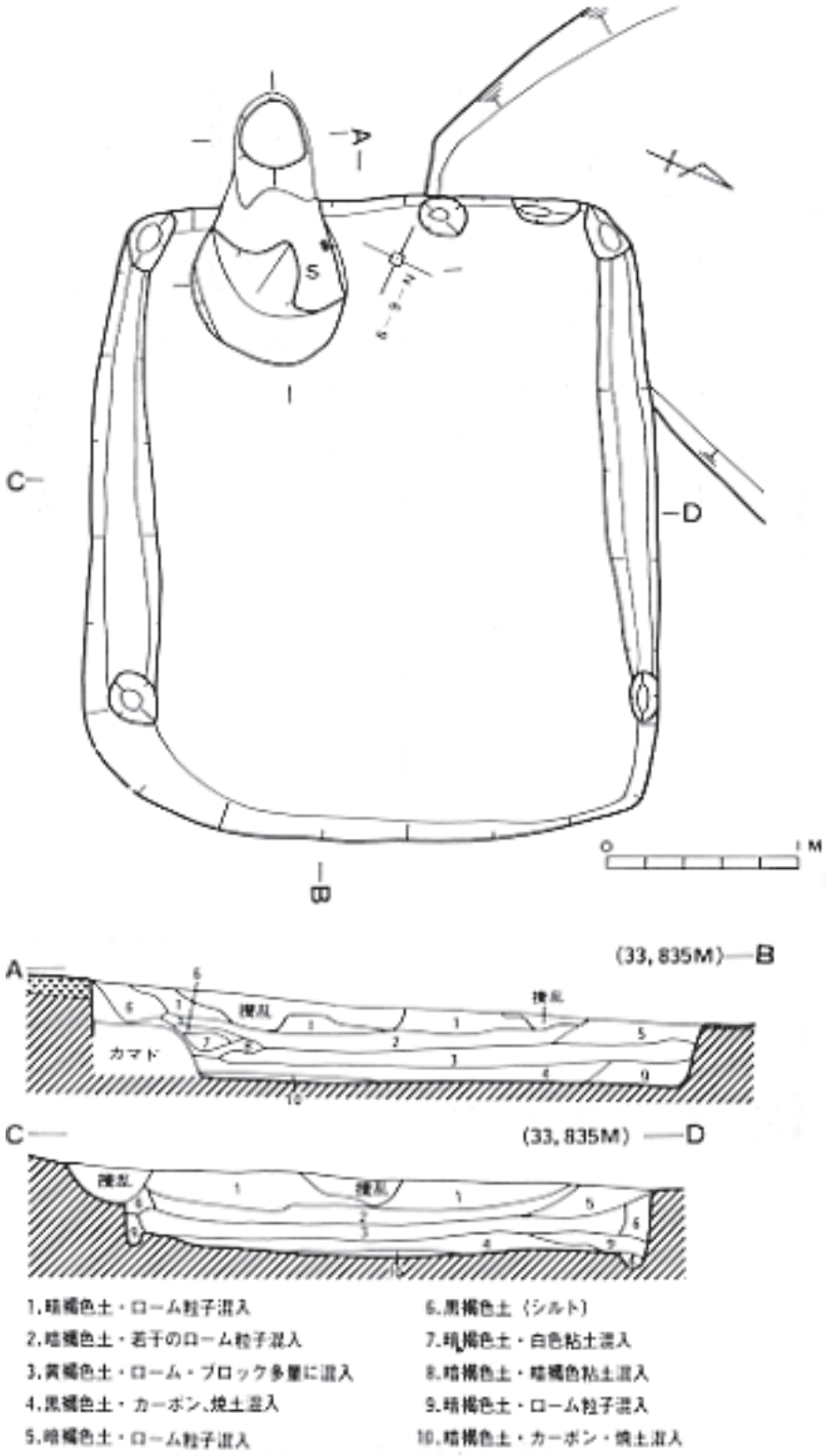
第 299 図　第 45 号住居跡実測図



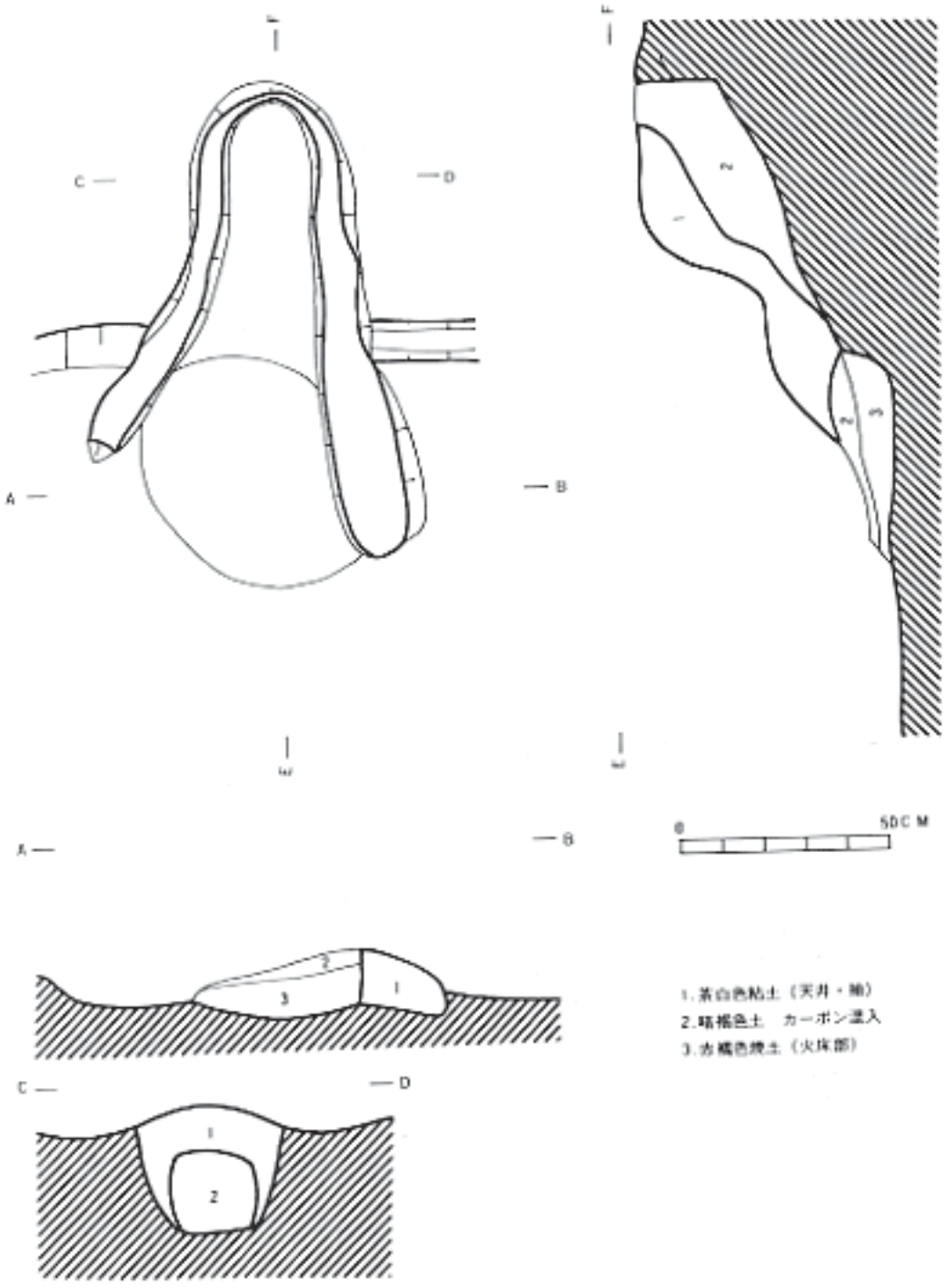
第 300 図　第 45 号住居跡カマド実測図



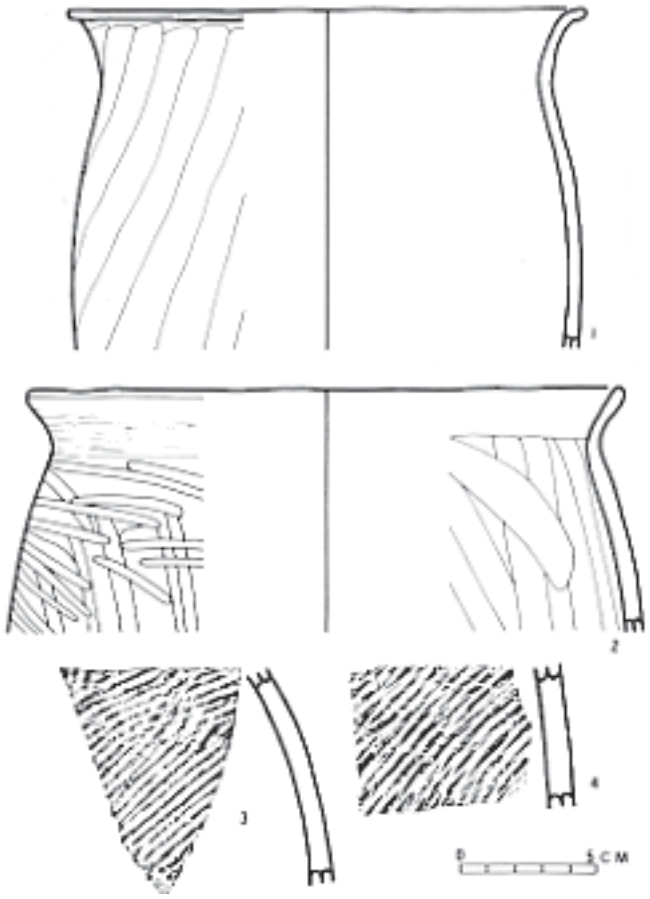
第 301 図　第 45 号住居跡出土遺物



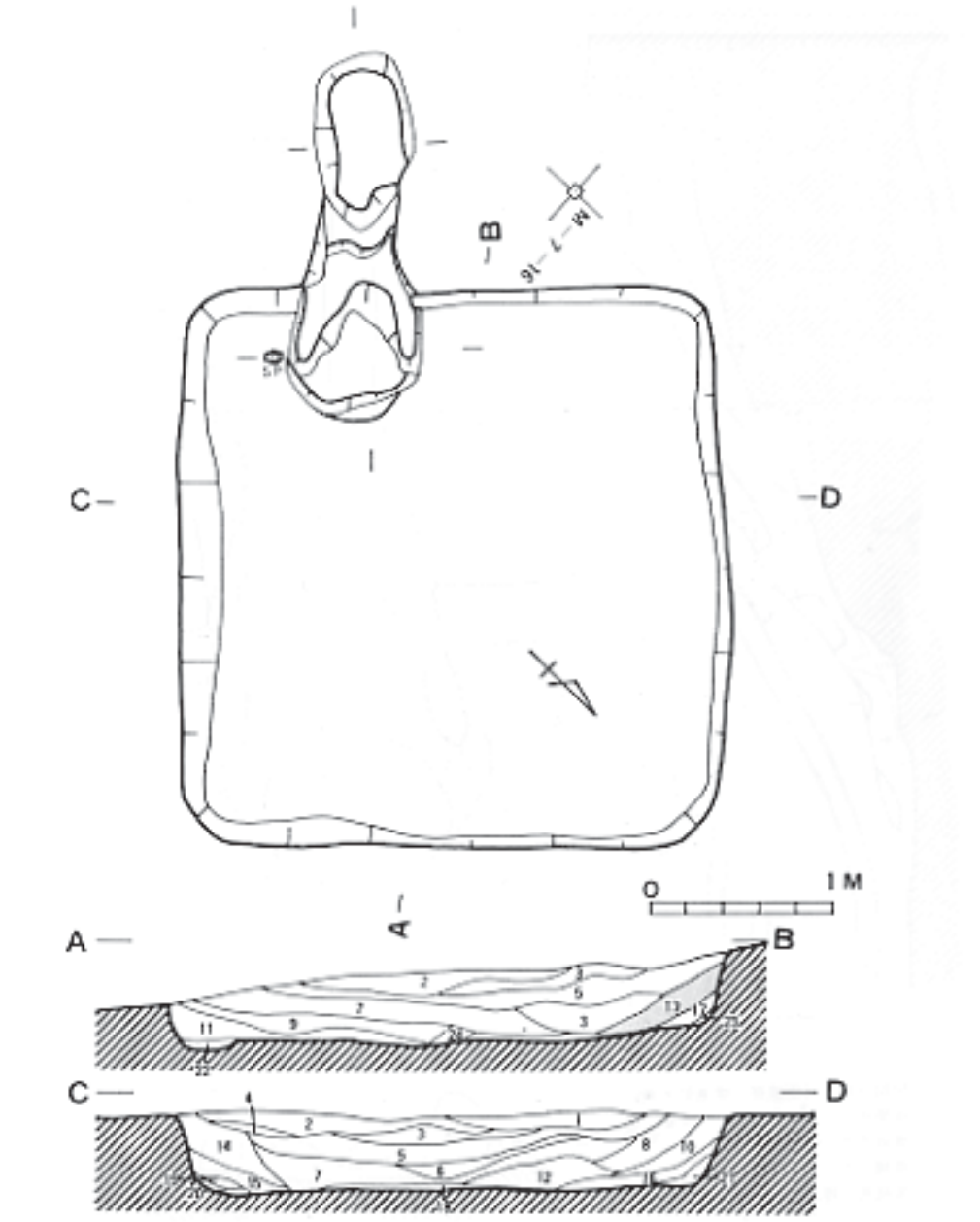
第 302 図　第 46 号住居跡実測図



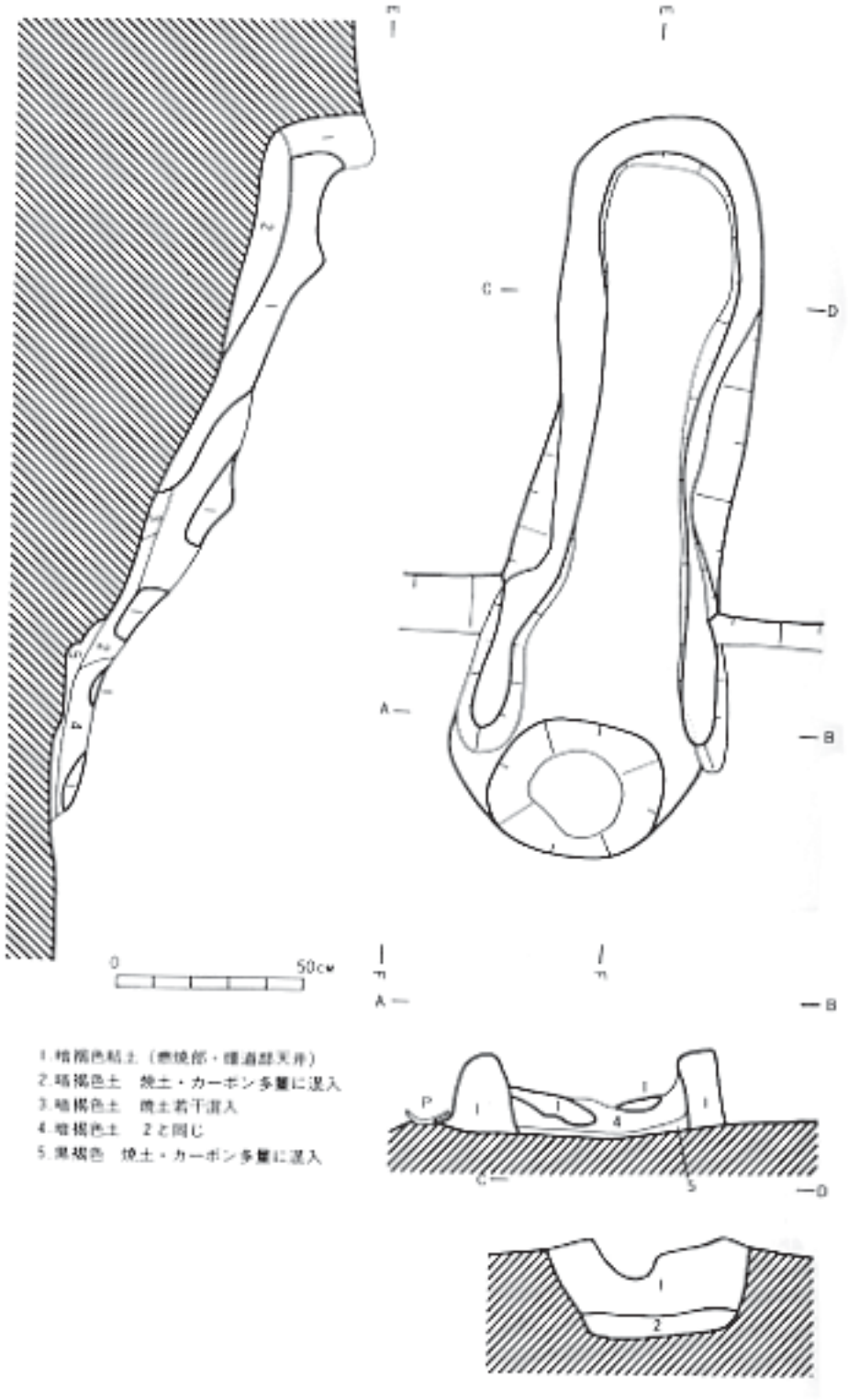
第 303 図　第 46 号住居跡カマド実測図



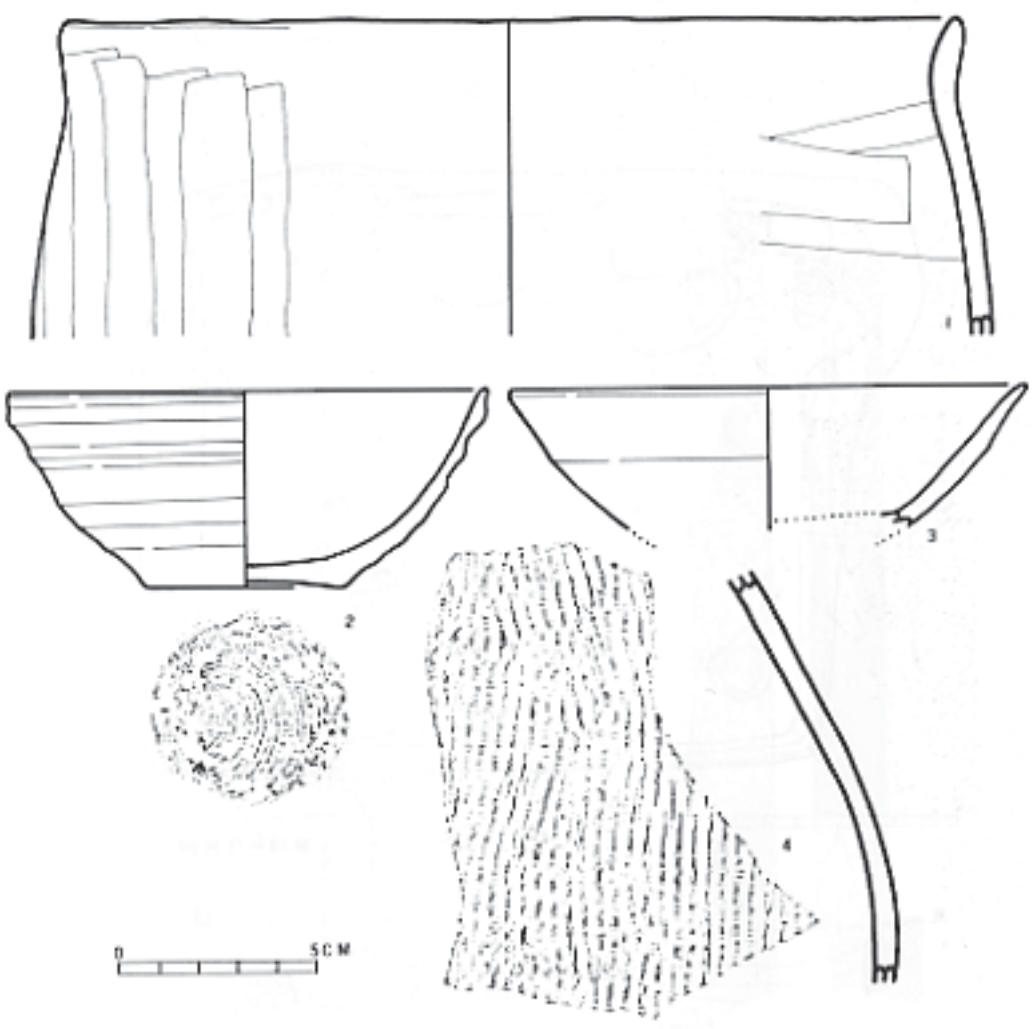
第 304 図　第 46 号住居跡出土遺物



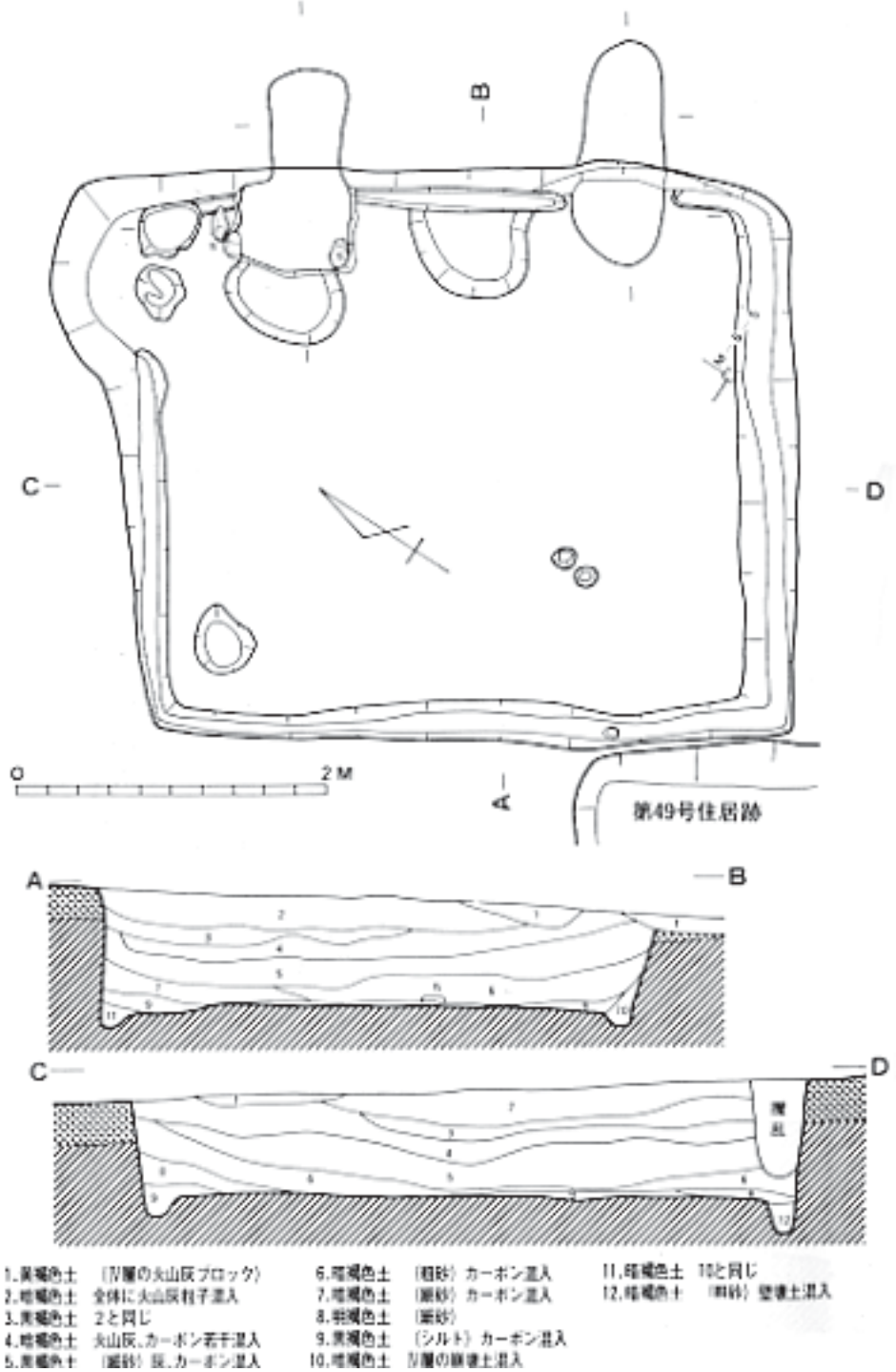
第 305 図　第 47 号住居跡実測図



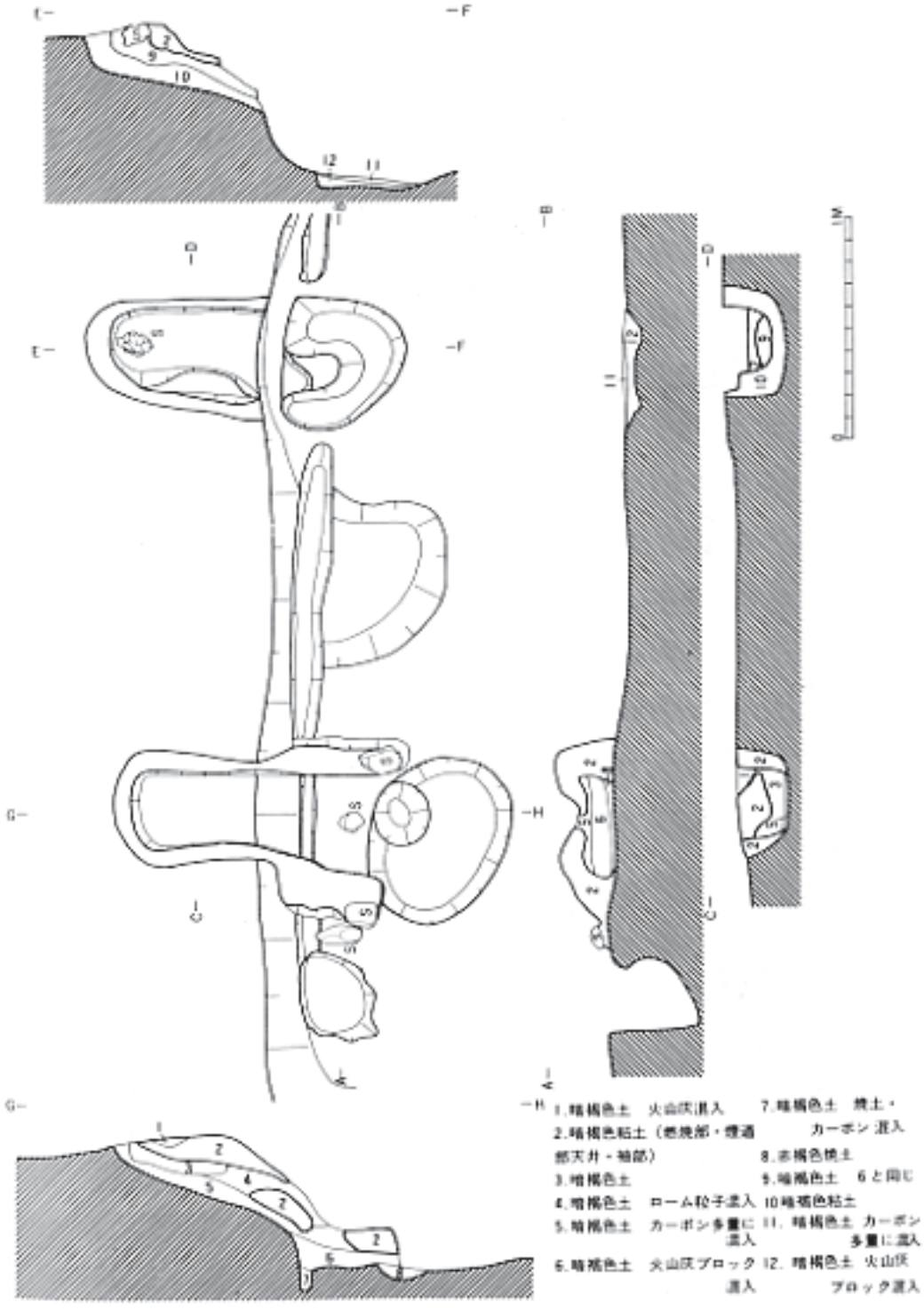
第 306 図　第 47 号住居跡カマド実測図



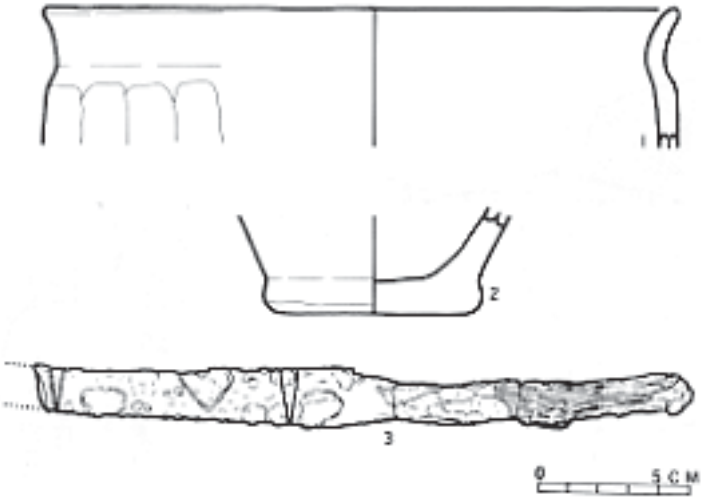
第 307 図　第 47 号住居跡出土遺物



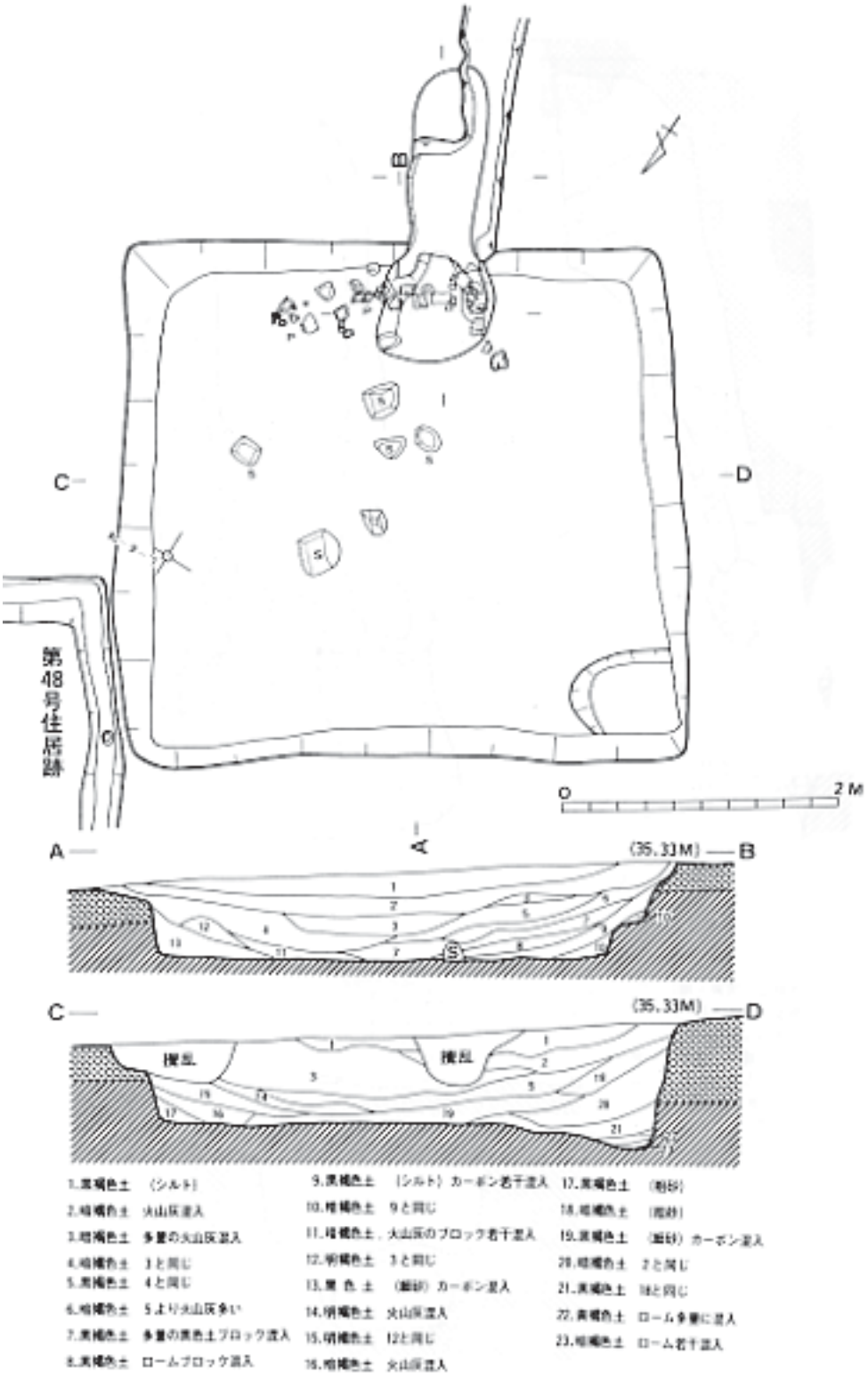
第 308 図　第 48 号住居跡実測図



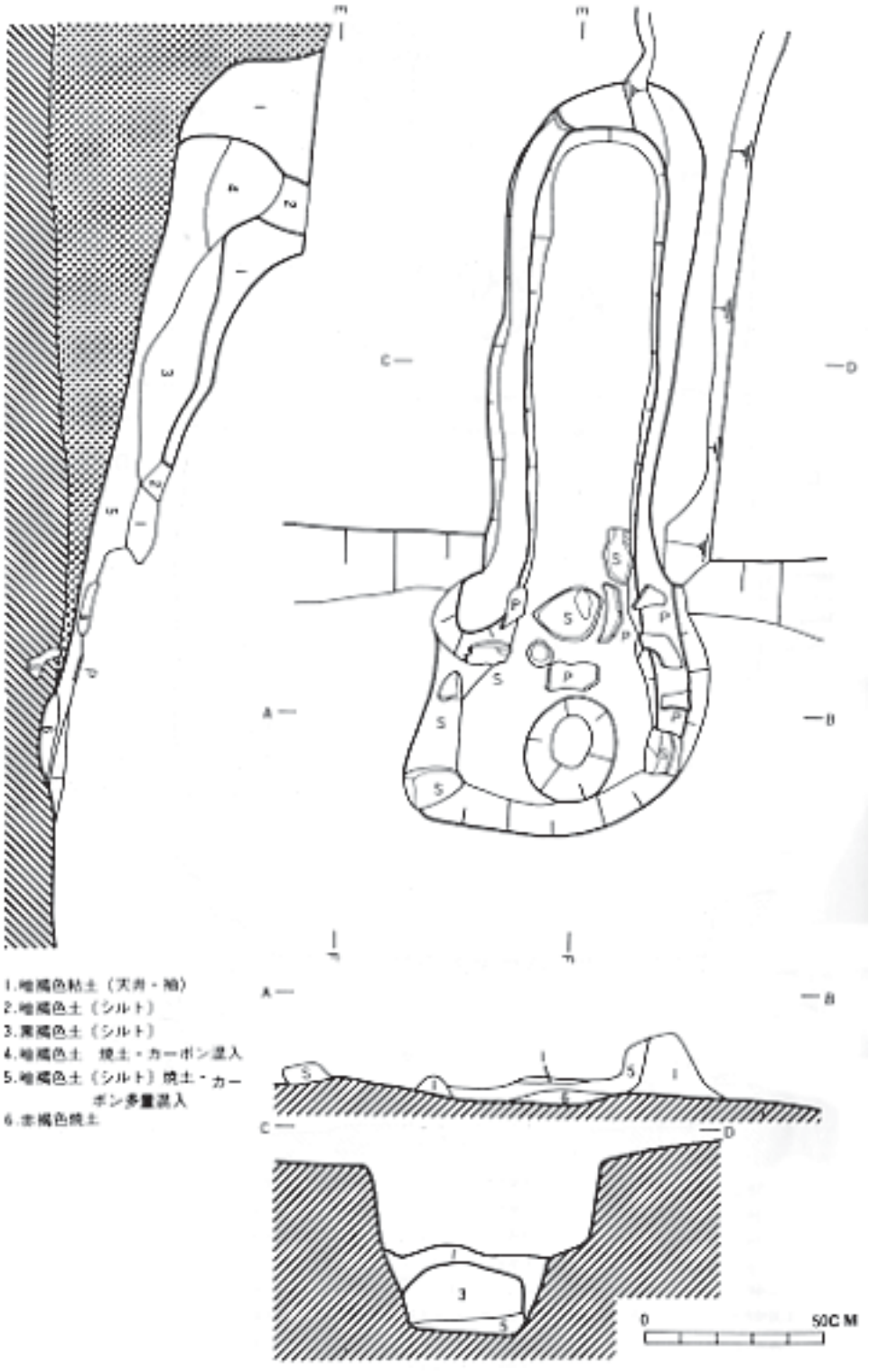
第 309 図　第 48 号住居跡カマド実測図



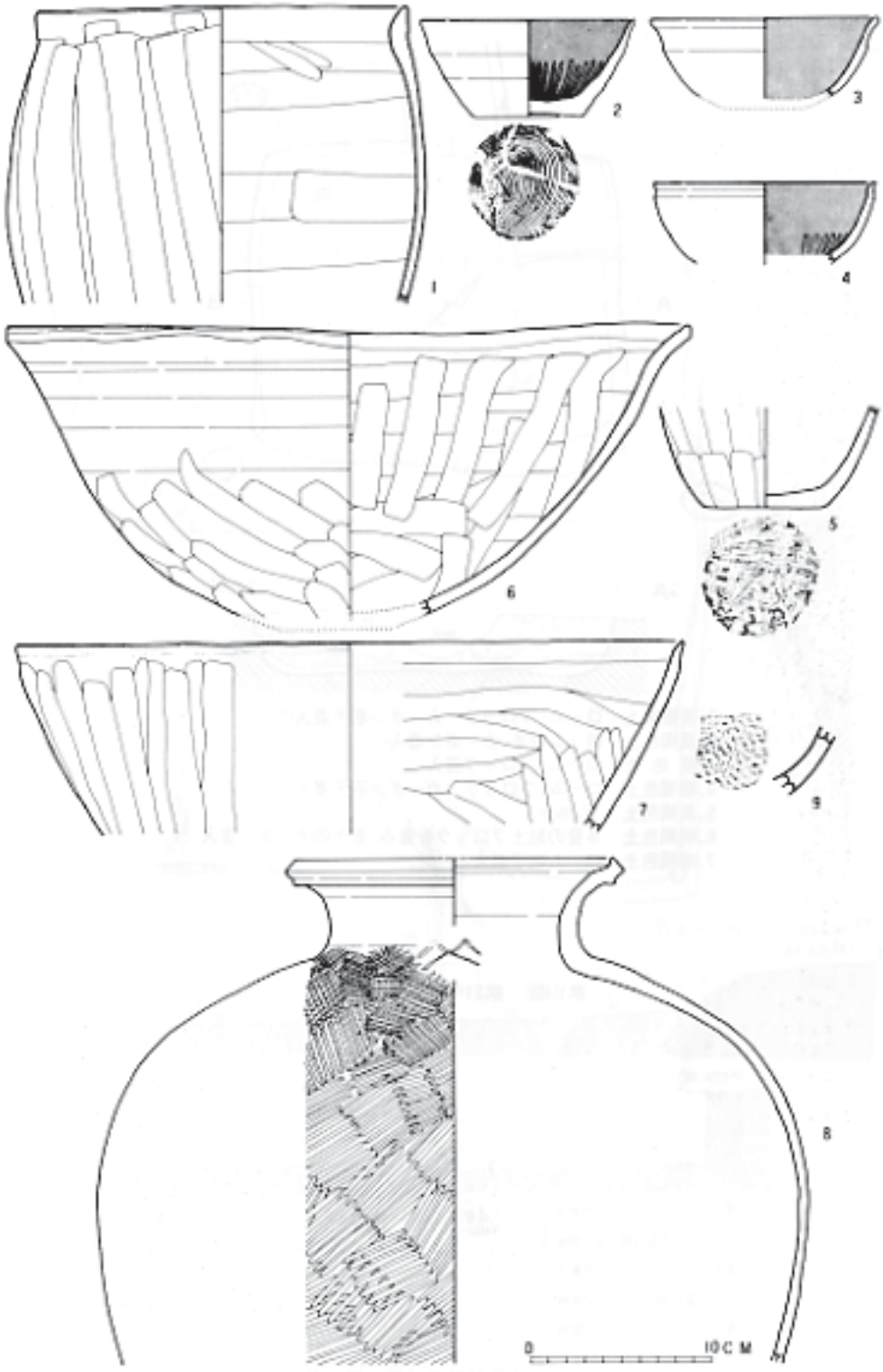
第 310 図　第 48 号住居跡出土遺物



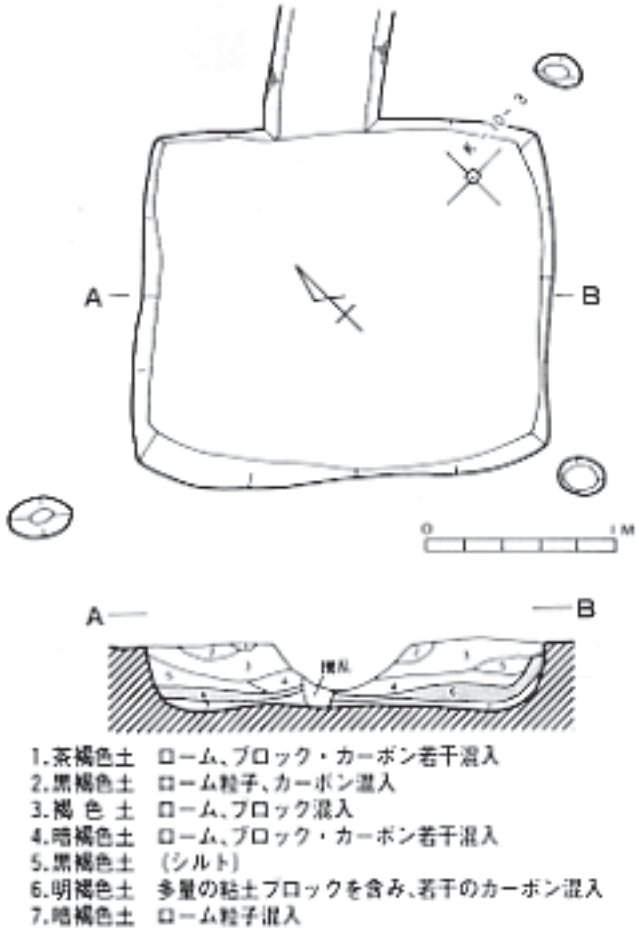
第 311 図　第 49 号住居跡実測図



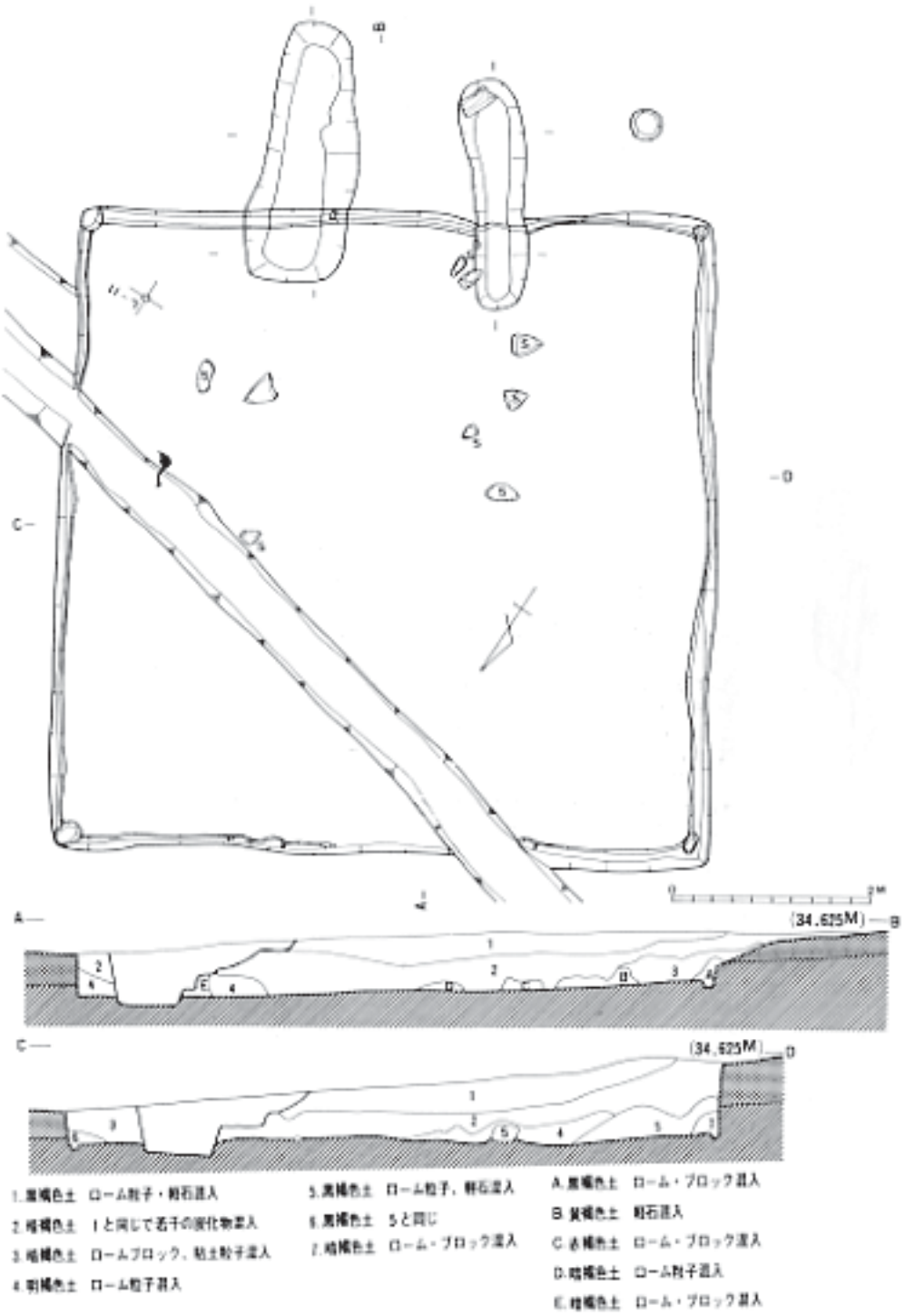
第 312 図　第 49 号住居跡カマド実測図



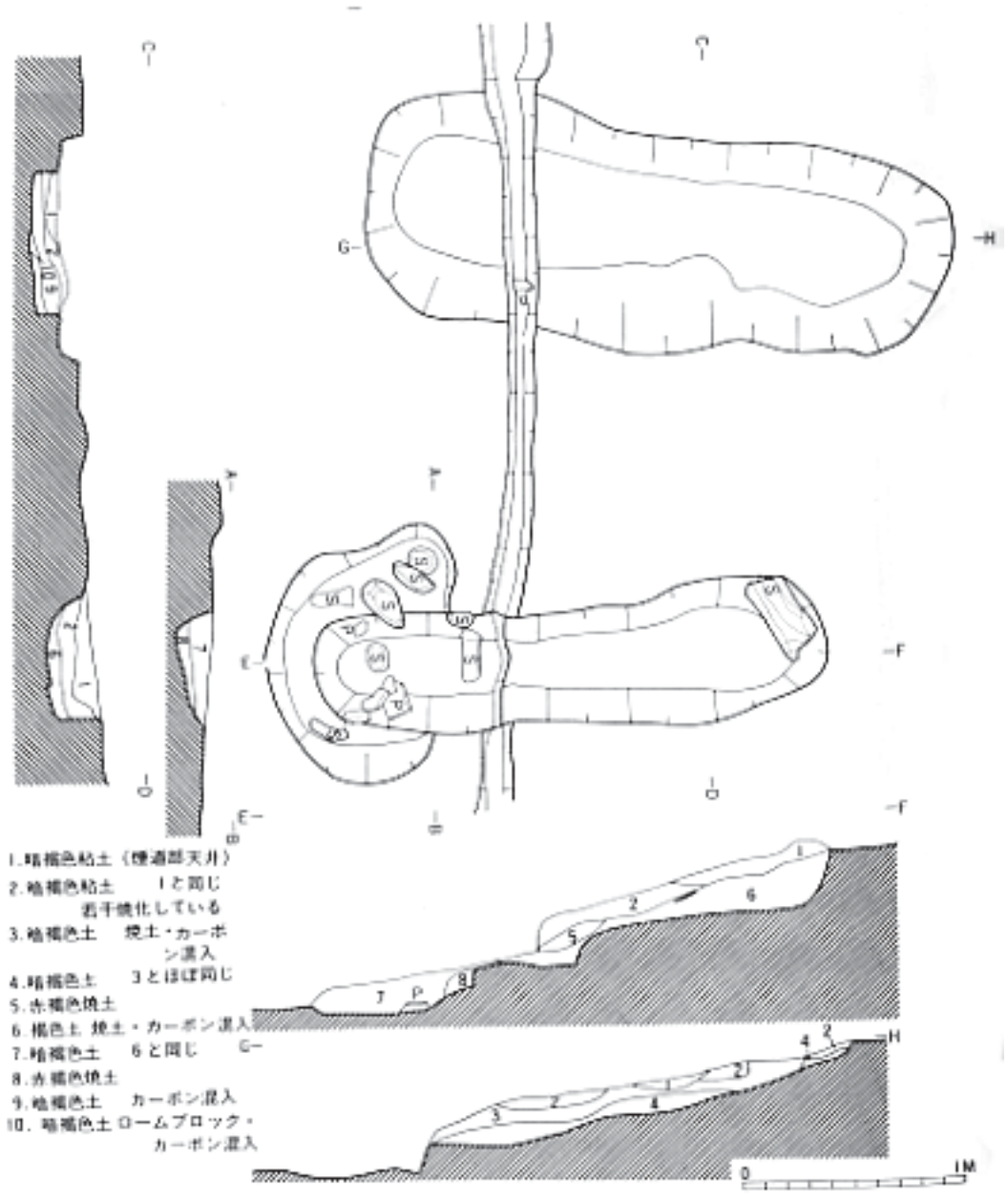
第 313 図　第 49 号住居跡出土遺物



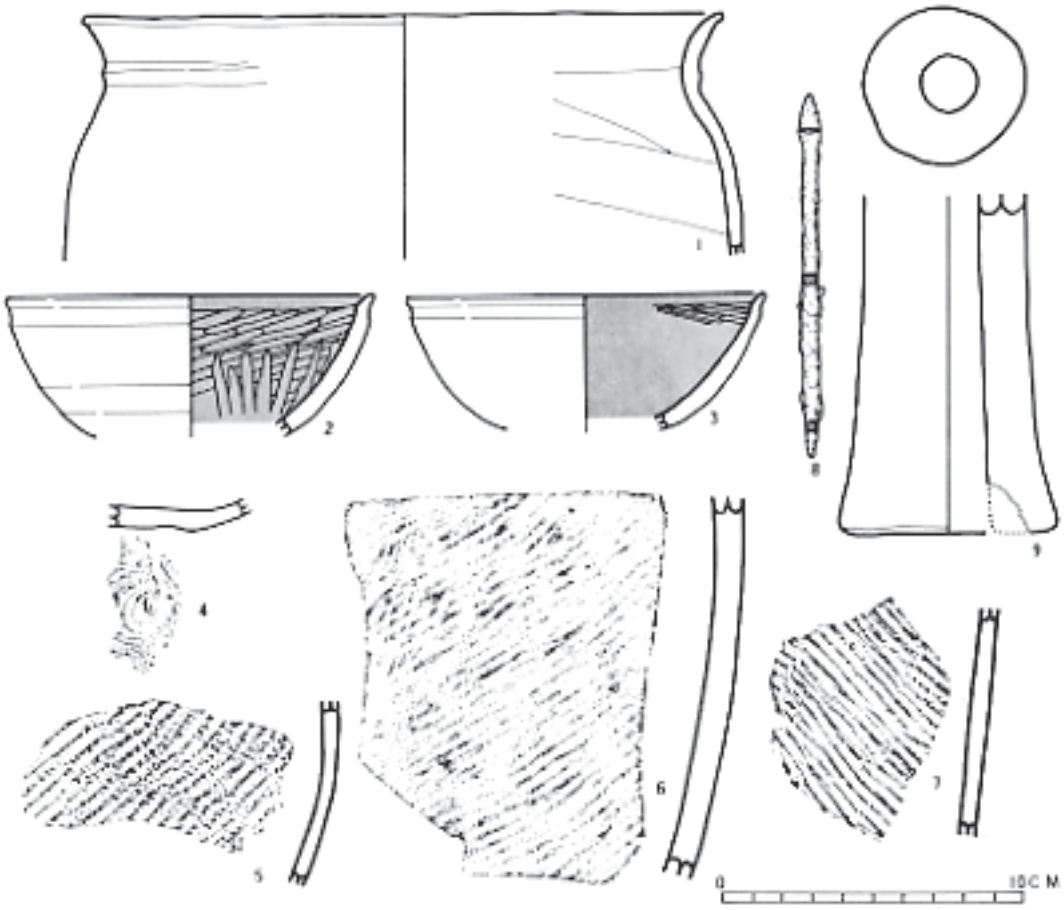
第 314 図　第 51 号住居跡実測図



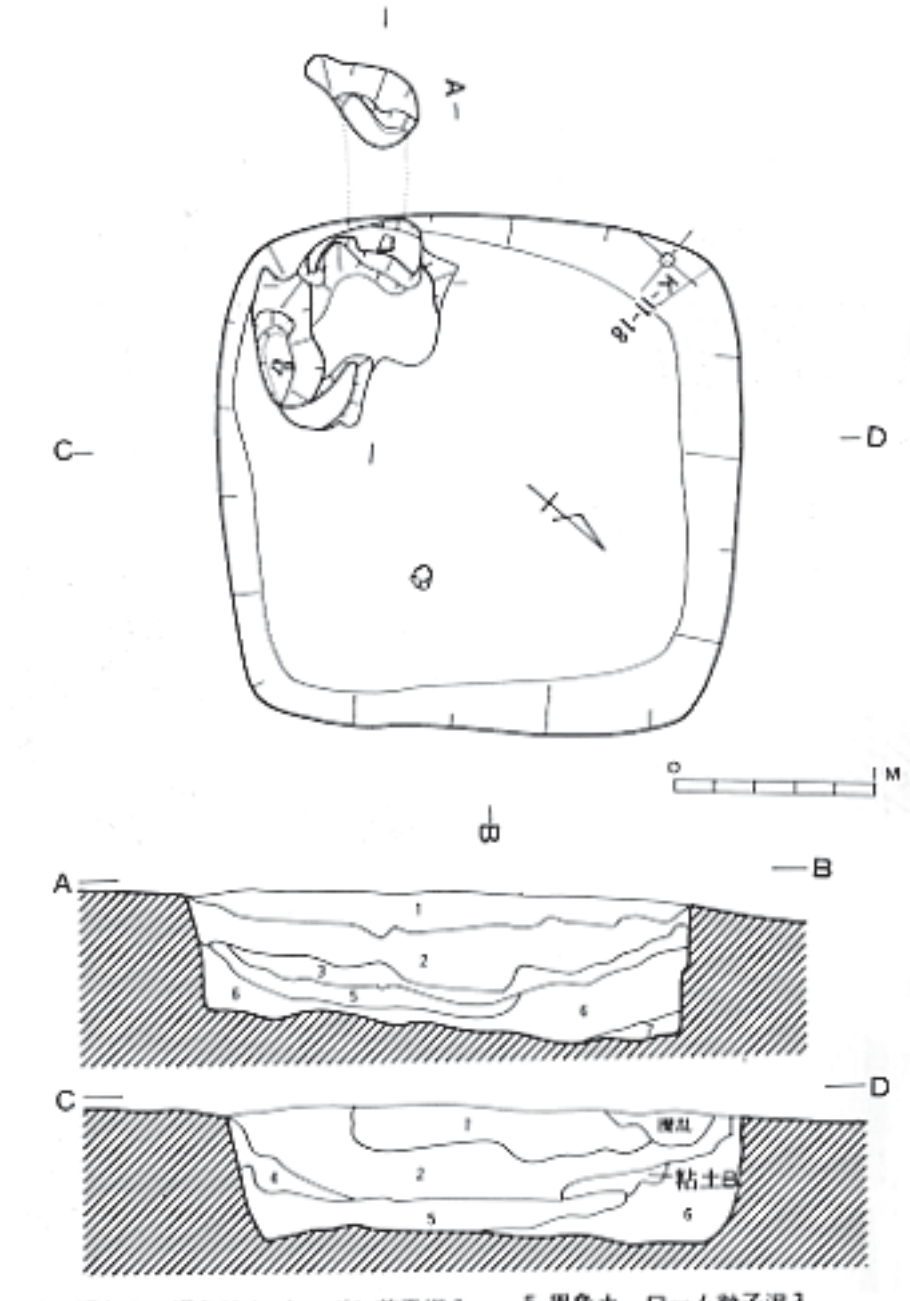
第 315 図　第 51 号住居跡実測図



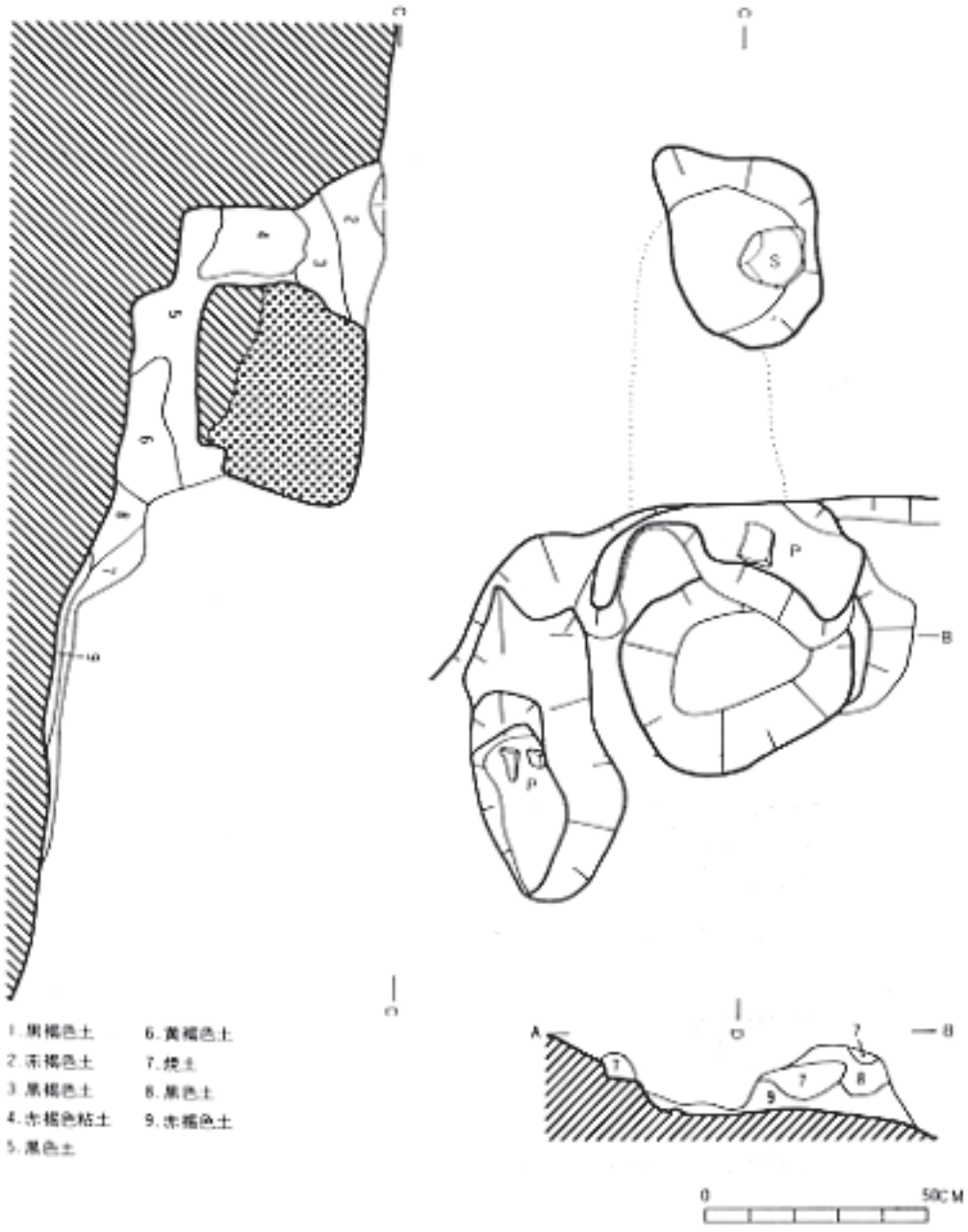
第 316 図　第 51 号住居跡カマド実測図



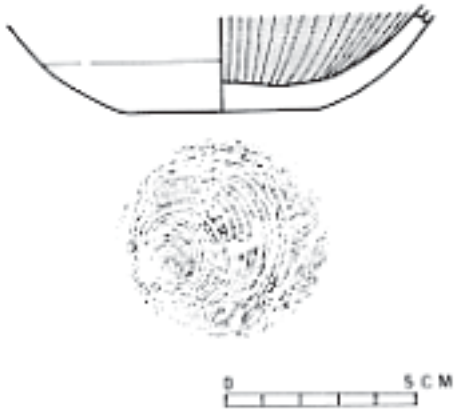
第 317 図　第 51 号住居跡出土遺物



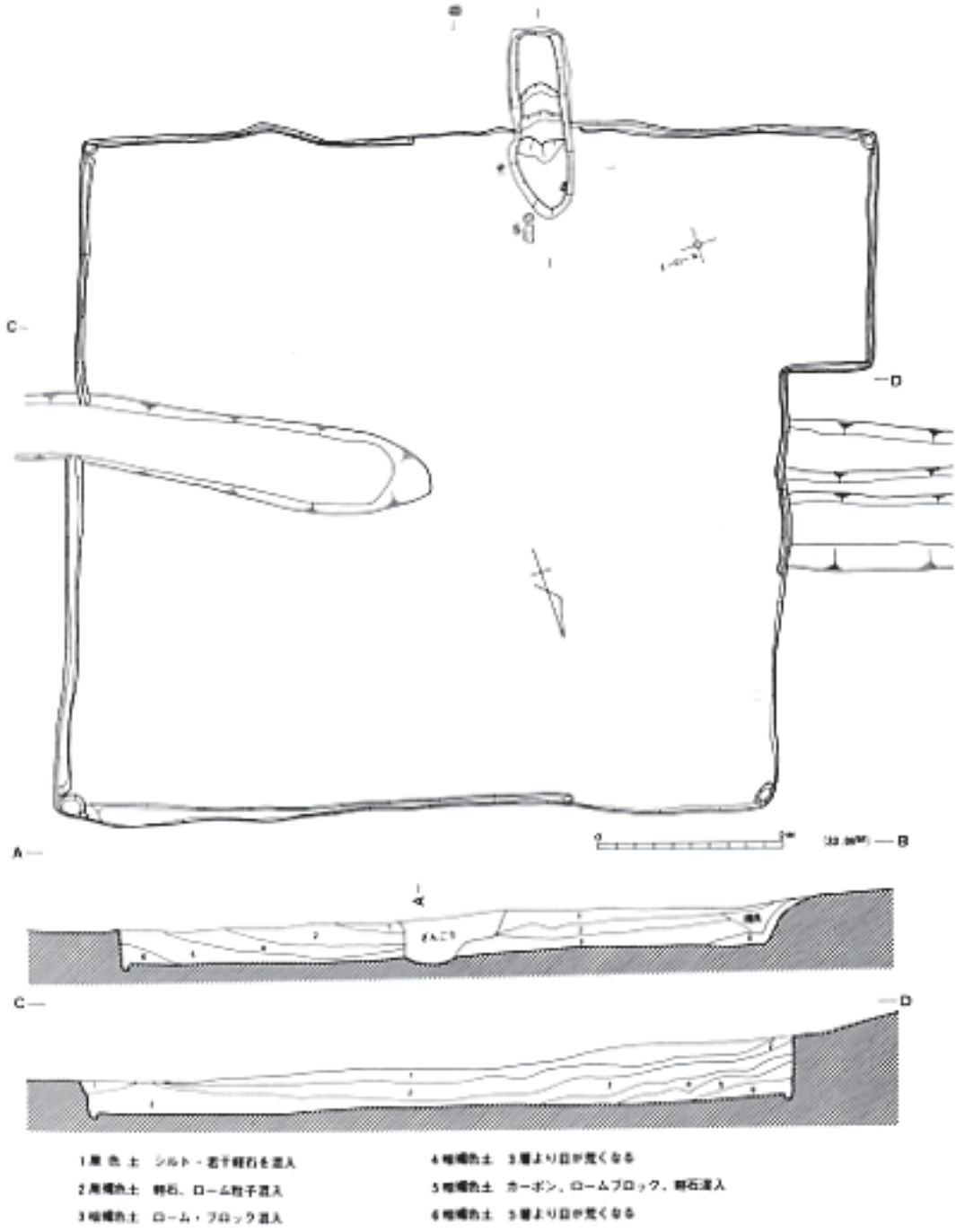
第 318 図　第 52 号住居跡実測図



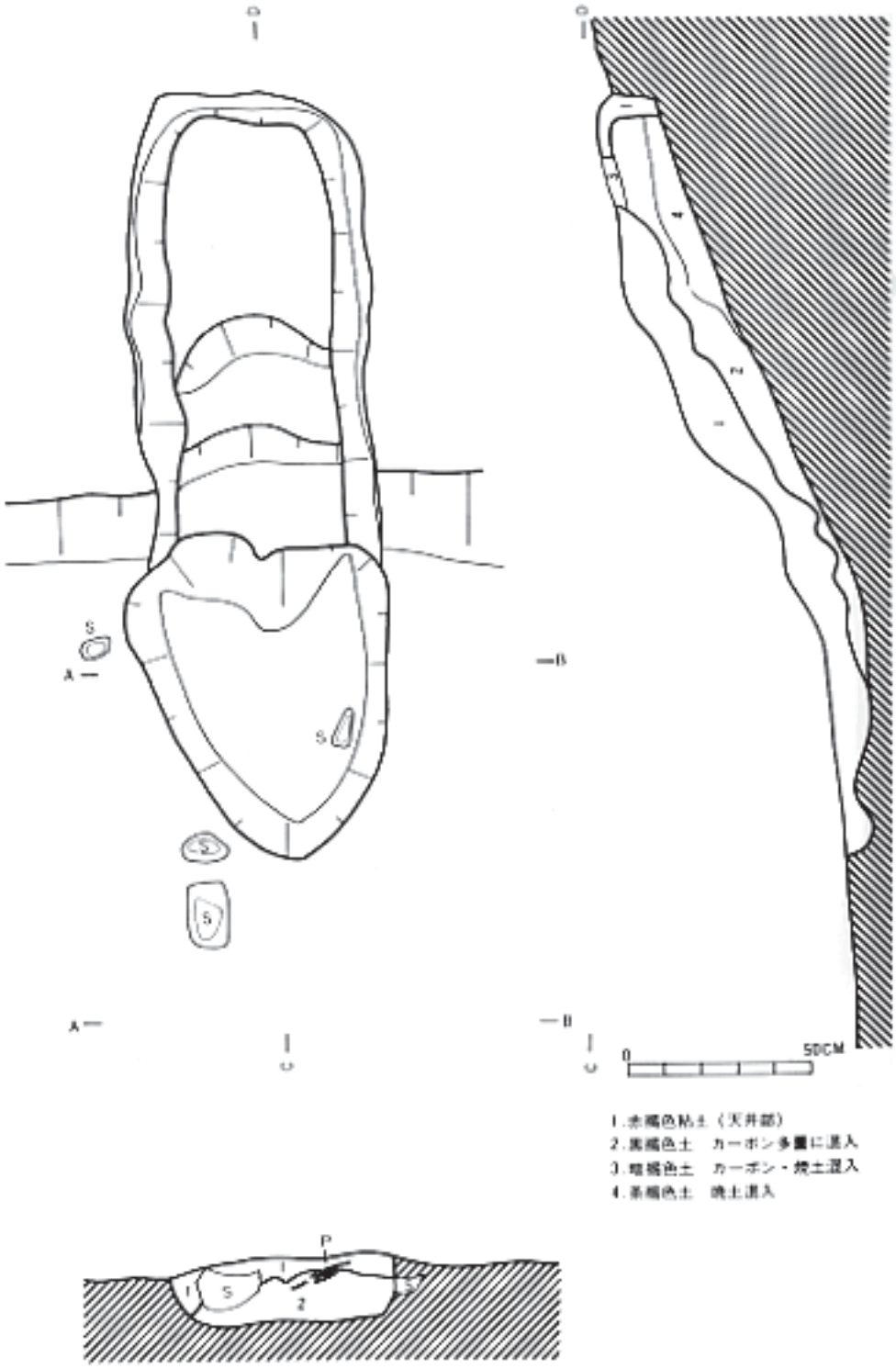
第 319 図　第 52 号住居跡カマド実測図



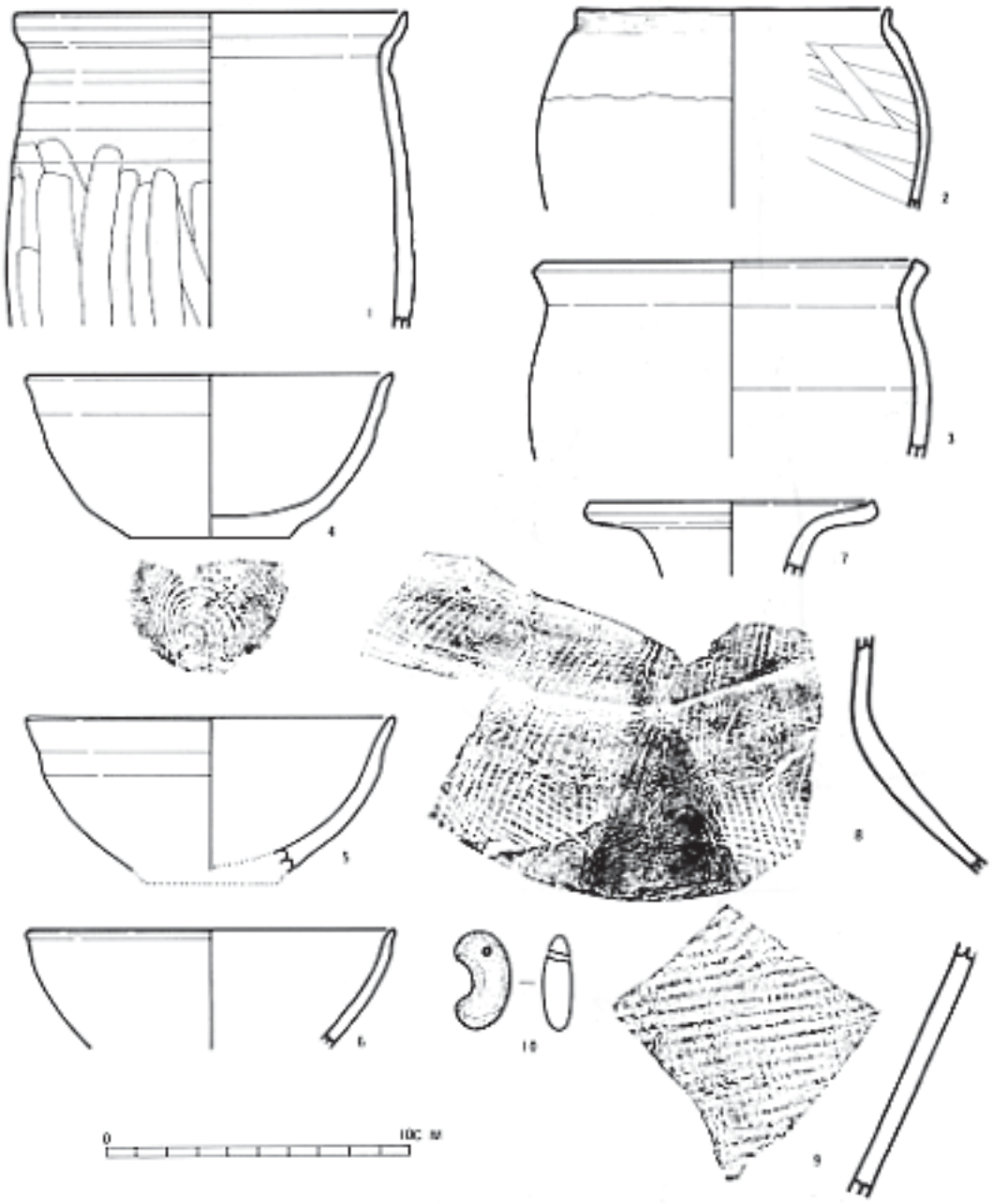
第 320 図　第 52 号住居跡出土遺物



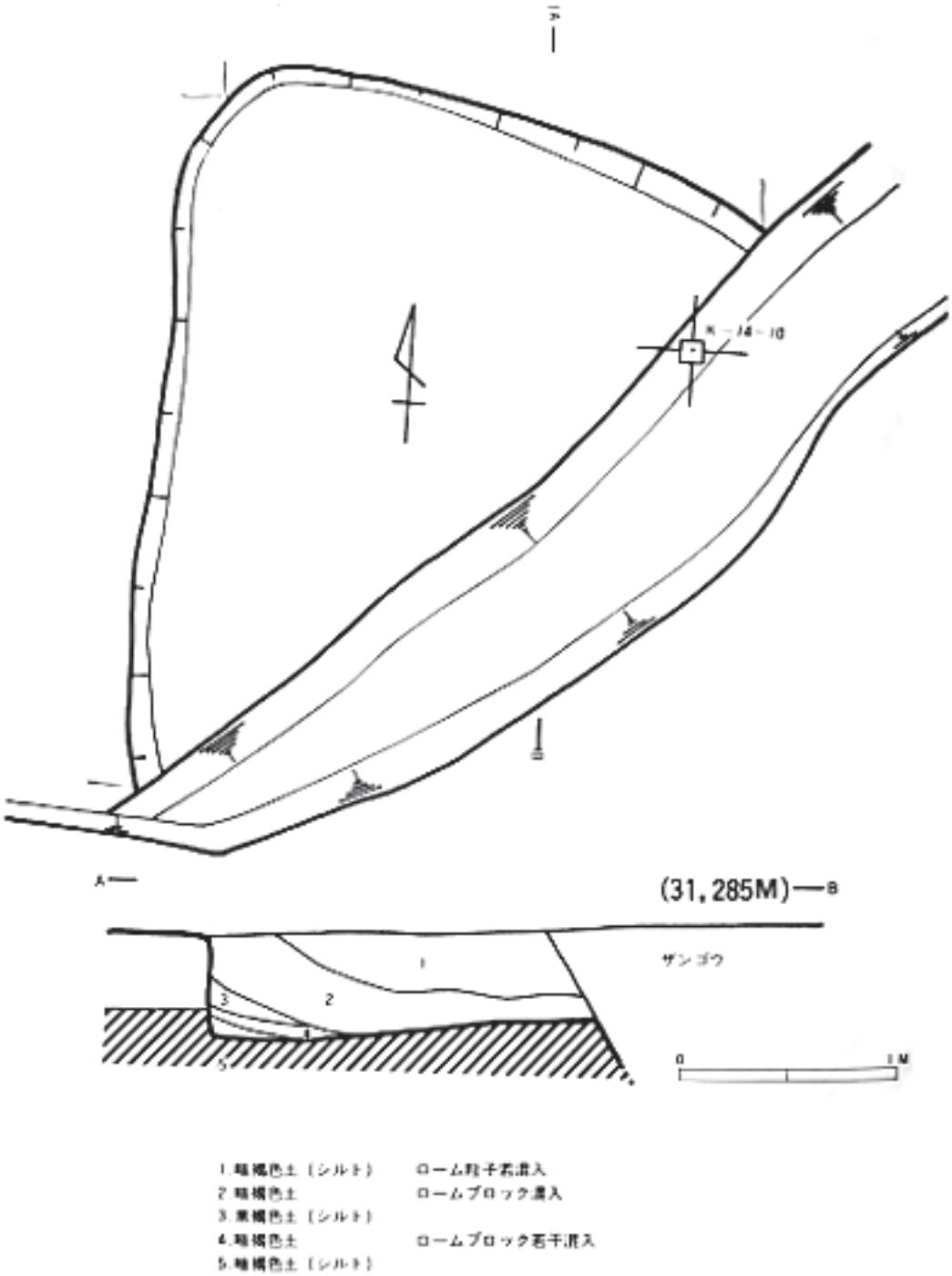
第 321 図　第 53 号住居跡実測図



第 322 図　第 53 号住居跡カマド実測図

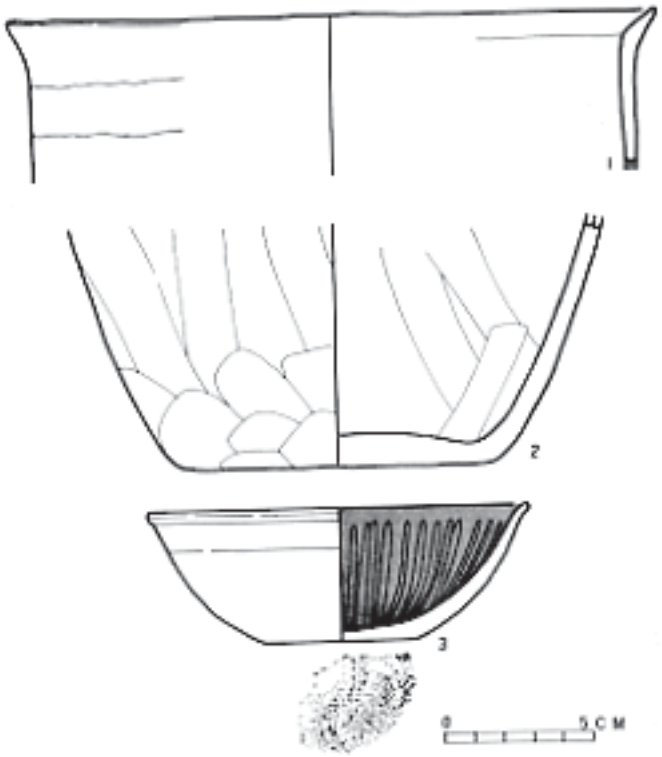


第 323 図　第 53 号住居跡出土遺物

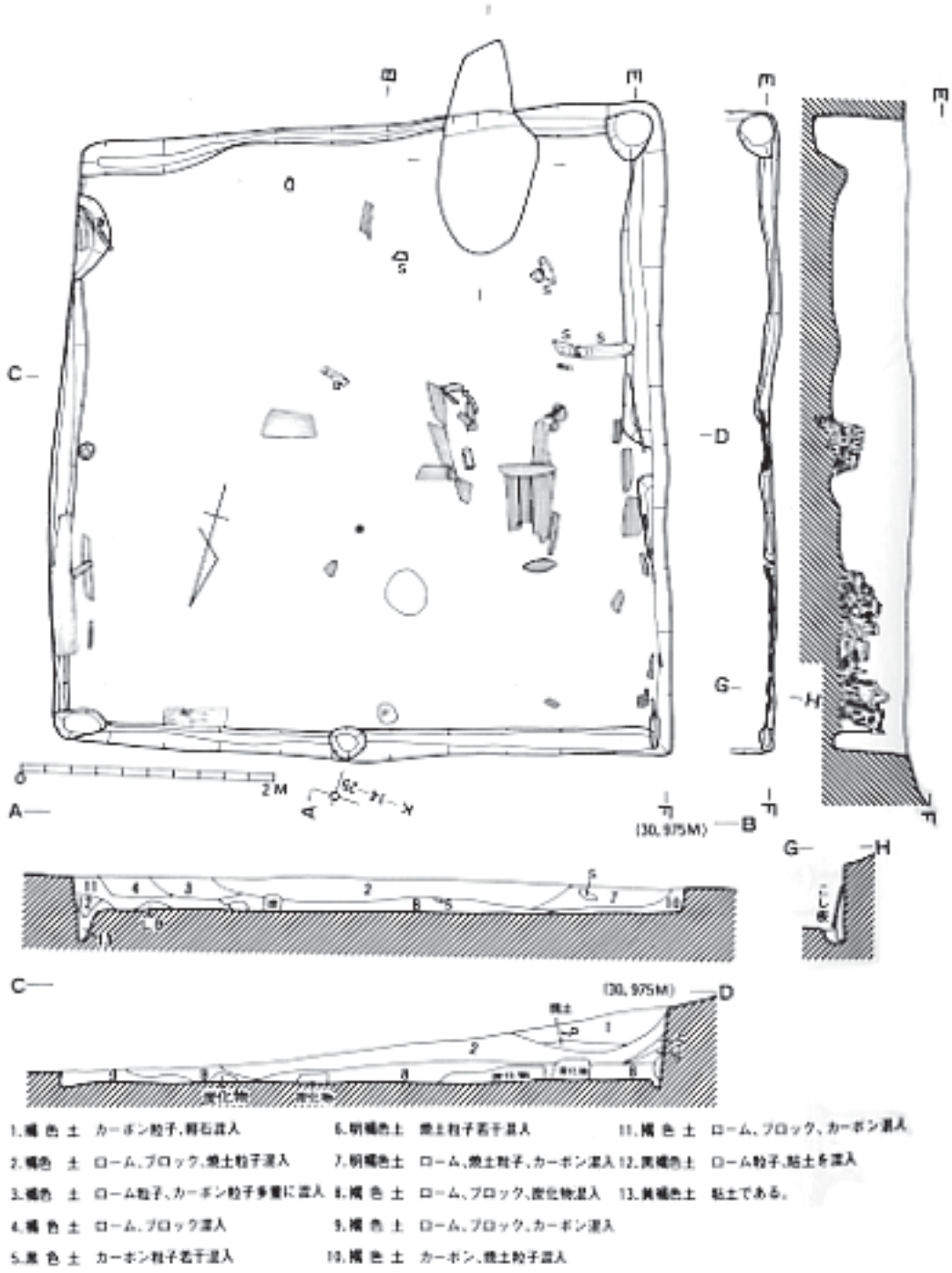


1.暗褐色土（シルト）　ローム粒子若干混入
2.暗褐色土　ロームブロック混入
3.黒褐色土（シルト）
4.暗褐色土　ロームブロック若干混入
5.暗褐色土（シルト）

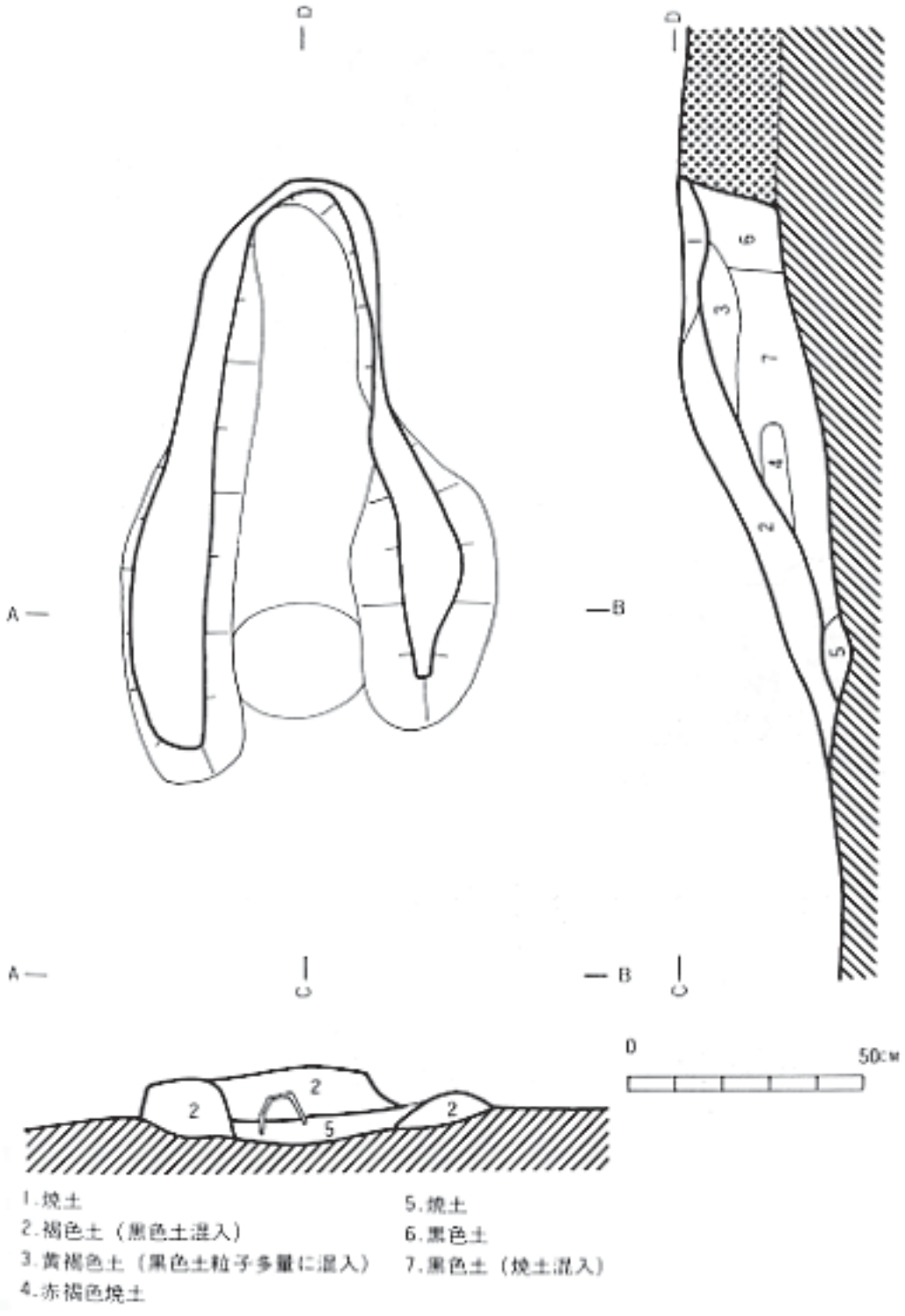
第 324 図　第 54 号住居跡実測図



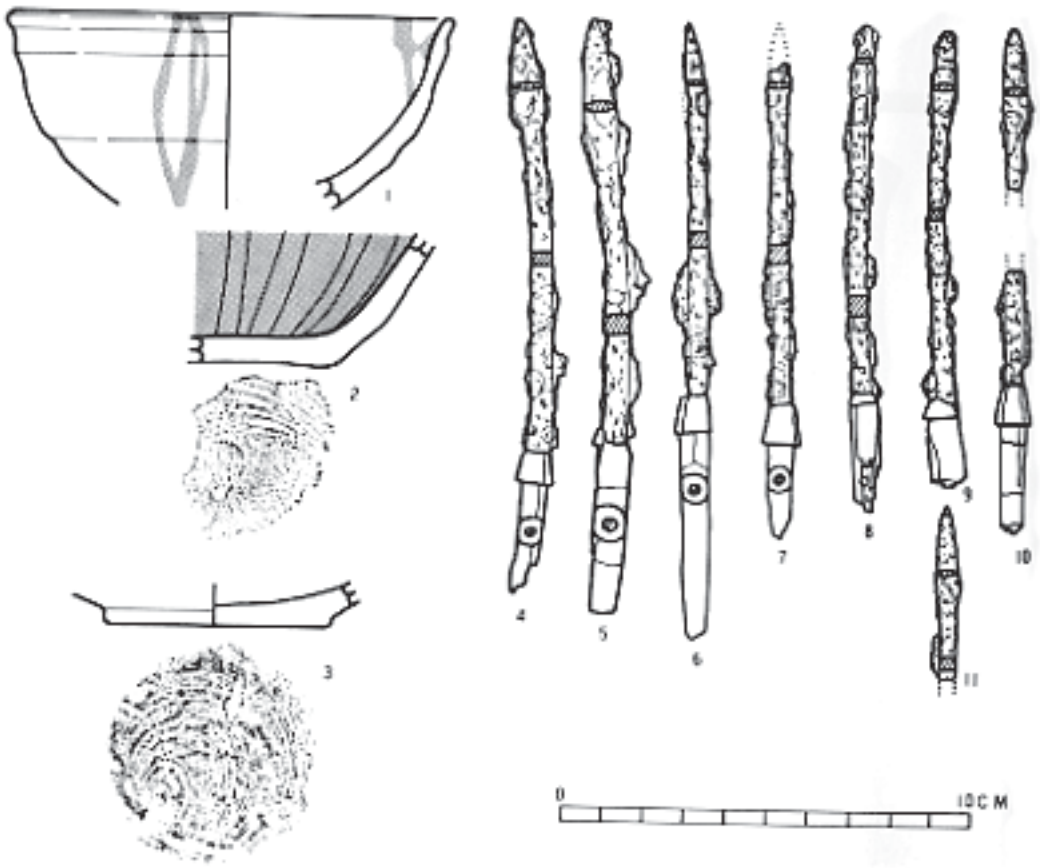
第 325 図　第 54 号住居跡出土遺物



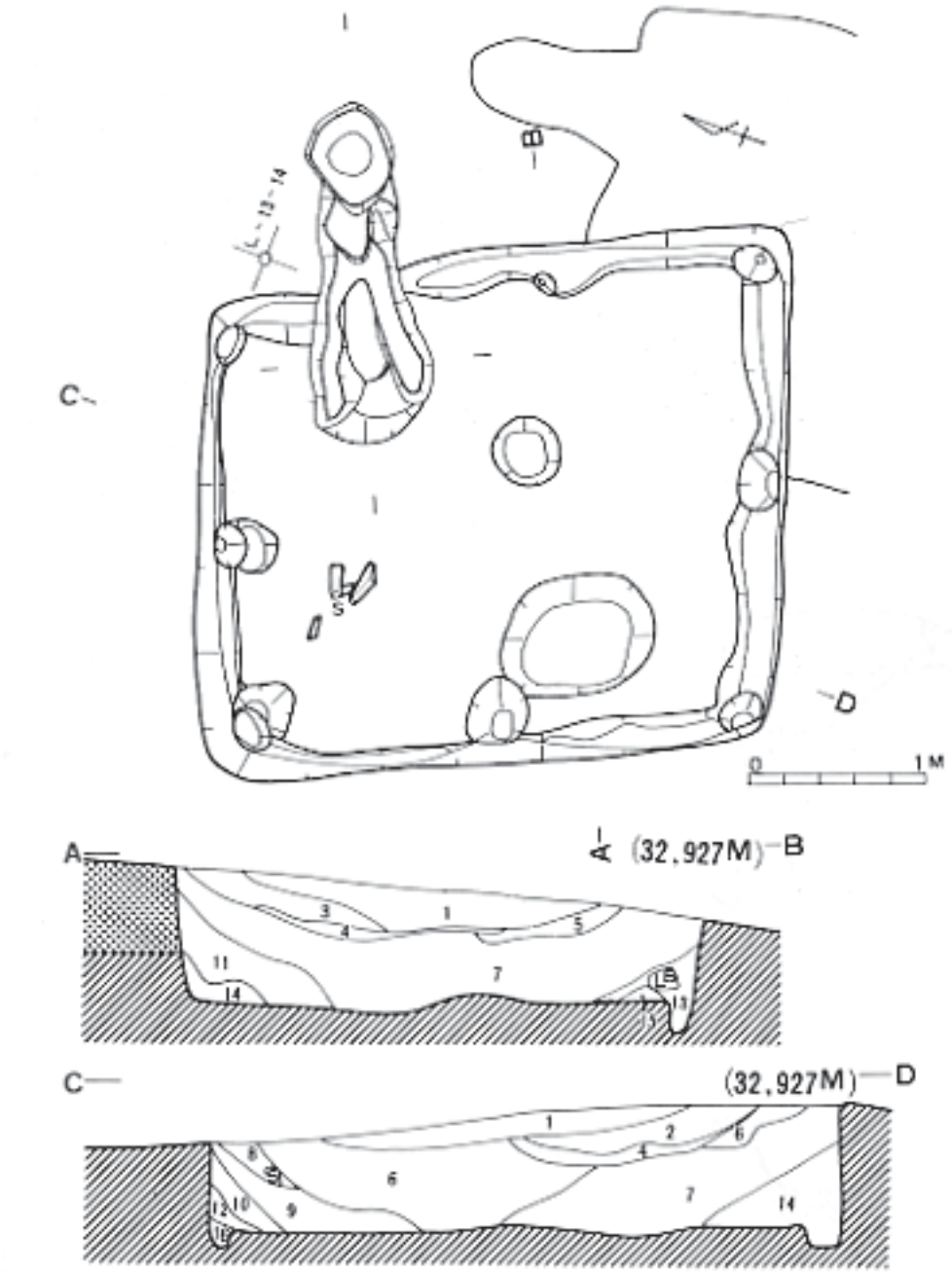
第 326 図　第 55 号住居跡実測図



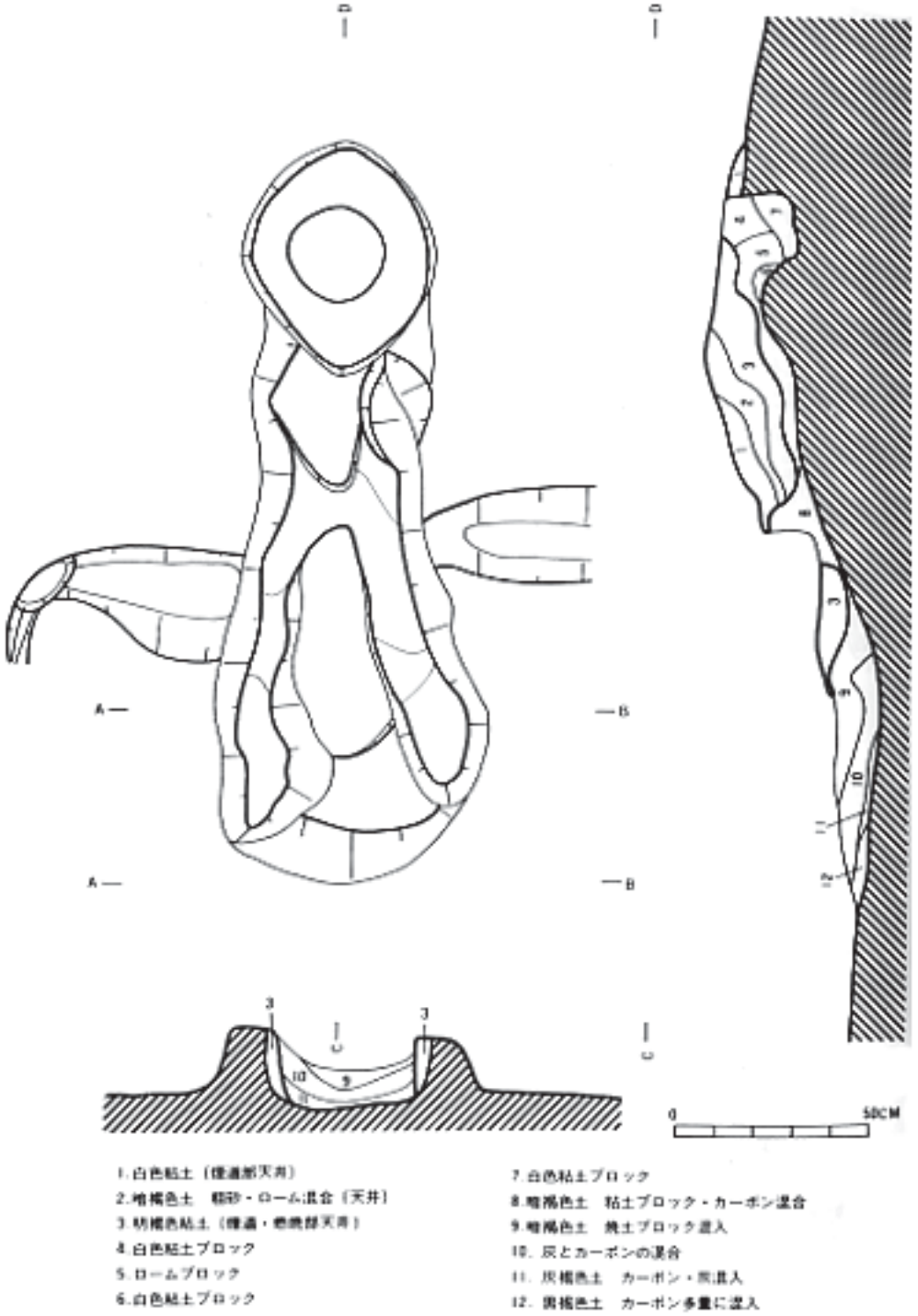
第 327 図　第 55 号住居跡カマド実測図



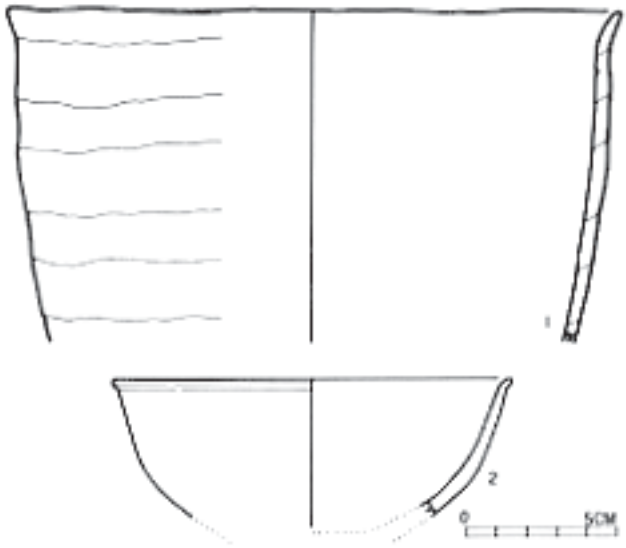
第 328 図　第 55 号住居跡出土遺物



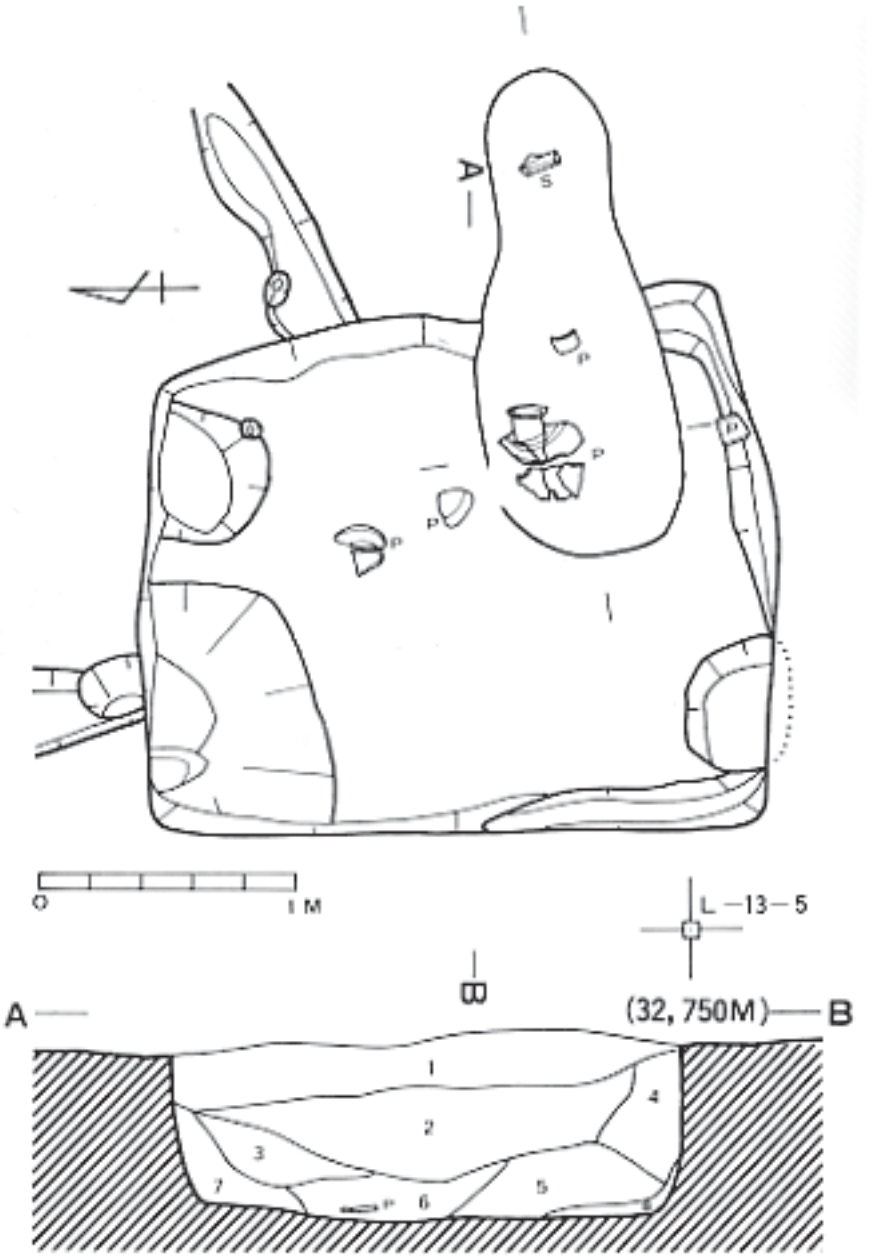
第 329 図　第 56 号住居跡実測図



第 330 図　第 56 号住居跡カマド実測図

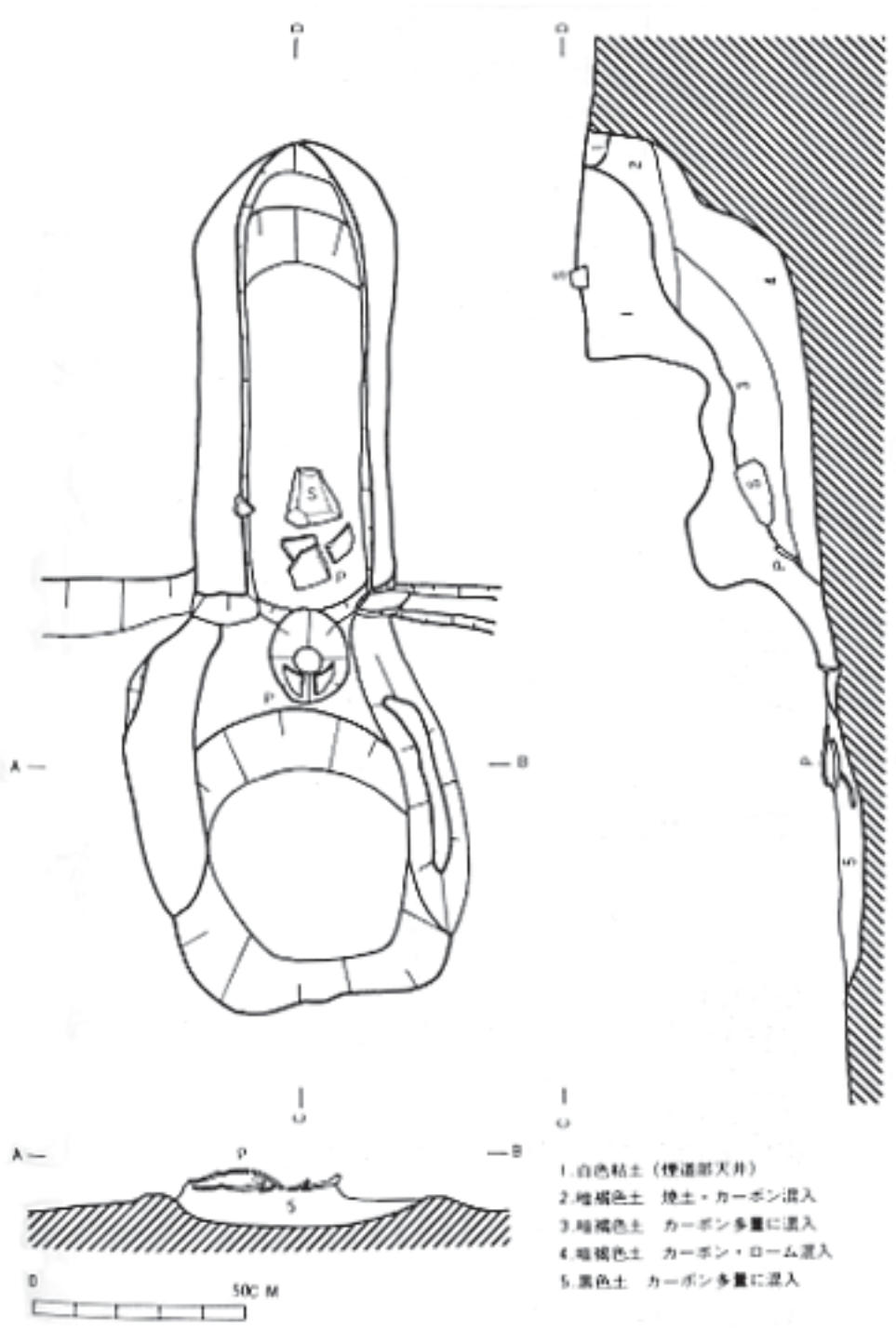


第 331 図　第 56 号住居跡出土遺物



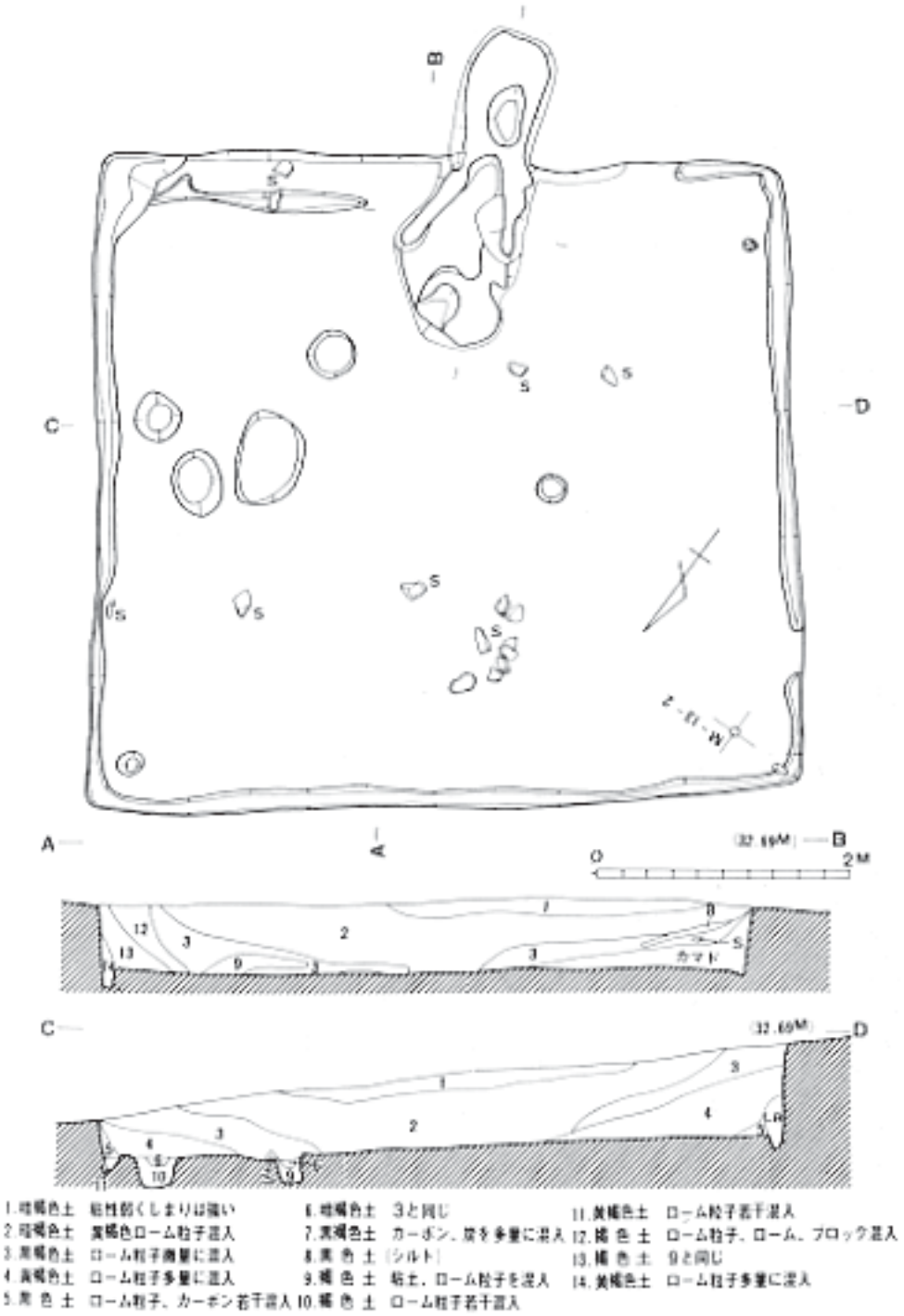
1.暗褐色土　カーボン・ローム粒子・焼土混入
2.暗褐色土　灰・焼土・ローム・ブロック混入
3.暗褐色土　ローム粒子・粘土ブロック混入
4.暗褐色土　ローム粒子混入
5.暗褐色土　ローム粒子、粘土ブロック混入
6.褐 色 土　ローム粒子、粘土ブロック混入
7.暗褐色土　ローム粒子、カーボン混入
8.黒褐色土　ローム粒子、軽石混入

第 332 図　第 57 号住居跡実測図

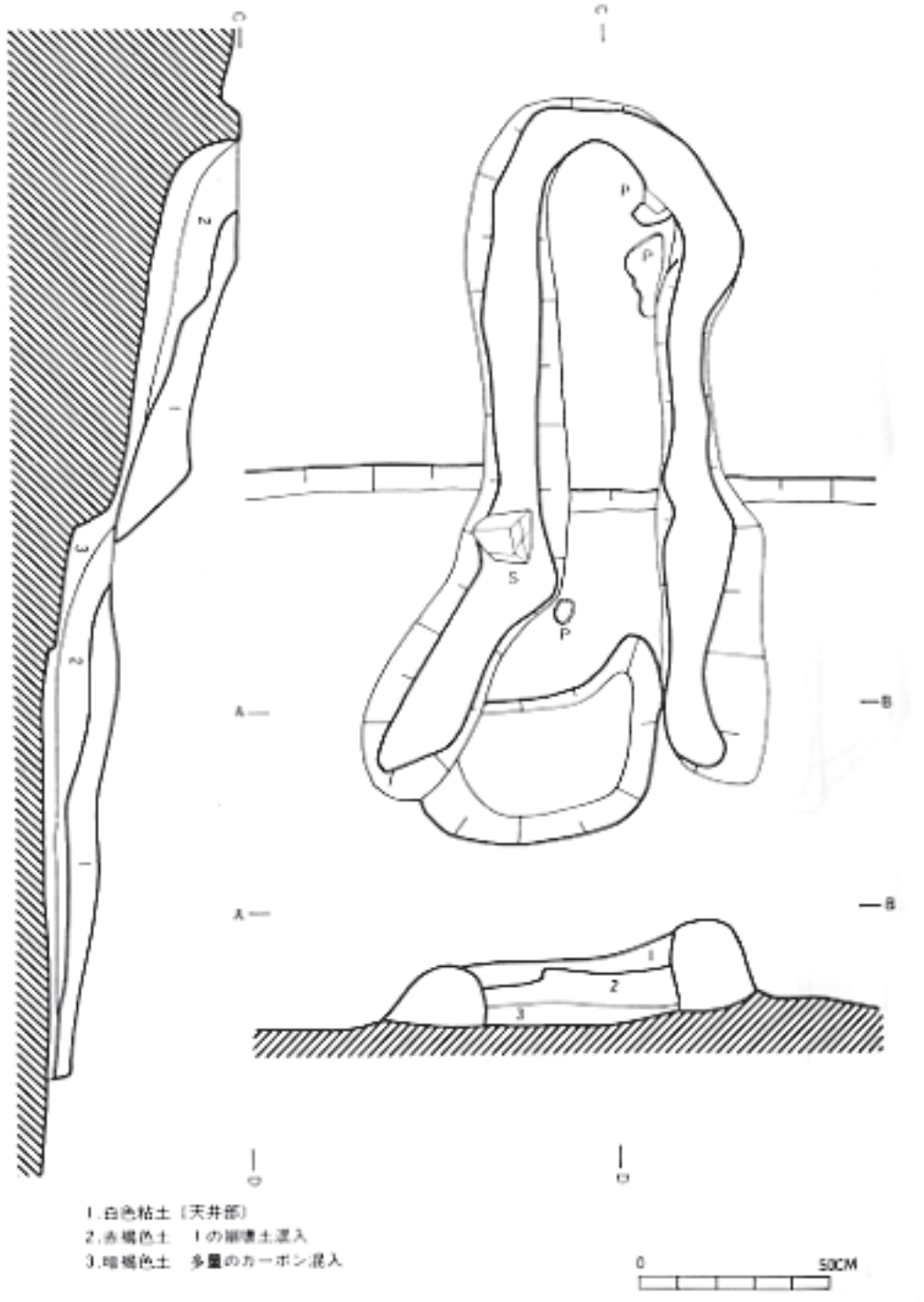


第 334 図　第 57 号住居跡カマド実測図

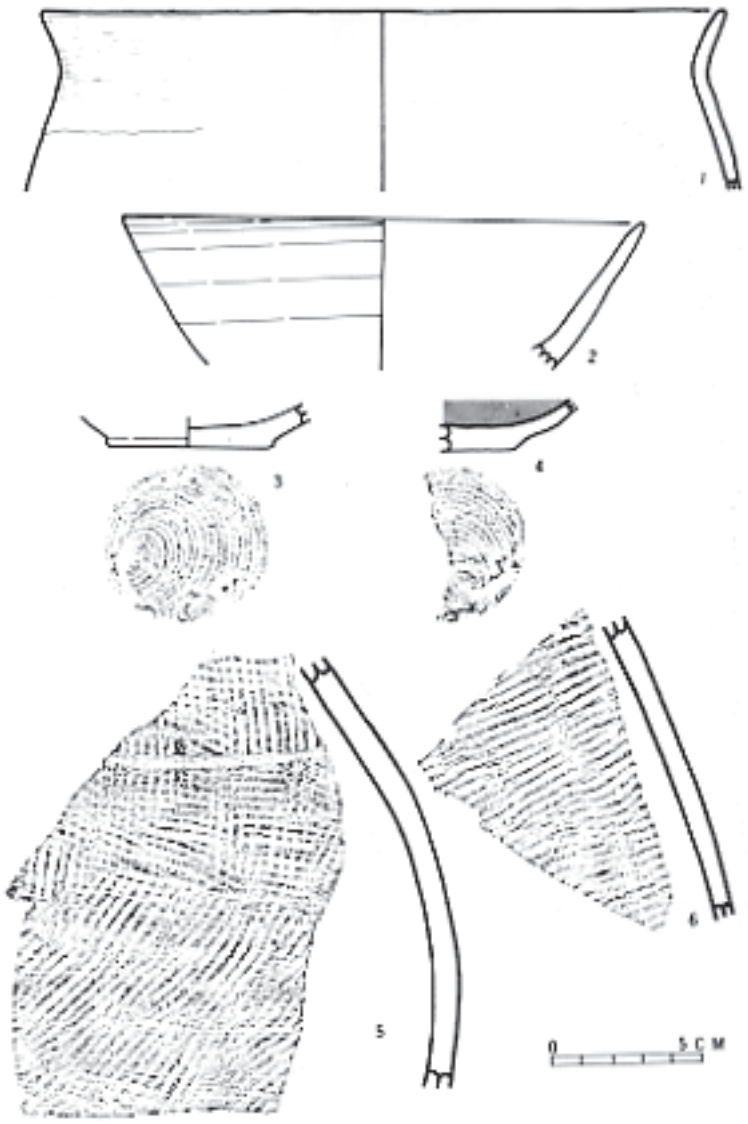
第 335 図　第 57 号住居跡出土遺物



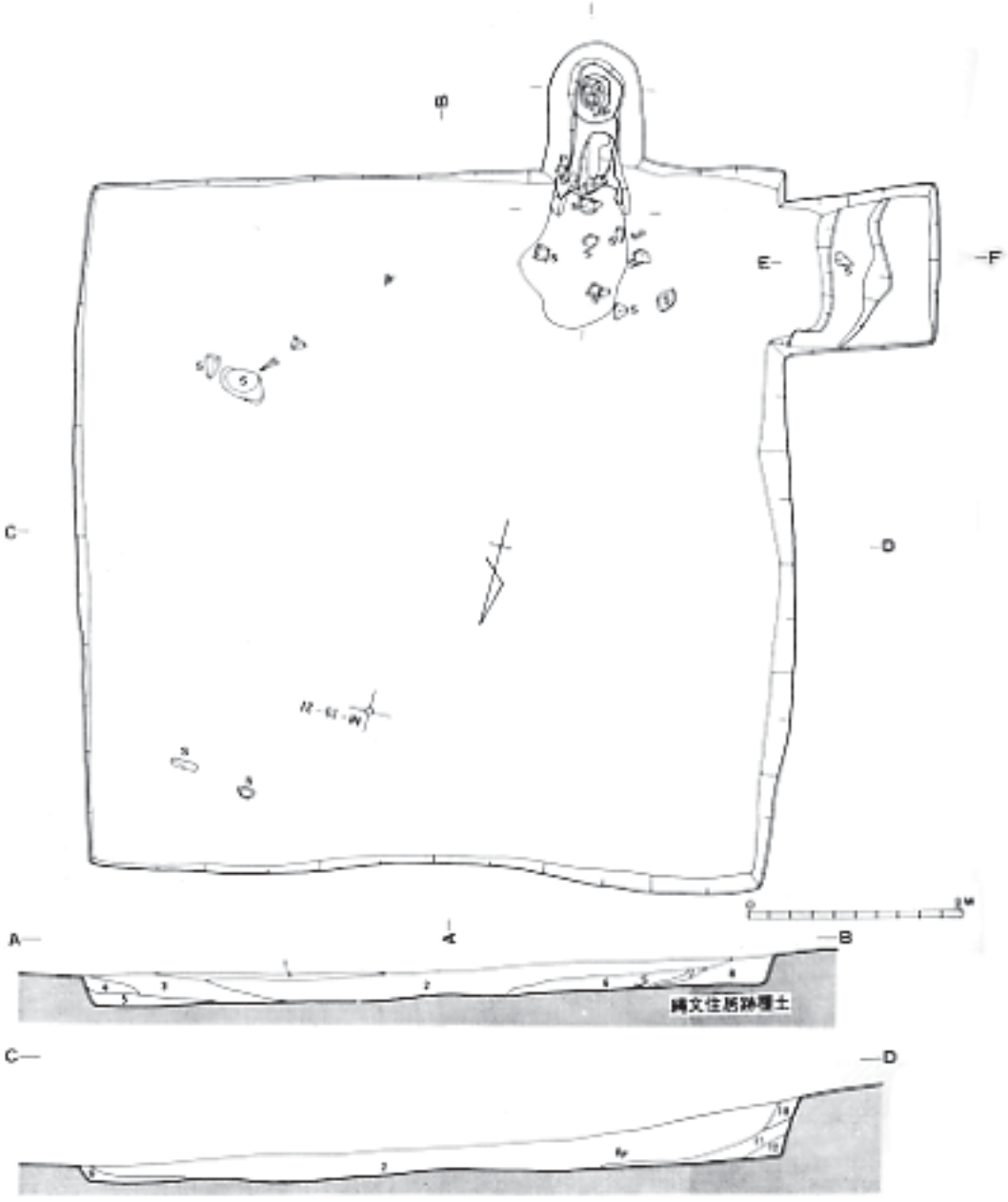
第 336 図　第 58 号住居跡実測図



第 337 図　第 58 号住居跡カマド実測図

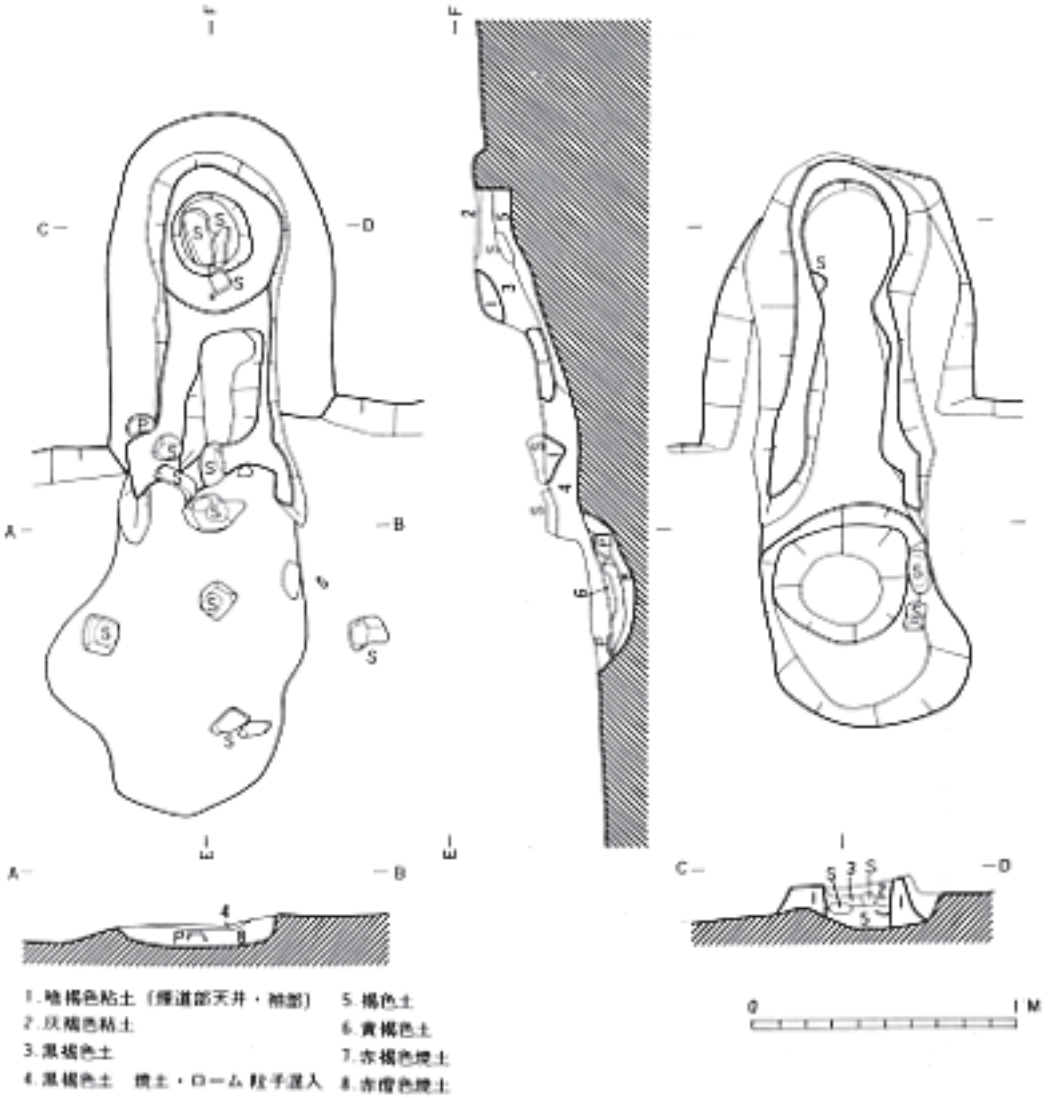


第 338 図　第 58 号住居跡出土遺物

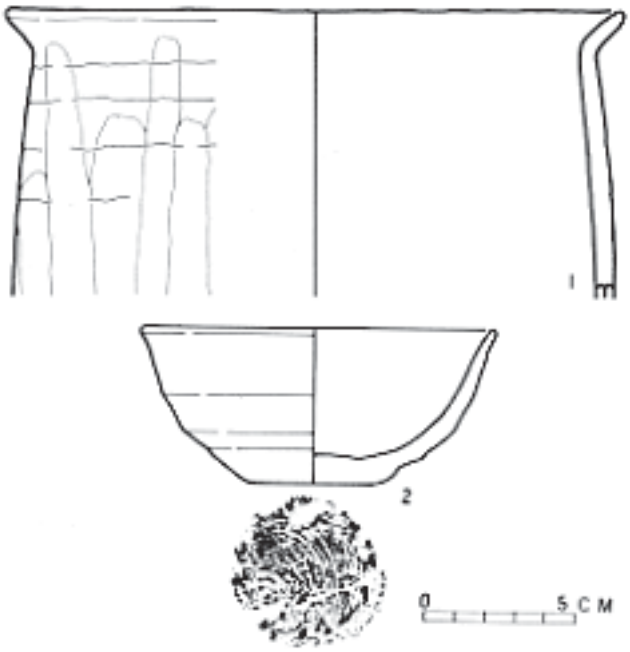


1. 暗褐色土　ローム粒子混入
2. 暗褐色土　ローム粒子、焼土、カーボン混入
3. 暗褐色土　ローム粒子、ロームブロック、カーボン混入
4. 暗褐色土　火山灰混入
5. 黒褐色土　粘土粒子、火山灰粒子混入
6. 黒褐色土　（シルト）
7. 暗褐色土　ローム粒子、粘石混入
8. 暗褐色土　ローム粒子、粘土ブロック混入
9. 暗褐色土　ローム粒子、ロームブロックが多量に混入
10. 黒 色 土　混入物なし
11. 黒褐色土　ローム粒子、粘石混入
12. 黒褐色土　粘土粒子、粘石混入

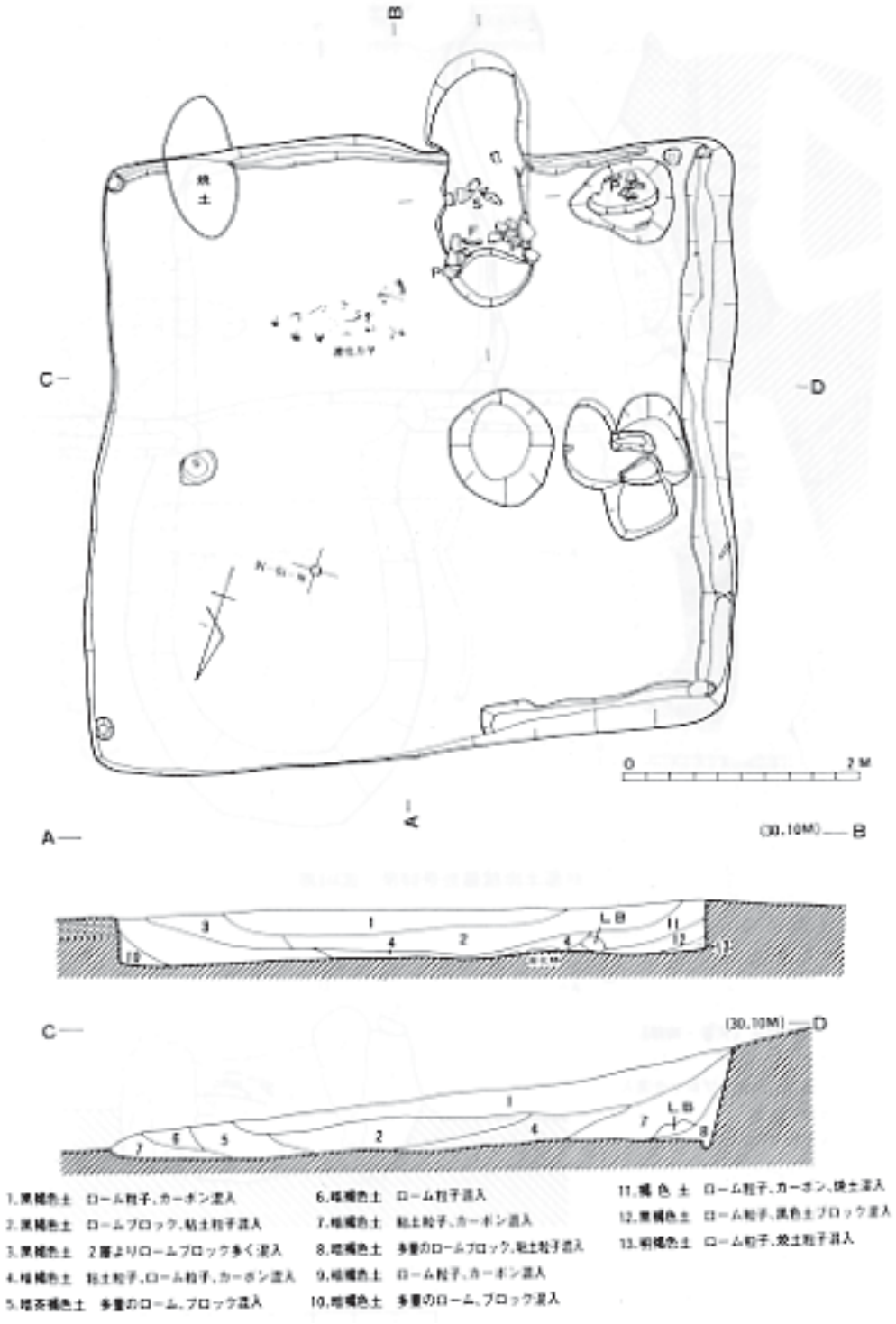
第 339 図　第 59 号住居跡実測図



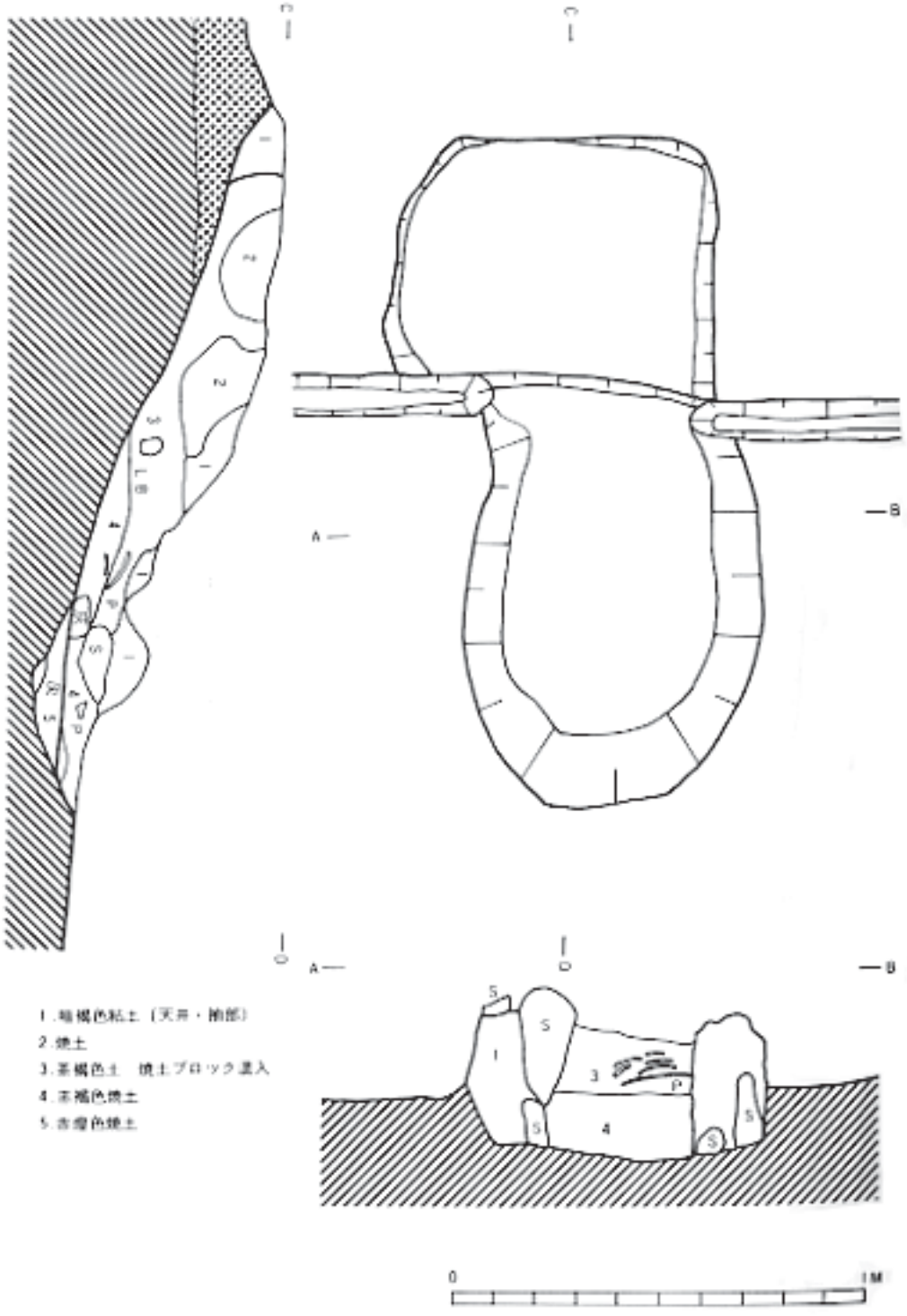
第 340 図　第 59 号住居跡カマド実測図



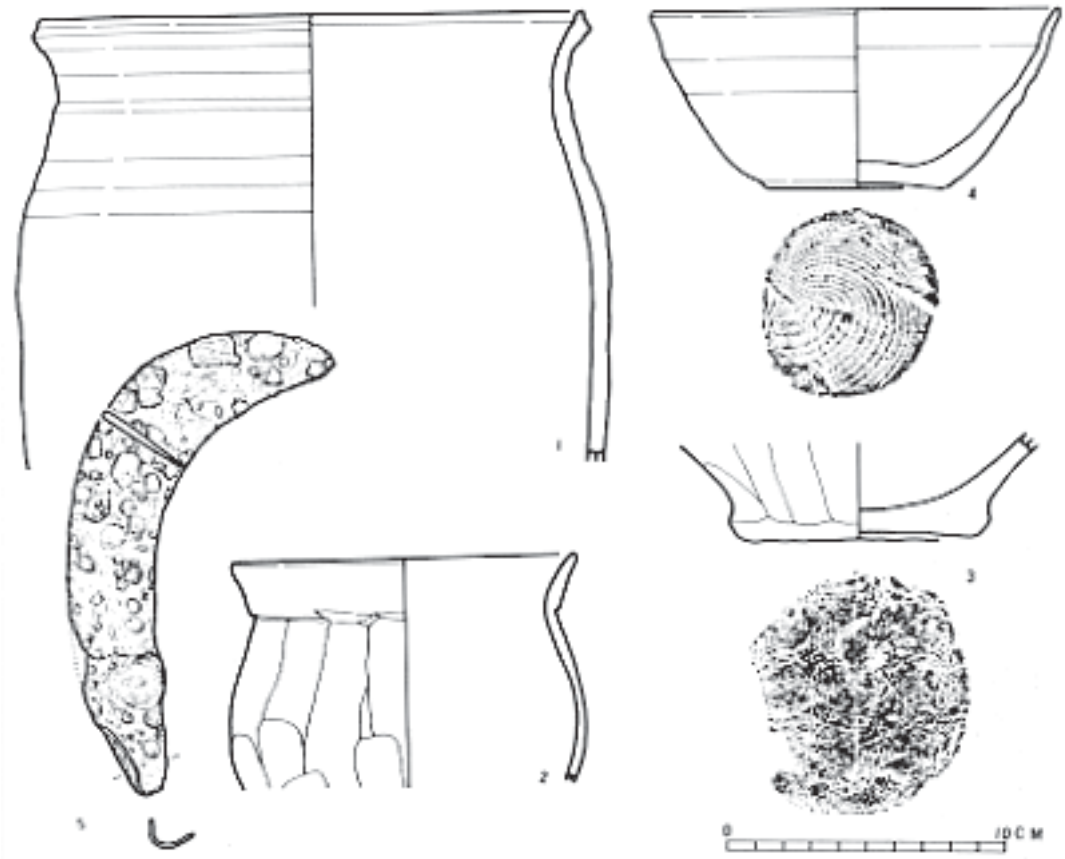
第 341 図　第 59 号住居跡出土遺物



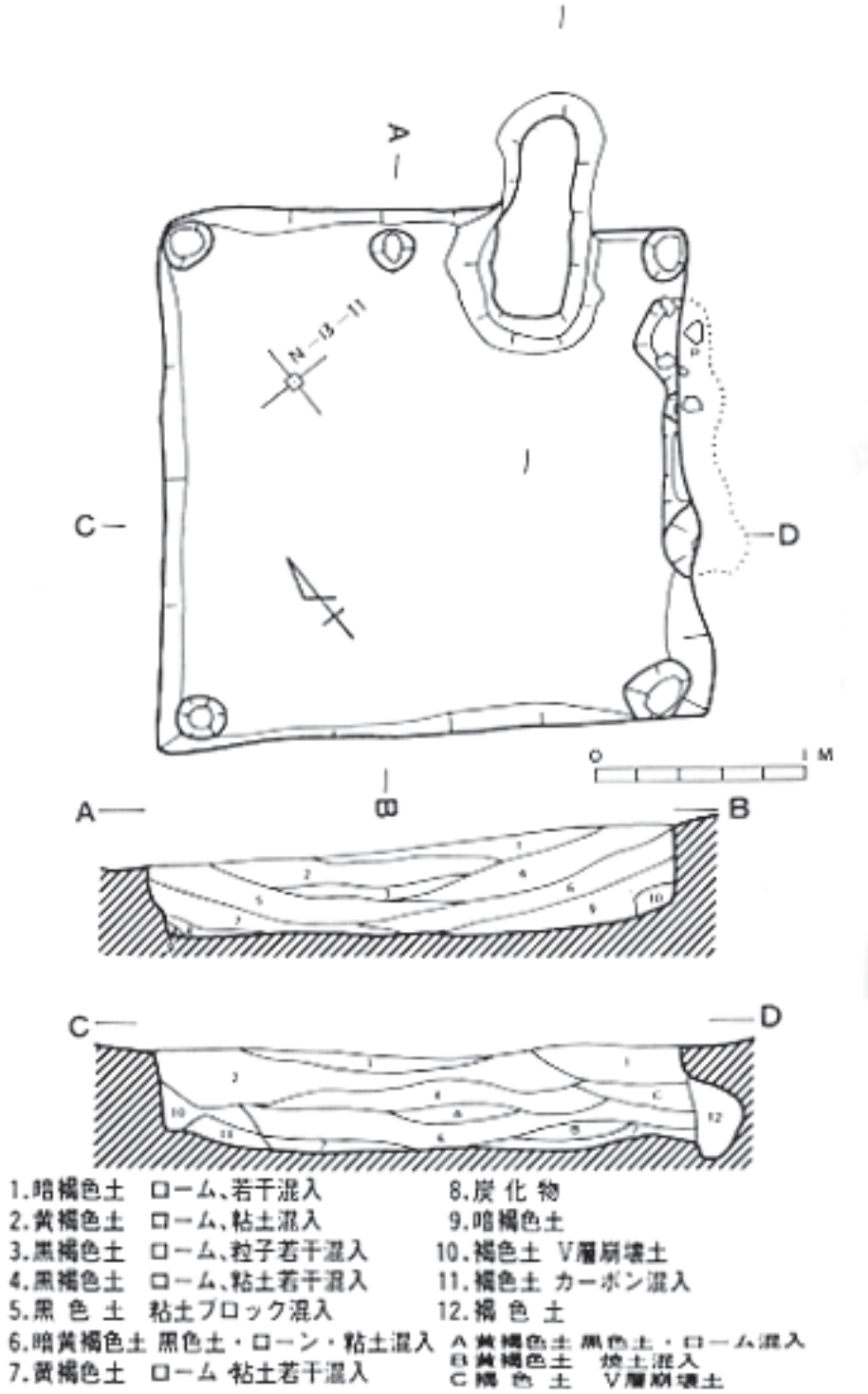
第 342 図　第 60 号住居跡実測図



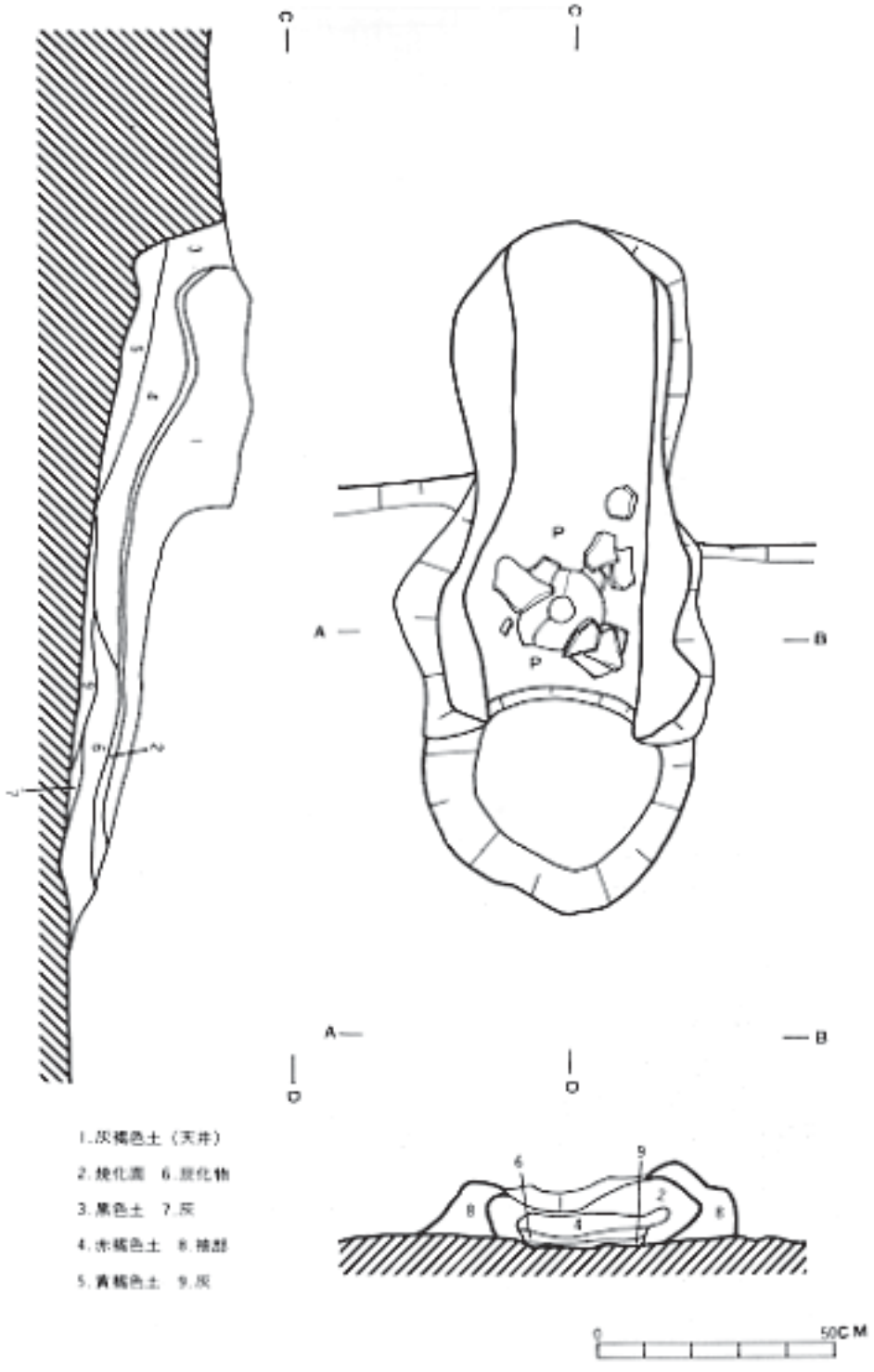
第 343 図　第 60 号住居跡カマド実測図



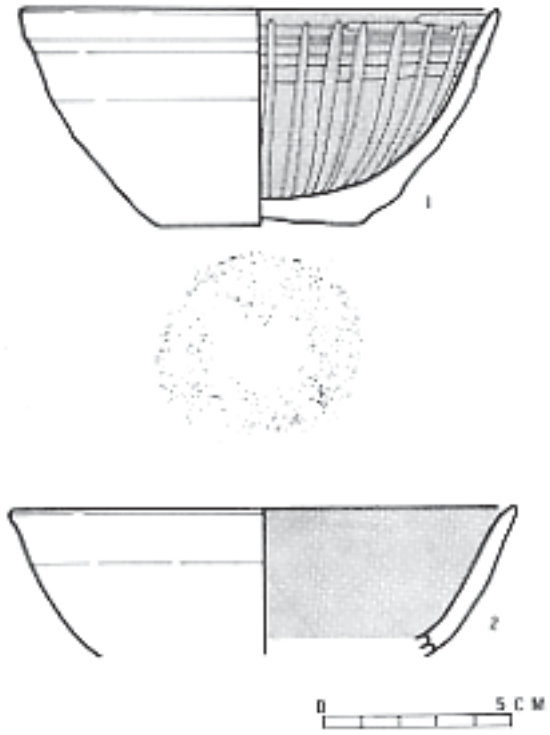
第 344 図　第 60 号住居跡出土遺物



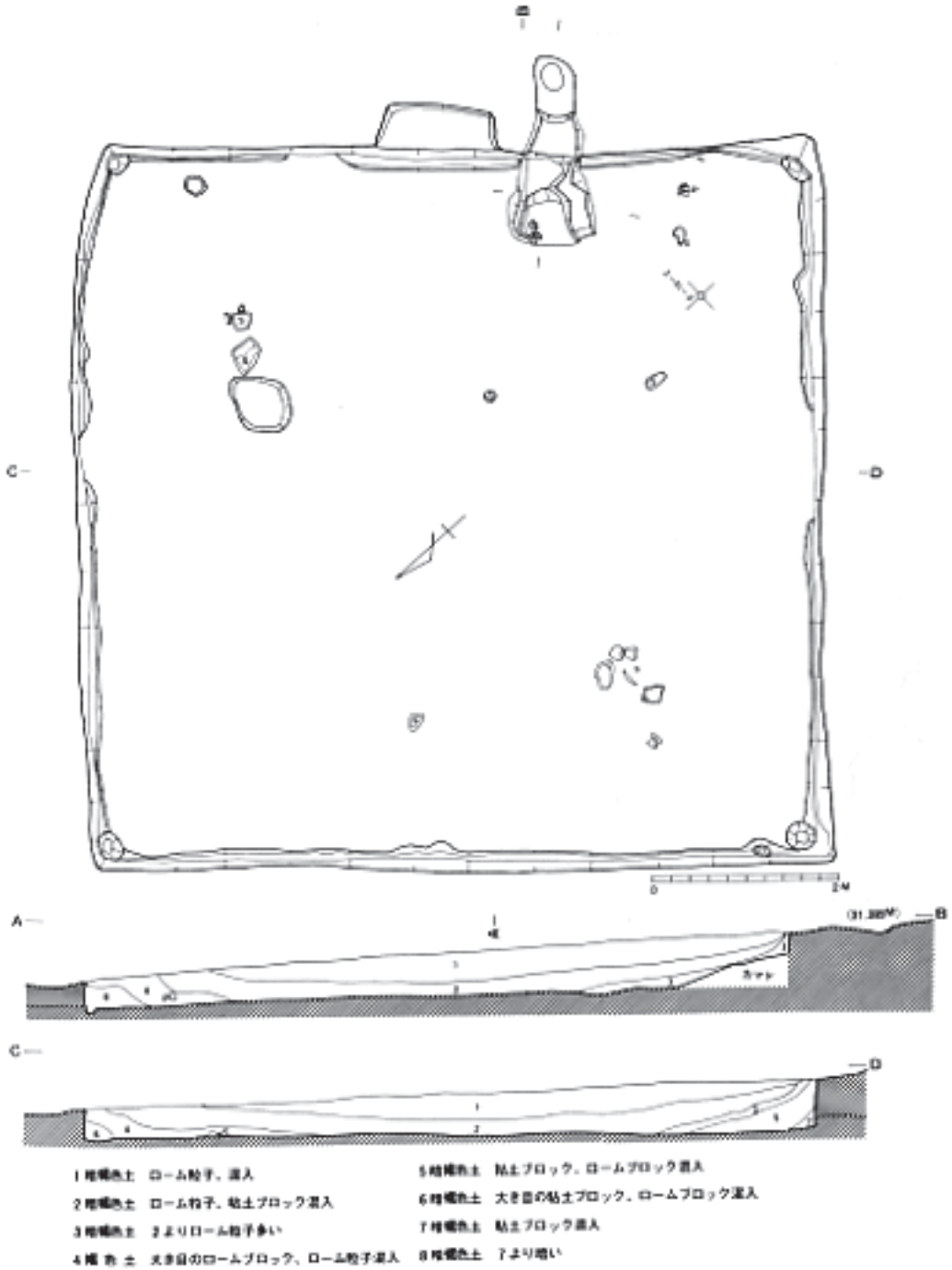
第 345 図　第 61 号住居跡実測図



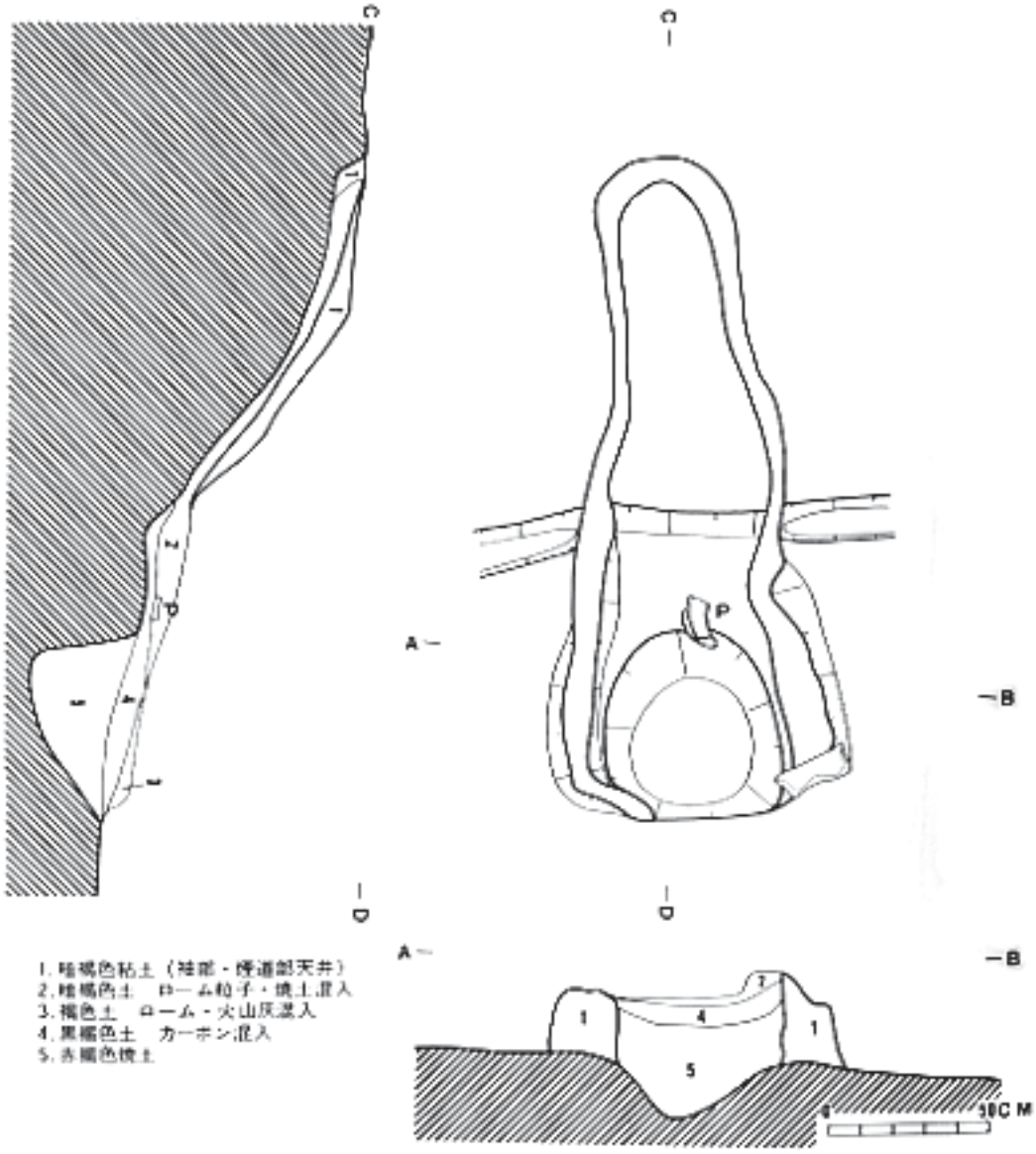
第 346 図　第 61 号住居跡カマド実測図



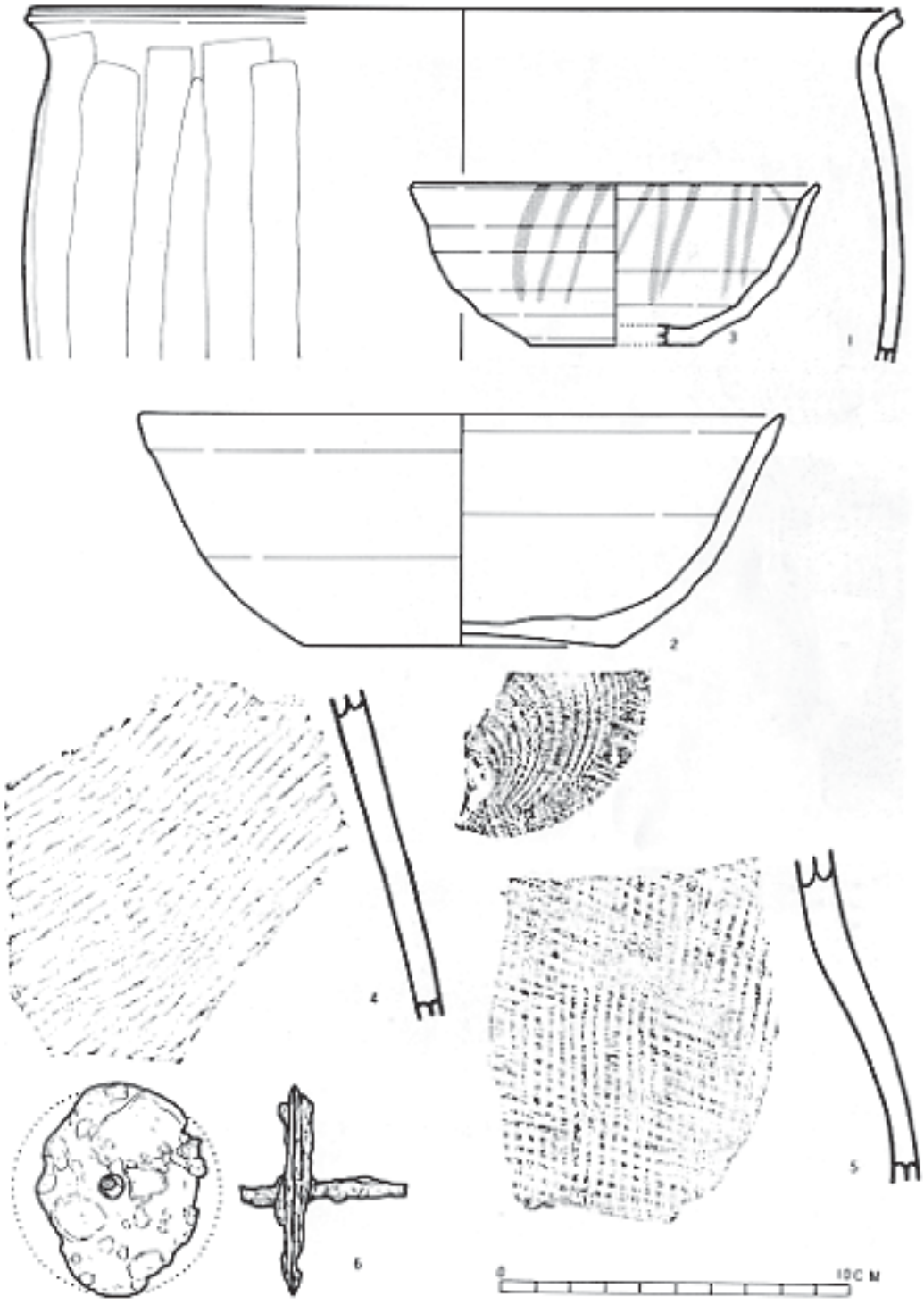
第 347 図　第 61 号住居跡出土遺物



第 348 図　第 62 号住居跡実測図



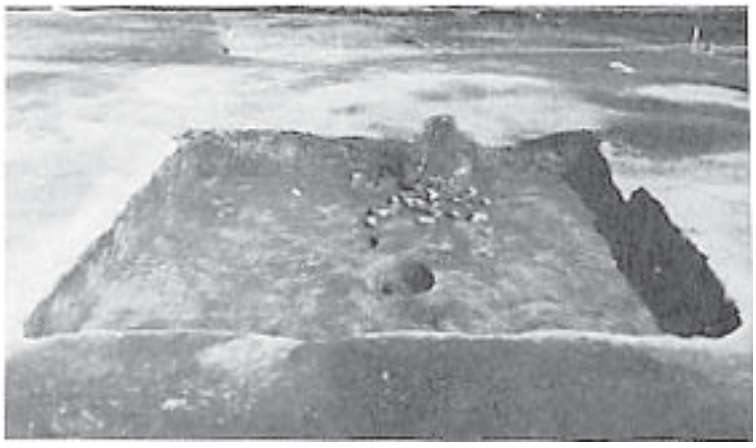
第 349 図　第 62 号住居跡カマド実測図



第 350 図　第 62 号住居跡出土遺物

第 1 号住居跡

第 2 号住居跡

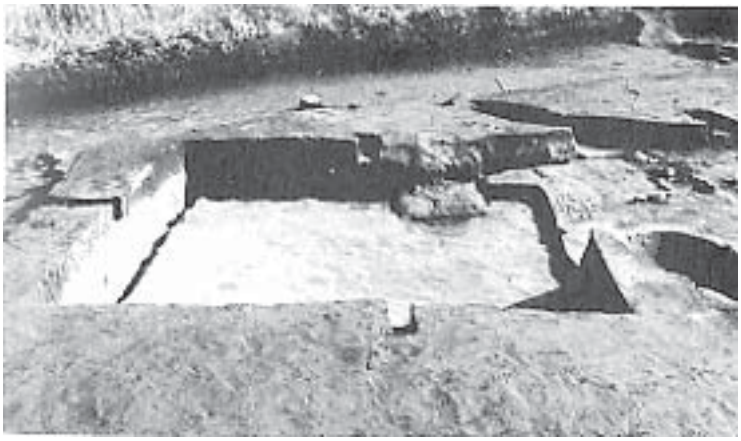


第 3 号住居跡

図版 63　歴史時代住居跡

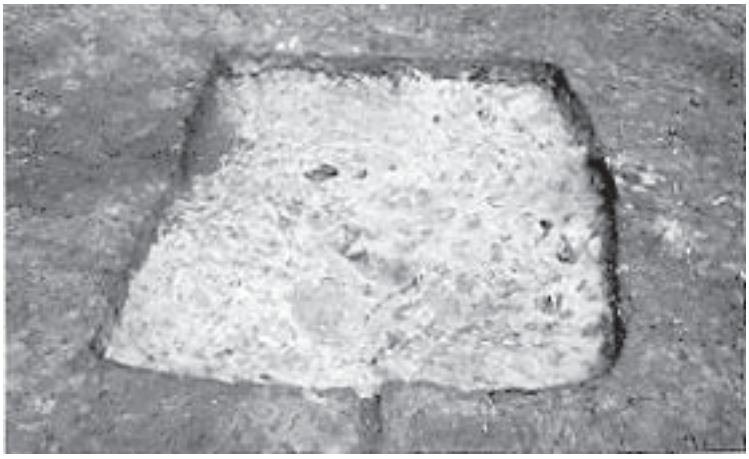
第 4 号住居跡

第 5 号住居跡



第 6 号住居跡

図版 64　歴史時代住居跡



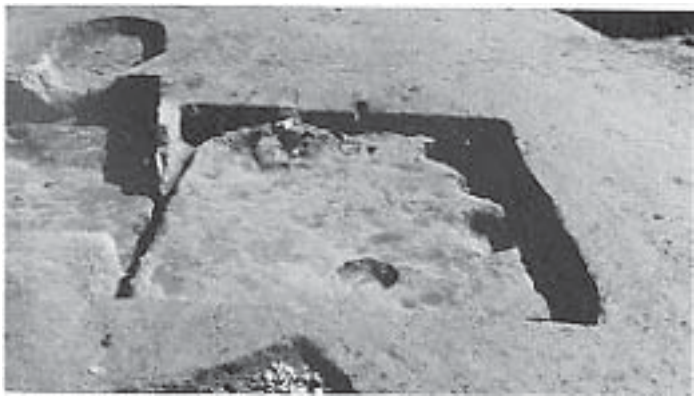
第 7 号住居跡

第 8 号住居跡

第 9 号住居跡

図版 65　歴史時代住居跡

第 10 号住居跡



第 11 号住居跡

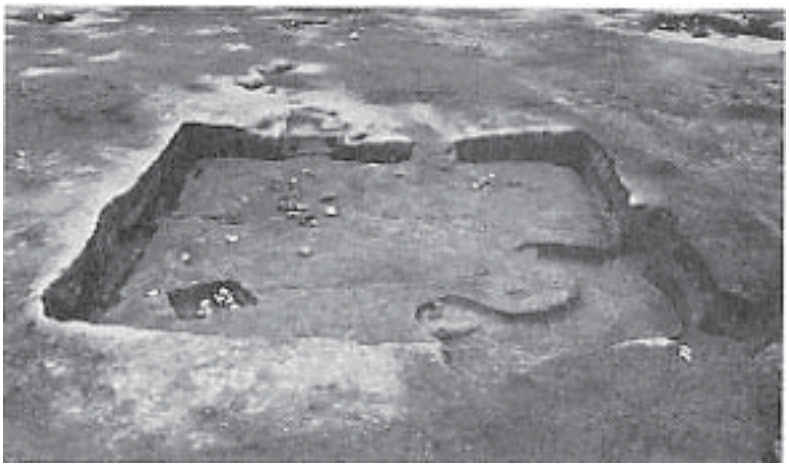
第 12 号住居跡

同上カマド断面

図版 66　歴史時代住居跡

第 13 号住居跡

第 14 号住居跡



第 15 号住居跡

図版 67　歴史時代住居跡

第 16 号住居跡

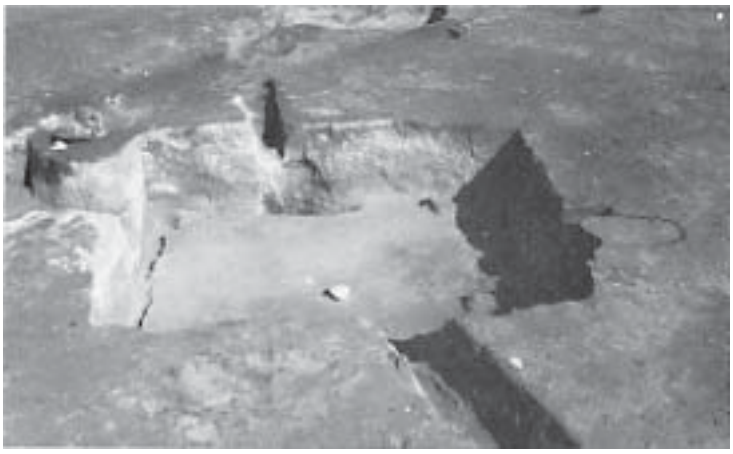
第 17 号住居跡

第 18 号住居跡

図版 68　歴史時代住居跡

第 19 号住居跡

第 20 号住居跡



第 21 号住居跡

図版 69　歴史時代住居跡

第 22 号住居跡

第 24 号住居跡

第 25 号住居跡

図版 70　歴史時代住居跡

第 26 号住居跡

第 27 号住居跡

第 28・29 号住居跡

図版 71　歴史時代住居跡

第 30 号住居跡

第 31 号住居跡

第 32 号住居跡

図版 72　歴史時代住居跡

第 33 号住居跡

第 34 号住居跡

第 35 号住居跡

図版 73　歴史時代住居跡

第 36 号住居跡

第 37 号住居跡

第 38 号住居跡

図版 74　歴史時代住居跡

第 39 号住居跡

第 40 号住居跡

同上カマド

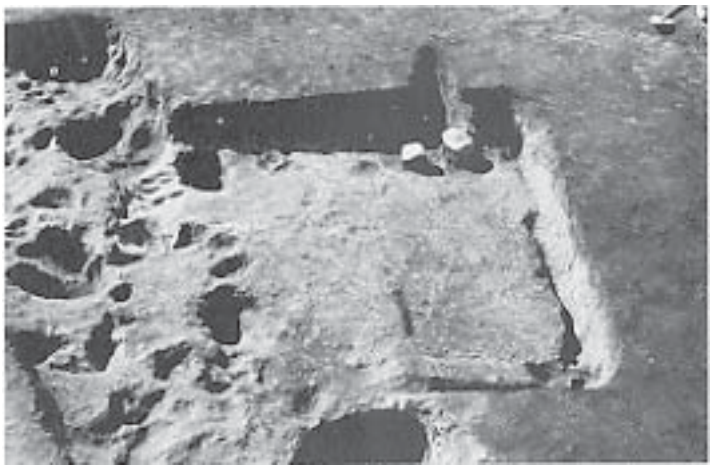
図版 75　歴史時代住居跡

第 41 号住居跡

第 43 号住居跡

第 44 号住居跡

図版 76　歴史時代住居跡



第 45 号住居跡

第 46 号住居跡

第 47 号住居跡

図版 77　歴史時代住居跡

第 48 号住居跡

第 49 号住居跡

同上カマド断面

図版 78　歴史時代住居跡

第 50 号住居跡

第 51 号住居跡

第 52 号住居跡

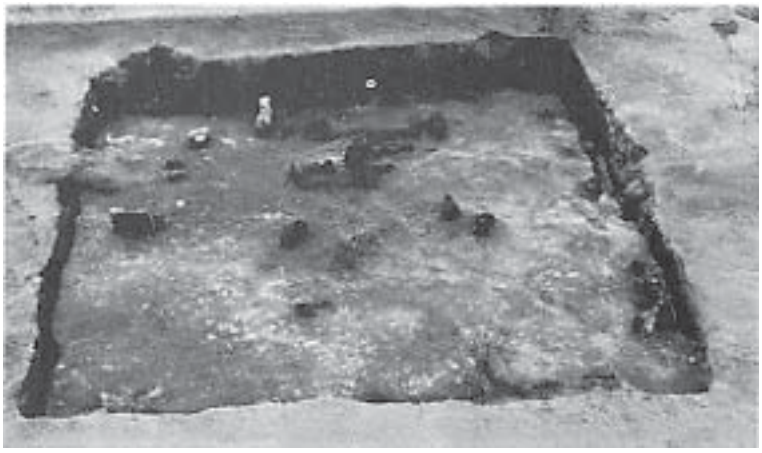
図版 79　歴史時代住居跡

第 53 号住居跡

第 55 号住居跡

同　上

図版 80　歴史時代住居跡



第 55 号住居跡

同　上
炭化米出土状態

同上板壁

図版 81　歴史時代住居跡

第 56 号住居跡

第 57 号住居跡

同　上
須恵器出土状態

図版 82　歴史時代住居跡

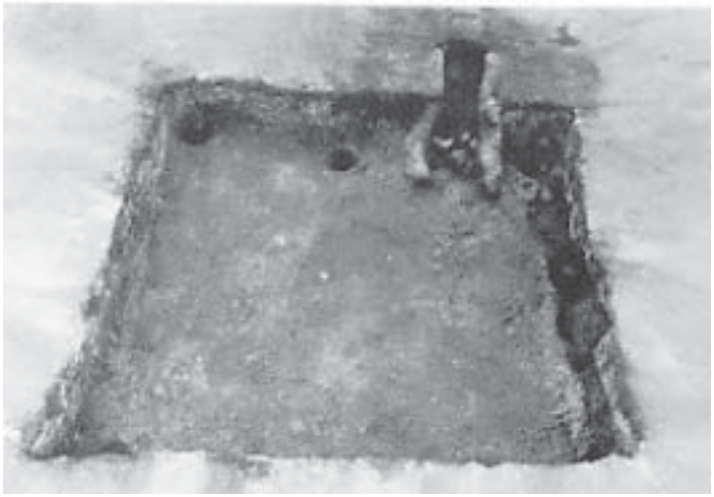
第 58 号住居跡

第 59 号住居跡

同上
（階段状出入口）

第 60 号住居跡

図版 83　歴史時代住居跡

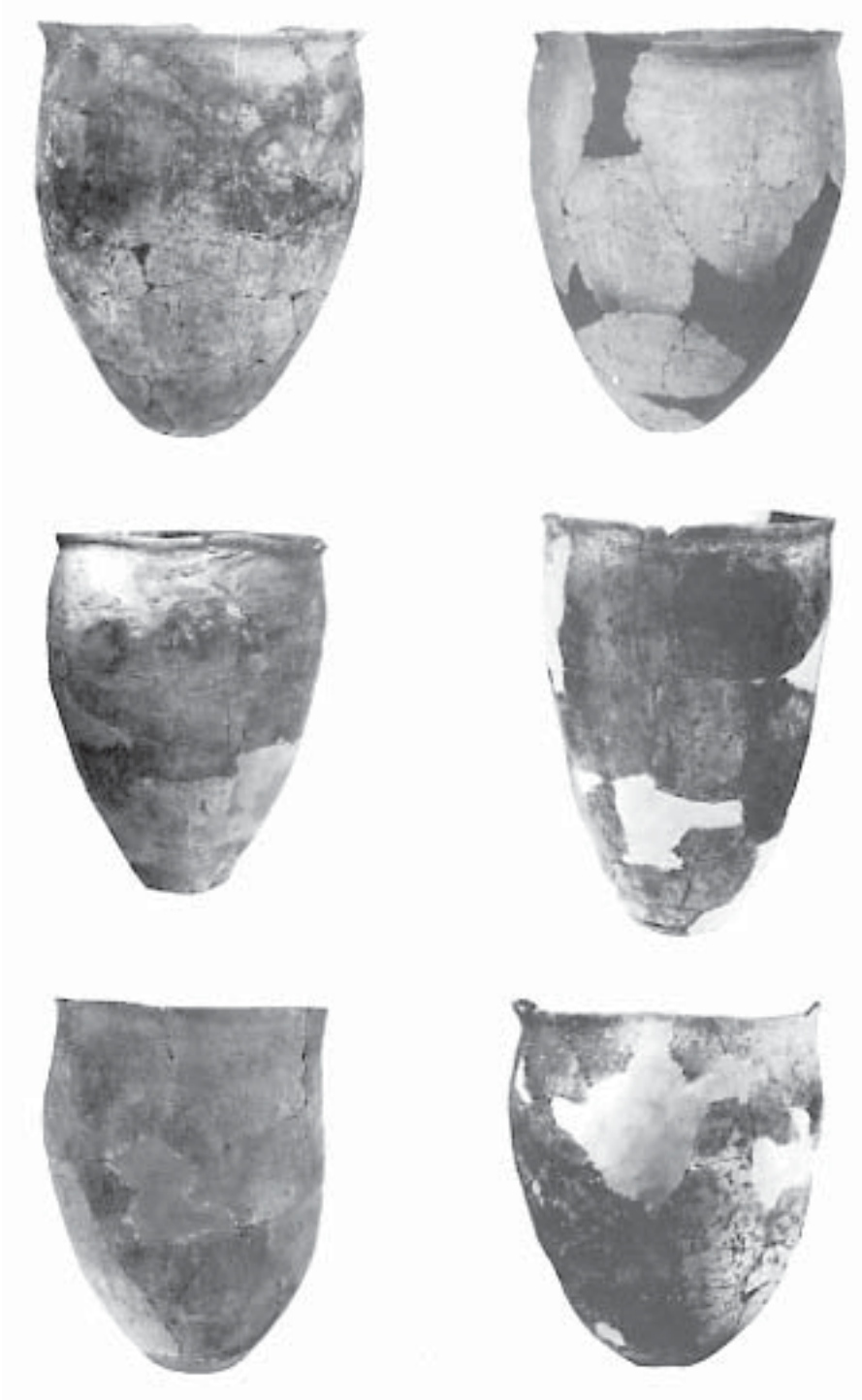


第 61 号住居跡

第 62 号住居跡

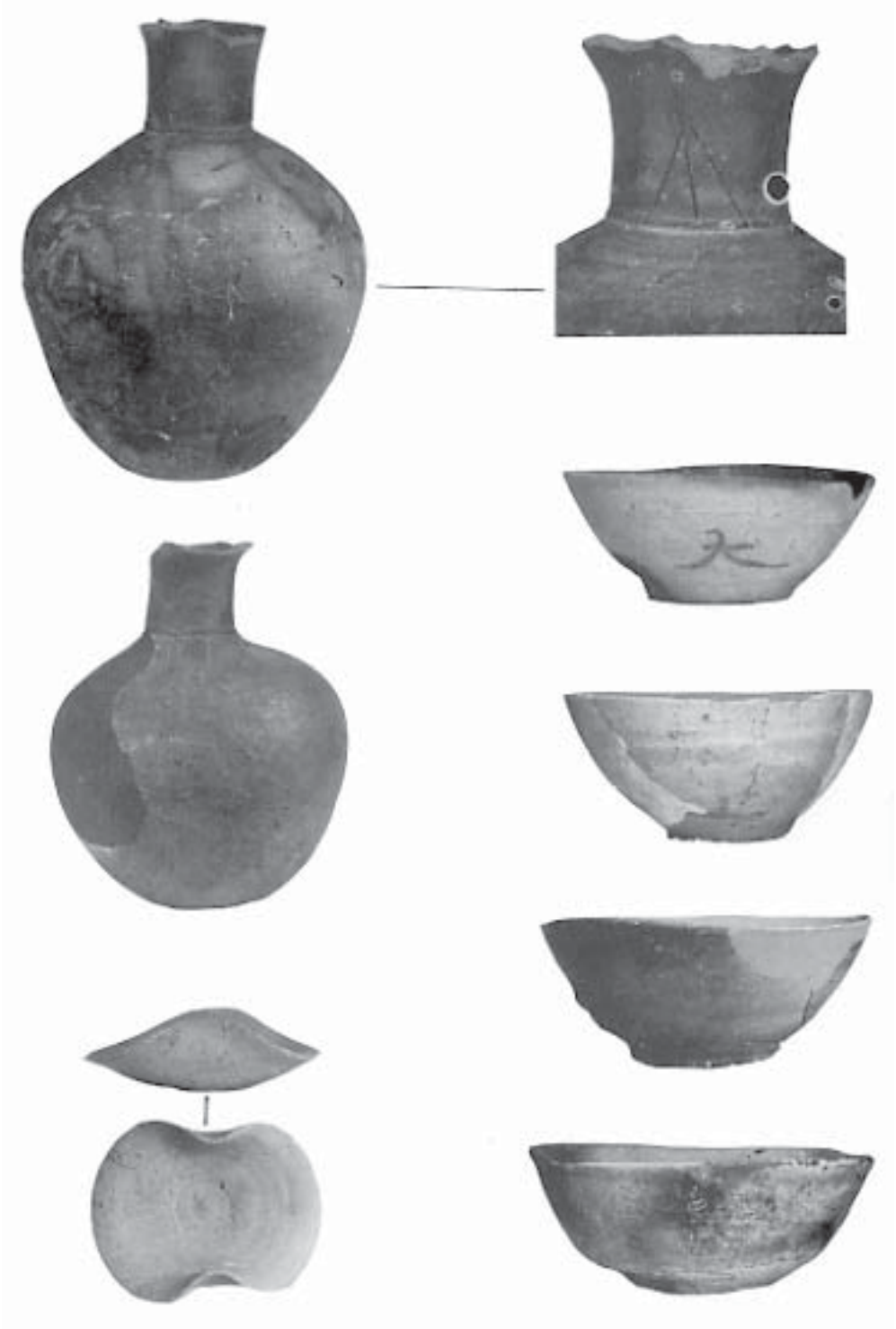
測量スナップ
（第 33 号住居跡）

図版 84　歴史時代住居跡



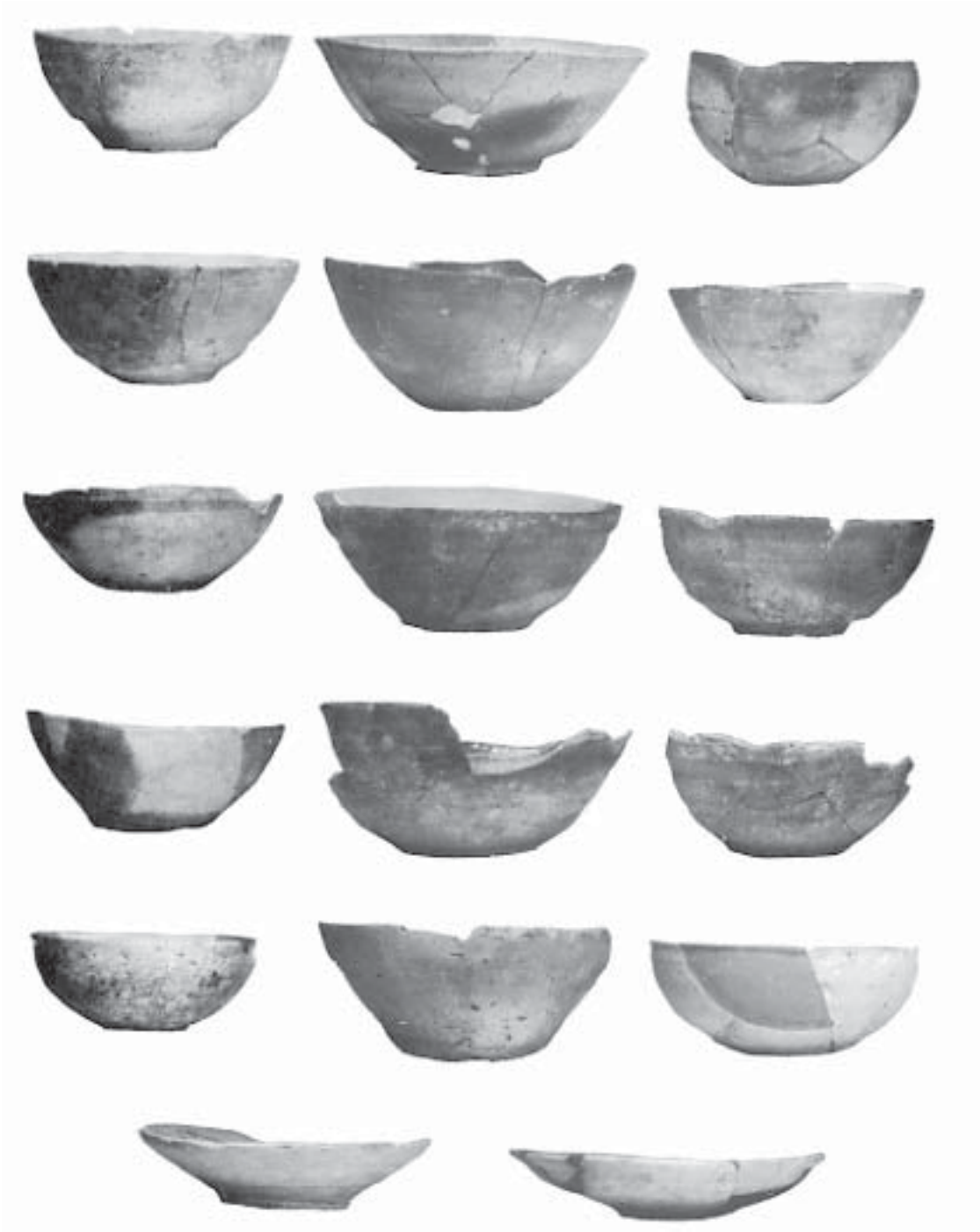
図版 85　歴史時代出土遺物

図版 86　歴史時代出土遺物



図版 87　歴史時代出土遺物

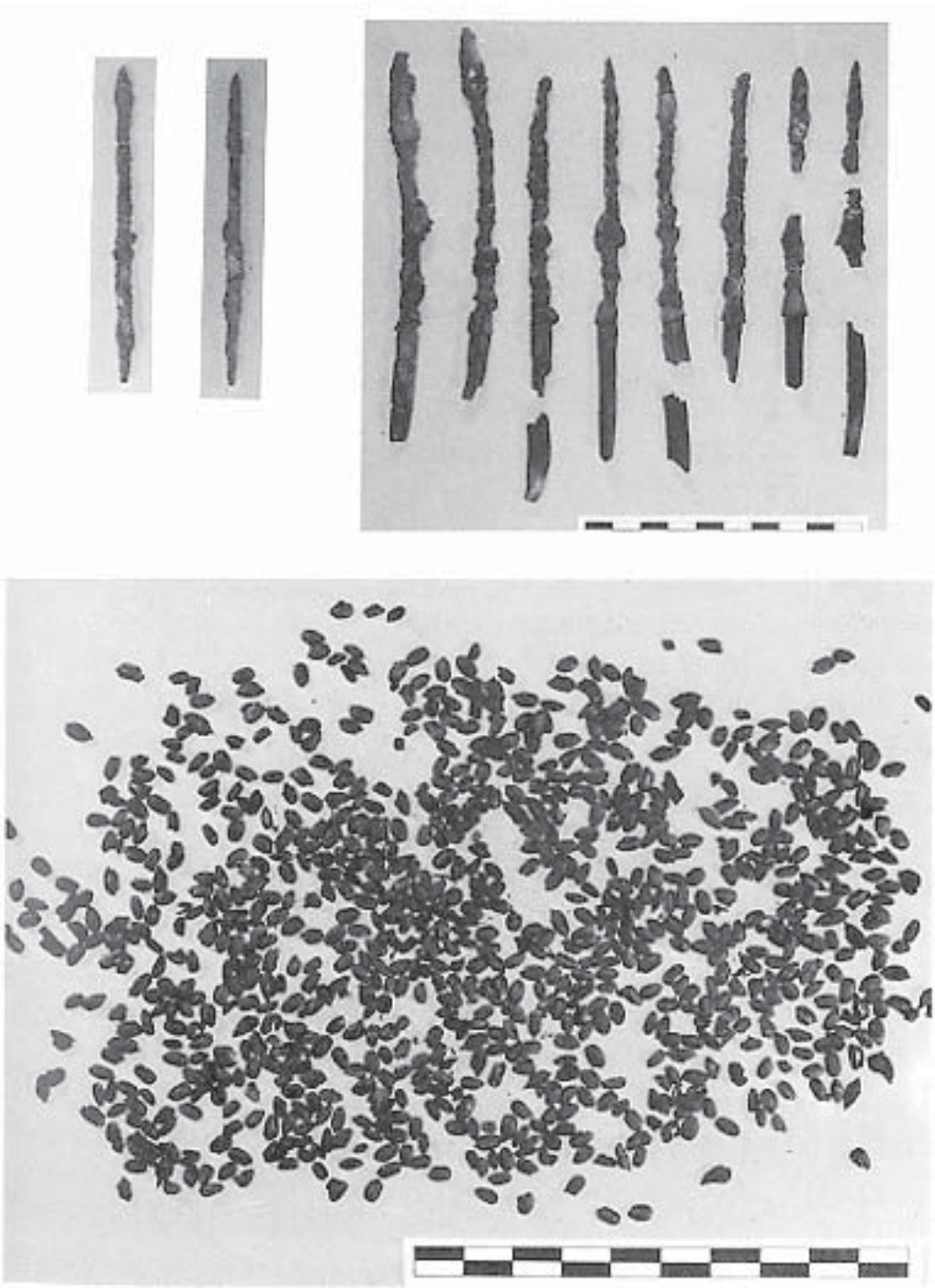
図版 88　歴史時代出土遺物



図版 89　歴史時代出土遺物

図版 90　歴史時代出土遺物

図版 91　歴史時代出土遺物



図版 92　歴史時代出土遺物

第2節　掘立柱建物跡（第351～355図）

今回の調査において県内ではまだ検出例の少ない掘立柱建物跡を5軒確認できたことは、これからの土師器遺構研究の一つの資料となりうるものと思われる。柱穴跡は9本組のものと4本組のものがあり、いずれも柱痕・埋土が明瞭に確認された。

第1号跡（第351図）は、発堀区のほぼ中央部にあたるH－6区において検出したものである。柱穴9個配置のもので、主軸S－38°－Eを示し、間口約2間（4.4×4.9m）の規模を呈する。掘り方は径約40～60cm、深さ60cmで柱痕もはっきりと確認された。尚、北東側配列の柱穴に平行して幅20cm程の溝が検出された。これはちょうど軒下にあたる部分と見られるところに位置している。

第2号跡（第352図）はI－9区で検出したもので、主軸S－14°－E、3.2×2.85mの規模を呈する4本組柱穴のものである。掘り方は径約70cm、深さ110cmと比較的大形のもので、柱痕の幅は20～30cmで最下部には白茶色粘土を敷いている。

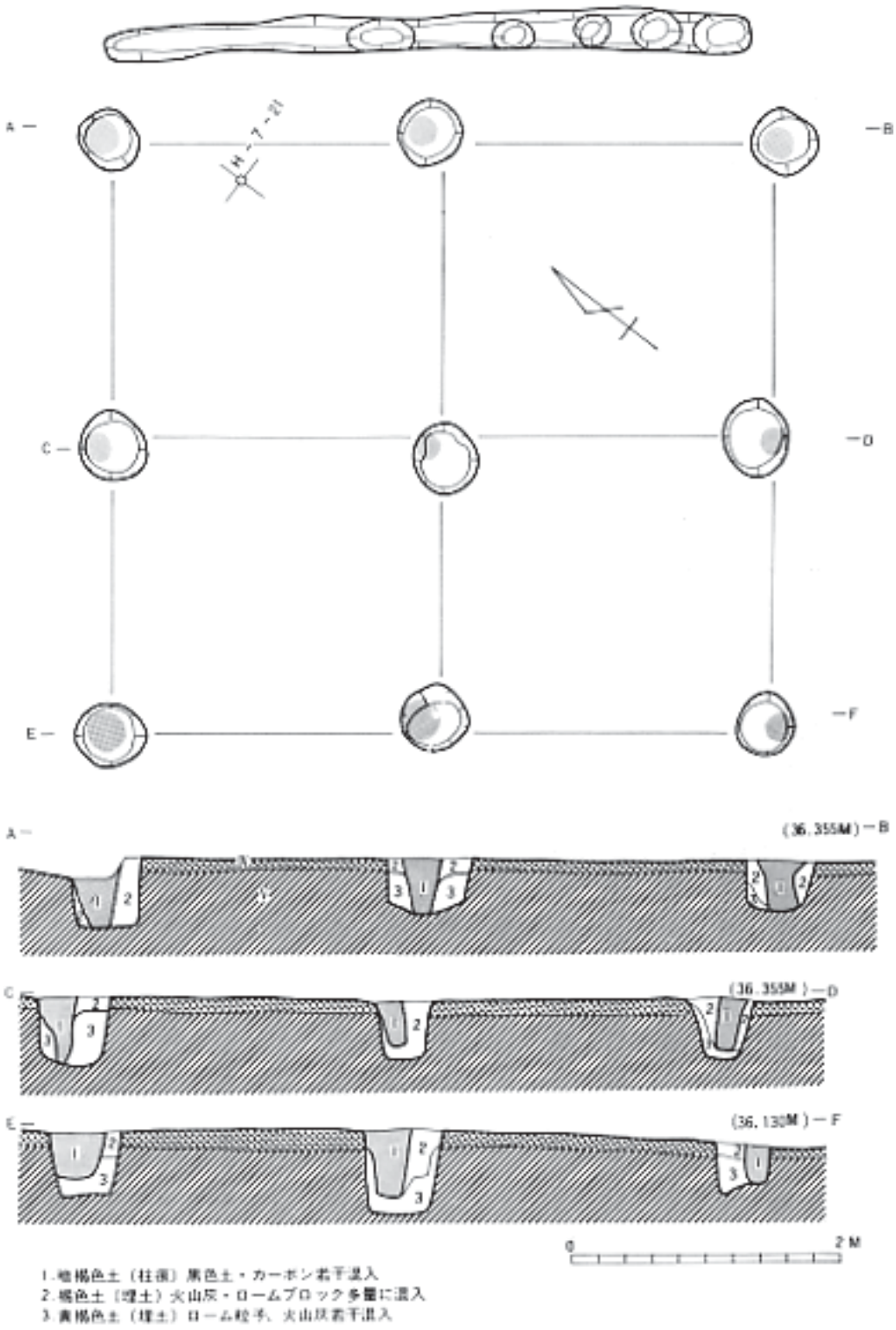
第3号跡（第353図）はK－7・8区に位置し、2号跡同様4本組のもので主軸S－62°－Eで、3.3×4.5mの間隔で柱穴を配している。掘り方は径80～90cm、深さ120cmの規模で、柱痕は40～50cmと比較的大きく最下部には白茶色粘土を敷き詰めている。

第4号跡（第354図）は本遺跡最大規模の第33号住居跡の北側7mのK－6区に位置している。方形4本組でS－10°－Wの主軸を有し、3．5×3．5mの間隔で掘り方径80cm、深さ110cmを呈する柱穴跡である。

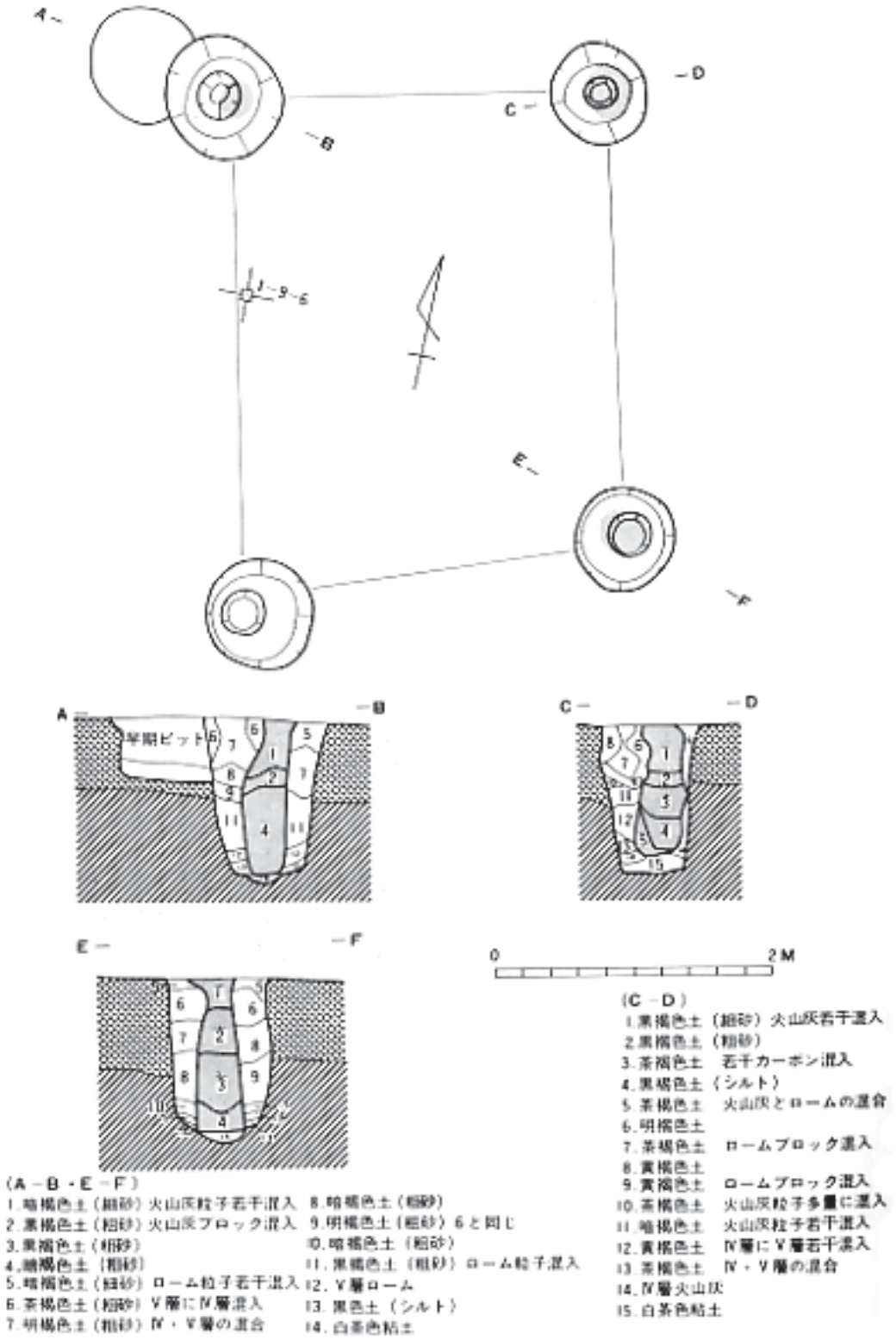
第5号跡（第355図）は4号跡の西側K・L－5区に検出したもので、主軸S－19°－E、3.5×3.9mの間隔を有し、第2～4号跡同様4本組の大柱穴跡である。柱痕・埋土もはっきり確認でき、掘り方は径80cm、深さ120cmの規模を呈する。

9本組配置のものは第1号跡のみで、これに類似するものは青森市近野遺跡（註1）において1軒発見例があるだけで他にはまだ報告されてないようである。又、4本組の掘立柱建物跡も未だ発見例がないようである。本遺跡において検出された掘立柱建物跡は、遺跡の中心部に位置する最大規模の第33号住居跡を囲むように位置しており、何らかの関係があったものと考えられるが、出土遺物もなく住居跡との対比もできずいまのところは不明である。（藤田亮一）

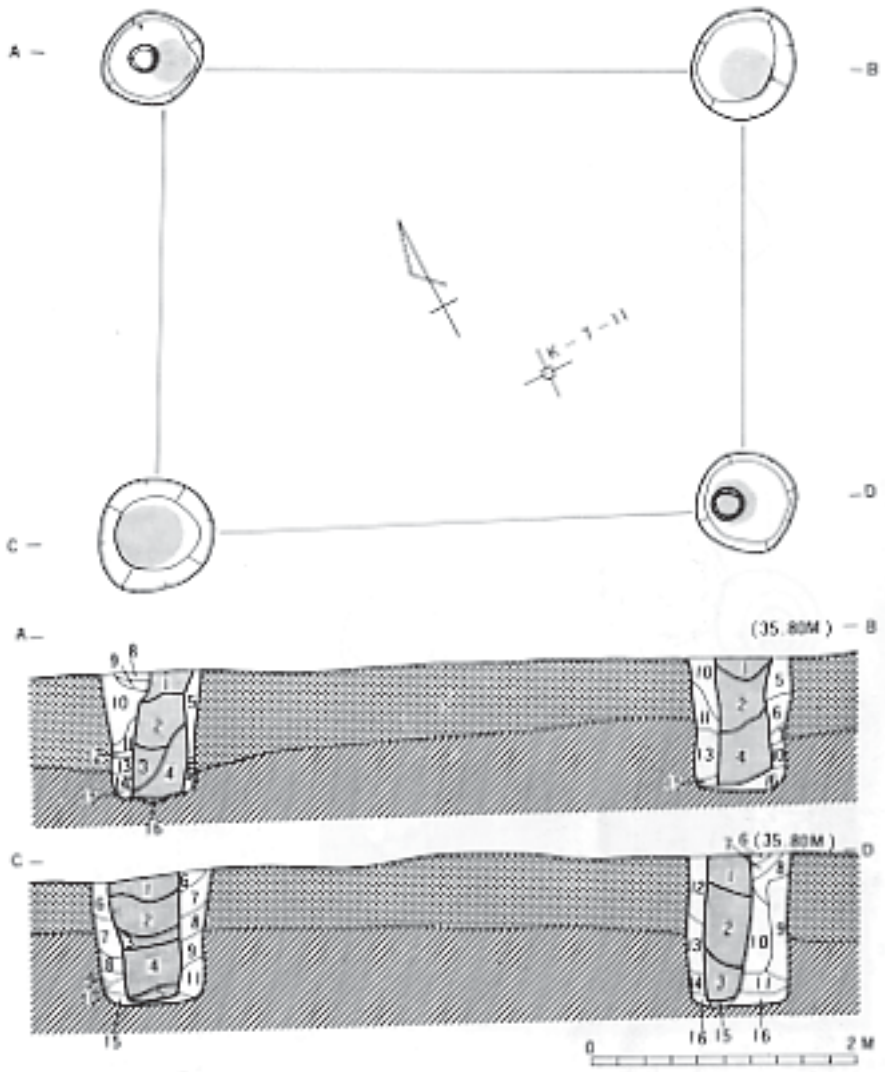
註1　青森県教育委員会「近野遺跡」発掘調査報告書（Ⅱ）　昭和49年



第 351 図　掘立柱建物跡実測図



第 352 図　掘立柱建物跡実測図



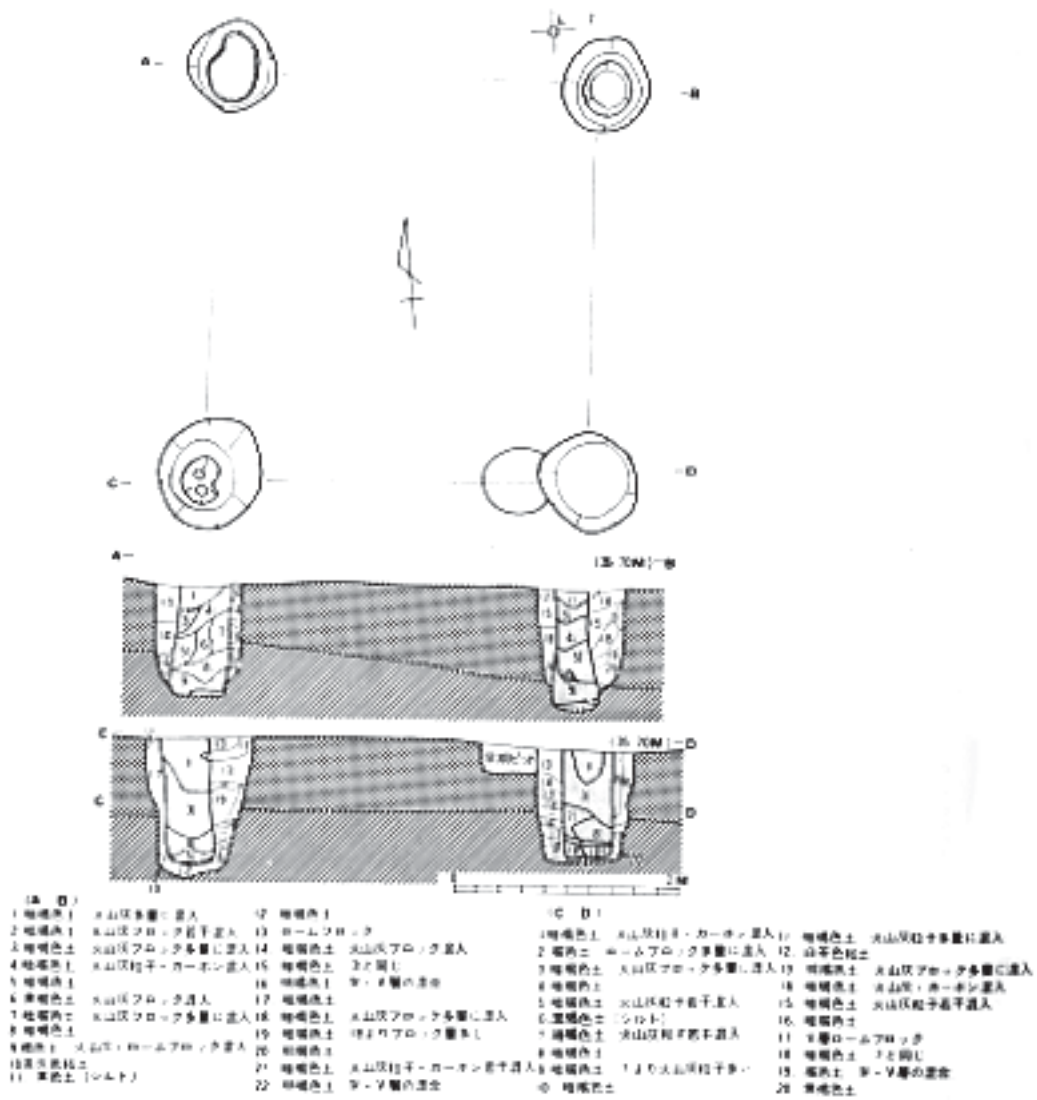
（A－B）

1.暗褐色土 黒色土ブロック・ローム混入
2.暗褐色土 ローム粒子多量に混入
3.茶褐色土 ローム粒子多量に混入
4.暗褐色土ローム若干混入
5.青色粘土
6.暗褐色土
7.暗褐色土ローム粒子多量に混入
8.黒褐色土
9.黄褐色粘土ブロック
10. 茶褐色　ローム・黒色土の混合
11. ロームブロック
12. 黄褐色土　ローム・黒色土の混合
13. 黄褐色ローム
14. 暗褐色土　ローム粒子混入
15. 13と同じ
16. 黒色土　カーボン多量に混入

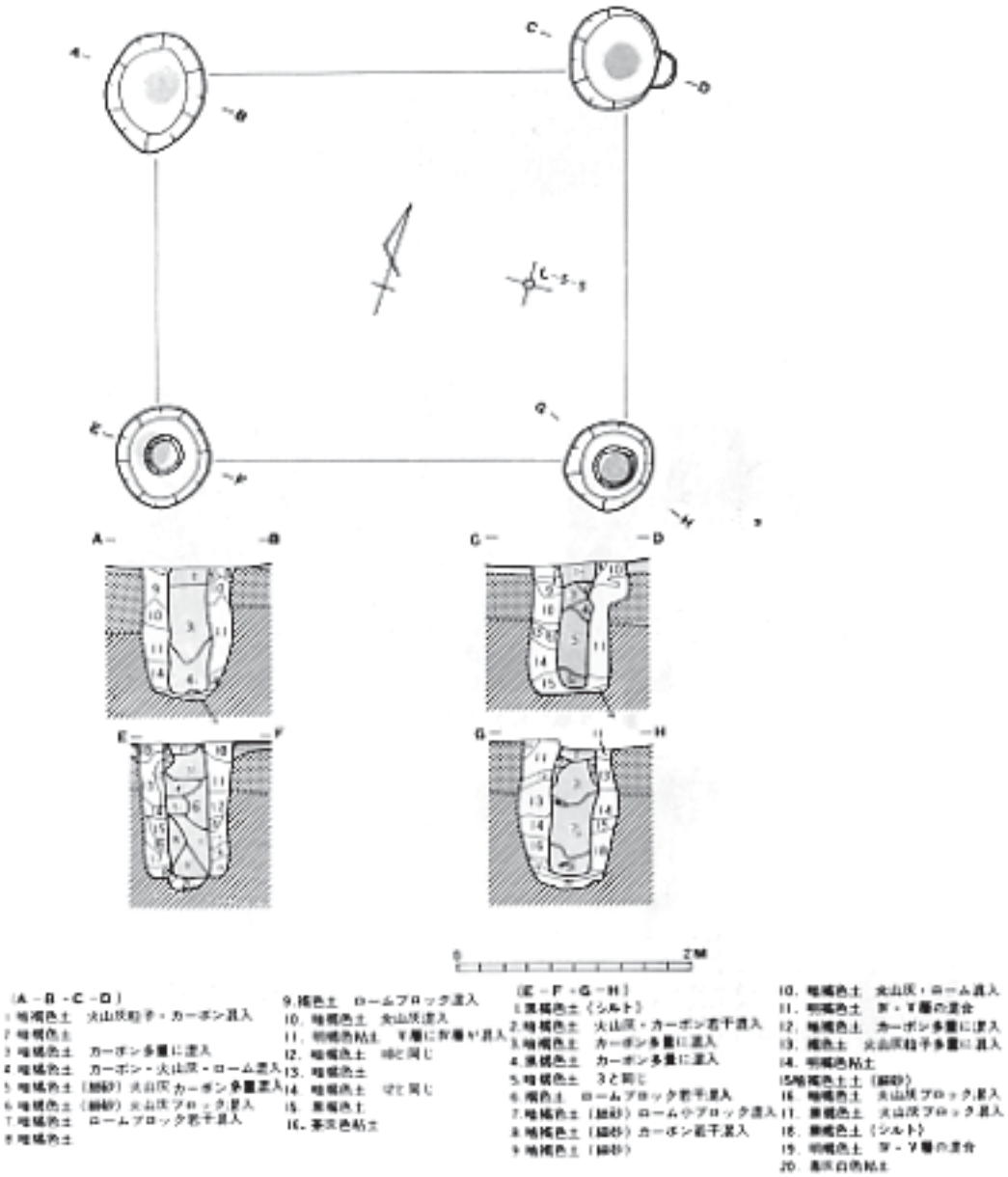
（C－D）

1.黒褐色土　ローム粒子若干混入
2.暗褐色土　ローム粒子多量に混入
3.暗褐色土
4.暗褐色土　ローム粒子多量に混入
5.暗褐色土
6.黒色土　カーボン混入
7.明褐色土　ロームと黒色土の混合
8.暗褐色土　ロームブロック混入
9.黒褐色土　ローム粒子多量に混入
10.黄褐色　ロームブロック
11.暗褐色土　ローム多量に混入
12.黒褐色土　ローム粒子混入
13.黒褐色土
14.黄褐色土
15.黒褐色土　ローム多量に混入
16.白茶色粘土

第353図　掘立柱建物跡実測図



第 354 図　掘立柱建物跡実測図



第 355 図　掘立柱建物跡実測図

第 1 号掘立柱建物跡

第 2 号掘立柱建物跡

第 5 号掘立柱建物跡

図版 93　掘立柱建物跡

第3節　遺構外出土遺物（第356図）

土師器集落の場合、遺物の出土はそのほとんどが遺構内に集約されるようで、本遺跡の場合も竪穴住居跡内が圧倒的に多く、遺構外からの出土はきわめて少ない。ここに掲載したものは遺構外出土・表採のものであり、時期的に不明なものも若干含まれている。

第356図－1はE－8区の第Ⅱ層上面で出土したもので、内外面ともに黒色処理を施こした台付坏である。両器面ともヘラミガキ調整を入念に行なっており、台部は比較的低いもので坏部成形後に貼りつけたもので、底面には糸切り痕を明瞭に残している。

第356図一2は外底面近くにモミ圧痕を有する内黒杯である。この他にもモミ圧痕を有するものが2・3出土している。

第356図－3は、H－4区の第Ⅱ層で出土したもので、手づくり製の異形土器で外面に若干のヘラナデ痕が見られる。ここでは土師器として扱ったが、時期的には不明な点もありさらに検討を要する土器である。

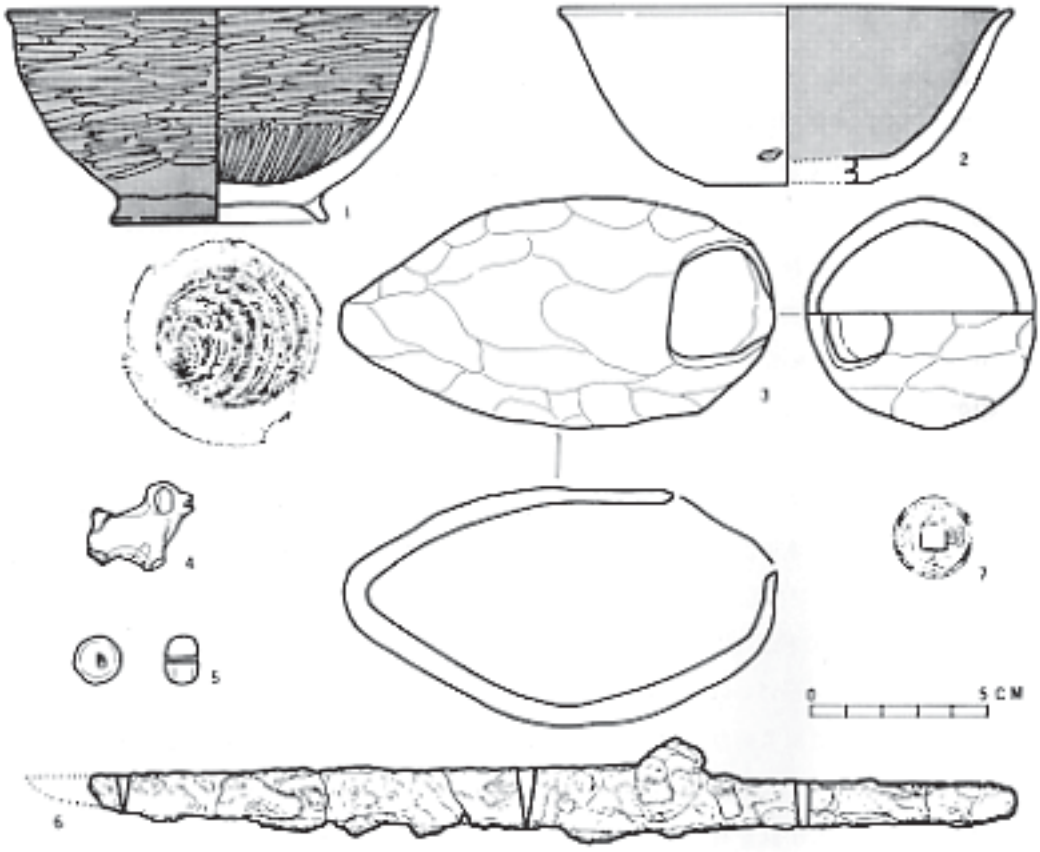
第356図－4は、発掘区域外のH－11区付近で表採したもので、明らかに犬の形態を模した土製品である。腹部下には穿孔部があり細い棒にでも立てられるようになっているが、前・後足部はいずれも欠損している。これに類似したものは岩手県水沢市佐倉川遺跡（註1）から1点出土しているがこれも時期不明のようである。

第356図－5は、I－2区より出土した玉形土製品であるが時期は不明である。直径約1cmで若干偏平で中央に小孔を有する。

これらの他に、刀子（第356図－6）・寛永通宝（第356図－7）などが出土した。

（藤田亮一）

註1　江坂輝弥「土偶」校倉書房・昭和35年



第 356 図　遺構外出土遺物実測図

小　括

以上、歴史時代の各住居跡の概要と出土遺物について記述してきたが、掲載したものは発掘だけの検出遺構であって、集落規模の上から見るとさらに区域外にも広がっているものと想定されるが、今回の調査では時間的制限もあり全容を把握するまでは至らなかった。

本遺跡は最高部で36mあり、その最高部から西側はなだらかな、東側と北側はやや傾斜のきつい地形を呈する舌状に近い丘陵地上にある。発掘区西部において検出された住居跡は標高35m前後に、東部においては30～32.5mのコンター・ラインに沿ってそれぞれ位置している。

今回の調査で、62軒の土師器を出土する竪穴住居跡と5軒の掘立柱建物跡を検出した。次に住居跡について項目ごとに若干の考察も加えながらまとめて観ることにする。

〔平面形・規模〕

検出住居跡のほとんどは方形プランを呈するが、中には第2号住居跡のような典型な隅丸方形を呈するものもある。又、第53号住居跡のような間仕切りなしの張り出し部を有するものもある。全体的にローム層深く構築しており、壁辺も直線に近いものが多くしっかりした住居跡になっている。

規模については大小様々にあり、次のように区別した。

2m以下	第34・42・43号住居跡
2.1～4m	第2・7・10・11・12・13・16・17・20・21・24・31・32・38・39 41・44・45・46・47・49・50・52・56・57号住居跡
4.1～6m	第3・4・6・9・14・19・22・23・25・26・27・28・29・35・36 37・40・48・55・58・60号住居跡
6.28～8m	第1・5・15・30・51・53・59・62号住居跡
8.1～10m	第8・18号住居跡
10m以上	第33号住居跡

これを見ると、2.1～4m、4.1～6mの規模の住居跡が本遺跡における一般的なものとして構築されているようであるが、中には8m以上の大形のものも3軒検出されたがこれらは使用目的が若干異なるものと考えられる。特に第33号住居跡は遺跡（集落）の中央部に位置し、最大級の規模を有し、カマド3回構築と時間的にも長く使用されたものと考えられる点か5集落の集会所的な存在の住居跡と見られる。

〔主軸・カマド方向・設置場所〕

カマドの向きを基準に次のようにまとめた。

NNE（北北東）　第13号住居跡

NE（北東）　第17・38・48・61号住居跡
ENE（東北東）　第32号住居跡
E（東）　第57号住居跡
ESE（東南東）　第2・3・4・10・12・14・15・25・26号住居跡
SE（南東）　第5・6・9・11・16・19・21・22・24・27・30・33・35・36・37
39・40・49・51・58・62号住居跡
SSE（南南東）　第18・28・29・55・59・60号住居跡
S（南）　第1・53号住居跡
SW（南西）　第20・31・41・45・47・52号住居跡
WSW（西南西）　第46・56号住居跡

上の表によると、南東側に向いているものが圧倒的に多く、北西風の吹く回数が多いことを示しているようで、次いで北東、南西側の順でカマドが位置している。全体を見ればだいぶ異なる方向を示しているが、それぞれの住居跡の位置している場所の風向きに最も適した方向と考えられる。風向きを考えないで設置する場合はフイゴの使用も考えられるがいまのところこれを使用した痕跡も認められない。又、遺跡が舌状に近い丘陵地のため西側と東側とでは風の流れも若干違うようで、それらの点からも向きの違いが生じてきているものと思われる。しかし、全体的に見れば南東向きのものが本遺跡における一般的形態のようで、他方向にあるものは季節的な風向に対処しての向きか、又は時間的差異による構築時期の違いかは、複合関係・出土遺物等からはいまのところ確認できない。尚、隣接住居の家屋によっても風の流れが変るのではないかと見られる。北西風の強い本県にとっては、本遺跡だけではなく他遺跡の住居跡のカマド向きも南東側に多いようである。

カマド本体の設置場所は3タイプに分けてみることにする。（　）内は第1次カマド

1. カマドに向って壁辺中央部から右側に設置しているもの――第1・2・3・4・5・6・12・13・14・15・16・18・19・21・22・(24)・25・26・27・28・29・30・32・33・35・36・37・39・40・45・(48)・49・51・53・55・57・59・60・61・62号住居跡

2. 壁辺中央部から左側に設置しているもの――第（2)・9・10・11・17・20・24・31・38・41・46・47・48・(51)・52・56号住居跡

3. 壁辺ほぼ中央部に設置しているもの――第（9)・(33)・58号住居跡

以上のことからカマド設置場所はカマドに向って壁辺中央部から右寄りのものが多く、次いで左寄りとなっており、壁辺中央部設置のものは希れである。

煙道部は、半分掘りくぼめて天井・壁を白色粘土で構築したものと、ローム層をくりぬいたトンネル式の2つのタイプがあるが、時間的差異は認められない。

〔複合・増改築〕

複合関係にある住居跡は、第3・4号住居、第5・6号住居、第10・11号住居、第22・23号住居、第24・25・26号住居、第28・29号住居、第42・43号住居、第56・57号住居の8ヶ所合計17軒である。第24・25・26号住居を除けば、いずれも2軒による複合であるが、出土遺物等からは時間的差異は認められない。又、第24・25・26号住居跡も3軒複合であるが、第24号住居と25号住居は同時期構築のものと見られるので、他の複合住居と同様に2軒の切り合いとなる。しかしながら、いずれも一方の住居跡が埋りきってからの構築であるためかなりの時間的差異は認めざるを得ない。いずれにしろ出土遺物からの時間的なものも見い出せなく、住居の向き、位置関係から住居編年を考えるのも危険なので本報では差し控えておくことにし、後日綿密なる資料をそろえて報告することにしたい。

〔周溝内施設〕

焼失家屋と見られる第22・55号住居跡の周溝内に炭化板壁が検出された。いずれも板材を縦に周溝内に埋めているようで、炭火しているため窮めて保存も良好である。「こし板」と呼ばれるこの板壁の検出例は、青森市近野遺跡（註1）、平賀町鳥海山遺跡（註2）、黒石市浅瀬石遺跡（註3）で検出報告されている。本来はほとんどの住居に設備されているものと見られるが家屋が焼失し炭化しなければ検出できないということで不明な点も多かったが、今日数多くの調査によってその構造もいくらかずつ解明されているようである。

〔出入口〕

本遺跡で確認したものは、第15・18・30・59・62号住居跡の5軒である。いずれも張り出し部を有するもので、第59号住居跡を除けばいずれもカマド設置の壁辺に位置している。第15・18・30・62号住居跡は50～80㎝の張り出し部を作りその床面は住居床面よりも若干高くしており壁に平行に2個のピット（柱穴）を有する。このピットは階段状の踏み板を支える台木の柱穴と考えられる。又、第59号住居跡はカマド右脇の壁（傾斜面の高い方に向って）にこれも1m程張り出して階段状のものを構築している。これにより、本遺跡における住居跡の出入口は2形態以上あることがわかる。土師器住居跡の場合、張り出し部を設けた出入口であれば容易に判明できるが、張り出し部をもたないのであれば確認も困難であるためそのほとんどは検出されていない。又、壁に近い床面の堅く踏み締まったところが出入口と見られるが、これも確証をつかむまでには至っていない。

〔集落構成〕

出土遺物に差異もなく、複合・位置関係等からは明確な集落構成は割り出せないが、ここに一

つのパターンを示しておくことにする。複合関係にある住居跡で構築の早いものを除く、住居跡54軒と掘立柱建物跡5軒による構成として見ることにする。それによると遺跡のほぼ中央部にあたるＪ－6・7区に本遺跡最大規模を誇る第33号住居跡が位置し、その回りを囲むように5軒の掘立柱建物跡があり、さらに建物跡を取り囲むように住居跡群が配置している。この考えの中心である第33号住居跡はその規模、カマド3回改築という時間的幅から見れば、集落における集会所的存在のものと考えられるからである。なお、これと同様な構成を示すものはいまのところ報告例がないようである。

〔出土遺物〕

土師器は甕・鉢・壺・坏が、須恵器は大形甕・鉢・坏が出土した。これらは一括して北部東北地方土師器第2型式（桜井第2型式）（註4）の範疇に入るものであるが、この第2型式もかなり時間的幅が広く、地域差もあり細分化の必要性が認められているようである。しかしながら県内において土師器編年のしっかりしたものがない以上、どうしても他地域出土の土器を標式とした編年（註5）を使わざるを得ないのが現状である。

鉄製品は鉄斧・鉄鎌・鋤鍬・手斧・刀子・鉄鏃・紡錘車など多数出土した。この中で集落の生業を知りうるものとして鉄斧・鉄鎌・鋤鍬などの農耕具があり、第55号住居跡出土の炭化米と考え合わせると稲作農耕が盛んに行なわれていたことが想定される。

以上､若干の考察を交じえまとめてみたわけであるが､時間的余裕がなく簡単になってしまったことをお詫びするとともに、関係者各位に感謝の意を表します。後日資料の再検討をし、何らかの形で報告したいと思います。　（藤田亮一）

註1　青森県教育委員会「近野遺跡」発掘調査報告書（Ⅱ）・（Ⅲ）昭和49・51年

註2　青森県教育委員会「鳥海山遺跡」発掘調査報告書　昭和51年

註3　青森県教育委員会「黒石市浅瀬石遺跡」発掘調査報告書　昭和50年

註4　桜井清彦他「東北地方における集落址の研究」館址　昭和33年

註5　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」歴史14　昭和29年

桜井清彦・小岩末治「岩手県水沢市権現堂遺跡調査報告」考古学雑誌41-2　昭和31年

第11章　青森市蛍沢遺跡の炭化材調査報告

嶋　倉　巳三郎

青森市蛍沢遺跡から出土した炭化材12点の樹種をしらべた。各試料は保存状態良好で、これらから木口（横断面）、柾目（放射縦断面）、板目（切線縦断面）の3方向の切断面または自然破面をつくり、垂直落射照明による顕微鏡検査ならびに写真撮影を行った。

その結果は次の通りである。

22号　住居跡の炭化木

No. 1（22H－1）クリ

No. 2（22H－2）スギ（あるいはアスナロ）

No. 3（22H－3）トネリコの類（ヤチダモ？）

55号　住居跡の炭化木

No. 1（55H－1）スギ

No. 2（55H－2）スギ

No. 3（55H－3）スギ

No. 4（55H－4）スギ

No. 5（55H－5）サクラ属

No. 6（55H－6）サクラ属

No. 7（55H－7）キハダ？

No. 8（55H－8）サクラ属

No. 9（55H－9）スギ（あるいはアスナロ）

次にこれら炭化材の構造や同定についてのべる。

(1) スギ　Cryptomeria　japonica　D.DON

試料：22H－2、55H－1、55H－2、55H－3、55H－4、55H－9

針葉樹材で樹脂細胞を含み、その水平隔壁は多くは平滑に近い。放射組織が仮道管と交わるフィルドにはタキソデオイド状の、開口の大きい紋孔が、端部で4個、内部で2～3個くらいあり、ヒノキ属と区別できる。しかし紋孔はスギより少し小さいように見え、開口の方向も水平より斜のものが多く、アスナロに似たところもある。現生のスギ材を炭化して観察すると、これらの構造は縮小する傾向を示すのでスギに同定した。しかし一部はアスナロの疑いもあるが、炭化による変形や切片による微細構造の観察ができないので一応スギとしておく。

(2) クリ　Castanea　crenata　SIEB.　et　Lucc

試料：22H－1

環孔材、早材部の道管は甚だ大きく、1－3環、巣穿孔。晩材部の道管は急に小さくなり、

多数集合して斜線状または放射状に並ぶ。放射組織は同性で単列のものばかりで広巾のものはない。これらの特徴からクリに同定したが、晩材部には切線状に配列する柔細胞列が著しく、火焔状配列の小道管群がはっきりしないので、多少の不一致をみる。

(3) サクラ属　Prunus　sp.

試料：55H－5、55H－6、55H－8

散孔材、道管はやや大きく、単独または2～3個連結して平等に分布し、単穿孔で側壁には小有縁紋孔のほか、著しいラセン肥厚を有する。放射組職は1－4細胞巾、50－60細胞高に達するものもあり、同性のように見える。これらの特徴はサクラ属の材に類似する。しかし道管側壁のラセン肥厚は現生材より著しいが、これは炭化のためと思われる。

サクラ属は多くの種を含み、シウリザクラ、ウワミズザクラ、ミネザクラなど北方系のものが知られているが、その何れであるか決められない。この試料の道管の配列や放射組職にやや異る点がある。

(4) キハダ？　Phellodendron　amurense　RURR.

試料：55H－7

環孔材、早材部の道管は甚だ大きく、1－3環であるが晩材部に移行するにつれて次第に小さくなる。単穿孔らしい。晩材部では小道管が集合してやや斜線状に並ぶように見えることがある。放射組織は1－3細胞巾で同性らしい。これらの性質の大部分はキハダに類似する。小道管の配列などはニレ属に似た点もあるがその側壁にラセン肥厚を欠くので区別できる。

(5) トネリコ属　Fraxinus　sp

試料：22H－3

環孔材、早材部の道管は甚だ大きく、2－3環をなし、晩材部では小さく、単独または2個、稀に3個、放射方向に連結して散在する。これらの細胞壁は比較的厚いように見える。放射組織は1－2、稀に3細胞巾で同性。これらの特徴はトネリコ属の材に見られる。そのうちヤチダモやトネリコに近いように思われるが、炭化のため精しい比較ができない。

著　者　略　歴

1906 年（明治 39 年）5 月 5 日生

1932 年（昭和 7 年）東北帝国大学理学部（地質学・古生物学教室）卒業

大学副手、上海自然科学研究員等を経て 1954 年（昭和 29 年）奈良教育大学教授に任命

1972 年（昭和 47 年）停年退官

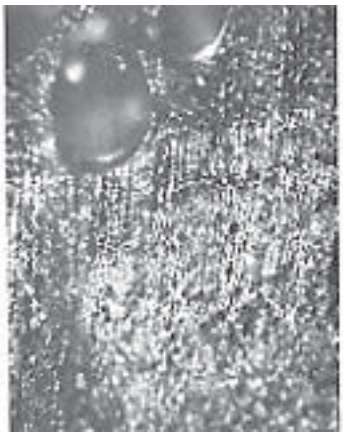
現在、私設研究室にて仕事の傍ら関西外国語大学教授（特任）、暁学園短期大学教授を兼務

奈良県文化保護委員

元興寺仏教民俗資料研究所評議員

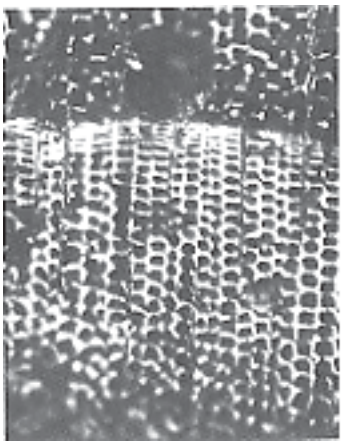
理学博士

22H－1　×25



クリ　同左　木口　×50

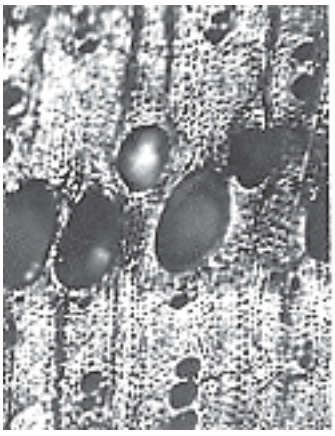
同左　柾目　×50



22H－2　スギ　×50

同左　×200

22H－3　トネリコ属　×25

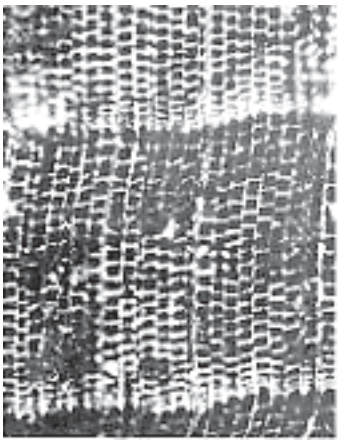


22H－3　トネリコ属　×50

同左　×50

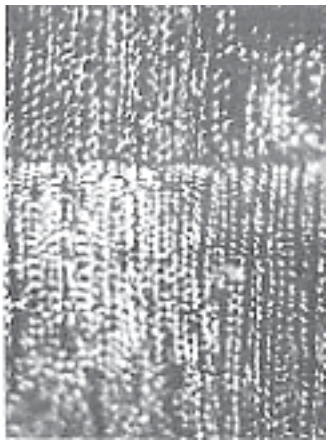
同左　×50

図版 94　出土炭化材



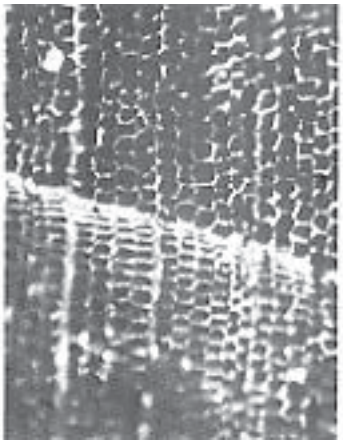
55H－1　スギ　×50

同左　×200



55H－2　スギ　×50

55H－2　スギ　×200

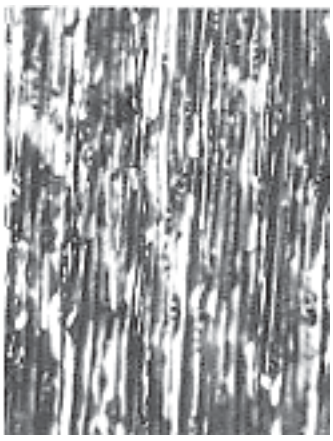


55H－4　スギ　×50

同左　×50

55H－3　スギ　×25

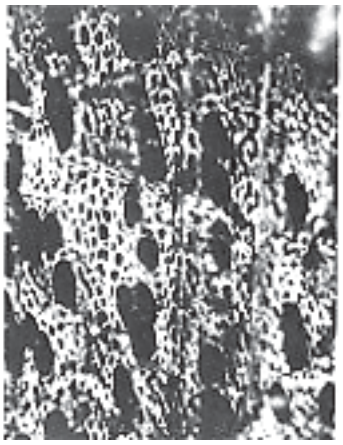
同左　×200



同左　×50

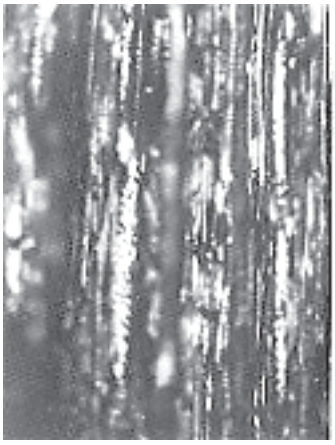
図版95　出土炭化材

55H－5　サクラ属　×25



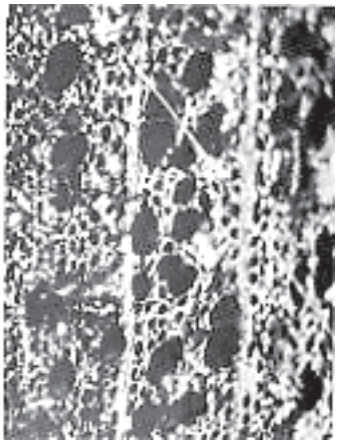
同左　×50

同左　×50



55H－5　サクラ属　×50

55H－6　サクラ属　×25



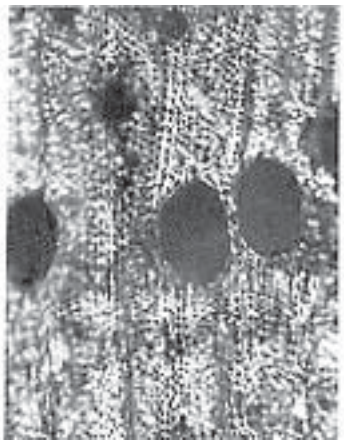
同左　×50

55H－6　サクラ属　×50

同左　×50

図版 96　出土炭化材

55H－7　キハダ？　×25

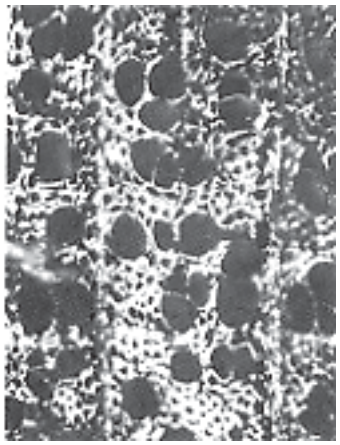


55H－7　キハダ？　×25

同左　×50

55H－7　キハダ？　×50

55H－8　サクラ属　木口　×25



同左　木口　×50

55H－8　板目　サクラ属　×50

55H－9　スギ　×50

同左　×200

図版97　出土炭化材

第12章　学習院大学放射性炭素年代測定の概要
（1973．4月）

^{14}C 年代測定の原理

^{14}C による年代測定は過法の生物遺体中 ^{14}C の濃度の測定から次の2つの仮定の下にその生物の生存していた年代を算出します。

1）大気中の炭酸ガス中 ^{14}C の濃度は、昔から一定の濃度であったこと。

2)試料とした生物が生きていたときその生物体炭素の ^{14}C 濃度はそのときの大気中の炭酸ガス中の濃度に等しかったこと。

現在生物遺体中に残されている ^{14}C 濃度は、生物の死後現在までに壊変で減少しているので、その減少量を測定して生物の死後の経過年数が算出されます。

測　定　方　法

本学で現在行っている ^{14}C 濃度測定は、試料をアセチレンガスとして気体比例計数管に封入し、約20時間のβ線計数で行っています。比例計数管はプロセスAでは1000mlプロセスBでは7600mlの容積のものを使用しています。試料を入れた計数管は鉄板と反同時計数管でシールドをしてバックダランド計数値を約5（A）および13（B）cpmに下げています。また計数値は1時間毎の積算値が統計的に正しい分散をしていることを確めています。

アセチレンの合成は試料についての前処理を行って後、炭素ガスとして捕集し、これを炭酸カルシウムあるいは炭酸ストロンチウムとし、前者の場合には過塩素酸で分解して放出される CO_2 と金属リチウムとを反応させリチウムカーバイトをつくり、後者の場合には金属マグネシウムと反応させてストロンチウムカーバイドとし、これらのカーバイドに水を作用させてアセチレンを発生させます。

測定の精度と限界

測　定　方　法	Modernの試料の ^{14}C 比放射能の測定誤差（標準偏差）	5000年B．P．程度の試料についての誤差	正確な年数の測定しうる年代の上限
プ　ロ　セ　ス　A	1.0%以下	約100年	約30，000年
プ　ロ　セ　ス　B	0.5%以下	約　50年	約40，000年

試　　料

測定に必要な炭素の量はプロセスAで2g、プロセスBで10gですが前処理などの化学操作で失われる量もあるので、なるべくこれらの約3倍以上があることが望ましい。

プロセスAの場合：　木炭、乾燥木片等　　約10g以上

貝殻、石灰岩等　　約40g以上

あれば通常は測定できます。泥炭等は炭素含有量で必要量が大きく変動します。木炭・木片等の試料は特に乾燥する必要はありませんが、ぬれた試料、特に腐食した木片は炭素含有量の低い場合が多く、また比重の大きい木炭も炭素含有量が低い場合があるので御注意下さい。

骨は通常400～600gあれば測定しうる場合が多いが場合によっては1kg以上あっても測定に充分な量の炭素が回収できないこともあります。

測定に要する日数：　試料受領後3～4ヶ月後に結果を御報告致します。

測定を依頼される場合には、試料の採取者名、採取地点の地名および緯度、経度および地学上あるいは考古学上の記載、年代測定の目的、依頼者名と請求書宛先をお知らせ下さい。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1977，2月4日

青森市教育委員会殿

1976年10月23日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ統計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差がσ以下のときには、Modernと表示し、$\delta^{14}C\%$を附記してあります。

記

Code No.	試料	B. P. 年代（1950年よりの年数）
GaK－6563.	Charcoal from Hotaruzawa Site. 55号住居、726A.	1060 ± 90 A. D. 890
GaK－6564.	Charcoal from Hotaruzawa Site. 22号住居、825B.	1340 ± 110 A. D. 610

以上

木越邦彦

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1977、5月4日

青森市教育委員会

社会教育課殿

1976年12月13日受領致しました試料についての^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ統計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B. P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2σ以下のときには、Modernと表示し、$\delta^{14}C$‰を附記してあります。

記

Code No.	試　料	B.P. 年代（1950年よりの年数）
GaK－6695.	Charred rice from Hotaruzawa.	1530 ±120
	55号住居跡出土炭化米	A. D. 420

以　上

木　越　邦　彦

第13章　青森市蛍沢第55号住居址出土の炭化米

佐　藤　敏　也

昭和51年、青森市教育委員会塩谷隆正氏等によって調査された土師住居跡群の中の一つの住居址床面中央部分に集中して発見された炭化米粒で、資料の量は約20グラム1,994粒あった。これを3分類し、658粒のなかから破損粒（310粒）を除去し、比較的正常の粒348粒について計測した。

外見は常の炭化米粒と異なり、黒色を呈し、灰に覆われていたような形跡かないから、籾殻をつけたままの状態で焼け埋没したものと解される。粒に未だ籾殻、穂先また着粒部分を残すもの若干認められたことは、そのことを示唆している。おそらく発掘し、とりあげる際、脱粒したことを示しているようである。

焼けぶくれの粒が目立って多いことは、おそらく遺跡において籾殻のまま貯蔵されていたものが火災に遭って炭化したものと考えられる。

Ⅰ．米粒の形態

青森市周辺出土米粒との対比をしながら記述する。

（1）粒　　長（第1表、第7表、第1図）

〈第1表〉出土米粒の粒長比較

単位ミリ、コンマ2位以下切捨

長 / 出土地	粒数	最大	最少	平均値±m	σ	備　　考
蛍　　沢	348	5.60	3.60	4.61±0.18	3.52	土師
細　　越	13	5.10	4.10	4.70±0.76	2.76	＊　土師
垂　　柳	20	5.30	4.30	4.61±0.39	1.75	＊＊　弥生

＊直良信夫、日本古代農業発達史　さ・え・ら書房　1956

＊＊伊東信雄、稲作の北進『古代の日本』8　角川書店　1970

第1図にみるように、蛍沢米粒の粒長の最大・最少のRは他の2遺跡出土粒のそれよりも甚しくひろい。

（2）粒　　幅（第2表、第7表、第1図）

〈第2表〉出土米粒の粒幅比較

単位ミリ、コンマ2位以下切捨

幅 / 出土地	粒数	最大	最少	平均値±m	σ	備　　考
蛍　　沢	348	3.50	1.90 (1.50)	2.88±0.15	2.82	1977　佐藤計測
細　　越	13	2.90	2.40	2.70±0.52	1.90	1954　直良計測
垂　　柳	20	3.40	2.70	3.10±0.35	1.58	1970　九大計測

蛍沢粒幅の最大は3.50㎜、未熟粒の粒幅1.50～1.90㎜を除外すると最小粒幅2.20㎜、Rは1.30㎜で細越の0.50㎜、垂柳の0.70㎜よりも大きい。

(3) 粒　　厚（第3表、第7表）

<第3表>出土米粒の粒厚比較

単位ミリ、コンマ2位以下切捨

出土地＼幅	粒数	最大	最少	平均値±m	σ	備　　考
蛍　　沢	348	2.40 (2.90)	1.60 (1.10)	1.99±0.12	2.36	
細　　越	13	2.30	1.80	2.00±0.52	1.88	
垂　　柳	—	—	—	—	—	

垂柳粒については拉厚の記載が略されている。おそらく2.00㎜内外のものと推察される。

一般栽培稲の米粒厚は2.00㎜以上が成熟拉である。古代炭化米粗は若干の変形が認められ、2.00㎜よりも短いものが多い。蛍沢粒においては、成熟粒は1.70㎜以上を示すようである。

Ⅱ形状と大きさ（第7表、第2図）

粒長を粒幅で除したものを粒形を表わす指数とし、粒長と粒幅との積で、粒の大きさを表わす指数とする。永松土巳博士（1942）＊表によって整理すると、

（第4表）蛍沢出土米粒の形状と大きさ

形状＼大きさ		極々小　8.00	極小　12.00	小　16.00	中	合計
長	2.60～	1（341）				（　）内第9表のNo.を示す
	2.30～2.60		8（19 220 124 221 130 261 138 262）	1（20）		
	2.00～2.30					10 (2.87%)
短形	1.80～2.00	1（348）	15	23	1	
	1.60～1.80		28	84	8	
	1.40～1.60		24	101	20	
円形	1.20～1.40		3	27	3	33 (9.48%)
合計		2 (0.57%)	78 (22.41%)	236 (67.82%)	32 (9.20%)	348 (100%)

＊　永松土巳・栽培稲の地理的分化に関する研究『日本作物学会紀事』V14、No. 2を若干変更している。

長粒小つぶ～極々小まで10粒（2.87%）あるが第7表を参照されれば解るように未熟粒であるから純粋の長粒稲ではなく未成熟の痩せている粒である。

短形粒305粒（87.65%）中、極々小の1粒も成熟粒とはいえない（第7表および図版参照）。

円形粒は33粒（9.48%）である。

大きさの点では極々小の2粒（0.57%）は未熟粒であり、極小の未熟粒8粒および小つぶの長粒1粒を除くと、極小粒70粒（20.11%）、小粒の粒235粒（67.53%）、中粒のもの32粒（9.20%）となり、蛍沢米粒は小つぶの短粒（日本型を示す）を主とし若干の円粒を含む粒群と認められる。

〈第５表〉 青森市周辺出土米粒の形状および大きさの比較

出土地	長				短					円				合計
	極々小	極小	小	小　計	極々小	極小	小	中	小　計	極小	小	中	小　計	
蛍　沢	1	8	1	10 (2.87%)	1	67	208	29	305 (87.65%)	3	27	3	33 (9.48%)	348
細　越	—	—	—	—	—	7	6	—	13 (100%)	—	—	—	—	13
垂　柳	—	—	—	—	—	—	15	2	17 (85.00%)	—	3	—	3 (15.00%)	20

細越粒はわずか13粒であるので比較するのに適当でないが、短粒日本型の小粒が大半であり、垂柳粒は、短粒日本型の小・中粒が85.00%それに円形日本型の小粒が15%含み、形状と大きさの点から見る限り、蛍沢粒に近縁であることを示している。いま、筆者が1966年以来、古代米について、板付的なるものと、それ以外とを弁別する検索表として使用してきた表中へ、この三群の粒を試に投入すると次表のようになる。

〈第６表〉古代稲パター検索表（第７表）

粒長＼粒幅	3.70 ～ 2.80 A	2.80 ～ 2.10 B	2.10 ～ C	合　計
～ 3.70　0	(2　346 347)	—	1　(348)	3（0.86%）
～ 5.30　I	232　垂18 細5	104　垂1 細8	1　(341)	垂19　細13 337（96.85%）
～　II	8　垂1			8（2.29%） 垂1
合　計	242（69.54%）	104（29.89%）	2（0.57%）	348 垂20

これで垂柳粒はIAlb、IIとなり板付粒のIBlaに対して対蹠的である。日本列島を北上し時の経つにつれてかく変化したものと思われる。蛍沢粒はIAlb、IIを主体とするが、（0－C、ICは未熟粒であるから除外するとしても）0－Aが2粒含まれている。これは正常粒の矮生のものである。栽培稲でいえば冷水の水口稲に類するものである。諸種の四囲の条件に幅広い適応を示す品種と解される。

ま　と　め

(1) 蛍沢粒群は日本型を示す小粒の短粒を主とし、若干の円粒を混えるものである。（第４表）

(2) 粒形は垂柳粒群に近縁の相を呈している。（第５表）

本資料の入手に格別の労をとられた青森県立郷土館の岩本義雄氏に対し心から感謝いたします。

（1978. 7. 10　佐藤敏也）

第７表　蛍沢第55号住居址出土炭化米粒計測表

○印　別掲写真　　単位ミリ　小数三桁以下切捨

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
1	5.60	3.10	2.00	1.80	17.36	〈焼けぶくれ部分は除き計測〉
2	5.40	3.40	1.90	1.58	18.36	
3	5.40	2.80	2.00	1.92	15.12	
4	5.30	3.00	2.00	1.76	15.90	
5	5.30	3.00	2.00	1.76	15.90	
6	5.30	3.05	2.00	1.73	16.16	
7	5.30	3.40	2.10	1.55	18.02	粒幅焼けぶくれ
8	5.30	3.10	2.40	1.70	16.43	厚さの方向へ焼けぶくれ
9	5.25	3.20	2.00	1.64	16.80	
10	5.25	3.00	2.20	1.75	15.75	
小　　計	53.40	31.05	20.60	—	—	
10粒平均	5.34	3.10	2.06	1.72	16.55	
11	5.25	3.35	1.80	1.56	17.58	
12	5.20	3.20	2.00	1.62	16.64	横へ焼けぶくれ
13	5.20	3.05	2.00	1.70	15.86	
14	5.20	3.15	2.00	1.65	16.38	
15	5.20	3.05	2.05	1.70	15.86	厚さの方向へ焼けぶくれ
16	5.20	3.15	1.80	1.65	16.38	
○17	5.20	2.80	2.00	1.85	14.56	
18	5.20	3.00	2.00	1.73	15.60	
19	5.20	2.30	2.00	2.26	11.96	胚部未発達
20	5.20	2.40	2.00	2.16	12.48	未熟粒
小　　計	52.05	29.45	19.65	17.88	153.30	
10粒平均	5.20	2.94	1.96	—	—	
21	5.10	3.45	2.20	1.47	17.59	粒頂に籾稲先を残す
22	5.10	3.30	2.20	1.54	16.83	
23	5.10	3.15	2.20	1.61	16.06	下端背部焼けぶくれ
24	5.10	3.05	2.20	1.67	15.55	
25	5.10	3.00	2.10	1.70	15.30	腹部下端焼けぶくれ
26	5.10	3.00	1.70	1.70	15.30	仝
27	5.10	3.05	2.00	1.67	15.55	
28	5.10	3.15	2.30	1.61	16.06	腹部下端焼けぶくれ
29	5.10	3.05	1.80	1.67	15.55	仝
30	5.10	3.30	2.20	1.54	16.83	
31	5.10	3.00	1.90	1.70	15.30	
32	5.10	3.00	2.00	1.70	15.30	稲先残存
33	5.10	2.80	2.00	1.82	14.28	
34	5.10	3.00	2.20	1.70	15.30	

番　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　考
35	5.10	2.80	2.20	1.82	14.28	
36	5.10	2.80	1.70	1.82	14.28	
37	5.10	2.80	2.05	1.82	14.28	背部下端焼けぶくれ
小　計	86.70	51.70	34.95	—	—	
17粒平均	5.10	3.04	2.05	1.67	15.50	
38	5.05	3.40	2.00	1.48	17.17	腹焼けぶくれ
39	5.05	3.01	2.10	1.67	15.20	仝
40	5.05	2.80	2.10	1.80	14.14	厚さの方向へ焼けぶくれ
41	5.05	3.10	2.10	1.62	15.65	
42	5.05	3.00	2.00	1.68	15.15	
43	5.05	3.00	1.90	1.68	15.15	
44	5.05	3.00	2.20	1.68	15.15	
45	5.05	3.00	2.00	1.68	15.15	
小　計	40.40	24.31	16.40	—	—	
8粒平均	5.05	3.03	2.05	1.66	15.30	
46	5.00	3.30	1.80	1.51	16.50	
47	5.00	3.40	2.10	1.47	17.00	粒頂焼けぶくれ
48	5.00	3.10	2.00	1.61	15.50	仝
49	5.00	3.20	2.30	1.56	16.00	
50	5.00	3.30	1.70	1.51	16.50	
51	5.00	3.25	2.20	1.53	16.25	
52	5.00	3.30	1.80	1.51	16.50	腹部焼けぶくれ
53	5.00	3.30	2.00	1.51	16.50	仝
54	5.00	3.25	2.10	1.53	16.25	
55	5.00	3.20	2.10	1.56	16.00	
小　計	50.00	32.60	20.10	—	—	
10粒平均	5.00	3.26	2.01	1.53	16.30	
56	5.00	3.20	2.00	1.56	16.00	
57	5.00	3.20	2.00	1.56	16.00	
58	5.00	3.20	2.00	1.56	16.00	
59	5.00	3.10	2.10	1.61	15.50	
60	5.00	3.10	2.00	1.61	15.50	
○61	5.00	3.00	2.00	1.66	15.00	
62	5.00	3.00	1.90	1.66	15.00	
63	5.00	3.00	2.10	1.66	15.00	
64	5.00	3.00	1.60	1.66	15.00	
65	5.00	3.00	1.60	1.66	15.00	
小　計	50.00	30.80	19.30	—	—	
10粒平均	5.00	3.08	1.93	1.62	15.40	

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
66	5.00	3.00	2.20	1.66	15.00	背部下端焼けぶくれ
67	5.00	3.45	1.90	1.44	17.25	
68	5.00	2.65	2.00	1.88	13.25	
69	5.00	3.00	2.05	1.66	15.00	
70	5.00	2.80	2.00	1.78	14.00	
71	5.00	2.85	1.80	1.75	14.25	
○72	5.00	2.60	1.90	1.92	13.00	
73	5.00	2.60	1.70	1.92		
74	5.00	2.70	1.80	1.85		
75	5.00	2.60	2.10	1.92		
76	5.00	2.70	1.70	1.85		
小　　計	50.00	30.95	21.15	—	—	
11粒平均	5.00	2.81	1.92	1.77	14.05	
77	4.90	2.80	2.00	1.75	13.72	
78	4.90	3.20	2.30	1.53	15.68	
79	4.90	3.20	2.10	1.53	15.68	厚さの方向へ焼けぶくれ
80	4.90	3.10	2.10	1.58	15.19	
○81	4.90	3.20	2.40	1.53	15.68	腹部焼けぶくれ
82	4.90	3.10	2.40	1.58	15.19	
83	4.90	3.20	2.00	1.53	15.68	
84	4.90	3.20	2.00	1.53	15.68	
85	4.90	3.15	2.30	1.55	15.43	厚さの方向へ焼けぶくれ
86	4.90	3.10	2.10	1.58	15.19	
小　　計	49.00	31.25	21.70	—	—	
10粒平均	4.90	3.12	2.17	1.57	15.28	
87	4.90	2.80	1.80	1.75	13.72	
88	4.90	2.80	2.05	1.75	13.72	短芒附着
89	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	
90	4.90	3.00	1.90	1.63	14.70	
91	4.90	3.00	2.60	1.63	14.70	厚さの方向へ焼けぶくれ
○92	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	
93	4.90	3.00	1.70	1.63	14.70	
94	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	
95	4.90	3.05	2.10	1.60	14.94	
96	4.90	3.10	2.20	1.58	15.19	
小　　計	49.00	29.75	20.35	—	—	
10粒平均	4.90	2.97	2.03	1.64	14.55	
97	4.90	3.00	1.70	1.63	14.70	
98	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	
99	4.90	3.00	2.00	1.63	14.70	

番　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　考
100	4.90	2.90	2.00	1.68	14.21	
101	4.90	2.60	1.70	1.88	12.74	
102	4.90	2.50	2.00	1.96	12.25	
小　計	29.40	17.00	11.40	—	—	
6粒平均	4.90	2.83	1.90	1.73	13.86	
103	4.80	3.10	2.10	1.54	14.88	
○104	4.80	3.50	2.20	1.37	16.80	
105	4.80	3.20	2.10	1.50	15.36	
106	4.80	3.20	2.20	1.50	15.36	
107	4.80	3.20	2.10	1.50	15.36	
108	4.80	3.20	2.00	1.50	15.36	
109	4.80	3.20	2.30	1.50	15.36	
110	4.80	3.00	1.90	1.60	14.40	
111	4.80	3.10	2.20	1.54	14.88	
112	4.80	2.90	1.80	1.65	13.92	
小　計	48.00	31.60	20.90	—	—	
10粒平均	4.80	3.16	2.09	1.51	15.16	
113	4.80	3.10	2.10	1.54	14.88	
114	4.80	3.00	1.70	1.60	14.40	
115	4.80	2.80	2.20	1.71	13.44	
116	4.80	3.00	1.70	1.60	14.40	
117	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44	幅焼けぶくれ
118	4.80	2.80	1.90	1.71	13.44	
119	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44	
120	4.80	2.80	2.00	1.71	13.44	
121	4.80	2.80	2.10	1.71	13.44	
○122	4.80	2.70	1.90	1.77	12.96	
小　計	48.00	28.60	19.60	—	—	
10粒平均	4.80	2.86	1.96	1.67	13.72	
123	4.80	2.70	1.70	1.77	12.96	未熟粒
124	4.80	2.40	1.70	2.00	11.52	仝
125	4.80	2.70	2.00	1.77	12.96	
126	4.80	2.50	2.00	1.92	12.00	
127	4.80	2.50	1.60	1.92	12.00	未熟粒
128	4.80	2.50	1.60	1.92	12.00	仝　中空
129	4.80	2.50	1.70	1.92	12.00	仝
130	4.80	2.40	2.00	2.00	11.52	仝　中空
小　計	38.40	20.20	14.30	—	—	
8粒平均	4.80	2.52	1.78	1.90	12.09	
131	4.75	3.50	2.00	1.35	16.62	

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
132	4.75	3.40	2.10	1.39	16.15	横幅へ焼けぶくれ
133	4.75	3.00	2.00	1.58	14.25	
134	4.75	3.20	2.10	1.48	15.20	
135	4.75	3.30	2.00	1.43	15.67	
136	4.75	3.05	2.10	1.55	14.48	
137	4.75	2.40	1.20	1.97	11.40	未熟粒
138	4.75	2.30	2.00	2.06	10.92	仝
139	4.75	3.00	2.00	1.58	14.25	
小　　計	42.75	27.15	17.50	—	—	
9粒平均	4.75	3.01	1.94	1.57	14.29	
140	4.70	3.20	2.15	1.46	15.04	腹部焼けぶくれ
141	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	仝
142	4.70	3.10	1.70	1.51	14.57	仝
143	4.70	3.20	1.90	1.46	15.04	仝
144	4.70	3.20	2.10	1.46	15.04	仝
145	4.70	3.40	2.20	1.38	15.98	仝
146	4.70	3.05	1.90	1.54	14.33	
147	4.70	3.00	2.10	1.56	14.10	
148	4.70	3.10	2.00	1.51	14.57	
149	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
小　　計	47.00	31.25	20.05	—	—	
10粒平均	4.70	3.12	2.00	1.50	14.66	
○150	4.70	2.80	2.30	1.67	13.16	
151	4.70	2.80	2.80	1.67	13.16	厚さの方向へ焼けぶくれ、中空
152	4.70	3.00	2.20	1.56	14.10	
153	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
154	4.70	3.10	2.00	1.51	14.57	
155	4.70	3.10	2.10	1.51	14.57	厚さの方向へ焼けぶくれ
156	4.70	3.00	2.20	1.56	14.10	
157	4.70	3.00	2.00	1.56	14.10	
158	4.70	2.90	1.70	1.62	13.63	
159	4.70	2.90	1.70	1.62	13.63	
小　　計	47.00	29.60	21.00	—	—	
10粒平均	4.70	2.96	2.10	1.58	13.91	
160	4.70	2.60	2.00	1.80	12.22	
161	4.70	2.60	1.90	1.80	12.22	
162	4.70	3.00	2.90	1.56	14.10	厚さの方向へ焼けぶくれ
163	4.70	2.60	2.20	1.80	12.22	
164	4.70	2.50	2.10	1.88	11.75	
165	4.70	2.70	1.50	1.74	12.69	未熟粒

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
166	4.70	2.80	2.00	1.67	13.16	
167	4.70	2.70	2.00	1.74	12.69	
168	4.70	2.40	2.00	1.95	11.28	中空
169	4.70	2.70	2.20	1.74	12.69	
小　　計	47.00	26.60	20.80	—	—	
10粒平均	4.70	2.66	2.08	1.76	12.50	
170	4.70	2.70	1.70	1.74	12.69	未熟粒
171	4.70	2.70	1.80	1.74	12.69	
172	4.70	2.50	2.00	1.88	11.75	中空
173	4.70	2.70	2.00	1.74	12.69	未熟粒
174	4.70	2.60	1.70	1.80	12.22	仝
小　　計	23.50	13.20	9.20	—	—	
5粒平均	4.70	2.64	1.84	1.78	12.40	
175	4.60	2.80	2.20	1.64	12.88	焼けぶくれ
176	4.60	3.20	2.00	1.43	14.72	
177	4.60	3.40	2.00	1.35	15.64	焼けぶくれ
178	4.60	3.00	2.00	1.53	13.80	仝
179	4.60	3.00	2.15	1.53	13.80	
○180	4.60	3.05	2.00	1.50	14.03	腹部焼けぶくれ
181	4.60	2.80	2.00	1.64	12.88	焼けぶくれ
182	4.60	3.20	2.10	1.43	14.72	
183	4.60	3.10	2.00	1.48	14.26	
184	4.60	3.10	2.20	1.48	14.26	
小　　計	46.00	30.65	20.65	—	—	
10粒平均	4.60	3.06	2.06	1.50	14.07	
185	4.60	2.90	2.20	1.58	13.34	
186	4.60	3.00	1.90	1.53	13.80	
187	4.60	2.80	1.90	1.64	12.88	
188	4.60	3.10	1.70	1.48	14.26	
189	4.60	3.20	2.20	1.43	14.72	
190	4.60	2.90	1.40	1.58	13.34	
191	4.60	2.50	2.00	1.84	11.50	
192	4.60	3.00	2.20	1.53	13.80	
193	4.60	2.70	1.80	1.70	12.42	
194	4.60	2.70	2.40	1.70	12.42	厚さの方向へ焼けぶくれ
小　　計	46.00	28.80	19.70	—	—	
10粒平均	4.60	2.88	1.97	1.59	13.24	
195	4.60	2.75	1.60	1.67	12.65	
196	4.60	2.70	2.20	1.70	12.42	
197	4.60	2.90	2.00	1.58	13.34	

番　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　考
198	4.60	2.70	2.20	1.70	12.42	
199	4.60	2.60	1.70	1.76	11.96	
200	4.60	2.50	2.05	1.84	11.50	
201	4.60	2.40	2.00	1.91	11.04	
202	4.60	2.40	1.60	1.91	11.04	
小　計	36.80	20.95	15.35	—	—	
8粒平均	4.60	2.61	1.91	1.76	12.04	
203	4.55	3.00	2.00	1.51	13.65	
204	4.50	3.30	2.40	1.36	14.85	
205	4.50	3.00	2.30	1.50	13.50	
206	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
207	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
208	4.50	3.00	1.80	1.50	13.50	
209	4.50	3.20	2.20	1.40	14.40	
210	4.50	3.00	2.20	1.50	13.50	厚さの方向へ焼けぶくれ
211	4.50	2.80	1.70	1.60	12.60	
212	4.50	3.00	2.10	1.50	13.50	
213	4.50	3.00	2.00	1.50	13.50	
214	4.50	2.75	2.00	1.63	12.37	
215	4.50	2.80	2.40	1.60	12.60	
216	4.50	2.70	1.70	1.66	12.15	
217	4.50	2.70	1.90	1.66	12.15	
218	4.50	2.90	1.90	1.55	13.05	
219	4.50	2.60	1.40	1.73	11.70	未熟粒
220	4.50	2.20	1.90	2.04	9.90	仝
221	4.50	2.20	1.90	2.04	9.90	仝　　中空
小　計	81.00	51.15	35.80	—	—	
18粒平均	4.50	2.84	1.98	1.58	12.78	
222	4.45	3.10	2.20	1.43	13.79	
223	4.45	3.00	2.10	1.48	13.35	
224	4.45	2.70	1.40	1.64	12.01	
225	4.45	2.60	2.00	1.71	11.57	
226	4.45	2.30	1.70	1.93	10.23	
小　計	22.25	13.70	9.40	—	—	
5粒平均	4.45	2.74	1.88			
227	4.40	3.00	2.00	1.46	13.20	腹部焼けぶくれ
228	4.40	3.20	2.20	1.37	14.08	仝
229	4.40	3.30	2.10	1.33	14.52	仝
230	4.40	3.10	2.10	1.41	13.64	仝
231	4.40	3.00	2.10	1.46	13.20	仝

番　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒厚	粒長×粒幅	備　考
○232	4.40	3.30	2.40	1.33	14.52	厚さの方向へ焼けぶくれ
233	4.40	3.10	2.00	1.41	13.64	
234	4.40	3.30	2.20	1.33	14.52	
235	4.40	3.10	1.90	1.41	13.64	
236	4.40	3.20	2.40	1.37	14.08	
小　計	44.00	31.60	21.40	—	—	
10粒平均	4.40	3.16	2.14	1.39	13.90	
237	4.40	2.80	2.10	1.57	12.32	
238	4.40	3.00	2.40	1.46	13.00	厚さの方向へ焼けぶくれ
239	4.40	3.00	2.40	1.46	13.20	仝
240	4.40	3.00	2.30	1.46	13.20	仝
241	4.40	3.00	2.20	1.46	13.20	
242	4.40	2.90	2.00	1.51	12.76	
243	4.40	3.10	2.00	1.41	13.64	
244	4.40	3.10	1.70	1.41	13.64	
245	4.40	2.80	1.50	1.57	12.32	
246	4.40	2.90	2.10	1.51	12.76	
小　計	44.00	29.60	20.70	—	—	
10粒平均	4.40	2.96	2.07	1.48	13.02	
248	4.40	2.90	1.50	1.51	12.76	中空
249	4.40	2.80	1.80	1.57	12.32	
250	4.40	2.80	1.80	1.57	12.32	
251	4.40	2.80	2.00	1.57	12.32	
252	4.40	2.70	2.00	1.62	11.88	
253	4.40	2.70	1.60	1.62	11.88	
254	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	
255	4.40	2.60	2.00	1.69	11.44	
256	4.40	2.50	1.70	1.76	11.00	
257	4.40	2.90	2.00	1.51	12.76	
小　計	44.00	27.30	18.40	—	—	
10粒平均	4.40	2.73	1.84	1.61	12.01	
258	4.40	2.40	1.70	1.83	10.56	中空
259	4.40	2.40	2.00	1.83	10.56	
260	4.40	2.60	1.70	1.69	11.44	
261	4.40	2.20	1.60	2.00	9.68	未熟粒
262	4.40	2.10	1.70	2.09	9.24	仝
247	4.40	3.00	2.40	1.46	13.20	
小　計	26.40	14.70	11.10	—	—	
6粒平均	4.40	2.45	1.85	1.79	10.78	
263	4.35	2.80	1.70	1.55	12.18	腹部焼けぶくれ

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
264	4.35	2.90	2.00	1.50	12.61	
265	4.35	2.70	2.30	1.61	11.74	
小　　計	13.05	8.40	6.00	—	—	
3粒平均	4.35	2.80	2.00	1.55	12.18	
266	4.30	3.20	2.20	1.34	13.76	
267	4.30	3.00	2.10	1.43	12.90	
268	4.30	3.20	2.20	1.34	13.76	
269	4.30	3.10	2.00	1.38	13.33	
270	4.30	3.00	2.00	1.43	12.90	
271	4.30	2.90	2.10	1.48	12.47	
272	4.30	3.00	1.70	1.43	12.90	
273	4.30	3.10	2.20	1.38	13.33	
274	4.30	3.10	2.10	1.38	13.33	
○275	4.30	3.00	1.70	1.43	12.90	
小　　計	43.00	30.60	20.30	—	—	
10粒平均	4.30	3.06	2.03			
276	4.30	2.75	2.00	1.56	11.82	
277	4.30	2.75	2.00	1.56	11.82	
278	4.30	2.65	2.00	1.62	11.39	
279	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61	
○280	4.30	2.80 (4.00)	1.90	1.53	12.04	腹部焼けぶくれ
281	4.30	2.70	2.10	1.59	11.61	
282	4.30	2.50	1.40	1.72	10.75	未熟粒
283	4.30	2.60	1.80	1.65	11.18	
284	4.30	2.60	2.20	1.65	11.18	
285	4.30	2.70	2.00	1.59	11.61	
286	4.30	2.50	1.50	1.72	10.75	
小　　計	47.30	29.25	20.90	—	—	
11粒平均	4.30	2.65	1.90	1.62	11.39	
○287	4.25	3.20	2.40	1.32	13.60	厚さの方向へ焼けぶくれ
288	4.25	3.00	2.20	1.41	12.75	
289	4.25	3.00	2.10	1.41	12.75	
290	4.25	2.25	1.50	1.88	9.56	未熟粒
291	4.25	2.20	1.30	1.93	9.35	仝
小　　計	21.25	13.65	9.50	—	—	
5粒平均	4.25	2.73	1.90	1.55	11.60	
292	4.20	3.00	2.30	1.40	12.60	
293	4.20	3.10	2.30	1.35	13.02	
294	4.20	3.05	2.20	1.37	12.81	
295	4.20	3.00	2.20	1.40	12.60	

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
296	4.20	2.70	2.20	1.55	11.34	
297	4.20	3.00	2.20	1.40	12.60	
298	4.20	2.70	2.40	1.55	11.34	
299	4.20	2.70	1.80	1.55	11.34	
300	4.20	2.80	1.80	1.50	11.76	
301	4.20	2.70	2.10	1.55	11.34	
小　　計	42.00	28.75	21.50	—	—	
10粒平均	4.20	2.87	2.15	1.46	12.05	
302	4.20	2.60	2.00	1.61	10.92	
303	4.20	3.00	2.20	1.40	12.60	
304	4.20	2.50	1.60	1.68	10.50	
305	4.20	2.50	2.40	1.68	10.50	
306	4.20	3.00	2.00	1.40	12.60	
307	4.20	2.60	2.00	1.61	10.92	
小　　計	25.20	16.20	12.20	—	—	
6粒平均	4.20	2.70	2.03	1.55	11.34	
308	4.10	3.00	2.20	1.36	12.30	腹部焼けぶくれ
309	4.10	2.70	2.20	1.51	11.07	仝
310	4.10	3.00	2.20	1.36	12.30	仝
311	4.10	3.10	2.20	1.32	12.71	厚さの方向へ焼けぶくれ
312	4.10	3.00	2.20	1.36	12.30	
313	4.10	3.05	2.10	1.34	12.50	
314	4.10	2.80	2.00	1.46	11.48	
315	4.10	3.20	1.60	1.28	13.12	
316	4.10	2.80	2.00	1.46	11.48	
317	4.10	2.90	2.50	1.41	11.89	
小　　計	41.00	29.55	21.20	—	—	
10粒平均	4.10	2.95	2.12	1.38	12.09	
318	4.10	2.80	2.00	1.46	11.48	
319	4.10	2.20	2.10	1.86	9.02	中空
320	4.10	2.60	2.00	1.57	10.66	
321	4.10	2.50	2.20	1.64	10.25	
322	4.10	2.60	2.00	1.57	10.66	
323	4.10	2.20	1.90	1.86	9.02	
324	4.10	2.40	1.60	1.70	9.84	
325	4.10	2.60	2.00	1.57	10.66	
326	4.10	2.50	1.60	1.64	10.25	
327	4.10	2.60	1.70	1.57	10.66	
○328	4.10	3.00	2.00	1.36	12.30	
329	4.10	2.40	1.60	1.70	9.84	

番　　号	粒　長	粒　幅	粒　厚	粒長／粒幅	粒長×粒幅	備　　考
小　　計	49.20	30.40	22.70	—	—	
12粒平均	4.10	2.53	1.89	1.62	10.37	
330	4.05	2.80	2.10	1.44	11.34	
331	4.05	2.70	1.70	1.50	10.93	
小　　計	8.10	5.50	3.80	—	—	
2粒平均	4.05	2.75	1.90	1.47	11.13	
○332	4.00	3.00	2.20	1.33	12.00	腹部焼けぶくれ
333	4.00	3.00	2.20	1.33	12.00	
334	4.00	3.05	2.40	1.31	12.20	厚さの方向へ焼けぶくれ
335	4.00	3.10	2.30	1.29	12.40	
336	4.00	2.50	2.00	1.60	10.00	
337	4.00	2.30	1.50	1.73	9.20	未熟粒
338	4.00	2.70	1.70	1.48	10.80	仝
339	4.00	2.70	1.30	1.48	10.80	仝
340	4.00	2.40	1.30	1.66	9.60	仝
341	4.00	1.50	1.10	2.66	6.00	えいな
小　　計	40.00	26.25	18.00	—	—	
10粒平均	4.00	2.62	1.80	1.52	10.48	
342	3.90	2.70	2.10	1.44	10.53	腹部焼けぶくれ
343	3.90	2.80	2.20	1.39	10.92	
344	3.90	2.20	1.60	1.77	8.58	未熟粒
345	3.90	2.20	1.40	1.77	8.58	仝
小　　計	15.60	9.90	7.30	—	—	
4粒平均	3.90	2.47	1.82	1.57	9.36	
346	3.60	2.90	2.00	1.24	10.44	腹部焼けぶくれ
347	3.60	3.00	2.30	1.20	10.80	仝
○348	3.60	1.90	1.40	1.89	6.84	未熟粒
小　　計	10.80	7.80	5.70	—	—	
3粒平均	3.60	2.60	1.90	1.38	9.36	
総合計	1,606.30	1,004.76	693.20	—	—	
348粒平均	4.61	2.88	1.99	1.60	13.27	

著者略歴

佐藤敏也（さとうとしや）

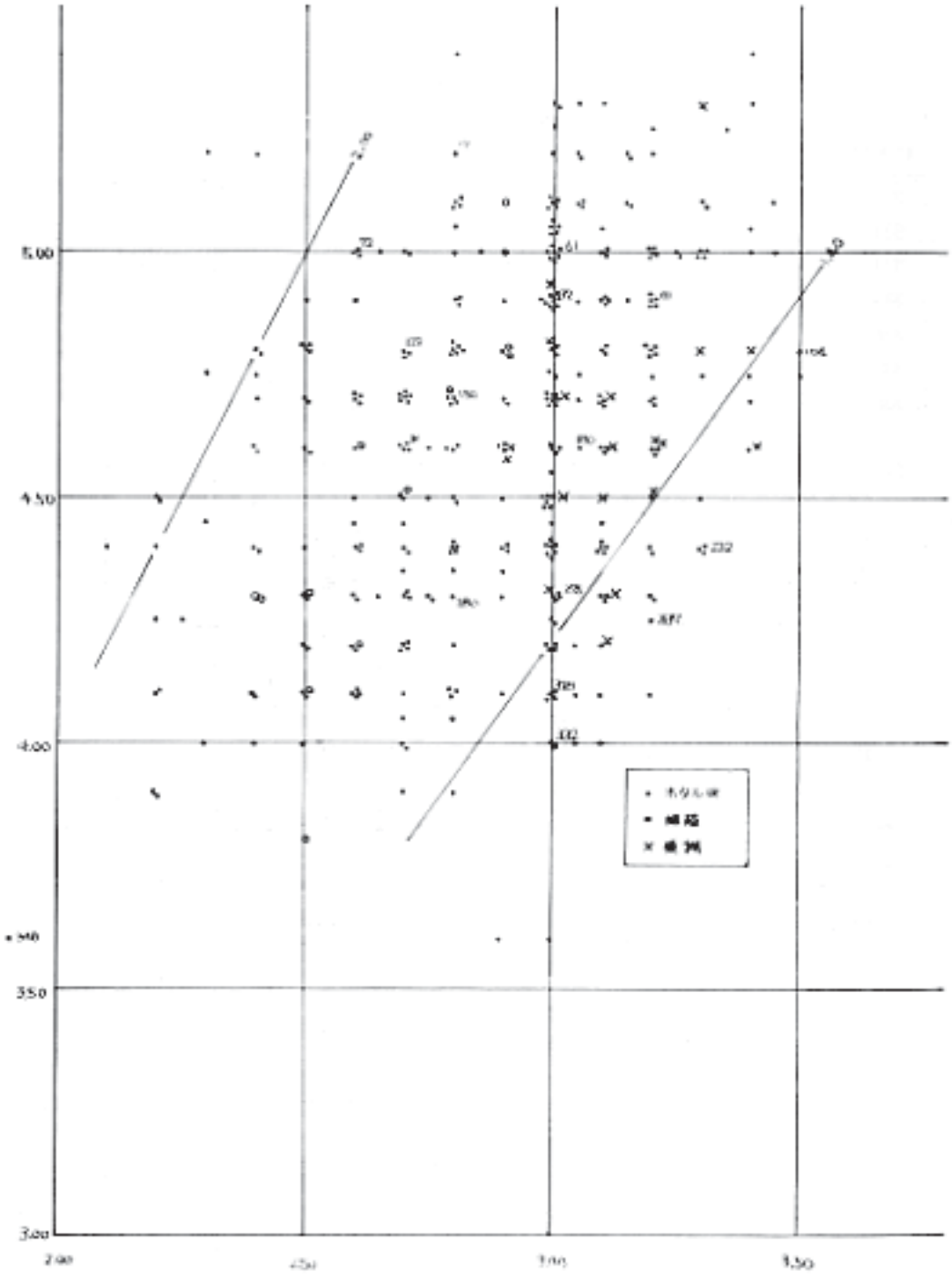
生年月日　明治38年4月2日生まれ　　最終学歴　東北学院高等学部文化卒業

職　歴　　元農林省家畜衛生場総務部長　　著者論文　「古代の米」（「稲の日本史」昭和28）

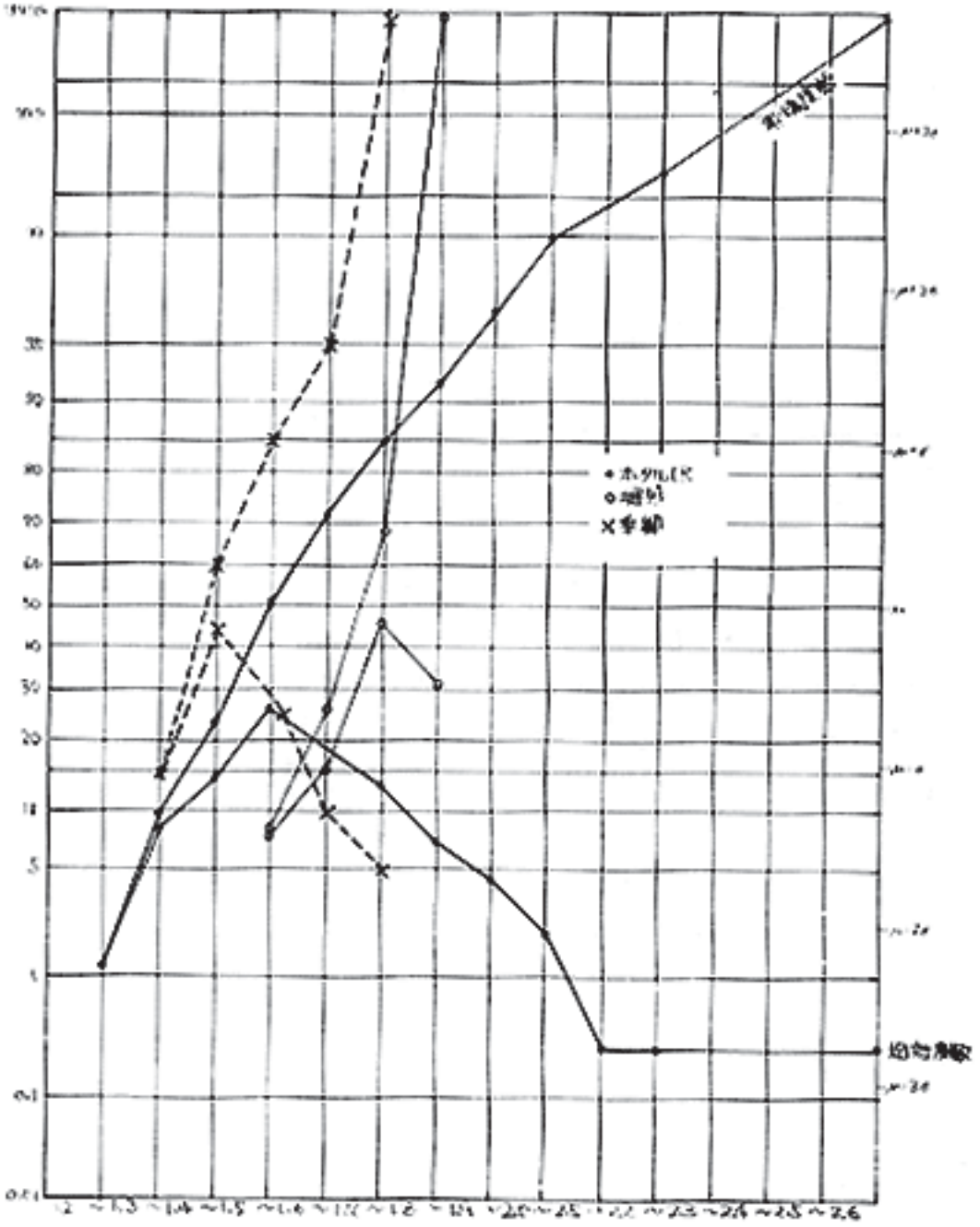
「出土古代米」（共箸「古代稲作の系譜」）

「日本の古代米」（雄山閣）

現住所　東京都国分寺市南町3－8－4



第１図　蛍沢米粒の粒長粒幅の相関



第２図　青森市周辺出土米粒の長幅比・比較（相対度数と累積度数）

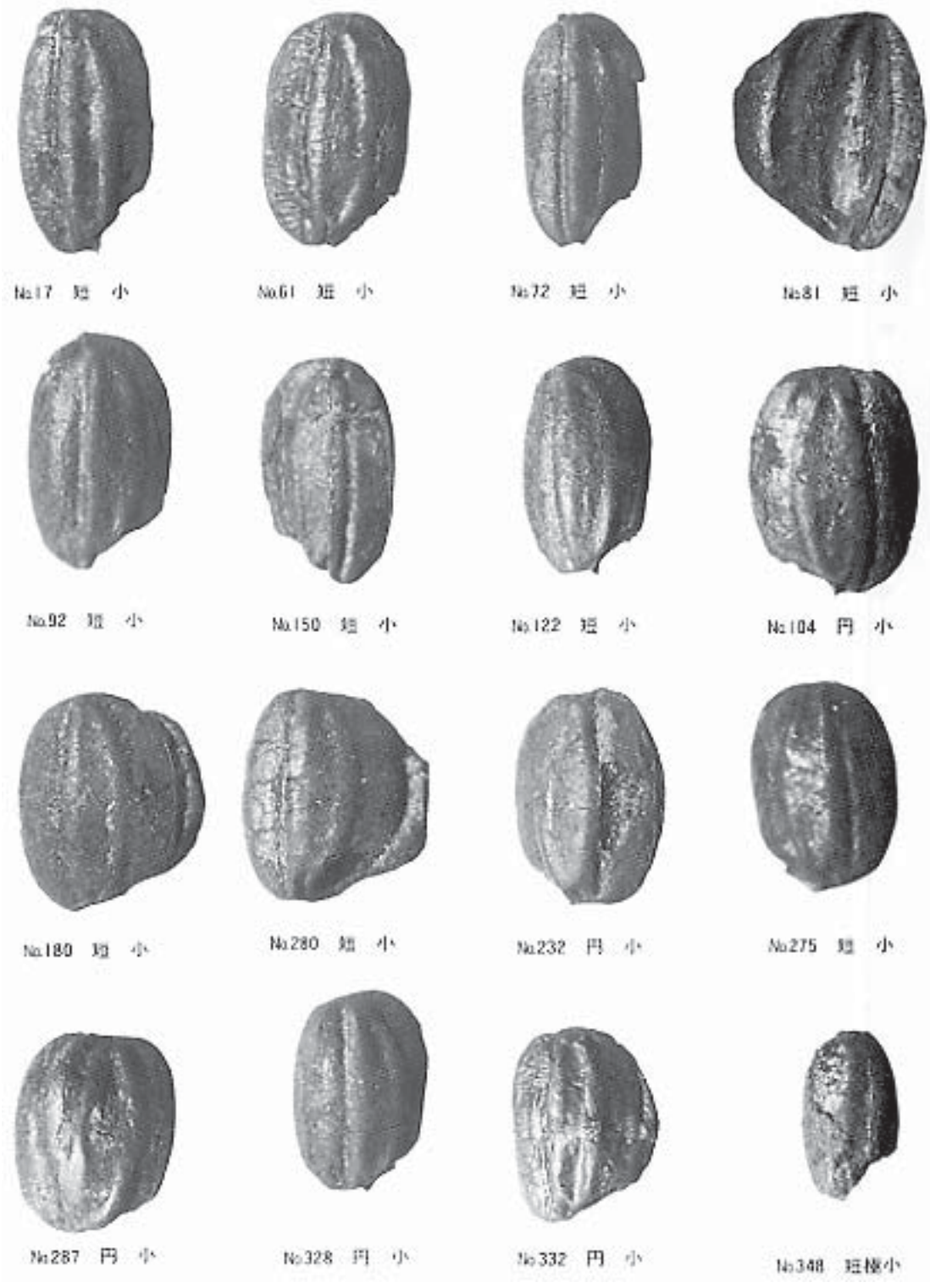


写真 1　青森市ホタル沢第 55 号住居址出土炭化米粒

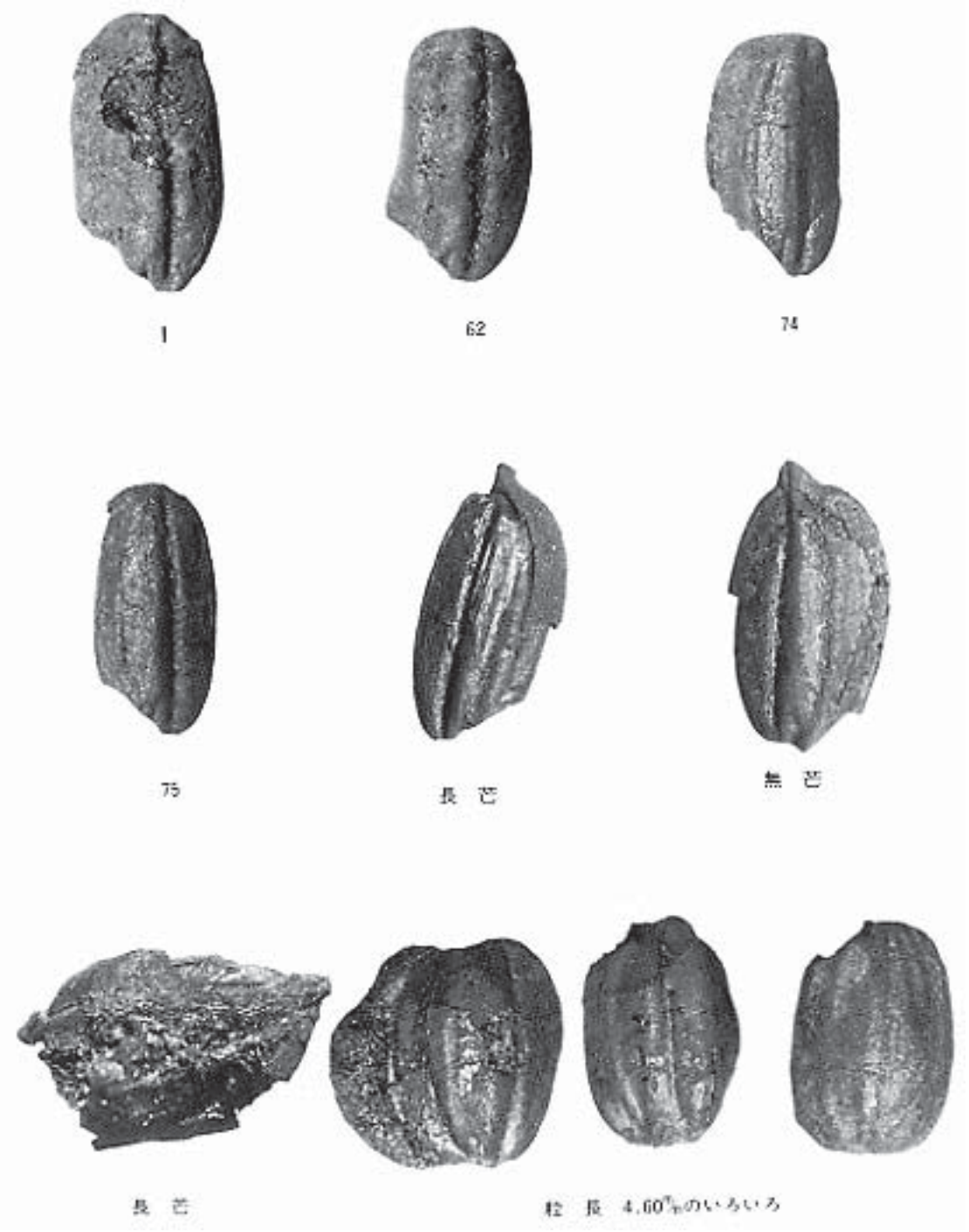


写真 2　青森市ホタル沢第 55 号住居址出土炭化米粒

青森市蛍沢遺跡発掘調査報告書

昭和54年7月
発　行　青森市蛍沢遺跡発掘調査団
編　集　青森市教育委員会　塩　谷　隆　正
印　刷　第　一　印　刷　株　式　会　社
青森市古川二丁目1-9
TEL0177－76－1551(代)